PL
776
R3

Rakugo kokkeibon shu zen

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

落語滑稽本集

全

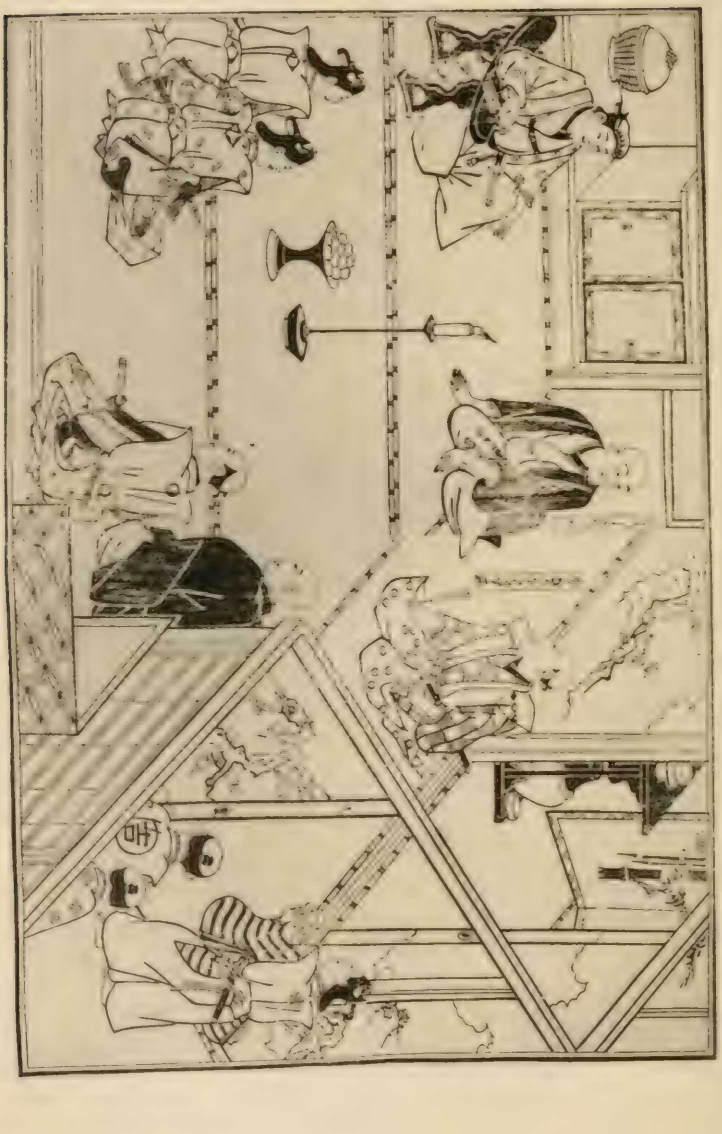
落語滑稽本集

全

PL
776
R3

LIBRARY
MAY 5 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

牢屋に引かれた鹿野武左衛門（鹿の子餅に所載　武左衛門口伝噺より）



近代日本文學大系 第二十二卷 目次

花暦八笑人 …… 瀧亭鯉丈 …… 一—二三七
妙竹林話七偏人 …… 梅亭金鵞 …… 二三九—四一六
醒睡笑 …… 安樂庵策傳 …… 四一七—七七五

序 …… [illegible]
卷之一
謂被謂物之由來 …… [illegible]
落書 …… [illegible]
ふはとのる …… [illegible]
鈍副子 …… [illegible]
無心所望 …… [illegible]
卷之二
名津け親方 …… [illegible]
貴人の行跡 …… [illegible]
吝太郎 …… [illegible]
賢だて …… [illegible]
卷之三
文字知顏 …… [illegible]
不文字 …… [illegible]
自墮落 …… [illegible]

清信……五五一

卷之四

聞多批判……五五五
いやな批判……五七〇
會而別以合黙……五七五
唯有……五八七

卷之五

妬心……五九六
上戸……六一一
人はそだち……六三一

卷之六

兒の噂……六四六
若道不知……六六一
戀のみち……六六四
悋氣……六六七
詮ない祕密……六七一
推はおぼうた……六七七
うそつき……六八五

卷之七

思ひの色を外にいふ……六九一
廃忘……七〇七
譃……七一一
揮……七二一

卷之八

頓作……七三八
かすり……七五一
秀句……七五七
茶の湯……七六一
祝濟多……七六八
跋……七七四

昨日は今日の物語……作者未詳……七七七―八二六

輕口露がはなし

輕口露がはなし……露五郎兵衞……八三七—八九三

目録

目録……八三九

卷之一

第一 文盲なる人物の書付を批判する事
第二 京の何[illegible]時[illegible]する事
第三 筆をあたなる書付の事
第四 本國寺大門にて[illegible]の事
第五 [illegible]い[illegible]を[illegible]事
第六 [illegible]といふ事
第七 大藏と大[illegible]のいはれの事
第八 目は慾のもとでといふ事……八五〇
第九 [illegible]は人も[illegible]
第十 六[illegible]の[illegible]事
第十一 老いてもわかきにまけぬ事……八五一
第十二 [illegible]事
第十三 人をけしてはまりのはやき事……八五二
第十四 人はそだちの事
第十五 [illegible]なはす事
第十六 小[illegible]
第十七 [illegible]の名付[illegible]
第十八 [illegible]
第十九 [illegible]
第二十 [illegible]事

卷之二

第一 伊勢講の當番……八五七
第二 [illegible]の式[illegible]
第三 [illegible]
第四 はなし鳥のさた……八五八
第五 [illegible]の日[illegible]

第六　硯も閉口……八五九
第七　佛前三具足……八六〇
第八　一家の内の物語……八六〇
第九　疱瘡の養生……八六一
第十　道化者のあいさつ……八六一
第十一　文盲の風呂入り……八六二
第十二　慾ふかき姥……八六二
第十三　舞まひと百姓と口論……八六三
第十四　坊主魚のねがひ……八六三
第十五　きれいずき……八六三
第十六　ひけふ者の喧嘩……八六四
卷之三
第一　御靈大明神へ福を祈る事……八六五
第二　鹽打豆……八六六
第三　目くらの頓作……八六六
第四　賀茂川の大水……八六七
第五　おどけ言もときによる……八六七
第六　人より鳥がこはい……八六八
第七　百萬遍の萬日參り……八六八
第八　しはき坊主の若衆ぐるひ……八六八
第九　わやまし祝儀の使者……八六九
第十　とがのない盗人……八六九
第十一　魚かしすみかへ引く事……八六九
第十二　せいじんの娘に意見する事……八七〇
第十三　東寺の塔にてばくちうち……八七一
第十四　淨土宗と法華宗との相住居の事……八七一
第十五　兒のつきみぐひ……八七二
第十六　慮外ちがひ……八七二
卷之四
第一　始めてよばれし祇園會の客……八七三
第二　野郎の金剛念佛講……八七四
第三　人のうはさ……八七四

第四　[illegible]物の取りちがひ……八七五
第五　[illegible]……[illegible]
第六　物のあけ[illegible]人の行末……[illegible]
第七　印判屋のむすこ……[illegible]
第八　[illegible]ふた……[illegible]
第九　文盲なる者の[illegible]を習ふ……[illegible]
第十　[illegible]……[illegible]
第十一　新佛一體の望み……八七八
第十二　同じく不審……[illegible]
第十三　[illegible]……[illegible]
第十四　りんきばなし……[illegible]
第十五　同講のくはだて……[illegible]
第十六　[illegible]……[illegible]
第十七　[illegible]……[illegible]
第十八　水瓜のせんさく……[illegible]

卷之五

第一　[illegible]にも[illegible]い事……[illegible]
第二　[illegible]……[illegible]
第三　小法眼の二幅一對……八八四
第四　道頓堀にて巾着切とらへし事……八八五
第五　[illegible]……[illegible]
第六　[illegible]……[illegible]
第七　[illegible]……[illegible]
第八　[illegible]……[illegible]
第九　[illegible]……[illegible]
第十　えびす講の書狀……八八九
第十一　[illegible]……[illegible]
第十二　[illegible]……[illegible]
第十三　[illegible]……[illegible]
第十四　[illegible]……[illegible]
第十五　[illegible]……[illegible]
第十六　[illegible]……[illegible]

第十七　十夜の長談義……八九三
江州土山のばくらう……八九三

鹿の巻筆……鹿野武左衛門……八九五—九四〇

序……八九七
目録……八九八
卷之一
ばんどう屋才介……九〇一
三人ろんぎ……九〇三
せりふの稽古……九〇六
田舎者の胴忘れ……九〇六
卷之二
筆屋のじゆりやう……九〇八
に廿八島……九〇九
二番目……九一一
夢中の人……九一三
火の見櫓見立……九一四
松本尾上が狂歌……九一五
異名業平……九一五
卷之三
太鼓櫓の楽書……九一七
淺草観音堂の狂歌……九一七
堺町馬の顔見世……九一八
二くずし……九一九
正月は物いまひ……九一九
無筆の文聞帳……九二〇
夢想の讀みそこなひ……九二〇
野暮のかけまもち……九二二
吉原雛遊び……九二三
佛事のいんしん……九二三

吉原酒の行末……九二四
清濁うたひの聞きなし……九二五
巻之四
功德の念佛……九二六
きかぬ奴の樂道……九二七
車善七の火事……九二七
代官の面目……九二七
表具屋の掛物……九二八
初心の大黒舞……九三〇
石塔の讀みたがひ……九三二
巻之五
ぬれのはじまり……九三二
湯屋のあき……九三三
くた日記……九三四
ほゝ杉寺請狀……九三五
作蔵が片言……九三五
神の家の具……九三六
見さきの料簡……九三七
上[illegible]の目付……九三八
心ばかりは我がもの……九三八
跋……九四〇

新話笑眉……作者未詳……九四一―九七八
序……九四一
目錄……九四四
巻之一
一 [illegible]……九四七
二 章でしらする文字の作意……九四七
三 見立て影法師……九四七

四　龍宮のあやつり……九四八
五　繪師の理くつ……九四八
六　祈禱者の能相……九四九
七　下手の談義……九四九
八　水中のためし……九五〇
九　大悲の利生……九五〇
十　盲人の七日參り……九五一
十一　初心なきつね……九五二
十二　かはつた相撲……九五三

卷之二

一　釣舟のうらかた……九五四
二　かはつた出來日……九五四
三　鷄鳥問答……九五五
四　春雨四天王……九五五
五　道中付の二度讀み……九五六
六　關守の甕所望……九五六
七　夜明のとりちがへ……九五七
八　身は寒けれど口は大名……九五七
九　川越の贈禮……九五八
十　こまつた挨拶……九五九
十一　狐のしやれ……九五九
十二　日待の雜談……九六〇

卷之三

一　新葉戸……九六一
二　松によする鯛……九六一
三　淺間が嶽……九六二
四　乞食張郎……九六二
五　文盲の柱暦……九六三
六　佛前の寶鏡……九六三
七　腹をかゝふる歸さのかご……九六三
八　律儀なうたひ嫌ひ……九六四
九　鐔のほめすごし……九六四

十　盤上の出來口……九六五
十一　大學講釋……九六五
十二　片言の禁句……九六六

卷之四

一　蜀江の翼……九六七
二　寸尺の取りちがへ……九六七
三　門女の料簡違ひ……九六八
四　秘事はまつげ……九六八
五　年は經ぬれど新しい口……九六八
六　化性のはいかい口……九六九
七　客のはまり……九七〇
八　町代の律儀……九七〇
九　錢を逆向に狂歌の返答……九七〇
十　竜田のまね釜……九七一
十一　野郎の心中……九七一
十二　一向宗の尤もな不審……九七二

卷之五

一　日本人のはまり……九七三
二　僕が作意は御無心の種……九七三
三　料理人のとんさく……九七四
四　馬耳の東風……九七四
五　番太が料簡違ひ……九七五
六　かなの讀みちがひ……九七五
七　豆腐屋が聞き違ひ……九七五
八　云ひなし様でをかしい病氣……九七六
九　直をしてはまる商ひ……九七六
十　漁夫の名言……九七七
十一　比丘尼の心中……九七七
十二　五兵衛が安堵……九七七

目次

傍訳 鹿の子餅……………………木室卯雲……九七七―一〇〇九

序……………………九八一
桃太郎……………………九八二
牛と馬……………………九八三
煙艸入……………………九八四
南……………………九八四
倹約心……………………九八五
盗人……………………九八五
提灯……………………九八五
浪人……………………九八六
馬鹿娘……………………九八六
芋……………………九八六
身投げ……………………九八六
鶏……………………九八七
御誂……………………九八七
剣術指南所……………………九八七
蜜柑……………………九八八
醫案……………………九八八
下女……………………九八九
初夢……………………九八九
田舎者……………………九八九
新右衛門……………………九九〇
雪隠……………………九九〇
小便……………………九九〇
悋気……………………九九一
屁……………………九九一
文盲……………………九九一
想病……………………九九二
無筆……………………九九二

海鼠腸……九九四
牽頭持……九九四
名所知り……九九四
試合……九九五
上り兜……九九五
炮碌賣……九九六
料理指南所……九九六
睾玉……九九七
唐様……九九七
薪屋……九九八
物知り……九九八
尻端折り……九九八
座頭……九九八
雷……九九九
喜勢留……九九九
豆腐屋……一〇〇〇
角力場……一〇〇〇
十字……一〇〇一
將棊……一〇〇一
大石……一〇〇一
唐相撲……一〇〇一
茶うり……一〇〇一
芳町……一〇〇二
大錢……一〇〇三
借雪隱……一〇〇三
九郎助……一〇〇三
夜發蕎麥……一〇〇四
蓑輪……一〇〇四
伊勢物語……一〇〇五
通小町……一〇〇五
朝鮮人……一〇〇六
比丘尼……一〇〇六

押込……………………九六　野等息子……………………九七
小鼓……………………一〇〇　黄……………………一〇一

詩々葉羅井……………………志丈……一〇三—一三五

序……………………一〇三　盗人……………………一〇九
女中の代参……………………一〇五　借銭乞……………………一〇九
あんけら……………………一〇五　浪人者……………………一一〇
開帳……………………一〇六　曲界奉行……………………一一〇
赤貝……………………一〇六　じゞ息子……………………一一〇
女郎の暦……………………一〇六　雷でらち……………………一一一
役者の女房……………………一〇七　桃太郎……………………一一一
質屋の後家……………………一〇七　けおく／＼……………………一一一
奴のなま降ひ……………………一〇七　浪人の竹刀……………………一一二
施相者……………………一〇八　大一座……………………一一二
人相見……………………一〇八　煙管の鴈首……………………一一二
女のはだか参り……………………一〇九　だら／＼指南所……………………一一三

目次

晦日……一〇一三
きおひ……一〇一三
いんぎん……一〇一四
貧乏人……一〇一四
禿……一〇一四
干鯛……一〇一五
富士の裾野……一〇一五
竹田料理……一〇一五
月のそり……一〇一五
大食……一〇一六
ながかたな……一〇一六
かつぱ……一〇一六
開帳の上物……一〇一七
物しり……一〇一七
はつ茸……一〇一七
浪人の自慢……一〇一七
論語……一〇一八
紙帳……一〇一八
ばちびん……一〇一八
遠國者……一〇一九
馬士……一〇一九
鉢の木……一〇一九
疝癪……一〇二〇
新宅……一〇二〇
鯉の瀧登り……一〇二一
むらさき……一〇二一
使……一〇二一
かけあらそひ……一〇二二
時花うた……一〇二二
鬼むすめ……一〇二二
ねじやか……一〇二三
座頭……一〇二三

どらばう……一〇三四
佛のむしん……一〇三四
地蔵……一〇三四

落噺 無事志有意……鳥亭焉馬……一〇三七—一〇六[illegible]

序……一〇三九
歳旦若水……一〇四〇
春興鞠遊び……一〇四二
歳暮年の市……一〇四四
蓮牡丹……一〇四五
直段……一〇四七
以上……一〇四八
竹光……一〇四八
きん酒……一〇四八
大鼓……一〇四九
けいこ所……一〇五〇
蛇……一〇五〇
[illegible]者……一〇五一
大屋……一〇五一
湯どうふ……一〇五二
名酒屋……一〇五二
祭り……一〇五三
女郎の[illegible]……一〇五四
米……一〇五四
白眼鏡……一〇五五
柔術……一〇五五
玉手箱……一〇五六
十軒店……一〇五七
釣り好き……一〇五七

虎……一〇五八
疊ざん……一〇五八
ひろひ物……一〇五九
勘界の谷……一〇六〇
十露盤……一〇六〇
脇差……一〇六一
みえ坊……一〇六一
富士講……一〇六二
はやり謡……一〇六三
星……一〇六三
化物……一〇六四
にはか……一〇六四
ほしいもの帳……一〇六五
松魚……一〇六六
唐女……一〇六六
玉……一〇六六
三人男……一〇六七
俊寛……一〇六八
伊勢參り……一〇六九
百夜車……一〇六九
稚名……一〇七〇
妙藥……一〇七〇
野狐……一〇七一
雷の玉子……一〇七二
文……一〇七二
そゝか……一〇七三
無筆……一〇七三
奉行……一〇七四
七十二候……一〇七五
駕籠好き……一〇七六
茶漬……一〇七七
田舎者……一〇七七

閑居……一〇七八
家名……一〇七八
丁稚の無心……一〇七八
閏七月……一〇七九
高尾……一〇七九
福鼠……一〇八一
辻八卦……一〇八〇
跋……一〇八二

解題……文學博士　笹川種郎……一〇八三

目次終

解題

文學博士　笹川種郎

滑稽本

滑稽本とは其の種類から命けた名稱で、其の形から云ふと、半紙本と半紙半截の小本との間にある中本を主としてゐる。三馬の「浮世風呂」、一九の「膝栗毛」も、皆此の種類に屬するもので、猶廣く通觀すると、文學中、滑稽を描いたものは、實に夥しく、王朝文學の中にもこれあり、江戸文學にては假名草子にも、浮世草紙、八文字屋本中にもこれあり、黄表紙、洒落本は固より、噺本も皆滑稽洒落を生命としてゐる。然しそれらは形の上から、其の發達の徑路から、其の特殊の性質から、各隸屬する範圍があつて、之れを滑稽本のうちには列しないのである。されば滑稽本と稱するものは、滑稽の裏に教訓を寓した靜觀房好阿の「當今下手談義」（五冊、寶曆二年板）、信更生の「都莊子」（四冊、同上）、伊藤單朴の「教訓雜長持」（五冊、同上）などを以て、其の初め

としてゐる。なほ好阿には、「教訓續下手談義」「當世兩面鏡」、單朴には「□錢湯新話」「教訓差出口」「楚古良探」等の著があり、教訓を寓した滑稽本は一時行はれたが、時代の反映は、色道談義となつて、止藏坊の「當世花街談義」(五冊、寶暦四年板)、柳塘居背閑の「花菖蒲待乳問答」(五冊、寶暦五年板)、墮落助の「禁現大福帳」(五冊、同上)などを出すに至つた。寛延元年に畸人志道軒が著ける「元無草」は彼の辻講釋とともに、此の種のものに影響する所が多かつた。「元無草」の終りに、「我を諭ふ」と題して、

史を讀み宜を談ず數十春　大悲閣の下名を得ること新し
曾夫木にて牀頭を扣くの日　白眼にて總て世上の人を看る

の一詩と、

とん／＼／＼と大坂關ヶ原打ちをさめたる萬世の聲

の歌とを錄したるがごとく、彼は陽形の木を以て机を叩きながら辻講釋をなし、「天とは二人となく、夫婦和合のとき云々。」と云ひ、「善惡二つなし、我が棒は諸道の節を打破り、皮を剝ぎ、大元の味を叩き出し、諸人の口に膾炙するものなり。」と稱して、神儒佛にこじつけの「色道論」片々たる小冊子「元無草」も、奇才風來山人の懷に入れば「根無草」となり、「風流志道軒傳」となり、「痿

隱逸傳』『放屁論』『天狗髑髏鑒定緣起』『菩提樹の辨』『飛だ噂の評』『長枕褥合戰』等の奇文を作りて、滑稽の裏に不羈の氣象を現はした。狂歌壇の猛者と聞えた平秩東作も、『水濃往方』『當世阿多福假面』に、滑稽の才を灑下してゐる。

江戶の太平に馴致されて、江戶人の輕妙機智は、文藝の上に遺憾なく其の特色を發揮し、黃表紙となり、洒落本となり、狂歌となり、川柳となり、上方に開いた文學の花も江戶の土に養はれて、江戶風のものとなり、八文字屋本の滑稽も江戶流の滑稽となつた。竹杖爲輕も、島田金谷も、內新好も、喜三二も、芝全交も、振鷺亭も、山東京傳も、森羅萬象も、式亭三馬も、十返舍一九も、洒落本作家と云はず、黃表紙作家と云はず、滑稽本に筆を染めることとなつた。特に三馬と一九とは、此の種のものに多くの述作をなしたのである。

一九の『東海道中膝栗毛』は、初篇より八篇まで全部十八冊、『續膝栗毛』は、初篇より十二篇まで全部二十五冊、三馬の『諢話浮世風呂』は、全部四篇九冊の長篇であつた。滑稽本もう四五冊の短篇ではなくなつて來た。『花暦八笑人』『滑稽和合人』『妙竹林話七偏人』のごときは、卽ち此の長篇ものである。

若し夫れ江戶に於ける滑稽を主とした著作になると、其の種類は極めて多い。道中記に倣つた

雛飛堂の『善惡道中獨案内』（一冊、寶暦六年）、無々道人の『迷所邪正案内』（五冊、同上）、多羅福孫右衛門の『無彈妙子』（一冊、天明六年）、一筆庵可候の『善惡道中記』（七冊、弘化元年―文久二年）の如き、評判記に擬した泉山坊、梁雀州合作の『評判龍美野子』（二冊、寶暦十年）、式亭三馬の『花江戸諢話客者評判記』（三冊、文化八年）の如き、畫作物の一掃齋作『人遠茶懸物』（一冊、天明六年）京傳作『當世雛形小紋新法』（一冊、同上）、『小紋雅話』（一冊、寛政二年）、『奇妙圖彙』（一冊、享和三年）、東西庵南北の『下界闘會』の如き、風來山人の『風流志道軒傳』にある異國廻りの趣向に倣つた遊谷子の『異國奇談和莊兵衛』（四冊、安永三年）、澤井某の『異國再來和莊兵衛後篇』（四冊、安永八年）、笑止亭の『異國風俗笑註列子』（五冊、天明二年）、宇多樂庵嬉丸の『異國滑稽羽栗毛』（一冊、文化四年）のごとき、『滑稽素人芝居』、『樂屋方言』『戯場粹言幕の外』、『見通部戯場』『狂言田舍操』『壽茶番狂言』『田舍芝居忠臣藏』、『滑稽新話旅芝居田舍正本』『口豆飯茶番樂屋』『方言競茶番種本』、『茶番早合點』『田舍芝居樂屋雜談』『初昔茶番出花』（十二）『趣向茶番噺』の如き、芝居、茶番がゝつたもの、若しくはもぢつたものを初めとして、何物にても取つて之れを滑稽の資料とし、又滑稽化せんとしたのである。然し其の多くは淺薄な穿ちと、くすぐりとを生命として、滑稽の上乘に入つたのは、殆んど見當らない。

落語本

古くは輕口話、後に小咄、之れを集めたものを噺本、又は落語本と稱する。此の種の最も古いものは、元和活字本の『戲言養氣集』二冊である。これについで寛永年間に刊行された『きのふはけふの物語』一二冊があり、安樂庵策傳の『醒睡笑』八冊がある。萬治二年になると『百物語』二冊、中川喜雲の『私可多咄』五冊があり、寛文八年の『一休ばなし』四冊、同十二年の瓢水子松雲の『狂歌咄』五冊、『一休關東咄』三冊、『徒然御伽草』一冊があり、延寶より天和にかけては、『輕口曲手鞠』四冊、『秋夜友』五冊、『囃物語』三冊、『輕口大わらひ』五冊、『當世手打笑』五冊、『新撰咄揃』五冊が出板されてゐる。此等は江戸で出板されないで、多く上方に印行せられた。

『醒睡笑』の作者たる安樂庵策傳は、京都の吉田に住してゐた。本姓は平林、通稱を平太夫と云ひ、後に誓願寺中竹林院の住僧となり、醒翁と號し、金森宗和に就いて茶道を學び、常に諸侯伯の邸に出入し、最も豐太閤に愛せられた。又頓智の才に富み、笑話に巧みであつたので、座興を助け、大いに世間の珍重するところとなつてゐた。晩年耳を聾したので、筆を以て舌に代へた。寛永十九年正月八日、八十九歳を以て歿した。

延寶天和の頃には、『輕口大わらひ』『當世手打笑』『新撰咄揃』等が上梓せられたが、京都に露の五郎兵衛なるものがあつて、落語に巧みであつた。五郎兵衛は祇園、眞葛原、四條河原、北野などに小屋がけして辻噺を興行してゐた。後に薙髮して露休と號し、又露の字を分けて雨路と稱した。元祿十六年五月九日、六十一歲にて歿した。其の作に元祿四年板の『御伽輕口露がはなし』、同十一年板の『露新輕口ばなし』、同十四年板の『露五郎兵衛新ばなし』、元祿年間板の『露休はなし』、寶永二年板の『露休置土産』がある。同時に大坂に米澤彥八があり、生玉を定場として辻噺をなして大いに行はれた。其の作に『輕口御前男』(元祿十六年板)があるが、其の序に、

此の頃京都へ上りけるに、都の若き衆、何と彥八、難波に新しい事はないか承はらん。されば夕べ淀川にて水が物申しました。何と〳〵、水が物いふ、不思議におぢやる、こちの都には露が咄をする。

とあつて、露の五郎兵衛のことを云つてゐる。

京の露の五郎兵衛、大坂の米澤彥八に對して、江戸に鹿野武左衞門があつた。彼は江戸の長谷川町に住し、本職は塗師業であつたが、座敷仕方咄で有名であつた。中橋廣小路に莚張りの小屋をかけて、晴天八日間興行した。貞享二年、『鹿野武左衞門口傳話』二冊、同三年、『鹿の卷筆』五冊、元祿年間に『はなしの問屋』一冊を出した。「鹿の卷筆」に次の一話が載つてゐる。

市村芝居へさる霜月より出る齋藤甚五兵衛といふ役者、前がたは米河岸にて刻莨賣なり。とつと輕口にて器量もよき男なれば、とかく役者よかるべしと、人も云ひ、我も思ふなれば、竹之丞太夫元へ傳手を頼み出けり。明日より顏見世に出ると云うて、米河岸の若きものどもに頼み申しけるは、始めてなるに、何卒花を出して下されと頼みける。目をかけし人々二三十云ひ合ひて、蒸籠四十、また一間の臺に唐辛を積みて、上に三尺程なる造り物の章魚を載せ、甚五兵衛殿へと張紙して、芝居の前へ積みけるが夥し。甚五兵衛大きに喜び、さてさて恐らくは伊藤庄太夫と私、花が一番なり。とてもの事に見物に御出と申しければ、大勢見物に參りける。されども始めての役者なれば、人らしき藝はならず、切狂言に馬になりて、それも頭は働くなれば、尻の方になり、彼の馬出るより、此馬が甚五兵衛といふ程に、芝居一統に、イヨ馬さま〳〵と、暫く鳴りも靜まらず賞めけり。甚五兵衛すご〳〵ともならじと思ひ、ひん〳〵と言ひながら舞臺うちを刎ね廻つた。

然るに此の一笑話は、はしなくも武左衛門後年の奇禍を購ふ事になつた。元祿六年四月下旬より江戸市中に惡疫流行し、人呼んでソロリコロリと云つたが、忽ちの間に死するもの一萬餘人の多きに及んだ。流言蜚語は盛んに云ひ觸らされ、南天の實と梅干とを煎じ服すれば、卽效ありと云ふものあり、しかも馬が人語を發して敎へ知らせたとまで附け加へられた。其の處方書さへ一小冊子となり公にせられ、江戸市中は固より地方にまで喧傳せられ、南天の實と梅干との價幾十

曆倍に騰貴するに至つた。當局者はこれを見て、同年六月十八日附にて、時の町奉行能勢出雲守より、

近頃市中にて馬の物言ひ候由申觸し候。斯樣の儀申出し不屆にて何者申し出し候哉、一町切に順々話次ぎ候者、猶また初めに申出候者有之候はゞ何方の馬物いひ候や、書付に致し、早々可申出候。殊に其の方組合まで申ふらし候由、不屆に付、一町限りに人別詮議いたし可申候。若し知りながら隱し置き、後日顯はるゝに於ては、曲事たるべく間、有體に可申出候。云々。

と、町中に沙汰した。其の結果として神田須田町八百屋惣右衛門、浪人筑紫團右衛門が捕へられ糺問して、其の犯人たるを知り、馬が物言つたと云ふ、出處は鹿野武左衛門が甚左兵衛の話より暗示を得たること、處方書は武左衛門の手に成つた事を白狀したので、武左衛門も捕縛せられ、元祿七年三月十三日、浪人團右衛門は江戸中引廻しの上、斬罪に處せられ、惣右衛門と武左衛門とは死一等を減ぜられて流罪となり、武左衛門は伊豆の大島に流され、處方書及び『鹿の卷筆』の板木は燒き捨てられた。武左衛門は配所にあること六年、元祿十二年四月赦されて江戸に歸つたが、積年の勞苦で病を發し、同年八月五十一歲を以て歿した。

武左衛門の噺本が行はれた頃の作としては、浮世繪師菱川師宣の門人であつた石川流宣の一枝

珊瑚珠』五册は元祿三年に、みやこ又平の『輕口幾世茂千』五册は元祿十四年に、『輕口百なり瓢簞』五册は同年に出板された。『輕口居合刀』五册は寳永元年に、『輕口老婆ざくら』五册は同三年に、東の頓作の『かす市頓作』五册、客言堂露嫌の『福祿壽』四册は同五年に、『かる口利益話』五册は同七年に出板された。同年間に出板された『輕口都男』三册は露の五郎兵衛と、又八、鹿野武左衛門の話を集めたもので、之れに評を加へ、鹿と露とは懸合噺にして、其の勝敗を判定してゐる。

猿　　むさし野の鹿

東國の城下米澤木工太夫といへる侍、世に雙びなき不男なれども、由緒正しく、武藝萬事に付て發明なれば、祿百石を得て新參に有りつきけり。其年殿の御用に立つ事三度、毎年加增被レ下、三百石になりぬ。然るに此人の貌其の儘猿に生き寫し、おもてむきには云はねども、陰口の異名を猿の木工太夫と云へり。その事いとけなき子ども聞きふれ、木工太夫通られけるを見て、あれ猿が通るよと、あだ口叩くが、木工太夫耳に入りぬ。然れども十をかしらに七つ八つの子供なれば、聽かぬ振して邸に歸り、其の日召連れ給ふ草履取を近く呼び、けふ子供の云ひし事定めて汝も聞くべし、何と某が貌猿に似たかと御尋ねあれば、角平畏つて云ふやう、是は近頃勿體なき事を御申しなされまする、旦那樣の御貌が、畜生ものに似てよいものでござりまするかと云ふ。そんなら似はせぬかと、念入らるゝ時、旦那樣の御貌は猿には似ませねども、猿めが顏旦那樣に似ましたといへば、

おのれそれは同じ事ぢやと、旦那大笑をせられけり。總別物事に氣をつける旦那、今角平が云ひしは、同じ事を云ふやうなれども、主を尊む忠言なり。其の子細は主を畜生に似てよいものでござるかとおかしさへ、見ればよ似たものを似ぬと云ふは、主をたばかるにひとしきゆゑ、猿めが猊旦那様に似ましたといはゞ、氣をつけた云ひぶんと、褒美に青さし一貫文頂戴したは、角平が仕合せ。

小便　　　都の露

ある上京の藪醫者、はいでの男を抱へ、挾み箱持たせて療治に出でけるが、彼の醫者門のきはにて小便せられけるに、彼のはいで、旦那の跡に、一分に二文取つた樣な貌つきして、小便せらるゝ間、すつくりと立ちはたばつて待つてゐる。旦那小便しまうて云はるゝやう、今から人が小便するなら、其のしまふ間挾み箱下に置いて、蹲踞うて居るものぢやと敎へければ、心得ましたと、合點して歸りけり。其の日十町ばかりある所へ彼の男を使にやられけるに、八つ時分に七つ過ぎても歸らず、やう〳〵黃昏になりて歸りければ旦那大きに腹を立て、さん〴〵今まで何をしてゐくさつた。言語道斷憎い奴と叱りければ、旦那殿は樣子も聞かいで、むしやうに叱らしやる事ぢや。今日ほど小便仕の多い日はござるまい。やう〳〵立つて一足か二足歩めば小便仕、又立てば小便仕、如何にしても歩く間がござらいで、今になりましたと云へば、此の返答には旦那殿も困られた。

鹿のはなし、沙石集、聖學法師足の長短なる物語によつて作られたると見えたり。しかのみならず、一作働

いて興あれば長點、露のはなしをかしき所はあれども、品こそかはれ、此のていのはなし類あつて耳馴れたれば平點にて、露のかた一點の負け。

當時の小咄の無邪氣さ加減はこれにても分る。其の後名人も出でず、小咄は振はなかつたが、明和安永の頃になると、江戸人の機智に富んだ頓才は、輕妙なる小咄本を續出する事となつた。安永元年板の山風作『噺話鹿子餅』一冊(後篇は『譚嚢』と題し、一冊物にて安永六年板)、同年板の小松屋百龜作『聞上手』初編一冊(二篇一冊、同二年板、同三編一冊、同二年板)は其の流行の先驅であつた。『珍話樂牽頭』一冊(稻穂作、安永元年板、同後編『坐笑產』一冊、同三編『近目貫』一冊いづれも安永二年板)、『新話仕形噺口拍子』一冊(武子作、同後編『今歳花時』一冊、いづれも安永二年板)、『新話飛談語』一冊(宇津山人、菖蒲房作、同後編『さしまくら』一冊、同三編『都鄙談語』一冊、いづれも安永二年板)、『春遊機嫌話』一冊(戀川春町作、安永四年板)、『鳥の町』一冊、(安永五年板)、『高笑』一冊(〻甫先生作、同年板)、『春宵一刻』一冊(千金子作、安永七年板)を初めとして、幾多の小咄本は刊行せられ、大田南畝も、『鯛の味噌津』一冊(安永八年板)、『萬の寶』一冊(安永九年板)、『落噺福笑』一冊(天明二年板)『鶯笛』一冊(天明年間板)などを著はし、壺十三も『柳巷訛言』一冊(天明六年板)を作つてゐる。

天明四年四月二十五日、立川焉馬は、柳橋の河内屋にて寶合會を催して、落語を披露し、これより落語は盛んとなつたので、落語中興の祖と稱せられた。焉馬は本姓中村氏、名は利貞、俗稱を和泉屋和助と云ひ、本所相生町五丁目に住し、大工の棟梁であつたが、傍ら足袋木綿類を賣つてゐた。狂歌の判者として、鑿釿言墨曲尺（のみてうなごんすみかね）と稱し、烏亭焉馬、談洲樓、桃栗山人、柿發齋の號があつた。文政五年六月二日、八十歳を以て歿し、本所表町の最勝寺に葬り、法諡を[illegible]院壽徳焉馬居士と云つた。「思ひきやかたみの花を手むけにて尋ねて枝を敷島の道」とは其の辭世であつた。

寶合の遊びは、安永三年三月、島田左内（狂名酒上熟寢）が始めたもので、其の後、諸方にて催された。此の河内屋の會合では、萬象亭竹杖爲輕が自作の寶合の記三卷を披露し、焉馬は自作のお江戸太平樂の卷物を讀み、あとにて落語二三を口演した。

斯くて落語の氣運は頓に開け、天明六年四月十一日、向島の武藏屋權三郎方にて落語の會は開かれ、同八年正月二十五日、焉馬は第二回の落語會を向兩國尾上町の京屋に催し、寛政元年二月一日には柳橋大のし樓にて第三回を開き、同二年三年には、引續きて尾上町の京屋にて催し、翌四年正月二十一日開催して、爾後毎年之れを以て例會とした。然るに同九年十月、幕府は突如として之れを禁じた。文化十一年焉馬が七十二の賀筵を開かうとしたが、幕府は之れに干渉した

ので、會場を柏屋より本所五ツ目の羅漢寺に變更した。文化十二年には幕府再び落語の禁止を企てたが、翌文化十三年には、「近頃諸方に落噺相催し候者多く有レ之候、右はたはけ笑ひ、俗におどけたる噺は不レ宜候に付、可レ成昔物語忠孝の道を述べ候樣、其方共より申諭し可レ申由、御内達に付此段御達し申候。」と、やゝ寛大なる沙汰があつたので、文政二年正月二十八日、焉馬は龜井戸の藤屋にて一世一代の落語會を催した。

焉馬以後は二代目焉馬、三代目焉馬、立川談笑、二代目談笑、談語樓銀馬、二代目銀馬、立川金馬、立川白馬、二代目白馬、紫檀樓古木、石井宗叔、二代目宗叔、櫻川慈悲成があつたが、其の尤なるものは三笑亭可樂で、其の門人には幾多の達人があつた。

初代焉馬の著に「落語六義」がある。落語を風賦比興雅頌に分ちて、次の如く說いてゐる。

風は、そへうたなり、かぜは其の色見えず、そのしな物によせ合はせて、あらはるゝなり。八雲御抄にいふ十體のうち俳諧に類す、あらはにきこえず、外の物にすがりて狂じたるなり、はなしにとつては、ゆきすぎばなし。

「おかみさん、大根を一本くださいませ」「これは大根はございませぬ」と、切口上でいふ。亭主奥より出で「これおすぎ、そなたは今まで御屋敷につとめたから、あきなひのしやうを知らぬ尤もなこと、賣切つたものがあるなら、それ

はござりませぬが、これではお間に合ひますまいかといへば、それについて外の物を賣ることがあるまいさ。つがかんじんぢや。」「アイ隨分心得ました。」といふ所へ「おかみさん、長芋を下さい。」「ハイ長芋は切れましたが、つくね芋では、どうでござります。」「長芋がなくば、つくね芋で間に合はせませう。」と買つて行く。と又門口へ「モシわさびを下さい。」と云うてくる。「ハイわさびは切れましたが、生薑ではどうでござります。」「ム、生薑ではちとかゆいが、せう事がない、間に合ひにしておけ。」と是も買うて行く。亭主「それ見やれ、人に無理はない。物の云ひやうで買つて行くわさ。いつまでもさう氣を利かせたがいい。」といふ所へ「モシおかみさんたゝみいわしをくんなさい。」「ハイたゝみ鰯は切れましたが、アノふのりではどうでござります。」（橘々亭萬羅作）（『たぬき』以下畧す。）

賦は、心を一ぺんにとゞめざる義なり。かるがゆゑに、かぞへうたと云ふ心を、くばりはかるなり。十種にいはゆる空戯、ひたすらにたはむれて、實少きなり。是れ萬八ばなし。

「今はむかし、夕立に龍がまいて、ついお屋敷のお物見の前におつこち、そのうち雲ははれる、龍もあがる事はならず、たふれて居るゆゑ、大勢の人だかり。あしがる棒突き、左右をかため、殿様にもお物見へ御入り、奥女中のけんぶつ。龍もをり／＼顔をあげて見ても雲はなし、こまり切つて居る。御物見では、ホンニまあこはいものだと思へば、おちて見ればそのやうにもないものでござりまするよ、みな／＼煙草をのみながら御見

物、その煙草のけむが格子の外へ出ると、能くびをもちあげて嬉しや雲ゐと立ちのぼらうとして、ゴホン〳〵、

（富存作）（〔三〕にはとり『外畧す。』）

比は、なぞらへ歌なり。たくらべとも、物の物に似たるなり。十體にいはゆる謎字、なぞ〳〵のやうにいへるなり。是れ秀句がゝりの落ちはなし。

「ム、貴樣は缺落がしたいといふが、今の話では正直すぎてわるい。まづ缺落をしようと思はゞ、旦那の留守か、人の居ない時、なんでも手あたり次第に取つて、内を出るのを缺落といふことでござんす。それでは盗人になります。何も取らずに出たいものでござります。」「ハテサテ、それでは缺落でない。出奔だ。」といはれてがつくりして、「エヽすつぽんなら首を切られます。」（千別作）（〔二〕水の外畧す。）

興は、たとへ歌なり。そへうたはかくれ、たとへ歌は顯はるゝなり。十體にいはゆる譬喩、いやしき詞をきらはでいへるなり。是れ下がゝりのはなし。

「野暮が一生一代しばゐを見ようと、あけ六つより切落へはいり、一番目の大詰まで小便にも立たず、もう二番目の口上のはじまらぬうち、ちよつと立つて二人づれ、雪隱に行きて見れば、ふさがつて居るゆゑ、おぬしはとなり裏のへでも行きやれとはひる。さきよりこちらの雪隱に居る男、[illegible]がいきにて、われを忘れてひとりごとに、「アヽ眼玉はきついものだ。」といふと、隣の雪隱でもきいて、嬉しさのまゝ「モシ〳〵おまへは

おや玉子でございますか。」「イヤサいきませう、たいていなひいまではござりませぬ」といふことゝも「ナイ私も大かたいきさ、そこいもの赤明ばかりさ、どうぞまつし出しまきたいもの」ふ、あのやうな役者はありませぬ。」「、あいさつすなうち、となり座から連が来て、「どうだまだか。もう幕があく時分。早く出されこといへば「コレシお連さまかよ、ナアイ連でござりますか、これから観玉でいきますへ」いふて、ある男も大ないきでござりますゆ」「ハアヤナお待遠であらう。」お人お申して、お茶でもあげなさい。」（千里庵員作）

雅は、物の成就して調ひたる帯なり。ただことうたなり。古雅意雅あり。意雅は消定なき罰なり。古雅はことはに現はして一句を作るなり。十體にいはゆる俳諧調字なるべしは此の歌なり。是ありくつあらぬけなし。

こんどの奉公人は機轉の利いたものだ。おれが年寄ゆゑ、飯もさはらかに焚き、何も彼も如才がない。料理もするであらう。一コレ八助、おれは庖丁が利いて居るか。」「ナイさやうでござります。」「それなら猶よい。イヤモウ書であらう。茶漬を喰はう。何もないから香のものをうすく切つて、持つて来い。」といへば、かしこまりました。」と膳を持つて来る。「サテさうすく切つたわ。これで箸をうつにも手間はいるまい。」と、箸で一ときれはさむと、十枚ほど續いてあるから、これはけしからぬ、これ程の手際で、切れはなれぬはどういふ事だと、「コレ八助、おぬしはどこの料理屋に居た。」「イエ料理屋には居りませぬ。」「それで何屋に居た。」「炭屋に居りました。」（甲岳作）（きじんきよ「以下畧す。」）

領は、いはゞ歌なり、世をほめ神に告ぐる心なり。十體にいはゆる狂言、ひとへにをかしきやうにつゞる。たとへに火を水といひなし、またこゝろいきの通ずる所あり。是れ人情のはなし。

吉原の素見世におゐらんが、「コレ喜助どん、茶碗屋どんが来たなら、茶漬茶碗を買つて下せいよ。」「アイ買つて上げませう。」といふうち、茶碗屋が来る。「コレ此の茶碗はいくらだ。」「二百五十でござります。」「とはうもねえ百五十にまけせい。」「とんだ事をいひなさる。どうして。」「ソンなら六十やらう。」「ハテその様におつとつゝつけあげずとも、もつとお買ひなさい。」といふと、女郎が聞いて小聲で、「コレ喜助どん、もつと高くてもいゝわな。」といふ。若いもの、目まぜでうなづきながら、「そんなら七十二文やらう。」「ハテさて、おめへも吉原に居るほどもない。けちなつけやうをなさる。」といへば、若いもの腹を立ち、「このあきんどはをかしな事をいふ。吉原ものはねぎらねものか。」と、はやいひ合になるゆゑ、おいらんも氣の毒がつて二階へ行く。茶碗屋は荷をかついで出る拍子にけつまづいて、今の茶碗も外の茶碗も、みぢんにこはれるを見て、若いもの嬉しがり二階へかけあがり、「もしおいらん、今あの茶碗屋めが、まければいいことを、りきみまはつてそこで轉んで茶漬茶碗をぶちこはしました。」といへば、「ほんにかえ、買はねえでよかつたなう。」（白鯉館作）

しかつめらしく詩の六義に分けて說いたところは可笑しい。然し洒落本や黃表紙に見えた輕い洒落、をかしみある機智は、此でも遺憾なく江戸人士の特色を發揮してゐる。

春の花かご

こゝに梅の仙人と名づけたる古木、庭のすみの白い桃に惚れて、かめゆりを仲人に頼み、金盞花を持参に婿入りをしける夜、折しも植木屋木鋏みを持ってはひりければ、花どもこれを恐れて、わなゝきふるふ、「植木屋「ハヽア、これは今宵花婿の来るさうな、これを無情に切るでもない。」と、すご〳〵帰りければ、仲人の花顔を上げて見て、「サア此のうちどなたゞ、おなからきな花え。」（江戸自慢）

は、上品にして情趣が深い。

うそつき彌二郎

上方より帰り来て「京都は花の都ほどあって、けしからず上品なところぢや。先づ大道をあるくせんざいやが烏帽子直垂で「おしびきの山の芋〳〵」と。紙屑買は、「千はやふる紙屑はう。」といふ。せきだなほしは「知るも知らぬも逢坂のせきだなほし。」と申して歩きます。そばにゐる人、「ハテナ、そしてたびやなどは何と呼びますな。」彌二郎これには大きに困り、頭をかきながら「オヽ、それ〳〵。足袋屋は、「かんけこんのたび〳〵。」」（同上）

鳥づくしの駕屋

かや町へ鳥づくしにて、四ツ手あんぼつつかはし候といふ看板出でければ、物好きな人一人来り「わしは雀で

竹門までやつて下さい。」と云ふ。「畏りました。」と駕籠を舁き、チウノ\とかついで行く。又一人來り「俺は鳩でやつてもらひたい。」かご「畏りました、鳩ならさんし百二十四文で參ります。」と、駕籠へ乘せてホウ／＼とやる。そのあとへ三四人來り「俺はてつぽう見世へ行くから、雉子でやつてくれ。」と云ふ。今一人は「常磐町まで鷹で賴みます。」と云ふ。今一人は「仲町の梅本まで鷲で。」と賴む。あとの一人は「吉田町まで鷹でやつて下さい。」と云ふ。又夜更に一人來て「わしは氣味が惡いから、駒形あたりまで時鳥でやつて下さい。」と云ふ。かご「どういたして、今時分くたびれ足で、おまへさんの樣なふとつたお方を、時鳥ではやられませぬ。」客、「なぜくたびれあしでは時鳥でやられぬ。」かご「ハツてんへんからかけねえけりやあなりません。」（同上）

は、いづれも同工異曲な苦心の洒落。

吉原

「此頃は久しくお出でなんせん、お心がはりかえ。」と云ふ。「イヤ心がはりではないが、さんざん痔が起つて、それゆゑ來なんだ。」「それはさぞお困りなさんしたでござんしよう。殊に出痔の、いぼぢの、走り痔のといろいろあるさうでござんすが、お前のは何痔でござんす。」「おれがのは親仁だ。」（鳥の町）

借上

身上を女郎にいれ上げ、一家一門に見限られ、つひに搖をふり、寺町邊にねてゐる折ふし、前かた馴染の女

郎通りかゝり、此のていを見るなり、「コリヤア〳〵おいらが写した、わたし故に此のうちの鯉になつたとてか、」すぶりつき泣き出せば、「これやア〳〵善いね、おれは稼ぐため出たのだぞ。」(同上)

庵　室

相撲遣を通りかゝり見れば、庵室に三十ばかりの男唯一人、机にむかひ書物を見ておる様を見て、「あのやうにして暮したらばなア、さぞ面白い事であらう。」と、うらやましう思へば、庵室の男ずつと出で、あくびをしながら「アヽ金がほしい。」(同上)

古

両国の古び見世の前で、子供凧を上げながら、「こゝのうちなぞはあたらぬ、下手だ」と言いながら、古い者腹を立て、「こいつらは毎日見世さきで凧を上るさへあるに、にくいやつだ、うぬらはどこから来たな」とあてゝみな」(同上)

大　屋

貸店の札を、子供がいたづらにはなすこと度々に及べば、大屋も家をつけて、厚板にかし店と書いて、釘にて丈夫に打ちつけ、「是では二三年はこらへる。」

は、いづれも、軽妙。

此等の小唄は皆いづれも後年落語の本となつたものが多い。又落語の枕として遣はれたものも少くない。小唄が一轉して長い落語となつたのは、石井宗叔を祖とする。可樂出でて、題三つ題をとひ、三題噺を始めた。

花暦八笑人

瀧亭鯉丈作、溪齋英泉畫。初編より五編に至る十五冊。初編二冊、文政三年。二編二冊、同四年。三編二冊、同六年。三編追加二冊、同七年。四編二冊、同十一年。四編追加二冊、天保九年。五編上巻、一筆庵主人(溪齋英泉)作、歌川國芳畫。中、下巻、與風亭枝成作、歌川芳綱畫、嘉永二年板。

作者瀧亭鯉丈は江戸文化頽廢期が生んだ滑稽作家の代表者で、此の意味に於て本書は、大半に馴致された江戸民衆の享樂主義を遺憾なく寫してゐる。江戸民衆は四季を通じ、行樂して遊び興ずる人士であつた。本書の序にもあるが如く、「瀧の川には瀧飲の杯を傾け、不忍の池には高聲の調子をも忍ばず、飛鳥の山に今日を忘れて、日暮の里に晩鐘を恨む、何がし山に昔を偲びては、道灌山吹き破れた衣など、實のなき地口を囀るたぐひも、皆是れ酒に載れ花に浮るゝ人心の花でも

いた。本書に冠して花暦と云ふのでも其の性質が知られる。作者鯉丈は一中節の三絃弾きの妹下であり、或は乗物師となり、竹細工を業とし、下谷稲荷町、浅草傳法院裏門前、両国等に轉々として住し、藝人として世渡りし、彼自ら滑稽家たる資格を十分に有してゐたのである。「八笑人」は要するに彼及び其の友人を取りて之れを遊戯化したものである。然も滑稽本には江戸民衆の好んでした茶番狂言をあて込んだ物が多く、「滑稽素人芝居」「壽茶番狂言」「万古競茶番種本」「茶番早合點」の類を少なしとせぬが、鯉丈は之れを題材として種々の滑稽味を描き出したのである。

鯉丈には本書の他に「大山道中栗毛後駿足」六冊、「滑稽和合人」初・三編十冊、「滑稽牛島土産」二冊、「旅壽々女」二冊、「契情質屋雑談」一冊、「伊勢土産見杯」二冊、「滑稽箱根草」初・二編六冊、感和亭鬼武の「萬歳觀帖」續編、式亭三馬の「人間萬事虚誕計」後篇等があるが、「和合人」が最も出色の作で、本書と並び稱すべきものである。

妙竹林話　七偏人

梅亭金鵞作、初編より五編に至る十五冊。初編三冊、安政四年。二編三冊、三編三冊、出板年月不詳。四編三冊、文久二年。五編三冊、文久三年板。

作者金鵞は松亭金水の門人で、本姓柳生氏、名を政知と云ひ、人情本にも筆を執つてゐた。『八笑人』を摸倣したものであるが、其の滑稽は『八笑人』に輪をかけて、すこぶる悪どくなつてゐる。これでもか〳〵と無理に笑はせ興がらせようと、不自然に作爲なされてゐる。

醒睡笑

安樂庵策傳作、三冊、寛永整板本を初めとする。慶安三年板、萬治三年板がある。策傳が板倉侯の爲に其の口演した小咄を薜錄したものだと云ふ。後世の小咄落語のもとになれるものが少なからずあつて、流石に材料が豐富である。

昨日は今日の物語

作者不詳、二冊、寛永活字本、寛永十三年板、正保四年板などがある。

輕口露が話

露の五郎兵衛作、五冊、元祿四年正月板。

延寶二年に『輕口曲手鞠』が出てから、同八年の『輕口大わらひ』、貞享元年の『輕口男』、元祿元

年の「軽口噺」など軽口を冠する書が刊行された。此の書が出板されて後、元禄十一年には、「露新軽口ばなし」が出板されてゐる。

鹿の巻筆

鹿野武左衛門作、古山師重畫。五冊、貞享三年板。

新話笑眉

作者不詳、五冊、正徳二年正月板。板元は日本橋南二丁目万蔵屋とあり、此の種の江戸板として古いものである。

譚話鹿の子餅

木室卯雲作、序に山風とあるは此の人の匿名、勝川春章畫。一冊、安永元年板。小噺本では、一紀元を畫した作である。後編に安永六年板の「譚嚢」一冊がある。

壽々葉羅井

志丈作、北川豊章畫。一冊、安永八年板。

「雷ぎらひ」「けじ／＼」「浪人の鑄刀」「貧乏人」など氣の利いた小咄がある。

落噺 無事志有意

立川焉馬作、紫園春潮畫。一冊、寛政十年板。天保十年再板して「開卷一笑」と改題す。

題名は『宇治拾遺』をもぢつたもので、社中の人々の小咄を集めたものである。焉馬の落語集には此の他に「[illegible]に[illegible]大入咄し賣」一冊、「[illegible]青樓育咄雀」一冊、「落噺六義」一冊、「落噺通人藏」などがある。

解題 終

花暦八笑人

瀧亭鯉丈

花暦八笑人序

花暦を披いて八將神を見るは、吉方を知つて萬事を行はんが爲なり。八笑人を開いて花暦をしるは、阿房を見て戲作に笑はんが爲なり。夫れは惠方の年德神、是れは阿房の八笑人、惠方果報は寢て待つとも、ねにはかへらぬ花の下臥し。まづひらきたる吸筒の、口に出るまゝ洒落を吐きたる花見の連の一羣が、現ぬかして戲るゝさまを觀るが如くに書き綴りしは、友人瀧亭鯉丈なり。そも〳〵根岸の里の根なしごとをとり出して、谷中の谷の底をも穿つか。瀧の川には瀧飲の杯を傾け、不忍の池には高聲の調子をも忍ばず。飛鳥の山に今日を忘れて、日暮の里に晩鐘を恨む。何がし山に昔をしのびては、道灌山吹破れた衣など、實のなき地口を囀るたぐひも、皆是れ酒に戲れ花にうかるゝ人心にして實にも愛でたき春の夕暮、櫻は花の王子の神社、此の方に向ひて畜類のむだ口を求めず。小便無用花の山、よろづよし野も小初瀬も、此の大江戸の華にはしかず。またおほ江戸の花見の日記は、四季の名所の春にはしかずと、千社參りの豐丸正、矢立の筆を繼ぎ足して、櫻戸の端に記すことしかり。

琴通舍英賀

伊都茂鹿文之滑稽　瀧亭鯉丈編

文政三年かのえたつ乃新編目録　嘉美 刈壽　凡二冊五十九丁

大さいけのたゝり　此の外おいて百そうかう 但しかしてもらず

大もうだんうちの方　こどりやうり こざんかうり

大らんおやのあさ　此さうまやびがらす きんをまとず

としぐいつとのるす　たつミのあのきらずおス

全部　壹入 二さう

まさいけういゝぬるす　まとけびもち たてさせず

たいもうしのこと　ひきひとのかへもらず そうけのこへたらめず

たいへんげのたゝり　此そうとよう のめりあちり

つまらうんこうらのたゝり　むすめこゆめ だらりこよだり

八うききひとのだんやまよ　ひきひ大りつべんぜず あわしもとげず

出盗　春八ッ 秋八月　夏八ッ 冬八ッ

香花 立春ヨリ 四五十日目　中野 六十八日ヨリ 七十五日バカリ

彼岸 サクラ 六十三日 大佛辺　櫻 廿七日 上ノ四ツ谷 清水クワンヲン

花 七十日 飛鳥山 ゴテン山　同 廿一日 大井ムラ シブヤ金王

秋色 サクラ 七十五日 上ノ清水後　汐干 三月三日ヨリ 六日至ル

八笑人遊行日

春
庚辰年は　飛鳥山の花の雲
辛巳年は　角田川のはな筏

夏
壬午年は　高田の里の螢がり
癸未年は　兩國川の涼ぶね

秋
甲申年は　百花園の秋七草
乙酉年は　海晏寺の楓がり

冬
戊戌年は　青樓の夜の雪
己亥年は　淺草寺の年の市

右追々出版

花暦 八笑人

江戸 瀧亭鯉丈 作

春の部 壹之巻

福壽草の咲き初めしより、四季の花、盛りたがへぬ時津風、靜けき御代の春なれや。遲日をおくる日暮里も、今日に飛鳥の人の山、茶瓶の行列三重も、壹升德利のテンツヽも、彈けや謠への芝疊、浮世の塵の玉はゞき、はらふ片手はをりつめの、勝負あらそふ拳角力、幕の內外の合はせもの、疎き親しきへだてなく、チヨツトおあひのお手もとも、はゞかりながら櫻かな、梢にむすぶ短尺も、思ひ思ひの花見月。爰に下谷のかたほとり、何屋某が總領に、甚六ならで左次郎とて、生まれついての呑太郎、年中續く夕部けに、うくる家業もうるさしと、弟右之助に相續させ、おのれは隱居の身となりて心のまゝに不忍の、池のほとりに寓居、同氣もとむる呑み會所。おもての方よりしわがれたる聲で、「チト御めん下さりまし。あなたに安波太郎樣はお出でなさりませんか。」此の家にいてつきの居候眼七、眼「ハイ今も內から呼びに來まし

たが、まだこちらへは見えません。」安波太郎は表を明けてずつとはひり アハ「コレ〳〵内から誰が来た。」あるじ「ハヽヽ、べらぼうめエ、誰も来ヤアしねえ、かへり討ちをくらつたナ。」眼七傍より口を出す ガン「なんぢ等ごとき不才をもつて孔明を計らうとは、コレよく聞かつし、天へ向つて唾を吐けばかへつて我が身へかゝる道理だ。」アハ「イヤごたいそうなことを申し上げるワ。おれがあんまり聲を拵へ過ぎたからわるかつた。」トいふ中、また表のかたより卒八といふ友達、此の家をのぞきながら、卒「オイ安波公居るかノ〳〵、ちよつと来て見さつし、美女々々。」アバ「をんなかノ〳〵。」ト、うろたへてかけ出すひやうしに、くつぬぎの下駄をふみかへし、足をいためし、顔をしかめながら障子をあけて、「どれ〳〵」卒八づつとはひつて上へあがり、卒「あとを引き寄せてくだつし。」アバ「女はどこへ来た。」卒「あけて這入るが面倒だから、足下に一寸木戸番を頼んだのよ。モウいいから表をしめて此方へ来さつし。」アバ「このべらばア。」ト、ざしきへおひきたり、くらはせる。卒「コレよせエ〳〵。あんまりこすりつくな、木蝨がたからア。」アバ「オヤ〳〵不届なことを言上するナ。」卒「ナンノ又その顔で、女ざんまいをするからのこつたア。」左次郎「それ見さつし、他を呪はば穴二ツといふわ。最初おれをかつがうとして眼公にかつがれて、卒八先生にたてつけられるも、智恵のねえ理窟だハヽヽ。」ガン「ナニ安波公なんぞが呪ふには穴一ツで沢山だ。自分面巳おちるばかりだ。」アバ「いめエましい、足をひどくぶつた、ア、痛え〳〵。」卒「イヤかつぐといへば昨日日暮里へ行きやした、ところが聞きねえ。」アバ「ナゼかつぐといへばひぐらしへ行くのだらう。」卒「ナンノ

又のたり出るョ。燕雀なんぞ大鵬の心をしらん。此の一回何等のことを言ひ出づるや、つぎの段に分說くるをまつて知れ。」アバ「こやつ何事をかいふ、ト首をかたぶけ手をこまぬき、やをら左右の耳をすまして、聞いた所が河童の屁だらう。」卒「フン引かたことをならべ立てるわ。コウそして、利多ふうにしやべるが、河童の屁といふはどういふわけか知りはしめえ。あんまり文盲で不便だから、友達のなさけに教へてつかはさう。マヅ河童といふやつは河にすむものだが、水の中で屁をひつたら、ぶくぶくと音のするはずだぜ。ソレ柳樽に、

すかしても音のするのは河童の屁

といふ句があるわ。それを亦、たわいのない譬へにいふ譯がわかるめえ。これ則ちいひあやまつて居るからのことだ。子曰はく、こつぱの火と論語にもあるわ。夫れでたわいのない筋がわかるだらう。ア、歎かはしいことだ、チット學問をするがいい。一六の日には在宿いたすから、きけんを聞きながら來さつし。」アバ「ム、二七、三八、四九、五十、日濟貸で押し分けられめエ。ア、なる程屁の講釋は感心だ。おめへには博識ではねえ物ひりだらう。」左次郎「コウ〳〵そりやアいいが、卒公日ぐらしはどうしたのだ。」アバ「ナニ屁でまぎらしたから屁ぐらしだらう。」左「どうも此奴が此の通りこしををるから噺ができねえ。」卒「安波公チットだまらッせえ。アヽやかましい口だ。」卒「イヤサ聞きねえ。奇

妙な趣向で花見に來たが、皆一はいかつがれたのよ。さすがのおれさへ、まじめだと思つた。」アバ「ナニさすがのおれ、ヘン小刀のまがりが聞いて呆れらア。」左「東西々々、ソウどういふ趣向だ。」卒「聞きねえ、うまくすぢを書きやアがつた。」左「はてな。」卒「聞きねえ、すつぱりとかつがれたぜ。實ににくしやアがつた、聞きねえ。」左「フゥはてな。」卒「ヤこてへられねえ。」アバ「エ、こじれてエどうしたのだ。手前ばかりのみこんで、何だかわけがわからねえ。」卒「いんにやヨ聞きねえ。」アバ「聞いて居るヨ。ひとつの咄に聞きねえ／＼が一口五六十出らア、はやく申しあげろ。」卒「そんならかいつまんで噺さう。まづ本舞臺三間の間いちめんに櫻の立木、上の方に葭簀ばりの茶見世。」「コレサつまんで咄すに其樣なことはいらねえわな。」卒「イヤサ聞きねえ。其の出茶屋がすおだわな。そこの娘が十七ばかり　岩井半四郎、瀨川菊之丞、けいは大吉系三のおちやつぴいに、生姜二片入煎方つねのごとしといふ美女だらう。聞きねえ、そのまた腰かけに居た野郎が二十才ばかりで、いづれ金滿の息子株、色のしろいいやみなしの梅幸、團十郎、持物衣裳つきは御推量ス。」ガン「モシ是れには生姜ははひりませんか。」左「マタ／＼ひかへろ／＼。」卒「ソコでその客が暫く休んで、茶代を置いて表へ出合ひがしら、でんぼふらしいやつが二人、門口で突き當つたトいふがいひがゝりで喧嘩よ。それから聞きねえ、其の色男をノ聞きねえ、むごくぶちのめすもんだから、ききねえ。」アバ「イイサ聞いてる

ヨ。」卒「あすこの事だから人は黒山のやうに集まつて見て居るけれど、誰一人取り支ふる者もねえ。俺もあんまりかはいさうだから、中へはひつてやう／＼兩方へ引き分けてやつたら、ぶつた奴等はとなりの茶見世へはひる、色男は其の娘の所へ這入る。其處で娘も氣の毒がつて、いろ／＼介抱して、お髪をマァかりにわたくしでも結うて上げませうと、鏡臺を出して結ひにかゝると、聞きねえ、鄰に居るぶつた奴等がいつの間にか調子をあはせてチャン。 歌 櫛笥鏡臺取り揃へ、ト長五郎髮すきのめりやすよ。そこで合方になると、聞きねえ、その野郎が梅幸の身振聲色で、娘をあひてにいろ／＼思入ありよ。日暮里中の人をすつぱりひつかついだが、何とおもしろくかついだぢやァねえか。」アバ「しかし重かつたらう。山ぐるみかついだぢやァ。」卒「いんにやヨ、うまくかいたぢやァねえか。」左「ム、こりやァいい、それとも古いか知らねえがおもしれえ／＼。」ガン「コウ／＼なんと此の連中で出かけようぢやァねえか。御前達がぶちのめし人で、おれが髮すきよ。おらァ亦成田屋で遣るべェ。」ト、團郎のなりこわ色に「不思議なえんでいかいおせわに。」左「エ、よしてくれエ。さう思つたばかりで胸がわるくなつた。」卒「其のつらで髮梳どころか噛み付きさうだァ。馬子唄のうしろで瀧返しのかみすきがいい。」ガン「ヘンそねめ／＼、ナウ安波公催さうぢやァねえか。」ノハ「その瀧返しの方なら御多分には洩れますまエ。」ガン「チヨツいめえましい奴等だ、とかくおれがいふ事は取り用ゐねえ。」左「そんならかう

しよう、他の仕た通りもされめえから、身分々々に茶番に心をもつて、一趣向づゝ案じて、自分の書いた正本なら、其の狂言のたてものにするがいゝ」ト「ム、それで役不足がなくつていゝ。それにしても此の顔ばかりではさびしい、野呂松や出目助はどうしたらう。」卒「さうよ、今日は大分遅い出仕だの。」「なアにみんな昨夜から二階に行きだふれだ、ホヽヽ眼公、ちよつとおこしてつし午刻過だ」かん七「さうだつけ。一ばんおびやかしてくれべエ。」ト、しゆろばうきの柄にて二階をとんとんとつきながら、「ナイみんなが蘇生らねえか、最う日が暮かゝるわ。」二階にて八人藝の三すけが聲色で ごん七「ハイ／＼どうもハア病氣あんべエで、疝氣がさしこみがどたまがやめて起きられはしねえ。」卒「其の筈だア昨夜はひどく食らつたぜ。オイ他の倒れ者はどうだ。」にて二階いまひとりの野呂松といふ男、是れも八人藝の小僧の聲色、のろ「ハイ私はエ、引疝氣のやうな色氣のない病はおこりませんか、エ、引血の道のせゐかエ、どうもエ、眼が覺めませんで困ります。」卒「コウ／＼馬鹿アいはずと早くおきさつし、急に相談が出來た。」かし「ナニそんな甘口でいくのぢやアねえ、皆々歩行びねえじつぱがう。」ト、眼七、卒八、安波太郎三人二階へかけ上り夜具を殘らず引まくれば、漸く起きて下へ來る。卒「時に斯う言ふ相談だ、此の連中で花見茶番と號して、」出目助は半分聞かず、出め「オッとみなまで宣ふな、最前より二階において、やうすは殘らず承わり。」今一人ごん七、ごん「とくより趣向致してござる。」のろ「いで鎌倉へといふときに、われらが智計をほどこさば。」ごん「それがいゝ、女はみなごろし。」表のかたより圖武六といふ男、づぶ六「吞友公御入りイ引、ヒイ／＼テン／＼ツヽ／＼

ツク／＼ツ、テン／＼。」左「ハ、、、、奇妙々々、これで羣勢の著到はすんだ。コウ寐ほけ手合は、早く顔でも洗つて飯でも食はつし。そこで圖武六かういふ案じだ。」「オツト承知々々。先刻此所へ来かゝつてずつと這入るも智慧がねえから、何ぞ一番かつがうと思つて、密と障子の陰に身をひそめ、工夫の始終殘らず聞き、直に案じは定けておいた。」アバ「イヤハヤどいつもす早い奴等だ。サア／＼此方は大變だ、さつぱり心當りはねえぜ。」左「何サさううろたへる事もねえ。今日ツから始めて一日に一幕づゝだから、その中出来た者から先へやらかすがいい。サア今日の初日にだれがする。」ごん「ものごとすべて手はじめが大事だ、庸意なものにはさせられめえ、まづさしづめ俺だらう。」のろ「ナン／＼またさし出るヨ。先日の茶番の手なみで、どうして初日が勤まるものか、マア／＼初日はおれだおれだ。」左「熊谷平山待ちたまへ、爭ふうちに口がたける、中をとつて亭主役におれが始めよう。」出め「それがいいそれがいい。」ごん「シテ其の趣向は何と／＼。」三「マヅ筋は敵討だが、カウト役割は色の黒いでく／＼と肥滿つた、眼の大きイ髭なしやくしやの惡々しいといふ面がほしい、ム、安波公やつてくだつし立敵だぜ。」アバ「立敵はいいが、顔の容色があつらへ通りぢやアうれしくもねえ。」ガン「オツト狂言方の割りつけだ、面不足をいふめエ。」三「ソコデ著つけは黒羽二重の紋付に、萌葱博多の帯、朱鞘の大小、中ぬき草履、深編笠といふこしらへだ。」アバ「ム、いい／＼。」左「おれと出目助が順禮の

すがたで、そこ爰と花を見ながらたばこを呑んで居る所へ、安波公がのそり／＼と出かけて來る。これも同じく彼方此方と見あるき、なりたけ人の目にかゝるやうにして、程能き所で順禮にたばこの火をかりようと、すひつけにかゝる傘の中を覗いて、ヤアめづらしや鳥目百味、年來尋ぬる親の敵、ト是れから浮木の龜や優曇華の花、なんでも彦兵衛で、（彦兵衛とは御ぞんじの通言かけあひの事。）おもひれならべ立てしよう。ト安波公も出たらめのせりふで、ト不便ながらも返り討だと、編笠をとつて捨て、金貝張をスラリトぬく。俺と出目公は杖に仕込んだやつをぬいて、先達茶ばんに仕組んだ立合になりはどうだ。」辛「コリヤアがうせえた。飛鳥山は此友達ばかりで、花見をする樣だらう、いいわえ／＼。」「そこで亦眼のしよぼ／＼した鼻のひらつたい、齒の黄いろい、水ッはなが鼻のまんなかに絶えずぶらついてゐるといふ面がほしいな。オイ／＼圖武六、ちよつとおめにかゝらう。」ヅブ「ハイ／＼大體は私が似よりかネ。」辛八「似寄りどころか南瓜を二ツに割らすに其の儘だ。」ヅブ「チヨツいめえましい、爲方がねえ此の節だ、この首で間に合ひさうなら、お大事のものだが心置きなく遣ひねえ。」「其樣に力を落すことはねえ。役廻りは助高屋だぜ、六部の出立でチヤアン／＼と鉦をならして來かゝり、切り結ぶ中へ割つて入り、しばらく錫杖であしらひながら、某一言いふことあり、しばらく／＼と雙方引き分けて笈を下し、中から酒肴三味線を出しておれに渡すと、チヤ／＼チヤン／＼と彈き出す

から、出日公と圖武公が、エ、引　山できつころがした松の木根ッ子の様でもと唄ふ。安波公が例の踊、跡の者も見物に交つて居て、直にそこへ踊り込んで大酒盛となるといふやつだ。」野呂「ヤきてれつきてれつ妙計々々、サアノヽ些とも早く押しださう。」アバ「そんならマア衣裳や道具を早く工面しよう。」左「眼公てえぎながら例の所へ行つて借りて來て下ッし。（是れは茶番一式の損料屋なり。）入用は今いふ通りだ、順禮の杖のも大小も金貝がいいぜ。しかし笈摺の背中に、千秋萬歳や大入叶では中だノ。正うつしで行きてえもんだ。」卒「それにはいいさんだんが有りやす。どうせ六部の庵も、ほんものでなければ諸色が這入るめえから、山崎町へ行つて、六部の形とおひずるは借りてこよう。」（是れも又かの地に出來合の順禮六部の損料有り。）

左「そんならさうしてくんねえ、ア、併しじゝむだらうナ。」卒「じゝむも攻東も一所に書いて有るぜ。」

左「エ、わるくしやれずと、千手觀音の居さうもねえのを、はやく借りて來さつし。」ト、卒八、眼七をせき立てておひ出し、

左「サアそれできまつたが、なんぼ出たらめでも、ちつとはきつかけを付けて置かう。」ト、是れより稽古にかゝる。

左「サア出日公と俺は、ほどのいい所に居る。そこでアバ公も同じく、是れサマア立たッせえナ。さうさう、そこいらがいい。そこでキッカケは圖武が山の下で鉦を叩く音を相圖に、たば公がアバ公をついて、順禮殺しの火を一ッと、そばへ來る。」アバ「ム、よしノヽ。」左卒「エ、よしノヽおやアねえ、爰へ來さつしナいけするいゝ。」ごん「たば公がアバこを吞んだやア、たばるとさぞこ入れがいるの。」左「エ

エしやれるなえじやまになるわ、サアたば公たたねえか。」のろ「ハ、、、、やつぱりたばこうだア。」アバ「すイ／＼。コリヤ／＼順禮、びろうながら火をひとつおかしやれ。」め「サアそれにびろうがいるものか。」左「イイサ／＼そこで、トすひ付ける笠の内をのぞいて、ヤア珍らしや鐵目百味、汝を尋ぬる其の爲に、いく歳月の艱難苦勞、倶不戴天の父のあだ、サアじんじやうに勝負々々。サア出目公も何とかいはつし。」出「オイエ、引、辨財天の御由來、くはしく尋ぬる母の敵。」左「コレ〳〵どうも、さうしやれて許り居てはいけねえわ、身にしみさつしナ。そしておれが父の仇といふのに、母の敵といふ事もねえ。」出「おめへが父といふから、同じいひ草も智慧がねえから、そげてやる氣だ。」左「イヤイヤそんな智慧は出さねえがいい。そしてむづかしい事をいはずと、あたりめへ、うききの龜うどんげの花、爰で逢うたは天のあたへとかなんとか、紋切形でいいワサ。」出「ム、、うどんげの花の山とやつてはどうだらう。」左「何々しやれたがつちやア悪い／＼。」卒「すイ／＼そんなら、うどんげの花うききの龜、爰で逢うのが百年目。」のろ「どうで此方は夜ばたらき、二世より先へ命がけ。」ごん「戀のぬすみとたれしら波、ばんにやいのと合ひ言葉。」左「イヤモウどうもならねえぞ。此の又べらぼうが、何だいやみナざまをしやアがるわ、マアちつと邪魔をせずに下ツし。それでなくつてせへしやれたがツていけねえ、マア／＼てえげえにして置かう。サアアバ公、ちつとやツて見さつし。」アバ「へ

ンおれか〳〵ヨシ、かうなるからは名乗りて聞かさんよつく聞け、われこそは桓武天皇無體の強陰。」

左「コレサ〳〵さう時代ではわりい。そして狂言の氣をはなれていかねえと、まじめらしくねえ。ムムかうするがいい、あらたまると角が立つから、やつぱり不斷喧嘩をする心もちでやつて見さつし、おれはマア見物になるから二人でやんな。」蚩「ム、それだと大きに仕いい、そんならアバ公やるぜ。」

アバ「オイよし〳〵、順禮殿火を一ッかして下せえ。」蚩「ハイ〳〵ト、笠の内をのぞいたは、ト思入あツて、オヤ手前は鳥目百味だナ、七年以前におれが親を打つて驅落をして、行方が知れなんだが、いい所で逢つた。モウこちとらが目にかゝッては、貧乏ゆすりもさせねえぞ、覺悟をして勝負をしろ。」

アバ「ナンノ此の野郎めえ、うぬらが二人や三人來たとつて屁とも思ふものか。そして己等が親父が、するい事許りしやアがつたから、殺したのだわえ、それがわりイか。」蚩「ム、わりイはエコレエ、、親をころされてだまつてるちやア外聞わりいわえ。なんでもうぬを殺さねえぢやア、面がよごれらア馬鹿面あづまつ子。」左「コウ〳〵どういへばかういふと、それでも又あんまりだ。捏をじれッてえ事だぞ。だうりで茶番のたんびにいたゞく筈だア。いい〳〵、てえけえにして置かッし。俺がいい樣にごたついて仕舞ふから、あんまり口數のすぎねえやうにしさつし。そこで又、タテだが、それもバタバタ〳〵ヤどこつこいト、見えになつてはよくねえぜ。筋はせんどの通りで、間のギックリ〳〵なしだ

よ。」アバ出目「オイよし〳〵。」出「ヅブ公、その采配と、しんぼの棒をもつて来てくんナ。アバ公は両刀だぜ。」アバ「承知々々、おれには采配をくだツし。ナツトきた〳〵、サアやるべいさ。」出「出目公は左へ廻んナ。」出「ヘン御開帳のやうだ。」幸「しやれるナ〳〵。サア陣営に勝負々々。」アバ「心得たりと。」アバ「たりとはいらねえ、只心得たサ。ソレぬき合はせた、きうきた、きう、きう、きう〳〵る、味い〳〵。それ裾をはらつた、ヨツとんで後へ、ソレとん〳〵〳〵〳〵。」ト、跡すさりするはずみに、火鉢へつかへ、尻もちをつけば、前へ懸けてありし土瓶をこはし、ジウ〳〵プウ〳〵ト、一面に灰をふき立つる。アバ太郎は左徳にて[illegible]の尻のほねをつよく〳〵いたみ、急に立ち上る事も出来ず、火鉢へ腰を懸けたるまゝ、灰まぶれまつしろになり、タ、、、、。」ト此の時幸八は笈を背負ひかへりしが、此の態を見てきもをつぶし、幸「すや〳〵こりやアどうしたのだ大へん〳〵、行き暮したる旅の修行者、此の大雪になんぎしこく。」ごん「エ、しやれ所ではねえ、マア早く来てくだツし。」みな〳〵「アバ公尻が焼けるわ、早くわきへのかねえか。」ト、引き立てられ顔をしかめながら、やう〳〵縁端へ出る。ごん「そこへ坐らツし。オイその采配を変へくんナ。サア目をしつかりと瞑つて居たり。」ごん「ヤレ〳〵目も鼻も知れなくなつた。サアいゝ〳〵こつちへ来さつし。」左次「マア着物を着替へさつし。尻はびしよぬれだ。」ごん「ナニサ此の着物を背負はせて、町内を一遍まはらせるがいい。」幸「寐小便も此の齢までやらねえから、モウ直るめえよ。」アバ「ア、引いてえぞ〳〵、まことに目がくらんだ。なんと左次さん、もうちつといたくねえ趣向は有るめえか。」左「ハ、、、、何サ飛鳥山には箱火鉢がねえからいい。」ト、みな〳〵

大笑ひになり、此の時眼にも諸色取りそろへてかへり　眼「サア〳〵道具はそろつた。コウ今道で八ツを聞いたぜ、仕組がよくば出かけねえか。人の出さかりでなくつてはをかしくねえぜ。」左「サウ〳〵稽古もあらましすぢが通ッたらいいとして、出掛ける仕度にせう。ドレ眼公衣裳を見せナ、ム、いい奇妙々々。黒羽二重朱鞘の大小編笠ト、サアアバ公渡すぜ。こつちは杖許りだ。サア〳〵著替へた〳〵。」是れより役がゝりのもの思ひ思ひのこしらへ出來て　左「先づ是れで仕度はいいが、チト腹がわりイナ。」眼「さうさ今日は珍らしくマダ始めねえから、物わすれをしたやうだ。何ぞ肴をこしらへようか。」左「何々そんなことをしては居られねえ。イヤしかし辨當がいるナ、眼公そこらへ行つて見つくろッて來てくれねえか、兩もちひに鮓なんぞもいいぜ。」アバ「ア、まづい物屋のにしめもおそれるス。そして鮓もこひねがはくは長門といきてえナ。」眼「長門鮓とはどこだ。」アバ「馬喰町ヨ。此の男もアノすしやを知らねえか。」眼「なんほおれが物知りだとつて、どうして爰いらまで知れるものか。コレすしの評判十八丁といふワサ。」左「わるくごたつくぜ、何でもいいから早くはたらいて來さつし。そして笈の中へみんナ詰めて、圖武州は一足跡から出かけさつし。おらア茶碗で二三杯ひつかけて先へ出よう、ナア出目公。」出「ム、それがいい〳〵、マアおれから始めよう。モウバヽびがのど〳〵する。」アバ「ヤレ〳〵いぢのきたねえ男だぞ、そんならてんでんにしよう、待ち遠だ。サア是れへついでくんナ。」左「そりやアいいが順禮歌を承知か。」出「オット

氣をつかひたまふナ。例の美音で女どもをまよはせてくれべい。ふだらくやきし打つ波はおのれのゐこ、
アバ「ムヽくだけて今朝はおいらをこそおもへか、へヽ紋切形だの。」卒「ナア/\アバ公出かけねえか。」
アバ「オイ/\モウ一ツついでくんナ。」出「いやもうおめへきたないおきなダゾ。そんなら俺もモウ一杯やらう。」ト、まけずおとらず底ぬけ上戸、左次郎はやう/\たち出さい　卒「ナア/\遅いぜ/\、今からさう呑んでつまるものか。是れからが大役だばか/\しい。」ト、小言たら/\手を取つて引き出され、アバ太郎は編笠ふかく打ち被り、出目介、左次郎もおいだするをふところに入れ、背笠に顔をかくし、野家をしのび出て行く。引違ひ、て眼七歸り來り、眼「サア肴ものつぱに出來た、ナント重づめはきれいだらう。」卒八、野呂松「ドレ/\。」
眼「オットこれからごらうじろ。」卒「ナンダナまだ見えもしねえ。喰はうといやアしめえし、がうぎと用心をするぜ。」野呂「すみの所に有る黄いろな物はなんだ。」眼「ドレ。」野「是れヨ。」がん「オット其の手はくはねえト。」ごん「その手はくはずば此の足を喰はう。」ト、さくら煮をしてやられ、がん「エヽぶじやれるナエ。きたねえ笈から出すのだから、きれい事でなくつてはいけねえから、折角骨を折つて詰めさせたに、チヨッだいなしにした。」卒「ドレ/\ほんにナア、おれが直してやらう。」眼「いんやたのむめえ。モウ/\ぶつさうだ、早く笈の中へ納めやう。サア/\地藏さま、御窮屈ながらひろい所に寢ておいでなさい。」ト、笈佛を引き出し、三味線酒肴諸色を詰め込み、眼鏡をぴんとおろし、がん「サア是れで安心だ。ツブ様かぎをわたすぜ。」
ツブ「オイよし/\。ア、併しおれが一ばん難儀な役だナ、行きつくまでの道中がつまらねえざまだ。

何でも酒の氣をはなれては出來ねえ、モウ二三杯やりつけようか。」 眼「エ、うるさく呑みたがるぞ、マヤ草鞋でもはきねえ。其の内かんを直してやるから。」 ヅブ「ム、そんなら爰へもつてきて下ツし。」 ト、上り端へ出て草鞋をはく。 ごん七「ソレ覚ヨ、ちつと重いぜ。」 幸「サア／＼かんが出來た、呑まツし／＼。」 ヅブ「ハイハイ是れは御報謝でござります。どうぞちつと大きい物でお願ひ申します。」 野呂「コレサ／＼いいかけんに呑んで出かけねえか。先へ行つたておひが待遠だらう。」 眼「さう／＼おいらたちも跡を片付けて出かけよう／＼。」 ト、追ひたてられて闘武六はことなる形もことともせず、酒氣に乘じて出て行く。

初編　二之卷

踏のばく惜し踏まねば行かむかたちなし心つくしの山櫻かな

と赤染右衛門は詠まれけん、花の山里多かる中に、わけて江都の飛鳥山、植ゑる人もうゑる人花盛り、吉野初瀬もおよびなき、その山ぶみも遠近より、うちそひ競ふ道草の花見連中、霞と共に引きつゞく、春の日あしや足元も、よろめく山のつゞらをり、酒のとがとも岩根ふみ、たどる方への出茶屋には、きせんをえらばぬとしも閙ひ、花より團子の下戸上戸、かの酔狂の闘武六は、六部の姿に出立ち左次郎が宿を出で、池の端から谷中の方へいそぎ行く。最早都家も程すぎしと心落ちつき、少し稽古の心に

て殊勝気に鉦打ち鳴らし、ヅブ「なむあみだアぶつ、なアまアだアぶつ〳〵〳〵。」ばア様六十余りの「アイ六部さん進ぜませう。」ト、いはれて圖武六びつくりせしが、爰ぞ大事とほく〳〵より膝をすゝめ、ヘイ〳〵是れははや有りがたうござります。ヘイヘイ是れははや〳〵。」ト、わるていねいに銭をいたゞき、行きすぎるを、ばアさま縁かけ、ばア「コレ六部さん、報謝返しに廻向をすじしなさらねえ。」ト、とがめられて又びつくり、ハツと思へど胸の押しづよ、盆から酒にて、ツブ「今いたす所でござります。」ト口にはいへど、何といはん彼といはんと、目をねむり口許むにや〳〵して、むしやうに鉦をチヤンチヤン〳〵〳〵〳〵〳〵。暫くしてやう〳〵心当りの出来しにや、ツブ「エヘン如是畜生発菩提心、往生安楽国なアまアだア〳〵〳〵。」ト、暫くして目を開いて見れば、ばア様は見えず、ほつとひと息、ツブ「やれ〳〵怖ろしいめに逢うた。モウ〳〵念仏は申さねえ。」ト、つぶやきつぶやき急ぎ行く後より、「もし〳〵六部どん進ぜませう。」圖武六ぎよつとせしが、目も付けぬふりにて足早に行きすぎるを、うしろより笠をしつかり押へてうごかさず。ヅブ「だれだ〳〵、コレたふれるわえ。辛公か野の松かふざけるナ〳〵。」ト、しばらく引き合ひしが、殊の外せき込みし躰にて、判八「おれが見附けては一寸も先へはやらねえぞ。いやはや〳〵、貴様はこなたは、おのれは〳〵〳〵。」此の躰におどろきよく〳〵見れば、皆愛の判八といふ親父なり。今日上野へ参詣しついでながら圖武六が宿へ立ち寄りし所、母女房、圖武六が身持不始末の咄、又此の程四五日も呑みつゞけ、宿へはより付かぬなど、よき折から意見いたしくれよと頼まれ、其の帰るさ異なるなりを見るよりも、正直強情のかたおやぢ、何かは少しもこらふべき、かなつんぼのどら声をふりたて、判八「コレ、何がすまぬ事が有ッて、お袋や女房を捨てて六部に出るのだ。それもよん所ねえ事なら、ナゼ相談〳〵で出ねえのだ。役にたたすながらも、此方が居ねえ日には、俺ひとり厄介を背負ひ込みだわ。」圖武六はいひわけせんと思へど、判八はかなつんぼなれば、大きにてこずり、いつも仕形にて咄をする故、笠仏へ指をさしかむりをふり、是れはじやうだんだ、花見に行くといふ思入にて、鼻と目へ指さしする。ヅブ「ナ、

ダ六部に出るもいやだが、フゥ鼻と目が役にたたねえ。コレそれもいはねえ事か、一昨年のよこねの時しつかりと療治をして、一歳も毒だてをしろと、口のすくなるほどに言つても、二十日もたたぬ内にモウ大酒をくらつて悪物喰ひ、たツた一人のお袋が、泣いたり笑つたり苦勞するを、屁とも思はぬみんナ罰だわ。」ヅブ「ナニサさうではねえわ。」ト、又くふうして歯をむきだして、指にてつゝきて見せ、又笈の中は酒や辨當だといふ氣どりにて、笈へ四文錢一文出し、うらの波へ指さし、歯波に行くとをしへ、ゆびさし呑み喰ひするまねをして見せる。判「ム、ナンダ歯、四文。ム、橋本町へ這入ツて此の笈で喰ふ氣だ。いやはやこなたも生若いざまをして、ふがひねえ男ダゾ。コレ親にゆづられた家業でさへ、なまけ廻ツて喰へねえものが、一文貰ひで親や女房が喰はせられるものか。」ヅブ「エ、こじれツてえ、さうでもねえわ。そんならモウ仕形がねえ、此の内を明けて見せよう。」ト、眼七に受けとりし笈の鍵を尋ねしが、いつかふり落せしと見え一向知れず、いかゞはせんとうろたへながら、きせるの吸口にて錠をこじ廻して居る。此の押し合ひの内往來の人一人二人たち聞きせしが、だんだん集まり、何かは知らず六部と親父と問答をすると言ひふらせば、近邊の人我もとはせ集まり、暫時の間に黒山のごとく人立ちせしかば、判「コレ此の通り人立ちがして外聞がわりい。マアマアおれと一所に内へけへらツせえ。何も彼もうちへ行つて、わけを付けるがいい。」岡武六も尤もとは思へど、此又飛鳥山の手筈も相違する事故、ヅブ「先へ行きなせえ、跡からすぐ行く。」ト、手まねをすれば、判「イヤイヤさうはならぬ。貴樣先へたたツせえ、おれが跡からついて行く。」と、いきまき荒く、中々合點するけしきなければ、彼是長居するほど外聞あしく、心ならずも元來し道へ立ちかへる。判八はうしろより笈のすみへ手をかけながら、跡へつゞいてあゆみくる。是れより岡武六が宿へ歸れば、母女房はいふもさらなり、隣家の人且家主まで集まり來り、異なるさまに大きに驚き、

家内大もんちやくとなりけれど、圓武六は米齋の手管問もせんと、色々いひくるめ此のまゝ出て行かんと、花見の連中をさらまし言譯すれど、多分にいひすくめられ取りおさへてうごかさねば、傍の人を引き立て、中の仕込みを見せてくはしく出し向かせ、やう〳〵みな〳〵得心の色見えければ、はや体の目の出しと、いへど、皆その氣味、亭主の理窟、糶家の意見　女房の懇敬、とて大わらひと成るところは、米齋は寂滅人間に、飛鳥の花はいかになりけん。圓武六も御輿を居ゑて、有り合ふ酒肴とり出して、皆それ〳〵に酒をのべ、心ならずも酒酌みか　左次郎「サア公等ここいらかこれかはず。斯くとも知らず彼の三人は日暮あたりのうら道にて、それ〴〵に支度を直し、て先へ行かッし。そして美しさうな幕張を見て置きねえ。何でも勝負の場所は、女澤山の所と究めやう。」　アハ「承知〳〵、女の目利ならヘン外の者には出來めえ。」　出目「ヨシ〳〵いゝ〳〵、轉ばねえやうに早く行かッし。」　ト、是れより別れて出目助、左次郎は引き下つて、ぶらぶら日暮をぶら付き、道灌山をたどりながら、　左次郎「サア出目州何だかをかしな足取だが、あんまり呑み過ぎたやうだぜ、例のタテはおぼつかねえもんだノ。」　出目「ナンのおれが歩行ふ形よりおめへがむつかしさうだア。」　左「馬鹿をいはつし、俺に間違ひが有る物か。アノたて計りは、安波公がよく呑込んで居るヨ。どうも足下がけんのんでならねえ。」　出目「ナニサ案じなさんな、美味くやつて見せよう。併しヤどつこいと見えに成ッて、後の鳴物がかはらうといふ所がかゝり、少とどつちる所が有るやうだ。」　左「ウヽ、雙方から打ち込むと、眞が兩刀で請ける。」　ト、少しのり氣になり杖にてあしらふ。　出目「ソラ此方の刀を引く。」　左「おれも引ッぱづして又打ち込む。」　ト、同じく杖にて眞似をする。　出目「アハ公がおれが方へたゝみかけて來る。トン〳〵〳〵　出目「足さがつて平居て受ける。」　左「所をおれが後から打ち込むを、安波公が左の刀を逆手にうしろで受け留める。」　ト、だん〳〵はずみになりたる所へ、西國邊の御家中と見え、二人連いか物作りの侍、此の後へ來かゝる。こち

らは一向心づかず、出「そこでアバ公が鼻の先へひらり。」ト、かの侍の鼻先へによいと杖をつき出せば、侍はびつくりしながら、杖をしつかりおさへ、筑五郎「コリャ何しをる、慮外千萬な奴。」筑四郎「此奴、乞食の身分の以て、武士を嘲弄いたしをる。」出「エ、是れは御免なせえ、大きに麁相いたしました。」筑五「ヤア此奴、今さら麁相ちうて尻込みするとて、其のぶんに致さうか。最初此の棒を突き付けをる砌、アバこが鼻面へちうて、我等が面へ突きかけ居つたでねえか。アバこなぞと、秀句の如云ひをつても、矢張我等が面のミツチャのことは承知してをるわ。」筑四「思へば〳〵大膽なる不敵奴、箇樣なる奴原生け置いては、のち〳〵何事を仕出づるも計られぬ。幸ひ此の頃求めし此の新身、筑五郎殿一人づゝ、試みませう。後日御咎めの受くるばつてん、慮外者を手討に致すは武士の常、別に六かしい事はござらぬ。」ト、いはれて兩人彼の侍を見れば、大あばたの鬼髭はえたる大奴、鐵砲の如き差添に鞘巻の無ざりのだんびら、眞田卷の柄に手をかけ、するどき眼に角立てて白眼み付けられ、兩人は死人のごとく眞つ青になり、土へ天窗をすり付け〳〵、左次郎「イヤ御立腹は御尤も至極でござりますが、全く是れは間違ひで、あなた樣方の御氣にさはりましたのでござります。私ども連の内に、安波太郎と申すものが御座りますゆゑ、其のものと少し稽古のことがござりまして、只今私とその仕形噺をいたします所、餘りはなしに實が入りまして、あなた樣方の御通行とも心付きませず、麁相仕りましてござります。ヘイ何分御慈悲に御ゆるし下さります樣にお願ひ申し上げます。」出「左樣〳〵どこう奉りまして、お武士樣方へ向ひ奉りまして、嘲弄仕りまする樣ナ心はけつして御ざりません。

ハイ實に間違へて御ざりますから、どうぞおはら立ちを納め奉りますやうに願ひ奉ります」筑四郎は兩人が申すこと聞きゐたりしが、筑四「イヤ筑五郎殿、先刻より此奴等が言葉のはしに、稽古の事ども有りをると申せば、察する所物ごし關東ものと見ゆる所、棒を心がくるを見れば、總州香取邊の者可有、我等等は今劍法を磨く身分なれば、幸への事、少したりとも兵術の心得ある者を、やみ／＼手討ちに致すも不便なれば、爰元にて仕合致して遣はさう。萬一我等等未熟にて打ち負けば、最前の慮外のゆるして遣はさう。又打ち勝つに於ては、元より眞劍たゝみかけて新身のためし、筑五殿、此の儀はいかゞでござらう。」筑五「宜こそ思やア付かれた。成程只今まで試しをつたは死骸許りで、張合のない事なれども、此奴等が飛びはねをる所を、見事すつぱ／＼切り下ぐるは、えゝ、手定めたい。然らば、支度致さう」と、下緒をはづし早だすき、こひ口くつろげ左右よりつめかけ、筑四「サ、早々立ち上りをらぬか。兵術の心がけをると見た故、乞食なれども心根を不便に存じ、武士が相手に成ッて遣はさうちふに如何立合へをらぬ。」筑五「但し此の儘打ち掛けようか。」ト、雙方よりつめよせられ、左次郎も出目助も魂は中天へ飛び上り、死人のごとく口びるまでつちけ色に成り、酒氣は左次郎一向覺めて仕舞ひガタ／＼ふるひ、引ッはづして逃けんにも、あしこしなえて立ち上ることさへ出來ずはひずりながら、左次郎「モシ／＼失禮ながら、それは大きにお目鏡違ひでござります。どういたしまして私どもが、劍術なんぞ存じます者では御座りませぬ。また有樣は實の順禮でもござりませぬ。よん所ないことで、身をやつしましてをるので御座ります。それもたつてお尋ねなら申し上げ

ませうが、とてもまことゝは思しめしますまい。只御慈悲に命をおたすけ下さりまし。」出目助は大粒なる涙をほろほろ落し歯の根もあはず。出目「ハイ此の者が、申す通り、どう奉りまして、お武士様に、手むかひ、奉ります、ものか。わゝ私は、し舌が、ちゞんで物が、いはれ、ません。ハイ拜みの、後生様で御座ります。どうぞ、命許りは御たすけ遊ばさせられ、下さるびやう、エ、ぞんじ奉ります。」筑五「ヤア今さら腑甲斐ねえたは言いはずと勝負いたせ。此方覺悟極めてをるわ。」筑四「おのれらわりい料簡也、縦へ勝負不致共、此の儘ゆるす事罷いならん。さすれば勝負は時の運次第、仕勝ちをッていさぎよく、遁るが能えでにやァか。彼是日間取る内往來の人立ちがしをるわ。」筑五「エ・早々立ち合ァならぬか。」ト、出目助が杖を取ッて、鼻の先へ突き付ける拍子に、杖に仕込みし金貝張、二三寸ずらりと抜ければ、左次郎はハットおどろき、是れを見せてはなほ〳〵ねずくりむづかしからんと手早く〳〵しつくり納むるを、筑四郎は目早く見付け、筑四「ヤレ筑五々々、ざんじ控ァさつしやれ。先刻より此奴等の爲體がてんゆかぬ事ども多き中にも、只今忍劍の所持をいたすを見受けましたが、何さま倶不戴天の族かと存ずるが、貴公如何思はるる。」筑五「なるほど貴所の賢察の通り左様に存ずる。」少し小聲になり「コリャ順禮敵どもを尋ねをる身の上か。」ト、いよれこ左次郎しすましたりと心に喜び、緞の錦士手場の思ひ入れになり、左次「ハかく御見咎めに相成りましたる上は是非も御座りませぬ。御推量の通り大望の有る者どもで御座ります。それ故命がをしうござります。どうぞこのまゝおゆるしなされて下さりまし。」出目「ヘイ私も左様で御座ります。」筑四郎は横手を打ち、筑四「テモ扨も左様と

もぞんぜず纔かの怒を根にいたし、最前よりの過言ゆるさつしやい。」 筑九「いかさま大功には、細許の顧ずと、大望有る身は堪忍が大事ヂヤ。先刻よりの過言今さら後悔いたす。」 ト、風なみ直れば、兩人

出目「ヘイ私共は生まれ付いて人に負ける事が嫌ひで、今まで五分でも引けをとつた事はござりませぬけれど、どうも敵を打ちますには、成丈あやまつてをりませぬと、どうもそこが。」 ト、くだらぬ事をならべ立てるを、左次郎はうち消し、目くばせにて出目助をにらみつけ、 左次「イヤモウ先程の慮外をお許し下されますれば、矢張親どものかげゑに付きそひ、助けくれますかと存じられます。」 ト、そら涙をこぼし額へ袖をあて、「何時を限りと定めもなきうきかんなん、其の上めぐり逢ひましても、萬一返り打ちになりませうかも知れません。」 ト、しを〳〵とする。兩人の侍も、しきりに涙をもよほし、

筑四「何サ〳〵左様の不吉を申すものでねえ。孝子には天の助けもふが有る。しかし其の相手もふは手強いやつか。」 左次「左様で御座ります。同じ家中に名を得たる劍術師範の、ヘイ名はまうしにくう御座ります。」 筑四「我程々々尤もした事ぢや。承るにも及ばぬが、ア、何にもいたせ、萬端何角と辛勞の段察しをる、思はずも眼水の催した。ハ、、、サ、手を上げられい。本望とげられた其の上は、尚又いつかどの御出世でござらう。我々とても同じ仕官の身、斯く承る上は高下はござらぬ、サ、平に〳〵。」 ト言葉も直りていねいの挨拶に、出目助はづにのり又さし出る。 出目「ヘイ〳〵、何、是れが勝手でござりまする。モウ身を落しますからは、昔の氣を出しては行けません。たとひ内に金の茶釜が有ると申しました所がはじまら

ねえ理窟でござります。」左次郎は出目助が口を出すたびにひや〳〵して、又にらみつけ、長居をしては化の皮があらはれんと、しきりにけんのんに思ひ、左次「是れは大きに御遊山の、お邪魔を致しました。最早おわかれ申しませう。」筑四「成るほど、この方はともかくも、人目しのばるゝおの〳〵方、人立ち致しなるで、さぞ心配でござらう。ア、名残のをしまるれども、是非に及ばぬおわかれ申さう。」筑五「武道を磨く我々計らずもかやうなる孝子に行き逢ふも武門のみやうが、今日は吉辰ばいの、イヤ隨分とも、身を大切に本懐のたッしめされ。御縁もあらば重ねて貴顔の得ませう。」ト、殘り多氣に見返り〳〵わかれ行く。げにいさお強きは武の表、裏のなさけぞ深かりしと跡にふたりはぬくめ鳥の、曉を待ち得し心地して、五色のためいきをホットとつき、出目「ヤレヤレとんださいなんに逢つたナウ。」左次「災難どころか命を拾ッたア。コレちつと氣を付けさつし。どうも麁相ッかしいから此樣な目に逢ふノダ。どうしてまたアノ侍の鼻面へ、丁度杖を突懸けたらう。おらア向うをむいて居たから、後から人の來るのも知れねえ筈だけれども、足下はアノ時こつちをむいて居ながら、侍の來るのが知れねえ事も有るめえに、ばか〳〵しい。」出目「さうサどうして見付けなんだかり、どうもおらア難事にかゝると、夢中に成つてならねえ。」左次「ナンの難事も大層ダア、まだしも顔へ突つかけて、疵でも付けねえで仕合、アノいきほひで疵でもついて見たがいい、物いはずひつこ抜いて、やられる所だ、ナ、おそろしい、思ッてもぞつとするわ。」出目「ホンニおそろしい事さナウ。しかしアノ侍もあんまり短氣な手合だ。こつちもわるさは惡いけれども、殺すほどの事も

有るめえぢやアねえか。おんなじ此方連だといつて、犬を切ッたやうにもいくめえす。こつちが死ねば先も解死人に出るだらう。」 左次「とんだ事をいふ、そこは武士の威光だわ。此方がタァといつて仕舞ふと、死人に口なしよ。いいやうに理を付けて、慮外者ゆゑ手打に致した、此の段御屆け申す、ハイ左様ならぐらゐで濟んで仕舞ふワサ。それだから町人は割が悪いワ。」 出目「馬鹿ア言ひねえ。町人だとつて、茄子や大根を切る様に、サウ手輕く濟むものか。こつちに荒神様も大家様もあらア。又急度さういふ筋のものなら、屋敷方へ出入の職人商人、其の外武士を相手にする商賣は皆馬鹿もの、往來をするにも向うから侍が來ると、とほり過ぎるうち軒下へ屈んで、待つていねえければならねえ。どういふ間違ひで麁相しめえ物ぢやアねえ、ばか〳〵しい。」 左次「ナンノ今になつて、其の様にいきむ事はねえ。さつき其の通りいへばよかつた。漸う舌が廻ッて來たナ。」 出目「ナニサいつもだと、足でもすくつてはふり出して、ぶち放しといふ所だけれど、何分茶番の事が氣にかゝつて、今度で騒動おこすと、モウ飛鳥山もチヤン〳〵に成ると思つたから、胸をさすつてこらへて居たのダ。」 [illegible]「このべらぼう段々つよくなるナ。そんならナゼさつき大粒の涙をこぼして泣いた。」 出目「おらアへもベソベソ泣いタア。」 左次「おらがのは傾城泣きといふので、目へ袖を押し付けてこすりちらすと、目縁が赤くうるんでくるわ。そこで又せりふ廻しでぐつとうれへがきいて、あれから侍の氣がそれて來た

らう。足下は又手ばなしでホタリ〳〵、一ツ粒十六文位な涙を落したり、鼻の先へ綱渡りをさせて、鼻の中ばへしばらくたもつ、名づけて野田の下り藤といふ涙をどうしてこぼした。」出田「ヘンおれも傾城泣きヨ。おめへの様にするのは昔の傾城泣きで、目のふちへつばを付けたり、のみかけて有る茶を付けたりして、袖でこするなんぞは、腮で褌をしめた時分の客人でなければ眞受にはしねえ。今時は手ばなしで泣いて見せねえでは得心しねえワナ。」左次「それだといつてうそに涙が出るものか。」出田「そこに秘傳が有るのサ。」左次「ハアテナ本たうか。」出田「空言も眞言もいるものか、現に今おれがのを見たぢやねえか。」左次「ハアそんなら今泣いたのはうそか。」出田「知れし御事サ。」左次「イヤそりやア妙術だ。さつそくお弟子入。」出田「ヘンそれだから人を破家に許りしなさんなよ、何かしらちつとは能の有る物だ。今三津五郎でも幸四郎でも、愁歎に本たうに涙をこぼすのはみんナおれが傳授だ。」左次「イヤ又人がちつと受けると、御大相なほらを吹くからどうもならねえ。」出田「ソレさう思ふからどうもならねえ。法事といふものは理詰なもので、第一信仰がなくツては教へてもやくにたたねえ。」左次「フウ成程さういふ譯も有るだらう。そんならまじめにどうぞ教へて下ツし。」出田「ム、そんなら教へようが、何も別にむづかしい事はねえ。マア女郎でいつて見ようなら、今夜此の客に腹をたたせて歸しては、約束の夜具も間違ふとかいふとき、是非々々一番ぐんにやりとさせようと思ふと、マヅ

ぐつと氣を落し付け、うつむいてふさいで居ながら、我が親か兄弟の死んだ時の事、又遺言なぞを思ひ出したり、お袋の病氣で人參の代に賣られた時の事なんぞしんに思ひめぐらし、十分悲へを以て相手が腹を立ッてゐるを、エ、うらめしいお心ダ、なんぞと胸の内でいろ／＼考へながら、よわ／＼と挨拶をして見ねえ、そりやア手ばなしに涙の一升や一升五合出すぶんは、十五夜に絲瓜の水を取るより心安イ。」 左次「アハ、、、、おほ方其のくらゐな事だらうと思ッた。」 出目「ナゼ／＼。」 左次「ナゼといつて馬鹿々々しい。そりやア成程女郎なんぞは其のくらゐな事も有らうが、よくつもつて見さつし、足下なんぞが親の死んだ時の事を思ひ出したぐらゐで、涙を出す風か。コレ一昨歳親父が死んで葬禮の時、其の面にもはぢず、三津五郎の身振で燒香して、始終裃のヒダを内から手を入れて崩してすわつたり、かたをギス／＼しながら膝で歩行いたり、いやはやおらア冷汗を流して見て居たぜ。死にたてのほや／＼でさへ、其のくらゐのべらぼうだものを、今時分思ひ出したとつて、そりやア手めへが出す氣でも涙が不承知だア。なんでも今こぼした涙は地金だ／＼、がまんを言ふな／＼。ハ、、、ハ。それはいいが、物云ひはちつと氣を付けさつし、むだッ口やへらず口はわる達者だが、少しまじめな事は無體なもんだぜ。何だらう、へイ左樣奉りまして此樣奉ります、お腹立を納め奉りますッ。ヘン大山へ參る山伏の樣だ。」 出目「さういひなさんナ。あゝいふこけは、崇めさへすれば嬉しがる物

だ。」左次「いかに祟めるとッて、どう致しましてと云ふ所へ、ぬしがいふのは、どう奉りましてと言ふからわけがわからねえのだ、せめて仕りますならいいに。」出目「祟めるから奉ると云ふのよ。チョットいふにも、祟め奉つて置くといふぢやねえか。あがめ仕るともあがめ致すともいふ人はねえ。」左次「エ、口のへらねえべらぼうだ、なんとでもぬかせ。そりやアさうと大きにおそくなつた、安波公がさぞうろ〳〵して待つて居るだらう。」出目「さうヨ、ちつときう出さう。圖武六や外の奴等はどうしたらう。」左次「ナニ是れも先に成つたノサ。アレ〳〵向うから來るのは、モウから樽にして歸つてくるぜ。」出目「ホンニナア、いい歳增が見えるナ。オヽ〳〵醉つたわ〳〵、どうも女はよろける程醉つては中ダヨ。何でも櫻色で、目の緣がすこし、トロリと來たくらゐの所が千兩だ。」左次「跡の新造は足下の誂へどほりダゼ。」出目「ム、〳〵こりやアたまらねえ〳〵。」左次「ナンダ〳〵見えざるナエ。いくら衣紋を直したとつて、笈摺に柄杓ではたまらねえ。よさ〳〵。」出目「チョッいめえましいナア。モウ〳〵こんナくはだてには一味しねえゾ、馬鹿々々しい。人は花見に出るには、借著をしても見えばるのに、此のざまは何事だらう。」左「なんのふさバヽ事はねえ。著物はこのやうに立派にも出來ようが、頰の皮まで著替へられしやアしねえわ。」出目「さういひなさんな。馬士にも衣裳だア。」我が形を見て、「へゝ公家にも綴では、納まらねえ。」左次「所を馬士にも綴だものを、何分納め奉られめえ、

ハヽヽヽヽ」　世話やき「をかしくもねへ事を笑ふぜへ」ト、お猪をさす。一同「ハヽヽヽヽ」ト道中で見えばりに来はしねへ、飛鳥山ぢやアなし」……「コレサ／＼」ト、是より往来の花見人をさて、しりなしに、たいこもちの者がおこなひのかを語りもの、心得たる者をふし、男女は酒気を帯て、思ひ／＼に安波太郎是と、今を盛りの花山にいたり、無向の場所を定ておかしなことを好とぐうたら、居並びて、余念ない有様の前、貴賤老若むれつどひに、さんざめかして飛鳥山の群集も見歩くなど、花に心人をなき有様を見て、安波太郎は独狂言の役者の如く茶番の事も打忘れ、目を付くれば、何の心もなく、心いたり／＼思ひ、殊に女中はいつそ気味悪くじろり／＼と見歩くを、常八は小声に何といふよおよすがなが、あちこちあちら／＼する所へ、皆に気がつきし四人の者は、

「ぎつす、安波公おだ、／＼。」アバ太郎は有頂天にて　安「ドイ／＼みんな早かつたナ。イヤきてれツ／＼、安波さん有卦に入り、敵役替ッて色事師となる、シャヽ／＼。」　補「儀兵衛を仕ふの出がおかしい……コレどうした、狐にでも化されはしねへか」　骨「何を、なぜ、マア向うの茶屋へでもいつて休まふ。安波公も一所に歩行ねへ、連のふりせへしねへければいい」　「ム、そふしよふ。おれもすツとうけて貰ひてへ事が有る」　なに「何だか無性にたれかゝりそうで気味がわりい。おれはでも買つて来よふかな」ト、いひさま茶屋が掛に腰をかけながら、　安「コレ／＼、早速ながらだが、今日ほど女に目を付けられた日はねへぜ、あんな編笠の内をのぞき込んだり、又見ぬ様で見ねえ様で、イヤ成程色事は花見の事だ。ナゼといつて見ねへ、女は一体陰気なもの、それだによつて物事が都てうちばだから、女が男をくどくといふことはめつたにねへもんだ。所が花見といふやつは、どの様な陰気な人も陽気になる場所だから、男増りに

女の方から持ち懸ける様になると思ふ。」辛八「コレサヤアどうしたのだヨ。ほんに氣味の悪イ、狐でもつきはしねえか、マア氣をしつめさつし。」野呂「そして左次さんや日出公は來て居る様子か。」辛「ナニマダそこ所ぢやアねえ、マア聞かッし。凡そ江戸廣しといへど飛鳥山の花にしやすサ、飛鳥山廣しといへどサ。」ト、むかうの方へ指を差し「アレあの櫻ノ、あれに一昨歳うわッたぞ、七小町といふ名札の立ッて居る、アノ木の元に纏居したる一群、なんでも御大家の奥方と見えるが、上下ひッくるめて甲乙なしのドロビイ。」辛八「ナニあれが盗人の女房か。」辛「エ、わからずばひッ込んで居ろ。是れドロビイとは顔を逆さといふ事だわ。」辛「アハヽヽうぬばかり呑込んで居てさつぱりわからねえ。」野呂「それがマアどうしたといふのだ。」辛「イヤサ何も取りしきつてかうといふ事もねえが、先刻からおれが行き違りかん廻り、三四度もアノ傍を見て居たらう、さうするとそれまで何か高笑ひをして居ても、しんとなつてコソ／＼噺す。何か聞きとればしねえが、目引き袖ひきいそ／＼する様子、イヤモウ噺しても總身がぞく／＼してたるい様だが、さうも言ひ寄るてだてがねえ。いゝ智恵が有るなら貸してドッし、友達のよしみだ。」みな〳〵「アハヽヽ、イヤはやあきれた代物だ。足下も鏡で見えた國の人ではあるめえし、女三昧もしねえけえにさつし。今日の形に拵へかおつりきだから、先でも不氣味に思つてじろじろ見るのだらう。それやア茶人の女でも有るなら、間抜けでいいといふ、おッかなくッても面白い

とか、名を付けて惚れあへるのでもねへか、氣心も知れねへ初對面から、惚れられやうといふ、面でも有るめへぢやァねへか。」卒「何も其様に手ひどくいはずといいわナ、俺だとつても短冊られるとは思ふから相談するのだ。」野呂「ハァそれぢやァ少しは出來勝手ナ當りでも有るのかの。」吞七「なる程、イヤ待ちねへヨ、此方から十分見くだして計らるゝやうにしてやらうが粋だぜ、惚れる心持になつて見た所が、カヤト、先方が武家育ちに、こつちが武士の忍び出立、着付は黒羽二重の紋付、萌葱博多の挾み帯、ズッとはでに朱鞘の大小と、ムヽ、いゝわへ。御面相は頭巾で見えず、下から覗いて見た所が、鬼髭だがマア、是れも青髭と見るサ、ムヽ、いゝわへ。こいつはどうか取り結び様が有りさうなもんだ。」卒八「さうよ、首尾よく成就した所で箆を取ると、手付損にしておことわりまさ。こいつはおもしろい／＼。」吞七「ハンそれまでにこぎ付ければ面にはかまはねへ、手管で殺して見せまさ。何、にしろアノ幕へ入り込む手段にこまる。」吞七「マア花見の場で心安くなるのは歌だナ。ヨイと拵へ付けた短冊を先で讀んで、又返歌の心持で、短冊を付けるなんぞといふ様な事が、マア早手廻しだナ。」安「イヨ／＼作者々々、妙案々々、こいつはきつといい。併し短冊に困るナ。」卒八「ナニそれは鼻紙の端をさきかけて、チョイとよりかけにしていいのサ。」安「ム、成程是れ以テさそくだナ。」吞七「なんの是れもたすともの事だ、ひどくかたく褒めるぜ。それはいいが歌は出來るか。」安「どうして出來

るものか、おめへたち考へてくんねえ。」野呂「そんナつまらねえ色事師が有るものか。」安「それだとつておれには出來ねえものを、仕方がねえ、呑公考へてくだッし。」呑七「どうしてそんナぶ人がらなことを知るものか。」安「是れまでにして腰がをれてはくやしい。卒公、眼公、野呂松、コレ拜む〳〵。」卒八「それだといつて、むりな事許りいつたもんだ。つひぞたべた事もねえものを。」野呂「何とでも自作でこじつけねえナ。」安「なんの俺に出來るくらゐなら、氣をもみはしねえわサ。なんの卒公なんぞは、初午ダノ天王樣ダノにはやりながら、いぢのわりい友達づくといふものはさうしたもんぢやアねえ。」卒八「それは地口や川柳點だわ。」安「それでもいいわナ。」卒「馬鹿々々しい、地口で色事が出來るものか、せめて狂歌ならいいけれど。」安「ナンノおつく〳〵ふた事許りいふからはじまらねえ。イイどうするものか、ねえ昔とうきらふよう、やつぱり縁のねえのだ、其の替り此の末おめへたちにどんな事が有ッても、おらアしらねえといふから、其の時腹をたちなさんなヨ。」呑七「イヤハヤわけのわからねえ男ダゾ。」安「さうヨおらア譯がわからねえ男よ、わかつてゐれば歌の十や二十ナニ差支へるものか。」ト、大きにふさぐ。眼七は野呂松をかたかげへ引き廻し、

眼七「コウあの樣子では、今に左次さんや出目公が來てもかんじんの趣向は身にしみてする事ではねえはづ。」野呂「さうよ困つたもんだ。よし〳〵皆と相談して、何とでも歌らしくこじ付けてやるべい。」

ト、いひさまこなたへきたり、眼「卒公、安波さへもあゝいふくらゐ思ひ詰めたんだから、何を考へて見ようぢやアねえか。」卒「さうよ、俺もどうぞこじつけてえと思ふけれど、地口腹だから樂首にはなつてしまふ。こまつたねえ。逆修でもいゝ、まア手引の爲ばかりだ。」卒「それなら待ちねえよ、七小町といふ櫻の下に居るから、カウト、ム、こつちは浪人と、ノウ、先はいツあがつていへば雲の上人ともいふ心持でと、フウ。」安「ム、いゝ／＼、なる程向うを高い人と見るから雲の上。」卒「コレ考へてゐるのに、ちツとだまつて居さつしやい。」安「ヲット無言々々。」卒八はしばらくかんがへ、安「ア、やつとこじつけた。」アバ太郎は飛び上りをどり上り、安「有り難し出來たか／＼。」卒「ム、ひつくりさせるなア、まるで氣違だ、ハヽヽヽ。かういふ譯だ、鸚鵡小町を向うへかけにこじつけた樂首だぜ。」眼「ム、逆修か、いゝ／＼。」

雲の上は有りし昔にかはらねど見し玉だれの内ぞゆかしき

といふ歌を地だへつたのだ。芝の上は借りし莚にかはらねど、見し玉揃ひの内ぞふかしき。どうだどうだ。」安「アヽ、いゝ、うまくやるナア。玉ぞろひの内ぞゆかしき。有りがてえ早く書いてくんねえ。」ト、鼻紙を出して野呂松にかかせ、「サア付けて來よう。なんでも此の書付を先で取りさへすれば、もウそれが縁のはしだア。どうか氣が改まつたら恥かしいやうで行きにくい、へゝ思ひ切つてやらかせ。」ト、一人いそ／＼彼の木の元へ至り下枝へ結び付けしづ／＼と立ち戻り、目もはなさず見てゐる。「サゾ今比は評議まち／＼だらう。」卒「ハン扇パチ／＼が聞いておきれら

アゝ」卒「アレ／＼中年増が短冊を取つて引込んだぜ。」安「ヤア／＼ほんになア大願成就、コウ／＼奢るぜ奢るぜ。」ト、いそ／＼夢中になつて居る所に、はるか山の裾にてチヤン／＼と鉦の音聞ゆれば、卒「サア／＼圖武州が來たぜ、マヅ色事師はしばらく預り／＼。」安「何サマダ遲くはねえ。そして左次さんや出目公も見えねえ物ヲ。」ト、うつゝをぬかして彼の方を白眼みつめて居たりしが、安「ヤア／＼出たぞ／＼ヨ、短冊をつけるぞ。」眼七「成程うめえ／＼。安波公早くいつて取つて來さつし、返歌が見てえ／＼。」安「あんまり度々だから行きにくい様だ。」卒「馬鹿なつらな。今になつてあほけていけるものか、爰がかんじんの所だに、返歌の様子で直に向うへ言葉を懸けようといふ場だ、早く行かツし。」ト、せきたてられ、又しづ／＼とかしこに至り、彼のたんざくを見てしばらく考へ、何か不興げに立ち歸るゆゑ、みな／＼「どうした／＼、ナゼすぐに歸つて來た。」卒「首尾はどうだ／＼。」安「どうかよさそうもねえから、何ともいはずに持つてきた、見てくんねえ。」「どれ／＼。」ト、みな／＼うち寄り短冊をよんで見る。眼七「ナンダ武士鼻たれの愚智ぞをかしき。ム、どしよせえなく地バツたナ。」安「何だか悪態の様だぜ。」卒「さうさ鼻ツたらしめえ。ぐちをいふなといふ事だらう、ハヽヽヽ。」眼七「そんナものだ。鮮し女の口調にしては味く地口ツタ。そしてヤツツだから有り難い。」安「ナニノ有り難い事があるものだ、面しろくもねえ。あんまり人を喰らツた奴等だ。よし／＼是れから古法科でバつとしけ込んで、おもひれカツくらつてふさけぬいてくれべヱ。」卒「コレ／＼とんだ事をいふ、先は大家の奥女中、めつたな事をすると大變な目に逢ふぜ。」眼七「さうよ

先の所爲はねえ、ぜんたいこつちの了簡からおこつた事だ。アノ手合に男をたてやうといふ事は何とも思ふのぢやねえ。」野「ハヽヽヽ、すつぱり見つけられたナ、おもしろい〳〵。」卒七「見し魂だれや、武士鼻たれはいい〳〵。」卒「あんまりげら〳〵するナ。人のいい時にはてんでに不承々々な顔をして居て、ちつと落目になつてくると、アハヽ〳〵笑ふぜ、いまいましい。どうかして意趣げへしをしてえもんだ。」卒「コウ〳〵其の意趣げへしはいい事が有りやす。今に役者がそろツたら、アノ幕のそばでおつぱじめるがいい。何ほど屋敷育ちでも、鼻ッ先で切つたりはつたりを、おつとして見てはゐられめえな。さうして追ひ散らしてやるがいい。」卒「それがいい〳〵。左次さんや出目公はどうしたらう、もう來さうなもんだ。圖武六はさつきから來てゐる樣子だ。」ト、いふ所へ向ふの方にて「ふウだアらア、くウ、やア引。」

卒「アレ〳〵來たぞ〳〵、呑公早くいつて場所をいふこませてきさつしな、そつとなぜ。」卒「オツト承知だ。」ト、はしり行き兩人にしめし合はせる。卒「アバ公しつかりさつしョ、肝じんの所だぜ。」卒「ハン美味くやつて見せよう。」ト、帶などメめ直ししづ〳〵と歩行く。左次、出目助も、つゞいてま合はぬ順禮唄を、そこ爰うたひながら程よき所に行き合ひ、卒「コリヤ〳〵順禮火を一ッかしやれ。」

左次郎はいまだたばこも呑まぬ所ゆゑ、エヽ氣のきかぬと思ひながら、うろたへ火打を取り出したばこを吸ひ付け、左次「ヘイ〳〵サアお付け遊ばしまし。」ト、編笠をのぞいて「ヤアめうらしや烏目百味、年來尋ぬる親の敵。」出目「じんじやうに勝負〳〵。」ト、是れより廻りぜりふあらましこじ付け、ト、たがひに笠をかなぐりすて、刀に手をかけ詰め寄せれば、ソレけんくわ、イヤ敵討と、所せきまで居並びし野遊びの人々、上を下へと騷動し、重箱かゝへ驅け出す有り、辨當箱をけちらすやら、吸筒をふみくだき、毛氈をかむり逃げ

惑ふもあり、たゞ鼎のわくにひとし。こなたは早抜き合はせ、仕組みし通り十分に切り結び、最早圖武六来れかしと思へど、山の下道にてチヤン〳〵と、鉦の聞ゆるのみ。来らざるもことわり、此の鉦の音は三さき幡隨院道化の、ちちばゝの集まりしなり。三人はタテの仕組種切れとなりたれど、一向圖武六見えざれば、せん方なくへしなぐりになぎちらし、たがひにいきもきれ、つかれきつたるその所へ、いづくにか存みゐたりけん、最前道灌山にて出で合ひたる、かの侍二人さげ緒たすきに後鉢巻、かひ〳〵しく出たち、「ヤレじゆんりやアたち助太刀申す。」ト、いひさま兩人一度に、氷のごときだんびらを眞向にかざし、三人がなかへをどり込む。左次郎、出目助びつくり仰天。左次「ソレ安波公早く逃げさつし。」トいひながら、あわてふためき逃げ出せば、アハ太郎も何かはしらず、持ちたる刀もはふり出し、一目散に逃げ出せば、「ヤアひけふなり、おどれ逃ぐるとてにがさうか、ヤレ順禮開近になじか切り付けぬ。後袈裟に打ち掛けぬか、エ、埒の明かぬ。」ト、背がみをなし、刀をふつて追ひかくれど、是れもよほど存み過ごしと見え、歩行も自由なりかねる様子。三人はたゞ夢路をたどる心地して、右へ左へにげ廻り、はては山の端におひ詰められ、最早一生懸命と下道の方へ飛び下るれば、木の根茨に突き懸り、衣類手足のわかちもなく、ばらがきになり、のたり廻ツてやう〳〵と、下道通りへおりければ、彼の侍も見えざれども、今にも跡より切り付けられる心地にて、三人ばら〳〵我先にと、根岸通りをやう〳〵と命から〴〵逃げかへる。跡に四人の者どもは、なげちらしたる諸道具取り集め、すご〳〵と立ち歸り、互につゝがなきを喜び、又圖武六も夜に入りて、漸く家内をさそひ出で来り、途中にて店受けに引き返されし始末など物語り、はては大笑ひとぞなりにけり。

儒者敎以解レ惑。富家施以救レ貧。難矣。解且救。鯉丈先レ難而後レ獲。欲レ惠二惑者貧者一。而非レ儒非レ富。無レ所レ得而已矣。仰觀レ世俯察レ情。作二世話之書一。名曰二八笑人一。讀者必悅且娛。破レ眠除レ欠忘レ倦忘レ憂。冬夜夏日爲レ短。豈不レ近二解者救者一乎。

文政四年辛巳正月

大八海老人稿

そもそも八笑人のらんしやうといつぱ、倦生實家事にうみて遊戯にあそぶことを知らず、所謂食はず飲まず樂とやいはん。されど清貧をたのしむ器にあらねば、ひぢを枕の樂しみをその宅に居る事なきらひ、花と月とに心を移せど、乳伯といふにうきくもの連れざれば、今に其のたる事を知らず。故にや、ありたらんにはと思ふ程なゝ、春の日秋の寝覺めなくなくにうつゝ、心のうつけの數々、書きちらしたる其の反古を、八笑人とはなづけしなり。或人予に問うて曰く、彼の小冊の實に著述するや。予エヘヽトせきばらひをしながら答へんとして行きつまれり。嗚呼いかにせん勸善懲惡の趣なく、益の有無を辨へず、サアそれはエヽト口塞るを見て、彼の人は高笑ひしてそしりて曰く、いかに犬先生、無益の業を今こそ知るらめ。看者は滑稽にうみて拙著の愚かなるを笑ふ。さすれば及ばぬ下根つひやすのみか、廣く愚智短才を引札するにひとしからずや。はづかしいかな作者ぶり、いたいかなかた腹、冷いかな掌中の汗と、並べたてたる惡口にこたへ兼ねたる門首、折よく來たるは版元の文永堂が使なり。八笑人の後編はと催促されて鼻高く、エヘンノヽとせきばらひ、そしりし人をしりめにかけて、序に題たるものをかくのごとし。

文政四辛巳春

瀧亭主人鯉丈誌

花暦八笑人 二編上之巻

久かたの光のどけきと詠じたる、春の日のうらゝかさは、かせたる野邊の若草の、もゆる煙が立つ霞、山懐に早蕨の、にぎりこぶしを開くより、盛り違へぬ花暦、年々歳々相似ても、日々夜々の花の形、同じからざる詠めには、心の花も櫻比、うき立つ空に陽火の、ちら／＼見ゆるほろ醉ひに、樽を荷うて行く娘、花をかざして歸る老父、賢愚貧福押しなべて、うかれ遊行の時なれや。彼の八笑の遊人は、花見につれて催しの、茶番も昨日飛鳥山、其の仇うちも仇事にて、打つは遠寺の入相比、花ならなくに散り／＼に、追ひ散らされて漸うと、八人揃ふ池の端、酒狂亭へつどひ寄る。取りわけ左次郎出目助は、疲れしのみかそこ爰と、擂剝疵や打疵へ、一心足らぬ萬能膏、酒にて用ゐる無名圓、此の人物へ合薬か、即刻廻る酒氣に連れ、猶こりずまの後日の趣向。左次「コレみんなが呑んで許り居ては始まらねえぜ、あしたはたれがする。」アバ「ほんにさうよ。ア、しかし初日をいたゞいたから、すこしおくれが來た様だっ」のろ「何のそんなけちな根性でいけるものか。それならおれが一番座直しとしてやるべエ。」卒八「ム、おもしれえ／＼、筋は出來てるか。」ロ六「はうすんに有ります。鶴屋南北

櫻田治助、「あて〆鶴田南助」[illegible]ふたて作りだ[illegible]」[illegible]たいそうなはうだが、[illegible]
とふひ出す噺に、おもしれへのはねへもんだ。」[illegible]「エ、やかましいわ[illegible]
る、マアだまつて本読を聴聞仕ねへ。[illegible]エヘ[illegible]こでマつ、又顔を見やアがる。」[illegible]
のだ。いがみやつてばかり居ちやアわけがわからねへ。ぶつとこも、すつとこもいいとして、其の先
はどうだ。」[illegible]いふ段はイすか。」[illegible]わかつた[illegible]」[illegible]
ぢやアねえ。マア皆が些と洒落ツこなしと極めて、しつくりと稽古するがいいぜ。」[illegible]「マヅ是れから
うまるかい。一洒落百づゝ、過料を取るとするがよからう。」[illegible]「そりやアいい、[illegible]
痛えからきくだらう、しめ／＼。野呂公心置きなくはなしねへ。」[illegible]「[illegible]洒落らば洒落
ろ、翌日の小遣だぞ。そこで[illegible]、大びらに[illegible]と向島に[illegible]、[illegible]それに[illegible]
たに[illegible]「どうもしねえ此方の事だわ。」[illegible]「エ、引ッ[illegible]物は有るか。[illegible]して[illegible]
こで先づ。」[illegible]「[illegible]。」[illegible]「何だと。」[illegible]「痛がするやうだ。」[illegible]「エ、此の男も、むつかしい事許り
いふわ。マヅ荒増正本をはなさつせえナ、向島でどうするのだ。」[illegible]「さうだふ譯だ。マヅ隅田川花
の、エ、引しがらみといふ名代で。」[illegible]「ム、[illegible]大層な驚しだの。」[illegible]「[illegible]は[illegible]聞かせて置い
て、おれが形がいい。」[illegible]「む、むせえ布子の、あちこち綻などが有つて、泥が付いたり綿がぶらさがつた

り、帯は繩か何か〆めて、冷飯草履と中貫と、かた〳〵ちんばにはいて、川越の辨當のさいといふ、手拭をくる〳〵と、米屋かむりといふ拵へだ。」左次「なぜそんなおかしい手拭を冠るのだ。」いろ「あんだつな理窟はねえ、鈍公のを借りてかぶるのサ。」左次「鈍公足下の手拭はどんなだ見せな。」ごん「これよ。」左「オヤ〳〵是れが川越の辨當とやらか。」いろ「おめへもやはりくどく聞くぜ。醬油でひどく煮染めた樣だといふ事よ。なんと、見てものどがかわくだらう」いつ買つたか知らねえが、もつと洗濯でもすればいい。」ごん「大きにお世話お茶でも。」いろ「飲ませねえで、こてへられるものか。手拭を見たら、のどがひり〳〵すらア。是れを思ふと俺アほんにもつてえねえぜ。マヅ手拭、小遣、小菊、こくぶは、小娘どもから仕送る。衣類持物等は歳增分後家のたゞだぜ」いろ「このべらぼう、屁ツくせのわりい、又いびつたれをしやアがる。」ハ「サア〳〵皆出せ〳〵、己が手にまぜつけへしやアがれ。以後ほかの物の見せしめだ。」いろ「何々是れは狂言についての噺だから、まぜつけへしたアねえ」ズミ「向島の趣向に小娘や歳增だの後家だのと入用か。」のろ「入用ではねえけれど、向島だから其樣なものも出ようではねえか。」卒「そんなら小菊や、こくぶや、小遣がいるか。」のろ「それも一文なしではいかれめえし、煙草も呑むだらう鼻もかまざらにや。」ズミ「何々言譯はこれえ〳〵。何でもたれた〳〵。」ごん「あんだうな、しりをひんまくつて改めさつし。」ごん「それより腰の鏡入をひつはづせ。」いろ「ア、

ア、あやまつた〳〵、出すよ〳〵ごうるせえ取附くなえ。どうも男の肌ざはりは氣味がわりい、きついきれえだア。チヨツいめえましい、それ百、ヘンとんだ災難だ。」ざん「あんまり人の事ばかり、わるくいふからいゝ氣味だ。」ア、ハ、笑つてやれエア、ハヽヽヽ、。のろ「ホイ、ゝ智惠に相違ねえだア。サア是れから本讀におかゝりなさるが、どいつでも、ホイと言でも吐かすと百ふんだくるぞ。」あば「かうせえむつかしいナア、ホイと言つてもわりいか。」のろ「わりい〳〵。」あば「それではおくびもされねえナ。」のろ「ム、ならねえ〳〵。」そつ「くしやみは。」のろ「ならねえ〳〵。」ざん「屁は。」のろ「なほならねえ。」あば「イヤハヤあきれた馬鹿どもだぞ。サアそれでいいとして置いて、詣合はどうだ。」ぬら「おれが手拭を借りてかぶせればどうするのだ。」のろ「そこで土手通りをぶら〳〵、草履の古いのをひろつて腰へぶらさげたり、そら笑ひをしてをどつたり、何でも出たらめにしやべつて歩行くだ。」ざん「こいつは大當りだらう。」そつ「なんのあんなざまで歩いたとつて、大當りな事があるものか、こぎたねえ。」ざん「それだからよからうといふのよ。此の又面で、なり許り立派ではうつらねえわサ。」のろ「チヨツ又つらを持ち出しやァがる。うつちやツておけえ。」ざん「ほめるのだア。」のら「ほめられて嬉しくねえわ。」左次「いいサ〳〵、そこでそれ許りぢやア有るめえ。」のろ「どうして〳〵、是れからが山だ。先づ其の形で、牛の御前から秋葉近邊、足まかせにほツつき歩くもんだから、定めて人はどろ〳〵付いて

來るだらう。」左次「ム、〳〵。」のろ「それは扠置きこゝにまたサ、三圍のがんぎに、しるこほしが一艘付いて居やす。所へこつちからをどり狂ッて行く。そこで又見物のうちへ、樂屋から二三人まじつて居て、始終程よくからかひながらついて歩行き、馬のくつか何か、おれにぶつッつけるやつだ。さうするとおれが又其のくつを投げけへすと、眼公が侍のこしらへで、見物してゐる顏へ、ボンと當ると、やほにあつくなつて、するさんとか茶山花とかきッとなつてかゝる。此方は茶にして、げら〳〵笑つて居る。こらへ兼ねて、すらりひッこぬいて切つてかゝる。こゝへ少し立廻りを付けてもいい。とゞあしらひかねて、がんぎへ逃げ下りる。つゞいて追つてくる。追ひ詰められて見物どもに、手に汗を握らせ、あはやと見る間に、彼の小屋形へひらりと飛び乘る。侍も同じく飛びこむと、船をついと押し出すとたんに、俺は又家根へ逃げ上り、眞中ごろへしやんと立つと、爰が山だ。引きぬきで上の襤がばらりと落ちる。手拭をひよいと取つて、後へ放ると絲毛のみだしで、保名の物狂ひといふこしらへだが、何と初手がきたなくつて、ぐつときれい事になると云ふもんだから、だんどりはびつくりだらう。」アバ「首はやつはりその首か。」左次「それもぐつと引きぬきにしてすげかへるのだらう。」のろ「やかましいわえ。そこで船の簾をぐる〳〵と捲くと、唄三線はやしまでちやんとならんで居る。大鼓でヤァ、引とかけると、唄「いざさらば、有りし雲居の花の袖、思へばかかる執着の。」と、アバ公

が鼓唄で、仲蔵の狂亂を、丸で一番やるつもりだ。へゝ、錬て手練の扇が面だ。さア、いいわい。こいつは一番〆あるだらうトアゞバ公。ゞ「ふ、本讀ではおか〳〵おつりきだが、どうも安心ならねえもんだ。のら「なぜ〳〵。ア「ヤッ第一山だといふ扇からしてうろんなものだ。まあ聞にして、富士山なんぞはどでごんす、といふ山だら知れね。のら「エ、おいてくれな、ごふ腹ろあな。心得のねえことをするものか。へ、ちよいとした所を一寸見なせえ。ナイ「圖武公その扇を取つてくんな。来た来たマヅ、チャント、ひらく。エヽ、こんなざわき〳〵扇おやや出來ねえ、もうちつとしまつたのはねえか。「エヽ、そら〳〵道具えらみが始まつた。ナイ「眼公、そこの袋戸をあけると、封のきれねえのが有る筈だ。一本出してやらつし。眼「おい来た、それなけるよ。ナイ「ヨット妙々。マヅ封を切つて、そこでチャン〳〵、イヤ、是れは又さつぱりひらかねえ。餘りしまり過ぎた扇だ。ナイ「エ、よくしいんだうな事ばかりいふぞ。マヅ兩方の手であけさつしナ。これからが見所だ。の「さうなら、マヅ、チャン、よしか、それ、それ、それ〳〵、アよんや。ホイ是れはしたり。眼「おとせばひらふハリトウ」圖武「なる程かんしんだ。のら「さう思ひきつては落せねえものだ。ナイ「是れは久しくやらねえから、ちつと手馴れてくると大丈だ。其の證據にはきせるたんぞは始終手なれてゐるから、百發百中まちけへなしだ。アレ、ソレ、ソレ、ぐる〳〵〳〵アイヨイトナ。ナイ「チャンチャン〳〵、奇妙々々。イヤ扇

よりきせるにするがいい、狂亂の所作事世留の手いいぜ。と　左次「扇は落したら落しッきりにして、穴のあかねえやうに、ごたついても仕舞ふが、丸で所作を久しくやらねえから、ちつとも動かねえのではねえか。」いふ「ナニくそりやア大丈夫だ。」ごん「イヤそれが不丈夫だヨ。」いふ「そんならちよッと當つて見てくんな。アバ公たちかたが、しつかりだと思つて呑まれてとつちめえヨ。」いふ「大層許りいふから、猶安心ならねえぞ。時におらア左の指が此の通り、右の手ッ首はひつ挫く、今夜はとても彈けねえ。眼公裏のおだるさんを、ちよつと賴んで來さつし。」眼七「ア、地彈がたほでは、ちほけて猶うごさ・・ふえ。」左次「うごけずば、いつそ今の内がいい。押しだしてからは連中のはおだし」のふ「へこびつくりしやうと思つて、眼公はやく連れて來ねえか、いけ埒の明かねえ。そして左次さん、蠟燭を三挺氣のへを見せねえ、どうも行燈の火ではうつりの悪いもんだ。」左「イヤハヤすさまじい飢幕だぞ。今眼公がけへると、燭臺を出させようわサ。ヤア／＼笹湯がすむまでは、氣まかせにするがいい。」左「まあんまり甘口にするから戯けるのだ。今におだるさんが來ると、だつこをしてて寝ねしようと泣かすだらう」いふ「何もさう口ぎたなく言ふことアねえ。ヤツ今度の狂言ではおれが卷軸だぜ。」左「かんぢくだか、亂ちくだか知らねえが、おだるさんにだつこさせるものか。」ア三「いいわサ、此の男も其樣に氣をもむ譯もねえ。さきで承知なら、だつこでもなんでも、いけ出すがいいおやアね。

か。」のろ「ハン女めづらしさうに、かやノ\さうぞうしい事だぞ。ほんに素人衆は、ナゼあんなねえにびりつく\しいた。こちとらアあいくれるナカハ。」ト、いふ所へ、裏口より　おだる「左次郎さん何御用サエ。」のろ「女ほきやアミエるしやのうッ。」卒「何だノ\、あいくれるな女ほきやァ、ミエるしやのうとは、ナニのこつた。」とのろ松は少し赤面し　卒「ナゼそんなねえにになるのだ。」ノ卒「エ、引やかましいやつらだア。サアノ\おだるさんハ、こゝへ來給へノ\。時にどんじどころねえ譯で、ちよつとおめへの三味線をねがはうといふ存心だ。」おだる「おやすい御用だけれど、おまへナゼお彈きでないのだ。」左次「所がこの通り下だ。」おごう「ナヤノ\どうなさつたえ、けしからねえ。」ア八「鈍公なんぞが、あの手を持つてゐると、安樂だノ。」ごん「ア、俺ァあの手が有れば、芝居へ出てぶつ付けて二枚目。又腹が有るから拵へ物ははなし、あくる歳は立三味線おかしらだア。」ア八「ナァニさうっまくはいかねえ。アノ膏藥をはがさずに置いて。」ごん「そしてどうする。」ア八「荒うちの足場からおちまして難澁いたします、御一錢。」ごん「アア引鶴龜々々。なんでもわりイ事といふと俺に許りなすりつけやアがる、いめへましい。」卒「そのやアいいがまへ。」ごん「何いい事が有るものか。」おだる「ナホ・・・・是れが敵うちの發端になりさうだねえ。」眼七「サアノ\坊ちやンノ\お彈きに來なしたっ。」おだる「オヤノ\ナゼ連れておいでだ、又邪魔をしていけないよ。」左次「いいわナノ\。サア坊爰へ來な、よく眠からねえナウ。」おだる「ナニサ宵ッ

張でなりませんヨ。」のろ「オヤ／＼よふくふとつとるなう。おらアモウこんな子を見ると、まことにへんな心持になつて、ふさいでくるぜ。」おだる「オヤ子供は嫌ひかえ。」いろ「ナアニ其のくせ好きだけれど、マヅァ、いい子だが、此の子は元だてが、どういふ譯で出來たしらんと、深くかんがへて見るとモウ／＼たちきれなくなるわ。」おだる「オホ、、、いかナいやナ野呂さんだヨ。」眼七「この子をサ柏戸が、ひどくほしがつたッけ。」づぶ「ハァ始終つよくなららうといふ、見所があると見えるノ。」眼七「ナア二角力にする氣ではねえ。」づぶ「どうする氣だ。」眼七「屎をたれさば、根付にしたいとつてよ。」左次「アア引やかましい口だぞ、をかしくもなんともねえ。時におだるさん、ちよつと、狂亂を一番彈いてやつてくんねえ。」おだる「なぜえ。」左次「かういふわけだ。ちよいとした茶番が有りやす、所で野呂公が一番所作らうといふ存心だ。なんと恐ろしいたくらみだらう。」おだる「オヤ／＼それはサゾよからうねえ。」左次「あんまりよささうでもねえノヨ。そこで今夜下見分をしようといふりくつだ、イヤかうしやせう、とても長い事はごたいくつだから、まア、鼓唄から〽定家かつら。〽なさいとやつて〽いたいけさかい〽」ト言たら、ぎつとひツこ抜いて〽ふりにし事を聞くからに、ひよふく連理のちぎりさへ。〽トいふ所へ飛んで、あんまり扇々といふから、蟲おさへに、〽色にぞ出でし。〽ヤ、ホ、、、ポウ、チリカラ、ハァ〽我がうらみ。〽といふ所で、扇をぱつトひらいて、一ツギツクリやつて、もうけさつし、扇

なば遣ひッこなしがよからう。」ぐた「なる程それがいゝ〳〵、あぶねへ事はいらぬもんだ。」ロ二「それならさうよ。」卒八「そこで、一人ではどうも寂しさうだから、一寸草も冬枯れでこゝからは、奴さんより出して所作だ」と、やらかすがよからう、花やかでいゝぜ。」ぐ二「ところでいゝ〳〵、第一ひとりでは荒がいくらもねへ。」のろ「勿論荒はねへ積りだがノ。」出目「所が種ぎれの潮といふ所作で、見どころはほつと許りだらう。」左次「やかましい〳〵。そこで一人の奴は誰にしよう。」がん「これはこぎれいなものでなければならねへ。マヅ俺と、もう一人は先づ見た所がト、段々見つくろひ首許りだア。」ぐ二「ヤサとしても首よりこなしては、八ッ寄せても管秀才の一ッぶりには受けとれねへけれど、たゞ小機轉のきいた、身の軽い者がいゝ。」ぐ二「小機轉のきいたのならマヅおれだが。」左次「ヤヤきいては居るだらうが、何分さうドタ〳〵した身體ではいけねへ。マヅ卒公と眼印がよからう。イヤ野呂公、いやサうよ、とてもおれの氣に入ったものはなし、仕方がねへ。」眼七「ハイ〳〵、お氣にはいりますまいが、御不承なさつておつかひ下さりまし。」左次「イイサうらみッぽい事をいはずと、二人で立廻りでも案じさつし。そこでこつちは二階にしよう。爰で踊つたら文口がやかましからう。おれが見とゞければいゝ、卒公と眼公許り来さつし。見物にまじつて居る侍はアバ公がよからう。」アバ「またおれが侍か、チヨッ。兎角にくまれ役だナ。」卒八「さうだけれど仕舞のおちへ来て船へひよいト飛び込

む、其の形で鼓唄とくると奇妙だぜ。しかしちつとでも立廻りのあとで船へ飛び込んだら、息が切れてこたへさうもねえぜ。」 左次「そりやア息をつく内は、大小でかけりを小長く打つて居たら、ゆるりと息はつけるだらう。」 アバ「ム、いい〳〵、どうかかうかやッつけべエ。出目公も一口やつてくれるだらう。」 出目「折角の頼みだけれど、此の節、はなはだ都合がわりいから、氣の毒だが半口と思つてくんねえ。」 左次「ム、こうくな洒落は出ねえ、えんぎでもねえ。ナイ圖武州、野呂公が所作ッて居るうち、のろ公が替りに、アバ公とちよつとした立廻りを、つけて見て下つし。サアおだるさん、此方は二階としやせう。坊は寐たら、そつと火燵へころばして置くがいい。幸公眼公サア〳〵、野呂公何をして居るヨ。」 のろ「チョット一口元氣を付けてえから。」 左次「ヱ、久しいもんだ、いぢのきたねえ。サア行きやせう。圖武公立廻りを美味くたのむぜ。」 ヅブ「ヘ、だまつて行かッし。箸を持つて喰ふ許りにこせへてわたサア。」 のろ「ハイ〳〵善好さん宜しくお頼み申しやす。」ト、のろ松は二階へあがる。 ヅブ「ヂヤア、ハ公何でもすりは拵へて、びつくりさせようぜ。」 アバ「ム、そしておれが役廻りは此のタテ許りだから、所作よりタテでぶッぱめてくれべエ。」 ヅブ「おもしれえ〳〵。マヅ荒まし筋を立てゝネエ、それから小枝はおれがふりを付けよう。」 出目「よかろう〳〵。兎角タテは氣どりが肝心だぜ。」 ごんじ「ちげへねえ。し

かし氣どりよりは、葉どりが下手だと存の外がわりイヨ。どうも素切といつても、とかく山を入れしアニ「イヤサノ＼、わかつたヨ。隨分洒落るもいいが、あんまりおんで含められるからうるせえぞ。面でやアたつて見よう、どうも素人細工では、胸でこたへても、チヨイトおつ建しると云ふわけにはいかねえ。なんでも最初から立つて、おし合つて見るがいちばん早いヨ。そこから二人で手續をおぼえて下ツし、サア圖武公。」ヅニ「オツトそれさた、先ヅ胸倉へくるかナ。」アナ「ム、しかし、てんから胸倉でもあるめえ。かうだからトネア向うへヅカノ＼と行きナ。」ヅニ「ヨイノ＼＼」と眞面目でいはずといいや。」ヅニ「それでもほれたうにヅカノ＼と行くと、壁に鼻をぶつかるヨ。ソレ只ツさ許りでせモウ此なくれるだ。」アバ「よく言葉質計り取るぞ。それ帯へ手を掛けて引き戻すわ。」ヅニ「それで鼻血の難はのがれた。」アニ「コレサ洒落て居てはいかねえ。そして其様跡をさりさすと、たゞ腰で小さくこたへる思入をさつしナ。」ヅブ「オツトかうか。」さん馬「アヽアいやな尻をするぞ。」アニ「何だ其様尻をふらずといいわナ。」ヅブ「それでも堪へる身をしろといふからヨ。」さん馬「さう尻をふつては、もりさうなのを堪へるようだア。」アバ「ソウラ左の手で、俺が手を拂ふ、ア、いてえぞ、ナゼそんなにひどくするヨ。」ヅブ「堪忍しねえ、どうも乘がくるとツイ。」アバ「ナンノ乘どころか、まだ立ツた許りだ。ソレ腰の手を拂はれたから、左の手を肩へかけて引く。今度はグツト引きかへされた心持ですこし戻る

だ。」ヅブ「斯うか。」アバ「マアさうヨ。そこでト、ム、、そこで胸倉だ。ソレ後から斯う取るわ、とりながらキリ〳〵と引き廻す。こつちハおくダ。エ、、さう廻れるものか、こつちハヨしや、さうむいた。そこで兩手で拜みうちに、胸倉をうちおとすだ。」ヅブ「どうだ。」デク「かうヨ。」ヅブ「ム、それよりは、かう手をかけて、ヤ、かうねぢるとぢき離れらア。」アバ「アタ、、アタ此のべらぼう、ほんたうに力を出しやアがるナ。はなすめえと思へばこつちも又斯う取るわ。」ヅブ「さうとつてもかまふものか。やつぱりこつちは、ヤ、かうして。」アバ「ヘン其のくれゑナ事ではなすものか。」ヅブ「はなさねば又かうやつてはな。」アバ「爪をたつてもいたくねえぞ。」ヅブ「そんなら拳固でソレ〳〵。」アバ「なんとして雷が鳴つてもはなさねえゾ。」ト、互に金剛力を出していどみあふ。左次郎は何心なく小用におり、此の體を見て、左次「此の手合は何をしてゐるのだ、アバ公どうするのだ。」アバ「よわい野郎だ、くひつくナ。」左次「コレサいい加減にとちがゐるはねえか、ばか〳〵しい。そして立廻りは出來たか。」出目「その立廻りがあのとほりだ。」左次「イヤあの通りおやアねえ、足下もまた見てゐる事もねえわ。てん〴〵にちつと身にしみさつし。」出目「さうだけれどタテを付けるに、とりさへ人もいるめえと思つて見てゐたア。」左次「コレアバ公もマア放さねえか。」アバ「俺もはなす氣だが、放したらむしり付きさうで、めつたにははなせねえ。」左次「イヤハヤ呆れきつた物だ。コレサ圖武公、すヤ〳〵ゑつかになつてらア。いいべらぼうだ。」ごく「あんまり

はなれねば、水でもぶつかけようか。」ヅブ「どうだ、サァあやまつたか。」一八「胸倉をとられて、ほ
なすこともできねえくせに、あやまつたかもなかもいらねえ。」ヅブ「あやまらねば。」卒八「ヱヽいい加減に
しねえかといふに、呑公笑つて居ずと、來てひつぱなして下ッし。」ト、やう／＼引きわける　一八「二人ならばハヤ
つまらねえ所で、悪意地のはつた奴等だ」ちよ「サア／＼圖武公は二つの鼻の穴では息がし足りねえ様だ、
よわい男だ。」ヅブ「本氣にならねば、直にいつぱいだけれども。」出目「ナニ／＼本氣にならずともことよ。」
一八「すさ／＼コレ見てくんな、手のひらがきにされた、アヽいてえ／＼。」卒八「それまで我慢して居
ることもねえ、馬鹿々々しい。」一八「あんまり圖武州のけんまくがおそろしくなつたから、だん／＼
氣味がわるくなつて放せなんだ。」出目「圖武公もまたなんだらう、そしてすこし登つたやうだッけ。」
ヅブ「ナニ暑くもならねえがノ。」どん「暑くもなかつたさうで、天窓から湯氣が立つたわ。」ヅブ「はな
さねえでは男がたたねえやうな心もちになつたからヨ。アヽ、息がはずむわ。呑公湯でも水でもくれね
えか、氣のきかねえ後見だぞ。」どん「ヘヽ腕の捻りツくらに、後見もさるほどもいるものか。」卒八「何
とふざけツこなしとして拵へてくれねえか、野呂公はなか／＼出來るぜ。それともそつちで出來さう
もなくば、たのむぜえ。」卒八「ヘヽ是れしきの立廻りなら、出來るも出來ねえもいるものか、ナア圖武
公。」ヅブ「さうス、すんどきいな内證ごとだ、おかまひなくとまう／＼二階へ。」左次「どいつらも

屁ッぴりのくせに、口ばかりわる達者だ。」と、二階より いふ處へ 卒八「オイ左次さん〳〵、チヨツト來てくんね
え。稻荷町に何をしてゐるのだ。そつちはどうでもいいわナ、こつちが肝心だア。」 ツブ「ナニダト、
がうせえ安く取りあつかふナ、コレ金箔のついた。」 左次「イイサ〳〵、ア、世話のやけた奴等だゾ。
そこで衣裝だが、翌日では間に合はねえとつまらねえ。上の引拔衣裝は、こつちで給を一枚引ッぱど
いてこせへなけりやなるめえ。それは翌日でもいいが、下の狂亂の形は今夜かゝりて置くがよからう。出目
公今度の隱居役に一走りいつて來て下つし、先で寐てはいかねえぜ。」 でめ「オイ〳〵いつて來べエ。
こつちから來たといつたら、よこすだらうノ。」 左次「誰もんさへわかると、小僧に背負はせてよこす
よ。」 また二階より 經七「左次さん〳〵、はやく來てくれねえか。モウ少しでまとまる所だ。」 左次「ヨイ〳〵、
今いくよ。そんなら出目公頼んだよ。アバ公も圖武州も車輪でやらつしよ。」トいひすてゝ二階へかけ上る。出目助も損料屋へ出かける。
ゾロ「サアやるべえ。」 アバ「ム、やるべえはいいが、圖武公メテはチヨイ〳〵と手先をさはる許りで行
きてえもんだ。どうも足下のやうに、むやみに腕をひつ摑んだり、ひつぱらつたりしては、あんまり
白ッポイ。相手になるものが怪我をするわ。そして大層な爪のはえやうだゾ、七草の儘か、おゝむせ
え。」 ゾロ「イイサ、それだとつて、夜夜中爪もとれねえわ。其の心持でおめへの方で氣を付けてく
んねえ。」 アバ「ハヽ、熊と角力を取りはしめえし。」 ツブ「ときに斯ういふ手を付けて、野呂松を一番と

わらせてやりてえ。」　アバ「どういふ手だ。」　ツブ「マヅどうかいふ手で、さきから、雙方行き違つてよろよろと跡すざりをして、背中と背中が當ると、マア爰へ來さつし。後合はせに、ツとかういふ身に、首が打違へになるだらう。」　アバ「ム、」　ツブ「ソレうしろへ手を出して、おれがあごへ兩手を掛けて、ヅイト前へこゞむはずみに、おれがヒヨイト足を上げて、後がへりをして、むかひ合ふといふ手だ。」　アバ「ム、コリヤアよからう、しかしさう美味くいくか。」　ツブ「おれがすればいくが、野呂松にはおぼつかねえ。そこであいつをいぢめてやりてえ。」　アバ「ム、いゝわえ／＼。トレひとツやつて見よう。」　ヅブ「サア、ソレなう背中が當つた。それ手を上げて俺があごへ、さうだ／＼。ソレよいイ、ト、わりい、サウ頓馬ぢやァいかねえ。雙方とたんにはずんでヨ。」　アバ「よし／＼それならあごへ手のかゝるが相圖、グットやるぜ。」　ヅブ「思ひきつてやらつし、あぶなくもなんともねえ。」　[illegible]がつてはなかつてんだ。」　ヅブ「ソレ背中があたッた。」　アバ「ヤあた、アヨ、イ、ヤサ」ト、力まかせに背負ひ上げる圖式六もはね返るはずみに、掛行燈をけおとしながら、アバ太郎が前へ地響きさせてどつさり倒れる。火燒に寐入りゐし子、この音におどろき、ワット泣き出す。　呑七「ヤア／＼大變々々、大方こんなことだらうと思つた。」　アバ「どうしてアノ行燈が落ちたらう。」　すゝ／＼「隣から明りを持つて來てくれねえか、いけねえ／＼。」このさわぎゆゑ、皆々のぞき見れば、下は眞暗闇、卒八は三味線を取り、わるいカン所にて、チ、、、テ、、、ホヲン　眞六「エ、古いわ／＼、そんな事より早く明りをやらつし。そしてモウこつちはたいてえ筋は通ッたから、跡は翌日の事としよう。

みんなが下へあゆみねえ。おだるさん早く行きナ、坊がどうかしたさうだ。」ト、燭臺をもち皆おりてくる。左次「どうしたどうした、またとちぐるつたらう、久しいものだ。」しろ「オヤ／＼油だらけだ、コリヤア大變な始末だ。ソレ／＼左次さん、そこは油だヨ、エ、裾を引きはしねえか。」左次「ホイ／＼、いやはや不始末許りするには困るぞ。マア坊をおこしてやらう。オ、いいサ／＼、堪忍しな／＼。馬鹿おぢイどもには困るノウ。サア／＼こりやア素人では直りさうもねえ、おつかアへ連れて行くがよからう。そしておだるさんも、あんまり遲くなつたらう、眼公おくつて行かツし。」おだる「ナアニこツちに居てはあんじる事ぢやアないよ。」眼「こつちの内をばよく／＼見くびつてゐると見えるノ。アツア、かうも武運につきはてたかチエ、。」左次「コレサむだツ口をたゝかずと、早く坊を連れて行かツし。おだるさんおほきに、そんならおした又チヨイトやつておくれ。」おだる「さやうなら、明日ははやアくやりませうネ。」のろ「バヽヽと早く四ツ起きたよ。」おだる「オホ、、、、、ハイどなたも明日、ヲ、やかましい子だナウ。」ト、おだるも早かへり行く。左次「坊は怪我でもしはしねえか。」眼「何々よつぽどはなれて居たから、怪我はしねえが、吃驚したのさ。」卒八「イヤ坊より圖武公がどうかしたぜ。オイ圖武公々々、何、何だと、何をいふかさつぱりわからねえ。」のろ「ホンにわからねえ事をいふね、中氣にでもなりはしねえか。」卒八「アレかむりをふらア、中氣ではねえとよ。」左次「ドレ蠟燭をもつて來さつし。ア、口を

「どうかしたのか。」「ハヽヽ、わかつた〳〵、顋をひつかいて、放り出したから、舌でもくつたらう。」「ナア、さうだ〳〵。」「まことにおかむりいふるわ、ハヽヽヽヽヽ、こいつァおかしい。」「それさんなら寒中にかいゝ、はやく付けてやらつし、内にはねえか。」「ムヽどんな頭取でも、寒の紅まではほれたものか、馬鹿々々しい役者だ。」「ムヽ紅ぐらゐでは直るめへ、なんでも膏薬を買つてこよう。」「それおしたの花見に喰ふことが出来ねえで、いゝ気味だナ。」「マア一寸してしやれの出来す、ア、口ははれてさうだナ。」「是れがほんの舌くひしめといふのだ。」「ナァハ公だといい酒落があるけれど、丈郎の誠と、トいふ見喝付きで、アハ公の舌ア喰ひあれエハヽヽ。」「悪いもいゝいゝわ、ア、ひつつこいわ。」「コレ怪我人が何かをおしな手ッ付をするぜ、ナンダ、アハ公真似をするらア、硯と筆をよこせといふのだ。何か遺言でもするのだらう。」「いゝえ、ソレ筆ヨ、ソレ紙。」「ナンダト、これまでは酒落どころではねえ、舌、喰つて、堪へられねえ、やつぱりしやれやアがる、ハヽヽヽ。」苦しきヅブ六がしやれにて大笑ひとなり、是れよりヅブ六に薬など付けさせ、皆々も茶番を含んでさわける。

二編　下之巻

夢ばかりなると詠じたる春の夜のみじかきも、悠人の常暁をおぼえず。夜に日を継いで高鼾、明けつはなしたる引窓より、光々たる日ざしに有明くらく、昼豆腐の聲まくらにひゞき、眼も漸う日を

さまし、枕元のきせるにて、なげちらしたる煙草入をかきよせ、尻から煙の出るほどたばこも呑み、灰吹のこぼれる程唾をはきため、少し人心付きしにや、眼七「サア／＼おそいぜ、おそいぜ、起きたり起きたり。」卒八「眼公一服付けてくだッし、さつぱり目がさめねえ。」眼公の早起ばかりは感心だヨ。サア／＼今日は大事の日だ、みんなが起きたり／＼。」左次「またあんまり早からう、ア、やかましい奴等だぞ。オイそこから一服吸ひ付けて下ッし、どうも目が明かねえ。」卒「ナニうぬちやアやッて置いても、二十日たつと明くもんだ。ソレたばこ、モウちつと手を延ばしたり。」左次「ヨッ ト来た、ア、ちつと手をのばさつしやい。」卒「無理な事許りいふぞ、猿猴ぢやアあるめえし、モウ是れで右の手は一ぱいはいだア。おめへこゝへおいとこ」ト、いふうち、雁首をとかくに持ちふりまはす故、ふきがらぬけて、仰向けに寝こに居りし呑七がひたいへホツクリおち、ロク／＼と鼻のわきへころげ落ち、うつゝ心に手を出してたゝきつぶせば、額中火だらけとなる、びつくりして飛び起きる。呑「アツ、、、、、ふんだ／＼、どうする／＼、ア、眼のふちに何か這入つた、コリアたまらねえ。ア、いてえ／＼、熱いこ」卒「ハ、、、、、、堪忍々々、こいつア熱かつたらう。」卒「寐耳に水ではおどろくだらうに、寐顔に火ではたまらねえ筈だ、ハ、、、、、、」左次「ヤアやまちの功名、今朝許りは眠ばなれがよかつたよ、ごきみよく／＼飛び起きたぞ、ハ、、、、、、」呑「わらひごとぢやアねえ、てひどいことをする、だれだ、アバ公か。」アバ「なんだか今のさわぎで目がさめたものを、どうして知るものか。」呑「野呂松だナ。」のろ「可愛さうに、びつくりして蟲が

おどろいたから、胸を摩つて居るところだ。」卒「イヤ〳〵卒八だ〳〵。此のべら棒めヱ、今まで口をきいて此のせんぎに掛つたら、鼾をかきやアがるわ。コレサビあんないたづらをした。」ト、馬乗りに乗りのどを、しめる。卒「アヽあやまつた〳〵、わるさをしたのではねえ、亀山だヨ〳〵。」左「亀山だとつてしかみ火鉢と間違ひはしめえし、イヤしかしよく似て居る〳〵。」卒「そばからあんな事をいふから、猶々ゆるせねえゾ。」左「イヤ有りやうは俺が吸ひ付けて貰ふと云つて、ツイ火皿から抜けたのだヨ。わる氣ではねえから、堪忍してやらつし。」卒「ムヽさうか、そんなら料簡してつかはさう、サウ事がわかればいゝ。しかし事は分つたが顔はやつぱり熱い。」出目「そのうへ腫くなつたら、面だか踵だか知れめえ。」左「イヤ面の皮が厚いといへば、菊石屋のヤシヤブシ。」黒七「ヤシヤブシとはなんだ。」左「ソレ菊石屋の息子よ。」黒七「フンあれか、をかしな名だナア。」左「仇名だわナ。アノつらを見なせ、紺屋で遣ふヤシヤブシのやうだぜ。アバ公より九石もつよからう。おまけに所々玉子トヂが有つて、けんぽ梨子のおかげで、鼻の穴はちつとばかりたすかつたが、上唇と鼻の先ととが付いて、なんでも犀角と角兵衛獅子で、半身上ふるつたといふ面で。」ヅブ「面のいひたてはてえげえにさつし。俺がつらまで引きごとにならべ立つて、おもしろくもねえ。そして其の面が、イヤつらおやアねえ、其の息子がどうしたといふのだ。」卒「イヤサその野郎が、つらにも似合はねえやつし形で、馬鹿にの

ろいやつョ、まるでアバ公さノ。横町の文字焼といふ豐後の師匠にひどくのろけて、おれに取持つてくれろといふ譯だらう。所でおれが事だから、何でも四文と呑込みやした。なれども男は悪いが、アバ公と違つて金満と云ふもんだから、ひよつと慾心で出來ようかと。」アバ「コレ番毎ァバ公／＼とあんまり安ッぽく引きだすなえ、いめましい。」のろ「ハ、、、、イヤそりやアいいが。」アバ「ムンニヤよくねえノ／＼。」のろ「その事ぢやァねえわ、呑公なんと其の一件はおもしれえぜ。思ひれ煽り付けて、おごらせてやらうではねえか。」呑「そこで聞きねえ。それも其の氣だから、文字焼が所へずつとしかけた所が、つひぞ行きもしねえうちだから、なんだか間がわるさうなものだが、さうでねえノ。」呑「ソリャア其の筈だァ、お袋が古狸に、娘が九尾の狐だものを。」呑「狐でもいい、うつちやッて置かッし。」のろ「それから行つてどうしたよ。」呑「そこでお袋めが、いい鹽梅に、呑さんごめんなせえ、ちよつと湯へ這入つてまゐります、ゆるりとおあそびと、ずつと出て行き、あとはさし向ひとなつたから、是れぞ天の與へと、段々噺をたぐりよせて來た所が、とんだ受けがいいから、彼の息子の事をいひ出すと、オヤあのヤシャブシとやらの事かえ、わたしは又こトいつて、につこり笑つてゐるから、おめへ誰が事だと思つたといつたら、私やァおまへかと思つたと、おつにむつて來たから、おれなら又どうする氣だといふと、おまへならどうともと、パット顔を赤くしたから流石のおれも、顔が少

しほかノ＼としてきた所を、手で撫でると、吹殻をたゝきつぶした物を、びつくりしめえ事か、腹を立つめえ事か。」[illegible]「コレ今までのは夢のはなしか、べらほうめえ。人にはまじめに挨拶をさせてやアがつて、いめえましい。」香「イヤサゆめとは思はれねえ。あんまり殘りをしい。」[illegible]「こりやはまれ寔とは思はれねえ、夢ならばずゐぶんありさうな事だ。しかしあんまりたわいのねえ事を、馬鹿長くひつぱつたぞ。おもしろくもねえ」[illegible]「さうサ、それにしては神といふ天窓だやアねえか。」[illegible]「されば是れ程の日和に、夕部圖武公が舌を喰ふといふもふしぎサノ。」[illegible]「そりやア舌を喰ふ筈だ、今年は江ノ島に開帳が有るものヲ。」[illegible]「だうりで犬がしきりにほえると思つた。」[illegible]「湯へ這入ッたとつて、金時にかなふものか。」[illegible]「エ、いいかげんにしろえ。イヤハヤどいつもノ＼、床敷ためわりい事だ。夜着お背負つて起きかへつたさまは、お菰が蒲鉾小屋にゐるやうだ。」[illegible]「[illegible]」こわいろにて、[illegible]「葵下坂二ッ胴、パッタリ。」[illegible]「どうしてさう味くは見えねえ、伊賀越の般若坂でして居らア。」[illegible]「アノ＼みんな一所に鄭だあだノ＼、ヤレノ＼ふびんや、今朝は圖武州チウの音も出ねえナ、舌はどうだ。ちつとはいいか、しかしひとりづゝも口のへるもよからう。」圖武「チウノ＼其へ、その位なことは手輕いもんだ。」香「ハ、、、、とんだあどけなくつていい、よつぼどおもしれえノ＼。」ッブ「餘い面白くもくもねえ、

ぢえッてえ。」アバ「ハ、、、、いい〳〵、有り難え〳〵。」ツブ「なんの有いがてえ事が有ゆものか。何でも人の悪い事をいふと、嘻ひがやつがゆ。」出目「イイサ〳〵坊はいい子ダョ、かんにしろかんにしろ。」左次「イヤそれはさておき、なんと二三口飯をくはねえやうな心持だが、腹直しに今朝は雑炊としようではねえか。」眼七「よからう〳〵。ろくに飯といふものを食はねえから、お冷がどんと有るからちやうどいい。」呑七「奇妙々々、眼公早くやらつし。」眼七「やらしも能く出来たア、おれにこせへさせて食ふ氣か、押しいつええ、呑公やつて下ッし。」呑「ヘン此方は座頭様だゾ、平日は兎も角も今日は大切な身分だ、アバ公やらつし。」アバ「此方とても其の通り、立唄立鼓藥帶でござる。」左次「どいつもどいつも火が高ぶつて居るから、いけるもんぢやアねえ、そんなら拳でやるがいい。」出目「よからうよからう、狐でいくべエ、みんな一所がいい。一人勝ひとり負は抜けて、のこつた者を三助とし よう。しかしひとりでは誰にしても、あんまり可愛さうだから、三助役を二人こせへよう。」左次「よしよしサア三打だよ。」のろ「たれきたシャン〳〵。オヤ左次さんナゼ見てゐる。」左次「なんのおれはせずといいわ、此の家の主だものを。」のろ「なに〳〵あるじでも内待でも用捨はねえ、ひつ遣ウ〳〵。」左次「ヘンかけまの夜鷹ぢやアあるめえし。」眼七「あんまりあるじ〳〵と内びらをきると、居さふらふに居てやらねえからイイ。」呑「サア手を上げた〳〵。」左次「なさけねえやつらだなア、よし〳〵サア

こい。アイヨ／＼ヨこさア。まて／＼、さア／＼卒八眼七が鐵砲で、あとはいくらな名主、ヱ奇妙奇妙。」六助「御苦労ながらふたりで六助どん、早く頼むヨ」由五「サア／＼こちらには黒眼鏡一匹して來なうナア呑公。」由「みんなが行つてくるうちこせへておかつし。一人はこゝに居てお膳をあけるが、ハンいい心もちだナ。」これよりみな／＼すこしばかりふたに膳をくはへ、湯へ出て行く、跡は卒八眼七とばかりにて　眼七「いきな／＼しいさに逢ふナア。」卒「コレ見さつし、此もおけずに行きやアがつた。」ト、小言いひながら、手水をつかひ、卒八は膳を出し、ことさら世話をする。眼七はへつゝいを焚き付ける。眼七「ふけえ氣でもねえ眞木だぞ、ヅブ生木ださうで燻ッて詰り居るわ。なんと世帯をするも面倒だから、醤油で水雑炊とやらかさう、菜も少しあるし。」卒「雑炊、あつさりしていいもんだ。それとも慾いといふやつは、食はてねえ許りだ。」眼七「おけへねえ。そこで、醤油をとつさりかいてくたつし、したおは此の位でよからうノ。」卒「ドレもうちつとたんとでもいい、雑炊はうすいのがいい。ホイホイよからう／＼。」眼七「イヤモウ此の眞木にはこまるぞ、又いぶりだしたわ。此の又火吹竹はなんだらう、さつはり役にたたねえ。大家様と違つて、吹竹の尻の穴は、なりたけ小さいがいい物だ。ホイ、ホいぶるぞ／＼。」卒「菜をきるべエ、こりやア洗ツて有るノ、よし／＼。アッア手鍋ごけたり水仕業、ア浮世ぢやナア。此のうしろはおつな合方へ磯を入れて貰ひてえ。」眼七「このうしろなら總一陸が有る許りだ。それにしても大層いぶる事だぞ。もう飯を入れてもよからう、オ、いぶい／＼。」ト、鍋をしかけな

から鍋蓋をとり、顔を入れてかきまはし　眼七「卒公此のくれゑなゆるさでよからうか。」眼「ム、よからう／＼。ァ、ソレソレ水ッ鼻が、ア、あぶねえ／＼。」オットッ眼七はすゝりこめども間にあはず、ポタリ／＼と二雫ほど鍋の中へおとす。卒「ヤァ大變々々、ことこはしをやつたぜ。」眼七「己もすゝつたけれど間に合はなんだ。」卒「すゝらずと手のかゝとで撫で上ければいいに。」眼「さうやればよかつたが、其の期に及んでは、どうも當意即妙とはいかねえもんだ、おれもまだ水ッぱなの方は素人だ。イイどうするものか仕方がねえ、見ぬ事清しだァ。折角こせへて、是れしきの事で捨てられもしねえ。」卒「あんまり是れしきな事もねえぜ。そして見ぬことなら清しにもせうが、見た事はどうしてもきたなしにやアけへねえ。」眼「ナニその氣で脇の方を食はつしな、そつと盛ればいい。」卒「わきがいいか中が能いか知れるものか。」眼七「それもさうさノ。かういふ時に青ッぱなだと、かたまつてゐるから有家が知れていいけれど。」卒「ガエイ／＼、おらァ食はねえゾ／＼ゲツ／＼。」眼七「そんなねへに、きたながつてくれる事ァねえ、頼もしくねえ男だ。」卒「ばかな事をいふ、頼もしい、頼もしく無えのといふ譯じやァねえ、蟲がきらふのだから仕方がねえ。無盡の斷りでも云ヤァしめえし。」眼七「それでも飯をみんな入れて仕まつたから茶漬とはいかねえぞ。」卒「どうするものか仕方がねえ、干死ねばとつてたゞやァ食へねえ。」眼七「足下は食はずはいいけれど、みんなに沙汰なしだよ。」卒「知れた事よ。そりゃァいいが、眼公紙を一枚くだつし、お下屋敷へ御幸がある。」

眼七「おとしがみな〳〵火鉢のひきだしだ。」卒「すッとり有馬山。」ト、雲暗へおはこみ、しば〳〵出て、きたり手水鉢にて手をあらひなどし

卒「オヤ爰のうちのは手拭かけがないの、眼公ちよつと借して下ッし。」眼七「ナイ袂に有る、ソレだしな。」卒「鍋をおろしたの、何だ中をのぞいて居るのだ。」ト、いひながら、眼七が袂へ手を入れる　眼七「イ、コレサ手水の雫が這入るわ。」卒八はうろたへ、眼七が袂より鼻紙とともに手拭を引き出し、同じく鍋の中へはな紙を落す。眼七「ヤア〳〵モウ〳〵かたはぬかなはぬ。」卒「何の蓋を取つて置くから悪い。中を見て居たとつてはじまらねえ事だのに、段々のみをおもくしたア。どうせこつちは食はねえ氣だからかまひはしねえが。」眼七「それたとつて食物の上へ濡手を出す事もねえ。」卒「こつちは食物とは思はねえ、くへねえ物だと思つたから、ヨ。是れがほんの手水の手から水がもつたのだ。」眼七「イヤ水ッはなのうちは俺も食ふ氣であつたが、跡で味の調合で、ぐつと食がすゝまなくなつた。」卒「おまけに鼻紙も、三四度もお役をつとめたやつだ。ならびに袂くそなぞも少々、是れをくへば、がうぎなきほひだ。」眼七「むかし幡随院長兵衛なぞは食つたさうだ。」卒「幡随院長兵衛でも、誓願寺半兵衛でも、是れ許りは食へめえ。ア、ゲッ〳〵。」眼七「おれもをかしくゲエイ。モウ〳〵二人は喰ひッこなしときめよう。ア、引ゲエ〳〵。」ト、両人は胸をわるくしてゐるところへ、みなみな湯あがりにてかへる。のろ「ア、引いい湯であつた。コレ〳〵お茶をくまねえか、氣のきかねえ助どもだ。」

眼七「まだ茶が出来るものか。」左次「ナンダまだ茶もこせへねえのか、ばか〳〵しい、なにをして居た

のだ。」眼七「何をしてゐるものか、雜炊を拵へてゐたのよ、さういちどに兩方出來るものか。」出目「兩方だとつて、別に手間のいることでは有るめえし、茶釜と兩方火を焚けばいいに、イヤモウいつかうなトンチキだゾ。」眼七「夫れに眞木が生で、一處さへいぶつて許りゐて、やう／＼焚いたものを、いいわさちつと待たつし。ぢきに涌く。」ト、又火を焚き付ける。ヅブ「いやはや不始末な事だゾ。二人が／＼ナゼさう氣が利かねえナウ。」左次「アノわくうち待つてゐると、雜炊がかたまつて仕舞ふだらう、マアやつつけよう。其のうちすこしは湯もぬるむだらう。」出目「さう／＼、さめてはいかねえやつだ。アノ手ぎはでは、どんなこぜへやうをしたかと、蓋をとりやア、水雜炊とやつたナ。出來た／＼。」アハ「そいつはおつに氣どつたわえ、妙々。中へなにを入れた。」眼七「エ、中へか。エヽ、菜とエヽ。」卒八と顔を見合はせ、「菜許りだつけノ。」卒「さうサ、マア菜許りのやうなものサ。」左次「なんのこつた、樣なものがをかしい。サア／＼眼公盛り出さねえか、エ、七めんだうだ、てん／＼に手盛とやれ／＼。」一二アア妙々妙鹽梅だ、うめえ／＼。」ヅブ「おやゝ、舌へ泌みて熱いものは少々難儀だ。」卒「どうだ、皆がうめえか。ヤレ／＼ゲエイ、鹽加減はどうだ。ゲツ／＼。」左次「なんだ。人の物を喰ふそばで、ゲイゲイと小ぎたねえ男だ。」卒「ヘン、ゲイぐらゐがきたなくつて、よく雜炊を喰ふぜ。」左次「ざふするが何できたねえものか。眼公も卒公もナゼ／＼はねえ。」眼七「イヤ／＼大嫌ひだ。人の喰ふのを見ても

胸がわりい。」呑「ナゼ又そのやうにきたながるだらう、をかしいナア、」ア二「ナニサこしらへながら、みつツ鼻をたらし込ンだとよ。」眼七「イヤ／＼だれか見て居たさうだ。」と、卒八が顔を見る。のろ「これはほんたうに水ツ鼻を落したか。おらアじやうだんにいつたら、ヤア白状におよんだ。ヤア／＼とんだ物を食はせた。ゲエイ／＼。」のろ「いやはやとんだやつらだ、是れはたまらねえ。ゲア／＼胸が、ア、どうも、ペツ／＼。だれだ眼公か卒八か。」出目「どつちにしてもきたねえにちげへねえ。ゲツ、ア、たまらねえたまらねえ。」眼七「有様は俺がたらしこんだけれど、夫れより卒公は、又雪隱へ行つて手を洗ッた雫をたらしこんだから、實にきたねえ事はきたねえのよ。」左次「ヤア／＼大變な事をいふ。道理でうぬらは喰はねえ、いま／＼しいやつらだ。オ、きたねえぞ。ゲツ／＼。」ノバ「聞けばきく程胸が、ア、ゲエイム、ペツ／＼。」呑「なる程だらうで、鹽がちと辛くつて、おつな匂ひがすると思つた。ゲツ／＼。」卒「ハヽア其の匂ひは眼公が鼻紙の匂ひだ。すきげへしだから、くせえ筈だ。」左次「エヽ、はなつかみまで入れたか、そりやア又どうして入れた、イヤ／＼聞くめえ／＼、もう／＼なんにも言はずに居てくれろ、聞けばきく程、ゲツ。胸がア、ム、ゲイ／＼。」是れにつゞいて總座中小間物の出見世にて大さわぎとなる。此のうちいろ／＼をかしき思入草稿あれども、丁數かぎりあればぐつとはしをる。暫くあつてやう／＼靜まり、腹直しの酒にてみな／＼氣色を直し、左次「サアだれぞ駒形へ行つて、船をこしらへておくがよからう。」出目「さう／＼しゆんはつれだから、すぐにといふ譯には行くめ

え。」 ノハ「さうよ役者の外は先へ行くがいゝ。そして船宿もその味ひを知らずではいかねえから、船頭にすつぱり相圖をのみこませて置くがいゝ。サアノ＼早く行つたりノ＼。」 左次「りう公は此の箱を裏のおばさんの處へ持ッていつて、引拔のあんばいをよく致へて頼まつし。そして箱には婦人がなくつてはつまらねえから、おだるさんを頼んで連れて行かう。今日はおれも假成に彈けさうだけれど、二挺だとなほいゝ。」 宗「所作の方はたいがい夕きまつたから、もう稽古はいいとして、はやく出かけよう。」 りう「アバ公との立廻りはどうだらう。」 左次「イヤノ＼これはモウなしがよからう。なま中間で立廻りらしい事があつては、見物にかんが付いてわるからう。」 ツブ「其のタチが貰ひになつては、己が骨折がむだになるナ。いまノ＼敷イ、舌をくつたも犬死だ。」 左次「ハヽヽヽヽ違へねえノ＼。サアノ＼船宿へ行くものは早く出ねえか。眼公おだるさんを頼んで來さつし。」 ト、それノ＼に手配をさだめ、やゝあつて支度とのひければ、皆々ぬけぬけに出てゆく。

大江戸の名所多きその中に、月雪花の絶景を兼ね備へたる隅田川、實にや賑ふ花見月、歌人雅人はいふもさら、親の代より仕出したる、伊勢屋の亭主出ぎらひの、内田の女房かしこの嫁、鬼を留守居に命のせんたく、かせぎ男も繰女も、花にうかるゝ其の人に、ふたうかされて出る人と、群れつどひたる隅田堤、崩るゝ許りの人足は、蟻の往來にことならず。彼の催しの人々は、かねて期したる手わ

胸がわるい。」ろ六「ナゼ又そのやうにきたながるだらう、をかしいナウ。」アミ「ナニサこしらへながら、みづッ鼻をたらし込ンだとよ。」眼七「ナニ〱だれか見て居たさうだ。」と、卒八が顔を見る。ろ六「これはほんたうに水ッ鼻を落したか。おらァじやうだんにいつたら、ヂキ白状におよんだ。ヤア〱とんだ物を食はせた。ゲェイ〱。」のろ「いやはやとんだやつらだ、是れはたまらねえ。ゲア〱胸が、ヤ、どうもペッ〱。だれだ眼公か卒八か。」出め「どつちにしてもきたねえにちげへねえ。ゲッ、ア、たまらねえたまらねえ。」眼七「有様は俺がたらしこんだけれど、夫れより卒公は、又雪隠へ行つて手を洗ッた雫をたらしこんだから、實にきたねえ事はきたねえのよ。」左次「ヤア〱大變な事をいふ。道理でうぬらは喰はねえ、いま〱しいやつらだ。オ、きたねえぞ。ゲッ〱。」アバ「聞けばきくほど胸が、ア、ゲェイム、ペッ〱。」卒八「なる程だうりで、鹽がちと辛くつて、おつな匂ひがすると思つた。ゲッ〱。」卒八「ハ、アその匂ひは眼公が鼻紙の匂ひだ。すきげへしだからくせえ筈だ。」左次「エエ、はなつかみまで入れたか、そりやア又どうして入れた、イヤ〱聞くめえ〱。もう〱なんにも言はずに居てくれろ、聞けばきく程、ゲッ。胸がア、、ム、ゲロ〱〱。」是れにつゞいて總座中小開物の出見世にて大さわぎとなる。此のうちいろ〱をかしき思入草稿あれども、丁數かぎりあればぐつとはしをる。暫くあつてやう〱靜まり、腹直しの酒にてみな〱氣色を直し、左次「ヨアだれぞ駒形へ行つて、船をこさへておくがよからう。」出目「さう〱しゆんはづれだから、すぐにといふ譯には行くめ

え。」 ナバ「さうよ役者の外は先へ行くがいゝ。そして船宿もその味ひを知らずではいかねえから、船頭にすつぱり相圖をのみこませて置くがいい。サア／＼早く行つたり／＼。」 左次「いろ公は此の給を裏のおばさんの處へ持ッていつて、引拔のあんばいをよく教へて頼まつし。そして船には婦人がなくつてはつまらねえから、おだるさんを頼んで連れて行かう。今日はおれも假成に彈けさうだけれど、二挺だとなほいい。」 卒「所作の方はたいがい夕きよつたから、もう稽古はいいとして、はやく出かけよう。」 いろ「アバ公との立廻りはどうだらう。」 左次「イヤ／＼これはモウなしがよからう。なま中間で立廻りらしい事があつては、見物にかんが付いてわるからう。」 ヅブ「其のタテが貰ひになつては、己が骨折がむだになるナ。いま／＼敷イ、舌をくつたも犬死だ。」 左次「ハ、、、、、違へねえ／＼。」サア／＼船宿へ行くものは早く出ねえか。眼公おだるさんを頼んで來さつし。」 ト、それ／＼に手配をさだめ、やゝあつて支度ととのひければ、皆々ぬけぬけに出てゆく。

大江戸の名所多きその中に、月雪花の絶景を兼ね備へたる隅田川、實にや賑ふ花見月、歌人雅人はいふもさら、親の代よりの仕出したる、伊勢屋の亭主出ぎらひの、内田の女房かしこの嫁、鬼を留守居に命のせんたく、かせぎ男も繰女も、花にうかるゝ其の人に、まだうかされて出る人と、群れつどひたる隅田堤、崩るゝ許りの人足は、蟻の往來にことならず。彼の催しの人々は、かねて期したる手わ

けの通り、アバ太郎は侍のこしらへ、呑七出目助兩人は後見の心にて、そこ爰とぶらついて居る。出目「すてき／＼呑公見さつし、うつくしい／＼。ハヽア奥樣はおひめひだナ。」呑「ほんにこりやァ綺麗だ、イヤ大層な女中だナア。奥樣は日傘でかこつてさつぱり見せねえわ。おだいじのものだナ、御無心ながらちつと見せて下さればいいナ」出目「取り卷いてゐるのは、どれも一粒えりだ。ナツアヽりゝしいもんだ。なるほど、

人は武士なぜ傾城にいやがられ

といふ川柳があるけれど、女は武家方の事だ。どうもさつぱりしていい。」呑「そのさつぱりといふやつが、やつぱりこつちがさつぱりしねえからの事だヨ。奥女中といふと、何か不自由らしいから格別しんかうがあるのだ。アヽどれも／＼中肉で、しる澤山らしい代物だ。」出目「さういふ此の椎茸からはさぞいいだしの出る事だらう。ヲヤ／＼あとの方はチトむつかしいぜ。こりや突きこみに買ふと損をするぜえ。だいぶ落が見えて來た。オヤ／＼、これ／＼申し尾上樣、あのいおわるいお局のトいふ形だ。」呑「うさアねえ、右と左で二人づゝ遣ふといふ人形だナ。ハヽア秋葉がお小休みと見えるわえ。イヤそれはさうト、アバ公はどつちへ行つた。」出目「今みめぐりの茶屋に見えたが、野呂松はどこをうろついて居るだらう。全體こゝらまで、一所に來ようといつたに、先へ來てしまつた。」呑「何りのろ

公もあの形で、道々なぶられるをせつながつてよ。」眼「さうさ淺草の通りから、氣違にされてもつらからうナア。」呑「イヤ今日の催しはきつとはねるだらう。のろまめえうまく案じたヨ。」眼「さうよ、ア、しかし氣狂のうちがよつぽどつらいぜ。あんまり色氣がねえナア。」呑「どつちしてもねえ色氣だからやけでいい。イヤほんに此のやうに來てはあんまり來過ぎるだらう。奥様にひかれてツイ、うかうか來た。」眼「マダ〳〵早い。もう少しついて行つたら、奥様にあはれる事も有らう。」呑「何の見た所がギヤマンの船だ、ばか〳〵しい。歸つてアバ公と一所に茶でも呑まう。」ト、又みめぐりへ立ち戻りアバ太郎が休み居る茶屋へはひり、呑「イヤ是れは、アバ之進さましばらく。」アバ「ム、呑七か、ハア出目助も同道ぢやナ。コリヤ手前達も花見か。」出目「へイ左様でございます。あなた様もお花見にいらツしやりましたか。成程此の節は、蝨さへごろ〳〵這ひ出しますから、御尤もでございます。」アバ「コリヤわいら武士を嘲弄しをるな。」呑「イエどういたしまして、武士はてうろうにはなりません。どうか致すと禪宗の坊主などがなるさうでございます。勿論昔軍の有つた時分、ひやうらうは遣ひましたさうだが。」出目「しかし只今では、あなたがおしくじり遊ばしますと、浪々にはなりますが、兎角勞の字が付いてはむつかしいと醫者も申しました。」アバ「イヤこいつらは重々の過言、最早聞き捨てならん。」ト、刀へそりを打ち立ちあがれば茶屋の婆々は大きにおどろき、アバ太郎をおさへ、婆「マア〳〵御料簡なさつて下さりまし。コレおまへかたとんだ人だ。お侍様

に向ッてぶしつけな事ばかりいはッしやる。そんな人は爰へは置かれねえ。はやく出てゆかッせえ。」呑「行かッせえたアなんだ、此のばゝあめえ。お客様だぞ。」婆「ホンニ其の様なお客はいりませねえ、商賣の邪魔になる。早くそッちへ行かッせえ〳〵。」ト、外の方へつき出す。出目「ハヽヽヽヽ、コレサばゝア、そこはおめへの事にねえ。じやうだんだよ〳〵。是れいゝ加減にしなせえ、アバ公。」ばゝアうろたへて平八をおさへ、金剛力を出して引きずり出す。呑「是れお前方氣でも違ひはしねえか、じやうだんも事による。腹をたつてござる所へ、又いも顔の旦那へ向つて、アバこなんぞと言つてたまるものか。そんなに喧嘩がしたくば、脇へ行つてして貰ひませう。爰ではいやだ。」ト、呑七を突き飛ばし、又立ち戻りて出目助を引きずりだす。出目「是れサばゝアさんや、じやうだんだヨ、洒落だといふに。」婆「イヤ〳〵わるいしやれだ。なんにしろ爰ではけんのんだ。わきへ行つて休みなせえ。」呑「こりやアどうもならねえぞ、コレアバ公いいかげんに解けねえか、いつまでのさばんで居るのだ。困りきるわナ。」アバ「コリヤ〳〵婆アかまふな〳〵、兩人とも覺悟しやれ。」ト、立ちはだかれば、ばゝアは覺悟になり婆「モシ〳〵旦那さま、六十になりますばゝアが、是れ手を合はせて拜みます、どうぞ御料簡遊ばして下さりまし。爰でもしもの事が有りますと、今日から商賣を休まねばなりません。ハイ一年に一度の花の三月でござります。」アバ「いかさまナ、ア、料簡のならぬ奴なれど、血をあやさば社參のけがれ、助けにくい奴なれど、茶屋の婆アに免じ、命許りはたすけてくれう。ア、命冥加なうす

蟲から、以後きつと愼み居れ。」　卒「ム、ヽあの面を見さつし、しかし時平氣どりにはいい面だナア。しかしぽヽが忠義とはなんの事だらう、あんまの文盲でをかしい。此の茶屋が松ノ尾とでも云ふとうめえナ。」　眼「ム、そして此のばアさんが、中氣病だと猶いいわ。松ノ尾が中氣に冤じとおぐるわ。」　卒「イヽヽ何でもうつちやつて置きなせえ。おれが命をひろつたから、早くそつちへ逃げなせえ。アひつッこい人達だ。」ト、又立ちかヽツて押し出せば、往來繁き馬田場、たちまち數多人立ちしければ、今度しやれにもしにくくなり、小言たらたらわかれ行く。　卒「いめえましい婆アだナア。そしてあの野郎奴エ風並のいい事だから、やみとりきみちらして、たうとうまじめに仕廻しやアがつた。」　眼「ハヽヽヽ、洒落がかうじた物狂ひといふめに逢つたなア。しかし仕組んだ事よいうまく出來たぞ。おらが番にはかういふ筈に書くべエ、手輕くつてとんだいい。」　卒「さうよ此の位ひッかつげば澤山だ。是れへちよいとした落をつければやんやだ。なんと追ひ出されればなしもあんまりくやしい。舖へ行つて一陶下げて來て、二人で歸りの茶屋へ這入つてぐいぐい呑んで、アバいやらうに氣を惡くさせてやらうではねえか。」　眼「イヤイヤそんな事をいふと、左次さんが又小言だ。それよりのろ松はどこをうろついて居るだらう。もう出てくればいい、はじめてもいい時分だに、秋葉のかたへ行つて尋ねて見よう。」ト、兩人は秋葉へ志し境内に至り見れば、玉垣のあたり大勢人立ちして集まりゐる故、もしやと立ち寄り人押し分けたちいり見れば、こはいかに、のろ松は高手小手にいましめられ、そばに侍中間つき添ひてゐるを見て、　眼「ヤアヤア、ひどい目に逢つてゐるぜ。」　卒「さうよの、どういふ理窟か知

らねえが、よもや盗人もしはしめえ。何もあれねえに縄をかけることはねえ。なんのかの折助どもた、きなゞつて連れて行くべエ。」出目「とんだ事をいふ、先は武家方だぜ。めつたな事をしてこつちまで天井見ちやァつまらねえ。たしかに悪ふざけでもしたらっこ慮外者だから手打にされても仕方がねえ。アバ公の「侍」とはおだふわ、マツ譯を聞いて見よう。」トいひながら、そばへ至り　出目「モシへ、此の者は私共見知りましたものでござりますが、どういふ事で此の様にしばつて置くのでござります。」侍「貴様達此の者のつれか。」卒「イエ連と申すでござりませんか、一體亂心致して居ります故、何ぞ御慮外でも致しましたなら、幾重にも御料簡なさつて遣はさりまし。」侍「成程亂心の體でもあらう。」卒「左様でござります。面にも似合はぬ色氣違で。」侍「成程色氣ちがひでも有らう。見らるゝ通り御前様のお供先で、お階の女中達へすいついたり追ひ廻したり、いやはや以ての外尾籠がましき狼藉に及び、すでに切り捨てにもなるべき所、御前様のお詞がかゝって、追ひはらへども、お言葉にあまへて猶々この邊へ立ちさはり、甚だ御遊山のさまたげに相成るゆゑ、お慈悲を以て此の通り、しばり上げて置くおや。」出目「へエ、それははや不埒千萬な奴でござります。さりながら氣違の事ゆゑ、どうぞお許しなさつて遣はさりまし。」侍「イヤサ此方のゆるす心なれども、縄をとくとまた女中方へ狼藉に及ぶゆゑ、是非なくお歸りまでは番をいたしてをる。此方も迷惑至極ぢや。」卒「御尤もでござります。しかし是

れからは私共が引きとりますからは、けしておじやまはさせませぬ故、どうぞ御許し下さいまし。」

ト、兩人ひたすら詫びければ、餅についたるやつかいもの、引き取り人こそ幸ひと繩をとき兩人へわたせば、そこ〳〵に挨拶してわかれる。吾七は小聲にて、

吾「ナゼ又わるひつこくふざけたらう。」 のろ「あんまり美しいやつが、わや〳〵とそやしたてやアがつたから、そこは好きの道、畜生の淺ましさには、ツイひツこくなるのよ。それに又親父の侍めがひどくおこつて刀へ手をかけたから、こいつたまらぬと逃げ出すと、聞きねえ。奥方はるかに御覽有つて、ひかへイ〳〵とお差留め遊ばして、ア、綺麗ナ男ぢやが亂心と見える、不便なことぢや、隨分いたはつて遣はせといはれた時は、有り難くつてうれしくつて、ちりけ元からぞは〳〵と總身がとけるかと思つた。」 吾「さうすると縛られたのだナ。ごふさらしナ。そして亂心と見えるとは言つたらうが、何きれいな男だといふものか、おほかたきらひな男といつたのだらう。」 出目「何といつたとつてはじまらねえ詮議だ。サア〳〵遅くなつた。いい鹽梅に人がついたから早く行かッし、船は今川丸ダヨ、聞違へめえぜ。」 のろ「合點だ合點だ。」

ト、是れより出目助吾七は少し引き下り、のろ松はさま〴〵のそらごとをしやべりちらし、早足に堤へ上り、三めぐりの上り場へ心ざして來る。船中よりはるかに見て、手ぐすね引いて待ちゐたるアバ太郎も、土手の眞中にたち出でて、來るを遅しと待ちかける。出目助吾七は最早岡には用なしとかけ拔け、船へ來つて相圖をする。往來の人はそりや氣違ひぢやと集まり寄る。 のろ「蝶々徐かに差しこめア、差しこめア、だんほさんや〳〵。」 ト、程よき場所へ來り、唄につけたる古草履をアバ太郎に打ち付けんと、うかきよろ〳〵見廻せば、數多の人散早速それと判らねば、紐をもつてくるくるとふり廻す。後へ黄八丈にヒツ襟の小滴縞ごろうの帯をメ、朱の二重緒雪駄をはき、耳にタコのある大若衆うつかり來かゝる横顔へ、彼の古草履をホント當てれば 大若「イヤこの野郎めが。」

ト、いひさまのろ松が大首をこぶしを固めてはりとばせば、打たれてハツト目もくらみ、大首を抱へてよく見れば、雲つく許りの大若衆、コリヤたまらぬと逃げいだす、船には待ちかけゐし、舟で相図に船頭共、もやひをといて水馴棹岸のかたへにつきたてて、待構へしたる其の所へ、大首を抱へてのろ松は、船を目あてにかけ下りる、四本もしどろもどろにこけつまろびつかけ来り飛び乗る途端に、船頭は待ち構へたる力足一度にヤイと押し出せば、まだ踏みしめる足元のよろめいて、所もみよし際、廻る小縁にたを向きて、川へ逆さに倒れこむ、すかさず船頭手をのばし帯を取ッて引き上ければ、首は取れこぬツカ〳〵、船頭はびつくりおどろき、眼二「ヤア是れ首がぬけた。」ト、手をふるはせてふり出す。「エ、其れは鬘だヨ。それ〳〵本當の首を出したわ、はやくつかまへて下さえ、早く〳〵。」ト、あせり廻り、船中渡さずさうに立たれ、やう〳〵のろ松を引き上げ、いろ〳〵介抱する。アバ太郎は岸に立ちてうろ〳〵する故、船へ呼び入れ、一とつ沖へこぎ出す。卒「どうだのろ公氣は慥かか。」のろ「みんなが案じなさんな、何ともねえ〳〵。」左次「なんともねえ事も有るめえ、水をよつぽど呑んだらう。反魂丹でもやらうか。」のろ「ヘン水をのんだに反魂丹でも有るめえ、是れと知ッたらこせうをもつておきればよかつた。」出目「ハ、、、イイ〳〵、しやれが出る様ではきつい事アねえ。」左次「そしておつた物だ、どつさり著込んで居たせゐか、からだはちつとも濡れねえからおつだ。」呑「其のかはりかもた衣裳はちりにしたらう。」出目「そこでおれが一首うかんだ。

卒ト中通りの引込みめくが、

船へ飛びかゝらはとれる其の中にナゼのろ松は濡れなかるらん。」

アバ「そんれうよろこべ下著はおやくに立ちさうだわヤイ。」みな〳〵「ハ、ハ、、、イイ〳〵出來た〳〵。」

マ、はては大わらひとなり、是れより氣をかへて土手の櫻を船より詠め、終日呑みくらし後の趣向を約しつゝ、酒狂亭へぞかへりける。

廻状

益御機嫌能く御揃ひ御なまけ被ㇾ成珍重御儀に奉存候。しかれば此の程相續きしくじり申し候花見茶番の一件、おしの強き連中故恥かしくは思ひ不申候へども、此の度は是非々々首尾能く致さすしては、作者も迷惑に御座候間、何分一ト當あて申し度く候。右に付き今日拙亭に於て御相談致し度く尤も小田原にては無御座候。御失念なく被二仰合一御來駕奉ㇾ待候、以上。

中夏十五日

左次郎

眼七

安波太郎樣
幸八郎樣
圖武六樣
呑七樣
出目助樣
野呂松樣

もし御不參の御方は、今日到來致し候宮戸川左升
呑みそこなひ被レ申べく候。いぢきたな御連の御事
ゆゑ、御恨み不レ被レ成候樣爲レ念申し入れ候。

眼七

萬歳の才若がとのさまもお好き、おくさまもおすきと云つて腹を抱へさせしは、いにしへより初春のをかしき限りなりとて、佐保姫も雪どけに山の笑ひしとか。夫れはともあれ滑稽は世におこなはれてどなたもおすき、人面樹の花もわらへばこそ落をとらせし姿見が古人大谷德次が事道外に妙を得手ものは瀧亭が口癖なり。かの八笑人が花見の趣向も煙草休みの三編目、また相かはらず石部金吉頤をはづしてにこ〳〵と笑ふ門には福來る、差合のなき酒落まじりを　おや子笑ひましよ作ごとし。

二代目そま人門人　駒　人　誌

花暦 八笑人 三編上冊

初編目次兩國川催涼蓮池之會合

春過ぎて夏來にけらしきのふまで、笑ひし山の時鳥は、四季節々の季違ひは、彼の本丁庵の戯れに、

鬱 馭 秋 參 贅（はるうはきなつはけんきであきふさぎふゆはいんきでくれはまごつき）

と、譃字盡しのうそならぬとは知りつゝも、呑み明し遊び續けし八笑人、かの座頭の左次郎は、世間晴れたる樂隱居、元よりの人目忍ばずの、池の邊の呑みの會所、青葉凉しき夏木立、朝顏さへも我儘に、這ひわたしたる庵の戶、表の方より足音は、序文に記せし廻狀の、招きに集まるなまけ連中、打ち揃うたる六人連、先に立つたる安波太郎、「ハイ〳〵お賴み申します、左次郎樣は御在宿でござりますか。先刻はお使を下されましたが、それに付き安波太郎、茶八、闇武六、呑七、出目助、野呂松、打ち揃ひまして參上仕りました。此の段宜しくお取次お願ひ申します。」ト、あんないすれば、庵のうち、初編よりしていつきの居候やら、御主人やら、とりきまりなきがん七が、そこに居かけて走り出で、がん「ヘイ〳〵これは〳〵お見ぐるしいお顏ばかり、お揃ひなされまして惡うこそ御入來、さア〳〵、あれへお通りなされまし。イヤ一寸お斷り申し上げますが、只今申したま

つまづは、文字には味くないと申す心の、まづ／＼を書きます樣にござります。その思召しであれへお通り下されまし。」あば「これは／＼御丁寧の御挨拶で痒み出でます。斯樣申したばかりでは、はたくら樣方には分り兼ねませうが、かゆみ出でるとは痛み入るの裏がへしたのでござります。」眼「ヘイなる程いはれを聞けば股くゞります。これもかんしんと申すことでござりますが、チト古いから土用じん仕ります。是れも則ちかんしんの代りでござります。」あば「イヤもういいかげんに致しませう、面倒に相成りました。サアどなたも上りませう。」卒八「さやう／＼かやうなとんちきは、いつまでも負けぬ氣になつて、こじつけますもいでござります。サアあなたお先へ。」のろ松「イヤまづ／＼あなた。」卒八「いかさまあまりおじぎ致すはかへつて無禮、しからばお先へ。」眼七「イヤだれもたしかりはいたしませぬが。」などと互にしやべるむだぐちの、わからぬことをならべたて、通人口にてさゝ書、たも七一人を六人が互にこじつけ居るをりから、やう／＼聞きつけ左次郎は奥の方より障子をあける。左次「これ／＼眼七、くわん化ごとならお斷り申さつせえ。すゝひつツこい俗頑人だ。物もらひもあんまりひつツこいと猶やる氣がねえ。」眼七「トいつて、ひつツこくねえとやら言に仕まふし、どつちしても、遣るのにおきらひでござりませう。」あば「イヤ主御在宿さうな、皆樣直にあれへ參じやせう。」卒八「いかさま取次の顏色が餘りきたない面でござりますゆゑ。」のろ「左樣々々、それに口中がわるくさいゆゑ、應對いたすが甚だ難澁、とんと聾取とつかみ合ふやうでござります。」[illegible]六「成程、

あなたはよくお心づかれた。わたくしは又何のにほひかと存じた。胸がむかく致して、是れへ參ッた詐りでむかひ氣が參ッて、歸らうとぞんじました。」左次郎ききかね「コレ眼七、でへぶへこんで居るがどうしたのだ。」眼七「へこむ氣はござりませんが、あなた方の狐臭が目口へ染みて、ぐうとこらすうとも言はれません。わたくしはモウ引込みませう。」卒八「ヤレ〳〵嬉しや。取次の者があちらを向きましたから、此のうち早くお上りなさい。とても簡先へは向はれません。」あは「マヅ〳〵あたった。」卒八「サおかまひなく。」あは「しからば。」ト、何かしかつべらしく奥へ通り座に付く。のろ「扨はや其の後は、うち絶えましてまことに御無音、何か當年は格別の大暑にて、嘸々御心配の段恐れ入り奉ります。」左次「これは〳〵ようこその御入來。仰せの通り舊冬から見ますれば、殊の外おあつうござります。」あは「わたくし事も、御無沙汰致しましたが、御存じのとほり婦人の儀に付きまして、毎度寸暇を得ませず、存じながら、ハ、、、扨殊の外、きびしい餘寒でござりますナ。」左次「左樣でござります、寔に蒸し〳〵と寒じます。」團六「この餘寒にはよほど末が這入りませう。」眉目「いかさまイヤ近年は餘寒になりまして、しのぎ兼ねますテ。」卒七「なる程あなたなどのおつむりは、蠅がとまッて辷り墮ちますほどの、よかんでござりますから、サゾひえますでござりませう。」あは「イヤ時に用事も申さずに、此樣な事ばかり申しますも、ほかんの餘寒の仕事で、サゾおよふかんましうござりませう。」のろ「さやう〳〵、最早用

談を申しましても餘寒らうとぞんじます故、先〻わたくしから發言致しませう。」貝「今晩は御招き、御廻狀の趣、委細承知仕り、今晩わざ／＼參上のしるし、交魚少々お目に掛けます。先づ是れは鯵でございます。」ト、おいらんの「殊のほかあぢはよいト、申す事でございますが、又中には蛸だとも申します」ト、一人首を出し「ハヽア成程、これは一しほ賞翫いたします」貝「そこで鯵を一本さし上げませうとぞんじて、今朝とり寄せまして生洲へ活けておきました所が、あまり生洲を掃除致して、水をかへましたら、濁りがなく／＼なりましたので」ト、花かんざしの、すゝきを出し「いつゝきに成つて仕舞ひました」貝「ハヽヽヽ是れは是れは、いろ／＼御丁寧に。」〓〓「扨わたしは一杯差し上げます。」ト、手あそびのつりがね同じく小田原提灯を天秤にかけて出し、「此の提灯に鐘を鮑と申しまする譯は、片重〳〵と申す事でございます。」〓〓「イヤ〓〓〓の好物、さいはひ今日は精進日のゆゑ、早速庖丁いたしませう。」又〓〓入りかはり〓しかつべらしく間ト 〓〓「ハイわたくしは今朝よんどころなき遊び用で他行致したのゆゑ、さすがの私も宿にも居ず、在宿もいたしません所へ、御使だと申す事で、歸り／＼宿で申しますには、池の端さまで開帳が始まりますさうだと申しますゆゑ、廻狀の間違とは心づかず、それはさいはひ、私家に先祖大食亂、小もたれの代より、つたはりましたありがたい寶物がございますゆゑ、靈寶場へお貸し申しませうとぞんじて持參致しました。」ト、明荷の内田〓〓たるを出し、「これは宮戸川より出現ましましたる所の酒無理如來の尊像、生得大酒にして、一儕愛する輩は、

博奕賽難けんのんな、のがれ苦勞不知、又辨當兩役を守らせ給ふとの御誓願なれば、いかう醉つて五杯上りませう。」眼七「イヨ〳〵とんだ靈寶奇妙〳〵。」入りかはつて圓武六、圓武「へイ私は五蠅帳をお買ひなされたと聞き違ひましたゆゑ、その中へおたくはへの品を少々さし上げようとぞんじて、則ちこれへ持參致しました。」ト、女達摩の畫を一枚出し、「へイ是れがまう、座禪○豆でござります。」ト又見世の女畫を一枚出し、「是れは納豆でござります。」ト申す譯は去るお寺さまの、咲あきのだト申す事でござります。」左次「是れはよく慣れた樣子で味さうに見えます。」圓武「さて此の繪はチト麁相な出來ではござりまするが、田舍狂言の無間の鐘の圖でござります。是れが則ち梅がえ田夫でござります。」左次「ハヽア是れは御自畫と見えます、一しほ賞翫いたします。」圓武「そこでこれは、ちと時代な繪で、淸盛の妾で、貞女を捨てて貞女を立てたる自慢の常磐味噌、そばに今若、乙若、牛若の數の子もそへてあげます。」左次「是れは〳〵、色々の好物、有り難うござります。」又作八入りかはり手あぶりの車を持ち出し、作「へイ私は又なんの料簡もなく、唯こなたで一ッ食べようとぞんじまして、煮肴を一種、持參致しましたが、ちと荷が張りましたゆゑ、車を一兩雇つて參じました。先づ車つい手に爰らをチト片附けませう。」ト、車力の思入にてもろはだぬぎになり、鉢卷「ハイ此の繪は圓武六さんから、池の端までかネ。」ト、夜の景物の畫を車へのせて、「おふだァソウ、そこだァエヽ、ウヽ〳〵、ハイ是れへ掲げて置きます。オイこの宮戸川の樽は、左次郎樣までかネ、ハイ〳〵かしこまりました。

イヤどっこいナ。ア、ム、だア／＼、そこだア／＼、うんたア／＼。ヘイ駒形の内田からさんじました。判取は帰りにお寄り申しますから付けて置いて下さりまし。ア、忙がしいぞ／＼。アイ此の花魁は深川へ鞍替かネ、ハア身請かえ。そりやア妙だ。酒手は確りだらう、ア、ヤ、だアそこだア／＼。」

呑七「イヤ是れはけしからん、さう／＼しい事だぞ。」眼七「しかし能くお似合ひなさりました。アイ番頭さん車力を壹貫壹文下さいやしたといふ身だネ。」左次「東西／＼。」卒八「ヘイ此の鐘は西村から道成寺さままでかネ。ホイ小附に小田原提灯か、これは通りものだから、與一兵衛さんの所へとゞけるのかえ、かしこまりやした。ハアム、だア／＼、そこだア／＼。ヤレ／＼草臥れた／＼、是れでおつみんな片付けた。」ト座になほり「ヘイ左様なら、おやくそくの鉢肴をさし上げます。」ト、今の通りをいたし「ヘイ是れが方々の煮つけでござります。」アバ「ヤレモ／＼さう／＼しい、につけだつけ。扨はわたくしは、いと餘り手前勝手のやうではござりますれども、據なく皆様へ、お憑み申したい事がござりますが、今日是れへ出ます節、衣類を著換へようとぞんじたところが、彼の吉原の心底方より、まゐッた玉章をツイ取り落しまして、山の神に取り上げられました。サア八里半だと、二ッ割にいたさうとまうす角を、二本揃へてはやし、大嫉妬となりまして、未だ封も切りませぬ文を、此のやうにずた／＼に破られましたが、彼の心底も折角人目をしのんで、丹誠いたし認めましたものを、むざと捨てるも餘り不

便でござります故、引きちらしましたを、少々拾ひ集めてさんじましたが、どうぞ皆様、御工夫なさつてお讀みわけ下さりますやうに相願ひます。」 眼七「イヤ是れは珍らしい事が出來致しました。成程あなた抔へ女の文の參る事はない事ゆゑ御不得手だらう。どうも馴れぬ事は、よめ兼ねるものでござりますテ。「隨分事慣れました私ども故、讀んでは上げませうが、餘り手ひどいおたれなさり方でござれば、何ぞ受賃がなければどうも。」 アバ「それは勿論の事、いづれ濡事師は、水金は遣ひうちの事、頓といとひはござりませぬ。文言さへわかりますれば、受賃は上げます。」 左次「左樣なら是れへ遣はされし。」 アバ「ハイ／＼コレごらうじまし、なさけなく引き裂きましてテ。分明りますれば宜うござりますが、先づそれへおわたし申しませう。」 左次「ドレ／＼ハヽア成程、天地紅で、イヤどうも艶なるものでござりますナ。フンなんだ、神かけねがひあげかし。」 アバ「ヘイわかりました、神かけねがふと申すには、しほりばなしの切でもござりますまいから、あつさりと稻元結になさりまし。」 ト、稻元結を出す。左次「扨と、なんだハヽア、こがれをりまゐ。」 アバ「ヘイこがれをりと申すお禮には、淺妻船の畫をさし上げませう。」 左次「イヨおもしろし／＼。サア是れはしみ／＼じれッたくな、ヘンうまいナ。」 アバ「しみじみじれッたくは。」 ト、硯墨一丁出し「よく摺つてお書きなさい。」 眼七「オヤ是れは紙が違ッて居るが、ノン一ッ百六拾四文酒五合、三拾貳文味噌、二十八文みりん一合、オヤ／＼こりやア酒屋の書出しだぜ。アヽ二ハ

ハア成程内田の書出だ。なんでも掴み合つて、嚊アに半分より餘けい取り上げられましたが、やうやう殘りを集めて參りましたから、中へまぎれ込みましたと見える。是れはおはづかしいものを、お目に掛けました。」眼七「モシこれには受領なしかネ。」ナニ「ハイこれはチト受領を出す程の事もござりませんかエ、儘よ、たしかゞは三百五六十でござりましたが。」ト、をさめ太「一本あげるから、すつぱり捕つておくんなせい。」 「ハヽヽヽ、奇妙々々。サア是れはなんだ、わらぬ筆と、ハヽアきの字を破れたやつだ。 這らないでゆゑ、よしなに御よみわけだ。」ナニ「チツト這ら這ば、此のぶん這しへおはやさまい、自由に廻ります。そこでもうなしかね。」眼七「イヤまだ爰に一切ありやすがくれぐれ御達へよ、御出での程、ひとへに〳〵。」ナニ「くれ〴〵相違なく御出でなれば。」ト、行李をいだし「先づこいらでござりませう。併したまさか其中に、出ます事もござりますが、それは爰の用事でござります。」眼七「イヨ受領の御趣向、請けましたわえ。サア出目助様、おまへの番だ、早く御趣向うけたまはりたいネ。」出目「どう致して御ぞんじの愚案の私、とても趣向も五かうもござりませぬ。寔に一ツござるので、唯人さまのを二ツ〳〵と致して、見るばかりでござります。宿を出ますには、よいと出ましたから殻手でござります。しかし途中で此の緒を見当りましたが、餘りるせいのよい蓋のゑ、うつかり買つてさんじました。是れ御らうじまし、四天王が蝦蟇を退治致す所でござります。是

れでもお土産に献じませう。」主「それははや思召しは有り難うございますが、私はたゞ物で鰻は決してたべませんテ。そこでその跡がどういふ御趣向だネ。」出目「ヘイ唯今申すとほり外に趣向がましい事は決してございません。」眼七「ソレでも繕ひ出した詐りでは、疱瘡見舞のやうで、餘り手の無い事でございますネ。」出目「さやうなら正直に申しませうが、此の鰻を持つて参ツたのは、なんにもせずに天窗から呑まうといふ心いきでございます。」眼七「ヤレモ〳〵無造作な事だぞ。」主「鰻だから大方そんな事だらうと思ひましたテ。イヤ皆様御趣向かんしん〳〵。」主「扨わたくしども此様に、少々づゝも土産を持参致しましたからは、こなたからも何ぞ御馳走がありさうなものでございますナ。」主「いかさま、しかしそれは定めし御承知でございませうナ。眼七殿。」眼七「ヘイ〳〵かしこまりました。ヤ、しかし今日はあやにく仕込がございませんで。」出目「イヤそのお仕込のない所で、何ぞ一二種ちよツぴりとナ。」主「さやうおつしやる事なら是非がない。勿論料理番もない台はせませぬ故、わたくしが拙ない料理をさし上げませう。」眼七「これはいちだんの事でございませう。」主「ヘイ、さつそくながら向島の名物をさし上げませう。」ト、アバ太郎が文がらをいだし「あなたがたもないうそトは申しながら、アバ太郎殿がアノ顔で、戀が出來たト云はれた時は、實に腹の皮がいたい程をかしうござりました。あなた方はいかゞでございます。」主「イヤはやをかしいだんか、此の顔色でいろ事三昧、イ

ヤ大笑ひでございます。」左次「ヘイそれが則ち笑ひ恋でございます。」野呂「ヤレ／＼御庖丁のこじ付けあんばい、かんしん致しました。」卒八「扨また雪半かなんぞ喰ふ物を一ツ上げませう。」ト、また文庫からをとりおろし「ヘイ、是れは譃屑でございます。オイ眼公ちよと立つて貰ひてえ。」眼七「ハイ／＼イヤどつこいハイたちました。」左次「帯を解かつし。」眼七「ヘイなぜでございます。」左次「ハテサ、なぜでもいいから、きり／＼解かつせえ。皆様へ御馳走するのだわ。」眼七「ヘエ、なかなか御馳走だッけ。」ト、眼七は不承々々に帯をとき、「ハイ解きました。」左次「といたら單物をぬいで爰へ出さッし。」眼七「ヘエ、ヤレ／＼漸う昨日買つた單物を、モウぬぐのか、なさけねえ事だ。」左次「それだから入用だわ。」眼七「ハイ／＼サアそれへあげます。どうぞ命ばかりはお助け下さりまし。」左次「扨此の眼七が單物は、昨日富澤町で買つてきさんじました故、是れが一つものでございます。又跡でお茶漬でもお上りなさる手當には。」ト、眼七が帯へゆびをさし「これに煮染がございます。」鬮武「是れは／＼跡のお茶漬までお手厚な事、成程此のお煮染はよく鹽がしみたやうで、見たばかりでのどがピリ／＼かわきます。」呑七「しかし鬼〆なら虎の皮で致しさうなものでございますナ。」左次「是れはごもつともでございますが、何分急案ゆゑ行届きませぬこともござりますが、そこが兄弟同様の仲ゆゑ、あなたがたはじめ同じ様な事をいく度かくどう致します所が、矢張お肴一種でございます。」ノバ「ヘエ、それは又どういふお肴になります。」左次「ヘイ兄弟の集まり

ました所へ、趣向が工藤出ますれば、これが則ち對面でござります。扨おいぞなら、まだいか程もお肴は出来まするが、如何致しませう。」野呂「イヤ／＼もう澤山でござります。」アバ「さやう／＼、此のうへまだどいやうなこじ付け料理が出ますもしれません、おそろしい事でござります。」左次「イヤ御遠慮なさいますな。」卒八「イヱ／＼どう致して決しておじぎはいたしません。もう／＼眞平御免なさりまし。」野呂「併しながら眼七殿の御趣向を、なんぞお賞め申したいナ。」眼七「ヘイわたくしはや、ござんじの通り居候の身分ゆゑ、何も御馳走のいたしやうもござりませんが、唯今主人がたいめんをこじ付けました尻について、貧乏人相應に、曾我の役割を、一兩人御覧にいれませう。」阿七「これは又氣が變つて面白うござりませう。」眼七「まて先づ私が鬼王貧左衛門でございます、所が此の節二役勤めまするやうになりました。其の譯は一向御酒が呑めなくなりまして、此の頃は猪口に四ツ五ツもたべますと、足もとも定まらぬやうになります。是れを名づけて弱い酒のひよろ／＼と申します。」野呂「ヤレ／＼主に劣らぬこじつけ人でござりますナ。」卒八「さやうでござります。前置の枕はかり長くて、へんてつもない事許り申します。」眼七「ヘイ左様なら枕なしに、國武さん一寸お目にかゝりたい。」阿七「ハイ／＼何御用でござりますナ。」眼七「ヘイ此の人の顔がぢゝいの鞍たゞで、小鬢先には瓦消もござりますし、また面の皮おろしだ。」眼七「そこでどなたでも、お

鼻紙を一枚いたゞきたいネ。」アバ「ハイ〳〵是れでよしかネ。」眼七「これは有り難うござります。ヘイこれがすぐに景物でござります。」辛八「御趣向はナ。」眼七「ヘイ無銭の算段、小半紙の安いのでござります。」山川「イヤハヤたま〳〵景物が出たと思へば、人の鼻紙をつかひ、餘り無體なけんやくでござります。」眼七「それが則ち、曽我の發端でござりますテ。」アバ「とは又どういふ譯で。」眼七「ヘイ景物は買はずでござります。」辛八「ヤレモ〳〵、苦しいこじつけでござりますな。」左次「モウ〳〵、いいかげんに切り上げたい〳〵。拍子に掛つて、こじつけるはむかしくもねえ。サア〳〵酒にしよう酒にしよう、そのマア宮戸川をぶちあけよう。」眼七「オットしめたり、サア此方の世の中だぞ。すイ出目公此の片口へ出してくんな。其のうちこつちは肴を出すのだ。」ト、是れより例のとほり飲みはじめる。左次「サアあんまり醉はねえうち、相談をきめて置かう。廻状にも一寸書いては出したが、今夜の寄合は、春の花見茶番のことだが、おれがだまつて居ると、だれもかまはねえが、先づ第一番におれがいたゞいて、其の次に野呂まがしくじつたもんだから、さすがのこじつけ連中も、その次の羅漢はと、すゝみ人がなかつたから、ずる〳〵べッたりとつぶれて居たが、なんとれッきとし、ヘンあんまりれつきともしねえけれどサ、八人男が歯を合はせた事を、反古にはされめえではねえか。それともしくじるまでにも、趣向がつかねえのかな。」辛八「ヘン仰せにや候サ、いふにやおよぶサ。趣向も案じも、山々だけれどみん

なおひるんで居る様子だから、おれ一人すゝんでもはじまらねえから。」アバ「何の〳〵、ひるむの夜すつといふけちな事があるものか。案じはその時つけて置いたが、誰もなんともいはず、殊に毎晩のやうに茶番は引續く〳〵し。」出目「そりやア、おれも同じ事だけれど、それにおらア女の方だけ、格別用が多いからツし。」卒八「エ、引又ぴち〳〵始めるよ。マア相談の極るまでは、尻へかゝとでも押つつけて置かツし。そこでマヅ斯うしようといふ註文だ。」武左「そいつア妙だ。」眼七「まだ何ともいはねえわ。」武左「おらアできこえねえんだ。」卒八「ム、引古風な豆藏だ。」アバ「是れサマヅ、まぜつかへさずに荒增の相談を聞かツしな。どうも惡イくせだゾ。ソこそこで」卒八「マヅこの趣向の初一念といふものは、毎日〳〵八日續けるつもりの所が、隙行く駒のあし早く、光陰に關守なく、木梢の花も青葉と變じ、昨日まで片言をいひし鶯も、今は雛子をさへ育て上げ。」武左「なむさん。」卒八「イヤハヤ奇妙な相談のしやうだぞ。まぜつけへせといはねえ許りないひ樣をするものだから、こたへては居られねえ筈だ。」卒八「それだといつて、おいらがする相談に、只の人らしく、扨斯樣々々な儀で、左樣致しますれば、此樣相成りますなんぞと、不風雅にもいはれめえぢやねえか。」卒八「イヤ〳〵それは不風流かい。おめへは常の人でねえつもりでも、あんまり錢の出た人とも見えねえ。なんでも相談事はどこまでも野暮にいく方がいい。そして何だかむだないひぐさか、馬鹿長イに、むづかしく、節付を

して云ふもんだから、ツイ南無阿彌といふへんじをするも無理はねえ。マアくつまんでいへば、春の花見茶番の残りを、六人で一狂言づゝやらうといふ事だらう。」左次「さうよ、さうだけれど、八人の内春二人済んで、跡が夏までのびたから、いつその事今年中の楽しみとしてサ、夏二日、秋二日、冬二日と割り付けようといふ註文だがどうだえ。」呑七「ム、それも能からう。」八兵「先陣の争ひが面倒だから、すいト八日目までの名題をこせへて書いて置いたから、是れを鬮にして順を究めて置かうぢやアねえか。」眼七「オツト鬮も名題もちやんと出来てるやす。」ト、眼七ふくろ戸よりたけ長く書いた名題と鬮をうやくしく三宝へのせて出す。野呂「イヨく、是れはりつぱく。グツト是れで頭取めいてきた。序に狂言名題を、御披口々々々。」阿次「句鏃香、清明香。」アバ「また変せるよ。漸うすこし舞臺がしまり掛つた所だ。東西々々。」左二「イヤ披口は鬮を引いて、皆役割を書き入れてから読みやせう。」卒八「ム、それがいいく。飛鳥山の花の雲、相勤めまする役人かへ名をむツくじきか。」出目「エ、やかましいわえ。サアく鬮を出した、引かうく。」ト六人われもく引くくじの名前、くはしく書きそへたるはりだしの役割左の通り。

初編之目次

遊行日之通認める

飛鳥山	左次郎
隅田川	野呂松
兩國	卒八
高田	眼七
花屋敷	アバ太郎
海晏寺	圖武六
吉原	呑七
淺草市	出目介

三編　下册

催レ涼蓮池之會合　其の二

扨も八人の役割を鬮にて定め、鴨居へ立派にはりつけて置き、左次郎「サアまづ断う外題は付けて置くけれど、是れはたゞ順番を定めた許り、場所はてん〲の好み通り、案じのついた事がいいぜ、早い事が兩國の涼みの題でも、モシ腹にあはずば隅田川へもつていくとも、利根川へ飛び込むとも、勝手のいい所がいいぜ。」アバ「そりやアちげへねえ、内輪の茶番こそ、すこし意地悪をしてまごつかせるなんぞも、をかしくつていいけれど、他人の中へ押しだす事だから、てん〲に磨き合つて、岡目八目の助言をくはへて、それでもしくじらねえやうに、すつぱりやッつけべエ。コレ卒公、しつかりと褌をしめてかゝらッしよ。」卒八「ヘン何是れしきに褌どころか。」ト、卒八がすましてゐる顔を見て松玉丸のせりふ 眼「なにさじやうッぱりの手なみにかけて、拙作かいい作か、至極ごくらうの世界ッ。」のろ「ナニサ〱、まだこじつけたらねえのか、いいかげんに愚癡もいふもんだ。」呑七「イヤじやうだんではねえぞ、春のやうにしくじつてはおそれる。こんどはしつかりまうけてえもんだ。ほんにヨ、卒公しつかりさつし。」アバ「春中のも随分出来はいいけれど、かんじんの所で、爰でひつかつがうといふと、しくじるからどう

もならねえ。」 眼七「なんでも糞桶の荷縄ぢやアねえが、大丈夫にしておかねえと、始末のわりいことが出來るテ。」 のろ「ちげへねえ／＼、卒公マア案事はついてゐるか。」 卒八「ヘンなくつてサ。」 左次「コレサきう糞落ちつきがあぶねえの親玉ヨ。」 眼七「サレバサ雪隱の上水を見るやうに、氣ざにすふして居て、大變な事を仕でかすめえぜ。」 卒「こうおめへたちは何のこつたナ ヤ糞桶だい、くそ落ちつきだい、ヤレ雪隱の上水だの、おゝむせえたとへ許りいふ手えへだ。それがほんのしやらツくさいといふのだ。ほんのこつたが、おいらたツた筋へ點の打ち人があるものか。」 左次「いいサ／＼其の廣言は跡へ廻してマア早く筋を聞きてえ。」 アバ「さうよ今日のやうにてん／＼懐でやつては居られねえ。なんでも總座中大承知の入道へ、木賊とかくの葉をかけて磨き上げた所でおし出すがいい。」 左次「さうすさうす。何ほおれが番だとつて、大丈夫といふ譯にはいかねえ。丁度三津五郎當枚では、狂言が出來ねえやうなもので、外が何分若い衆大勢といふもんだから、萬一又、仕損ふめえもんでもねえが、どうでもかうでも八日目までは、叩かねえではならねえぜ。」 卒八さへあの通りだから、とてもおらアなんぞとひなれてたちぎえはならねえぜ。」 いこ「アレ／＼、もういたゞく枕をならべるぜ、こいつア險難な狂言方だ。」 なべ「サア／＼跡の事より今度はどうするのだ。早くいはつせいな。」 卒「コウひつくりしなさんな、よつぽどいいぜ。先ア斯うだ。」 眼七「ム、こいつアよからう。」 アバ「なにがいいのだ。」

眼七「いはねえ内がよからうと思ふのヨ。今ほめねえと、言ひ出してからはほめる所は有るめへと思つてよ。」左次「是れサ折角本読が、はじまりさうにするとまぜつけへすから、どうもならねへ。ナアおつとのうち辛抱してくだせえ。」卒「そこで筋は一ツあるがの。」呑七「ハア子持筋か。」卒「ほう子持。ムエどうもまぜつけへしに、つりこまれてならねえ。」呑七「サイ眼公一ツ杯燗をつけまつし、みんな口が隙だからやかましいッ。マヅお下の衆に、こつちで一ツぺい飲ませてくだせえ。」ト、是れより酒をはじめ、みな〳〵飲みながらきいてゐる。卒「まづ一ツは斯ういふ趣向だ、よつぽどむづかしいぜ。」左次「ハア。」卒「第一おめへたちに、切ツかけも稽古もいらねえから、まちげへがなくつていい。俺ひとり狂言だ。道具といつた處が、家根が一艘に小舟が三挺を一ぱい借りる許り。そこで家根と小舟とへ連中を分けておいて、家根の方では弾いたり唄ッたりぶら〳〵流して、両国の洲か橋間の、船込のなかへ付けて居て、そこでいい時分聲色をつかひ始めやす。」左次「ムゝそして足下はどこに居るのだ。」卒「おいらは又、別に妙な船をたのんで、獨り別にゐるのサ。」左次「ハアそして聲色をつかつてどうする。」卒「所へ、今の小舟を二三間はなれて聞いて居て、しきりにどくを言つたりなにかして、喧嘩をしかけるやうす、あくたいまじりに褒めて、今に喧嘩になるだらうト、ひや〳〵させるうちが山だ。」左次「ハテナ。」卒「そこで、家根舟でもこちらへ兼ねてあくたいをつく。サア両方まけず劣らず、あくたいをついて、片々でゝそでも食らへト

いふが種だの。」左次「ハアへんな種だの。」卒「サア兩方でくそをくらへ、イヤ汝くらへ、われくらへと、言ひつのつてゐる中へ、おれが糞船を憑んで、上乘をして、グッと中へのり込んで、サア汲みたてあがらんかくといふが、おれだがどうだらう。」みたく「ハヽヽ、ハヽヽヽヽ。」左次「まるで落し話だナ。」眼七「ヘンなんぼ下主だといつて、兎角下へまはる事許り案じるス。」呑七「さうヨ。そして獨り狂言も大そうだァ。ソノ三津五郎のつもりといふのが、糞船の上乘をして、たゞ汲みたてあがらんかといふばかりか。」卒「をかしくつていいぜ。」アバ「それだとつて、あんまり惡落だらうぜ。」呑七「そして案事に事をかいたやうに、くそ船まで持ち出すほどの事もあるめえではねえか。」眼七「さうよ。此の分なら牀をかいて居て、まッこと叶はずは、筏を組んでにげよう。」左次「あんまりたいそうをいふから、大方こんなことだらうとおもつたヨ。」卒「それでは不承知か。」のろ「あんまりちゝむせえではねえか。」卒「チョッそんなら、餘所行をださずばなるめえ。」左次「ムヽ、餘所行をだすもいいが、モウ枕なしにすぐに本讀にかゝッてもらひてえ。どうも賣藥屋の見世を見るやうに、前置ばかりりつぱで、かんじんの趣向が、すこたんだから安心ならねえ。」卒「いんにや、是れはきつと氣にいる、ふつほどいいすぢだ。」左次「アヽ又うなぎのしやれが出さうで、けんのんだ。サアく其の筋を早く聞かうく。」卒「役廻りはおれがもちめへのおやまダ。」アバ「ハァ是れもまづ、破談話らしいノ。」左次「ムヽしかし筋によ

つて能くさへあれば、おつな面不足だけれど、おやまにしてえものでも拵へさ。」卒「あれまアけなしたなあれたァこれでも合引で、ぐつと目をつりあげて、かうらかにして見せたら、びツくりするだらう。」目出「こうやア、びツくりするには違へねへ、氣の弱いものは、おそはれるだらう。」目出「さうさ。其の目はやつはり、つりドツた形で置くがよからう。とてもつり上げたくらゐな事では、女の顔とは見えまいこ」卒「へ、お顔にはふるだらうけれど。」卒「イヤイヤ。そこでこの南傳馬町の、仙女香の白袋も買つて、二三日かゝツて地を塗りつぶしでもしたら、おつとは顔らしくもなかろうよ、さうしてまアどうするのだ。」卒「かつらはさら毛にして、ぐるぐるむすび髪にいつて、止ざつと、まだれになららうといふ誂へだ。」卒「よーし、それも呑込んだ、さて」卒「そこでおいらが方には後見がいるとわ、それは雇ひの人でもいいから、舟に居るものがないたけをいふのさ。といふわけは、先づ本舞臺に、開のあいだ、両國橋の景色、下の方よき所に、屋根舟一艘。」目出「ハア又屋根舟か。」卒「其の内に連中殘らず相圖をまつて居やす。そこでおれはその美しいなりで、橋のうへをしなしなと、物あんじ姿で、ぶらこぶらぶらして居やす。」目出「フンシア首尾よく姿を見られればいいなア。」「さうよ太おもてで、ふツとりとした、色の淺白い女だからノ。」卒「イヤサ、よう物あんじ姿で、それから。」卒「なりたけ人におやしめられるやうに、欄干へ寄りかゝツたり何かして居て、いい時分に、ポイと引きぬ

りて、まつはだか、緋褌一ツに成つて、其の時後見が、著物の始末さへしてくれればいいのだ。そこ
から髪を亂してキャツと川へ飛び込むのだが、ソリヤ身投だといつて、橋も川も大騒ぎになるだらう。
眞「おもしれえ、是れはおもしろくだらう。」○「そこでしばらくして、すいとうき出て、あをを始める
と、たちまちに、橋の中からは、連中がかねて用意の、いろ〳〵の魚盡しの張子でこせへたやつを、かつて、
おい〳〵〳〵、飛び込み〳〵、おつかける。都て龍宮、玉取のまねびとする、そいつはきつうだ」○「こりや
これはよからう妙だ〳〵、皆々はどうだ。」○「いゝ〳〵、こいつアやつて見てえ」眞「そうなつたから
どうも人は見くびられねえもんだ。卒公是れ許りは一生の出來だぜ。」○「一、是れが氣に入つては、
またいくらも案じはあるぜ。」○「それはありさうなものだ、おら合はんかなとう」眞「それに付
るには入用は何だ。たいていえは今夜の中そろへて置くやうにしてえもんだ〳〵」○「まア今いつた、あ
ら毛のかづらに女の衣裳、これはおだるさんのを借りても間に合ふが、緋褌に一ずぶ緒さすはこたる
え。」壽「すからの」○「そう〳〵、それに稻荷新道の仙女香おとし袋、ひとりしかし、十袋で足りるめえ」
なぜ一へん十袋では五百だが、もう一つと出すくらゐだ、此様な首にはすぐ許へる方い、安くてすむだ
らうぜ」眞「何下塗は胡粉のつけたてにせまい、凸凹が直るめえから、上塗ばかりは十袋もあれば
よからう」眞「エヽ、いらの事は手めへツちの知つた事ではねえから、かまふなえ。それよりまつかけ

な、間違へねえやうに氣をつけさつし。時に左次さん、お下の拵へは、魚盡しの張子許りだがどうで う」左次「そりやア、車の付いた臺をひつぺかしたり、また鰹蛸の類、その外なんでも見計ひに、淺草の中見世へいつて、見繕つてくればいいわサ。」ノロ「そこで切ッかけトいふわ。」卒八「七むつかしい事はねえ、おれが橋から飛び込んで游ぎ出すが相圖ダ。」ノロ「ム、よし／＼、しばらく身投とあらはせて、ひと度たゞよふだらう。それからうかみ出た所へ、舟からポン／＼と、イヤ待てねえヨ。おらア游ぎを知らねえがよからうか。」左次「ナニ游ぎを知らねえ、そりやアとんだ事だ。それでどうして大川へポン／＼所か、つまらねえ男だナ。」ノロ「おめへはどうだ。」左次「エおれか、おれもサ、チトむづかしいテ。」卒「何サ見事にやりたがらずとも、ちつと水心さへあればいいわナ。」眼七「鯛で鰹をかぶれば、魚心はあるけれど、水心はちつともねえテ。」國武「オヤ左次さんも知らねえのか。」卒八「今いふ通りヨ。」國武「ソリヤアつまらねえ。實はおいらも不得手だぜ。」ノロ「何の事た、それでまた此のくはだてに連判をするゐる事もねえ、ばか／＼しい。」眼七「さうよ。それでは呑公、出目公、野呂公トたつた三人だノ。」出目、呑、野「所が同じく、水にかけては鐵砲玉ダヨ。」卒八「イヤハヤ、不器用な手合だナア、眼公はどうだ。」眼七「ム、俺アまア、板子が一枚あれば三尺や四尺は浮いてゐられようとは思ふが、久しくやらねえからどうだらうかサ。」ノバ「ハ、、、、、こいつアつまらねえ。此の樣子では卒公まで

おほつかねえやうだ。」卒八「なんのおらアおほつくけれど。」左次「そつちはおほつくにもしろ、人の游ぐのを見ても、こつちはおどつくわ。なんでもわりい案事だ。およぎを知らねえでは、勤まらねえトいふ舞臺もねえもんだ。」卒「なくつてサ、水仕合といふ事もありまアす、全體いけ不器用な手合だ。」呑七「べらぼうめえ、江戸ツ子だから知らねえのだわ、鋌子の濱で鰯をとつてた人ぢやアねえワエ。」左次「イイサく、己をはヘン江戸ツ子のつらよごし、以來あんまりりきんだ口をきかねえがいい。」卒八「さうだけれど、うぬひとり游げるとつじめ早呑込みの輕はずみばかりやるから、番毎しくじるのだ。最初に游ぎも知らねえで、この相談にかゝるといふがあるものか。こりやアみんなの麁相だ。」〆八「さうだけれど、うぬひとり游げるとつて、人の心も知らずに、こんな趣向をつけるといふがあるものか。」卒「そんならナゼいいくといつて、相談にかゝつたヨ。」デバ「その時はよかつた樣だツケが、今おもへば。」左次「エ、何をくだらねえ事を、ぐづくいがみ合ふのだ、それよりマア斯うしたらどうだらう。せつかく卒公も一生の智慧を出して趣向をつけて、押しださねえでもくやしからう。そしてまんざらでもねえ案じだから、やつつけるがいい。」国武「ハア卒公ひとり飛び込んで、むやみと川の中を游いでるるのか、ヘンよからうよからう、氣ちげへじみて。」左次「なにさ、とても獨りではつまらねえが、今度の合番匠は、連中でなくつても、外に仕打がねえから、游ぎを知つた人をたのんで、相圖のきつかけを、こつちで差鐵をつか

へば出來る事だから、かうしやせう。柳橋の住吉屋の船をかりて、亭主の次郎兵衞に呑込ませ、近所の若え衆を頼んで、飛び込んでもらふ工面にしよう。」卒「ム、それがいい〳〵。何こんな不器用なあひてをとつては、狂言がしにくい。相手がしつかりだと、ぐつと乘つかゝつてするから、大きに仕いい。」出目「なんだ、ごたいさうな、橋の上から川へ飛び込むとつて、狂言も大わらひだ。相手がいいとつて悪いといふに、どこに仕打があるものか。」卒「それでも手前たちには動まらねえではねえか。」出目「しれた事ョ。川へ飛び込むなんぞといふやうな事は、やつしがたの本役ではねえわ。」野呂「そこんなやつしかた許りあるから、芝居が六ヶしいのだ。」左次「さう言はッしやんな。春の隅田川の狂言は大やつしだつけ。」眼七「所が、おッゝむせえ氣狂のうちは、かなりだッけが、引拔でグッときれい事にならうとすると、たちまち川のなかへすほんとおつこちてヂャ〳〵ヨ。是れ則ち身に應ぜぬ事を天の然らしむる所だ。」左次「イヤサ、川へおつこちたから、濡事師だといふ事よ。さもなくて濡れさうな所はちつともねえわけ。」野呂「イイヨ、うつちやッて置いてしれヨ。」左次「うつちやッておかねえとつて、今更その面がどうなるものか。」呑七「ちげへねえ、野呂松が面もつかひ道のねえ不自由なつらだよナウ。敵にも眼が細くつり下ッて、色は白と青と黄を交ぜて、何だかいやみッたらしいとぼけ面で、なんでも本役は、半道やつしといふのだらう。」卒「へゝ半道やつし、九のヤおやゝ、トゥか聞

いゝあきれらア。兎に角婦人方へ向く器量は、殿達の氣にはいらねえもんだ。」アバ「器量もすさまじい、飛龍に似た面だア。」卒「飛龍でも五兩でも、女中方のお眼が曇らぬ鏡だア。今度はおらが面も、さして入用でもねえ樣子だから、ヽヅ犬の屎のねえ所へ、そつと置いて下ッし。それより、おし出すさんだんを、よくきめるがいい。」左次「ム、是ればつかりはちげへねえ。しかし今度は衣裳がおだるさんのですむから、かづらを一ッ借りればいい。褌は松坂屋で中巾を六尺、オイ眼公今夜一寸買つて來て、裏のおつかァにたのんで置かッし。」眼七「オットそれは承知の濱だが、魚づくしの冠物はどうしよう。」左次「それは翌日の朝、中見世へいつて買ひ集めればいいが、船宿へいつて、人足を憑まずばなるめえ。」左次「イヤ／＼それも次郎兵衛が所へいつて憑めば、さしかゝつても、間に合ふにちげへねえ。」卒「そんなれば、外に稽古もいらず、たゞ橋の上に後見がひとりあればいい。」左次「成程さうださうだ。一人といふ事はねえ、ある人だから、三四人もつれて行くがいい。」卒「何サ、不器用な手合が、生中大勢では足手まとひじやまだ、エヽト呑公ひとりで澤山だ、やつて下ッし。」呑七「ヘンそんな病人役なら、外のものにさつし、おれが自身に手をおろす程の事もあるめえ。」卒「何サ役不足をいふ事はねえ。とてもお下に勤める役ではねえから、足下にたのむのダ。いはば所作楯の相手といふやうなもんで、よつぽど骨の有る役だぜ。」呑七「ハア橋の上で楯でもするのか。」卒「いんにや楯なら

仕いいが、仕打でいくやつだからむづかしい。」呑七「ハヽアそれではと思入といふ所があるのか。」幸「ある所か大思入だ。なぜといつて見な、序題が身投に出た女だらう、それだからおれは始終内心にうれへをもつて、だんまりで往來の人にもあやしめられる程に、面と仕打で愁歎だから、其の相手は甘口ぢやアつとまらねえ。」呑七「イヤ／＼其の面で愁歎なされて、どうしてそばに居られるものか、恐ろしい事だ、マヅ／＼餘人へお見せなせえ。わたくしはお斷りだ。」幸「さういつてくれることはねえ、チヨツいいわ。そんなら眼公やつてくだッし、今いふ通りのすおだ。」眼七「なんにしろわりい筋だ、辻燒にしかなるめえ。」幸「いやサ交ぜてはいかねえ、マア聞かッし。そこでうつくしい娘が欄干へ寄りかゝつて、うれへにしづんでゐる樣子だから、足下がいふには、モシ姉さん、なんだかお前はあやしいそぶりだが、若氣の至りで何かいちづにさし詰めた心から、不料簡でも出しはしねえかといふをきつかけに、おれは帶をゆるめてポイとぬける許りに、身づくろひをしながら、ハイ／＼御深切はお嬉しうござりますが、どうあつても死なねばならぬ身の上、必ずおとめなさつて下さりますななんぞと、それからは人の集まるまで、出たらめにおしやつて居るのだから、よつほどむづかしい役だぜ。」眼七「ム、なんのことはねえ、太神樂の神主さんでしてゐるのだナ。」幸「とん屋事をいひねえ大ちげへだ。おやまが本性でしつかりして居るのだから、道外ではいかねえ。」眼七「それだけ倘くるしい。大

方其のつらで、はなして殺しくださんせなんぞと、いふ氣だらうおそろしい。」卒「ヘンその面〱と安ッぽくいふけれど、是れでも合引をかけて、拵へて見せてえほんにョ。よつぽどこせへばえのする顔だぜ。」野呂「拵へばえだとつて、ばえねえとつて、其の面が何程のばえ様がするものか。」圓武「しかし出來ばえはしめえが、鳥羽畫のやうにはならうョ。」卒「チョツいめえましい。ヨシ〱今夜、一寸拵へて見せべエ。おだるさんの所で白粉をもらつて來て。」アバ「イヤ〱、そりやアごめんだ。晝間ならがまんもしようが、夜よなかそんな事をされるト、おらアたちまち驚風の蟲が出らア。其のひまにもうちつト、蚊いぶしでもしかけさつし。おそろしく出てきたぜ。」左次「さう〱。そしてつらのもんちやくも、てえげえにおつつけて置くがいい、なにも卒公にかぎつた事でもねえ。おれをのけて見ると、跡に首らしいものは一ツもねえわサ。さうして見るとみけんじやくの花火のやうに、首の共喰ひだわ。」卒「ヘン何もお前の首を一ツのけるわけもねえ。おなじ陣笠首のことだから、一所にじつけんさせるがいい。」出目「それにしてはもうちつと大きいもので、二三杯やらかして二階へいつて御寝ならう。眼公勝手をしつたやうに、ちよつと蚊屋をひつぱつて置いてくだッし。」眼七「蚊屋は毎年四月上旬より八月下旬まで、たいら一めん晝夜つりばなしでおふるまひ申す。」出目「ヤレ〱それでは、サゾ蚊がはへつて居るだらう。」眼七「ア、もうよつぽど追ひ込んだらう。あすの晩あたりから

は、モウ外へ寐る方が樂だらう。」左次「是れさ寐るなら、みんながはやく寐て、あしたは早く起きねえと、買物が間に合はねえぜ。そこで相手はいよ〳〵眼公か。」眼七「どうも仕方がねえ。見こまれたが不運だ、やらかすべエ。しかし獨りでは何分たちきれさうもねえ、呑公もがまんしてやつてくだッし。」呑七「チヨツ、とんだ目に合ふもんだ。きやうに生まれるト、何事によらず一鼻がけに、悪まれるからおそれるテ。そんならマヅ太神樂のお龜が濟んでから止、褌一ツになつて飛び込む跡の、著物のしまつをしてやればいいのだナ。眼公呑込みだらうノ。よし〳〵、サア其のつもりにして寐よう寐よう。」眼七「褌も翌日の朝の事ヨ。その替りよつぽど早く起きねえではならねえ。今夜は呑み散らしとして置かう。」アバ「サアみんな二階へ來さへし。」左次「コウノ、もう皆天昇されてはおれが寂しい。二三人下の蚊屋へも寐てくだつし。そして翌日の朝は酒法度として、朝食は廣小路へ申し付けよう。サア〳〵下住居の人足手合、蚊屋を引張つてくだッし。すヤ卒公はどこへ行つた。」眼七「小便にでもいつたらう。」左次「べらぼうナ内に小便所の有るのに、サアお牀をのべよふう。」ト、打ち寄り蚊屋をつり、寐じたくも出來、左次「卒八はどうしたらう。なげえ小便だ、牛のやうだぜ。」眼七「小便は牛だが。」左次「すツト馬だトいふのか。おれが種を蒔いて、そつちに洒落られてたまるものか。」ト、いふ所へ、卒八裏口より入り來る。いろ「どけへいつたのダ。」卒八「小便に出たらあんまりいい風が來るから涼んでゐたのよ。」左次「ナゼまた外へたれる

のだ。地犬といふものは仕方のねえ物だ。」卒「小便は外へたれねえと長くなるから。」左次「すやすやど。」
卒「内の小便十八町といふから。」左次「チョツいめえましい不意を打れた。サア〳〵寐るぞ〳〵。二階ではモウいきついたト見えて、でえぶしづかになつた。」のろ「ム、二階がしづかになつたから、下では酒をはじめて、モウ肴がねえから、たゞ呑むとしようか。」左次「ヤレ〳〵大骨を折つて、たゞ飲むまでこじつけたナ。モウそれからすれば狐拳だ。」卒「イヤ〳〵是れから又呑んだら、あした天窓が病めて鼓がする。ア、初音エ〳〵トいふだらうぜ。」左次「エ、いけひつゝこい。どこまでこじつけるのだ。俺アモウ寐る〳〵、イヤどつこいナ。」ト、蚊帳へはひり「ヤレ〳〵裾も廣げねえである、いけぞんざいな釣りざまだ。サア皆がはひらねえか。蚊を入れられては恐れるから、おれが木戸番をしてやらう。」のろ「うつちやつて置きねえ、はじめて蚊屋へ這入りはしめえし。」左次「さういふけれど、おらが内のは萌葱の窓ではねえ、無垢の萌葱だぜ。」のろ「ヘンもえぎの窓といふがあるものか、紙帳馬鹿にした。」左次「サア〳〵笑談ではねえ、キリ〳〵這入らねえか、じれつてえ。」のろ「すイ〳〵ヨア眼公、一所に来さつし。モウ三度目の知らせが鳴つたから、小便なら楽屋口へ早く出さつし。」左次「エ、むだッ口より、蚊屋が帯へひつ掛つて居るわ、いくぢのねえ。卒八はどうした、天昇したかの。」眼七「ナアニ今方二疊へ這入つたッケ。」左次「何小座敷に居る、そりやア又何か捜しッ事をしてるるだらう。いあ

三編追加序

稚女の唄に曰く、兩國橋長いく御馬でやろか、お駕籠の中より一寸覗きのからくりの傍に、紙代板木價と呼ぶ者あり。是れなん柱に張り置く花暦追加の三編閏あつて十三月の御重寶、年徳明の方に向ひて涼みの舟の乘初よしと、たひらにはしる艜の舟足も、水面洋々として、瀧亭鯉丈ぬしの滑稽爰に百艘のふなばたをつらねたるも、誠に大江都の繁榮、其の名高雄丸の屋形のほとりには、花火の光もみぢを照らし、吉野屋が屋根舟には、櫻の紋付きたる藝妓に花あり、拳酒の一調子高くはりあげたる淺間ヶ嶽の投節にて、イヨ柳橋々々の聲諸共に、船宿の妻舟か〳〵と呼びかくる川端歩き野幇間に岡釣は、うろ〳〵舟の火かげより、客を見つけて飛乘の二人船頭、脇櫓もおして、するさんの立賣と古き地口も折にふれては、一ツめづらし、二ツ目に棹竪川のもやひ綱、解いて流して涼風を、吉間に繋ぐ首尾の松、陰芝居の聲色は、三座も爰に浮ぶかと、當りは舟の拍子幕、しばらく時をうつしたる、水鏡のありやすにて、八笑人もせうらんあれと、ホ、敬白

　　ト扇をかざして橋上にたゝずみて

ふじつくばかざす扇もふた國の橋にたゝめる風の涼しさ

琴通舎英賀

古き漢書にも、書は言葉を盡さず、言葉は意を盡さずとやらん。況んや空氣の八笑人、心の足らぬ趣向を設け、月花雪の苦世界を、そげたつもりで諸人を、一番はめて樂しまんと、人をのろはば穴二つ、雨國川の涼みのもよほし、彼の頭取の左次郎が、池の端の隱宅にて、宵に仕組みし手筈の通り、衣裳かづらも借り集め、其のほか調度揃ひしかば、左次「サァたいがい是れでよからうが。」アバ太「むづかしいのは首ばかりだ。なんと白上りの浴衣に、黒繻子の帶へ、此のくびをすげてもうつらうか。」左次「されば サ、そこはちつとおぼつかねえもんだテ。」卒八「何サおもふぶんおぼつくよ。何にしろ一ツやつて見てくんねえ、つひぞねえことと、夕は白粉が乘りかねたやうだツケ。」呑七「しれた事よ。つひぞ有つた事もなくツて、ヘン賽の河原四三ほさつではおそれるぜ。」卒八「オヤさういふけれど春中香公が所の茶番に、おかるをした時は、すつぱり仙女香がのつたぜ。」野呂松「ム、そりやアちげへねえ、白粉が乘つたに、歯が反つてるるから、見物がのつたりそつたりして笑つたツケ。」卒八「へこそねへそねへ。今にすつかりこしらへて見せたら、ほんのことだが。」眼七「モウびつくりは御免だ、夕べこ

りこふした。」左「サア／＼爰へ面をもつて来さつし、やつて見よう」卒「サア／＼いつでもお待ち、鏡を
かしなつ。」眼「なんの人に塗らせるのに鏡がいるものか、早く来さつし」卒「サア／＼、そんならやつて
おくれ。」ト、向ひ合ひてゐる顔をつくりいゝと見て、眼「アヽ成程ハアつまらねえ面だの。これでまた好い形を拵へてくれるといふ
はふかくだ、ばか／＼しい」卒「何の事だな、今更そんな気のひけた事をいつてくれる事はねえ
わ、そして斯うそばでしけ／＼見れば、路考だつて眼との荒は見えるだらう」眼「其の筈、路考
のあらぐらるな所が、ここで一ヶ所あれば安心だけれど、如何にしてもあの取得の無え面だから
卒「ハヽヽ顔に鳥居の有るのは辨天様許りだ。サア／＼たいがいにけなして置いて、先づ早く塗つて
見てくんねえ。これでも帽子の下でば、ここがあると美しくなるだらう」眼「イヤサ手前なんぞは目が
様に、むしやうに下ぐ々々といふけれど、下ぶぜぶのある日には、紫帽子をかけにやアならねえ。さ
うすると、ヘイ歌右衛門のお笑ひ草とは見えるが、嫁の女とは見えねえぞ」卒八「ほんにさうだッけ、
それでは舞臺の作りになるノ。」野呂「なんの舞臺の作りもお笑ひだ。おてまへな面をして居ながら、い
けッ小しやくな事をいはねえで、どうでもいい様に拵へて貰はッし。とても目がついて上ッたとつてつ
り下ッたとつて、何ッはちの面が出來るものか」眼「やつはり卒八の面にしかならねえのよ。」卒「ア
アもう／＼、面の事はいいかげんに料簡してくだッし。どうも是れまでにしてやめられもせず、首

なすけかへるもおつくふ、どうも仕方がねえ。そばからさう口やかましくいはれると、氣が引けて雜莚がつとめにくい。」 眼七「ちけへねえ／＼。是れから少とづゝいい所を見出して、ほめてやるべエ。」 眼平「ヨシ／＼、ヤンヤ／＼のお聲がたえりおやア、是れはカンカラ太鼓をぶつて行かうか。」 幸二「いえにやヨ、笑談ではねえ。たとへ濱の太夫だとつて、切幕を出るとはまア／＼、大明神、でえ／＼さふと譽めらるれるから、ぐつと氣がひつたつて、狂言も格別よく出來るわ。さういはずにそこへ出ると、ヤイ／＼妙な面だ、ソレ大層な反歯だのといはれて見ねえ、サアひるんで狂言がすつぱり出來る事ではねえ。」 目吉「それでも路考は妙な面でも、反歯でもねえから、誰も云ひ手はねえのだ。」 幸八「それは知れたことだが、マヅ道理が、サ。」 三笑「イーイサ道理も、下駄もいらねえから、マアちつとだまらつし。口の端へ泡がはみだすから、塗りにくくツてならねえ。エヽ氣味の悪い、ナゼ人の手をなめるのだ。」 幸八「口の端へ泡が出たといふから、取りこまうと思つて、ア、引、顔がへたびれきつた、せめ息つかせてくれねえか。」 三笑「ム、そんならマア一服のまつし、大ていこのくらゐにして置かう。是れで目尻の上へちよいと紅をいれると、おつとは目尻が上るけれども、さうするとまた、只の女のやうでねえからわりいこ しかし目の廻りはうつすらとボカさうか。」 圓之「イヤ／＼、左樣したら、やつぱり狂言の作りにいゝるだらう。」 幸八「それでも路考なんぞは。」 三次「エヽ此の男も、なんぞといふと路考路

考といふが、さういふ根性だから氣が折れねえのだ。路考のひきべつすれば、第一こんな首は澤庵の押しにしかならねえわ。どうして首の通用がするものか。」卒八「ヘン出る杭はうたれるとは、よく〳〵いつたものだ。陰で聞くとおれ獨り妙な面で、外の者は相應な面の樣に思はれるわ、いま〳〵しい。」ト、いふ所へ表を明けて卒八が母「ハイ御めんなさいまし。あなたに私どもの卒八は居りませんか。」ト、いふ聲を聞いて卒八「ヤアお袋が來た、大變々々。左次さんおめへいいやうにいつて歸してくんねえ、はやく〳〵。」左次「此の男もいい樣にといつて、どうして己にしれるものか。自分の親の事だア、勝手なしつた樣に挨拶さつせえナ。」卒八「それだとつて、此の面でどうしてあはれるものかナ。」母「ハイお留守かえ。」左次「ハイハイ留守ではござりません今。」母「左樣なら卒八が居りますならどうぞちよつと。」卒八「眼公な〳〵後生だ、ちよつと出てなんとでもいつて歸して〳〵くんねえ。」眼七「そんならば明日までとでもいつて置かうか。」卒八「是れサ、酒落所ではねえ一生懸命だ、たのむ〳〵。」ト、卒八がしきりにあせり氣をもむと、眼七わざとまぬけの挨拶をして苦しませる眼七「ム、それでは居ねえとでもいはう。まんざら居りますが、逢はれませんとも言へめえ。」卒八「ちげへねえちげへねえ、早く言つて下つし。」眼七「それとも譯あつて、一七日が間物忌の内は、縦ひ親類たりとも對面は相叶はぬとでもいはうか。」卒八「是れサ〳〵、無駄ツ口をきかずと、早くあそこへ行つてくだつし。」眼七「ハ、、、そんなら物忌の方にしよう、どうも立派でいいやうだ。」ト、さんざん卒八に氣

をもませ、
ての方へ出て、眼七「ハイおばさんお出でなさいまし、だいぶお暑い事でござります。」母「ハイ〳〵、イ
エわたくしどもの野郎殿がをりますなら、どうぞ。」眼七「エヽ引、卒八さんかえ。」ト、奥の方をむいて、「オイ卒
八さん、おつかさんが何か御用が有るさうだ、一寸爰へ。」卒八「エヽ、むね氣なやらうだ、サア大變だ。
どうしよう。」ナバ「どうしようとつて、あゝいつて仕舞つてはモゥ仕方がねえ、出てあはつせえナ。」
卒八「それだとつて此の面が見せられるものかナ。」母「なんの美しくなつた所を、見せてみさつし、
大體よろこぶ事ではねえ。」ト、押し合つてゐるうち、また眼七、眼七「オイ卒八さん、おつかさんが待遠だ。モシこちら
へお上んなさいまし。」卒八「エヽ〳〵、大變な事許りぬかすわ、成程いつも〳〵むね氣なやつらだ。
キヨッどうするものか仕方がねえ。」ト、しぶ〳〵表座敷へ出で、眼七をにらみ付け、卒八「ハイかゝさん何の用だエ。」母「ハイ何
もさしたる用事でもござりませぬが、夕べで三四晩かへりませぬから、親父殿がやかましく申しますゆ
ゑ、ちよつと内證で尋ねに出ましたが、あれは何をいたして居ります。」眼七「何サおばさん、それが
卒八さんだヨ。」母「エ、おやツかな、ほんに〳〵イヤあきれるわ。其の面はなんのざまだ、エヽ引、小
いやらしい。みたくでもねえ野郎だ。是れ親父殿は昨日から、眞黒になつて小言をいつて居るわ。ほ
んにほんに手前の事では、おれが幾ら叱られるかしれねえぞ。」眼七「それ見なせえ、おとつさんが、
眞黒になつて居なさるのに、おめへが其の通り眞白になつて居てはすまねえ理窟だ。」卒八「又口を出

しやアがる。うつちやツて置けエ。」母「何うしてうちやツて置けるものか。サア／＼一所にあゆべエ。」卒「あゆべといつて、こんな面をして行かれるものか。マア先へ行きなせえ。」母「イヤ／＼なんでも、此時にあゆべ。其の面でも大事ねえ、親は人並に産み付けて置いたのに、我がすきで外へも出られねえやうな顔にしたのだわ。おれが知つた事か。」卒「イヤサ、そんなつまらねえ事をいつたとつてはじまらねえッサ。」母「何つまらねえ事があるものか。おれにおつとつちや曲つた事はいはねえ。」左「いけへねえ、おぼさんのいひなさる事には理窟だ。それだによつて、夕もはやく歸んなせえといつたに。」卒「イエサ、もう／＼人様のおつしやる事も親のいふ事も、おつとでもきく奴ではござりませぬ。此の間も、マアお聞きなすつて下さりまし。わたくしの申しますには。」卒「エヽもういいわなア。」母「親父殿もだん／＼とる年だによつて。」卒「アヽ引、ひつッこい。マア先へ行きなせえといふのに。」母「イヤ、只噺だわな。」卒「ハアテ、ようごぜえすアな。」母「あれ御覽じまし、わたくしにはおつともはおかせませんに。」卒「ハアテ、ようごぜえすといふのに。」母「へンあの通り何を申しても風の耳へ、むこ。」卒「オットト間違つた。風の耳なら、徳利に口とこねえでは對句にならねえ。」母「もう／＼口から先へ産まれたさうで。」卒「おめへ産む時氣がつかなんだか。」母「エヽやかましいわえ。いい年をしたものを、小馬鹿遍しにして、ほんに／＼もう／＼／＼。」ト、何かわけもなきおし合ひはてしなく、殊にいひつのり、卒八を連れ行かれては折角仕組みし茶番も、今日の間に合はずと思ひ、左次郎はまじめな顔にて奥より出で

「すヤおつかァよくお出でなすつた。時に卒公此の頃またするけかえ、困つたもんだ。さうとは知らず、今日はわたしが餘所へ茶番があつて行きやす所が、相手に女形が入用だゆゑ、だれを頼まうかと考へて見るに、おめへも知つての通り、わたしが内へ来る男に女形を勤めようといふ者が一ッもねえから、こまりきつて居たとこへ、ひさしぶりで夕ちよいとこつちへ卒公が見えたから、取りあへずたのみやしたが、さしたる用事でもなくば、親父さんにいいやうに言つて置いて、わたしに今日一日かしてくんなさらねえかえ。」幸「エ、左様で御座りますかえ。實にこんな奴でござりますから、親父もあてには致しませんけれど、あんまり毎日々々夜泊り日泊りに、宿へも寄り付きませんと、年寄は思ひ過しをいたして案じますから、ツイ尋ね歩きもいたしますが、さういふ譯でお役に立ちます事が有るなら、お心置きなくおつかひなさりまし。殊にあなたにさへ居りますれば、案じもいたしませぬ。」幸「左様かえ、それはマヅありがてえ。ヤァこつちへおすはんなせえナ。」卒「ハイ〳〵、何をおかまひなさりますな。フウ、それでは其の狂言は今日でござりますかネ。」幸「左様さ。」卒「ヘイどこでござりますえ。」幸「南国邊さ。」卒「ヘエ、葦間なら、どうぞ久しぶりで、わたくしも、見物いたしたいもんだが、御一所にまゐつてサ、お座敷の隅にでも、おじやまにならぬ所で。」幸「エ、かゝさんなんだネ、年寄のくせに、どうして一所にいかれるものかネ。」幸「茶番に馳け付けるのではあるまいし、

年寄だとつて、一所にいかれぬといふがあるものか。」卒「イヤサさうだけれど、若いものゝなかへ婆アさまが獨りまじッて見つともねえからヨ。」母「なんだ見ッともねえ。其の若いものには誰がして喰れたのだ。エ、引、きいた風ナ。うぬひとりで育ッたやうに。」[illegible]「何サ、御噂ア、さう思つてはわりい。何もおめへを邪魔にする譯でもあるめえが、マア考へて見なせえ。成程おめへが向うに見て居るとおもつたら、狂言も仕にくからうヨ。ことに女方といふもんだから、何か氣はづかしい樣でわりいのサ。」ト、小婆になり「斯うしなせえ、二三日の内に、わたしが所に月並の茶番が有るなら、其の時そつと知らせてあげるから、卒公の氣のつかねえやうに、來て見物しなせえ。そりやアほんによ、おめへに見せてえぞ。」母「ハ、、、成程それもさうでござりますネ。左様ならば私はもう參じませう。」[illegible]「マア、マア お茶でも入れやせう。」母「イエ／＼どういたしまして、モウ／＼おかまひなされますな。是れは大きにおやかましう御座りました。」眼七「マアお婆さんいいではねえかよ。」母「ハイ／＼どなたも是れにおいでなさいまし。へイ左様なら。」ト母はやうやう歸り行く。卒「ヤレ／＼近年にねえ、苦しいめに逢つた。」ト、眼七を見て、「此の野郎覺えてゐろ。」眼七「ナゼ／＼。」卒八「ナゼ／＼。ヘン氣障な潮來ぢやアあるめえし。」眼七「いんにやヨ、何を覺えてゐるのだ。」卒「エ、とぼけやアがるナ。此の面でお袋に逢はせてくるしませやアがつた、むね氣な野郎だ。」眼七「何おれが此の面をごらうじましと、いひはしめえし。」卒「さ

うこそいはねえが、こゝへ呼び出してくれる事はねえわ。」眼七「それだとつて、奥に居ますが逢はれませんといはれるものか。」卒八「それだから留守だと言つてくれろと、頼んだではねえか。」眼七「さういつたノサ。今日は留守でござりますと言つたら、おふくろのいふには、留守でござりますから、尋ねに歩行きますッ。こりやア理窟だから仕方がねえわサ。」卒八「エ、居ねえといつてくれと頼んだのだわ。」眼七「さういつたノサ。さういつたら、居ねえから尋ねて歩行きますといふから。」卒「エ、爰には居ねえといふ事だわ、こじれッてえ。」左次「ハ、、、、もういい／＼。いつまでわからねえ事をいつてゐるのだ。おれが折角丹精して拵へた顔で、其の様に理窟をいふと、容顔がくづれて愛敬がおちてわりい。マア／＼奥へ歩行ばつし。」ト、三人は奥へ引込みながら、眼七「ヘン容顔にしてはまづいな。此の容顔の崩れるよりは、冬瓜の葛煮の方が氣がきいてゐらア。」卒「いいヨ、うつちやッて置かッし。」野呂「イヤさすが厚皮鐵面皮と呼ばれたる卒八も、今日は大ひるみの命だナ。」卒「どうも親といふへうきんものにはかなはねえ。それでも、今日は左次さんが、まじめで美味く受けてくれたからたすかつたぜ。」卒「ヘン親といふものは、べらぼうなものだナ。この面が菊之丞に見えるといつたら、眞受けにしてにこ／＼して嬉しがつたぜ。夫れはよかつたが、お袋もふしぎとは思つたと見えて、見届けたくなつたかして、御一所にゐふりたいには、ちとおそれたテ。」卒「イヤモウ今日はおめへのまじめでたすか

つた。南無俗名左次郎大明神さま〳〵。」閑「コレ〳〵そりやアいいが、お袋は美味くはまつても、親父が承知しねえとでもいつて、又迎へでも来るといけねえから、ちつとも早く発足する工面にしようではねえか。」アバ「ちげへねえ〳〵、こんな南瓜でも今日ばかりは立お山といふもんだから、今ぬけられては芝居が出来ねえ。」野呂「ほんにさうだ〳〵　サア〳〵ちつとも早く出かけよう〳〵」卒「ム、出かけようはいいが、此の面で出かけようか。」卒「知れた事だ、ナゼ。」卒「先へいつてはいいが、爰から両国までの道中が難渋だテ。」卒「何のこんな怯んだ事でいけるものか。そして左次さんが大骨を折つて塗り上げたものを、お袋に見せた許りで落す事はねえ。サア〳〵着物を着替へて早く出さつし。」卒「何サひるみはしねえけれど、何だか近所が。チヨツ、どうするものか、乗り掛ッた船だ、出かけよう〳〵。オイ野呂公、衣裳を爰へ下ッし。イヤまづ牀山が先だ。ドイアバ公、ちよつと下地に結ひ直してくんねえ。」アバ「たんの仰山な、下地もなにもいるものか。髷をおッつぶして、かつらをかけさつし、合引さへしつかりしめればいいわ。どうせバヽる〳〵と結んで置くから、ちよいと米屋冠でもするだらう。サア〳〵天窓をこゝへもつて来さつし、おッはめてやらう。」卒「ヘン牀山の方へ呼び付けられる立お山もねえもんだ。あんまり下直に取りあつかやアがる、いま〳〵しい。」これより皆々總掛りにて、衣裳かづらをつけ　左次「サア〳〵出来た〳〵。そこで後見をつれて、さきへ出かけさつし。みんな一所に

ぞろ／＼出てはわりい。そして船宿で待ち合はせるがいゝ。」卒「オット承知々々。サア眼公呑公、出かけよう出かけよう。」岳「ム、、併し俺ア先へいつての後見は勤めようが、途中を一所に行く事はまつぴらだ。眼公獨りで澤山だらう。」眼七「澤山でもあらうが、俺も一所に歩行く事はなんぎだ。」卒「おまはんがた、なんぼ私等が様なもんだとつて、其の様にいやがつて呉れさつしやる事ァ、あんまりッしやりさうもなからッしやりさうなもんだ。エ、引モウ、いつそ腹が立つ、ヨウすかねえ。」眼七「エ、、桑原々々、萬歳樂々々々。己アモウ／＼、身がちゞむほど不好くなつてならねえのに、おまけにこんなわる身や何かされて、たちきれるものか。」岳「ちげへねえ／＼、途中でどんな難儀をしようもしれねえ。どうぞひとり先へいつてくだせえ。」卒「コレまうし呑七さん、こゝからひとり参れとは、浄るりそれエがアをとオこオのオ、。」團六「猿之助に花やるとおぼしめし、番附一枚づゝお土産におめし下されまし。跡はすぐさま二本綱、一本竹の輕業ぢやア。」アバ「ハ、、、、歯のむき出し鹽梅といひ、何一つ不足のねえ猿芝居だ。」出目「此の氣ちげへを連れて歩行くのは、たれもいやがる筈だ。」岳「さうよ。すこし内端にでもすればいゝが、あんまり外端過ぎるからこまりきるぞ。寔にはや世話いやけた事だ。どうも仕方がねえ、二度手開だけれど、船宿でまた塗り直さうから、ゞア面をひつぷいて仕舞にいッし。それとも獨り先へ行くか。」卒「どうしてマア、私は、イヤ、ついぞ供を連れずに他所へ。」

左次「エヽ胸がわるくならア、いめえましい。ナイ眼公おだてさん所へでも行つて、すき油をいつと買つて来て、此の面をひつぷいてやつて下ッし。そしてモウ片日陰がついたから、早く出かけようぜおらア二三人で先へいつて、船宿で游ぎ人足を拵へて置くから、みんながするけなしに早く来さつしヨ。」トバ、野呂、岡八、出口「おいらも船手の人足だから、左次さんといつしよに出かけよう。」左次「それがいいいッ。」ト、そこ〱に支度とゝのへ、左次表へ出る。左次郎は立ち止り、左次「眼公跡のしまりをしつかりして出さつしョ。」野呂のみこんだ、こゝかまはずと。」トバ「がつてんだと尻をはしよれば。」一同「トンチキチン〱〱〱引、トンチキ、チン〱〱〱〱、トンチキ〱〱〱、ドジ〱〱〱〱〱。」トヽ口三味線の三重に、うかれて五人は出でゝ行く。あと三人もそれ〲に支度とゝのへ、眼七は勝手おぼえし入口へ戸をひきたて締りをし、かねて約せし神田川の、舟宿さして出でゝ行く。これより両國までのくだんだんは、相もかはらぬこたつき故、御見物のあくびを恐れ、舳をみじかく切りあげて、まはら〆筆をブン廻しへはめこきりゝとひんまはし、すぐに両國廣小路の景色、辻打にて道具とまる。

三編追加下

何人の口すさみにや、

兩國へ夏の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ咲きけり

とは、こじつけながらもむべなるや。晝夜をわかたぬ種々の見物茶見世諸商人、あげつらふにいとまはあらねど、お振舞ひ申す枇杷葉湯は、陰德者の婦人耳をいため、七味唐辛子の匕は五齢湯の調合に替り、わづか四文の白玉水も、ギヤマンの鉢にいれて、生醉客のよろめくに、一しほひやつこく、涼しく見せる水からくりは、上晒しの心太、突出し茶屋に飜へる大花火のビラは、娘とともに客をまねき、吹けよ川風上れよ簾、中の小唄や聲色淨瑠璃、今を盛りの涼みどき、折こそよけれと八笑人、船宿にて手筈をさだめ、彼の卒八はおしつよくも、女の形にさまをかへ、姿にあらぬ柳橋を、虚無僧下駄に踏みならし、左褄のちよこ／＼歩行み。さすがの呑七眼七も、見るにしのびずおのづから、跡へ跡へと引き下れば、卒八は立ち戻り呑七が手をとり、卒八「呑七さん、お前樣定におそい足だヨ。さア一所においでと申すに。」呑七はちゞみあがり小聲にて、呑七「コレサ卒公、爰へ來てまで、さうふざけてはいけねえ、もうまじめでやらッしナ。」卒「すヤ／＼、又呑さんがおしかりだヨ。そんなら眼さん、おまはんと。」

眼七「ア、〳〵後生だ〳〵をがむ〳〵。おらアすぐに爰から出奔だ。」呑「ちげへねえ〳〵。おいらも跡で連中をはぶかれても仕方がねえ。ソレ見さつし、ちら〳〵人立がするわ。」卒「そんなら私ばかり。」呑「エ、わたいも何もいらねえ。はやく先へ行かッしといふのに。」ト、両人はまじめになつてやう〳〵追ひ立て、跡より卒八が歩行く姿を見ながら呑七「なんと眼公、今度の大役といふは足下とおれだぜ。この氣狂の守を、誰が仕人があるものか、馬鹿馬鹿しい。」眼七「ちげへねえ。おいらア今、住吉屋で呑んだのは、からりと醒めてしまつたが、卒八めはだん〳〵酔ひが出ると見えて、悪くふざけやアがる。」呑七「イヤ酔ひもしさうな物だ。今日は取りわけ食らッたよ。左次さんにとめられてから、又内證で茶椀でグイ〳〵ひつかけたヨ。」眼七「併ししらふで、アノざまをして両國までくれば座敷牢ものだハ、、、。」呑七「アレ〳〵あのざまを見さつし。ぐにや〳〵とよつぽど氣取ッて歩きやアがる、いよ〳〵しいべらぼうだ。」ト、二人は手に汗をにぎりつめ、遠見に跡より付いてゆく。卒八はやがて橋へさしかゝり、中頭まで渡りしが、爰ぞよきほどなるらんと立ちどまり、跡を振り返り二人が来るを待ち合はす。眼七呑七は卒八がわが身を見るがくるしき故、あとへ〳〵と引き下り、いまだ橋の袂までも来らず、影だに見えねばしばし欄干へもたれ、川中を詠め居る。うしろより袖を引いて、「コレナゼ立つて居るのだ、左次郎さんや皆はどうしたゞ。手めへ又酔ひ過ぎて、はぐれはしねえか。」ト、いふに後をふりかへり、たれかと見れば母ゆゑびつくりして、卒八「かゝさんおめへどこへ行くのだ。」母はにこ〳〵して母「うんにやよ。おれも今日はお天氣はよし、お開帳へも参りたし、又跡でやうすを聞けば、今日の茶番は外でするのださうだから、何も人さまの家へ行くではなし、しらぬ顔で見物

しようと思つて、さつきから橋の袂にまつて居たのよ。」辛八「エ、お前もつまらねえもんだ、なんの見ずともいい事だ。こんな事に親が付いて歩行いては、友達の前へ外聞がわりいわな。お開帳へめゑッて、早く歸んなせえ。」母「エ、引、しよむく親を邪魔にする。宜いわ、見て居てもら。」辛八「イヤサよくねえよ。」母「己ばちの當つた野郎だ。とかくおれをば目の敵に。」辛八「エ、引じれつてえ。どうでもいいから歸んなせえよ。」母「うんにや歸るめえ。われが見せねば、左次郎さんに言ひ込んで見せて貰ふわ。それもならぬと言はつしやれば、われを引きずつて歸る。おれが子をおれが連れて歸るに、誰がなんといふものか。」母「ヤア左次郎さんはどこにござる、一所にあゆべ。」ト、辛八が手をおさへてひつぱれば、たださへ物見高き往來の人、何かあやしき女と褒々と爭ひ居る中ゆゑ、さまざまに評して、立ちどまりて見物する。存七眼七の兩人もさいぜんより見物にまじり、辛八がくるしむを見てをかしさをこらへゐる。辛八「コウかゝさん、おあへもはや、むく犬の尻尾、宿なしの髮の毛、帶締のこぐらかりとも何とも、名の付けやうのねえ、わからねえもんだ。早い事をいつて聞かせようが、年寄は邪魔になるから歸んなせえよ。」母「なんだ年寄は邪魔になると、ヘン是れ此の廣い兩國でナ。」辛八「住む所さへ長橋のが、聞いてあきれらア。」母「おれが五人や十人居たとつて、どこに邪魔になるものか。夫れとも兩國中の年寄を狩つて仕舞ふかえ。」辛八「エ、引どういへばかういふと、マアどうでもいいから爰をはなしなせえヨ。」母「イ、ヤはなさねえ。何でも左次郎さんの胸を聞いて料簡が有る。」ト、金剛力に辛八が襟首をおさへて放さねば、さすがの辛八も持てあまし、眼七か存七を尋ねるやうす。さ

いぜんよりかくれ居たりし雨人も、見物黒山の如く集まりしかば、もはや化の皮の露はれぬうち、時分はよしと顔を出せば、　卒八「コウ〳〵おへねへ〳〵、呑七さん早く來て、どうぞしておくれよ。」　呑七「ナヤおッかア、おめへどけへ行きなさつたのだ。そしてまアどういふ譯か知らねえが、この子もわかい身そらで、此の樣に人立のする中に居るもつらからうから、まア私にあづけて、手を放しなせえ。第一外聞がわりいわな。」　母「イヽエ、まア聞いておくんなせえ、さつき左次郎さんがお頼みなさるから、親父どんにもいいやうに取りなしをいつて置いてね、親は親と思つて、どうぞいい上へもよくさせてえから、此の暑いのにえつちらおつちら、ちつとも手助けにならうと思つて、出て來ましたのに、ほんに〳〵つやもなく歸れと申しますのさ。それもマアよう御座いやすけれど、ほんに〳〵三千みろく、わたしに苦勞ばかりさせておいて、兎角わたしを邪魔にいたしやす。よくまア考へてごらうじやし。としをとつて邪魔にされようとつて、艱難苦勞して育ッてはおきません。ほんに〳〵餘りといへばほんに〳〵、腹がたつてほんに〳〵。」　眼七「もちつとだよ〳〵。それだがノ、おつかア。今呑公もいふとほり、人立がするので外聞がわりいから、まア〳〵わたし等にあづけなせえ。」ト、やう〳〵引き分け、母をおさへて卒八に目くばせすれば、卒八も心得、とても母をはゞきこは面倒、此の人立をさいはひと、そろ〳〵帶などゆるめ身づくろひし、雨人に目くばせして、　卒八「コウかゝさんお前のやうに、やかましくいはれては、わたしも此の世に生きて居るかひがねえから、私やアもうかくごを極めた。おめへは隨分達者で、たんと小言をいつて居なさい、モウおさらば

だよ。無南あみだぶつ／＼。」ト、いひさままつぱだかになり欄干へのぼれば、母はうろたへ呑七が手をふりはなし、卒八が足へしがみ付き、母「ヤアコレ、卒八よ
氣がちがつたか、あんまり短氣だ。これさ危えわヨウ。ヤア呑七さん衣物はまア、うつちやツて置いて、是れサはやく、エ、眼七さんや。エ、おめへ方アナゼ見てゐるのだ。ヤアイ、人ごろ。エ、、たすけぶ。エ、何でもいいから、早く來てとめてくれねえのか。」ト、泣聲を出してあせるゆゑ、人だちのうちより止めさうなる人見えるゆゑ、眼七はそばへ行き 眼七「コレおつかア、まアおれがのみこんで居るから、手をはなしなせえ。」母「エ、おめへがいくら呑込んでも、此奴が飛び込んではしやうがねえ。なんでもまア引き下してくんなせえよ。」眼七「イイヤサ、おれが飛び込んでゐるから大丈。」卒「おめへは飛び込むともどうともかつてにしなせえ」ト狂氣のごとく泣きわめく。酒狂とはいひながら母のなげきに氣もたゞまず、卒八は欄干へ抱き付き、足をふりはなさんと互にあらそひはてしなく、他人の手出しありては邪魔と、眼七呑七兩人にて母の手をむたいに引き離せば、しめたと手すりへよぢのぼり、なんなく川へ飛び込めば、母は身も世もあらけなく眼七にしがみ付き 母「ナ、なぜおれがワッと一聲泣き出し、物ぐるはしく眼七をこづき廻しにじりする、物いはんにも聲いでず、て、手を、ウ、うぬが敵だ／＼。」眼七はもてあまし、呑七をたづぬれども、呑七は卒八が飛び込むを見るより爰に用なしと、ぬぎ捨てし衣類を用意の風呂敷へぐる／＼と包み、人立にまぎれ、舟宿までかへりける、これとは知らず、眼七「ドイどん公／＼、どこに居る。まア來てくれねえか、こまりきるわ。」母の耳へ口をつけ「これ母さん、案じなさんな。ほんたうに身を投げはしねえヨ。是れが今日の茶番だよ。」母「エ、小甘口な子供をだますやうな事、現在今爰から飛びこんだは、うぬがおかげでかゝりッ子をしなじねえ死なゝせたゾ。なんでもうぬが解死人だ。ホオイ／＼／＼。サア卒八をいかして返せ。」眼七「ム、ヨ

いかして返すかい、まア柳橋までおのびなせえ。おつと〳〵早く引き上げて、水でも呑ませよう。」此の言葉にすこし母が氣もゆるみ、母「ム、そんなら早く舟をかりて尋ねよう。まだ間に合はうかね。」眼七「合ふとも、人水中に死して二十四時が内は蘇生すと、論語に出てゐるわサ。」ト、眼七は出まかせの出たらめに、けにもと思ひし樣子にて、たとしい、舟の方へつれて行く〳〵最前卒八が橋より飛び込みし時は、そのまゝ身投といふよりも、我もつゞいて川中を覗きこみつゝといふときに大わらひ、混雜のうちにも眼七は、卒八が無事すつぽりいつたと心づきしが、はやく母をこゝへ引き戻し、くはしく話し聞かせんとのみおもひ居て、母に川中を見せ、聖言玉取のまねびを見せなば、母も案堵するときに、かえすがえす見せてはあしきやうにおもひしは、ふつてわいたる母の狼狽もの出て來しゆゑ、こゝの場をと見えたり。見物の人川を「ワァイ〳〵ぼくねんじんやアイ。」「ワアイわまやアイ。」「ヤアけやアイハ、ハヽ、、。」それはさのぞき、ておき舟手の人は、かねて用意の家根舟に、たのみし游ぎの人々へ魚盡しをかゝらせて、橋間に近く舟こぎ寄せ、橋の上を見上ぐれば、何かはしらず人集まり、混雜なする其の中より、手摺への居る人物は、まがふかたなき卒八が丈なる髪をふりみだし、今ぞ川へ飛び入る氣色。そりやこそと相圖と身がまへして、待てども〳〵卒八が、飛び入りもせず手間どれば、間にのぞみ氣おくれせしにや、合點のゆかずと、左次「コウなぜあんな眞似をして居るだらう。」[illegible]「さうさ手間どつて居るうち、化があらはれちやアつまらねえもんだ。」出目「左次さんおめへふた、手足やからだも塗つてやればよかつた。アレ見ねえ、首ばかり眞白で、總身は栗色だぜ。へゝ爰から見ると松の木へ冬瓜がなつて居るやうだ。」左次「よけへねえおれも裸になる事にツイ氣がつかなんだ。」野呂「しかし塗らねえはうが綺麗だらう。」

塗つた所が難船物のころ柹か、駄菓子屋の牛皮だらう。」圖武「汗をかいた二の腕は、丸揚のお薩とも見えよう。」アバ「はぎの白きを見ると、仙人が落ちるから、はぎの黒きを見たら、川童が天昇でもしねえければいいが。」およぎ人の若イ衆「モシむだつ口アいいが、あゝしてゐたら、橋番から出てつかめへられるだらう。早く飛び込めばいいネエ。」左次「左様サばかりしい、何をして。」ト、言葉もいまだ終らぬに、ひらりと手摺ををどりこえ、ホンと飛びこむ橋杭の、開かずも多き其の中に、いつもかはらぬ開のわるさ、うろうろ舟が大開より、何心なく乗り出す。途端にどうと胴の間に、積みかさねたる瓜西瓜の上へどつさり異形の人物落ちて、そのまゝ倒れる。商人みなみな仰天し、おなじく尻居にどつさりと顔見合はせてゐたりしが、あたりの舟にもたちさわぎ、そりや身投ぢやといふよりも、われもわれもと漕ぎ寄せる。橋の上には口々に「二のゐまやアイ」「二とんちきやアイ」トどつと一度にわらふ聲、又踏みちらしたる水菓子の、潮にならうて流れるに漸うと心付き、商「ヤレ船助ソレ西瓜を早くかきよせろ。」のにや、手許にありしもやひ棹を水下へなけいれる。棹は橋開によこたはり、ながれかゝりし瓜西瓜、しばらく是れにためらふうち、大半集めひろひとる。今一人は卒八が大の字なりに倒れゐる傍へ、さそくに川水を吹きかけ吹きかけ、商「オ、イ女ち、ヤアヤア此の女アきんた、す、す毛だらけなからだ。コリヤア何だらう。コレ瓜吉や、オイ船助もはやく來て見てくれ。」ト、うろたへる。また近邊にもやひし舟もみな集まりて見物する。最前より左次郎はすぐに漕ぎ付け引きとりたく思へども、知らぬ顔には事むづかし、幸ひたのみし所の人々、彼のあらしたる商人舟に、わけをつけるに便よしと、右の譯をたのめども、若助「おめへさん方のおたのみだがネ、私等アさういつちやアをかしいけれど、いれんな馬鹿もして歩行いて、人の世話厄介にもなつたり、又およばずながら人のこともナア金本たうにヨ、そつ首が半分かけて、半死半生になつたもんでも、たのまれて引きとりにいつた事も、いくらも有りやすけれど、此の一件はどうもナア八、あんまり人は集まつてゐやす

し、ァレ見や七、錢の出ねえもんだと思つて、すてきに見てるやァがるぜ。あれだからねモシ、わいらアどうも此の仲人にやア、どうもナア七、外聞不宜やうでナア六。」六「さうさなァ、つひぞまァあんなものをこ。」若「べらんめえ市に張形を賣りアしめえし、あんなもんだのこんなもんだのと、へこれからねえ事をいふなエ。」六「なんのべらんめえ、てめへこそわからねえことを言はァ、人が集まつてるから、行きにくいといふから、おねツくそが悪いのだァ。おいらァ弱えけれども、相手に大勢ほどがいゝ。」若「ヤイ／＼、是れえつまらねえ事をいふなえ。モシ斯うしやせう、早く金がうちへ行つて、親父をたのみませう。こんなことアどうも、若えものはどうもそれ、なんだおいやがります。」七「違へねえあれ見や、彼處の舟に、お鶴やお琴も見てるらア。外聞不宜々々々々。どうしてあすこへ出られるものか。」ト、とてもかゝり合ふ氣色なければ、左次郎はじめ皆々も心いらだち、左次「なるほどおめへがたも氣がなからう。かうしやせう、おつとも早く佳吉へいつて、次郎さんをたのみやせう。」なァ「それがよう御座りやす。サア／＼、すイだれでも艪を押しやな、早くしろエ／＼。」ト、是れより若い衆二人艪をおして神田川へ引き返し、佳吉屋の棧橋を上るを見て内より眾七「そりや／＼おばさん歸つてきた。すイ辛公はどうした、早くこゝへ来て、かゝさんに顔を見せてくんねえ。おらアモウ責められぬいたぜ。」左次「おや／＼ほんに、おつかアおめへどうして爰へ来なさつた。」廿「イエサおまへさん、どうして来たか、斯うしてきたか、はゞかりながら足は地につ

きません。マアあの野郎どのは、どこへ参りました。」左次「アイサ、今其の事でちよつと爰へ来やした。ちイッとおちけへの事があつて、コウ〳〵アバ公みんな奥へ早くいつて、爰の亭主にくはしく噺して頼んでくだつし。オイ内のおツかア、次郎さんは内だらうネ。」女房「ハイ奥の二階に、晝寐をしてをります。」左次「サア〳〵出目公、おれも今行くから、亭主をはやく起して下つし。手のびになつては悪い。」出目「オイ、さア〳〵アバ公。」ト、みな〳〵奥の二階へ行く。左次郎はじめ、何かそは〳〵する様子に、母はまた〳〵泣聲いだし、眼七吞七をおさへ、母「へン皆さんが、なんぼ氣やすめをいつても、モウはやあの野郎は、こつちもんぢアねえ。サアなぜおれが手を二人で引き放したのだ。左次郎さん、一體今日はおまへさんにおかし申した野郎でござりますから、お前もかゝり合ひはのがれますまいから。」左次「ナニサおツかア、其の様にあんじる程の事はねえ。今に爰へつれて来るから、落付いて居なせえ。どうしてまた吞七や眼七を其の様にハ、、、、マア〳〵今にみんなわかる事だ。」ト、奥へ行き、皆々と一同にたのめば、次郎兵衛もめいわくながら是非なく受け込み、次郎兵衛「サアそんならおめへ方も、四五人わしと一所においでなせえ。」左次「そりやア有り難え。サア〳〵ちつとも早いがいい。」ト、みな〳〵、見世へ出で、左次「オイおつかア、今迎へに行つて連れてくるから、モウ其のやうに氣をもんで案じなさんな。コイ吞公眼公、二人はおツかアと一所に待つてるさつし。」眼七「行きたくツても此の通り、押へて居てはなさねえから仕方がねえ。」左次「ハ、、、、オイ内のおツかア、なんぞちよつぴりした

もので、此のおばさんに一口上げてくんなせえな。」男「イヱ／＼どういたしまして、酒どころか、いゝとりの倅が死んだか生きたかといふ所で、なんならわたしも御一所に参りませう。」呑七「なるほどそれともナニからう、ナニ左次さん。」眼「ム、ナニあぶないい事はいゝが、おいらなりゃ見たら又。」呑「ハ、アそれではモウ、水ぶくれになつて。」眼「何サ／＼、さうではねえが。」呑「そシやつぱり乗せ申しておいでなせえ、かまふ事アねえ。」アバ「そんならさうよ、ナア一所に。」男「ハイ。」ト、返事はしながら船をつけあげて腰たたずも廻り廻るを、呑七眼七右の腕をもちそへて、やう／＼舟へたすけ乗せ、みな／＼一度に乗りうつる。扨最前の商人舟には身投と見えて、早彩の人物船中にたゝれ居るゆゑ、大きに驚きうろたへさわぎ、うち寄りさま／＼介抱すれば、やう／＼息を吹きかへす。されどもあまり見物の舟おい／＼に集まりしかば、先づ片陰へおけんとて、本柳橋の横堀へ舟を入れ、爰にて焚など買ひ寄せ、漸々介抱するゆゑ、いよ／＼生氣になりたるを見て、商人「是れおあへはまア女の褌をしめて、天窗へはかつらをかけて、まづ茶番狂言でもして居たといふ様子だが、マアどういふすまねえ事があつて身を投げたのだ。」ト、聞かれてはさすがの卒八も、船中のやうすを見れば、殊のほかふかふかおもし、それのみならず介抱にあづかりしかば、さながらおもひ付きつ茶番ともいひかね卒八「イヤモウ何といはれても、一言の申し譯もござりやせん。どうぞまア料簡してお くんなせえ。」商人「何サ料簡するもなにもいらねえが、まづおめへの身分の事だが、どういふすまねえ事があつて、死なうとまで思ひ詰めなさつた。なんにしろ悪い料簡だ。殊に狂言でも仕よう

といふくらゐだから、何も深しくもよほしたことでもあるめえ。定めて何かふつとした出來心で、死ぬ氣になつたもんだらう、なんにしろ不料簡なことだ。そしてまアお前のうちはどこだエ。」卒「エ、何サ連のものもありますし、そして龍宮のやつらでも、來さうなもんだ。おれが飛び込んだのを見てゐたらうに。」與「なんだ龍宮の奴等とは、そりやアおめへ心安いのか。」卒「さやうサわたしが飛び込むのを見ると、すぐに出る筈にしておきやしたが、大方此の舟へ落ちたもんだから、そこで皆はつしやしたらう、ばか／＼しい。あんまりたのもしくねえ奴等だ。」ト、何かわからぬくりごとをいひつつ川の面をうろ／＼見廻すを見て、與「是れおめへはでえぶ取りのぼせて居る様子だが、まア／＼落付きなせえ。おれが呑込んでゐるから、龍宮へでも極樂へでも、すきな所へやつてやるから。マアお前のうちはどこだエ。これサ其のやうに手をついて居ずと、まア顏をあげなせエ。」ト、打寄りてだましすかして尋ねられ、さすがの卒八もせんかた盡きたる所へ、彼の住吉屋の舟やう／＼尋ねあたり、次郎兵衛は商人を見れば、さいはひ知る人なれば、次郎「オイ藥兵衛さん、おめへの船か、イヤとんだ目にあつたナウ。しかし其のお人にはおらがうちのお客だが、エヽ引、チト間違への事があつて、マアコレとんでもねえ、是れまアなんにしろお前が氣の毒だが、それもマア、眞によ。狐にナウソレ、エヽ引、マア是れ間違へされたと思つて、何にしろおれにあづけてくんねえ。」與「ハア次郎さん、おめへん所のお客かえ。やれ／＼それはマアいゝさ、どうらソレ、さつきから此の方にも色々所を聞きやすけれど、ヤレ龍宮から迎へがくるの、な

んのと、わからねえ事ばかりいつて居さつしやるから、今も仙助や瓜吉と相談して、橋番へでも連れて行かうかと思つた所ヨ。」ト、殊の外もてあましたるくちぶりに、左次郎はじめ皆々も安堵し、左次「イヤモウひよんな事でおはきにお世話になりやした。お氣の毒ナ。」商「お前さんがたのお連かえ。どうやらチト、まごついて居なさるやうだが、危えことをしやした。まアノ＼おまへがたにわたせば安堵だ。次郎左衛さん、そんなら御世話ながらつれ申して行つておくんなせえ。」ト、却つて先よりたのまれに、思ひの外に風なみよければ、左次「サア次郎さん、そんなら斯うしてゐては御商賣のおじやまだから、ちつとも早くこつちの舟へ引きとりやせう。」商「左樣サ、どうぞ早くさうしておくんなせえ。また飛び込まれようかと思つて、此の通り褌の三ツも押へてゐだア。サアもしおめへの心安い衆が来なすつたから、あつちの舟へ乗りかへなせえ。そして必ず馬鹿な料簡を出しなさらねえがいい。眞にまア、死んで何がおもしれえものか。サアノ＼立ちなせえ立ちなせえ。」ト、引き立つれど、腰を強くうちし故、急に立つ事かなはず、さすがの辛八もしをれきつて洒落も出でず、さりながら始終亂心のあつかひ故、まだしもそれにまぎらして、樣々のたはことをならべたて皆々にたすけられ、やうノ＼舟を乗りかふる。父母はさいぜんより船中にて茶番の始終くはしく聞いて安心はしたれども、腰の立たぬに何れも當惑しけれど、まづ商人舟へはそれノ＼に禮をのべて立ち別るる。次郎「そんなら菓兵衛さん、いづれわたしが禮に行きやす。ア、是れ、大きにとんでもねえ。ハヽヽ、アイ、そんなら。」ト、みなノ＼も相應の挨拶にて引き分れ、やうノ＼舟宿まで立ち戻りけれど、いつになく辛八は元氣もなくふさぎゐる故、皆々大に案じ、左次「次郎樣とてもの世話ついでに、おめへの心安い醫者さまを賴んでくんなせえ。先づ爰で見てもらひてえもんだ。」次郎「アイするぶん

醫者も有りやすが、こんな怪我には、彌次兵衛さまがようございやせう。」出目「違へねえ、千住なら大丈夫だ。ア、しかし道法が大變だナ。」眼武「いや〳〵近くていいのが有るわ、駒形の榮順さんに頼むがいい。あれは河童相傳で、打身の療治は名人だ。」卒「ほんにさうだッけ。駒形なら舟で行けばさうはねえ、それがいい〳〵。」次郎「それとも彌次兵衛さまになさりたくば、お玉が池の若旦那の出張へいけば近いネ。」卒「おらア駒形の方にしよう、おたまがいけエばかりではねえ、尻が痛えから河童相傳がよささうだ。ア、是れ天窗が痛えといふ地口だが、おめへ達にやア聞けめえ。」左次「エ、べらぼうめエ、しやれが出るやうか。俺には大きにうたせたぜ、いま〳〵しい。」卒「そして榮順さんが容體を聞いたら、駒がた船中落ちやしたといふ氣だが。」左次「ア、うるせえぞ。氣儘にしておけば、あんまり不景氣な洒落ばかりならべたてる。モウ〳〵しかし此の洒落が出るやうでは、案じる事はねえ。」卒「此のしやれがよかア魚でんにするがいい。」アバ「エ、うつたうしく、下物ばかりならべたてるぞ。いいサ此の節のことだから、こはだ好しなことを何とでも鰯ッし〳〵。」ト、例のだじやれの數ものの渡りぜりふに並べ立て、はては大笑ひとなり、卒八も思ひのほかすこやかになり、としてうろたへ療治するほどにもあらざれば、一まづ住吉にて大酒となり、それよりも涼みながらのかへりがけ、かの齋藤が名術にて一療治にてころりと全快、歸るとすぐにしやうこりもなく、夏の趣向の跡がまをかけてそばから焚きつけられ、たちぎえなきはかねての義定と、遊戯に倦まぬ能樂人、なほ池の端の參會に、今度はいちばん氣をかへた趣向をつゞる八笑人、第四編目に奉入御覽候

序

這の八笑人といへる小冊、先年珍らしく發きそめたる脣の、花暦なる櫻木に、いよ〳〵登る瀧亭主人は、吾が師狂訓亭の兄にして、彼の總領の童戯人、六々三十六鱗の、丈ある鯉の味噌煮は、美味を知らする可笑しみに、一家の風味を現はして、腮のかきがね是れが爲に、外させんと要する、滑稽の妙疏れし竭せり。然るに杣人は篤實く、專ら世の人情を、ありのまに〳〵綴りなして、假にも勸善ならざれば、毫を耕らず、懲惡ならねば、書錄さずと四角ばりて、珍文漢語の遠詭く、走るを止むる駒木履の、音のから〳〵渡つた樣な、所を約して皇國風、而も東都に流行す、人情史は著はせど、旨とせざる處なりと、自慢のすまして喰はせる。比するに方函圓蓋の、たがひの中に小子は、右へよつたり左へよつたり、合はせて不意叶八笑人の、中へ漕ぎ出す東の船、雫とすみだの川風に、吹かる春の山出し男、笑ふ許りを用處にて、不屬一方の放蕩もの、此の序を書けと命はるゝまゝに、漸う毫をとりが啼く、冠辭も久しいものにて、欺瀬漢せず出題傍に、智慧の袋のふるうはござれど、這の書の餘紙の塡詞に、する事しかりといふものは、綠橋西岸市隱の食客、原の狂名瀧亭絲丈、今は流れを引きかへて、不至作者の其一個。

東船笑登滿人誌

一切衆生の薄地、凡夫心に八葉の蓮華あつて、取りも直さず出來合の、如來なりとはさる說法場の耳學問、其の八葉の潔き、數にはあへど世の垢に、よごれた顏の八笑人、女を見る目と喰物に、グビ付く咽の其の外は、無能短才何事も、知らぬが佛骸中へ、箔のついたるなまけもの、人のそしりも不忍の、池の蓮の花盛り、折こそよけれと左次郎が、例の庵へ寄り集ひ、又もめぐらす茶番の趣向、香を卷葉の横街へ、直に立葉の早合點、仕損ッては二度三度、總身に流す汗の露、玉とあざむく一工夫、今度は是非にと無い智慧を、磨く光もとぼ／＼と、闇き高田の螢狩、團扇はもつて取りとめた、趣向なければ主の左次郎、左次「時に如斯八人りつはにそろッては居るが、毎度出かさねえにはこまるノ。」野呂松「さうよ、きりやうばかりよくッても、運のわりいのだから仕方がねえ。」卒八「ヘヽお日かけの樣にいやアがる。ハヽヽヽ。」左次「なるほど野呂松がいふ通り、都て案事はかなりだが、兎角悲運にして、かんじんの所へ行くと、仕くじりが出來る。どうも思ひきやといふ事が出來るのだから、最初の趣向の惡いといふでもなし、寔にこまるぢやアねえか。」愚智六「なんの其樣に歎息する事が

あるものが、俺が一番、座直しをしてやるから、しつかりして居ネエ。」卒八「ナニおらァ咳は出やァしねえぜ。」呑七「アッァ是非もない事だ。みやびた言葉を遣ふと、ひなびた輩には、解しがたい。、なけかはしい事だァ。」呑七「ナニおいら達がしなびるものか。」左次「マァ〳〵だまつて聞かッし、國武公もでえぶきつくなつたァ。フンそこでまづみやびた言葉といふは、どういふ人の遣ふのだ。」國武「みやびといふは、マァ都ぶりといふ心サノ。」野呂「ハァ一中節の言葉で、たんせきといふのは何の事だ。」二八「大かた夕霞の中に、咳も出ぬのに重ね夜著といふのがあるから其の事だらう。」國武「じれッたくわからねえ手合だゾ。みやびたのひなびたのと云ふは、都ぶり鄙ぶりといふ事で、まづ都ぶりとは、きんりんさまのお出で遊ばす土地は、下々までが、おのづから雲上で、言葉づかひも、おちかつた事や、ぞんざいな事は、いはねえわサ。そこで又ひなぶりといふは、まづ早くいへば。」左次「いんにや静かにいつてくだッし、かういふ事はよく聞いて置きてえ。フン引、ハテナ、ひなぶりといふのは。」眼七「きん玉の黒い物だらう。ソレ色の黒い事を、ひなぶりのきん玉の様だといふぜ。」左次「是れサ、マァまぜつ返しちやァ悪い、まじめな噺だわ。フン其のひなぶりといふは。」國武「マァ俗に云へば。」左次「いんにや坊様でもいいから、本たうの事がいい。」國武「チョッまぜッけへすならよさう。」左次「アァあやまり〳〵、サァまじめで〳〵。」國武「何もむづかしい事ではねえ、田舎風といふ事サノ。」卒八「ハ

テナそれでは都の方で、今のやうな時痰咳をすらば、ひなびとかいふ、田舎の方では屁でもひるか。」

國武「アッア、どうもならねえゾ。嘆息といへば、病と許り心得て居るから、田舎もんだといふ事よ。コレよく聞いて置きナ、ごほり／＼といふ許りが、たんせきぢやアねえ、今お前のやうに、ア、、趣向きがなりに出来たけれど、運が悪くッて、しそこなつて許り居る、何事も労して功なし、アッア是非もなき浮世ぢやナア、なんぞといふのを、歎息するといふわ。」 左次「ヘンべらぼうめ、それは歎息といふものだ。」 國武「ハテ歎息か、ちつとの違ひだ。」 眼七「カラ人非人ちやく、ちやく／＼おちやくちやの癖に、イケ利いた風に、耳學問のこうぜえた口を、たゝきたがるから仕くじるのだ。ハ、、、、。」

國武「なんの知つて居るくらゐなら、何も人にいきせえひつぱらせる事はねえ、ばか／＼しい。エ、出目助よせえ、なぜ人の尻窩を押すのだ。」 出目「此のくらゐひやかされたら、もう少しやはらかくなりさうなもんだが。」アバ「しかししなびた／＼といふから、ちつとひやかすもよからうヨ。ハ、、、、。」

出目「時に痰咳が留つたら、世界を定めようではねえか。」 左七「よからう／＼。先づ左次さんに、野呂松、卒八と、何れも立派に仕損つたが、さてまた次の輕業は、眼公が番だノ。」 左次「さうよ、ア、サゾ重わざだらう。」 卒八「イヤ猿わざだらうテ。」 國武「それだから、爰は一番順をくりけへて、おれが座直しをして、味方の英氣をひつたてようといふ氣だ。」 野呂「ヘン今の痰咳のあんばいでは、やつばり

味方の英氣が、ひッ居るだらう。」眼七「違へねえ。ヘンおめへはマア當分出かけねえがいい。」卒八「ナぜ、ぶッさうか。」眼七「マア痰咳のきこえねえうちは通りはわりい。」卒八「チヨツいまいましい。乾生姜でも呑むべエ。」眼七「サア今度は人の番でもさしくつて、おれが自身に玉手を勞して、座を直さうと思つて居る所だ。今までと違つて大事の場だ。」出目「さういつて見ると、足下にもさせられさうもねえから、大儀ながら出目助、出馬とくるか。」左次「東西々々、皆があらそふも尤ものやうだが、さうして見ると、又外のてえへも、今度はおれがおれがと、いつまでも論がひねえから、是れは斯うするがよからう。」眼七「いんにや、さうしまい。ふだんでもおれが番だから。」左次「エ、おれがいふ事をマア聞かッし、カラ素とんちきの癖に、強情でならねえ。」眼七「ヘン郎功紙を張ッたきん玉を見るやうに、ひどくひッかじめるぜ。どうも仕方がねえ、置候のいふ事だ。マアだまつて、聽聞いたしやせう。」左次「ム、こうらみッぽくいやアがる、すかねえべらぼうだ、ハ、、、、。併し是れでもいつはし方は拙者承るといふ料簡でゐるから、まんざら豆にしても承知しめえ。斯うやつたらどうだらう。」眼七「ム、さうやらう。」左次「エ、豆藏の樣な事をいふなえ、をかしくもねえ。」野呂「コレじやうだんより、さうだんに身を入れるがいいぜ。だれいふとなく春中からの事も、こつちの連だといふ噂から、仕くじッちやア、おいらまでの面がよごれらア。」呑七「さうよおめへなんぞが、うまくやつたあとだ

から。」野呂「アツアあやまりあんどん油さし、ヨオ、イ、サァ引込みだ。コレ送りはどうしたのだ。」岡武「ヘンどんな狼でも、こんなものにはつくまい。」卒八「コウ／＼荒增世界の定まるうちは、閑話休題として、ヘン唯かういつた許りでは解しがたからう、閑話休題とは、むだばなしはさて置きといふことだぜ。」アバ「ムン閑話休題の講釋、もんで張ッて十六文か。ヘン讀本を學書と心得て、六冊物の二三部も見ると、學者になつたつもりだ。」出目「ム、ちげへねえ、よゝと泣いたり、かや／＼と笑ッたり、泥みたる聲音して、ほこりかに話すやつか。へゝよく出來た猿だゾ。」呑七「サァ／＼とかく相談を極めようといふと、稻荷町からまぜつ返して、くだらなく引ッぱつて居るも、久しいもんだ。てえげえにしやべッたら、なんとまじめな相談はどうだらう。」左次「さうよ、今野呂がいふ通り、此の催しの事はうす／＼人も知ッて居るから、番毎仕くじッて許り居ても、見ッとむ有りもしねえから、今度は一番氣をぬいてはどうだらう。」岡武「氣をぬくとはどうするのだ。」眼七「さうサ此の上へ氣をぬいたら、人間に似た獸が、八疋出來る許りだらう。」左次「いやサ今度の名代は高田の螢狩だらう。所で卒公が怪我の直るうちに、モウ螢も末になるし、殊に場所は高田だわサ。今時えつちらおつちらあそこまで、螢を取りに行く人もすくなし、人が出ねえで、こつち許りいつた所が、はじまるめえぢやァねえか。」出目「ム、成程それではやめか。」左次「イヤ最初の規定だから、途中で立ちぎえして

は、今まで磨いた男がよごれるから。」目八「ハァいつみがいたか、氣がつかなんだ。」野呂「さうよ、つひご見た事もねえが、大かた天窗の事でもあらうヨ。さういはれて見れば、日増しにいいつやが出るやうだ。」眼七「エ、やかましいわえ。ちつとは言葉の花といふ事があるもんだわ、それをいち〳〵咎められてたまるものか。マァだまツて聞かッし。今いふ通り、かんじんの螢といふ景物はおくれるし、場所がらはわるし、座頭は眼七と、かう三拍子揃ッたなァねえ。」目八「此の芝居は、ヨロシヤへでも賣るがいい。」眼七「おめへ達は、とかくおれを唯の人のやうにとり扱ふが、チト御料簡違へかと存じられるテ。今までの鼻元思案とちがつて、まづ筋はかうだ。エヘン。」卒八「エヘ、、もう異見もいらねえが、足下の事だから、定めて趣向はよからうが、夜夜中高田まで行つても、荷負うといふ見物もなくつて、何を當てに茶番をする氣だ。」出目「ハァ人は出ねえかノ。」卒八「二三十年も以前は、風流かる奴がたまに行つたさうだが、今は餘り出ねえさうだテ。」出目「それ程知ッてゐるくらゐなら、こんな題を出す事もねえ。」眼七「何サ案じねえがいい、難題でも人にこそよるべしサ、其の時眼七すこしも騒がずサ。出ねえ人を無理に出したがる事もなし、時候はづれの螢をつかめへて、グヂ〳〵して居ても始まらねえから、それは狂言名題として置いて、其のうそ寂しい所へ付け込んで趣向を付けるが、茶番師といふものだ。」卒八「何だか賴みすくない奴等が、むしやうに氣許りたかぶつてゐるから心元

ねえテ。」眼七「ナニサ心元有るヨ。」卒八「マアどんな事をいふか聞いてみるがいゝ。サア存念を残らず申し上げろ。」眼七「ヘン聞いて愕りするなよ。」野呂、卒八「三杯呑んだ、さかな、オット合ひこう合ひこう。」アバ「ア、うるせえ。ふたアりで對々の對に地バゝるのだ。」眼七「どうもならねえ、まア少とだまらねえか。其儀幕なしに地口つゞけで、どうして本讀がはじめられるものか。」左次「サアノヽ眼公、よけいな口をきかずに、ざつと筋許り聞かう。」眼七「マヅわたし獨り、晝の内さきへ行くのだ、しかし高田にちよいと一杯呑まうといふ家が有るかノ。」左次「それは有るのサ。」眼七「其の酒店へ上つて、獨りポツノヽ呑みながら、始終狐と見られるのだ。」國武「どうして狐と見せる。」眼七「そりやア腹に有るのサ。」左次「其の腹が安心ならねえテ。」卒八「さうサ狼とは思はれさうだが、狐の方はどうだか。」眼七「何サ、鯉丈が出した和合人といふ中本のやうに、狐の尻尾をちらと遣ッて、後は思入いろノヽ、仕打たつぷりサ。そこは決して案じなさんな、萬事は胸にあるから。」出目「そりやこゝで、たつた今腹にあつたのが、もウ胸へ来たから、程なく口元か、鼻の先へきさうな趣向だ。」眼七「マヅサ、だまつて聞かッし。跡でもし悪くば、なんとでもいふがいゝ。どうも悪いくせだ。」出目「ヘンもし悪くばもいゝ、もしよくばほめてやらう。」眼七「左次さんちつとどうかしてくんなせえ、わたしには口をきかせねえ。」左次「ハヽヽヽ、東西々々。」眼七「其のくらゐな事でだまるやつらか。」左次「そんなら南北南

北。」眼七「ム、よし／＼、みんながさう向う面へまはるなら、おれも男だ、仕掛けた本讀をやめはしねえ。合手はいらねえ獨りでやるぞ。ヘッぴりごしも、なんとでもよせッけへせエヘン。まア本舞臺三間の間。」出目「まア本舞臺でいゝ、ハヽヽヽ。」ア八「先アだらうヨ。どうせうまくはねえわサ。」眼七は狂言方、本讀のまね横ぐはへにいふ。「都て高田馬場の體、上のかたに料理茶屋一軒。」卒八「だいぶ荒ッぽい書きやうだネ。」野呂「さうさ、筋書の方を間違へて持つて來たらう。」眼七「やかましいわえ、飾り附から小道具は、みんな胸の内にならべて置くわ。」本讀「オイ女中鰶があらば、天麩羅にして貰ひてえもんだ。下女ハイ承つて見ませうト立つて行く。跡にて臺所より見ゆるやうに、何かきよろ／＼として、羽織の裾より尻尾など少し見せ、思入有るべし。此の内さいぜんの下女來り、ハイどうも鰶の天麩羅は出來かねます。」おのれが名も役者めかしていふ。「眼七、ハアそんならたゞの油揚でもいいから、二三十枚出してくれ。」女アイ／＼引と立つて行く。眼七、コレ／＼ト呼び止め、其の油揚は女の手にかけずに、よく切火を打ちかけて燒かずに生でよし。女アイ／＼と下座へ這入る。此の鳴物にて向うより。」卒八「どんな鳴物だか前にはなかつたぞ。」眼七「エ、そんならテンツ、でいい。向うより左次郎、アバ太郎、圖武六、出目助、呑七、卒八、何れも町人の拵へ、螢籠、大團扇抔をもち出で來り、同じく此の酒店へくる。下女出で迎へ、それ／＼に挨拶よろしく有ッて、みな／＼捨臺詞にて、上のかた障子家臺へ這入る。」

野呂「ムヽンやうかん色にいふナ。」眼七「ナゼノヽ。」野呂「黒いやうにごまかした事をいふから、やうかん色よ。」眼七「かまはねえノヽ。」本讀「このあたりより眼七は亭主を呼び、何か託宣めきたる事、都て所繁昌、家繁昌其の外うれしがらせ、受けのよき事許りいひ並べ。」國武「なかしな作者だナア。うれしがらせる事をいひならべッ。臺詞もつけねえ本讀もなかしい。」出目「大方それも胸か腹だらう。」眼七「うッちやッて置けエ。おれが役だから、どうでもいいわ。」左次「ナツトしばらくノヽ。イヤなかなかおつりきな筋だ。マヅ本讀をばあつからう、かいくッて聞いて居られねえ、まじめな相談にしよう。」眼七「ハンどうでござえす、それだからあんまり人を見くびらねえもんだ。」左次「いいさノヽ、廣言は跡の事。それからおいら達は脇の小座敷に居てどうするのだ。」眼七「おめへ方のはうでは呑みながら渡臺詞の雑談。そのうちに、せつかく螢を取りに來て、一疋もとらねえ、これで歸つてはいいわけがねえなぞと、わたしが方へ聞える樣にいふを聞いて、亭主に向つて、鄰座敷のものどもは、螢狩に來たやからと見ゆるが、其の螢が所になくては、かれら歸朝のうへ。」左次「唐へ行きやしめえし、歸朝といふがあるものか。ハヽヽヽ。」眼七「歸國か。」左次「歸宅さ。」眼七「マアちつとぐらるな事はいいわな。」左七「唐と高田だからきつい違ひはねえ。」眼七「エヽ又のたり出るよ。」ト、にらみつけながら「エヽ、歸宅のうへ、近所合壁の友子友達へ。」野呂「アヽ、まづい言草ナ。稲荷さまだらうナ。」眼七「申しきかせるで

有らう。さすれば當所、不繁昌の元手なるべし。」八五「甚だらう。」野呂「ム、甚なるべし。我が通力をもつて、少々螢を取り集めてやるべし、といひながら、勝手の宜い方をむいて、チヽンプイ〳〵御代の御寶と、何か呪文をとなへると、向うの方へ螢があらはれる。」八五「どうしてあらはれる、」一九「それは遠くで見せるのだから、花火でもさからうが、だれぞ向うへ廻つて居るのか。」眼七「さうよ、野呂公が役だ。」野呂「ヘヽあいなてえ、蚊に喫はれながら螢花火をホヌリ〳〵やつて居るのだナ、智慧のねえ。」呂公「其の役をしねえ所が、智慧のある方でもねえから、役不足をいふ事はねえ。」眼七「何サまだ外に大役があるよ。そこで皆が、ソリヤ花火があがるといつて驅け出して、螢籠へ入れるふり。」卒八「やつぱり花火があがると言つていいのか。」眼七「エ、何サ螢が。」卒八「あがるといふのか。」眼七「螢の揚るといふ事が有るものか、知れた事だわ。」卒八「作者のいひつけ通りにいふ気だからヨ。」眼七「おつとべらるの言ひそこなひをば、大概に推量するがいいわ、こじれツてエ。」六「ハヽヽヽヽ、じれ込みやアがるわ。」眼七「それから皆が螢を追ひまはして、取るふりをしながら、花火を遣ふのだ。いい程にとつて、籠へ入れたふりで兼て持參の螢を持ツて、元の家へかへる。」出目「内のものも同じく取りに出たらどうする。」眼七「そりやァおれが。」團武「胸か。」眼七「むねの者どもは、エ、どうもまぜつけへしに、引きずりこまれて、のぼせツけへるわ。」呂公「ハヽヽヽ、甘口な野郎だ、サアこれか

らおれがまじめに受けるから、おれに許り噺す氣でやらッし。フウそこで、内の奴等も出ようとするを。」眼七「コリヤ〳〵、内の者どもは、決して出でる事無用と留めて見ねえ。ドロン〳〵で螢をあらはすもんだから、内の奴等はおそれいつて、なんとでも、おれがいふ通りになるだらう。」左次「さううまくさへいけば、眼七大もてだらう。」眼七「所へ野呂公が獵人の拵へにて狐罠を持つて來て、其の庭へおき、少し思入ありて、ずつと小陰へ這入る。それからわたしが、鼻をひこつかせて、そろ〳〵窺れかゝつて、つる〳〵と庭へ飛び下りる。内の奴等はあはやと驚くをかまはず、罠のそばまでつかつかと行き、すッくと立つをきッかけに、『爰に獵人の、いつも掛けおく狐罠、さまぐ〳〵整へ懸け置きたり。』と一中節の信田妻を、左次さん一口おたのみだ。」出目「ヘン素人が呑口を拔くやうに、大層ひねるナ。」左次「ム、よし〳〵。」眼七「そこで色言葉の切れるまで、少しづゝ思入の振があつて、『煩惱のきづなをかけ。』と言ふをきつかけに、皆一時に、高田の馬場の狐をつるな。テン〳〵トツツン、テントツツンと、三味線茶椀皿丼其の外見合がゝり、手當り次第に、たゝきたッて囃す。わたしは大はだぬぎ、向う鉢卷のやけ踊となるといふのだ。」辛八「是れは眼公にしては出來た〳〵。」眼七「なに眼公にしては、コレおれを何だと思ふ。」辛八「左次郎方に居候とおもふのサ。」左次「エ、やくたいもねえ事をごたつくな〳〵。ユ、引トなる程螢狩の題ではそこだらう。隨分よからう〳〵。本當に踊らうとい

ふかと思つて大きに案じた。色言葉のうち、すこしの思入がありさへすればよし、其の思入も夜の事だから、おも入でも軽入でもよしと。」ノ八「そのあんばいでは、なにも稽古がましい事もいふが、直にやつてもいいノ。」左次「イヤノ\さうでねえテ。獨舞臺のうちは、眼公にはチト大役だらう。」眼七「ヘン案じなさんな、腹がなくツて正本をたてるものかナ。」左次「女島の雪隠で見るやうに、其のくそをましが、不安心でならねえ。」眼七「是れほどの事を書く腹だから、安心しさうなもんだが。」圖武「ごたいそうにいふな。何もそれしきに腹も尻もいるものか。」卒八「さうよ。はら所か、少し明地があれば、出來る事だ。」アバ「ハン洗張屋が見世を出すやうだ。」眼七「それ程不安心なら、誰ぞ亭主になつて見ねえ、一番うまくやつて見せよう。」圖武「ム、それがいい。おれが亭主に成つて受けよう。」眼七「サア皆まぜつけへしなしだよ。」左次「しれた事よ。そつちよりこつちが、安心してえから見るのだ。サアまじめでやらツし。」圖武「よしノ\。サア亭主に逢はうと、呼ばれて出てからだよ。」眼七「よしノ\。サアこい。」圖武「へイお呼びになりましたか。」眼七「オ、其方此の家の亭主か。」左次「亭主といふがいいわ、あんまり御丁寧過ぎる。」眼七「亭主か。」圖武「ハイ左樣でござります。」眼七「ソン名は何と申す。」圖武「圖武六と申します。」眼七「年はいくつに成る。」圖武「へイ三拾五歳でござります。」眼七「宗旨は何宗だ。」圖武「ヘイ宗旨は、エ、引淨土宗でござります。」眼七「寺はどこだ。」圖武「淺草でござります。」

眼七「葬禮は何時だ。」團弐「ハイ葬禮、イヤ此のべらぼう、うぬがまぜつけへしやアがる。」眼七「ア、おやまりおやまり。エ、女房はいくつだ。」團弐「餘りしつッこいぢやアねえか。」眼七「マァ何でもおれがいふ通り受けさつしな。」團弐「オイノ\。エ、引二十五でござります。」眼七「ム、厄年だナ。」團弐「ヘエ、イエ女は厄年ではござりますまい。」眼七「ハアさうかナ。」團弐「ヘイ男が二十五、女が十九と申す事でござります。」眼七「アッア不便な事を致したナ。」團弐「なぜでござります。」眼七「おれは又心中かと思つた。」團弐「太神樂の神主さんをやりやアがるわ。べらぼうめえ。」眼七「モウノ\まじめだまじめだ。ム、二十五歳では。」團弐「結構なお料理でござりますな。」眼七「是れサまじめだといふのに。ム、二十五歳ではモウ厄は濟んだナ。」團弐「イエまだ二十三と申すがござります。」眼七「ナニ二十三があるか、それは丸か半札か。」團弐「ヘイ丸でござりました。」眼七「フウ、それを貳朱と貳百に買はう。」團弐「どういたしまして、そろひ目は中間でもさうは買へません。」眼七「エ、モウ百遣れ。」團弐「チヨッ目あけだ上げませう。三百では寔に買値でござりますが、其のかはりお當りの節御祝儀をどうぞ。」眼七「コレヨウそりやアいいが、きのふは何が出た。」團弐「おれもまだ出番を見ねえが、昨日はおれがやめた氣だか。」眼七「おれもしめた氣だヨ。出ばんを見ねえうちが樂しみだよナウ。」團弐「もけへねえ。しかし出番を見ると、いつでもがッかりにはおそれるテ。コウ一これは地金だが、貫に一ッとられえでは、

モウたちきれねえぜ。」金次「コレこいつアどうしたのだ。」目出「さうよ、稽古だといふから、噺もせずに聞いてゐるのに、うぬらが勝手な噺をしてゐるぜ。」トいはれて両人心付き、うろたへながらぬからぬ顔にて、目出「コリヤ／＼亭主。」眼七「へゝ／＼。」團武「汝が心立のよきゆゑ、福徳をさづけてつかはす。」眼七「へゝ／＼、それははや、ありがたい儀。」金次「コレサ眼七の方が狐ではねえか。」眼七「すゝ、ほんに左様でござります。まことに麁相仕りま。」金次「エゝ、なんだか、むちやくちやになつたわ。大きなべらぼうだ。」目出「ほんに、其様どう／＼した事では、此の役はむつかしからう。」金次「さうだが、おなかに筋が立つてゐるから、むづかしいのは亭主と應對ばかりだ。これも今夜中から、つゞて責めたら、わつしは口がほぐれるだらうし、兎角口数をきかぬやうにすればいい。それはさて俄をよして、なんにしろ喉の内が酒ぎれだ。ちよツぴり小酒としよう。」ノバ「ヘンさつきからてん／＼茶椀で、やつて居るのよ。」金次「如才のねえやつらだ。だうりで静かだと思つた。サアさう聞いたら、たまらなくなつて来た。眼公々々、ちよいと何ぞのめるものをナ。」眼七「前歯のかけた下駄はどうだ。」金次「エ、古い／＼。しやべらずと早くさつせえ。その内蝿帳のもので、蟲を押へてゐるよ。」ト是れより例の大酒となり、暫しは雑談に時をうつしぬ。

四編下巻

かかる折ふし庭口の、枝折戸明けて入りくる人は、勢州屋質兵衛とて、近所名うてのかた親父、平日は左次郎はじめ、一座の能樂者などは、風上にも恐れ、又左次郎方にては、風下に居るさへきらふ釜進ひの人なるが、何思ひけんいそ〳〵にこ〳〵入り來り、質兵衛「左次郎さまは御在宿かな。」眼七覗いて見て 眼「オヤ〳〵とんだ獸が來た。」左次「だれだ〳〵。」眼「勢州屋のトンチキヨ。」左次「コリヤ妙だ。なんに來たらう。」眼「さればサ待ちねえヨ。かうだによつて。」質「おるすかな。」左次「イエ居ります〳〵。是れサ眼公何を考へて居るのだ。なんとか言はつせえナ。」眼「ム、さうだつけ。あんまり思ひがけねえ人が來たから、ツイ。」左次「エ、じれつてえ。」ト、左次郎たつて 左次「イヤこれはおめづらしい、何と思召してお出でなさつた。マア〳〵こちらへ。」質「アツハ、、、、イヤモウとんだ事で、チト、アツハ、ハ、、。」座敷にて 出目「なんだかむしやうに、アハ〳〵笑ふぜ。上り口を齒くそだらけにするだらう。サアサア上るわ、是れはたまらねえ〳〵。」アバ「マヅしばらく陶器類を持つて、昇天することだ。」圖武「ムムそれがいい〳〵。二階呑み靜かとやらかせ。野呂公廣蓋を持つて來さつし。早く〳〵。」ト、皆々それぞれに酒道具を持つて二階へ上る。質「チト折入りまして、御相談申したい儀がござりまして、わざ〳〵、アツハ、、、、。」

左次「ヘヽ、何御用か。マアこちらへお上りなさいまし。」眼七「ヘイ〳〵、左様なら眞平ごめん下さりまし。」ト、いひつゝ座敷へ通る　左次「眼公お茶を上げてくだつし。」眼七「イエ〳〵決しておかまひ下さりますな。マツハヽヽヽ。扨はやけしかりませぬ暑でござります。しかしながら暑い時節はやはり暑いがよろしうござります。又寒い時節は寒いがよいさうでござります。ヤ、當年などは出來ましたさうで、マツ七十年來の豐作と申す事でござりますナ。」左次「ヘイそれは結構な事でござります。」眼七「イヤモ何程澤山出來ましたと申して、別段餘計にもたべられぬものなれども、豐作と承ると、なにか安心でござりますな。ハヽヽヽ。扨はや御近所ではござりませぬが、渡世にかまけまして、とんと御無沙汰ばかり、何か用事がなければ上りませぬ。ハヽヽヽ」左次「それはお互でござります。ほんにおめづらしいお出でだ。」此の質兵衞は只商賣一ツ三昧、外事は一向何も知らぬ文盲おやぢなれども、そのくせ何かかたくるしくものを言ひたがり、聞道ばかりならべ、何事もわるくどく言ふくせなり。眼七「時にお見かけ申して、是非〳〵御頼み申さねば相なりませぬ儀が不圖出來いたしまして、それ故わざ〳〵」ト、竜角もおもしろくもない事をくどくならべ立てられ、よわりきつて　左次「ヘエ何御用かマア早くおつしやりまし。」質「ヘイ、いえサ、それを申しに參りました故、申すなとおつしやつても申さねば、相なりませぬ儀、イエサ外の儀でもござりませぬが、よい年を致してト思召しの程も、面目次第もござりませぬが、何れあなた方の愚案をおかり申さねば相成りませぬゆゑ、今日わざ〳〵。」ト、やはりくだらぬ事をなか〳〵しく言つてゐる故、眼七はじれつたく早合點にて、そばから口を出す。　眼七「エ、

引、それでは何かア、引、イヤそれはぶしつけながら、幾つになつても、あの道ばかりは別なもので、「私なんぞも度々こつちの主人の世話にもなりますが。」眞「イエサ餘の儀でもござりませぬが、わたくし方數代お出入いたしますさるお屋敷樣で、此の度御隱居樣の賀の御祝ひがございますところ、古いお出入町人共へ、高田の御隱館において、御酒をくだされますとのこと、イヤ有り難い事ではござりますが、それにつきまして、まことに難澀な儀が出來いたしました。茶番狂言とやらをいたさねばなりませぬ譯に相成りました所が、おはづかしい事ながら、當年私は午の歳で六十五歳になりますが、まだ芝居と申すものを、見ましたことがありませぬ故、狂言の儀にたつて御免を願ひましたれども、外お出入の衆が殘らずお受けを致しましたに、私ばかりいなやを申しましては、斯樣にお目出たい御祝儀のこと、又二ツにはお上の思召しをそむく同然と、お役人方からくれ〴〵御内意もござりますゆゑ、家内の者打寄りまして、一同當惑致しまして、定にはや、どうもはや實に。」眞「ナ、引、茶番かえ。なんの其の樣に苦勞なさる事アねえ。爲さいやしナ。」眞「イエサなさられます程なら、此のやうに苦勞もいたしませんが。」左次「それでは何か題が參りましたかネ」眞「左樣々々、その題とやらは、御廻狀に添へて參じましたが、エ、忠臣藏と申す事で、私方へ仰せ付けられましたは、五段目と申すことでござります故、マヅ支配人と談合致しましたところ、右支配人申しますには、い

つたい忠臣藏五番目と申しまするは、エ、引まづかいつまんでお話し申しますが、さるお屋敷の浪人に、定九郎と申する者がござりまして、ヱ、ある田舎で寂しい場所を見立てまして、追剝を渡世にいたして居るところ、其の近在の百姓に、與一兵衛といふ親父がござりまして、是れがサ私の連のよい處で、その親父が金を五十兩と申すもの、おまいさん懐中いたして通りかゝります處を、彼の定九郎めが付けて參じまして、年寄の夜道はあぶないから、送つてやらうと、深切らしく申しますが、こいつ油斷のならぬ奴とは思ひましたなれども、其の樣に奇特にいふものを、無下に斷りもなりませぬ故、何か浮世話をしながら參ります道、案のぢやう右盜賊の申しますには、貴樣の懐にある五十兩をかしてくれろと申しますけれども、大枚五十金と申すものを、住所も知らぬ往來の人に、貸せぬは知れた事サネ。それでもさすが年寄だけ、そこは方便で、是れはけして金ではござりませぬ、娘がくれました反魂丹と、にぎり飯でござりますと、早速にうそをつきますけれども、それほどの盜賊かきつと見とめて、付けて來ましたから、其の手はくひませぬ。そこで彼是申しつのりまして、最早亂髪長髪となりまして、傍若美人に懐中へ手を入れて、縞の財布を引き出しまして。」ト、くだらぬことを長長とならべ立てるゆゑ眼七はじれこみ、眼「左樣々々。それから與一兵衛をころして金を取る、猪がかけ出す、定九郎松の木へ上る、鐵砲ヅドン、定九郎ダア、勘平が出てその金を取つていたゞく。チヨン〳〵〳〵幕。」萱「さやう

さやうさ。イヤたいてい御存じだネ。ハヽヽヽ。それでは格別お噺しあひが早くつてようござります、どうでも通人づきあひばかりなさるから、なんでも御存じだ。ハヽヽヽ。それ故にこそ番頭めも、あなたへ参つて皆様のお愚案をおかり申すがよからうと申しました。アッハヽヽヽ。そこでサ、わたくしの運のよろしいと申す譯は、私方は御存じさまの通り、先祖から勢州屋質兵衛と申します處、此の度の狂言は、夕方よりと申すお廻状でござります故、先づ一番目から五番目の私の番までには、大丈夫四時頃にはなりませうから、在の百姓の役を、私が勤めまして、仕舞に夜の質兵衛ゆゑ、夜質兵衛になりましたと、カウ申し上げるがよからうかと、番頭申しますが、是れは成程よい思ひつきではござりませぬか。」卒「成程随分ようござりませう。」質「ところでサ、その泥棒になります者にさしつかへます。家内のものは番頭はじめ手代どもなどへ申し付けましても、なにぶん主人へ手むかひ致しますゆゑ、なんぼ茶番狂言にいたせ、迷惑がりまして、辭退いたしますゆゑ、よんどころなくこなたへ参じましたが、なにともはや申し兼ねましたが、その泥棒におなりなさつては下さりますまいか。」卒「エ、それはお安い御用。定九郎ぐらゐな役は、幾らも仕手は有りやすが、それではお前さんが與一兵衛かネ。」質「へイ左様でござります。右夜の質兵衛ゆゑ、少しもおりまして夜質。」卒「エ、成程々々。チヨツ、それでなくとも、何か落ちはありやせうが。マア〳〵それはさうと、そ

れにしても、定九郎許りではありやせん。先づ五段目の役人は、勘平、彌五郎、定九郎、與一兵衛、猪と、在人に、其の外後見に囃かれこれ七八人はいりやすが。」貞「へエ、しかし盗賊に百姓が殺されますばかり、外に踊がましい事をいたすではなし、はやし方までにはおよびますまいかと存じますが、それともに何れ此の一儀はおまかせ申しますゆゑ、如何様にもお差圖次第に、取りはからひます料簡で。」[illegible]「素人狂言といふやつは、舞臺よりはうしろがしつかりしねえでは、うまくいかねえもので御座いやす。ぶしつけながら、芝居がおきらひだから、くはしいことは御存じねえが、いづれ私等にお任せなされば、まんざら素ドンチャンのやうに、見ッともねえ事もしやすめえ。殊に五段目ぐらゐの一幕や二幕は、あんまり仕足らねえ、もうとつと身の有る事をしてえ。」黒七「左様サ、ぜんてえ茶番に忠臣蔵もあんまり古いネエ。」[illegible]「イヤサ蔵でもいいが、五段目なんぞはあんまり仕足りねえ。」貞「左様サ、ぜんたいあなた方をお頼み申す程なら、十番目から上でも随分出来ますのに、をしい事で。何分お上から仰せ付けられました事故。」[illegible]「マアノ\そりやア五段目でもようござりますが、エ、そこで當日は、いつごろでござります。」貞「ハイ當日は二十九日でござります。」[illegible]「ハア二十九日、エ、そりやア妙だ。ちやうど與一兵衛が祥月命日だ。ハ、、、。」貞「へエ、左様かナ、フム、おまいさんがた、命日を御存じの程では、そのやうに久しい事ではござりませんナ。ヤレノ\

不思議な縁で、わたくしがその百姓の名代を勤めまするも、因縁事でござりませう。南無阿彌陀。フム
引「それでは、自體御懇意でもござりましたかナ。」左次「なにサ、さういふわけでは御座りやせんが、マア〳〵そんなことはどうでもいいとして、オイ眼公、マアみんなを呼ばッし。役をふつて見よう。」
眼「時にみんなを呼ばねえうちに、少々内談ありだ。先づ今度の高田の螢狩は、わたしが座元だが、おめへのいひなさる通り、螢狩に出る人もなし、といつて場所をかへるも卑怯だから、筋をば立てたが、實は酒屋のうちばかりをひつかついだ所が、どつと腹にもたれず、殊に居候の身分なれば、斯う金主の有る芝居を、つとめずんば有るべからず。幸ひそのお下屋敷は高田邊といふ事、ネエ勢州屋の旦那。」一「左樣々々、雜司谷のわきでござります。イヤ今度私も一生懸命、數代御高恩を蒙ります。お屋鋪樣の事ゆゑ、物入は厭ひませんから、お心置なくお指圖くださりまし。」眼七「そこで皆にぱつと相談すると、名にしおふお屋敷の奥といふもんだから、定九郎と勘平のしてばかりあつて、役割がめんだうだから、勢州屋の旦那が名ざしで、お前を勘平、わたしを定九郎と、當てて來さしつたつもりで。」左次「何サそれは螢狩の替りにするなら、勘平でも定九郎でも、足下のしたい役をするに、物いひはねえわサ　あれはどうでもいいから、マアみんなを早く呼ばッし。」眼七「ナそれは妙だ、そんなら私が定九郎。」左次「ハアテしようござえさア。」眼七「有り難し〳〵。」ト、いそ〳〵二階の上り口へ行き「オイ〳〵皆が早

〳〵おりて來たり〳〵。三枚並大急ぎといふ相談が出來た。早く〳〵。」 闇武「エ、何だいけうとくしい。ぎやうさんなこ。」 アバ「ホンニいつもがさつな野郎だ。丹前師の集まつて居る時は、あんまりものいひを荒々しくしねえもんだ、ヘン血の道がおかららア。」 卒八「ほんによ、あんまり下卑に出來たやつだ。心だてならきりやうなら、ほんに女子のすかねえ眼と、いふやらうだぜ。いま〳〵しい。」 眼七「じやうだんではねえから、わりい地口をついて居ると、早く來て相談を聞いて見ねえ。おめへ達のぞくぞくする程うれしがる話だ。」 出目「ヘンめづらしさうに、又女のことか。もうどこからの言ひ込みでも、暑中御席懸事相休み申し候。新入りはお斷りだ。」 眼七「チヨツいめえましい奴らだ、こいつてえ。左次さん〳〵どうも二階でたれてばかり居て下りやせん。」 三友「ア、世話のやけたやつらだ、そして二階でたれられてたまるものか。ハ、、、。質べゑさんごらうじやし、此の通りだ。ハ、、ハ、、。」 質「ヘエ、下生のかいないおかたら、全體二階住居はわるうございます。おいくつ許りのお人か。どうもサ、年を取つてのは、やまぬもので御座ります。」 三友「ハ、、、、イヤモウ血氣さかんなやつらで、どれも〳〵達者にたれやすヨ。」 ト、ひやかしながら立つて梯子の口に來り、 眼七「イヤ〳〵まじめに相談が出來たから早く來さつし、じやうだんぢやアねえぜ。 ト、いひすて元のところへ歸り居る。 野呂「ヤツト承知々々。 とはや勅使三度に及んだから、行かずはなるめえ。」 アバ「サア行くべエ。何を又もくろんだしらん。」 ト、みた

みな何か指にせりふにて煙管、煙草入など手にもち、階子を下りながら、アバ「眼公、勢州屋の薬罐はモウかへたか。」ト、いふを眼七ハットうろたへアバ太郎が口へ手をあて、座敷へ指をさす。つゞいて 野呂松「ほんによ、如斯わからねえ、もうこんじいはねえ。」團蔵六「おれでなければ金は出来ねえわ。」出目「なんの茶粥ばかりくらつし。」ト、おひ／＼悪くいひながらおりて来るを、眼七は気をもみ、以前のとほり座敷へ指をさし、仕形にて教ふる。左次郎もたまりかね、なにか大事にくだら奴話をたて付けてきてきらして居る。皆々も階子のよりロにたつて、たがひに顔を見合はせ、首をちゞめ又は舌を出し、頭をおさへ暫くだまりにて、しらけかへつてちゞみ居しが、少し取りなし心に 出目「しかし粥といふものは薬だとノ。」アバ「さうよ、薬罐で煮たのが格別きく／＼とノ。」ト、いふこゝろいきの苦しげなるを、皆々察してたまりかね、一同に「フウ、、、、。」ト、吹き出す。其の場白けてしなければ、左次「すべてみんなは何をして居るのだ。下生のわるい話をしたとつて、今さらはづかしがる事ァねえ。早く来さつしナ。」金八「アイ今。」 左次「一合もやァねえ、急ぎの用だ。何をぐづ／＼して居るのだ。」アバ「何サ薬罐を一ツ頼まれたから、一寸買つてこようかと思つて。」左次「エ、モウ何といつても帳面にはきえねえわ。そんな事よりマァ早く、こゝの相談を聞かッし、」ト、せき立てられて、やう／＼気の毒さうに座敷へ来る。貝兵衛は一向何も知らぬ様子なれば安心して、左次「貝兵衛さん、是れはみんな私の友達でござりますが、年中茶番のやうな事にばかり、身を入れて居る馬鹿どもで御座いますから、さいはひ今度のお頼みに、此の手合をつかふのでござりますテ。御近處だから、たいていは皆御存じでも有りませうが。」ト、いち／＼名をいつて引合はせる。貝「ハイ／＼、イヤモウ私は御覧の通り、老母となりまして、とにかく人さまをお見それ申してなりません。ハ、、、、、。何分にも此の度の儀は宜

しうおたのみ申します。」卒八「ハイ／＼、いやまアおつしやる通り、男も年をとりますと、老母になりますので、實に難儀いたし。」左次「ヱ、おゝそんなつまらねえ話より、こつちの相談をよく聞かつし。モシ／＼質兵衛さん、おまへさんも其の様におかたく許りなさつては、かういふ相談は出來やせん。まづゆるりとお樂においでなさつて、お心安くお話なさらねと、こいつらはみんな、根が下主でございますから、氣をつめてとんと御相談に乘りがきやせん。」左次「左樣々々、餘りへイ／＼したしからすと申して、どうも打ちとけませんで、いつそ氣がつまつて。」呑七「何のいやらしく云やアがるわ。いつそ氣のつまるといふ面は、もうちつと齒がひつこんでゐるわ。」卒八「ナゼそつぱで氣をつめてはわりいか。」呑七「わるくもねえが、マア氣の小さい人の事をば、うめばだといふから、そりくらゐの外はなから、マア勞症の氣つかひは有るまい。ハヽヽヽヽ。」卒八「そねめ／＼。」呑七「ム、引いゝ、まけるとそねめ／＼か。ア、引手のねえぬしだナ。」このうち左次郎は圖を七本こしらへ 左次「サア／＼、やかましい事をいはずと、此の圖を引いたり／＼。」眼七「なんの圖だ／＼。」左次「何でもいゝからだまつて引いた／＼。」アハ「ヘン藪から棒ナ、何だしらん。」ト、みな／＼圖を取りてひらくところを 左次「オット待つたり／＼、爰で話が有る、扨當六月二十九日、與一兵衛が祥月命日に當つて、さるお屋鋪の奥に茶番がありやす。そこで題が忠臣藏、しかも五段目で、わけ有つて定九郎と與一兵衛は、外にする者が有るから、其の外を圖にした

のだから、鬮次第にして、役不足をいひッこなしだヨ。」出目「ハアさうか、さうと知つたら、身にしみて鬮を引けばよかつた。」野呂「サア〱愚痴をいはずと、おつぴらけ〱。ヤア何だ、うじろト、是れは何だノ。」左次「そのうしろ〱としたのは、後見や囃へ廻る印よ。」野呂「ハア、さうか、そりやアつらまねえ。ヘン花を取りそこなつたやうだ。」左次「ヤ、おいらのも實がねえ、同じくうしろヨ。呑一「彌五郎か。」アハ「是れもうしろ。」出目「ヤア〆めた勘平々々。妙々。」圖武六はひらいて、何か不興な顔にて、圖武「チヨッ、ヘンちぶのねえ。」出目「圖武公なんだ〱。」圖武「猪ヨ。」野呂「ハ、、、是れは本役だ。奇妙々々。」圖武「なんの猪なんぞは、鬮へ入れずともの事だ。」出目「五段目に猪がなくつてつまるものか。役不足をいひつこなしといふ、きめだ〱。」圖武「うぬがいい役をとつたと思つて、ひとりでにこ〱しやアがる。おらア役不足にはいはねえが、役足りをいひてえ。その面で勘平が出來るものか。」出目「ヘン捨て置きたまへ〱ッ。ヘン梅幸でいかうか、イヤ坂三津でいかうかしらん。」野呂「ヘ、奥州へいかうか、仙臺へいかうかが、聞いておきれらア。とんださつま芋だ。」左次「そこで爰にまた、物いひのつかうといふことが有るが、是れはおれがお頼みだから、定九郎をば鬮なしに貰ひてえ。そのわけは、今度こつちの催しは高田の螢狩だらう。そこで此の茶番に行くお屋敷から、高田邊だといふ事だから、幸ひ此の狂言をふり替へて、眼公にさせると、そりや金主は有るし、ちやうどよからう。」卒八「成

程そりやア妙だ。少し傍題にはなるが、エ、引コレ、六段目だと奇妙だがこ」眼七「ヱ、ヱ＼＼。」卒八「高田の螢狩の地口で、高田のおかる買ひとやらかされ。」寸八「ア、わりい＼＼。しかし眼公も鬮なしに貰ふといふから、モウ六段目は六段目だけれど。」眼七「ア、鶴亀＼＼。併し此の相談さへ承知なら、なんといはれてもかまはねえ＼＼。」図武「そこで与一兵衛早替りといふ筋か。」卒「イエ＼＼尾籠ながら与一兵衛はわたくしがいたさねば、右夜の質兵衛故。」左「左様々々、与一兵衛は少し此の旦那が出お有つてなさる積りだが、マテ暫し、殺された人が起きかへつて、へイ夜の質兵衛は呑夜質兵衛でござりますといつても、をかしくならんだが。ム、かうしやせう、そのお屋敷も御祝儀の事だから、人の死なねえ五段目といふ筋にしやせう。マヅ勘平、彌五郎の出合、立ちわかれと引込む。又も降りくる雨の足と、チヨボにかゝると、正面の稲村のかげで焼酎火をもやす、そこへ与一兵衛が出る、同じく定九郎も出て、いつもの通りあつて、止財布を引き出して、口に銜へると、唐茄子ヨ。与一兵衛は吹きけへで、案山子となる。所へテンテレツク、ツ、テン＼＼で猪がでる。」出目「ム、図武公だナ。コウいつもの様な歩きつきでは、牛と間違ふから、いせえよくかけださつしよ。」図武「大きにお世話だ、うつちやツておけ。」出目「ハヽヽヽ、悒ぎきつて居るわ。」卒「ア、やかましい、からかふな＼＼。エ、そこでト、ム、いい事が有る＼＼、図武公は縫ひぐるみの狐になるだ。」図武「せめて一役は人間

を付けてくれても、いいぢやアねえか。」左次「何さ狐が本役だヨ。そこで稲村のかげからヒヨイと出て、倒れてある案山子を、チヨイと冠つて、猪の身振サ。始終定九郎は、化されてゐる思入で、猪とをかしみの立廻りをつけて、二人がおもひれ儲けさつしナ。」園武「有り難い／＼。それで少し息をふつけへした。」左次「そこでいいほどに二人が仕ぬいたら、定九郎はかなはぬ體で逃げこむ。それをきつかけに鐵砲がヅドン。狐もこれに驚いて、案山子をはふり出して、稲村へかくれると、うしろが寐鳥になる、勘平が出て、案山子へ探り當つて驚く。これもいつもの通り、思入仕打勝手次第サ。好い時分に此の旦那が、ちやうちんをさげて出て來て、勘平が顔をすかし見て、勘平ではねえか。オヤおとつさんか、此のぶつさうな道を、どこへ行きなさるのだ、ひよつと定九郎にでもあつたらどうしなさる、あぶねえことだトいふ。そこで旦那がいふには、馬鹿をいへ、與一兵衛ならあぶなからうが、おれは夜質兵衛だから氣遣ひはないト、爰で夜の質兵衛を被仰るがよからう。」眞「成程夫れがようござりませう。」左次「それから勘平がいふには、モシおとつさん、お目出たいお座敷とは申しながら、此の様に怪我人のない五段目も珍らしい、祝つて一つ〆めませうトいふと、最前の狐も出て、シヤンシヤン／＼、オシヤ、シヤン／＼ト狐拳になる。三人の見え宜しく幕としやせう。」アバ「奇妙々々。すつぱり筋が立つた。」吞「サアそんならすぐに、稽古にかゝりやせう。」左次「よからう／＼。何でも素

人狂言は、稽古に追かすかゝらにやァいかねえ。」「違へねえ、初日と千秋樂が一所だから、きまりはわりいはずだ。」

ト、是れよりすぐに五段目の稽古、並に當日狂言の滑稽草稿殘らず出來致し候間、四編追加引續き賣り出し申し候、相替らず御見捨てなく御求め御高覧可被下候。

八笑人四編追加自序

什麼此の花暦の濫觴は、過ぎつるとし琴通舎の大人、江都名所の花を題として、諸君の玉詠を集め其の秀逸を撰りて出板したる摺本へ、チョイトおまけの御愛敬、譬はば江戸節の會へ雇はれし能口開人形、それさへ青は使はねば、四郎と仕組の池の端の茶番、井戸端の茶碗よりも、あぶなき趣向と思ひの外、今や四編に及ぶまで、看官の御待ちかねとは、盲人の打ちし眼七、思はぬ愛敬アバ太郎等が幸ひなれど、元來無四度童戯人、いつもながらの鈍屑、木端作者の著述ぶり、こつはづかしくの地口に通ひ、所謂下手の長噺、御見物の叭を恐れ、待たるゝうちが花暦と、筆を置く事五七年。時に書肆は左にあらず。假令作者はどうなつても、己が竈をうるほさんと、心くつせず御催促、先生ごかしにおだてられ、さらば灰吹から蛇を出して見んと、嗽しながら筆を採る。

于時天保五年甲午正月

金龍山下の市隱

瀧亭鯉丈述

花暦八笑人 四編追加上之巻

斯くて八人は五段目の趣向あらまし定まりしかば、例の酒盛となり、互に喰つ喰はれつ、相かはらぬ悪地口、雑談に時をうつしける。然るに彼の勢州屋質兵衛は、ひとり煙艸入の底をはたき、あくびを呑みてたいくつの體。左次郎は氣の毒におもひ、左次「モシ質兵衛さん、一ッおあげやせう。マアちつとこちらへおいでなさいまし。」質「ヘイ〳〵、イヤもうおかまひくださりますな。わたくしはトット御酒は不調法でハ、、、、。」出目「さやうではございませうが、平日は勢州屋の旦那様だが、此度の一件では、同じ役者仲間といふものだから、其様にかたく許りなすつては、稽古が仕悪うございますやす。まア御酒はともかくも一ッ上げやせう。」ト、さゝせば、猪口を丁寧におしいたゞきて 質「ハイ〳〵、さやうならわざつとお杯ばかりいたゞきませうが、御酒は何分にもごめん下さいまし。」ト、迷惑さうにのむまねをして、懐より鼻紙の折りたるを出し、猪口ののみ口をていねいにふき、手に持ちてしばらく座中を見まはし 質「エ、ト是れは矢張あなたへ御返盃申しませう。」出目「ヘイ私へ御返禮かね。まア御静かに、これは御きゝとうでございます。さうごへなさると、又いつでも御用立ちますハ、、、、。」ト、冷かされて一向知らず 質「イエ〳〵私へは、もう御免下さいまし。おほしめしは有り難う存

じますが、却つてまいわく致しますよ。ハヽヽヽ」出目「イヤ出目公、質兵衛さんは御酒に御不調法で御まいわくだから上げねへがいい。そしてあんまり酔はねへ中に、わざつと本読でもしよう。」眼七「アヽノ鐵砲場の一幕ばかり、わかりきつたことだ、すぐにたつて見よう。」質「それもさうだけれど、質兵衛さんに筋を聞かせてへからヨ。」出目「そんなら與市兵衛の出の處から、自身に本を読んでごらうじやし、それで筋がわかる。そのうち勘平彌五郎の出合をたつて見よう。」質「ム、それがいいそれがいい。イイ眼公、そこの本箱に忠臣藏の丸本があるから、一寸出して下さい。」眼七「アイ。」ト、本箱をたづね、「ナイ是れかネ。」質「エ、これは後藤の鐵砲場だ。そして抜本ではねへ丸本だといふに不器用な。」眼七「ア、あやまり／＼、はやく稽古をしようと思つて、気がせくからおれはどうもりだがツイ、ナツト有り／＼サア。」質「おいきた。」ト、とつて鐵砲場を明けて読んでみる。「エ、合點かて、へ、石碑成就するまでは、のみにもくはさぬ此のからだ、御邊もけんごで。御用金の便りを待つぞ。さらば／＼と両方へ、立ち別れてぞいそぎ行く。又も降りくる雨のあし、人の足音とぼ／＼と、サア是れからおまへさんの出だ。爰からとつくり讀んで御覧じろ。」質「ハイ／＼是れは／＼。」トいただき「フン引。」ト、懐より、手ごしらへのいた紙にてはりたる眼鏡を出し「成程。フムまたもふりくるまの、足人の足、音とぼ／＼。」出目「もし一寸お見せなせえ、車といふ文句はねえ筈だが。」トのぞいてみて「又も降りくる雨の足サ。」質「ヘエ、雨かネ。ハヽアなるほ

ことあたまが有りますな、ハ、、、、。私は又頭の字かと存じました。フン雨の足イ、人のホヽ足イ音とぼ/\/\と、、道イはア、やみぢにイ、まよはフこ、まよはねどす、子故の闇イにイ、突く杖突く杖もウ、すゞウ、なる心、なる心、かた親/\かた親父イ、いち筋/\。」野呂「二鷹ア、三茄子ビイ三茄子ビこ、ハ、、、、、こ」文次「一筋道のうしろからサ。」質「へエ、成程。後からア、モシ此のむひさく書きましたのは、なんと讀みますネ。」文次「ドレム、是れはオ、イノ\サ。」質「へエ、おゝい/\と申す字かネ。」文次「さうサ片假名サ。」質「へエイ。」アバ「ぜんたい、おゝいといふ字なら、大きく書けばいいネ。小さく書いてはすくないといふ字と間違ひますネエ。」質「へエ。」文次「モシそこいらは大概筋さへお前さんのむねに落ちれば、文句はみんな太夫の語る所だから、其の詞々といふ處をよく覺えるやうになさいやし。」質「へイなるほど文言のうちは、三味線に合はせまして少しをどります、ソリャ鹽梅で。」與「なにサ與市兵衛が踊つてはたまらねえが、其のみぶりはわたしがいいやうに付けてあげやすから、なんでも詞をよくお覺えなせえ。」質「へイ何分にもよからうやうに御指南くださりまし。」呂「すイ質兵衛さんの本讀のうち、こつちで一寸たつて見よう。五段目ぐらゐと思ふが、考へて見ると有論な處があるやうだ。」岳「ちけへねえやつて見ようはいいが、爰では質兵衛さんの氣がちつていかない、六疊へゆかつし。」呂「すイ/\、さア彌五郎どんおゆば

つし。」呑「ム、行かうか、マア先へ行かつし。そつちで、ア向うよりくる小提灯、是れもむかしは弓張の。」テン／＼／＼、ト語り出すと、おれがこゝから出て行つて丁度いゝぜ。」出目「なんの面白くもねえ、どうでもいゝ事だ。サアそんなら早く來さつしョ。」呑「早くといふ譯にはいかねえ、マア先へいつて向うよりくる小提灯。」出目「エ、わかつて居るわしつッこい。」呑「ハヽヽヽ、實は小提灯のうち大きいもんで、キユウと一杯きめて行かうといふたくみヨ。」出目「いま／＼しいおッきたなだぞ。さういふ事なら、まアおれが先へ此の小提灯で、一二三杯。ト、卒公ついで下つし。」呑「そんなら己もこの提灯へ、たつぷりついで下つし。」眼七「エ、うるさく呑みたがるぞ。コレ呑ませめえとは言はねえから、する事を了つてゆるりと呑むがいいぢやアねえか。」呑「さうり、そして提灯で餅といふ事はきいたが、提灯で酒を呑むやつはねえ。」圓武「そしてあんまり呑んで無法醉ひ喰ふ小おちやうちんとなつては、稽古も何も出來はしめえ。」左次「サア／＼又地口盡しがはじまつては長い／＼。いいかげんに呑んだら。」卒八「どうして／＼幾ら喰らつても、いいかげんといふ限はねえから、此の小提灯をとり上げるが一番いい。」ト、茶椀を取り上げる。呑「サア提灯を取り上げられては、一足もあるけねえ／＼。」アバ「どういへば斯ういふとうるせえ口だ。そんならもうこのおちやうちん限りときめて、ぐい／＼呑んではやく六疊へ行かつし／＼。」呑「ム、それではもう、おちやうちんのお替りとはいかねえの。」左次「ア

アヽうるせえ〱。コレほんたうにヨ、てえげえにふざけたら稽古にかゝらつし。番毎いたづくゝせにくそ落ちつきでならねえ。」呑「ハイ〱もう参じます。サア勘平さん御一處に。」出目「サア〱行かう行かう。オイ藥子町から二三人下室帳をもつて來さつし、いつもの五段目とは違つてよつぽど誂へがあるぞ。」六八「ハンそれ御たいそう許りいふわ。サア皆があそばねえ、どんな事をごたつくか見よう見ようう。」トヽみな〱六疊の間へ入る。出目助は林の間の前へしやがみ、團扇を笠のかはりにかざし、勘平のおもいれ、眼「サア、これ間を爰に松ゥのす、おアァ、けエ、出デ、ン〱〱〱。」ト、正面に笠をかざして居て、女どもが顔を見たがるところを、しばらくじらしていかけれどじれつたがらせて、と笠を手にもつてそらを見る、そんなどもは顔を見る。」野呂「ム、一時にどつと吹き出す。」卒「子どもは泣き出す。」呑「猫は逃げだす狆はほえる。」目出「そんなふしぎな面があるものか。サア〱向うよりくる小提灯だ。呑公〱。」卒「サイもう一ばいたのむか。」出目「じやうだんではねえ早くたたつし。」卒「サァおらァ半合羽の上へ、坊主合羽深編笠といふ拵へだ。」六八「馬鹿なつらな、雨装束に編笠をかぶるといふがあるものか。」卒「そんなら竹の子笠の深いやつをかぶらう。」出目「なぜ其様にわるびれな事をしたがるのだ。」卒「おれも出から直に顔を見せたくねえて。」野呂「なんのそんな面を大事がる事があるものか。」呑七「さう言はつしやれな、出る時顔をかくして、正面へ直つてぱつと見せると、格別ひつたつぜ。」卒八「ハンおもしろくもねえそ

んな面を、引立つもぶつつわるもいるものか、どうせ引け物だア。あんまりかくしだてをして、だしぬけにぴよいと見せたら、ヘン氣のよわい化物は先でぶちけへるわ。」 卒七「サア又面不足がはじまつた。まアそんならさうとしてさア出て來たヨ。」 出目「よし／＼サア行き合つてすれちがつた。イヤ申し／＼、卒爾ながら、火を一ツ御むしん。」ト立ち寄れば。」 卒七「旅人もちやくと身がまへし、ム、此の街道はぶつさうと聞いて合點のひとりたび、見れば飛道具の一口商ひ。得こそはかさじ、出直せ出直せ。』オイお囃子、爰で一ツ付がいるぜ。下座帳へつけさつし。出直せ／＼ハタアリと。」 卒八「ばかばかしい。そればかりな事を帳へつけられるものか。」 卒七「ヘン三文が酢をかけるやうだ。」 卒八「それだといつて、容體ばかりやりたがつて、ヘン芝居ごつこをしてあそぶ氣で居やアがるわ、とんだきめ。」 卒八「コレ付でも鳴物でも、うしろは大丈夫だから、指圖がましい事をいはずと、そつちの稽古を身にしみるがいい。」 卒七「ハイ／＼。さアそんなら、アヽ引、『なんとやらして、エ、まなこもなくばれば。』サア出目公。」 出目「オイ『エ、盗賊とのお目たがひ御もつとも、エ、引なんとやらして、エ、鐵砲それへおわたし申す、自身に火を付けおんかしと。」サア爰にたつぷり思入ありだ。先年源之かした仕打がいいから、源之でやるぜ。」（故人澤村宗十郎の事。） 卒七「ナニ源之でやるぜ。ヘンふいご祭に何かゆかんだやうだ。」 アバ「天窗がさいづちで、仕打が源之か。何は付いてるの。しかし吞公には源のは差合だ

らう。」呑七「なぜ〳〵。」アバ「面が殺生石に似てるるから。」呑七「エ、やかましい〳〵。サア其の源のでどうするのだ。」出目「斯うだ、マヅ一通り紋切形なら、「たじなき詞に顔付を、きつとながめて、和殿は早野勘平ならずや。左云ふ貴殿は千崎彌五郎、是れはけんごで。貴殿も御無事で。ム、是れはしたり。—。」「兩方一しよにポント膝をたゝくやつだが、處を源のでやれば。」呑七「膝をぶつこはすだらう。」出目「ひざアぶつこは、エ、引まぜつけへすなえ、つりこまれるわ。エ、なんだか忘れてしまつたア。エ、「たじなき詞に顔付を、きつとながめて、和殿は早野勘平ならずや。さいふ貴殿は千崎彌五郎。是れはけんごで。貴殿も御無事で。」とはいつて見たが、古朋輩にこの姿を見られて、面目ないといふこゝろで、ふりかへつて一足逃げるを、山刀の小尻を押へて、彌五郎ばかり「是れはしたり。」ト膝をたゝくやつだが、こりやアいいぜ。」呑七「それではおれひとり膝をぶつこはすのか。」伴八「ムムひとりなら油藥は、一貝頭取から渡したらよからう。」呑七「イヤおればかりなら鐵槌にしよう、源のでは何分おそれる。」出目「コレ呑公なんとまじめにやつてくれねえか。囃子町や猪子なんぞは、役不足でまぜつけへすも仕方がねえが、彌五郎なんぞはまうけ役でるながら、身にしみて稽古するがいいぢやアねえか。」呑七「ヘン彌五郎ぐれゑ、あんまりまうけ處もねえ。こつちは由良之助でもする氣だア。」出目「そんなら由良之助になるがいい、ざうさもねえ事だ、己さへ承知なら出來る事だ。和殿

は早野勘平ならずやといへば、左といふ貴殿は大星由良の介、ア、語路がわりいナ。」野呂「そいつ時はさいふ貴殿は大星由良介サ。」眼七「之の字を抜くとがうぎと安ッぽいの。ム、力彌がいい〳〵。左いふ貴殿は大星力彌に」卒八「向う通るは石者ではないか。」卒七「湯の尾昧の御孫嫡子。」眼七「ハア、うんとこどつこい是れわいナ。」野呂「サア〳〵身振付のまぜつけへしたつた、たまらねえ〳〵。」卒七「是れサどうもならねえ。もう〳〵役のねえものはあつちへ行つてくだつし、かうさう〳〵しくつて何がきまるものか。」出目「なんの手前から、湯の尾たうげのおんまごおやくしなんぞといふがらわりい。」卒七「それでもあんまりまぜつけへすから、ツイつりこまれるのだ。」出目「つりこまれるといふやうな、甘口なことがあるものか、やつぱり身にしみねえからのことだ。サア〳〵皆あつちへ行つて下さりし、邪魔だ〳〵。」卒八「なんだ囃子町に下座帳をもつて来いと、いつたおやァねえか。コレお江戸のお囃子は、さう自由には追ひ廻されねえぞ。」出目「チヨツいま〳〵しい、気ばかり強くッてならねえ。素トンチキめらにかまはず、ふたりは車輪玉でやるべエ、なア佐公。」卒七「ウ、無役どもは、うらやましがつてそねみだ、かまはねえ〳〵。極まじめでサアやるべエ〳〵。貴殿もけんごで。是れはしたり。」トきまつたわ。」出目「ム、よし〳〵雙方しやがんで、爰におよほがすこしあつた。ヱ、引何ヨ、たえて久しき對面に、主人のお家没落の、むねにわすれぬ無念の思ひ、たがひにこぶしを握りあふ。」ト雙

方思人だ。」 野呂「フイ總一ッぱいは折り返しだらう。」 出目「呑公なんといつてもかまはつしやんな。」 呑七「よし〳〵極まじめだ。」 出目「エ、勘平はさしうつむき、しばし言葉もなかりしが、「ハ、面目もなきわが身のうへ、古傍輩の貴殿にさへ、顔も得上げぬ此の仕合、武士の冥加につきたるか。殿判官公の御供先、お家の大事發りしも、是非に及ばぬ我が不運、その場にも有り合はさず。コレサ呑公、何をうつかりして居るのだ。おれがせりふのうちだとつて、さう氣ねけがして居ていけるものか、腹をいれねえと見とむねえもんだぜ。」 呑七「コウ〳〵奇妙なものだなう。」 出目「何がヨ。」 呑七「きん玉といふものは。」 出目「何だだしぬけにふざけた事を。」 呑七「口をきくたンびに上ッたり下ッたりするなう。」 出目「ナニ。」 ト、心づき、おのれがしやがみたる形をのぞき見て、「エ、馬鹿々々しい。こつちは脾腹もんで、せりふ廻しに骨を折つて、車輪でやるから、ツイ取りみだすのだ。コレサ稽古事にかゝつて、さう外へ氣がちるやうな事ではいけねえぜ。」 呑七「さうでもあらうが、其の品をば取り込んでもらはねえと、どうも眼ざはりでならねえ。そして上り下りのはたらきがあるだけ、どうも目についてならねえ。」 出目「チヨツマアサ、是れをば取り入れるがノ、ほんによ、身にしみさつし、おらア車輪玉だヨ。」 卒「しやりん玉ならいいが、しやがん玉ぶら付きでは、呑公も見る氣になるはずだ。」 出目「エ、又やじ馬が出るヨ。サアノ〳〵愛の長臺詞は、俺アバヽつと承知だからいいとして、呑公ちつとやつて見さつし。エ、と「ぜ

ん非をくいし男泣、ことわりせめてふびんなり。彌五郎も道理とは思へども、大事を[illegible]と「コサア詞だ。」なじ「何サおれもせりふは得だから、いよ／＼申し上げるにおよばずだが、ちよいと山があるて、エヽ、「郷右衛門殿旅宿の、所書進上申す」ト腰から矢立を出しやす。そこで鼻紙へ書かうとして、矢立の墨がかれたといふこなしあつて、あたりを見廻し、其所へおいて置いた笠へ、雨水のたまつてある思入、笠をとつて墨壺へ雫を落して、書付をするといふ仕打はおかしからう。」[illegible]「[illegible]くしやうめ、こまかにおぼへてゐるナ。しかし其の時提灯はどうする。」なじ「[illegible]、提灯か。」[illegible]「四拾八文のぶらがいい、所書をする時、ト襟へさしやす。」圓武「へヽ、柳原で手の筋を見てゐるやうだノ。」出目「それはおれが持つて居てもよし、また以前、出直せ／＼の時分に、松の枝へかけて置いたにしてもよし、そこに差閊へはねえが、せりふは實にしようちが、よつぽど長いぜ。」なじ「その儀はすこしも案じ給ふな。たかが彌五郎ぐらゐの端役は、朝飯前の仕事だ。どうせ總ざらひには、ほんだうにたつて見るからよしよ。そこで、さらば／＼と兩方へ、立ちわかれていそぎ行く。「コサア是れから今の、又もふりぐるまだ。眼公、質兵衛さんを呼んでやつて見さつし。へン丁度いい相手だ。」眼七「へン何とでもいはつし、どうせ圖なしにもらつた役だから、天窗はあがらねえ。」ト、左次郎が方へ行き 眼七「サア左次さん、ちよつとたつて見やせう。質兵衛さん、たいてい筋は通りやしたかネ。」眞「ヘイ／＼、イヤ

何かどうも甚だ不調法で、へ、、、、、。」左次「今まで足下のかはりを勤めて、よつぽどやつた處よ。」眼七「ハア、さアそんなら六疊へおいでなせえ。こゝからすぐに切幕を出たつもりで、うしろから私が呼びかけて出て行きやすぜ。」卒「ハイ／＼。」左次「モシその棒を杖にして、今いつた通り、ふくらはぎへ力を入れて、前へかゞんで、ソレ今のやうに斯ういふ身で歩行くだ。」卒「ハイ／＼此のあんばいかね。」左次「マアさうさ、さつ／＼とおいでなせえ。」眼七「オ、イ／＼、おとつさん／＼。是れ、さつきから呼んでゐるに、おめへ耳がとほいの。コレこのぶつさうな街道を、年寄の夜道、おめへもよつぽど大膽なものだぜ。サ、わしがおくつてやりやせう。」卒「ヘエ、もしおまへのお詞と、左次郎様のおつしやつたとは、餘程相違いたして居りますやうでござります。そして私の事を、おとつさんとおつしやつては、定九郎は與一兵衛の倅のやうに思はれませうが、外々なら大抵のまちがひは宜しうござりますが、先刻申しますとほり、いたつて物がたいお屋敷さまで御座ります故、すべて申し上げる事にすこしでも間違がござりましては、お役人方までが落度と。」左次「なにさ質兵衛さん、それはふだんの御用向の事、狂言といふものは、先様で御存しの事でも、すこしづゝかはつてするのが、かへつてお慰みになるものでござりやす。まづサ本文の通りなら、オ、イ／＼親父さま、最前から呼んでゐるに、こなたの耳へははひらぬのかいやるのだが、それは昔風で、大じまのどてらに丸絎を締めて、

山岡頭巾をかぶつた拵への詞、近年は黒羽二重に緋博多の帯、蛇の目の傘といふ粋なすごい拵へでござりやすから、いつそ詞も今風に、オイおとつさんと洒落ていふのサ。何でもつまる處は、忠九郎といふ浪人が百姓の親父を殺して、金を取るといふ筋さへ通れば、詞はどう違つても構はないおやんなさえ。ア、引咽がひつつくやうだ、眼公湯でも水でも一はい下つし。」エヽヘイ／＼かしこまりました。しかしながらおやう申してはいかゝで御座りますが、あなた方はこのたび、それ／＼したお頼み申しておいで下さりまするわけ、エヽまつた私は、數代永久お出入をいたしまする事ゆゑ、あまりしやれがましい事を申しあげましては、後々身分にも相障りますゆ故、私許りはやはり本文の通りに、申し上げたうござりますて。」左次「ア、引どうもならねえぞ。其れはサ、まるぶん本文の通りでいいのサ。いいけれどさうきやうめんには、覺えられめえと思つて、あらまし大筋を覺えて、詞は出たらめにおやんなせえといふわけサ。オイ眼公、足下の料簡で一ばんあしらつて立つて見さつし、おれはしばらく見物だ。七山市十郎たのむ／＼。」ト、さすがの左次郎ももてあましてぞ居たりける。

四編追加下之巻

扨其の日をはじめとして、質兵衛は早朝飯にて辨當を持ち、毎日稽古に來るゆゑ、みな／＼も大き

によわりけれど、日数つもれば少しは形も出来て、あらましはこじ付くやうなれ、誂へ置きし諸道具などもとり揃ひ、はや當日になりしかば、日雇をたのみ、諸色をもたせ、かねて仕組みしチヨボ語りの太夫を同道し、質兵衛が案内にて、かの御下館へ行きけるに、はや諸出入の町人、おひ／＼つどひ來て、皆それ／＼に休足部屋仰せ付けられ、八人の麁忽者もいつぱし役者の氣取にて、とある部屋へ入り休息する。アバ「なんと左次さん、たいそう廣い御座敷だなう。まづ草履をぬいでから、凡そ小一里も歩行いたやうだが、歸りに道が知れようか。」左次「さうよ、迷子札でも付けてくればよかつた。」質「イエ／＼その儀はけしてお案じなさりますな、御用相濟みまして、おいとまさへ出ますれば、お役人様方へおねがひ申して御案内のお人をくだされば、もとのお口までは出られますに相違はござりません。」左次「ハア左様か、それでは安心だ。」キア「アバ公。」などと、皆うち寄り質兵衛をひやかす。扨また茶番連中のならひにて、おのれ／＼が楽屋の役者の所持の鏡臺、又は化粧道具、湯呑の類まで、そのとほりに平日こしらへおく故、わづかの事にもその諸道具をもちあるき、己が部屋とさだめし所へ鏡臺をすゑ、その外の諸器をこしのまはりへうるさく並べ、おのれ／＼が役の二幕三幕も前より、あたまは下地になほし、鍋墨を取り寄せ襟をつかひ、楽屋着らしき浴衣に、ひらぐけの帯、上草履にまで心をもちゐ、襟から胴へばかり白粉をつけ、しとねになほり、鏡とにらめくらをして、長煙管にてそばに居る人に煙草をつけさせなどして、すこし舞臺より楽屋でツコをおもに楽しみ、幕を引きする事甚だなかし。見物の身にとりては、しごく迷惑なるものなり。○扨しばらくあつて上下の役人きたり役人「イヤ是れはいづれも、今日は大きに御苦勞、上にも殊の外おたのしみで、ハ、、、、。時に質兵衛殿、お楽屋からおはしがゝりへお幕まで、廻る間数が不勝手では、チト知れ兼ねる間がござる故。おつゝつけ案内

いたして置きませう。」馬「ヘイ／＼それははや御念の入りました有り難い仕合、さやうなら御無禮ながら御案内くださりまし。左次郎様あなたさまと御一處に御見分を。」馬「ハイ／＼、しかしそれは私より、むかうへ廻るものが突込みさへ致せばよつござります。出目公眼公呑公と竇兵衛さん圖武公とおよつとあなたさまにお付き申して見て來さつし。」なま酔「ヘイ／＼、さやうならお世話ながら、御案内くださりまし。」圖武「ハイ／＼、なにおいらなんぞは見てくれにもおよばねえ、どうでもいい。」眼七「コレサ馬鹿な事、猪がうしろから出ても横から出ても大變だ、ぶしやうな事をいはずと、一處に歩ばつし。」役人「ハヽア貴公猪かナ、ハヽヽヽ、こいやそれは一しほ御大儀ナこ」眼七「ヘイ是れは圖武六と申しまして、年中首が廻りませぬ身分で、毎年大晦日より松の内二十日ごろまでは、獅々をかむりまして忍び歩きます故、殊の外猪たれしをりますに付き、このたび役を申し付けました。この役お上へよろしう御披露くださりまし。」役人「ハヽヽヽ、それは格別おもしろい事でござらう。」圖武「ムヽンうぬばかり役者の氣でヘンつらがいい。イエわたくしは由良の助の役に、たび／＼つとめましたが、猪は今度が初役で、いつたい私は闇弱いのゆゑ、かやうな端役を取りまして。」眼七「是れサ何をくだらねえ事をごたつくのだ。あなたさまもおいそがしい、はやく御案内をねがつて、見分して來さつし。ハイ左様ならこのものどもを、お引きまはしくださいまし。」役人「ヲヽアノ／＼こちらへご

ざんす。」ト、皆々をつれて行く。残る四人は大道具小道具など帳面に引合はせ、夏衣裳等取調べなどするうち、五人は部屋へかへる。　眼七「なる程案内がなくッては知れねえ、知れねえ。」　野呂「ハア西の下はよつぽど長いかの。」　卒「イヤモ長い許りならいいが、同じ座敷ばかりあつて、そのうへ二ッ三ッ曲りくねつてよつぽど知れにくい。」　卒八「ハヽそれぢやア向うへ出る時は、ずいぶん手廻しをして早めに廻らねえとまごつくぜ。」ト、話の中おまかなひの酒肴取り持たせ、　役人「これは何れも御退屈で、ヤ麁末ながら上より御酒を下さる間、まアいろいろと参らしやれ。」　貫「へイへイ是れはまことに冥加至極、おありがたい仕合。はゞかり様ながらお上へ宜しうお禮を仰せ上げられ下さりまし　左様なら皆様お聞きの通りお上より、下しおかるゝ御酒、ア、有り難い事で。エ、私めは御存じの通り、御酒は一向に御不調法でござりまするが、是れは外なりませぬお上のおぼしめし故、お杯に一ッ頂戴仕りませう。」ト、皆々なみなみと一ツ受け、ちびりちびりとほし、口をつけ大骨をつてやうやうほし、　貫「エ、是れは左次郎様へあげませう。」　左次「へイへイいたゞきませう。へイこれは皆の者へお手當下し置かれまして、有り難い仕合、お時宜なしに頂戴仕りませう。併しながらあなたさまには、何かど御多用に入らつしやりませう。どうぞ是れへ差しおかれまして、おかまひ下さりますな。」　役人「成程々々、しからば給仕のものを是れへさし置きますゆゑ、隨意に澤山まゐらしやれ。何事にかぎらず手つかへの事がござらば、此の者へ申し聞けられい。ア、屋敷の料理は、貴公達の口には合ふまい。ハヽヽヽヽ。」　一「イエイエ御勿體ない事、

結構にいたゞきます。」ト言て、皆々も相應の挨拶あつて、役人は立つて行く。　卒八「ナア、有り難い事だ、おれやおめへなどには戴きつけねえ。」　野呂「質兵衛さんはお菰のやうにいひなさる。ハヽヽヽ。」　左次「しかしお屋敷方といふものは大きなもので、チヨイとひとよりのお客でも、酒の壹斗四五升も呑む事が有るから、今日なんぞも大層なおもの入りだらうヨ。」などと暫く雜談のうち、例の大酒となり時をうつしぬ。　左次「コレ／＼、いつものやうに醉つてはならねえぜ、モウ切り上げやう／＼。役の有るものは猶の事だ。」ト、又役人來り、いふやう　役人「是れはいづれも甚だ麁末な儀で、さて上にも殊なうお氣兼ねの爲、最早初段より始めまするやう仰せ出されました。御苦勞ながら支度におかゝり下されい。」ト、部屋々々をふれて廻る。　卒八「ハイ／＼、かしこまりました。サア／＼みんなが顏でもこせへるがいいぜ。」ト、きくと質兵衛はグワタ／＼トふるひ出す。　左次「質兵衛さんは爰へお出でなせえ、わたしが顏をこしらへてあげやう。」　質「ハ、ハイ／＼、ドヽどうぞ、オ、おたのみ申します。」　野呂「モシなぜそんなにおふるへなさりやす。」　質「ヘイ、サ、、左樣で、ソ、私にも、ナ、、なぜか、シ、、知れませんが、ゴ、御酒は、タ、ただ今、チ、、中氣でも、ゴ、ござり、くゝますまいか。」　卒八「ハヽヽ、こりやアをかしい。どうしなさつたのだらう。」　左次「ハヽア武者振ひだ／＼。」ト、給仕の人をたのみ、水を一ツぱい貰ひ　左次「モシ質兵衛さん、是れを一口おあがんなせえ。」　質「ハイ／＼。」ト、手は出せども、ふるへて持つことならぬ故、アバ太郎が持ち添へて呑ますれば、夢中にてごつくりのみ、　質「ヘエ、、、、、コ、是れは、ミ、、水だ。ナ、、猶ツ、ふるへる／＼。」

左次「なに〳〵それでしばらく心を落し付けて、氣をおしづめなせえ。座頭が病氣では幕は明かねえ。」ト、皆々うち寄り介抱すれば、質兵衛もおのれと心をはげまし、何かしきりに神佛を念じゐる。そのうち三人も化粧にかゝる。呑七「勘平が白いから、おらアちつと薄肉にしべエ。屋敷だけ彌五郎はおもひれ武張つて拵へよう。」アバ「武張るとも慾張るとも、勝手にするがいい。時に質兵衛さん、お心持はどうだね。」質「ヘイ有り難う、大きによろしう、胸の動氣が靜まりましたら、大きに震ひもとまりました。」左次「ハ、、、、、どうも此の樣な事におなれなさらんからのほせやすのさ。なんでもゆうべの總ざらひの心持で、向うを見ずに平氣でやりさへすれば大丈夫、ゆうべはよく出來やしたぜ。そして今出ようといふ時、手の平へ人といふ字を三ッ書いて、三遍なめて出なさると、人にのまれぬまじなひで御座いやすから、さうなさいやし。」質「ヘイ〳〵、モウ胸の動氣がしづまりましたら、大きに落付きました。」ト、いふ時はや大序はじまると見え、うしろ座敷は樂屋ゆゑ、耳もとにて、ドロン、ドン〳〵〳〵〳〵ト大おろし、シヤギリを入れる音に又びつくり、質「ヒヤア 引これは。」野呂「コレサ、さうびくり〳〵してはつゞかねえ、是れはシヤギリといつて、一幕毎にありやすから、しつかりしておいでなせえ。」質「ヘイ〳〵なに〳〵いつれ此のくらゐの事はあらうと覺悟はいたして居りますから、さして驚きもいたしませぬが、だしぬけゆゑツイ、ハ、、、、。」ト、ちり手水をつかひ、又何かしきりに念じる。神佛の擁護にや質兵衛はやう〳〵ふるひもとまりければ、左次「おおんべえがよくば顔をして上げよう、爰へお出でなさい。」ト、紙をもみてぐい〳〵と頭をふかれ、痛さをこらへ、しやんと手をついて居る。左次「ハア是れは皺を入れる

にも及ばずと、あんまりお愛想がねえ、油墨をこせへて前歯を一本書かうか。」ト、聞いて一兵衛「エ、エイエ、どうぞ歯は此のまゝ差しおかれてくださいまし、あと／＼で難渋いたします。勿論頭一兵衛の役に、歯がそろひまして相済みませずは、御前へ向きます節は、ぬけた分で口をひらきませぬやうに心掛けましたら、夜分の事ゆゑ、遠目にはしかとわかりかねませう」などゝくだらぬ事をわめく／＼、皆々も稽古の内より聞き飽きをかしくも思はず、挨拶もろく／＼せぬなり。扨本舞臺には、はや大序始まりて、夫れより段々おひ／＼に相済み、いよ／＼五段目となるゆゑ、明手のものは、大道具を飾り付け、小道具諸色をもつて舞臺へ廻る。チヨボ語りは牀へ上り、左次郎は拍子木を持ち、上草履などはき、樂屋より知らせの木を入れ、すべて黒々とやる。殘る三人は囃子へ廻り、出目助は勘平の拵へ、いつもの形にて松陰につくばひゐる。呑七は彌五郎の拵へにて向うへまはる。樂屋は其の幕毎に連中入り替り／＼、他人無陀人はすこしもまじへず。こゝはお屋敷だけ極りはよし。扨口上済めば「トヲザイ／＼／＼」と、幕明く。牀にて、「鷹は死しても穂はつまずと、たとへにもれずゆふ月や。」ト、だん／＼置浄瑠璃あつて、「はれ間を爰に松の陰、向うよりくる小提灯、これも昔はゆみはりの、ともし火消さじぬらさじと、合羽の裾に大雨をしのぎていそぐ夜の道。」ト、詞のチヨボまで語れど、彌五郎出でざれば穴をふさがんと、牀にては、何かわからぬ出たらめを語れば、出目助もいろ／＼思入にてつなげど、一向出ぬゆゑことわり、先刻役

人の案内にて切幕へ廻る間取を承知しながら、例の早のみこみにて廻り所を違へしゆゑ、行けども行けども切幕へ出ず、だん／＼手間取るにつき心はせき、如何はせんと取りのぼせ、だん／＼と奥深くゆく程に明座敷ばかりゆゑ、人にたづねんにもせんかたなく茫然と立つたるが、はるか左の方にて、樂屋にて打つ雨の音少し聞ゆるを心當てに、一間をくゞれりと明くれば、内に繼上下着たる立派の役人三四人詰め合ひ居て、呑七を見てびつくり、さすがはゞまり役の人と見え、押取刀に立ち上り、物をもいはず呑七が胸のあたりをしたゝかに突けば、呑七はあつといひけれども、間をはづされ、次の間の敷居にて、天窗をしたゝかうち、鉢卷と共に髷ぶしはいづくへか飛び散り、しばらく氣絶して正體なし。殘りの役人はたゞ、「シイッ／＼シイッ。」トいふのみ。御前近くと見え、有無をいはず、先に突き倒したる役人、岩永左門は手ばやく呑七を押へ、はるかの別間へ引きずりゆく。外役人もあつまり、左門「ヤイ、おのれ何やつなればお次まで尾籠の振舞、お座敷うちを土足にてしのびの體、コリヤ今晩のお取込に乘じて、盜賊に相違ない、ふとゞきなやつ。」と、懷中より早繩を出ししばりあげ、目もとうつて下役人を呼び、下役「吟味は追つていたす、まづおひけの相濟むまでは、物しづかにこやつ取りにがさぬやうに、大切に番をさつしやい。」下役「ヘイ／＼かしこまりました、さあうぬ立ち居らう。」ト引立てるゝ。呑七はいひわけせんにも、あまりに思ひがけなき災難、殊に胸をつよくつかれ、そのうへ

敷居にて頭をしたゝか打ちけるにぞ、いまだ生氣つかず、只ぼうぜんと是れまで引きずられ、うつとりとして詞もいでず。役人のうちより、少しやはらぎたる人秩父繁太夫、繁「若永殿、マヽおひかへなされ。此の者最前より見分いたすところ、甚だ胡亂の體にはござれども、化粧などいたし居る體、萬一今晩の役者どものうちかもはかり難うござる。コリヤ／＼われは若しや役者に上つたものではないか。」ト、この聲にてすこし正氣付き、呑七「ヘイ／＼役者でござります。」左門「ハ、、、、イヤ盜人たけ／＼しいと、この方で役者かと申せば、すぐにその尾について、ヘイ役者ぢやと申したる。コリヤヤイ此方どもいかに在勤もので、芝居事など不勝手ぢやとて、おのれがやうな見たうもない面の役者が有らうと思はれうか。推量にも知れて有るわ。イヤ秩父殿、これは今晩のお狂言に付き入りこむやつゆゑ、わざとまぎらはしう出立ち居つたでござる。につくい奴。コリヤかやうな不時も有らうかと、上屋敷よりわれ／＼詰め合ひ居るわ、明日は急度吟味いたす。」（手の侍打ちよじりかけ來り）ト、いふ折節、坊主二三人若「若永さま若永さま、この者は只今お舞臺へまかり出でまするところ、延刻いたし殊の外差しつかへ、一同迷惑仕ります樣子にて、諸方相尋ね居りますゆゑ、何か不調法の段は追つての御沙汰、唯今差しかへ、りお舞臺の手筈相違いたしましては、上の御不興の程もいかゞ、まア／＼拙者どもへしばらくおあづけ下さりまし。」ト口々に詫びければ、重役人も先刻より、呑七がそぶり相違もあるまじくと心はつけ

ど、あまり手ひどく取り極めしゆゑ、すぐにも許しにくく、いかゞせんとためらひし折なれば、此の詫をさいはひと、左門「フンしからば貴公達へまかせ申すが、以來かやうに御前ちかく／＼、徘徊いたさぬやうに心付けさつしやい。」ト、是れをしほに繩をゆるし、重役人は立つて奥へ詰める。又若手の役人はすべて狂言どもにかゝはる能樂人などには、何か親しみたく、樂屋のぞきをしたがる人物まゝあるものなり。夫れより吞七をいろ／＼介抱し、重役人をさゑしなどして種々取りなし、若侍「時に最前から貴公が出ぬとて、仲間の衆が殊の外心配の様子ぢや。まづ些とも早く出さつしやい、早く／＼。」トせき立てられ、吞七はたゞ取りのぼせ、夢のやうにて何の思慮もなく、若侍の云ふにまかせ幕をきらせる。扨又舞臺にては、チヨボ語りもいろ／＼出たらめの淨瑠璃をかたり、もはやよき時分と、何とやらして千崎彌五郎、チ、チンチン／＼／＼などと呼び出して見ても、すこしも出です。出目助も何かくだらぬ思ひつきなどいろ／＼仕盡し、せんかたつきて脉にて、淨るり「さらば／＼」と勘平は我が家をさして歸りゆく。」ト、出放題をかたれば、出目助も是れさいはひと、何かふご／＼しながら、花道へはひるゆゑ、脉にては、淨るり「又も降りくる雨の足、人の足音とぼ／＼と、道は闇路にまよはねど、子ゆゑのやみにつく杖も、すぐなる心かたおやぢ。」トこの淨瑠璃を聞き、質兵衛はこけの一心に、かたく覺えし事なれば、よき程に切幕より出で、だん／＼舞臺の方へ歩む。脉にても、淨るり「一

筋道のうしろから「ト呼び出せど、又定九郎いでず。又も一同に氣をもみ、左次郎は拍子木にて向うを招きなどしてあせるところへ、切幕の音チヤリ、と明くのゆゑ、うれしや定九郎と思ひの外、呑七は若侍にせき立てられ、のそりと出でたる形を見れば、提灯も笠もなく、鉢巻踊ぶしの落ちたるも知らず、ばうぜんと出でたるを、舞臺よりみな〳〵見付け、びつくりして後見囃子も一同氣をあせり、舞臺より手眞似にて、あとへもどれと教ふるもあり、又はやくこちらへ來て、樂屋へ入れとまねくもあり。呑七はうつゝの如く、泥に醉ひたる鮒のごとし。先刻よりの不始末、たれも知つたる丘投目の事ゆゑ、御翠簾の内外、諸家中の見物九節何の外、につこりともせず伊部氏まで、一同たまりかね、御前も思はずどつとわらひ、しばし物音も聞えず。呑七はなほ〳〵取りのぼせ、先を見れば質兵衛が出てゐるゆゑ、猶又ハツトどうしてかし、今更あとへもはひられねば、下座の口へはひらんとこゝろざし、質兵衛が跡よりそつ〳〵と歩み、すれちがひざま默つても通られまじと、捨てぜりふにいふさる思ひつきをいふ。呑七「親父どの此のぶつきらな街道、ア、氣丈な事な。」トいへば、質兵衛は元より取りのぼせてゐるゆゑ、呑七を定九郎とこゝろえ、質「ハイ〳〵年寄の夜道、いたしたくもござりませぬが、何處のうらでも金程大切なものはござりませぬ。」ト覺えたる通りそろ〳〵とせりふをいふ故、呑七すゞにも引込みにくく、何かまご〳〵してゐる。扨又眼七は質兵衛と一處に、最前切幕へ廻りゐ

たりしが、呑七が行方しれず、しばらく間のぬけたるうち、呑七を尋ねんと、あちこちと見廻るに、不圖庭の井筒を見付け、總身をぬらして出でんと、ようけ氣をはらし、早々庭に飛び下り、大小を拔いて井の端へ置き、傘をひらき置きてつるべを釣り上げ、天窗より三四杯さつさとあびるうちに、彌五郎勘平の出合もなく、勘平は間ぬけに引込みしかば、思ひし程より與一兵衛の出早くなり、はるか舞臺のかたにて、浄るり「一筋道のうしろより。」ト呼び出す聲におどろき、ハットうろたへ井戸端にて、呑七「サ、イノ〳〵。」トいひながら、傘をもち水だらけの儘、遠慮もなく座敷へ飛び上り幕を明けさせ、呑七「サ、イノ〳〵親父どん。」ト出づるにぞ、質兵衛は定九郎が二人出で來しかと、けでんしてふりかへれば、藥屋のものはたまりかね、呑七をひつとらへ、有無をいはせず下座へ引摺り込む。そのさま二丁町にてトンチキを引き出す樣なり。あとには定九郎與一兵衛兩人となり、やう〳〵すこし五段目らしくなるこ質兵衛は律儀に覺えしゆゑ、仕打はなくとも約束のきつかけ、せりふまでも間違ひなければ、可なりに狂言もきたりしが、いろ〳〵有つて、呑七「ヱ、むごい料理がいやさに手ぬるういへば付け上りやした、こゝなおいぼれ親父め、サアたつて金を出さぬとぬかしやア、コレ二尺八寸。」ト腰を見れば、最前水をあびる時井筒のふちへ大小を置き、そのまゝうろたへ出でしゆゑ、大小はなし、今さら丸腰に心づき、ハット思へどせんかたなく、うしろに付を打つてゐる卒八に、小聲にて「庭の

非衛に大小が有るから、早く取つて來て。」トいふを、與一兵衛に出たらめをいひながら、チヨイ／＼といふ故聞きとれず。卒八「エ、エ何だと、エ、エ。」と一向わかりかねる。眼七はじれこめどせんかたなく、眼「ヤイ親父め、此の貳尺貳寸の傘、伊達にやアさきねえ。たつていやだとぬかしやア、此の傘でたゝき殺すが、おやぢめ返事アドヾどうだ。」ト、これより眼七は口から出次第、仕打も仕次第になれば、律儀に覺えし質兵衛は承知せず。小聲にて質「モシそれではちがひます。」トおなじく小聲にて、眼「エ、もう斯うなつてはしかたがねえから、早く死んで仕舞ひなせえ。」大聲にて「エ、しぶとい親父め、默つてくたばれ。」ト傘でしきりにぶちながら、小聲にて「早くだアといひなせえよ。」質「それでも、傘では死ねません。おまへ刀をなぜだしなさらぬ。」此の時眼七は大きにじれこみ、眼「エ、その刀がねえからのことだ、あんまり氣がきかねえ。なんでもいいから、ダアと倒れなせえよ、エ、不器用な。」とはずみに質兵衛はしたゝか打てば、質「アイタ、、、。コレ、なぜそのやうなひどい事をするのだ。みんなそつちで間違へておいて、じれることがあるものか。」ト傘へ摑みつく。眼七はもてあまし、引つたくらんと傘を引き合ひながらうしろへむき、眼「サア早く引つころばしてくれねえか。」トいへば、燒酎火をつかつてゐる卒八はこゝろ得、質兵衛が足を取つて引き倒し、やう／＼ふきかへの案山子を出す。質兵衛はまつ黑になつて腹を立ち、質「コレ年寄をなぜよつてかゝつて手ごめにするのだ。」ト

卒八にかゝるを、左次郎、アバ太郎、野呂松など取押へ、手込にしてやう〱消落にてかくし、うしろへ連れ行く。牀にて、浄るり「あへなく息はたえにける。仕すましたりとくだんの財布、くらがりみみつかみよみ。」 眼七「フ、、五十兩、久しぶりの御對面かたじけない。」ト、是れより眼七はひとり舞臺、案山子を相手に唐茄子をくはへ、化されの仕打十分にやる。 浄るり「はねは我が身にかゝるとも、しらず立つたるうしろより、一散にくる手負ひ猪。」テンテレックツ、テン〱〱と太鼓につれ、圖武六は縫ひぐるみの狐にてヒョイと出で、彼の案山子を冠り、約束のとほり猪の思入れ。うしろは化物めきたる鳴物にて、定九郎とのをかしみの立廻り、こればかりはかなり見物も受けたるやうすゆゑ、兩人とも、づつと乘氣になり、圖武六はしきりにはずみて飛びはねれば、うしろで遣ふ燒酎火へ突き當り、かむりたる蓑へ火うつりて一度にくわつと燃えたてば、ワットおどろき案山子を捨てんとすれど、繩が手足へからみ、うろつくうちに一重の縫ひぐるみへも燒き付くにぞ、一生懸命にかなぐり取つて投げ付くれば、眼七が顏へ打ち付けられ、胸より腹まで灼傷する。後見囃子もかけ出し、やうやうと揉み消せば、眼七おもはず大聲に、 眼七「アツ、、、、コトいへば、圖武六は早速に、 圖武「コオン」 眼七「アツ、、、、。」 圖武「コオコ、コト、此のくるしがりの思ひ付きをしほに、左次郎は拍子木、チョン〱〱〱ト幕を引く。

相かはらずしくじりけれど、大序より十一段の内、五段目程をかしき幕はなしと、殊の外御意にかなひ御機嫌よろしく、御賞美あつて御酒など下され、あやまちの高名にて、いづれも首尾よく歸宅する。

史記に滑稽傳有り。素滑稽とは辯捷の人、是を非の若く、非を是の若く、同異を亂す事を言ふ。洒落は物の洒落て濟ませし意なり。山谷が周茂叔を序して、人品甚だ高し。胸中洒落たる事光風霽月の如しと云ひしは、更に物に貪着せず、串戯交りに風流に遊ぶを洒落た人とも云ふべきか。舊友瀧亭鯉丈子は、常に滑稽洒落を弄び、世の中を絲瓜の皮とくらし、閑暇の筆すさみには策子を著はせり。所謂花暦八笑人、滑稽和合人、大山道中記、箱根草等則ち是れなり。克く看官の腮を解かせ、腹を抱へさせしより、童戲人の稱高く聞えたり。惜しいかな居を黄泉に移ししより其の遺稿絶えて有る事なし。發客遺憾に堪へず、此の頃予に其の嗣作を乞へり。從來孤陋にして世の流行を知らず、拙き著作を以て木に竹を接ぐ誹謗を得ば、先板の評判まで貶す基となるべしと、固辭して需めに應ぜざりしが、過日瀧亭子に、八笑人の復稿を談柄に聞く由有りけりと、大概を板元に告けしかば、其の儘稿を脱せよと、再應の求め默止し難く、然れども机上繁多の故を以て筆を採るの遑なく、既に中冬に至り漸く硯を是れが爲に發き、一員二員草稿成りしを傭書剞劂を勞して、以て新春發兌の仕賈に附す。倉卒の間疎漏急迫にして校正に給暇なく、他の胡盧とならん事、慙愧に堪へずと雖も、唯其の遺意を次ぎ、懷舊の情を述ぶるにあり。白樂天が舊詩卷を感じ十人の酬和九人はなしと吟ぜし憶ひありて、あるはなく、なきは數添ふ世の中と、小町の詠みしも年歳似たる花に浮氣れ、身の老を忘れて謾に

禿筆を走らす事しかり。

東都楓川の市隠

一筆庵主人誌

維時丁未年仲冬稿成己酉年新發兌

隅田堤の秋の七草に蟲の音ならぬ狸はやしを聴く月見船の滑稽

世の噂 砧のおとを野狸

あに太郎「コウ左次さん聞かッし。此の名題は寶船の歌と同じことで、うへから讀んでも下から讀んでもおなじ事だぞ。マアざつとした事が、おいらたちの案事は名題からして斯う骨を折つて工夫するから、埒のあかねえ筈だらう。茶番に廻文の趣向はどうだ〳〵。「きぬたのおとをのたぬきさ、何くわいぶんもたうぶんもいらねえことはねえ、是れから脚色の本よみを聞かッし、とうざい〳〵。

花暦 八笑人 五編巻之上

江戸 一筆庵主人戯編

世の中の義理も絲瓜も瓢簞も、構はでぶらりと日を送る、遊惰仲間の八笑人、一別以来にて左次郎の蓮池亭に集會る約束、卒八、阿波太郎、出目助の三人連。あは「コウ出目公、廣小路から橋の側へ廻う曲つて木戸を這入ると係けて主と解くぜ。」卒「ナゼ〳〵。」あは「どん〳〵といふからヨ。」出目「だしぬけに何を言ふかと思つた。鈍々とは其方の事だア。」卒「ナゼ。」出目「なぜの神と並んで幇間許りしてるるからヨ。」あは「太神樂の挟箱持ぢやアあるめえし、太鼓を持つ奴があるものか。金持の旦那を面白く遊ばせてやる座持といふのだ。」卒「癇癪持や疝氣もちや、厄介もちの燒餅より些とはいゝぜ。」あは「また彌次馬に出るヨ。それ〳〵足元の悪いに、よろけてぬかるみへ尻もちでも搗くと笑ひものだぜ。」あは「なに、ころんでも只は起きねえからいゝのサ。」卒「主ぢやアあるめえし。」出目「ぬしでねえ代りに馬だらう。」あは「大福餅の懐の暖かいのを相手にしねえけりやアつまらねえ。」卒「大福餅といへば、モウ是れから寒くなると此處は立ちきれねえぜ。」あは「ぬしだの出目公なんざア冬も夫れ、爰の横町と同じ

事だからョ。」出目「吹拔でるるといふ落ちか。」どん〳〵といふにも吹拔といへる横町も皆此の邊にある地名なり。三人「ハヽヽヽ。」あば「甘く悟つたな。」卒「うまくさとる筈だ。餅つくして爰まで來て、出島と白下で喰へめえと思ふから、冰おろしと三盆を遣つて置いた。」あば「酒を止めて下戸になつたな。」卒「爰を歩行くうち下戸ョ。」出目「コウ見ねえ杵屋の宅は綺麗で見晴らしがいいナア。」こゝの杵屋六翁といへる高名の人あるなり。卒「きねやといふけれども、舂くのぢやアねえ、引くのだから臼屋といふといい。」出目「うさアねえ。」あば「譃はねえといふ氣かエ。」出目「野暮をいふぜ、臼はねえといふ洒落ョ。」あば「それでも挽臼と搗臼の二種あるからョ。」卒「貮朱あるなら穴甚か安達屋。チト廻りだが大和屋でもお供とやりてえ。」この名前は此の邊の鰻屋なり。あば「二種とは二色といふ事だァ。二色と云つたら文盲な主達ゆゑ、役者の口眞似する事だとおもふだらうが、二品といふのだぜ。」卒「扨は變だぜ、二品は鼃一ひよこ三ひよこ〳〵。」出目「蛇ぬら〳〵なめくで參りやしよ。」あば「サア來たぜ。」ト、左次郎の門口へ三人きたり、出目助と卒八かくれて居るとき目くばせをして、あば太郎は格子をのぞきながら、あば「眼公々々、オイこんな物を持つて來た。こゝを明けて下つしな。」ト、聲をかけられ、がん七何か勝手に酒の肴をこしらへてゐたりしが、手をふきながら出でて、がん「なにを持つて來たのだ。」ト、表の格子をあける。あば「トいつて爰を明けてもらつたのョ。出目公と卒八といふお土産だァ、珍らしからう。」がん「そんな事だらうとおもつた、いめえましい板めへ最中だァ。」いためへとは料理人をいふ。あば「庖丁は安磨だらう。」がん「北條時折ョ。」出目助卒八這入りながら、卒「庖丁全體今の間に、卽席の喰ふ役はあれやこれ

やは知らなんだ。」ト、いへばかん七赤貝をとつて見せ　がん「赤貝なんぞにや克く〳〵きくこうだはどうだ。」出目「こいつは丁度うまくはまつた。三杯酢か甘煮か。」がん「何でもいい、甘煮くはせるから二階へ往つてゐさつし。」出目「道端の槿花は甘煮喰はせけりか。」あほ「それぢやア洒落にやアならねえぞ。」幸「洒落にやアならねえとお許しが出ねえでも、一杯のむと洒落が胸先へこみ揚げて来るから案じなさんな。」あほ「しやれねばならぬといふのぢやアねえ、しやれにも地口にも聞えぬといふのヨ。」幸「しやれ〳〵口やかましい奴等だ。」出目「聞いてゐるものは耳やかましからう。」ト、二階へあがると、最早つぶ六、どん七、なま一出仕がおそい〳〵判官どのだ。」団式「鮒エ〳〵ふな侍をよしにして鯰鍋だぞ、どうだ。」呑七「鯰侍おやア語路がわりい。」あさ「鯰のうむらひ助安で、蔵を倉我に書き替へはどうだらう。」くらとは、忠臣蔵といふべきをくらとばかりいふは、芝居道の詞にて、此の仲間では斯くいへり。なま一「新手の三人で助けやすトいつて、喰ひたてられてもモウ買はぬの三郎だ。股の肴を出すまでやおつこてへろエ、。」ト、あさひなの身振をしてりきむ拍子に、杯洗の丼をひつくりかへし水だらけになる。幸「サア〳〵大變だ〳〵大水々々。すイ雑巾でも何でも早く〳〵。」づぶ「權現堂と猿が股がきれた〳〵、助けぶね助けぶね〳〵。」幸「猿が股どこいふた。」出目「これはいやまた。」ト、皆々手拭雑巾などをとりあへず水をぬぐひ、あほ「それでも大水が床へ上らねえで仕合だつた。」なま一「その筈だ、二階に居るから命に別條はなかつた。」すく「下にゐると大雨車軸を流す所だ。」ト、いふうちに野呂松裸になり、ひとへ物を抱へて、片手に帯と鼻紙入、煙草入を持つて梯子を上り　のろ「おら

アヽとんだめに逢つたぜ。こゝの内へ来て表を明けてはひると、頭から是れ見な、びつしより水をあびて単物も何もびつしよりぶぬれヨ。物干へ出して些とあぶ干さうと、肝をつぶしたぜ。」ぶ「ソコでおらァ裸で来たから水の見舞に来たのだと思つて、背の立たねえ様な所をおよいで来たと思つた。」土「野呂公の来やうがおそいから、そんなめに逢つたのだ。」のろ「おらァ先陣より後殿をする気だ。」土「しんがりより裸ついでに猪狩でもするがいい、物干で。」のろ「おけへねえ。これは物干が[illegible]犠、忍の岡の里に住む野呂松と申すものにて候。」ト、能狂言のまねをしながら、[illegible]物干へ出ると、引窓の下に[illegible]上を見ぶん「なんだもろこしだ、唐の方に火事でも見えるのか。」これより八人のなまけもの[illegible]、思ひ思ひの日から出次第酒落[illegible]しの不[illegible]、思例の大酒盛となる。あるじの左次郎は[illegible]どよく酒を呑みよたんぼうにはならず。[illegible]「斯う皆久しぶりで顔が揃つた所はどうも有り難え。」品川の茶番が来たぜ。」卒「七兵衛のだりおくれで、青菜に塩々陣を引いてからは、斯う落合つた事は[illegible]だ。」出目「今体此度は阿波公の番だッけ。」あは「それだから油断なしに案事なしてるのヨ。」[illegible]「[illegible]茶番もいいが、斯う爰へ寄り集まる呑み仲間は、梁山泊なら己ァまッ裸宋公明だ。」ぶん「大わたはくなら九紋龍か魯智深だ。」のろ「呑み倒れの豪傑、ちよいと寄り合つても一升づゝも呑むから、八升人といふのだらう。」出目「ナニちよいとなら五合づゝサ。」卒「どうして〳〵五合ぢやァ生きちやァ居られねえ。」出目「ナぜっ」卒「一升の別れになるから。」ぶん「六合かイヤ七合宛と極めておかう、七の数は目出

たい。七福神、七珍萬寶、七人猩々、七賢人、天神七代、地神ちじん、ちゝちん〳〵。」卒「地神雷。」ト、いひながら酒の肴の鹽燒を見て「鯵、親父か。」のろ「これから八笑人七合神と、質素儉約に極めようぢやアねえか。」かん「おそれ入谷の七合神だ。」左次「オ、さうだつけ、皆顏のそろつた時分頼む事があつたッけ。」卒「何だ何だ〳〵。」左次「なに膽をつぶす事ぢやアねえが、此の茶番連にはマア酒落てあすんで暮して居て、わりい地口ばかり言つてゐるといふは有り難い。神の惠みだから酒落の氏神樣へ冥加のために。」出目「茗荷よりあたじけないから生姜のためにすればいい。」左次「馬鹿仲間だからみやうがの爲さ。お禮に額を奉納して八人の名をのこしてえと思ふが、昔から古いしやれの氏神は、今のおそれ入谷の鬼子母神樣だから、斯う寄り合ふ度帳面をこしらへておいて、酒落一ツに付いて、二十四文、十六文、八文としやれの甲乙を付けておいて、錢をあつめて、額面は歌でも發句でも詩でも語でも、六でも七でもお望み次第書き入れ、奉納の寄進をしてえといふ御連中へお頼みだ。」ま「勸化なら卒八が一重羽織を着て帳面を以て歩行けば、打つて付け、俗願人紛ひなしの人品だ。」卒「妙見樣へ銅の燈籠か。」のろ「いい酒落は二十四文、わるいのが十六文八文ぢやア、おいら達のやうに好い酒落ばかりをいふものは錢顋が上るし、下手なしやれは仕合だ。見渡した所で酒落で錢顋を取られるやつは一人もなし、駄酒落仲間は安心なもんだ。」出「それぢやアうつかり口をきくと運上がかゝつて錢が出るのか。」さ「人の云つた古

いのなら帳面にあるから錢は出さずとよからう、一度取りばつとだ。」左次「それなら、古いしやればかりいふがいい、犢鼻褌を腮へはさんでしめたり、帶を貝の口に結んで、前から後へ廻した時分の、かんに信濃の善光寺。」卒「おりがた山の蔦からまる。」のろ「なんで有馬の人形筆。」出「逃げたの中にぼこ木瓜。」がん「まんまるら坊主の柿の種。」あは「コレサ〳〵もういい加減にして置きねえ。」出「酒落仲間で初筆に付けねえぢやア外聞がわりい、一番に付けてもらはう。」左「何といふ酒落だ。」いろ「エ、トまたねえ。」ト、考へにもさしあたつて酒落が出ぬゆゑ、いきんでばかり居る。左次「サアどうだ〳〵」のろ「マアまたねえ今出る所だ。」左次「かうぎに結しるな、あとがつけへて居るぞ。」いろ「どうもさう世話しなくつちやア困る、今出る所だ。」ト、色々身悶えをして考へる。左次「コレサそんなにいきんで、酒落の代りに左ねおりでも出されちやア大變だ。」卒「まだ出ねえのか。」左次「そんなに急ぐなら總雪隱へでも行つてくんねえ。」出「ナニおいらたちは雪隱にかゝり合ひはねえ。しやれの事よ。」のろ「ほんに左樣だつけ、あんまり苦しいから。」ト、いふ拍子に、おならを一ツぶうと音がする。卒「せつな屁をひる奴さ、せつな屁時の酒落賴みだ。」出「くるしい時に親を出せといふから、屁の親でも出すがいい。」卒「親ならいいが子は出さずともよからう。」あば「めつたに出して雨でも降るとごめんだア。」出「ぜんてえみんな一所にかたまつて居るから案事がつかねえのだ。一人づゝ四所に分れて居るがいい。そつちの方へあば公ヨ、こつちの方へ出目公、むかうの角へ野呂公、卒八はこゝへ

來ねえ。斯う四所へ分れるといい酒落が出るぜ。」卒「ナゼそんなむづかしい事をいふのだ。」出「むづかしいことはねえ、下手の考へ四すみに居たりといふからョ。長い立關付の酒落だ。」卒「なんでもいい是れが一筆見たかそんな角だ。」のろ「でえぶ八文酒落が出かけるぜ。」出「そねあ〳〵。」のろ「おらア酒落に地でるから、改めて帳へ付けねえでも、後で帳面を見せりやア出すだけは出すからよからう。」卒「それぢやア酒落は晦日拂ひだの。」出「はらひが滞ると引きしやれになるぜ。」のろ「ならうことなら五節句でも、一季でもいいがあきれらア。なんにしろ額へ書く歌は、おれがソレ圖武公、主が棒端で飛鳥山へ花見に行つた時、卒八公と出日公に阿波公と五人連で、大酔にうだつて、歸り道に茶屋の婆アに道を聞いて、大損をして草臥れたといふ事を詠んだ短歌を書きてエから、聞いて左次さんなほしてくんねえ。斯うだ、主といふのは圖武公の事だぜ。

主棒端五人で酒呑で花見歸に茶婆に道よ聞て損して花臥た

どうだ、うまからう。其の時は讀人しらずと書いておいたがどうだらう。」トいへば皆あきれて 左次「讀人しらずより待人來らずと書くがいい。」出「舌ッ足らずのやうな歌だの。」のろ「これ謹んできくがいい、是れが萬葉振といふ古往の口調を借りたのだ。」卒「口調かりかや女郎花か。」かん「口調ばかにした歌だ。」左次「唐人の寐言の樣だから唐歌といふのだらう。」出「それでも神妙に讀人しらずといふ内が殊勝だ。」

左「讀人が知れちやア恥のかきおけだ。」ト、いろ〳〵惡洒落にて、茶しやれの勸化も、額の奉納も、しばらくあとの噺にして、後の條に說き解くるを聽きねかしとして、却說、阿波公の隅田川の花屋敷といふ題の茶番は、久しぶりで旨くやりてえもんだが、趣向は付いたかの」卒「肝心の咄だ彼岸前の蛇の樣に、呑んでばかり居ても智慧のねえ理窟だ。」出「呑まねえでも智慧の有る氣遣ひはなしだ。」アバ「今度はおいらの番は先刻承知だから、モウ名題は出して置いた通りョ。花屋敷といふ題ばかりぢやア茶番が仕惡いから、狂言の種にしたわけを聞いて下つし。」出「聞いてやるべい。」出「それよ思へば昔なり、大小鼓入りの合方で物語か。」卒「まぜつけへしは御免だ。」アバ「あつらへの七色唐辛子を賣る樣に、あんまり交ぜつけへされると憾むぜ。斯ういふ譯だ、此開朝湯へ出目公の這入るのを見たから、急いで行つてみると、もうよかろう石榴口へ立つて體をしめしてゐるから、著物を棚へはふり上げて、驅けて行つて後から睾丸を確り握つて、ヤア出目公御免か、誤つたと言はねえけりやア、雷さまが鳴つても放さねえ、どうだ〳〵といふと、切ない物だから誤つた御免だといふから、そんなら放してやらうと、睾丸を抓んだ手で背中をぴつしやり叩いて、這入らうと思つて顏を見ると、内の大家さんよ。出目公は奥の方の角に首つきり這入つて居てくつ〳〵笑つて居るだらう。大家さんは苦蟲を喰ひ潰した樣な顏をして、阿波太郎さん、早朝から御機嫌と見えますと、しかつべらしく言はれて、何分にも面

目次第もなく、穴へでも這入りたい樣で、御免なさいと誤るもあやまられず、ひと風呂這入ると、どこかどう飛び出して歸つた所が、大家めヱ湯から歸りに内へ寄つていふには、外の串戲と違つて金たまなんぞをつかむことは以來しねえがいい、モシ息でもとまると大變ができる、我等だから克かつたが、他のものだと喧嘩にでもなる所であつたと、したゝか油を取られた。」團正「きんたまの油を取つたら鐵瓶でも拭き込むによからう。」卒「きたねえ、その油をどうした。」串「太郎殿の犬と、次郎殿の犬と、みんな嘗めて仕舞つたとよ。」卒「それからモウきんたまを握る事はやめか。」卜ム「ふところ手をばして居ても、手持不沙汰だらう。」卒「なにいつも握るものは、きんたまより上だから、大家さんも構ふめえわサ。」卜ほ「そのきんたまが茶番の種だ。今年は向島に狸囃子といふ事があると言つて、夏中ちよみ船が綾瀬のはうや三在橋の邊へ、たいそうに船ではやしを聞きに行つたぜ。なんでも猿若町なんぞおやア、日暮がたからみんな出たア。」卜ム「そりやア聞いて知つて居らアな。」卜正「今つからいつの幾日は、向島の洲崎でも水神の森でもいいから、狸ばやしがあるといふ噂を風聞しておいて、見物をあつめて野田の夜茶番をやらかす思ひつきだが、左次さんどうだらう。」卒「月夜でなくつちやア面白くねえ。」卜ム「雨天日おくりとやらかさう。野茶番だから降る方がよからう。」あほ串「ナニいいものだ。」串「それでも雨の野茶ばんへはござを入れて、四文でござい、といふかなア。」串「あめの中からおたぬが

出たヨ、にこ／＼笑つて飛んで出たヨ。」岡武「おたぬがいやなら金玉が出たヨ。」がん「狸にはどうも動かねえぜ。」あ呆「たぬき囃子には大太鼓はねえ、小太鼓許りで旨く拍子をうつもんだぜ。」がん「大大根がなくつちやア、風呂吹にはならねえの。」卒「細かいのは糠味噌よ。」波多菜大根や細根は干大根になるだらう。」左「そんな世話はせずともいいぢやアねえかな。」のろ「向島は百姓地だから、些とは作物の事も辨へさアなるめえと思つてヨ。」あ呆「マア默つて聞きねえ。」卒「だまつて聞いて居るヨ。」あ呆「そこで何だアな。」出「なんだ。」あ呆「なによ。」がん「なには甲良に似せて穴を掘るのか。」あ呆「何の甲より年の功だ。本讀の筋をきいて殆んど肝心してから、外の話をしねえな。」卒「年の功よりべつかつかうか似合ふぜ。」出「按摩膏を張ると丸で瘡ッかきだ。」がん「そして妙な所へ殆んどが出たぜ。」のろ「頗るの間違へだらう。」あ呆「ナニおれがそんな尾籠なことをいふものか。」呑「こいつは大笑ひだハヽヽ、ハ」ト、皆々笑ふうち、また酒をのみながらまぜる あ呆「本讀を追ひなくしちやアいけねえぜ。」左「ぜんてえ狸の囃子といふなア近頃の時花言葉で、むかしからいふ通り、腹鼓といふがほんたうだ。桶の底を叩くやうな音をさせて、直そばで音がするから出て見ると、遠く聞えるから内へ這入ると、また頭の上でたゝく様にきこえるもんだが、近頃は鼓を止して、太鼓になつたうちが洒落て居るぢやアねえか。」左「そりやアどうでもいいから、其の後はどうするのだ。」がん「その先は菜切庖丁長刀だらう。」あ呆「そこで遠く近く

の囃子か入用だから、桶の底のやうに、大小の鼓ばかり一所、小太鼓ばかりが一所、三味線入の囃子と、清元連中の淨瑠璃と誂へて置いて、そこで狸が一疋入用だ。連中から頼みてえ はなづらの尖つたしやくんだ面だから、さしづめ呑公、見廻した所で外にはねえ。御苦勞ながら狸をやつて下つし。」出「狸の役當で面不足をいふものは、是ればつかりはあるめえぜ。」乎「お互に友達づくの事だから、入用の面なら遠慮なしに使ふがいいけれども、こんな色の白い目鼻立のいい狸ぢやア、見物がうけめえぜ。」乎「色の白いのは面白狸といふ事が有るからよからうが、小鼻が横にひらいて、脣が小夜著の袖口といふもんだから、口のとがつた所と、額の出てしやくんだのが屑だ。かなつぼ眼の狸といふがあるものか、猿なら大丈夫だ。アハヽヽヽヽ」

五編中之卷（江戸與鳳亭枝成戲作）

再遊、蓮池亭の佳景といつぱ、不忍辨財天の御社に向ひ、三代の春主といへども、池中の芬陀利花涼風をもよほし、六々六藏種類を集へて岸にうかべる。實に仙境といへども及ぶ無かりぬべし。爰に昨夜より存の隊れ、巳の時頃に目をさまし、けつぷ／＼と湯技をつかひ、半丁の料理屋より、百苑の割合に、應鍋のあなごに移り、五合徳利も四ッ五ッ、ごろ／＼やらと取れたるに、はや鮮魚屋も來る時分。ト早時に昨夜もいふ通り、存七先生は狸の拵へで生酔の面、紋羽の柿色の着附け、腹を白く見せて、誂への小道具稲村こその間に見合はせ出して、腹鼓を打つ、ぼんぼこ何處の月夜でも、船からはほつきりとは見えめえから、燒酎火で差出しを兼ねて、よし／＼と、別段よろしくもなからうが、ア聞きねエ。下座一組は、堤の茶屋の脇の下で囃子を遠くきかせ、一組は水神の森の内で近く、此のかね合ひはよろしくす。彼の燒酎火を消すなり、ゆつたりにして、兩方の下座が一所になると、狸は黒幕で稲村の陰へ入る。ヨシカ。」傘「よく能くのみこんだ。」トいふ。ここで稲村の陰から鼓がお半の拵へで、十六七の美しい娘よ。鬘は羽二重で、紫縮緬松に蔦の裾模様の振袖よ。」傘「ヲツト十六七ト來、しいとの二所は、犬の糞の無い所へそつと置いておくれ。もし見物が美しくない、疱瘡跡面なぞあつたら

い男だと思つた日にやア、跡へも先へも參り難しだ。涼みを止めて最明寺雪の段と爲さアなるめえ。」あほ「何樣も本讀中交ぜられるには困る、筋を聞いて仕舞ひな。そこで左次さんが差詰め長右衛門よ、左與「おおいらを背負つて出るノ。眼公の二絃で月の友、桂の川浪をまるで一段、呑公たのみやす。」賴みなら彈きもする、語りもしようが、茶番をする所が隅田川で、狸が腹鼓を打つて仕舞ひノ、黒幕の内へ引込むと、お半長右衛門とは何の筋だか、何が落ちになるのか、あんまり分らねえぢやアねえか。」あほ「イヤおめへ達は兎角、おれが上作を出すと嫉むが、呑七が間の拔けた狸を見せて、おいらと左次さんが美しいお半と長右衛門を見せれば、桂川が隅田川でも何にもかまふ事アねエ、船の見物にドット言はせせへすりやアいいぢやアねえか。」呑「なんぼ友達づくだといつても、呑七が間の拔けたまで聞けば澤山から駒込、王子板橋、それから先は忘れたが、上州信州善光寺の本尊が、本多義光におんぶした道行だとか何とか言つて、見物が南無阿彌陀佛と褒めるだらう。」呑「呑公がうぎに交ぜるの、ヤンヤと言はせへすりやアいいぢやねえか。」呑「やんやと言へば何にも言はねえが、分らねえと思はれたからは、八人の恥になる事ゆゑのことヨ。」左與「左樣おめへ達のやうに下手な按摩が肩を揉むやうに、おつうひねられちやア可笑しくねえ。一體今度の茶番はおれが番でおれが作者なり、中二階こそすれ座頭の事だから、親方とか太夫さんとかいつて、妙でござります、いづれよろしくと

言ひさうな所だ。」与「安波さん、左様手前勝が強くッては仕方がねえが、筋がわからねえから、わからねえと言つたのさ。」あは「おめへ左様いふけれども、今まで皆が随分面白い趣向をしたけれど、いつでもやんやと仕舞まで見せた事はなからう。斯ういふちやアをかしいが、わつちが茶番ばつかりは憚りながら始終やんやとやつて見せよう。細工は流々仕上げを御覧じろ。」与「左様さ、お前の番だから、誰だつて役不足を言ふといふ譯はねえが、よく積つても見ねえ、世間へぱつと向島で、斯ういふ事があるとかなんとか噂をさせて、ぱつとした所で、茶番が放屁の中落ちときては、種なし三番叟、かいた恥を外へはやられ申さずだ。」あは「からうぎと腐すな、いいわえよしねえ、筋がわからうがわかるめえが、其所ア安婆さん江戸ッ子だ、時に橋の鯱を横目に白眼んで、神田上水を産湯につかつた男だ、地鐵が違はア。皆が不承知ならおれ獨りで爲るわエ、へちむくりめら。」与「コウ安婆さん、是れまで年來八笑人に限つては、栄洒落こそ言ひちらせ、つひに一度も喧嘩口論といふ不風流はなしだ。能くつても悪くつても、手前々々の樂しみ、代り交代にする茶番だから、附合はれねえといふほどの事もあるめえから、そんなに顔を赤め合はずとも、相談づくにするがよからう。先づ今日は是れぎりにして、おめへの杯を順にまはして、一ッぺ込て中直りと爲なせえ。いづれ此の茶番は月夜でなくつちやア可笑しくねえから、八月十五日と極めやせう。雨天日送りで、翌日ッからてんでに、湯

星影結新水茶屋なんぞへ流言が肝心だ。」安「さう左次さんの様にいはれちやア、私が何か腹を立つて、野暮を言つた様で今さら恥かしい譯だ。中直りにちよつとつひり、潮と鱚の物を私が奢らう。」卒「そいつアありがたい。山の鳶鳥、つゝき合つて喰ひあふ中だ、跡は根も葉も骨も残るめエ。」卒「皆さん一つゞめて〆シヤン〳〵〳〵〳〵。」左「そんなら安波さん、翌日書抜を渡しねヱ、稽古もいるめえ。十五日の晩かた柳橋の若竹で出合ふとしよう。しかし諸は道具の稲村や鳴物があるから、三挺でもいけめエ、荷足でなくちやアなるめえ。よしか衣裳小切小道具一切呑みこんだの、忘れられていけねえのは梅川の肴だぜ。夜が短いから歸りは朝だが、いつでも朝が早いとひもじいめを見るぜ。」その内あつらへの肴も来り、いよ〳〵盛潮となりて其の日もたそがれごろ、そう〳〵おのれ〳〵が宿所にかへり、暗譜の次第をつぶやくやら、跡の肴でおさらひを爲しなど、互ひ〳〵そしり合ひけり。程なく八月十五日今年は残暑はげしき故、暮六つかぎりほつちほい、寄り集まりたる八笑人、柳橋なる若竹にて、かねて雇ひし荷足船、割子竹筒の用意もとゝのひ、時分はよしと漕ぎ出せり。卒「ときに安波さん、此のあひだは皆が大とろんこで、お互に大きな聲も爲たが、今夜は兩國川の魚と水、いつも八笑人といへば、駄洒落許り言つてゐる、あんまり風流氣がねえから、今夜は翌の朝まで善し惡しはともかくも、洒落たもの一洒落、朝飯の五色茶漬、一人前づゝと極めよう。船中洒落禁制で、あまり慰みなしにもいけねエ。拳の代りに狐といふ所だが、それも殺風景だから、膝まはしの歌仙が打つてつけだ。おれ

どうも不承知といふ顔もあるから、只四季懸雑去り嫌ひなしに、川柳なら十六句、一字抜も同様に通る尻どりに並べつこは何様だらう。」卒「そいつあ面白唐草、可楽、夢楽は噺の上手、手木の手試しなりつ。」左次「ナツトいふ豆腐で二人前。先づそれはさておき、今いつた川柳の五句は、昔から人口に膾炙したる、孝行に賣られ不孝に請出されといふ句に、わつちが脇を即詠す。下女も口ぐせにさう言ます。」卒「妙々、わつちが第三はやつツつけやせう。」しばらく考へて「ふウ縫へるかも針の箆なり。」左次「こいつァ妙々。愛でついと轉じて何様だね。」卒「候盗人と組打し、」卒「呑む覺えのある事だす。」眼「今日は大平の蓋で酒を呑み。」左次「何か居候がお呼び出しで、青物町の角で大屋さへにもはゞからず呑んだといふ事か。」卒「夷講さ、ぬ隠宅も数萬兩」左次「大平の蓋を夷講と見たしよ。」卒「こいつァむづが厩しもの要いし。」左次「ソレおい人さまし。」卒「植木屋の居残り天ぷら八ッあたりし。」左次「こいつァわからねえ。ハヽア藥研堀の角だな。天浮八ッあたりとは、十一日に歸つて直賣が爲たといふ心持だな。」左「左次さん、ついでに足の筋も見ておくれ。」卒「御腰元の扁目には大欠。」左次「細襄弾きと見たナ。」閑武「何様もおれにやァ洒落より外は出来ねえ。百や二百は出しても仕方がねえ、先刻から胸がむか/\すらア。」出目「せつなかァごすらうか。」閑武「左様さ、どうもソレへ繪圖役人附。」眼「役人附しそのみ唐がらし。」左次「唐がらしものは昔にもきけ。」のろ「きけやきけ/\此の車。」出目「車のじや

れとは違ふぞよ」「オットよし／＼、もう朝飯は澤山だ。」かゝる酒落をいひちらし、田川水神の森に著きけれバ、「野呂さんおめへは道具方だから、今の内稲村は程よきところへ居るおきだ。所の者が来ても、稲村だけ何とも言ふめエ。今に見物が大勢になると妨げだ。」「オットと承知々々、あれ／＼かいぐり／＼とゝのふ」「時に堤の方から此の作道を見物が来た日にやア楽屋が見えるから、二所三所縄をはつて置き、此の所作場道通るべからずと書いて置くはどうだらう。」「是れ則ち、天の時を量り、地の利を知るといふ、名將の謀だらう。士卒に言ひ付け早速、といつたら又、此間の様に誰が士卒だとか、何とかいふだらう、仕かたがねえ、おれが行かう。」（ト、竹切を拾ひ縄を張り紙札をさげて人留めをしに立ち帰り）「ときにもう日が暮れたから、見物が来さうなものだ。」「来るとも／＼、先刻から咄さうと思つて居たが、酒落禁制と歌仙とやらで、雁々二ッ日跡のが先になつた。」「オットト枕言葉なしに言ひねエ。」「なにさ、此の噂をしようと思つて、獨り大師河原へ往きやした。道々湯に入る事おほそ十遍、その度々湯屋の二階の菓子代と、おたりめへの湯錢茶代、ならし五十づゝ、髪を結つた事五度、水茶屋と見れば休んだこと數知らず、持ちめへのえて酒のは、兩國の四方で紅葉おろしで一よ、親父橋がいゝで又一よ、京橋まで辛抱して角でつし身にから汁だけ一ッよ、大門で蕎麥で一よ、高輪であなごは少し奢りだと思ひながら、濱の蔵貴張でどぢやう汁で一よ、觀音前に蝦蛄が見えたから、又一よ、羽根田へまはり

て詣でえた一よ、飯も喰はずに大師へ參詣つた時分はもう七ッ半、それから仁田屋へ泊つて、歸りも同斷よ」「ヱヽそいつァ御苦勞だつけ」「しかし湯屋の二階や茶屋なんぞは毛もだが、今おめへの處へたーない所は、何れも下々の者の這入る所だから、狸の囃子でもよいといふ風流雅達はあるめえ。左樣いひなさるけれども、一體流言といふものは、軍中禁虚の徒で、何所といふ事ひなくしやべつて歩行くい事一よ。其の中にをかしかつたのは高輪の茶屋で、何所の侍か知らねえが、しかつべらしい帯刀が腰をかけて居るし、女の大師歸りが五六人ゐるゐるふ、得たりかしことしやべりちらして、當月十五日雨天日送りに、向島水神の森に、狸の囃子があると噂を仕出した所が、女連も茶屋の婆さんも隨分溜けやしたが、彼の侍の言ふには、狸のはやしをするといふ事を、誰が云ひ出した事だかと尋ねられ、尋常の者なら忽ち赤面といふ處を、エヘン〳〵と咳拂ひをして、左樣で、私共が近所に居た法印、今は鼠山へ往つて居やんすが、そこの幼稚兒に狸が乘りうつて、當八月十五日の夜、向島水神の森において、囃子興行仕り候としやべつたのさ。すると此の侍が笑ひ出して、イヤ馬鹿馬鹿しいと言ふから、もしあなた左樣おつしやりますが、けれども、池馬鹿々々しいとは、どういふ譯でござります、池なら鯉、鮒、鼈、鰻、鯰、泥鰌なんぞは居ませうが、馬や鹿の居る所ではござりますめえ。又法印の子に狸が乘りうつるめえものでも御座りません。昔から子どもが唄ひます唄に、

狸にござる法印さん、といふ急度した證據がござりますといつたら、この侍が、まことに閉口々々といつて歸つたがをかしかつた。」のろ「オヤ圖武さん味くやつたッけの。おいらァ又王子の方へ出かけて、十條で瀧をあびて居る所で、今の噂をはじめると、まじめらしい和尚が裸で涼みながら、夫れは愚僧も見物に參らう、もつとも拙僧も分福茶釜と申すを所持致して居るが、そこ許狸にゆかりのお方とあれば、どうぞ其の茶釜を拂ひ度いものでござる、何卒狸方へお咄しくださる樣にと、眞顔でいふから、かねて名高い茶釜ゆゑ、こいつァ金まうけと思つたゆゑ、もし此度御持參かと聞いたところが、イヤ持つてはまゐらぬが、御覽なされたくば、愚僧と御一處に今晩お出でなされといふ故、モシ分福茶釜は上州茂林寺といふ寺にあるといふ事は、誰もよく存じて居る事、それに一寸見に來いとは天狗ではあるまいし、左樣無造作往かれもしさうもないものと言つたら、イヤ愚僧はもつと遠い所でござる。シテ何方でござりますと尋ねたら、狸の國象頭山でござると、一ぱいかつがれた。」ア、ハ「コイツァいいコイツァいい。私やァ山谷の湯屋の二階でしやべくつて居ると、側に居た人が、夫れは近頃面白い、私も連中を誘引ひ合はせて參らうといつて歸つたが、跡で何所の人だと聞いたら、十返舍一九先生ださうよ。何樣か先生、この茶番の趣向でも盜みはせまいかと案じられる。」左次「コイツァ餘程の手前勘だ。」斯くて此の兩日、八人の面々思ひ／＼に流言をなし置きける故、物見高きは都會

の習ひ、あるひは屋根船、猪牙二挺、中にも目立ちし汁こぼし一艘、大浦に荷足をつれ、森の此方にもやひをすれば、其の外岸の杭頭につなぎ棹に止め、其の員凡そ二十艘も出たる見物なり今や囃子のはじまるかと、勧進能を見るごとく、面白くないもかねて承知なれども、何をがな名目にて遊ばんもいとの風流婦達、碁、将棋、雙六はさらなり、長屋の娘を雇ひ来て、三味線ひかせ、拳酒に理をぬかし、屋根ある船も屋根なきも、中々をかしき遊びなり。かかる賑ふ中なれば、およその古狸も指をくはへて引込む所を、物におそれぬ八笑人、一人々々に揚り上り、呑七、国武、出目、眼七の四人は土手にて相図を待ち、左次、安波、卒八、野呂は稲村の陰にひそみ、時分をうかゞひ焼酎火、それを相図に遠音のはやし、あるひは近くも囃し立て、稲村の陰よりは、呑七が狸をこしらへ、腹鼓を打ち居る様、定らしくは見えねども、狸の趣なか〱にをかしく、船中しばし興を催す折から、ふつと消えたる焼酎火、夫れをきつかけにて、土手の四人もはしり来れば、稲村ひらけてあまたの蠟燭燈しつらねて其の中に、お半を背に長右衛門、衣裳かつらは左許りに見にくきほどにもあらねども、いやみたつぷり、下座には鳴物打ち鳴らし、三味線二挺に清元の、鹽辛聲も何とやら、今まで呑みしほる酔ひも、興さへさめてつぶやく折から、いつの程にや見物の、中より工み拵へけん、松より松に仕懸けたる雨車にてばら〱と、降り出させたる血の雨の、先に立ちたるお半長右衛門、二人

が衣裳かつらまで、眞赤くなしたる其の臭氣、鮪のわたの腐りたる、たれかあらぬか知らねども、鼻を貫き堪へかぬれば、自然と雨に燈火消え、雲間の月も薄雲に、半ばかくれて程よき頃はひ、木陰をみし〳〵のそり〳〵と、歩み出で來る誠の狸、大ぎん玉を引きずり〳〵、のツさ〳〵と出で來れば、血の雨にて魂を挫がれ、途方に暮れし八笑人、「そりやこそ眞の狸が出て、我々をとり喰らふぞよ。逃げよ〳〵。」といふ程こそあれ、四角八方へ散々に亂れ立ち、乘り來し船を探せども、何地へ行きけん行方なく、爲方なくて蘆の中、小溝なんどに這ひかゞみ、かげを隱してためらふ内、見物の船は興をさまし、遙かに隔てし事なれば、一伍一什のわからぬゆゑ、つぶやき〳〵乘り出せり。その中に只一艘の汁こぼしのみ、天滿とともにいまだもやひを解かざりけり。かかる折から堤の方より、隅田村洲崎村と印をうつたる提灯あまたともし連れたる、若い衆大勢押し來り、其所よ此所よと八笑人をたなぐりもとめ、かねて用意の細引にて、一人々々にくゝる〳〵巻、莊屋が許へ連れ行かんと、ひしめき騒ぐ折からに、汁こぼしの船の中より、「暫く〳〵。」と聲も艶しき鶯の、初音にひとしき女の聲々。そも此所に立ち出づる人々は、何等の方にて在するや、次の巻を見て知るべし。

五編下之卷

船の中より出でたるは四十二三の奥女中、大川端通とやいふべき御局役、髪はかたはづし御殿出来のしどけなき衣裳にて、縞数寄屋のかたびらに、鼠繻珍の金絲にて、立浪を縫はせたる帯、緋狭子の開より銀ぐさりのさがりたる、まだ枯れきらぬ老木の花、見所のある姿にて、今一人は三十位、いはねどしるき中老役、紅入の大縞越後、金銀入のわた天の帯、これも緋狭子を胸の前につき出し、其の外御末、御仲居、御はした召しつれ、下部二人に提灯もたせ、老家臣の胡麻鹽頭、上布のかたびら黒絽の羽織、鮫鞘の細い短い大小をたばさみ、悠々然と上陸なし、これ今日姫君さま淺草寺御參詣の御歸りがけ、是れなる水神の森にて蟲ききの御遊、しかるに大勢人數をあつめ、深更に及ぶまで狸の囃子となぞらへ、鳴物をならし物さわがしく致したる段、爰を何處と心得候や、當所は我が君御由緒の乘船場、殊に御先祖杢阿彌さまの御墓の前、言語に絶えたるうつけのものども、扨また皆の者に繩を打つたるは、當所の者どもなるべし、莊屋方へ引き行くはさる事なれども、折よくわれ〳〵居合はせたれば、そのまゝ繩付にて請取り、館へ引き行くべし。皆のもの左樣心得てよからう。」所いゐの一ハア畏まりましてござります。」左次「どなたさまかぞんじませんが、私どもの不調法、所がらも辨へ

ませず、茶番を致しまして御座りまする段、恐れ入りましてござりまする。何卒お慈悲にお許しなされて下されまし、皆々御免をお願ひ申しな。」アバ「ハイ〳〵寔に恐れ入りましてござります。どうぞ御免遊ばして下されまし。一體私は茶番は嫌ひでござりますが、皆がよつてたかつて勸めました故、據なく致しまして御座ります。どうぞ御免遊ばして下されまし。」呑「ハイあの者が申すは、みんな僞りで御座います、今日の茶番の作者なり、座頭なり、親方とか、太夫さんとか云はれる身分の者でござります。罪はいつち重いのでござります。顔が正銘、阿波太郎と申すものでございます。」卒「もう斯樣になりましては是非におよびませんが、先刻出ました狸に喰はれて仕舞ひましたら、今の思ひはござりますまいと存じますれば、寔に悲しうござります。」中老尾上あまりに見かね、尾「まうしお局さま、此のものどもを見ますれば、さのみ惡意を工みまする族とも見えませず、今日は姫君樣まれの御遊山にもござりますれば、纒目をお許しあそばされては如何でござりませう。」つぼね「コレハコレハ尾上どのの御挨拶、しかしながら見ました所が、いづれを見ても山家の猿、お身替りになりさうなは一人も見えませぬ。以後の見せしめ矢張御館へ引きまして、お表へさし出しますがよろしうござりませう。」尾「左樣ではござりますれど、

堪忍のなる堪忍が堪忍かならぬ堪忍するが堪忍

と申す歌もござりますれば、彼の者どもへ難題を申し付けまして、それが出来いたさずば、御館へ引き立て行きませう。「[illegible]「コレハ／＼お中老の御發明、なか／＼此の儀はあつてないも同然、何様なりと思しめし次第。[illegible]難題を申すは[illegible]。「左様でござります。用意の御銚子もあり、お肴もある事なれば、此の者どもに大きなる器に[illegible]呑ませ、手より手にわたし、少しも下に置くときは、館へ引き立てませう。皆々酌人には、最前出でたる、あのふぶくれの大きなる漢子、是れ／＼[illegible]トあれければ「ハッ」ト出で来る以前の狸、大ぜん玉を引きずり／＼、身には[illegible]をまとひながら、何ぞ御用でござりますか「[illegible]いかにも其のはう、此の八人が酒宴の酌人相手を申し付ける。汝が[illegible]を嫌ひ、[illegible]中にもあらば、早速召取り[illegible]へ引かれ。所の者は、此の者どもが酒宴の[illegible]まで、出口なきやうにしかため、蟻の這ひ出る所もなき様、用心きびしく守つておかう。お帰りまする先の御指へ[illegible]御立ちあそばされませう。大勢の交つて奥家老[illegible]中老尾上ほどの方が格別の無悲、只今御酒お肴下されたる程に、有り難く頂戴いたせ。尾籠の振舞あるときは、誰かれの用捨はないぞ。此の寺所の者は出口をまもり、壇の中よりは大なるふたに井、大鉢三ッ[illegible]八人のその内にも、左次は分別有る顔に、[illegible]御前達や、何と思ふか、先刻血の雨が降つて生膽をとられて、此の狸さんが出たもんだから、いよ／＼びつくりさ。夫れも今見れば此の人は、御蔵前へ出てゐる大隠居よ。左様して見

れば此の奴等の内の人違か、一ツ穴の狢で、一杯喰つたのだらうぜ」 ○二「その今時分に、あそこに居たを
ういふ訳でおいらをたましたのだ」 ○八「何か存じませんが、昨日の夕方野猪を食ひにきたお
かたが二人お出でなさいまして、手前に用があるから、自己達のいふ通りになれとおつしやつて、無な
ンで紙につゝんで下されたのを、一円の拝ぎぬ一晩にあるといふもの故、何も存じませぬけれども
が、一旦は狸に化されはせぬかと安心いたしませんで、彼の紙をあけて見ましてどうしてと思ひまして
すんだと、先程その後で見ましたが、先刻のと存じて居ります」 ○三「情ねえ、なさけねえ
捨て、又奴等の内からしぶを喰つて迷はされては、ちよつくらねえ」 ○一「ちかくあいつが黒ふに目、
此の奴等とても合點が行ねへ。御影石で御迷山に、此のまゝ丸めて、又には何事だらう、しかし手に連ひまして、こ
一緒に書いてある地で御剃にいやすしめえが、そこまでしてしまつて者は馬の糞を誰に、花見を
たやうに見えるし、天井の内は鞍馬の味噌、此奴めは六郎師匠大好物だと聞いてゐる、
何時も喰つてたいやアねえか」 ○一「それも存じた事を喰つたのじやねえと文明師匠で、しやくとぶ」
いたの奄前の殿が、毒口をして言ふなよ」 ○一「それいつまでも腹立つ」 ○一「いやいやそれには及びませんで、
此後ではお先へ一寸手を付てはいで花が細物、まアこいつは伸士消しいたく…それは在りけりて下さいます。
左様ならば、土左衛門へ、さうさうと、事は論さして、せめて杯流しでもと思ひますが、其一時は座のまゝ、

お前の手は苔がはえてるるが、いつ湯へ這入んなすつた。」上「ハイ五年此の方湯に這入つた事はござりません。それに隠處がかゆいので掻きますから、爪の間はみんな金玉の油でござります。」左「トーダッブ、何様もたまらねえ。それを聞いてまだどうも化されてゐる様な心持だから呑みたくねえ。」圖武「呑まねえ時にやァまた縄目、どう爲たらよからう。」金「しかし呑ねえ、一杯やれか。」と、ゲツト呑みほし、「こいつァいい酒だ。圖武さんさう。」圖武「ハイ。」ニッう「左次さんが能い酒だと言ひなすつたけれど、よもやと思つたら、こんないい酒はおらァ生まれてから今まで呑んだ事ァねェ。」金「ほんたうか、早くさしねエ。」八「夫れぢやァ肴もよからう、その油揚を一つやつて見よう。ウメイ／＼、此奴ァ油尾糝薯へ鶏卵を入れて、きくらげ、蓮根、牛房を交ぜたのを揚げたのだ。何様もうまい／＼。」圖武「それぢやァそつちの蚯蚓も喰へるだらう。」金「ドレ／＼、こいつもうめいの何のといふどころぢやァねえ、是れは吉原の土手の向うの裏のやうな所の蕎麥屋で賣る、鰯蕎麥といふのを饂飩で打つのだらう、丸で鯛を喰ふやうだ。うめエ／＼／＼。」呑太「ひたし物は何だらう、三葉でなし菜でなし何だらう。山葵がきいてるるぜ。」左次「是りやァ薊よ。こいつァみんな此間の趣向を畠山様の奥女中が聞いて、おいら達のいい男振を見物がてら、すつぱりかつぎに來たのだらう。金公の酌は少しむさいが、酒がいいに肴がいいときてるるから、猪口を離すがをしい。」金「モシ左次さん、先刻から一件で膽が

つぶれて仕舞つたから、此の八人が酒落といつちやア一ツも出ねえ、大きに酔ひもまはつて来たし、ちつと酒落は何様だらう。」出目「ヨカ〳〵、さつき出た女中衆が衣類は、数寄屋に越後、私やア膽がつぶれて、きんちゞみはどうだらう。」呑乃「長え前書だナア、ふんどしの脇からすきやきんちゞみは味からう。」目出「おめへの川柳とかけて鐚銭ととく、心は悪銭りうだ。」呑太「一文で大金を見る御蔵前はどうだ。」卒「何様も猪口のまはりの遅いにはこまる。オヤ〳〵蚯蚓はもうおつもりか。」アバ「金公が爰をせんどと喰ふからヨ。」呑次「こいつア併し尤もサノ。」金「何様いふ譯か御前様方と御一所に御酒を頂戴いたすとは、寔に冥加至極。」卒「冥加至極、極樂の追分といふはこんな所だらう。」眼「ナビナゼ。」卒「苦しみを忘れたり、嬉しさを忘れたりするからヨ。」出目「サアサ、おいらア先刻縛られた時にやア、實に悲しかつた。」アバ「出目公は實に泣いたツけノ。」出目「わしや泣くまいと思へども、何様も涙が合點せぬ。」卒「今こそ一口出るけれど、先刻は御同然に。」呑「そりやア誰でもヨ。」斯くて手より手に廻す大杯の事なれば、忽ち酔ひて金玉を一番とし、宵より勞れし八笑人、はや壯ふつにも近ければ、一人こけ二人こけ、八人とも正體なく、ごろり〳〵と倒れ臥す。寐息を伺ひ所の若者、取りちらしたる杯盤をとり片付け、船の内へ持ち運び、何か代りにとりちらす、品はそれとも白川夜船、鼾は車をひくが如く、時分はよしと皆々船に乗り移り、洲のある方へ漕ぎて行き、夜綱を引かせ

て遊んで居れり。秋の夜のならひにて、はや東の方にたな引く横雲、美人の眼ぶち彷彿と、ほんのり赤くなりければ、烏の一つ二つ森を放れて、かア〳〵と鳴きわたれども、酔ひしれし八笑人は高鼾、浅草寺の鐘の音も左りながら、これ左次郎目をさまし、あたりを眺めてびつくり仰天「ヤア〳〵皆が起きねへか、大変だ〳〵。コレサ起きねへか」七人諸共目をこすりながら、ヲヤ〳〵大変〳〵と皆々さわぎ立ち、ヤレ〳〵〳〵、吐逆せしもの一人もなく、大きな目玉をコロ〳〵、戻す片手に懐の額を探りて「卒爾ながら旦那様方、わたくしは是を差上げますれば、お先へ参じます。」定に失敬をいたしまして御座ります、神ゆゑの是非に此とも捨て、ぶつ〳〵として立ち帰る。「一時にいふ〳〵、狸に化かされたのうこ、あなたに味いつた」「浅草だと思つたは小便田舗か、ヱ、殿たちのはりまで喰ひ荒しあれのは馬の糞だ、此所には畔道がない道でもあるか何様したらよからう、腹の内が引つくり返るやうだ。又出るぜ、ギユ〳〵〳〵。」眼公「ヲヽつらおいらの背中をさすつてくんねエ、アヽせつねへ。さりとて爰にいつまでも居たら、又所の者にやかましくいはれるだらう。夜前は若竹の船を探したが居なんだが、今あすこにかゝつて居るぜ。船頭をおこして帰らう。阿婆さん呼んで来んなせへ」〇「おらア思ひ出すと込み上げて、どうも大きな声が出ては出ねえ、眼公呼んでくんな。」眼「ヲイ若竹の船やアイ、若竹やアイ。」ト呼びけるゆゑ、漸と目をさ

ましい、お歸んなさるのをみな/\おゆびを掛けて置きやしたから此方へお出でなせエ」皆々色は青菜のごとく、中には歩行も出來兼ねて、間違ひに違ひもあらば、四邊に落ちし竹をひろひ、杖にすがりて歩行くもあり、鳴物小道具すべて船頭をたのみ運びもらひ、少しも早く漕ぎ出して、尻を喰はぬが專一と、船頭に人に氣味の悪いはすれば、辛うじて半町ばかり乘り出し、顔を洗ひ嗽ひをして、やう/\人心地はつきたれども、腹合甚だあしかりけれ、船中ひつそとしてありけるが、「時に雅公、皮肉おいら達が所の者にしぼられた時、逃け込まうと思つて、もやつてあつた所へ行くと船はなし、それゆゑ一人ものこらず鼻目の恥、おめへ達や何所へ行つたのだ」「ハイわつちが傍に付けてゐた汁こぼしは、神田川の船で、船頭はわつちが友達さ。こいらの船に來て、少しわけがあるから、此の船を少との間洲へかけて置いて呉れと頼んでやんした」勿論お辭儀もさせるし酒も吞ませるから、此の汁こぼしを行くまで待つて居ろと言ひやすから、それゆゑ洲につけて居やした」「ナニサウカ、あの船は眞田様の御隱居様の納涼船だといふ事だが、さうか」「大違ひこれ/\おきよ」「これ/\おきよとは狸ではなくつて、狐だと」「狐だかなんだか知りやせんが、暫くすると船を洲へ付けて、別に屋根船が來て夜網を」「それでは奥女中は居たらう」「それも大違ひさ」「そんならそして何者が乗つて居たえ」「友公、何とかいつたつけなア、色の白い丸顔な人が大將よ、ソレ/\十返舍ヨ。それに十

手とか實體とかいふ人だね。」眼「偽永とかいふ人も出たつけ。それに町の人達が大勢女形のかつらをかけて居るもありやした。衣裳をぬいで丸裸でゐた衆もありやした。」卒「そしておいら達の事をなんざと噂でもしたか。」眼「偽た所ではござりやせん。」卒「なんと言つたネ。」眼「左様さ、お前さん方の前では言ひ憎い。」卒「何の遠慮に無沙汰だ、有體に言ひねえ。」出目「とんだ所へ無沙汰が出たノ。」眼「丸顔な人かいふにやァ、世の中にとんちきも澤山あるもんだ、金玉男の正體が知れた日にやァ、そこへ奥女中の拵へで出たつて、性が男だから氣が附きさうなもんだト言ひやした。」眼「偽永さんとこやらも、岩藤のせりふはしに、御先祖杏阿彌樣の御墓の前とはあんまり人もなげの言ひ様だつけ、鏡山と寺子屋と梅の由兵衛も交つてゐる出たらめの長文句故しどろもどろだつけ、先がよく／＼とちつて居ればこそ味くいつたものの、危い藝だつけト言ひやした。」卒「夫れぢやァ所の若い衆とおもつた奴等さ。」眼「さん谷吉原人達サ。」のろ「あいつらも何ぞと言ひやしたか。」眼「上手とか笠亭とかいふ人が、一體瀧亭が八笑人は實に滑稽たつぷりだが、一筆庵がそれを眞似てよく書きやした。をしいかな遂行せられて、板元が上の巻ばかり彫りかけて仕方がねえから、奥山の黒い男に書き足しをたのんださうさ、元より作者がとんちきだから、前後ふそろひはもつともの事サ。」左次「左様か、何ら意趣も遺恨もなささうなものを、なぜこんなめにあはせたらう。是れからすぐに追打ちに汁こぼし

へ乗り込まうか。」呑「それもいいが、先も大勢乗つてゐるから、喧嘩にでもなつちアをかしくねえから、一先帰りやせう。」呑「そりよう聞いては何もゲッフウと戻す程の事もなかつた。思へば悔しい、喰ひものの意趣はいつまでも忘れるこつちやアねえ。おほえてけつかれ戯作者ども。」唄「あんまり力身なさんな。今流行の作者達がお揃ひで書いた狂言だものだ、素人のこちとらが及ばぬ事だ。」左次「しかしいめえましいなア、どうも腹の内が何にか當つた様な心もちだ。一首うかんだ。

戯作者の穴はひとつの古狸書きひろげたるきん玉の春。」

斯く打興じつゝ船は淺みどりなる柳橋、香やはかくるゝと詠みたる梅川の河岸にぞ著きにける。

妙竹林話

七偏人

梅亭金鵞

妙竹林話 七偏人初編序

唐山晋の七賢人は、豹脚の多き所とも、しらずや知らずや酔ひ蕩け、竹の林にしやれ竭して、阮咸などは三線の、元祖と呼ばれし䲶亀、夫れすら今に名は遺る。兎角浮世はをかしみの、笑ふ門には七福や、春の始めの寶船、七種の粥には命を延ばし、天神七代北斗の七堂、七堂伽藍に七観音、始皇の七馬鳳の七徳、何れも七の数をもて、愛でたきものと世にしらる。夫れから思ひつくふの上、こゝに彰はす七偏人は、全部合はせて七編揃ひ、七むつかしきことをば言はず、作者が得意の滑稽笑譚、看る人ごとにふきだすとは、富貴を出すの詞にかよひて、當り外さぬ妙安新奇、販元大喜の喜の字をば、俗に七々の賀と、いはふも矢張七の数、この戯書を鐫るときは、七珍萬寶集まる前兆、六十餘州の看官、みな御らうじて可笑しいと、御評判の高わらひを、被るならば忽ちに、一夜の東風南枝にわたり、て、ひと花ひらく梅亭の、名は高砂の松が枝に、巣をくふ田鶴も久方の、雲居はるかに羽を展して、聲も八千代の壽や、盡きせぬ春の初笑ひ、社中挙つて金鵞さん、おめでたう厶りますとしかいふ。

丁巳青陽　　松亭辻叟題

妙竹林話 七偏人

東都 梅亭金鵞編次

初編 巻之上

呉竹の代の人並に松たてゝ破れ障子を春は来にけり

實にや千秋萬々歳、まつちやらこのえいやつと、春立ちかへる朝には、軒端にぎはふ七五三飾、ゆうべは鬼の提灯で、もつた小僧の長松が、親の名で来る年の禮、大々神樂、猿廻し、三絃ならして鳥追が、まゐる恵方の萬歳や、一トごに二タごに三な四ッて、遣羽子するやら手鞠唄、紙鳶のうなりも自然、長閑をさそふ往来の、表通りは五月蠅いと、すこし避けたる見識も、江湖上は風の柳橋、粹人の子の律儀より、老子莊子の新道こそ、住居ひよけれといふ氣にて、萬事茶にした家造りも、有徳の人の若隠居、遊ぶを日々の商賣にて、他に事なき能樂人、女房があつては俗ばると、おつなところへ風流がり、寡ぐらしの喜次郎が、火鉢のふちへよりかゝり、今年の茶番の初狂言、不動明王を工藤左衛門に見立て、制吒迦童子を八幡の三郎、矜羯羅童子を近江の小藤太、あすこの臺詞を此様つけて、此

處の身振をあゝやつてト、一人監へ居るところへ、同氣求むる茶目吉虚呂松、裏口よりしてのつそりト案内もなく入り来り、茶め「イヤお目出たう御座いッ。」虚呂「イヤお目出トー御座いッ。」茶め「オヤ何様した、なぜそんねえに塞いでゐるのだ。」虚呂「顋をふところへ仕舞ひこんで、頰ッ端へお手てを突つかい棒の、老木の松といふ身は宜いが、その肘が火鉢の縁をちよいと外れると、毛の生えてゐる薬罐と、茶の沸いてゐる土瓶と鉢合はせをするぜ。」茶め「なにか二人が来る早々、薬罐ましい事をいふ様だけれど、その肘がはづれて土瓶とぞつちに倒れるひにやア、まて火鉢はねえ。居眠なら晩に寝てからの仕事として、春は春らしく些と陽氣にやんねえナ。」喜次「ヘン元日や晴れて雀のものがたりせつ無智短才のやからは、一夜明けるか明けねえに、陽氣がつて居ようけれど、まだ初春の内は、上べを陰にして腹へ陽を蓄へこむ時節だ。自己なんぞの爲ることは、天地の氣候と同體して往くところが妙といふのだ。」茶め「上が陰で中が陽なら、ざつと陰症の傷寒だから、熱がうきそびれると氣がたじれるぜ。」トいふとき、またも入り来るなまけ仲間の下太郎が、明けし障子の間から首ばかりつき出し、へた「彌うかねえけりやア、家鶏を戸板へ乗せてながすが宜からう。」虚呂「エ、イ氣の利かねえ、早く這入つてあとをしめねえと、風が来て來るとすぐにさしで口だア。」喜次「何だか譯も知らねえで、いかねえわ。そしてその面は何様したんだ。煙にむせた貉の様に、目ばかりしよぼ〳〵やつて、實に

重忠さまの御知行所と來て、ぢゝむ郡を一ゑんに領して居るのだぜ。」へた「イヤこりやア面黒い、人いさんそうを岩永どころか、自分が御面色が悪七兵衛で、おまけに少々はねきよふと來て居るくせに。」花め「イヤモシ些とおことばの榛澤六郎だけれど、左様両方が根をほり底を堀川御所で、悪口雑言をいふ君阿古屋なら、琴責どころか打捨つて置いても梵論が出て、今までせつかく宜い事をしたのも、みな此方らの威をかりてする狐だと思はれたらばつまるめえが。」へ二「ナンノまた茶ぶきなぞが横合から口を出して、水責火責のくるしみを請けようと思つて。」喜次「コレサおめへたちの唾が、霧のやうに家中をまつてあるくわ。些としづかにしさつしナ。」へた「今虚呂松が自己の目をしよぼ／＼して居るといつたが、其の筈だといふ譯は、昨夕の寶船で一件だ。今年こそ宜い初夢を見ようとおもつて、撫上に早寝をしたところが、サアその宜い夢／＼がみんな天窗へこみ上げたと見えて、五ッの鐘がなり四ツがなり。」花め「九ッがなり八ッがなり。」虚六「七ッがなり六ッが。」へた「たうとう天道さまの昇るまで寝そびれて、まんぢりともしねえと思ひなせえ。」花め「オット待おなつ。アノ宜い夢を見ようと思つてト言つたのは、おめへが思つたので、こんどの思ひなせえは此方でおもふのか。」喜次「東西。」へ二「エヘン、然れども眼の玉水晶の緒にてもあらざれば、此の時とろ／＼と眠りつくかと思ひなせえ。」虚六「亦思ふのか。」喜次「東西。」へ二「忽然として三社祭の善玉悪玉のごとき寶珠の玉が二ッ雲の

なかなか、自己と御面に降るる天窓の上へ、ドロ、ズイ〳〵と舞ひ下つたと思ひなせヱ。[illegible]一寸ヤア

うさう思つては、目が覚つて居なさるめヱかい。此度は抱くことにしやう」ト。[illegible]「東西[illegible]」ト言ふ

たと一ッの玉は左の小鬢、また一ッの玉は右の小鬢へ来て、ぴつたりくつついたところ[illegible]「思ひなさ

えかけて「東西」ト言ひやア、此度は手前で東西をいはずか[illegible]、二ッの玉の間に小鬢へくつついた玉が、

内へ来てくつついてくるり〳〵ともんで行くその首を、一生懸命で下へ下へ引き[illegible]す、アッアッ

の目眼を離したと思ひなせヱ。東「蓋へ[illegible]思ひ[illegible]」ト「東西」ト「[illegible]」ヤ「気抜けは

是ア、屁の字え、茶いと、愚痴てえ、[illegible]、我舎が「陳」と、[illegible]、無智のと、跡へこれは下

たが身の上の中で御座い[illegible]、うれしくもあり[illegible]

てはごみ〳〵手、物事の[illegible]、[illegible]の早さに辰、はねたる時に卯、[illegible]は

ふみ辰、否まれたかお精の巳、前のうりはお定まりの午、はなはだ[illegible]紙をつひやす未、所作事すて

て申、よくばつて何でも酉、うちには片時戌、借銭で首がまはらぬ亥といふのだ。イヤ此[illegible]で何を

くふのだ、ハヽ、何時の間にかお燗を付けたナ。其處でお肴は重詰にあきたら、煮物か[illegible]貝であつた

めたやつか。イヤその中の芋で、寶珠の玉の噺を思ひだした[illegible]」[illegible]「芋を見て思ひ出すのなら、寶珠

の玉でなくつて放屁の玉だらう」[illegible]「扨今の初夢の噺の後だから」[illegible]「サアその放屁の玉、[illegible]放

延ぢやァねえ寶珠の玉だト思つたのは、目を明いて見ると野良七めが仕業で、自己の天窗へのしかゝり、岩のやうな拳固を二ツこしらへて、兩の小鬢をぐり／＼やりながら、サア起きねえか朝寢をするもカ圖がある、是れほど強くやざう極めても、根ッから葉ッはり痛がらねえのは、頭はあたまか石天窗か、どうだ／＼と眞赤になつて押して居られた痛さくやしさ。」庄兵「さぞ憾え面をしたらうなア。」茶め「こいつァ自ぐらゐ出しても見たかつたに。」喜六「フム、其處で野良七がお前の天窗をぐり／＼の遣り逃げか。」へた「夫れだからヨ。その敵をとりてえと思ふのだ。その敵より自己の敵は何様した。早く一杯遣り逢はせて呉れねえか。」喜兵「嬉しや出逢へたら、助太刀は自己一人でよからう。」茶め「サアサア出來た、ドレしう一杯やらかしねえ。」へた「これはこりやァ有り難えオットとふし／＼、」喜六「よく／＼ついて、大晦日にやう／＼の思ひで取寄したのだ。」へた「ドレ／＼なるほど、こりやァかうしてきだァ、ァァ何様もしみて／＼、五臟六腑をたゞ切られる様な心持だ。」しして見るとこの御酒は剣菱か正宗といふ鑑定で御座います。」ト盧呂松へさせば、庄兵「ドレ／＼成程よい御酒だ。」ト、注いだる酒を飲むまねのみして、何時までも飲みほさず。「是れは不思議、アレこの通り飲んでも／＼盡きません」して見ると此のききでは、泉川か瀧水だらうと存じます。」茶め「しからば身共も鑑定にかゝらう。ナル、何さま上物だ。モウ一ぱい注いでくんな。オットとふし、ソラ亦お酌だ、奇妙々々。此度は手酌でやら

うこア、あります〳〵。」へ二「コレサ一人でそんねえに何様するつもりのだ。」米め「ハヽ是れで七獻頂戴いたしましたが、一杯毎にみな美味しう御座いましたから、先づ七ッ梅かと存じますが、皆様はた私を猩々のやうだと被仰いませう。」虚六「イヤもう誠にお割合のよい御鑑定で、残心に堪へました。」喜次「僉さまの御鑑定、是れにてとつくりきゝ酒仕りまして御座います。扨今日彼様に御集會ともしら梅で、一人つ九年酒といたして居りました故、誠に泡盛をくひまして、何様紫蘇酒にも焼酎にも寐ぐらしは手もまはらず、然りながら玉緑の御らい麟ゆゑ何がなト存じ、戸棚を明けて三ッ鱗のところ幸ひと彼方のすみ田川に到來の一瓶、お肴はなくとも元よりみなうちわ同然の中汲、たゞ濁りのないところを御馳走とおぼしめし、足元も養老酒となるまでめしあがり、是れは江戸一と御保命酒にあらからば、私しみか孫古味淋の酢へまでも、難有う鹽醤油にごんじ奉ります。」米め「イヤ〳〵白さけばなれの致した御挨拶、甘露酒に堪へましたぞ。」虚六「蜜柑酒があつて十分の御口上ぶり、なか〳〵醂は置きませんッ。」へた「呑口のまはり鹽梅、徳利と聴聞いたし、樽わりのところ此のすゑ一文もらひの薦ッかぶりと成り下り、道樂寺を囀つても口過ぎは出來ると申します」喜次「ヱ、この野郎、いたぎのわりい事を言やアがる。」米め「ア、ソレ帆立貝へ袖が引つかゝるわ。」虚六「ソラ芋が灰い中へ身を投げた。」へた「焼豆腐もつゞいて飛び込むわ。」米め「牛房々々と沈んだら、引きずりあげて人參を飲ま

「ぜひがいい。」喜次「ヤレ／＼田作で御目出度かつた。」ト、灰のなかへ落ちた芋をはさみあげる。へこ「イやはや議におこらない地口ばかり出来るゾ。」喜次「時に自己は御慶左様おもふが、正月の重詰と五節句の煮物、それに袴著髪置のいはひサ、あいつァ何様な立派な人達でも、長い飴を二袋か三袋だが、是ればかりは古風のすたらずに居るところが難有えぢやァねえか。」喜次「一體おせちといふものは、茶の吉を見る様な意地穢しを議めの為に。」[illegible]「いましおぢやァあるめえ、おせちだからお煮染一箇だらう。」[illegible]「ハ、ァ何か虚呂松にお説があると見えるね。」へこ「そいつもお節ぢやァあるめえおせちだらう。」[illegible]「エ、こしやべるない。」[illegible]「さておせちの煮もの品は、田作に焼豆腐、芋、牛房、人参といふのが世間通例だ。そこで田作は元祖だから、魚の中で一ばん下だ。亦焼豆腐は中にすがたつて居るだらう。さて芋と牛房で腹を膨らし、田作の下々、焼豆腐のおちゝなうと屁を放れて、人参の様に赤い顔をするなといふお煮染だわな。」[illegible]「ア、ァ穢いお煮染だ。」[illegible]「イヤサお煮染にはたいゝ讃めだといふことヨ。」[illegible]「いましおでもあるめえへえしりだらう。」へこ「ナヤそこで宜いが、自己がすれた事をした。」と、周章てゝ立つて入口の[illegible]のきたるところへ向き、風呂敷包を持ち来り、その中より羊羹の折と香煎の竹筒を取り出し、へこ「先刻来た時一寸あすこへ置いてきつぱりと失念、是れはこれたゞ折表の羊羹と香煎、わざとお年玉のしるし。」ト、喜次郎が前へさし置く時、表の方にて咳拂

ひよホヽ、如何御在庵であらせられるかネ。」虚ろ「サア／＼事だ。誰だ／＼、石町のきゝんじやないか、きゝ「御客様だといふからいつた。」虚ろ「ナニ今春はじめてだから左様も出来ねえ。お前たちやア此の四疊の小鉢を持て、二階へ上つて仕舞ひねえ。」虚ろ「オット承知だ、二十棟といふ所で下卑はあるめえ。」きゝ「サア一ツひようばつたは、熱ふつて口がひかれねえ。」虚ろ「コレ、エゝもしい事をする奴だ」ト、人々に其處を取りかたづけ二階へ上れば、喜次郎は立ち出でて「コレハ大愚大人、サア／＼此方へ。」○○「然らば御免」ト云つゝ通り、○○「今日は御年賀に出たのでは御座いやせん、昨日書畫の書初を兼ねて、意柳庵と源氏庵の師の年始の開巻するから、大人の鳳駕がきたら、なんでもでは、座もちて來ねエト、渡曉子のおはなしにそゝなかされ、我にもあらでふら／＼と、廬光が猿江の別荘へ往きやしたが、すると彼人が相變らず才子ぶつて、座附の菓子から酒の肴、都て穴だらけ奇絶妙と、めづらしがらせる積りで出した奴を、是れは何屋彼は何處と一々星をさしたので、流石の我慢も鼻を折り、眞に大人は食物本草だ、太刀打は出來ねえといつて驚きやしたが、其のくせでは何分にも腹が癒えねえと見えて、いつの間にか寶朋町から、お竹にお梅お松などといふ金毛九尾の白面を生捕つて來て、書畫も開きもそちのけ、直に亂杯の大騒ぎといふ世界に變じ、てんと面白して満たけることを知らず、時に鶏鳴曉をうながすに驚いて、そうとう猿江へ一宿して、今歸りがけて御庵前をとほりやすから、大

人「御起居いかゞ在いせられるやト、一寸窺ひ奉る」など、漢語まじりの釋いぬ事を頼りにならべ立てるうち、二階では彼の三人が殘りの酒をのみながら、「ヲイ、トホン、大人徳利は如何おはします、したんで見てもらえまいかまい」ト、ホネ〳〵でも有るくらゐなら、此様に力をおとしはしねえやな」ト、仕方がねえ、重詰の煮肴でも食らしてゐ、トッテ此処に酔倒れる」ト、何も漁え、なぜその頭の中へ吐きだすのだイ」ト、ヒットヒット一番謎へた」と手ものついでに[illegible]して仕組はうか」ト「とんだものが飛び込んだので、自己の思ひつきを題糸にして仕組やうがついた」ト、何か趣向があつたのかエ」トモ「箱根の羊羹を土産と表題して差出した土産は、實は羊羹でも蒲鉾でもねえ」ニ「シテ本名を出さぬ時は」ト、[illegible]自身の機転がれたと云ひさうな所を、羊羹の折の中へまつ[illegible]りときめこませ、赤蒲鉾の間の中へは、七色蕃椒の大辛といふのを詰めかへて來たのだ。其處で内々慾の用意もあるから、いつと言やア直に、鶉焼の七色蕃椒を擦り掛けるといふたくらみだ」ト連理で羊羹の折が大きかつたと思つた」ト[illegible]一寸したお見なさい」[illegible]させ〳〵と[illegible]次[illegible]るが、例の蒲鉾の間と羊羹の折をかつぎ出したりした」トレ〳〵、[illegible]でいつ[illegible]ない。何處するか見じて居よう」と、二階の口から三人は知れないやうに覗いて居ると、下では七人の喜次郎が、ただ其はなはお禮して、例のおかしく藝の面白うくして、さぞおもて被成へた事で御座いませう」トたゞ其

處はなんといつても、無駄な孔方をなげうつて置きやしただけ、葉唄はござれ踊はよしと、まんざら野夫がられもしねえ積りさ。」喜次「時にお茶を入れようといふ所だが、僥倖新製の香煎だといふのを今もらひやしたから、湯を一ッ上げませう。其處でまたこの羊羹も、こんどはじめて出來たのだといふ觸れこみで到來しやしたが、切つて看ませう。」ト折の蓋を明けて見て、虚六「成程おつな色に出來てゐる、寄物には能くこんなのが有ります。」ト言ひながら、臺所より庖丁を持ち來り、六七分ぐらゐな厚みにすかり／＼と切り並べ、菓子鉢へのせて其處へだし、鐵瓶の湯を茶椀へつぎ、彼の香煎を振り蒔いて、喜次「ホイ是れは些と多すぎた。私は風を引いて居て匂ひも何にもわかりませんが、宜いか惡いか一ッ上つて御覧なさい。」ト茶臺へ乘せて差しいだせば、たい「イヤ玉手を勞しておそれいつた。之れはこれは、ナニ、たいがいな煎茶よりは、かへつて香煎のはうが宜うげんス。」トいひながら、彼の湯を一口ちよいと飲み、何だか可笑しな顏をして口を少し尖らせ、スウ／＼ホウ／＼と息をそとへ吹いて居る。喜次郎は氣が付かねど、二階に看て居る二人は、ふき出すばかりの可笑しさをぢつとこらへて竊々聲、虚六「香煎より七色蕃椒の方が、利がよろしう御座いませう。」茶の「シイッ。」へた「臺所へ往つて銅壺のふたをお舐めなすつたら、早く辛みがとれませう。」虚六「それは山椒で御座いますッ。」へた「山椒も中に這入つてをりますッ。」茶の「すこしでなくつて、山椒はひつて居たから、スウ／＼

りホウノ〱で御座いませう。」盧「シイッシイ。」ト二人は袖をひつぱり膝を突き、かたつを飲んで見て居るト、喜次郎は大愚が前へ菓子皿押し遣り、喜次「この羊羹も新製だといふから、一ツあがつて御覧なせえ。併し食物本草とも云はれるくらゐな大愚先生だから、この菓子もたゞお口に觸れたで御座いませう。」と言はれて、例の知つたふり、大「この赤煉で御座えやすか。ナニサ是れは然るとこでまだ賣り出さねえのだが、先づ大人のお風味を願ふ、と言つて出しやしたから喰つて見たが、なか〱妙に喰はせるので、其の後も一兩度取りよせて、人にも振舞ひやした。サ、此の香煎も能くお手に入りやした。僕さへ他所で一寸飲んで見たまでの事で、お恥もじながらまだ出所だに定かならねえのに、流石は大人だ、妙に何かがお早く集まる。」ト言ひながら、彼の菓子鉢の羊羹を一切とつて口へ入れ、ぐしやりと嚙むと生臭き匂ひがぷんと胸へこだはり、煉とも付かず蒸とも付かず變な味ゆゑ、これは異だと顔を顰め、頰ッぺたを膨らしてむぐ〱やれど、吐き出す譯にもいかねば、飲み込まんとするに、ゲッ〱と咽喉のみ鳴つて下へおりぬを、思ひきつてゲット飲むと、いよ〱變に生臭ければ、ゲッ〱ト突き戻すを、眼を白黑して亦飲めど、胸のわろさに堪へられねば、飲みかけ置きたる香煎湯をあわてて取つて、一口にがぶりと飲むと、先とは違ひ底の方にこて〱とをどみて有りし蕃椒の種が一度に口にはひれば、アッ ト言つて反り返り、あきたる口の脣をひつくり返し尖らせて、

ホヽ／＼スウ／＼ハアノ＼ノウ／＼ト、息を外へ吹いて居る内、涎はたら／＼、顋へつたはり、鼻の上には汗をかき、額口より湯氣をたて、眞赤になつて居るところへ、野良七といふ能樂連中には色師の問屋で御座い。御覽申しますト言ひながら、座敷かまはず上り來り、ホヽ是れは大愚先生、大分よいお色で御座います。喜次さん連中はまだ來ませんか。」ホヽ「左樣に來たとも來ねえともどつち付かぬ。」のら「ハア鼻介や飛介は自己より先の筈だが。」ト首をまげ、壁へ寄る。此の時二階の二人は先刻よりの可笑しさを堪へかねしは、ブツ／＼と吹き出す口を押へたり押へられたり、足ずりして面白がつて居るところへ、また野良七が來りし故、卜太郎は支度をなしたか、へヽウ／＼、妙だ／＼。昨今の寶珠の玉の意趣がへせる。アレ今に見な、あの野郎に七色白煎湯をぐいと飲ませ、龍宮城の煉羊羹をあんぐりと喰らつて、ゲエツとは有難山。こんな事と知つたら、牡丹餅だと言つて馬糞をもつと持つて來れば宜かつた。」ぼう「イヤ何さま彼奴も飲ませられさうな景色に成つた。アハ喜次さんが火鉢の引出から茶碗を出すわ。」いま「其の癖喜次さんは自分ぢやァ飲まねえから、氣が付いてゐるのかしらん。」ためり「彼の人は一杯やるト、通例あの通り飲みも喰ひもしねえが、とてものことに喰らかせば宜いとおもつてゐるのだ。」虚「そりやァ宜いが、餘り笑つたので小便がしたく成つてきた。」へた「エヽもう些とだ堪へてゐろイ。」虚ろ「何樣も仕方がねえ我慢をすべエ。」ぼう「是れサ聲が高い、シ

イッシ。」喜「鮒と鯰とどちらやうが安い、シイッシ」へたすてきに古い、シイッシ。」ト譯らぬことを言ひながら、彼の三人は野良七が容子いかゞと窺ひ居る。

初編　巻之中

此の時下の座敷には、主人の喜次郎大愚にむかひ、喜「時に先生香煎湯なぞもう一ッ獻じませうか。そして菲葉は如何、御意にいつたら、御遠慮なすつてはいけません。サアノ\何卒あしあがつて。」ト二袋ばかり挾んで出されニ「イエノ\それへさし置かれて、自由にあやうだい。」喜「それでも折角挾みましたから。」ト無理に強ひられ、よんどころなく手の平へ請けとり、ニ「ナニ此彼樣の珍物を、心なくむしやノ\と下卑ばんやうにも有りやすめい、得手左樣いふ白癡にかぎつて、一ッ二ッ人のする初茄子より、一山三文の茄子の方が美味えなぞと、とんだたはことを言ひやす。實に玉も瓦も辨へなく言はれた日にや、新製だの初物だのと、情を折るがものは御座りやせんのさ。」喜「アノ野良公、是れは新製の香煎だといふから、大愚先生にあげたのだが、お前も一服やつて見ねえな。」ト茶椀取り出し湯を注いで、彼の香煎を振り塗り、サアと出せば、野良七が「オット、トお茶臺でいゝやうだ。」イエこれはこれは、左樣なお見苦しいお手では恐れいりまする。ナニナニお茶臺は自由に大きさうな所を遣つて下さいた。

さます。必ず／＼澤山おかまひ被成つて下さいまし。イヤこれは熱いお湯だ。」ト、彼の湯の茶椀を下へ置き、大愚は挾んで貰ひたる羊羹をもて餘し、指の先にて推し潰したり丸めたりして居たりしが、兎角に生臭き匂ひがすれば、何心なく其の手を嗅ぎ、顔をしかめてわきを向き、「ウ、ツア、、ゲエイゲツ。」と身振ひすれど、野良七は氣が付かず、「ドレ／＼もう飲みごろに冷めたらう。」ト茶椀をとり、「成程これが新製の香煎か。」ト言ひながら、茶椀を鼻へ押し附けフン／＼と嗅ぎ、野良「ハツ、ヘエツクシヤウ、えゝ畜生、あぶなく膝へ溢すとこだ。何だかめつぱふ香ばしい。こいつア見體といひ匂ひと言ひ、まるで七色蕃椒といふ鹽梅だ。」ト、やがて一口にぐいと飲み、野良「ア、ア、ツ、ホウ是れは辛い／＼。ホウ辛イスウ／＼。フウ／＼。ア、ひどい物を飲ませやアはつた。フウ／＼オ、／＼辛い辛い。早く口直しにその羊羹を喰はせてくれ。」と、甘味で口の辛いのを治す氣なれば、野色七が菓子皿にある羊羹を、切囘切一所に摘み、口の中へへしこんで、あぐりと喰るとぐんにやりと血生臭きに「ア、ツこりやアなんだ。ア、／＼／＼變な物をア、ゲエツゲエイツゲエイ、ア、こてへられねえ物をゲエツ喰はせやアがつた。ア、ゲエツゲエイ。」ト言ひながら緣頬へかけいだし、嚙み散らしたる鮪の身を吐き出すを見て、先刻より胸の惡きをこらへて居た大愚も、堪らず顔をしかめ、大「ゲエツ、ゲエ、、ア、これはゲツ、ゲエイ。」野良「ゲエツゲツ。」ト鬼灯ほどな涙を零し、この兩人が苦しむを、

何様した事と喜次郎が譯を知らねば、有漏々々するを、寢匍匐ひて先刻から二階の口より看て居る二人、グウッグッとこみあげる笑ひを、外へもらさじと眞赤になつて堪へて居しが、今野色七がゲッゲッと苦しむを見て、下太郎は我をわすれて飛んで起き「妙だ／＼、コイッア妙だ。」ト、拔足しながら踊り跂ねるを「エ、イ其様にドン／＼やつて、下へ聞えるといかねえワ。」ト、腰のあたりを茶め吉に突き飛ばされて、蹌踉々々とよろけかゝりて、虛呂松が匍匐ひたる脊中の上へ大きな五體で尻餅をどつさりと突くと、虛呂松は先の程より堪へて居た小便なれば、我知らず押されし却舍にツィと出るゆゑ、顔をしかめて身を震はせ「ア、ア大變だ、ア、はやくどかねえと止らねえ。ア、小便が出るといへば。アレサ串戲ぢやアねえ。ア、／＼苦しい／＼。」と言ふを聞いて、下太郎はわざと尻へ力をいれ、ハヽヽ「しかしいきな年増にでも彼様いふあんべえに遣られたら、まんざら悪くもあるめえが。」ト、上からぐい／＼推し付ければ、虛呂「ア、ア小便が出るといふに意地の悪い。アレ出るといへば。エ、此の野郎どうするか見やアがれ。」と一生懸命起き上る。この勢ひに下太郎は後の方へ跂ね飛ばされ、先刻下から運び上げたる膳の所へ顛倒反ると、猪口も德利もころがりいだす。虛呂松は起腰をして、「ア、ア、ア、。」と身振ひしながら「エ、、いま／＼しい意地まがり野郎、こんなに小便をたれさしやアがつて、串戲も時によるこ。何様したら宜からう。」ト困りきつたる顔をして臨へ居れば、茶め吉が

「何だ小僧と頼かして、貴様に小便をやらかしたのか。」ま「ヒヨツイと出たから、まアやらかした様なものサ。」へ「ヱやらかした様なものだから、衣類へつまが濡れて居なけりやアならねえ筈だが、何ともねえぢやアねえか。」ま「其處は御法辯なもので、衣類はまくれて居たから濡らしやアしねえが、精得は、まだトこいつも彼様いふ事と些が知つたか、今日はしめて居なんだつけ。」へ「ヘヽヽ其様なつた樣の合にねえ事、口といふが有るものか。サレ此處にある徳利の酒を、いつの間にか此様に疊へこほして置いて、小便などと僞つたので、此下太郎までが欺かれる様な甘口なものと思ふか。一升四百の小便なら、彼様して掃除をしてやるが、勿體ないと言ひながら、嘘に松した小便が疊にこぼし溜つて居るを、酒と思へば平氣にて口を當てチユツト吸ひ、へた「アツア、ツ、ペツ〳〵ピヨツコツ、こりやア眞正の小便だ。ア、臭えゲエツ、ゲ、ゲエツゲエ、たまらねえ。ゲエ、ツ、ゲ、エ、だれか早く薬の水を持つて來てくれ。ア、ゲエツゲ、ペツ〳〵ピヨツ〳〵。」茶め「エ、イ穢え。何故人の顔へ唾をするのだイ。」へた「顏へ唾をこするか、口の中へ小便をする奴さへあるわ。」ま「何處の國に人の小便へ、口をたれこむやつが有るものか。」へた「夫れだつて自己が小便へ。」ま「手前が好きこいんで小便へ口をなしたのだすねえか。」まこ「イヤサ小便へ隨分丈夫に口をなして置いたのだけれど、腹背に成つて居る脊中の上へ、あの大きな尻をヅンと乘せられた物だから、思はずヒヨツイと出た

のだが、まだしも眼の玉が出なくつて仕合だつたナア。下太公何様だ、このせつの小便は目の裏に熱があると見えて、すこし濁つて居るから、不断の様な呑口には往くめえが、宜けりやアもう一合お燗を付けようか」○「濁つて赤い小便なら味淋だと思ひさうなものだが、大それた酒だと思ふのは、矢つ張り眼ばかり飲みつけて居るせゐだらう。」へ「チヨツ彼方も此方も人の胸の悪いのだと思つて、平気な面をして居やアがる」○「何様して平気な顔をして居られるものか、先刻ッから眼をほそくしたり口を大きく明いたり、種々な顔をして笑つて居るのだ」へ「彼様なるからは百年めだ。仕方がねえ、下へ往つて口を濯いで来よう」ト階子の段を下りにかゝるを、庭口松がつらまへて、○「コレ〳〵辛抱がなるめえ、下へ往かれるくらゐなら、先刻ッから降にもぎれる様な苦しみをさせては置かれめえ」へ「夫れだつて何様して口を此のまゝで置かれるものか。」○「此のまゝで置かれずば、お結びにでもして置いたら宜からう。」○「しめた〳〵宜い者がある。」ト、喜次郎が机の上より食物の鉢を持ち来り、○「一妙だ〳〵、入れたばかりでしかも若水。」「ドレ〳〵、成程こいつア天のお助けだ」と、彼の茶碗を持ち寄る間に首を出し、喉にグツ〳〵口嗽をしながら、

小便をば酒と思ひしは徳利を取る不調法なり

騒がしい隣の大騒ぎを知るや知らずや、下座敷の奥の間は人も静に、藤吉さ、香煎は七色蕃椒、羊羹は白の

の切身と性が解れば、今更に知つた風して對へたる大愚も流石關の惡ければ、物に假託け早々に暇を告げて歸り行くを、見るより二階の虛呂松は階子段を驅け下りて、急ぎ廁へ往かんとするを、野良七は捕まへて胸ぐらを緊と取り、のら「人に箭を喰はせたのは此の野郎、仕業だらう、サア何樣するか看やアがれ」ト擂りまはせば虛呂松が、虛呂「コレサそんねえな事をすると、小便が出るからよしねえといふに、エ、も息さへそつとついて居るのだアナ。」のら「其樣な甘口な言譯ではなすものか。サア何故人に彼樣なものを飮ましやアがつた。」虛呂「エ、擂つちやアいかねえ、アレサ出るから止しなといふのだ。そして自己が知つた事ぢやアねえ、ナウ喜次さん。」喜次「眞正に宜しくねえ洒落をしやアがる。大愚だから宜いけれど、あれが外の者でゐねえ、何樣に氣の毒だか知れやアしねえ。」のら「夫りやア遣へねえ。なんにしても以來の見せしめ、此のまゝぢやア腹が癒えねえ、サア何樣だあやまつたか。」虛ろ「コレサアイタ、、、、。エ、この野郎ふざけるな。ア、ア、アカを入れると猶堪らねえ、あやまつたあやまつたと身振ひしながら青く成る故、のら「チョツ仕方がねえ料簡して遣らう。」ト突き飛ばされて、虛呂松は周章て廁へかけ込んだり。この悶著を如何にぞと、二階の口より見て居たる二人も頓て下り來り、へた「何樣だ野良公、新製の羊羹は美味かつたか。」のら「道理で天井が騷々しいと思つたら、何匹も居たのだナ。」へた「そりやア宜いが、喜次さん大變があるぜ。」喜次「ナ何が大變だ。」

だゐ「ヘヽん何か臭アイどしんツイの一件だ。」喜次「何様したと。」だゐ「イヤサ下太がどしんと尻餅を搗くと、虚呂松がシャアと小便をしたといふ事ヨ。だがその小便は大概嘗めて仕舞つたから宜いけれど、もう一度疊の清洗ひをせざアなるめえ。」喜次「眞正か。」だゐ「論より證據だ、二階へ上つて疊の濡れて居る所を嗅いで見な。」喜次「困らせる奴らだなア、ドレ／＼。」ト二階へ上る。其の時に虚呂松も廁より出で来り、流石に捨ても置かれぬ故水など汲みて持ち上り、寄つて集つて濡う掃除をして仕舞ふと、だゐ「自己ア湯に往つて来るぞ。小便を嘗めた唾を吐へかけられた面の皮の洗濯をして来ねえぢやア、何分にも氣が濟まねえ。」喜次「自己も往つて清めて来べエ。」へた「自己も夫れぢやア一所に可往う。」と手拭下げて三人が、「喜次さん一寸洗湯へ往つて浴びて来るぞ。」喜次「二階の疊も連れて往つて洗つて遣つて呉れねえか。」喜次「イヤ／＼、あのやア矢張あとへ殘して疊わけにするがいい。左様すると、うろ「疊こそ今は仇なれ、見染めてそめて逢うた其のときやつい轉び寐の。」へた「エヽ、ヽ氣障な身振をしやアがる。」と、是れより三人うち連れて程近き浴室へ往き、衣服を脱ぎ捨てその儘に石榴口へ駈け込むと、風呂の中は賑しく都々一などを唄つて居れど、人は纔かに五六人、思ひの外にすいて居る故三人は手足をのしながら、喜次「がうてき／＼、お客が少なくつて湯がたつぷりだ。」へた「成程虚呂印は何處も彼處も眞黒だナア。」喜次「彼處が白ければお公家様だア。」へた「串戯ぢやアねえ、世相を出

しても見な。お前は前世に佛の奉加帳を書く墨を二升盗んで、出來も仕ねえ艶文を書いた報いによつて今生へ眞黒に生まれて來ると書いて有るに違へねえ。眞にお前のは體といふのぢやアねえ、黒だといふのだ。湯へ這入るよりやア海の中へ這入つて、珊瑚樹を見附けたら宜からう。」眞「是れが否味のねえ丈夫男色と申すのだわ。なんでも物に黒くなくつてはいけるものか。先づ神に大黒天佛に黒本尊、歌人には大伴黒主、智者には黒う源義經、黒丸子は腹の痛みを治し、黒米は盗賊の難をふせぐ。物の上手を黒人と言ひ、通るものを黒う人と稱す。黒のお羽織に黒革をまとし、眞「頭巾はかぶるに身をかため、通ひなれたる朱雀の、露ふみしだくしめやかさト、「ひん〳〵大わん猫にやアなろうアツ、こいつアすてきに沸いて居て、脚はなか〳〵入られねえぜ。」口「體が冷えて居るから湯が熱い様に思ふのだト、言つた許りぢやア文盲なやからには解るめえが、湯がぬるといふのは湯が體を溫めしるといふを縮めた言葉で、酒がのめれば酒のみる、茶なれば茶のみる、總て彼樣いふ處が詞のはたらきといふものだ。」へた「宜いサ夫れおやア其の積りで這入ると仕よう。」ヨ「眞ツ風呂御湯う迄、ト、なかなかこいつア湯ふるる〳〵。」口「ドレ成程よく沸かさ、御まんまい湯とは、やたらに馬鹿氣て焚きんなす。」へた「夫りやア宜いが茶の吉は何處に居るか、大分神妙だ〳〵。」虚「彼方の隅に居る様だ。」ヨ「茶め公、些と五色の遠吠でもはじめねえか。」だふ「自」が語り出すト、女湯に長湯のものが出來て

氣の毒だから、夫れよりやァ矢張お前が木魚の聲色でも始めさつせえ。ト、中段へ片足かけ變な身振をして居る故、へた「なんだ茶め公何様かしたのか、腕組をして米を搗く様な眞似をして居るぢやねえか。」茶め「燕雀なんぞ大鵬の心を知らんや。彼様いふ形をしてゐるのが其方抔に解るものか。是れは自己が工夫をして思ひ付いた事が有るから、やつて見てゐるのだ。」ぼろ「足下の工夫ならどうせろくな事ぢやァあるめえ。」茶め「ヘン漢の相丞、忠武侯、諸葛孔明、南朝の廷尉楠河内判官正成といへども、未だ心の付かざる處、和漢未發前代未聞の珍藝だ。眞に妙な所へ氣が付いたト、我ながら感激に堪へて居るのだ。」へた「何だか前文を聞いた處ぢやァ餘程の事らしいが、本文は小便の泡程にも往きやアしめえ。」ぼろ「その腕組をして米を搗く様な眞似をして居るのが、楠も孔明も氣の付かねえ前代未聞の珍藝と言ふのか。」茶め「其様に氣が揉めるなら言つて聞かせよう。だが必ず後日に至つて自己が攷へたなどと、人の工夫を盗むめえよ。先づ彼様そくに立つて兩の腕をしつかりと組み、十本の指を背脇の下へ仕舞つて置いて、少しも手を出さずに足でばかり湯の中へ這入るといふ妙藝を工夫したのだ。」へた「ウ、ツ、アハヽ、アそれで先刻ッから米をつく様な腰ッつきをして居るのか。成程此處までは楠も孔明も氣が付くめえ。其の位なことを工夫をしだしたら、人に賊まれようと思つて氣の揉めるのは尤もだ。お前の慈母が道祖神様へ御願をかけ、その夜馬と鹿が跛ねて居る夢を見てか

ら、足下が[illegible]んだと言つて嘲したか、中々[illegible]といふものは評判[illegible]、申して[illegible]何[illegible]監へだした[illegible]ハ、[illegible]其處で中段へ足を掛けて、[illegible]して見て居るのか、[illegible]知恵のねえ奴等が寄つてたかつて嫉め〳〵、其の代り跡で仕て見たく成つて、眞似をすると承知しねえ[illegible]。」虚ろ「併し是では拝見事で、何様して此の中へ手放しで這入らうと言ふのは中々六ケしい、オツト、[illegible]此度は[illegible]下ノ部[illegible]すな、耳にも懸けず[illegible]め吉は一人眞に成つて腕ぐみなし、中段まで上りたれど、並より深き風呂桶ゆゑ、なか〳〵這入り兼ねたるを、亦種々に身をやつて、漸うに上の板を跨ぎ中の段へ足を踏みかけしめた〳〵と言ひながら外の段の足を上げ這入らんとするその拍子に、中の段の足がすべつて、忽ら[illegible]横さまに風呂の中へ[illegible]先の男は面もがきまはる其の手先か、偶に[illegible]を皺め「ア、ツア、痛た[illegible]此の頓痴奇[illegible]と、漸う湯から首を出し、立ちあがらんとする横ッ小鬢を、[illegible]に突き飛ばされ、亦忽りと向うへ倒れ、隅の方に都々一[illegible]唄つて居たる人の[illegible]へ否といふ程湯をあびせれば、物をも言はず彼の男が[illegible]を出し突き戻し、奥の方の[illegible]

[illegible]

伸ばして毛を引張つたり、尻を突衝いたりしやアがるのだものヲ。」直ふ「夫れだつて楠でも孔明でも氣の付かねえ程な事を臨へるお前だから、脇から屁腰な様に見えても、何様言ふ謀畧があるか心底が釋らねえから、空然口は出せねえぢアねえか。」とふ「夫りやア自己だものヲ、慮りがなくつて何様するものか。彼の野郎に泡を吹かせる様な仕返しをするのは方寸の内に有るのだ。」直ふ「夫れ見ねえ亦前代未聞の工夫をしだしたらう、智者は智者だヨ。」ト「だけれど懐中を持たねえから、天窓を羽目へ打付けた時なんぞに不自由だ。」ト「ヘヽ其様見くびつた事を言つて後で謝りしなさんな。織田信長なんぞも始めは空馬鹿を遣つて居たぜ。」ト、言ひつゝ、脇を一寸見ると、突き飛ばしたる彫物だらけな大男が、何時の間にか風呂を出て水船の方へ来る故、茶の吉は周章てゝ風呂の中へ駈け込み、隅の方へ縮んで居ると、暫時して彼の男が這入つて来り、茶の吉が居るを知るや知らずや、立ち跨つて胸の四邊を洗ひながら、側に並んで這入つて居る五十許りの男に向ひ「モシ源兵衛さん、世の中にやアおへねえ愚鈍が有りやすネエ。風呂の中へ手放しで這入ると言つて、足を辷らしやアがつて湯の中へのめずり込み、私が天窓から題無しあびせやァがつたから、はたき飛ばして獅子ッ鼻ト言つたらブツ／＼脹れて居やアがつたが、獅子ッ鼻所か穴が並んでホント明けてゐるといふ許り、糞桶の紐通しにやア劣るのだア。其のくせ口のへらねえことを言やァがるから、捻り潰して遣らうかと思ひやし

たりや。」亀「ほんにナア、お前の力で拾はれては堪るものかネエ、アハヽヽヽヽヽ。」大男「しかし彼様な野郎でも、豆腐の殻や小豆の糟で育つたのぢやア有りやすめえ、矢張飯は十人並に喰らやアがるだらう。勿體ねえぢやア御座えせんか。」ト、頻りに誘つて囃して居るを、後の方に聞いて居た茶め吉が、餘りの事の悔しさに引摺り倒して遣らんと思へど、根が大の臆病者故、躍起と成つても恐怖が一ぱい、ガタガタ震へながら徐々と手を伸ばし、彼の大男の脚と思ひ、並んで噺を聞いて居る鄰の老父の足首を緊と捕へて、一生懸命力に任せてウンと引けば、思ひもかけぬ不意を打たれ、アッと言つて彼の老父がんどり風呂へ顛倒るを見るより、四邊の人々は何様した事かと立ち騒ぐ、茶め吉は呆れかへり、あつけに取られて居たりしが、「コリヤ間違つた大變。」と、人を掻き除け突き除けて風呂の中より飛び出し、逃げ出でんとする石榴口、此の物音に驚いて何事にやと表より這入つて來たる下太郎が、天窓へ天窓をグワントと打ち付け、雙方後にどつさり尻餅。へ「ア、いたヽヽヽヽ。」茶「ア、いたヽヽヽたヽヽ。」へた「目から火が出た。」茶め「鼻から出ないで仕合。」へた「エ、酒落所か龜の尾だ。」茶「自己も矢張龜の尾を。」へた「互にどつさり腰折が一首浮んだ、式子内親王の地ぐりノヽ、

龜の尾よ腫れなばはれね流しにて打ちしこの湯ぞ今は忌しき。」

初編　巻之下

再説喜次郎が家なる能楽亭には、茶め吉、下太郎、由吉松の三人が沐浴するとて出て往けば、嵐の吹きし後のごとく寂寥とする其の折から、裏口の戸を瓦落吏と開け、「へイ鳥花屋で御ざいます。只今にお客さまが被為入と被仰いました。」ト、言ひつゝ突き出す廣蓋の酒の肴に、喜次郎は首を傾け、「ハテナ誰だらう。」 のろ「鼓助か飛八のうちサ、先刻其様なことを言つて居たから。」 喜次「彼奴等にしてはチト氣張名古屋だ。ヤア代の都合が出来たと見えるノ。」 のろ「ナニやアとこせといふ間つきで、懐の都合がトナキんやなト成ると、奴等の口が直におごつて来て、彼りや否々此りやいや〳〵と言つたら、この間でもせえと臺所のすみへ追ひやつて置くがいい。」 喜次「其處でもつて来たものはなんだ、刺身に蒸魚。シテ鍋は。」と蓋をとり、「白魚に生海苔、貝のはしらに萌しの三ツ葉を、些と代脈の調合めくノ。」 のろ「ドレ〳〵代脈の調合を一ツくはせて見な。」ト鍋の中へ指を突込み、「ア、ツ、す、す熱かつた。」 喜次「コレサ何様したものだ。そして汁もののなかへ手を突込むやつが有るものか。」 のろ「左様いふけれど、刺身に蒸肴鍋ぞかりぢやア寂しいから、指の先を焼肴で少々不間にも添へるつもりだト言つたら、おめへが成程野良七も粋の酢のものだ、ぬたには置けねえと言つて、潮やたらに褒めるだらう。」

喜次「なんのまはりもしねえ口取で、言譯をしたし者だけ、かへつて味噌汁をつけるのだ。」 のら「オヤ大平な事をいふの。」 喜次「エ、サしつッこい、何の道當人の知れるまでは町内の係りあひだから、そつくり此方へ入れて置かッし。」 のら「ヘン洒落に負けた悔しんぼうに、權柄で用向を言ひ付けやァがる。」ト、彼の廣蓋の酒の肴を座敷の方へ持ち込んだり。此の時表の格子戸がぐわらりひつしやり、どたばたとするかと思ふと、茶め吉が息もせい／＼遽しきけんまくにて、履物摑み駈け上り、茶め「おいらをオおつかけて來る者が有るかも知れねえが、モもしキ來たらシ知らねえト云つてくんねえヨ。」ト言ひ捨ててあわてふためき、二階へ往きしが、直ばた／＼と下り來り、茶め「ニ二階の戸とだなはイ一杯でお隱れる事が出來ねえ。」ト、四邊をきよろ／＼見廻して、一人何やら點頭きつ、手に持ちたりし駒下駄を懷へ押つぺしこみ、周章てて雪隱へ駈け込んだり。喜次郎と野良七は此の有樣を茫然とあつけにとられて見て居たりしが、少し聲を低くして、喜次「何樣したのだらう、何でも唯事ではねえト思はれるぜ。」ト言ふを聞いて、野良七も小聲になり、のら「左樣ス、目の逆つた鹽梅から帶の結び樣を見ると、野狐でも付いたのぢやァねえか知らんテ。」 喜次「何樣それだ、夫れに違へねえ、察する處その捕付いた狐が犬に追はれたのだらう。」 のら「何にしても此の儘ぢやァ釋らねえから、一番素引いて見よう。」オイ茶め公お前は何樣かしたのか、茶め公といへばコ是れサ茶め公、何故返辭をしねえの

だつけ、言はれて茶の吉は、雪隠の中よりちひさな聲にてしりないれ、吉「ちやア、其様な大きな聲で自己が名を呼ぶなイ、追覚けて来た奴等が立聞をして居るもしれねえわな。何にしても息が切れて、咽喉が乾て付くやうだ。茶でも湯でも湯々しく、大きなもので、一杯持つて来てくだツし」言ツと途方な事をいやアがる」のら「エ、小悪魔な、雪隠のなかへ湯茶を持こむ奴があるものか」ト、言ふを聞いて、喜次郎は野良七が袖を引き目で知らせ、喜次「それでも此白か鰯のやうなもの、雪隠へ持つていつて遣つても宜いぢやアねえか」のら「左様サノ。すまア茶の公、鼠の天麩羅か油揚げ極上もののおやア何様だ」ト、それとつても、お前たちや狐にでも化されたのか、雪隠の中で咽喉のかわいたのに、其様なものが何になるのだ」ト言はれて二人は顔見合せ、またまた小声にて、「アレ彼方で自己達のことを化されたんぢやアねえかと言やアがる」虎「成程狐といふものは、早く人の気をとるものだ」喜次「何にしても茶をくれの湯をくれのト、飲みたがる所を見ると酔醒の狐だらう。」のら「左様サ、昔し後引の狐なら、モウ五合と来るところだ」喜次「油の揚か紫金錠でも飲まれえかと言つて見ようか」吉「何様しても其様な悪口な事を言つちや追付くめえ」喜次「図な事がはじまつたなう。」のら「楯籠つたところが悪いから、唐辛でいぶすといふ譯にもいかねえ」喜次「雪隠を住居にしたところを見ると、何でも葛西街道の狐に違へねえぜ」のら「左様サノ、半田の稲荷の眷属かも知

れねえ」喜次「何故履物を懐へ入れたのだらう。」卯七「ナニ畜生にも支配のが有るといふから、人にでも履かれるトいけねえと思つてだらうサ。」ト、二人は少し不氣味になり竊々評議して居る所へ、ト太郎と虚呂松が急ぎ足にて歸り來り、虚呂「オヤ茶め吉はまだ歸つて來ねえか。」卯七「歸つてこねえ所の騷ぎぢやアねえ、これに捕付かれての。」ト、額の處へ手を遣つて、狐の眞似をして見せれば、エエト悔り、虚呂「ナニこれこが付いたと。」ト太「何か眞面目になつて謀るぜ。」喜次「ナニムにやア眞正だヨ。」卯七「夫れだつて今湯の中で。」ト是れより彼の喧嘩の次第を委しく噺し、「トいふ譯で相手にあぶなく捕まらうといふ所を逃げ出して來たのだものヲ。」ト噺すを聞いて喜次郎が、フムと言ひつゝ手を拍き、「左樣か、夫れでよめた。相手が追驅けて來るかト思つて、見つからねえ樣に履物を懐へ入れて、雪隱へ逃げ込みやアがつたのだ。」卯七「左樣サ、大方横町の斑犬に出交したのだらう。」ト太「アヽレ矢張狐だト思つて居やアがらア。」喜次「フムウ狐ぢやアねえのか、して見ると狸が貉の仕業だらう。」[illegible]「擇らざアいいよう、忌々しい。」吉「茶め吉の野郎めえ、雪隱へ楯籠つて、いざと言つたら屁ッ放を打ち出さうトいふ料簡だらう。」ト太「違へねえ、屁け田屁ッ頼が屁ん目山か、屁田屁ぶ長の屁ん能寺氣どりで居るのか。ドレ／＼ちよつと屁見見舞に往つて來よう。」ト雪隱の所へ往き、ハン「オイ茶め、將軍和睦が調つたから城を出なせえ。此のせまい所へ糞の如く鎖ち籠つて居たら、劍戟を置くすさがへしも

無くつて、「不自由だらう。」ト開きの戸へ手を懸けて引張れば、内よりしつかり押へて居るゆゑ、下太「コレサ何故其様な事をして居るのだ、城門を開きねえトいへばよ。」茶め「何様しても此處を出られるものか。然してお前達も朋友甲斐がねえ、其様な事を言つて自己をおびき出し、相手方へ渡さうと言つたつて左様はいかねえ。」下太「其様な裏切をするものか、和睦が調つたから開城しろといふのだ。」茶め「眞正に調はせて呉れたか。」へい「兎も角も大手の木戸を御開け候へ。」茶め「ト、夫れだから此處をはなすことは出來ねえトいふのだ。」へい「ハ、アベらぼうにおびえやアがつた。其様に出たく無けりやア何時までも這入つて居さつし。」茶め「ト言はれるト亦出城を仕たくなるやつサ。」ト言ひながら雪隠の戸を明けて顔を出し、茶め「ばアア。」下太「エ、此の野郎、ばアもねえもんだ。人に散々骨を折らせやアがつて。」茶め「自己ア追覓けて來るだらうト思つて、實に氣をもんだぜ、彼様安々と濟まうとは白はりの。」ト言ひながら座敷の方へ往かんとする故、下太「手を洗はねえのかイ。」茶め「夫れだつて只楯籠つたばかりだものを。」下太「楯籠つたとつて穢えやイ。」茶め「チヨツやかましい百成野郎だぞ。」ト、不承々々に手を洗ひ此方へ來れば、喜次「ハ、アたうとう城からでかけたナ。」茶め「夫りやア宜いが茶め公、お前の引きずり倒した男は此處の長屋の家主様だとヨ。下太公と二人で詫言をいつて濟ましては來たけれど、お前も無言つて居ちやア能くねえ、喜次さんに連れて往つて貰つておやまつて來

なせえ。」喜次「エナニ、夫れぢやァあの源兵衛さんの足をやらかしたのか。」虚ろ「左様サ、その源兵衛さんといふのサ。少しの事で辨慶さんだト強いけれどなウ。」喜次「夫れぢやァ何ほ彼の人が氣が宜いとつて打捨つちやァ置けねえ。そして此處に遊んで居るから、猶の事一刻も早いが宜い。サァ一所に往つて遣るから歩行びなせえ。」茉め「何樣してとんだつまらねえ事を言つたものだ。」喜次「何故々々。」だら「夫れだといつて敵の城地へ踏み込んで、萬一和議の破れた日にやァ、帷幕のうちから伏勢が起つたり、城門の外に落し穴が有つたりして見なせえ、阿修羅王へ獅子奮じんの冠を著せ、惡鬼羅刹へ三面六臂の鬼神をしんにふに掛けたつて、敵は大勢味方は一人、頼むお前は二心、といふのだ物ヲ、防禦の便利がねえぢやァねえかナ。」のら「ナニサ〳〵、敵城へ踏込んで、事破るゝに及んだら、豫ては腰に用意の山八煙草の煙をあげるが宜い、夫れを相圖に味方の貧勢、貧おどしの鎧を取つて肩にかけ、貧の鍬方火の車の前立もの打つたるくる獅子頭の兜を猪首に著なし、困らせ丸と號けたる難題代の太刀を横たへ、借金の利足高の羽に剝ぎたる言延の年竹の征矢を、無理の押く負ひ做し、借用證文の加印五人張の強弓を、慾の皮の鷲摑みに握り、家の前の痩犬鹿毛へぢんくら置いてのそりとうち乘り、盡八百人の貧卒を前後左右に引きしたがへ、七偏人第二編ひき續き賣出しと書きたる大旗を、青柳橋の朝嵐に翩翻とひるがへし、案内は知つたる路次の細道、數を連ねたる溝板を、勇み

はいるんで踏み鳴かし、裏手の門の格子先、開けた溝の塀際までのし〳〵と推し寄せたり。ト、頃合にかゝる高調子、側にありたる年寄の、萬菱扇をひんやり取り、火鉢のふちを敲き立てる折から、表が丸落東ト断く故、主「サァ〳〵、今宵のお肴のお客様がおいでなすつた。」茶め「お肴のお客様たァ誰だ〳〵。」主「平八か脱助のうちサ。」主「左様か、それなら一杯鳴かして遣るべい。」ト、言ひつゝ立つて這入口の、障子の陰にかくれて居るとは知らず、風呂の中にて茶め吉に引きとめられる亭主の源兵衛、此の表を通りかゝり、下太郎が扇をもつて敲き立てしやべくるを聞き、講釈が始まりたると思ひ、大の講釈好きゆゑ案内もなく上り来り「ハイ御免なさい。」ト障子をあける顔を見し、茶め吉は指々、飛八か脱助とは思ひの外、茶め吉がことをなさんと案じ、はつとして、「ヤ、コレハ源兵衛さん、サァ〳〵此方へ。」ト言ひながら、陰に隠れていつてゐる茶め吉に目まぜをもつて知らせれど、茶め吉は飛八か脱助の事を取つて、源兵衛さんといふならんと思へば、少しも構はず、彼の源兵衛の敷居をまたぎ這入らんとするをりとたんに「ワアッ。」ト言ひつゝ妙な手をして飛び出づれば、源兵衛は不意を打たれて肝を潰し「エ、冗談を。」と後へさがる。その顔を見て茶め吉も仰天し、突き出したる手を上げたり下げたり亦振りまはしたり「ワァ、ア、〳〵わあゝあゝん〳〵のわあゝわん〳〵〳〵きやんきやんきやん。」ト、犬の吠える眞似をしながら、縁頬へかけ出し、亦も雪隠へ逃げ込んだり。源兵衛は是

かれ見てあつけにとられ、茫然として立つて居るに四人の者は吹き出す許りの可笑しさを、じつかり奥歯で嚙みしめて、しばらくハッ〳〵と言つて居たるが、喜次郎は漸く笑ひを飲み込んで「イヤ是れは恐れいつた。今の男がお前さんとは知らず、毀顔といふ朋友だと思つて、とんだ龜相を、御免なすつて下さえ」ト言ふを聞いて源兵衛は苦笑ひ「ハヽヽヽ夫れではと、其助さんの為にも、私が付詰で、昔のお馬の矢表へ駒をつけば居る並みふかりのおくれこ」茶吉「是れは茶の吉か、なれは平気でも少々の手綱であつたらうに」源兵衛「何かえ二人は今の通で、お前の事をさう云て御座いますか」源兵衛「それは宜いが、お茶番などはじまつて居た御様子故、私もお聞き申さうと思つて上つたのだから、マァお構ひなく、お遣んなすつて下さえ」茶吉「アハヽヽ、マァ講釈とお聞きなさるのは御尤もだが、全く左様では御ざえやせん。アノ茶の吉が、お前さんのお宅へ結構にゆかれて出ようと存じて、其の事を話して居たところでござりますと茶の吉がお前さんのお家へ参つて、堪忍して下さる段、日には大変だト申すから、此の下郎がに」上「左様々々、譬へいへば、八百木はおやまり講文を高櫓橋に朝顔にのみれて、茶の吉の顔形はおれがの家の前の瘦犬をかけまに買つても、自己が中へはひつて倍謝つてやらうと、勧めて居たところで御座いますよ」源兵衛「ハヽヽ夫れではお講釈ではなくつて、仲人にはめいうといふ御相談かえ、何様いふ趣意か知らないが、町内うちのことなら、及ばずながら、私も目をつへて上げませうかネ」

喜次「ナニサ貴方へ倍禮につれて參らうトいふので御座います。」源兵「ソムヤお長屋の衆は、今月はお前さんか、ヤレ／＼御苦勞下さんす。」喜次「ナニサ長屋うちのことでは御座いません、先刻湯の中でおまへさんに失禮をいたしたのは、今亦人違ひでお前さんを驚かした男で御座いますから、その人物を倍禮に。」源兵衛「ハヽア成程。イヤそれならば別段御挨拶にはおよばない。風呂だうでは何本もある足だものう、生憎つらまつたのが此方の不調法、時にとつての不仕合と申すものだ。」ト、此の源兵衛もお心よしと見えて、何事も氣に留めぬ樣子を、茶々吉は雪隱の中にて窺ひすまし、六ケしきこともあるまじと高をくゝり、頓てのそ／＼出で來り、源兵衛が前にもぢ／＼しかしこまり「是れはお家主樣、先達は洗湯で御失禮つかまつりました。ナニサアノ、彫物だらけな野郎が、餘りりきみやアがるから、ナンぼうしいめに合はして遣らうトぞんじた所が、ツイお前さんの足をつらまへて引張りやした。全體お前さんの足は大層なお毛がお生えなすつて御在でなさる、彼の御樣子では東通寒などをいくらめし上つても、お氣づかひは御座いません。何卒失禮のところは眞平御免なすつて、下さる樣にいたしたう御座ります。」源兵衛「イエサ、御挨拶では痛みいる。必竟私が惡いところへ足を出して居たので能くなかつた、出る足人にひかるゝのたとへ。サア／＼お構ひなく雪隱へおはひんなすつてお在でなさい。左樣なら喜次さん、お講釋が有るのだト思つて大きにお邪魔をしました。何方も澤山お嘶

しなさい。」ト言ひつゝ表へ出でゝ行く。茶の子「べらぼうに氣の宜い家主てきだなゥ。」喜次「ア、見えてもなか／＼の通人サ。」茶の「道理で足にいかいこと毛が生えて居たッけ。」下太「夫れは宜いが、彼處の隅にある廣蓋の肴は何樣したのだ。」喜ろ「違へねえ、自己も先刻から左樣おもつて居たが、出すものならさつさと出して仕舞へばいい、冷く成るぜ。」喜次「出すものだかひつこます物だか、自己にも釋らねえのだ。」のら「モウ野郎どもは出て來さうなものだなア、何をしてるやアがるか。人のくびを明咽させやアがる。いつその事お施主に構はず、鍋妙喰ふれんけきやう、中の汁がだゝぶだぶ／＼と、お經をあげて仕舞はうぢやアねえか。」下太「左樣サ、こいつア上げて仕舞ふはうが宜い、夫れでねえと五人の亡者がうかび兼ねること」ト、言ひつゝ立つて廣蓋を持ち出でんとするその折柄、表の方にて大聲上げ、「御上酒のお入イ引。ドン／＼トヒウ、テン／＼／＼テレツク／＼テン／＼／＼／＼」ト言ひながら豉助が、片手には壹升樽、片手は突袖しながら威張りかへつて這入り來る。此の時裏口よりも障子引き明け、「御上酒のおいりイ引。ドン／＼オヒウ、テン／＼／＼テレツク／＼テン／＼テン／＼。」ト言ひながら飛八が、片手には壹升樽、片手は突袖しながら、何か鯱なぎくしやくとしやッちこ張らせて入り來る樣子、趣向ありげに見えければ、喜次郎はじめ四人のもの、顏見合はせてためらひ居るうち、豉助と飛八は、猶もヒウテン／＼／＼／＼ト言ひながら、持ちたる酒樽を其處へさ

し置き、ほね「扨上使なれば上座御ありんト申すところなれど、上酒の儀に御座りますれば、上へ[illegible]らず則ち是れに居り着きますする様に御座ります。」七八「跛助は上酒なぞと申しますれど、私の[illegible]上酒では御座りません、眞にお麁酒でもありましたで差し上げます[illegible]是れは有り難うござります」[illegible]「左樣して何かいかめし氣な御容子なれど、御口上はたゞれでお仕舞ひに御座りまするやと」[illegible]「左樣で御座います、もはや皆に相成りました」ほね「御持參の樽の中は、さぞの御酒で御座りませうな」[illegible]「左樣で御座います。只今四方の見世にて、一樽に付き二朱を一ッ差し出し、上酒なら[illegible]十二文、つりを取つて買ひ求めましたれば、酒がとたんになりますやうに御座ります」[illegible]「二朱[illegible]一朱は何樣して御上をなさいましたか、今日はお下着が一枚御不足のやうに見えますが、若しや手ばなしでもなさいまりは致しませぬか」ほね「イヽヱあれも飛ばさうトぞんじた所が、借まはしが損じましたれば、漸く二朱ト六百しか用だたぬト申します」[illegible]「夫れはけしからぬ下直なこと、私の目利では百疋一朱がものは有ると思はれます」下たち「左樣にむごい事なりますなら、いつそのこと居は御座いにお賣りはらひの方が増か上りませう」[illegible]六「時に跛助どの、彼等はけしからぬ失禮を申すやつらでござる、もはや口をおききなさるナ」ほね「左樣々々、夫れが宜しく御座る」[illegible]「イヤモウ喜次郎どの、先刻鳥花やへ申し付け、山海の珍味を差し上げ置いたる筈、定めて參つて御座りませう」[illegible]「如何にも先刻參

りたれど、是れなる四人の者共が悉く喰らひしゆゑ、入物許りは残し置きましたる様に御座ります。」
喜「エヽこはれたうか。」はね「いけねえぜ〳〵。しどい事をしやァがつた。」ト、立ちにかゝれば喜次郎が、
「トいふつゝ驚かしたるまでのこと。ちやァ〳〵意地きたなしが、執念のかゝつた廣蓋を出したり出した
り。」喜六「ナッヽ承知だ。」きの「運べナァ引八十里は馬ァでも越すがナァ、引はッはやつこりやどつ
こい重いぞ〳〵。」ドた「イそれ傾げて持つと離れるわ。」のろ「鍋は冷えたから火鉢へ掛けることと
しよう。」ト、是れより七人うち圍居飲むほどに喰ふほどに、鼻介飛八が持ちきたりし二樽は、たちま
ち枕をならべて板の間の隅にころげ、廣蓋の上には入物ばかり空然たり。喜六既に先刻この亂軍に成
らうといふ所を、大愚にさゝへられ酒戰なかばで終へたのだが、斯う見えても重詰許りおやァねえ、
いざと云へば持ち出す積りで、肴の用意はして有るのだ。」ト、戸棚の中より二種三種のものを取り出
し、是れは吸物是れは鍋と直にしかける肴の後釜、酒宴また〳〵盛んにして、いつ果つべきとも見え
ざりけり。大「時に明後日は初卯といふのだから、連中一同で押出しおやァどうだらう。」のろ「宜かる
べしよかるべしだ。」きの「亦婦人どもに惚れられようといふのか。」喜六「ナッヽ自己といふ好男子が往
くから左様はいかねえ。」ドた「エヽイ亦凸凹共がいがみ合ふのか。」喜「陸から押さうか船で往かうか。」
のろ「陸にもせよ船にもあれ、七偏人とも言はるべきものが、只往くといふ法は有るめえ」はねた、なん

の只往くものか、人々に何程でも面工をするが宜いワナ。」のろ「エヽ、釋らねえ、只は往かれぬえといふのは、何か趣向をせにやア成るめえといふ事だハナ。」ひよ「侘びて行けば吹聴、華美にやれば其者を召し連れるのサ。」のろ「夫れはサ、通例の人のする事だハナ。左様でなく何か一ト面白い趣向が、ちよツト思ひだした、アノ池の端の和次さんの連中を見た様な事を遣つたものだ。」ひよ「人を荷がうといふのか。」のろ「奇荷バヽのみかい、ホイ鬣絶の連中だらうの。」ひよ「ムヽ、イ無言つてるのさ。」のろ「茶番といふやつで往くのかね。」ひよ「左様サ、その茶番サ。」のろ「夫れなら極面白い筋があるぜ。」ひよ「何のお前の智恵でろくなことが出来るものかね。」のろ「左様いふけれど、是ればかりは年来臨んでおいたから、眞にどうト請ける積りのだ。マア彼様いふ趣向サ、一寸聞きねえ。ホイ紙數が盡きたに成つたか、嗚呼惜しいけれどう仕方がねえナア。」

妙竹林話 七偏人二編序

似て非なり桐に鳳、竹に猫と、例の善悪なき俳諧の、狂句に洒落た口號に、聊か因める竹林、ハア豹脚を相手に酔語を巻く、七賢人に似て非なる、妙竹林話の七變人、數も七色唐がらし、胡椒粉、芥子粉、山椒粉、甘いと辛いを舂き交ぜて、爰に著述せし金鵞子の、滑稽笑話を一回開けば、野面老爺の固藏も、思はず腮の掛金を脱し、臍に茶を沸かし、悋氣顔の屁っつり野郎も、フ、、、、フッと吹き出して、笑ふ門松飾は内、鬼討豆で無事息才、笑ひの内に嫁喪して、即座に平快る良剤奇藥は、文と世界に人の穴、妙に穿ってこざいますさ、下僕から聞から謹賞し、愚文ながらも三番叟、トッパヒャヒャヒと上鴉飛び、東天紅と告げ渡る、時を夜明の宮神樂、初卯參詣の戻り路、一寸一盃立茶ばん、たまの閑まさへ太鼓橋の、音にかよひたる天神橋、人は巴に溷みあふ、下にはにやし連中が、音曲入の一趣向、鳴り響くまで興を添へ、誰か中ると聴くさへも、枉先よしと似て非なる、紋ありきものを有りの丈、智慧をふるくも猫糞で、筆に頭顱を掻くのごとし。

清江舍秋水誌

三人で三分なくなす智慧を出しとは、川柳者流の穿ちの妙句、實に若いどし打寄れば、寢いる猫も狼ものも、面白狸の腹鼓にそゝなかされて、磯端から船で往かうか、お駕籠にしようか、夫れともおつと氣を替へて、二十四日は愛宕山、月の八日は茅場町、大師河原、堀の内、緣日あるき信心參り、あるは淨瑠璃茶番のくはだて、見世物芝居の見物に、とんだございの散財を、オツト來なせと存ゑこんで、前後構はぬ無分別も、其の座の餘興といふべきなり。然れば七人の懶惰者も醉ひの廻るに隨つて、彌道化の枝葉をそへ、今年の春の初備し、惠方がてらの初卯まうで、往かずんばあるべからずと、連中まつと乘氣に成り、思ひ〳〵いたる茶番の趣向に、喜次郎鼻をうごめかし、「拙己が年來監へて置いた茶番の筋といふのは。」茶め「オツト待つたり、此方にはその年來の天窗へ、數の字をとまらせて、數年來仕組んでおいた趣向といふのがあるから、平の年來は次へまはして、位のついた年來から先へ本讀に掛らう。」虚ろ「しかし數といふ冠り付きなら、申し上げてもお取り用るにはなるめえ。臥てすの字の付いたものに、ろくなのはねえ、すこたん、素股、すほける、すかし屁サ。」茶め「イヤ

サ、すかし屁だか階子屁だか、本讀を嗅がねえで釋るものか。エヘンヤツと、先づこ」 下太「すいきそ
の先づといふのは、美味くねえといふ發語のことばかし」 下太「エ、手前も出るか、だまれ／＼。」
ン擇ェ」 ぬら「アハ、ア先づでなけなしの鼻ツぱしらが捻ぢられたもんだから、擇といふ胡蘆を發した
わい」 喜次「しづかに／＼、本讀のすむまでは當人の外口を聞きツこなしだ。」 だめ「夫れがいいそれが
いい。ア、其處で當日は此處の河岸から一葉浮べるとして、大道具小道具鳴物一切積み込み、朝ま
だきより棹さして、御道筋は堀川通りの天神橋から御上覧で、妙義の社に參詣す、天滿大自在
天印の瑞籬に額づき、茶番長久滑稽にんじやう、並に女難除の祈りをあげ、かへりまうしの悅びに、
何處までちよつぴりきこしめし」 下太「エ何のこつた、其樣なお目を叩かれねえで、はやく本讀
にかゝらねえと、嗅いでやらねえぞ」 だめ「アツア釋らねえないノヽだぞ。料理を出すはとつて、膳
立かいしなけりやアならず、一寸した文章を書くにも、枕言葉といふがあるわけに」 上「イヤ／＼足
下のすかし屁の臭いのは、屋守さんも御存じだわ。」 喜次「ア、シツシ、夫れから其處で何樣いふ筋
になるのだ。」 だめ「いよ／＼人の出盛つて來る汐ごきを見定め。」 下太「沙魚か鯒でも釣るやうだノヽ」
だめ「夫れから沙魚をエ、じれつてえ、はたから口を出すので、釣り込まれてならねえ、だまれ／＼。
其處で押上の通りを中頃まで戻り立ち止つて、自己が田甫の方の空を詠め、不思議さうな顔をして、

イヤアレ／＼何だか降つて來る。すヤ／＼田樂を見たやうなものだ。ソレ／＼トいふと、喜次さんも同じく空を見ながら、ホンニ何だか降つて來た、ヤア／＼彌次郎兵衛ぢやアねえか。アレ／＼彼處へも落ちた、ソレ／＼むかうへも降るわト、頻りに二人が不思議がつて騷ぎたてるトいふので、往來のものも何が降るのかと思ひ、立ちどまつて空を見るは必定ス。」卒「夫れにお前の顔は鼻の穴まで空をうかゞつて居るから、猶々人が正眞にするワ。」喜次「おつりきだ／＼、シテ夫れからの獻立は。」茶め「虛呂松先生ト毀大將は、自己達のゐるとこから、一町そこら隔れてゐて、同じく空を詠め、アレアレ何か降つて來るワをきめて、往來の人をたぶらかすサ。夫れからまた二町ばかりへだてて、下太の君と飛將軍が、その傳をやらかすトいふもんだから、土手中の人が皆仰むいて空を見るやうになるわサ。」喜次「フム、なか／＼たくらんだナ。」卒「奇てれつだ／＼。」茶め「其處で野良大人は一人、かねてより川向うの土手の上にまはつて居て、其方へかけ歩行き、こつちへ驅け歩き、何か拾ふ身ぶりをしながら、

今々吾妻の森において、七偏連中打より、一世一代の大落實興行
仕候間、御勝手次第御入來御見物可被下候以上

妙竹林の七人男

正月五日

江戸神田中まま

ト書いた紙を三ツに折つて串へはさみ、妙義さまから出る御札として、道端に挿して持つて居て、田のふちの枯草の中へ、落して歩行かうといふのだ。「是はなる程拾ふものがありさうだ。」「さうさ、其處で自己たちがアレ〳〵、彼處へも降つたかして、彼の男が拾つてゐるぞと、何様なら外だが寄つて見ようと驅け出して行き、ホヽヽヽ屠蘇ないふる、まア〳〵ふんだ御前の御札の様なものだ、ソレ其處にもあるワ、アレ彼方にも落ちてゐると云ひながら、此方人等も拾ふものか、夫や夜中に落して持つてゐて、やたら無上に蒔いて歩行かうといふのだ。」「ウムそれは美味々々。」「此方でも骨湯の湯骨か。美味々々。」「チヨツ道理でしづかにして居ると思つたら、寄つてたかつて骨をしやぶつてるやアがる。そして銚子の中から屠蘇の袋を引出して、何様する積りのだ。」「そのだから酒も此の通りない。」ト德利をさかさまにして尻をポン〳〵と叩き「屠蘇のお銚子もれこうだわ。」ト振りちらかし「其處でハア爲方がないから、屠蘇の袋へしみこんだ味淋を、チユツパ〳〵吸ひましたに

ぜへいつもりのだ」 虚「チョッ誠にしやう、ねえ猿どもだぞ。モウ／＼茶番の筋道が付くまでは、飯までも食はせもしねえから左様思ひねえ。」 卒「ハヽヽ左様思はなくつても、鍋や皿に喰はれねえから、左様思ふのも同然だア。」 虚「ア、レ臺所の戸棚をがさ／＼やつて居やアがる、エ、エ何奴だイ。」 權助の聲 「二階ノ焼いておつ喰らうべイとさがしことをせるだに、何を呼ばるのだア、さうだ／＼し色にて いう」 虚「エ、打捨つて置きねえ、どうせ仕方のねえ奴等だから。」 虚「いい／＼、勝手にしやアがれ。ア、ア其處で、此方人らも拾ふ積りで歩いてゐるくのか。」 卒「左様さ／＼。夫れを見ると往來の人達が、われも／＼と皆拾ひに來るわな。すると其地此地に落ちてゐるといふもんだから、是れは不思議、ハヽ何であらうと取り上げて、串を抜き開いて見る、ト例の散しだらう。」 虚「フム、ヽヽナヽ。左様來る日にやア、拾つて土手を運ぶから、本所は扨置き、兩國までも、時の間に廣まるだらう。」 虚「夫れにもう左様なると、火消も手を引いて、見物してゐるから、」 卒「しかし川を平ふで來られた日にやア、茶番どころの騒ではあるめえ。」 虚「エ、お運び日なんぞとおくな事アござ付きやしかねえ。」 卒「ハヽヽ是れ付くの付かねえのト、大層なことを云つたつて、足の中でコレ斯様して出て行く事に、誰にも出來ねえ、ソレ、ほ、よいこ ト、、、どつこい。」 虚「ナニノだれしきな事、お茶の子だ。自己なんざア、ソレ右の足も、アレ左の足も、ねんだ首へひつかけて、仕舞つて見

ごばかりるさるのだ。ツレ〳〵、はゝ、ぜへ、これツ、〳〵、ここ」[illegible]「そんなら彼様にして逆に成つて、手で歩行くことは出来めえ。」ト云ひながら、俺へ兩手を突き、足をひよいト上の方へ跳ね上げると、御含へすぎて仰向にぱツたり向うへひつくりかへり、火鉢の角へ頭を打付け「アヽ、ツヽヽヽヽアヽ、痛え痛え。」[illegible]「此のべらぼうめ、何をしやアがるのだ。」[illegible]「置きもしねえがア、いてえ。鮪、鰤、烏賊くつて斬へられねえ鰈、嘘とおもつて、〳〵さ魚は喰えねえ。」[illegible]「ヤヨツ此様なとんちきに構はねえで、ヤア〳〵茶め公、其の後はどうだ〳〵。」[illegible]「扨も此方人らは散しを蒔いて、さんぶんに往來の人をたぶらかし、ヨシと思ふ時分場所を切り抜け、兼て船公に妙見下へ船をまはさせて置き〳〵、其の船へ乗つて直に吾妻の森へ乗りきり、神主にきに談じこんで、お湯花につかふ大釜を借りこむ。」[illegible]「茶番に遣ふと云つちやア、お湯花の道具は貸すめえぜ。」[illegible]「まア聞きねえ、そのお湯花の大釜を程よき所へ居ゑて、吹きこぼれる程湯を沸らし、五六匁の茶を二三斤もぶちこみ、また煮花をこしらへるのだ。」[illegible]「ハテネ。」[illegible]「ヘヽ、エヽ。」[illegible]「シイッシ。」[illegible]「其處で自己たちの形のこしらへは、釣士が海の中で履く脚榻といふ物より、もう一際丈の高い足駄を履きこみ、その上から大夜著を著て、身の丈八九尺ばかりるに見える様にし、子供が持遊びにする張抜きの大天窓を被つて待ちかけて居るト、彼の散しにおびやかされて、数萬人の見物がえいたう〳〵で押しかけて来るところを、

心得たりと大釜の茶を茶椀へ汲み、一人々々に持つていて、「則ち吾妻の森の大茶番で御座いますトいふ落ちだが、何樣だノ＼。」飛「ウ、ツ。」喜め「何故人の面を覗くんだい。」甚「始終は其樣な事だらうト思つた。」甚ろ「夫れだから數の字のついたのなら云ひなさんなトいふのだ。」喜め「高足駄の上へ大夜著を著込んで、丈を一丈にもこしらへ、茶の番人をしてゐるから、大茶番だと云ふのが道理に協はねえのか。」野ら「すつかり落ちてゐるヨ。始まりから見れば、ぐつと趣向が惡いから。」喜次「大序から三立目あたりまではなかノ＼劫かしたが、肝心の大詰が吾妻の森の大茶番では、ヤンヤと云はねえやうだ。」喜め「喜次さんまでが其樣なわからねえ事を云ふわス。」下太「ハヽア涙ぐんで否に怨みつぽくにらみやアがるぜ。」喜め「アツア吳子胥しんで吳國ほろび、范蠡さつて越國衰ふ、是れ程のことを監へても用ゐられねえ日にやア卞和が玉だ。孔子の聖なるも時にあはずス。」喜次「イヤサ足下の趣向だつて、捨てたのぢやアねえが、ト云つてひろはうといふにやア、ちつくりト色氣が無くツちやアいかねえ。」喜め「ハヽ出來もしねえ奴に限つて、色氣々々と色氣がりやアがるわ。」下太「そこで數年來のはうの方はついたが、是れからまた、只の年來の本讀が始まるのか。」野ら「ヤレモノ＼情ない御事だか、僉は夫れをきく料簡か。」飛「然ればサナウ、數年來で手ごりをしたから。」甚ろ「夫れは今餅飯が燒けるからノ。」喜次「オヤ、フヽ何か焦げる樣な匂ひがするぜ。アヽ、フンノ＼。」甚ろ「酒あれども肴

なしたらいいが、酒なくつて肴なしに成つたから、餅飯を焼つてきこしめさうといふのだが、不器ッちやうに大きな網で、土俵のそとへはみ出すから、邪魔に脩の木、椋ろんじ、山椒味噌でもつければよいといふのだ。」喜次「イヤハヤきましいにもほどがある、何様すりやア左様にくらひてえのだ。」飛「とはいへ餅なら自己も喰ひてえ。何故といふに、是れから喜次さんの本意を聞くのだが、どうせろくな趣向はねえから、請けてゐる間が何よりのお仕置だけれど、そこで餅食つた報いと明らめて仕舞ふわス。」茶め「お前はでく〳〵と肥満つてゐるから、餅くつたむく犬だらう。」跳「夫れも聞ぬけに馬鹿げの斑色でおいで遊ばすわス。」飛「此の野郎不屆なことをいふナ。」ト、跳助が胸ぐらを取つて押し附ければ、跳「エ、モじやれるト、木蝨がくつ付くわ。コイツシ」ト太「ア、アそこで噛み合ふと毛が落ちてたまらねえ、彼方へ行け彼方へ行け。」野ら「イヤハヤわんだかきやんてつもねえことをいふ奴等だぞ。」虚六「サア〳〵喜次さん、おいら〳〵にも構はねえで、本題をはじめねえナ。」ト太「夫れがいい夫れが宜い、いつそおもひに聞いて仕舞はう。」喜次「一思ひにでも二輕いにでも勝手に聞け。先づ自己の筋といふのは、一人が諸國武者修行の學びといふので、黒羽二重の紋付、無地博多の小袴、紫ちりめんの上帯に、強物作りの兩刀武者草鞋といふ著付で、天窗が中五分の草たばねサ。其處で紫の袱紗包は、木太刀を一本くゝり付けて、脇の下から肩の所へはすッかけに引背負つて、

胸でぐつとひん結ぶといふ奴だから、丸で成駒屋の宮本武藏と云ふ拵へだ。」下上「ナニ宜か〳〵、さしづめ自己の役まはりだ。」貞「馬鹿なことをいふ、飛八さまを除けてお前なぞに出來るものか。第一武道立役といふ相形でねえわな。先づ眼尻が引きずり下つて、鼻筋が内へも通らず外へも通らず、路次の蜘蛛の巣と來て、兩方へひつぽれて居るといふのだから、蕃にかいた三ツ目入道で、大丈六をかいて居るのだわな。」「エ、吠えるな〳〵シイッシ。」内ノ「扨自己の形が鼠木綿に鼠の頭巾、鼠の帶を前のところでお寺結びといふやつに捻ぢ込んで、鼠の脚絆ぢやん〳〵ばしより、勿論鼠の紙衣を著て首には鼠の頭陀袋をかけ、如意とかいふ物代を襟へ挾むといふのだから、男の宜い女惚れのする宗祇芭蕉と云ふ拵へ、尤も歌修行の行脚と見せる積りのだ。」貞「如意をさして行脚と見せるよりは、撞木を持つて槃若と見せるはうが能く似合ふぜ。」五郎「エ、エだまらッせエ〳〵。」貞次「ノ、ホ、、其處で今一人の人形は、ぐつと仇ッぽい中年增といふのだから、古人坂東秋香の役廻りだ。」貞「自己も遊ばせて置かねえ料簡と見えるワエ。」下上「又出るヨ、ひつこめ〳〵。」貞「もつともこの女形は船宿の内儀さんといふ拵へでも、町藝者といふ作りでも、そこは當人の好みに應ずるサ。」下上「そこばかりでなく、蓋も應じて仕舞ふがいい、いき事ならみんな此方の地にあるのだから。」貞「地に有らうが天にあらうが、火吹達磨やひよつとこの身代りに立たうといふ面色では、かゝり合はねえ事だわな。」

下太「何のかゝりあはねえといふが有るものか、自己の大和屋に似て居るといふのは、喜次これも知つてゐるから、此の役をこしらへたのだ。」喜「ヨシサ／＼、氣を慥かに以て居さつシ。ト、其處で武者修行どのは、法恩寺をまつすぐに龜井戸の方へ来る、また自己は例の歌修行で、龜井戸から法恩寺の方へ行き、天神橋の上でぱつたり行き合ふといふ手筈にして、行き違ひながら自己が武者修行どのをじろ／＼見て、

劒術のこむ手薙ぐ手はならひても十文字さへ書けぬかなしさ

といふ古人の狂歌を口ずさむと、武者修行の男が聞きとがめて、ツカ／＼と立ち戻り、今吟じたる狂歌は、全く拙者をあざける一言、そのまゝにやはり通さうかト、紙布の袂をしつかり取り。」喜「イヤしつかり取るのはよすがいい。若し縫ひでも切らすと、損料許りでは濟まねえから。」下太「シイッシ」喜「だまれ／＼。」喜次「されども此方はぐつと落付き、コレハ近ごろ迷惑千萬、いかで貴殿の事を申さん、古人の狂歌の浮びしまゝに、思はず知らず詠ぜしのみ、そこ放して通し給へトいふと、卑怯なり臆したり、人に雑言いひかけて、逃ぐるとて逃さうやト、云ひつゝあとへ引きかへす、その手をとつて突き放せば、二足三足たじ／＼と、よろける足を踏みしめて、ヤア小ざかしい賣僧の腕だて觀念しろと云ひながら、背中の木刀抜き取つて、眞向微塵と打つてかゝるを、襟にさしたる如意を持ち、右

手にカツシと請けとめる、トいふ此處からが武藏と笠原の鍋蓋のたてでいかうといふのだ。」野ら「フムウなか／＼をかしろさうだわえ。」喜次「其處で二人が宜い加減にごたつき、左右へぱつと身を開く所へ例の女形が、マア／＼待つてお二人さんト、聲かけながら駒下駄で、ト、、、トンと足踏しながら中へわりこみ、そのトント踏み止めた足踏を相圖に、かねて橋下へ著けておく船のなかで、ヨオ引イ、ヤ、チャン／＼／＼と三味するを切掛に、二三人は、お前女でおいせさん、ト三國拳になり、あついや踊と變じて、船のなかへ所作りこむト、直に三味線は佃と替り、吹けよ川風あげろよ簾、チャンチャ、チャン／＼スチャチャンカ、チャン／＼で、竪川通へ漕ぎもどさうといふ趣向だが、どうだ／＼」下大「いつもの不手際にしては出かした／＼」野ら「出かした／＼では可笑しかくねえ、喜次さんは天窗が大きいから、でこした／＼と云ひてえ。」袋「妙義參詣の人は繭玉をかついで、自己たちは參詣の人をかつがうといふのか。面白い／＼。」畠「役割を極めすばなるめえが、武者修行といふのはさしづめ跂助さまと來るだらう。」野ら「どうして／＼左樣はいかねえ。」虎六「そりやア野ら公の云ふ通り、自己といふ好男子がゐるから、他の者はとてもお間だ。」袋め「ヘン何奴も此奴もおいらの趣向へは肩を入れねえで、主人に許りおべつかやアがらア、賴もしくもねえ。」虎六「おつう否こだことを云ふけれど、其處のは勞痎筋、成田屋筋なんのといふので筋立がむづかしくねえから、僉がもちるねえのだわ。」

茶め「いいといふことヨ。ナニノ僉は何樣な事でもしなせえ、自己は御免だ。」喜次「ドレドリ其樣な事を云つちやア納まりが付かねえわ。」茶め「納まりが付いてもつかねえでも、自己ア否だといふことサ。」喜次「たれぢやア斯うしよう、お前の仕組んだ狂言を取らねえかはり、武者修行と云ふまうけ役をやるがいい、あれなら隨分請けるぜ。」茶め「左樣するとまた僉が種々なことを云ふから、矢張よしにしやせう。」喜次「何の誰がなんといふものか、ナウ虚ろ公。」虚ろ「そりやア下太しうだつて跛公だつて、不承知はあるめえス。」野ら「全體武者修行の役は、茶め公一本槍だもの、誰がなんといふものか。」喜次「二階一同の見立てだから、其の意に隨ふがいいぢやアねえか。」茶め「其樣な事を云つたつて、いざといふと面のごんそうが出たり何かして。」喜次「自己が請合ふよう。」茶め「いよ／＼か。」喜次「いよいよだヨウ。」茶め「先づ斯う念を推して置いて、ヘエンウフン東西々々、扨此の度妙義まうで茶番武者修行宮本武藏相勤めまする役人、色師の茶め吉、尤も當人役不足にはござりますれど、連中一同の賴みに付きもだしがたく。」野ら「エヘ、と横ちやく者めが、此の役を取らうと思つて、わざとしやアねやアがつたのだナ。」茶め「ヘン智慧のねえ奴等をだますのは、女に惚れられるよりざうさもねえわサアサア喜次さん、稽古に取りかゝらう。」喜次「ハヽヽアおつう遣りくつて皆を出し拔いたナ。時に女形といふのだが、こいつア諍ひのねえ樣に鬮にしよう、何でも長いのを取つたのが、お山をやるのだぜ。」

ト喜次郎が鬮をこしらへ差し出せば、てんでに下洒落を云ひながら是れを引くに、虚呂松長いのに當りければ、跂助、野良七、飛八、下太郎の五人のものは不承々々に、唄人、三味線、また後見と役割をきめ、喜次「サア／＼すつぱり揃つた。そろ／＼稽古に取りかゝらう。」茶め「オツト承知之助。」ト立ちながら飛八が燒いてゐる切餅を、ちよいと一ツ撮んで頰ばり、「ア、うめえ／＼。そりやア宜いが喜次さん、何か持たずばいけめえ。」オツト妙、サア此のしんばり棒だ。お前は何をもつ。」喜次「自己は孫の手だ。」下太「マア待たツし。此處らを些とかたつけよう。」虚呂「ア、能く喰ひちらかしたなア、丸で安達が原だぜ。」野ら「貴様も餅にばかりかゝつて居ねえで、此處らの物を運ばつし。」ト、皿どんぶりを勝手の方へ押しかたげ、跂「サア／＼舞臺が出來た。」茶め「ありがてえ／＼。」喜次「自己が狂歌をよむ、お前が聞きとがめて、逃ぐるとて逃さうかト、自己の袂をしつかり取る、エ、サ、無言つて、取つちやアいかねえといふに、何だアな可怪しな目附をして。」茶め「エツ、ダエ、ア、おめへが餘り急き込むもんだから、餅を鵜飲にしてしまつた、ア、くるしい。ソラよしか、逃ぐるとて逃さうかと袂を摑む。」喜次「其の手を採つて突き戻す。」茶め「たじ／＼／＼と、足もがつて、イヤどつこいと踏み止める。」喜次「ヨ引シ、そこで背中の木太刀を取つて打ち込む。」茶め「ヤ、カウカ」喜次「ア、いたゝゝゝエ、此の柬埔寨ア、何故人の天窗を打つこだい。」茶め「ハ、ア お蔭で額のお出子が凹んだ

ふう。」喜次「夫りやァ宜いが、孫の手をどこかへなくしたよ。」下太「おめへ腰にさして居るぢやァねえか。」喜次「違へねえ、ソラ打ち込む、かう請けるよ。くるりと廻つてよ。」きの「ドツコイ、ト、、、、ヤウン。」喜次「コレサ其様にギツクリにふんおやァ狂言になつていかねえ、何でも正眞と見せなけりやァ可笑しくねえのだ。」茶め「夫れでも成駒屋が、こゝのところでウ、ンと一ばん幅をきかせたから。」茶ら「チヨツ何ごとといふと成駒だの音羽屋だのと、わりい料簡の奴ぢやァねへか。」きよ「ナニわりいのだ、男といひ仕打といひ。」喜次「いいサく。ソラ斯ういく、ウウ、く、はア。」茶め「こゝの所でトすンとぎばを突いて、一番身の軽い所を見せて遣りてえ。」喜次「其様なら前のところを斯うやつてソラ、ソコ、ソコ、はア、イヤドツコイ、はア、そこらそこでヨウ成駒だ。」茶め「ナツト承知。」ト、兩足前へ投げ出し、尻へにドツサリ居りながら、片手を疊へ突く機に、火鉢にかけたる網のふちをはね飛ばせば、焼きかけたる切餅はばらりト四方へ飛び散つて、茶め吉が襟の中へはつたり這入れば、茶め「アツ、、ア、ツ、、、。」ト、あわてゝ跳ね起き、「ア、餅のかけらが、、ツ、、、、。」喜次「コレサなにをふざけるのだ。」茶め「エ、ふざける所か、ア、ツ、、、。」と首を前へ突き出すと、焼餅はずるくトトの方へ落ちる故、「ア、ツア、ツ、、。」下太「ナニ餅の中へ襟が入つた、ドレく。」茶め「ア、ツ、背中だく。」下太「是れかく。」と、着物の上から押へ付ければ、茶め「ア、ツ、ア、ア上から押され

てたまるものか。」ド六「オツト承知、隠家さへ當りが付けば、著物の上から餅飯を取捕まへ、からいふあんべえに引張ると、餅と體の皮の間が透くから、カチ／＼山の難はのがれる。」ト、云ひながら餅と間違へて、ふんどしの結び玉を股引ぐるみグツト引くと、餅は帶の間をくゞつて尻の所へまたずるずる。」茶め「ア、ツ、、コリヤ何様する、尻が餅へはひつたわ。ア、ツ、ア、。」ト飛び上る拍子に、疊に落ちてゐる餅をぐつしやり踏み付けて、「ア、ツ、ア、ツ、、、。」ト足を上げてふるつても、踵へひつたりくつ付いて放れぬ故、ちん／＼もぐらではねて居る足元へ、後方の方から飛八が、焼いた餅をちよいと一ツ投り出し、知らぬ顔をしてゐるト、茶め吉はまた踏み付け「ア、ツ、ア、。」ト、後へどつさり尻を突くと、股引の間へ落ち込んだ餅を尻にて平潰し、「ア、ツ、、、アツこりやア此奴等ア、ア、ツ、ア、」喜次「アハ、、アきてれつ奇の字だ。茶め公立引があるなら、其處で一番屁を放つてくれ、さうするト、餅ぜめ屁責は厭はねどといふ洒落が出るから。」茶め「コ、此奴らア夫れどころか。」喜次「ヤレ／＼哀れに踏み付けたなア。」ド六「お蔭で皸の割目がうまつたらう。」野「足袋を脱がなけりやア、此の難はなかつたに、足袋とは／＼のほ、よほ／＼く焼餅また踏むわいイな。」茶め「チコツ此樣に尻へひつついて仕舞つた。ア、いたゝ。毛がみり／＼いふわ。」ト、一人もぢ／＼尻へ付いた餅をへがしながら、股引のまへのところから振ひ出せば、喜次「ソリヤこそ御安産だわ。」喜次「ヤレ

「ソレお目出たい／＼。」と、連中一同の大笑ひとなり、夫れより稽古もあらましすみて、右は當日の評定に、各餘念はなかりけり。

二編　巻之中

斯くていよ／＼初卯の日と成りければ、龜戸の中なる妙義の社へ参詣せんと、彼の七人の連中は兼て工みし茶番の趣向に、衣裳小道具とり調へ、喜次郎は歌修行の僧、茶め吉は武者修行の武士、虚呂松は年増女のこしらへ、また跳助、野良七、飛八、下太郎の四人は唄人、彈人、後見と役割をきめ河岸の柳屋よりして小機轉の利きたる若者を雇ひ、船押し出し兩國川を横ぎりて、竪川通を漕ぎいれるに、例の龜子れんぢう用意の酒を飲み始め、醉ひのまはるに隨つて、また一倍の勢ひつき、「モシ此のうつきりとして凜々しい拵へを、船の積みこみにして置くのは、土中の玉で惜しいもんだ。早く婦人どもに見せて、眼の保養がさせて遣りてえから、自己ァあんがして岡を行くぜ。」虚呂「ホヽ、ニ私も歩行く方がいいのだョ。全體船は血の道にさはつて、寸白に悪いのだから嫌ひサ。モシ船頭はん、誠にお氣の毒なのでありますけれど、其處らの棧橋へちよつト著けておくんなはいな、アノ後生になることで有りますから。」喜「ウ、ツどうだェ、去年の夏大山へ往つた時、斯くのごとき飯盛に出ッかはした

事があつたつけ。此のまア氣障味へ直段つけしたらば、何程ぐらゐの相場だらう。」口八「釋迦牟尼佛にふませれば、無量劫といふ入札で程もかぎりもわからねえのだ。」虚ろ「ナンノお前はん方は譯も知らないで、安ッぽくお言ひなはるけれど、人は美面より牀上手、そりやアもう可愛がつて〳〵、手前になら命を撮みとられても惜しくはねえ、ホンニ殿御の命とりだと言つてお呉んなはるお人があるんで有りますヨ引。」たあ「だまれ〳〵コリヤ船頭、かやうな鼻持のならぬ女郎が居つては、神免二刀流の武藝のけがれぢや。身共はこゝより上船いたす、かしこの岸に船よせさふらへ。ナニ同船の方々、御縁つきずば重ねて逢はう。アッア蒼海原のしん〳〵たるよい天氣は、とう〳〵たる初春の詠めぢやヨなア。」下太「兩人ともナト取り逆上せてゐる樣子だが、是れでもいざ鎌倉といふ時、じたばたと跛ねまはる役に立たうか。」喜次「役に立たうが居らうが、そこに構はず蓋に構はず、餘り聞へ上りたがるから、其處らの河岸から追ひ放して見ようぢやアねえか。」喜次「だが虚呂公、お前は天窗が鬘だから、何程女ぶりを見せたくつても、むき出しぢやア歩行けめえぜ。」虚ろ「私も左樣思ふから頭巾を持つて來たことでありますヨ。だがネ、染めが葡萄鼠だといいのだが、革色だから誠に氣に入らないので有りますノサ。」野ら「だけれど鳶色でねえから宜い、鳶色だト面の染めと一ッだから、前だか後だか向き分らねで、後見がまご〳〵するわ。」虚ろ「アレまア野良さんの口の悪いこと、憎らしいねえ。」杢ア

アいたゝゝゝ、エゝイ何で人を抓るんだい。」 虚ろ「ナヤ何様したら宜からうネエ、野良さんの尻だと思つたら、お前はんのが此樣なところまで出廣がつてゐるのかえ。いかな事でもまア、轆轤首なお尻おやア有りませんかネエ。」 喜次「サア／＼女形の方は、頭巾をかぶつたら岡へ上つて仕舞ひなせえ。ソオレ帯を搖り直したり、アヽ世話がやけてならねえぞ。其處でこのお武家様だが。」 茶め「身共か、身どもなら草鞋をはいて居るわ。」 喜次「紫の袱紗へ木太刀をくゝつたやつを忘れめえヨ。」 茶め「アイヤお氣遣ひめさるな。先刻よりか脊負つて居ますわ。」 下太「まア棧橋まで出なせえ、大小は自己が採つてやるから。」 茶め「アツア小穢い小性でござるナア。」 野ら「エヽイ言ひぐさはねえで、さつさと上らねえノかい。」 茶め「身共も彼様なむさくろしい奴等の中に居ようより、速かに上陸いたさうと存ずるが、ひゞりがきれて動かれまうさぬ。」 飛「サア大丈夫だから上陸んなせえ。」 下太「ソラ大小だ。」 茶め「ナヽトよし。」 喜次「エヽイそつちへ差しては右だわ。」 茶め「アツア弘法にも筆のあやまりツヽ彼樣して左ねぢりに貫木ざしか。」 野ら「左ねぢりの大小なら、柄や鞘に瓜の種がまじつては居ねえか。」 跂「ヤレ／＼穢い糞さむらひだぞ。」 茶め「ナニ慮外をまうすと、手は見せぬぞ。」ト腰をさぐり「オツト仕舞つツたり。コレ飛公そこの隅に扇があるから採つて下ッし。」 飛「此の扇子か、ナンダこりやア澤庵のおしにしてもいいくらゐな重みがあるぜ、何様したのだ。」 茶め「是れは鐵でこしらへたので鐵

扇と申し、此方の樣に武ばつたる武士は皆所持いたすわ。」喜次「何だかべらぼうと手厚くたくらんで來たなア。」茶め「我ながらも是れ程凜々しくならうとは思はなんだ。コリヤ船人、船を動かすまい、浪をたてると美姿がうね／＼になつて宜しからぬわ。」野ら「アノ馬鹿を見なせえ、首をふつたり捻つたりして水鏡だわ。」下太「ア、それを取ると坊主になるぞ。」茶め「だまれ／＼。アッア平常がいきごとに作つてゐるので、兎角にはけが横ッちよへ曲つてならぬ。」喜次「オイ船頭さん、後見どもを追ひ上げたら、早く船を出してくんな、何時までもかたが付かねえから。」虚ろ「アレサ待つておくんなはいよオ、エ、モじれつてえ。夫れぢやア後刻にきつとでございますヨウ。」喜次郎は船の中から首を出し、喜次「夫れぢやア後見しつかり頼んだぞ。」下太野ら「オット承知。」野ら「後にしつかり請けようぞ。」下太「何れ一旦落ち合つた上。」喜次「例の茶屋だぞ。」茶め「よし／＼。」トいふうち、船はだん／＼に間違くぞなりにけり。茶め吉は武者修行、虚呂松は女のすがたの異なる形も酒のゐるか、事とも思はぬ吉日蛇、茶め「ナヤお虚呂さん、足下は女形、こつちは武道立役といふのだから、しばしもおッつゐんで歩行くといふ譯には往くめえ。」虚ろ「ホンニねえ、そしてお前さんのやうな野夫オなお武家方と一所に歩行くと、圍者かなんぞのやうに思はれて、外聞が惡いので有りますから、私やア此の通り往きまふワ。」茶め「身共は是れより本海道を、サ、家來ども參りをらウ。」下太「ごたいそうな事を吠えやアがるぜ。

さして見なせえアノ威張つて歩くことを。」馬「こつちの東埔寨もあのざまツイ。」下太「そりやァ宜いが、足下はどつちの東埔寨へ着く積りだ。」馬「ちよつと思へば武者だけれど、頭巾をかぶつて居るから、やはりも扁た松の方だらうか。」下太「何にしても主人が貧乏ツくじだ。アレ／＼見なせえ扁た松の野郎めえ、あんなに高く棲をとつて、赤い蹴出しをひら／＼ひらつかせて、ア、御免々々、おいらァ身の毛がよだつ程否になつて来た。」馬「夫れだつて仕方がねえわサ。ヤなんだ茶め吉いすこたん、アレあれだ、犬を蹴飛ばして追つかけられやァがつた。ト、イあの形わイ、實にこてへられねえ奴等だツ。」下太「どうも外にあきらめの付け様がねえから、拳を打つてまけた方が女、勝つた方が武者に付くとしようぢやァねえか。」馬「負けた方がいいのか勝つた方が宜いのか。」下太「ナニサ宜い悪いに構はず左様きめねえと、果てしが釋らねえからサ。」馬「些少々馬鹿げるが仕方がねえ。本拳か狐か。」下太「イト流行には後れたりだが、藤八で参るべい。」馬「藤八なら蟷螂が斧だ。さァ来い。」下太「イヤ、ヨイ／＼／＼、ハア是れはあひこ、ドこと出したこ。」馬「ハット最初お下けなさい。」下太「ひよこりと藤八つゞいてちよいと。アッ、こりやァおへねえ。」馬「何だ／＼。」下太「糞を踏んだイ。」馬「ァア臭え／＼。おらァ糞船が来たのかと思つた。ドレ／＼人糞か犬糞か。オヤ／＼正蒲色だから先づは人糞の方だ。」下太「ナンノ人糞なら側に紙がおちてるわエ。」馬「右へも左へも捻れてるねえが、人

にしろ犬にしろ餘程出來のいゝ奇く座だと見えるナア。」ト太「そりやァ宜いが此の足を何樣しようぞ。」見「章魚ならば、一本ぐらゐ切つて捨てもいゝけれどなァ。」ト太「ア、段々に臭くなる、エヽ、ア、ア、ボ、エ、イ。」見「イヤおれも胸が悪く成つて來た。早くそこの上場で洗ひなせえな。」ト太「女難は勿論盗難劍難、いろ／＼の災難をのがさしめ給へと祈つて置くのだが、糞難ばかりは氣が付かなかつたので此樣なめに逢つただ。」ト川の端の段を立ち下り、ト太郎足をあらひながら、ト太「跳返足下もあらはつせえな、たゞ見てゐることはあるめえナア。」見「自己ア糞を踏みもしねえにヨ。」ト太「踏まねえとつて、そこが突合といふものだわナア。」見「馬鹿ァいひねえナ。」ト太「突合のわりいことをするト彼様だぞ。」見「エヽ、よしねえかイ。羽織へ染みでもつけて見ろ、身上だァ。」ト、二人は暫時川の端に押問答をしてゐるうち、嘘円松は割下水通、茶め吉は法恩寺橋通の方に至るに、人の目に付く出立ち故、往來の男女何者ならんと袖ひきあうて是れを見るに、茶め吉は例のうぬぼれに十分請けたりと心嬉しく、いそ／＼しながら澄ましかへッて歩行き行く。後の方から來懸りたる武士、天窓はびつつりの大奴、朱鞘の長大小を貫木差に横たへ、大縞の馬乗袴をはき、ゆき短き紋付の着物を着したるが、召し連れたる下部に何かひそ／＼私語くと、下部はすこし足をはやめ、茶め吉に追付いて腰折りかゞめ、下「こレおかた、此方とものべえお聞き申したうござりやす。龜井戸の天神さまへ参るには、此の道さア往きや

して宜うござりやせうか。」ト聞かれて、茶め吉はうち合點き、往來のものにも聞えよがしに、一調子はり上げ、すこし綺語めかして、茶め「在下もいまだ當地は不案內なれど、軍法賢者の妖術をもつて飛行自在に往來する。モシ龜井戸へ往きたくば後にしたがひ來られヨ。」馬「そんだらハヽ貴君さまも、お江戸のお方では御座らねえのかネ。」茶め「いかにも左樣、もと在下は因州鳥取の浪人平井權は、デでは御座らぬ、肥後國熊毛の產ぶつ六三本宮四と申すもの。」馬「夫れでは兵法サァ御修行にお出なされたのでござりやすか。」ト問はれて茶め吉、この男の樣子を見るに、何も知りさうもなき山出しゆゑ、能きものを生捕つたりと心によろこび、「ヘンその許の愚案の通り、在下母の胎內にある稚きころより劍法をこのみ、始めて桃園に義をむすんで、はやく黃巾の賊を平らげんと、彥山權現に祈願をこめ、一日千人の力をさづかり、故鄕毛谷村にかへらんと、下邳圯橋を通りしに、はからずも黃石公に出であひ、皆づる姬が手引を以て、六韜三略虎の卷の兵書を探り、引つかへして鞍馬山に馳せ上り、また僧正が谷へ往きたるが、こゝに面白い話があるて。」馬「ヘヽエ御大層な事でござりまするなア。」茶め「マア聞きなせえ。その僧正が谷の前後左右に、雲霞のごとく凡そ六人ほどの天狗ばらが、列をただしてずらりと居並ぶと言ふので、もつともそれが中の頭だちたる大天狗が在下を見ると、ずいと立つて何方へか往かんとする故、在下早くそばへより、ヤア逃ぐるとて逃さうかと、紙布の袂をしつか

り取ると、その手を拂いて突きもどしたが、流石は天狗の糞力に、天晴無雙の在下も、二足三足たじたじとよろめきたりしが、疾と踏みしめ、ヤアちよこざいな賣僧の腕立、觀念しろと言ひながら、背中にしよひたる木刀の、しん張棒を拔き取つて、打つて蒐ると彼方にも、如意の孫の手右手に持ち、かつし／＼と請け止めるト、こゝからが笠原と宮本の鍋蓋のたてに成つて、打ち込む請けるト、、、ト、ンと身をしざり、しんばり棒を肩にとり、暗がり峠の土となれといふ見えでウンとりきんだが、此のウンに在下がちと能くなかつたさうだけれど、夫れに構はずまた打ち込むところを、はつと請け止めて下を拂ふ上を拂ふ、たじ／＼／＼とよろめきながら、天狗どのに身の輕いところを見せて遣らうと思つて、トオンとざばを突くト、その業があまりにすばらしいので、我が身ながら少し慢身の心が生ずるかト思ふと、忽ち襟の中に燒餅といふものが飛び込むと、脊中はさながら火を脊負ひたるごとく、一身燃ゆるにひとしき故、かねて聞く天狗道には、一日になたび大焦熱の苦しみを請けるト、されば在下も既に魔道へ落ちたるかト、心づくより脊中をくゞる燒餅を、股引のまたの穴より振ひ出し、すぐ水の印を結んで湯風呂の羽目を打ちくだき、白倉一家の奴等を殺し、暫時浮世を忍ばんと、身を山伏の姿にかへ、安宅の關をうち越えて、栗生、篠塚、畑、亙利の四天王もろともに、大江山なる千ちやうが嶽へ押しよせ、酒呑童子をとりひしぎ、富士淺間の神を拜し、彼の人穴を立ち出でて狩

場の暗の闇紛れ、敵悟經が陣所をたづね、はからずも九紋龍史進に出合ひ、神宮境野の白鞘の長刀、在下は鎮遠の宝義をすゝめ、名を雜覽とあらためて、五條の橋に寐してゐる所を、捧げて探六に足をふまれ、はつと思ひて目をさますと、後方に立つたる八百屋のお七、不義は御家の法度と思へど、軍師孔明がいふにまかせ、鶯坂番内等を打ちこらし、彼が古郷なる由崎村の真市兵衛が方へ至るに、折しも後醍醐天皇は笠置の山へ籠らせられ、楠正成にも参れよとの詔、とるものもとりあへず遊君阿古屋をひきいだし、色にはなまじ連は邪魔、ひとり先がけ高名せんと、蹴さいを蹴ちらさへ、御所の總門押し破り、梁山泊の隙なるこの口村にて暫さにけふこの身たる隱れ御由なる話でござりますもなくも、いやもう雜行修行に衆生濟度して學んだだけあつて、牛馬唐犬ほとことん、歌舞妓十八番の武藝はことごとく骨肉を極め、かつ陰陽和合の法に通じ、春に見六の道理をあきらめずといふなし。在下當地に罷り下りし、先づ一刀流、眞影流、柳剛流、おねん流、眞ぎやう刀流、明知流、柳生流、ふつた鞍馬流、音羽屋流、大和屋流、成駒屋流、高島屋流、乃至竹本鶴賀流、常磐津富本清本流、都々一ぶしつちり端唄流、跡びき流にくだ巻流、甘いもの流、立喰流、ちよほくれもまたかれらやらまか流、とこまかしてよい所流など、かく諸流の先生達と手合はせ試合をいたしたれども、神免二刀流の薬法をふるひ、立ち合ふ時はむべ山風の嵐をもつて、奈良の都の八重櫻を吹きちらかすが如く

にて、更に歯に立つものをおぼえず。あはれ骨のある剣術者もあらばと、腕をさすりて今日もまだきより立ち出でたれど、稽古場らしきものさへ見かけず。餘りの本意なさに初卯の日と聞き、せめては妙義の社へなと参詣せんとこの所までまゐつたり。その許にも道場らしきもの見あらば、知らしたまへ」と言ひながら、北吹く風のさむきをこらへ、腰なる鐵扇抜き取つて、ばさり〳〵と打ち扇ぐ、その形そぶりをじろ〳〵見ながら、「其れだらハア申しませうが、拙者主人が殊のほか剣道執心だて道サア聞くふりをして、御様子サヤお尋ね申して参れと申しつけられましたでナア。」「エ、エ何の事だ、其様ならお前の旦那が剣術が好きで、自己の様子を聞いて来いと言つたのか。ナンノをかしくもねえ悪い洒落だ。そしてお前も些たア遣ふンだらう。」ト、少しうそ氣味わるく成るゆゑ、「イヤさつぱり忘れた、喜次さんが待つてゐるんだらう。早く往かう、馬鹿なつらな。」と、足をはやめて逃支度する後から、「イヤァシちよつと御意得たい。御修行人なゝなゝ」と呼び留められて、愕としながら聞かぬふりにて往かんとするを、僕はしつかり袂を摑まへ、「お待ちなしえやし、拙者主人がお目に懸りたいとつてお呼びまうすでナア。」「馬鹿なことを言ひなせえ、其様に安っぽくお目にかゝられてたまるものか。袂を放しなせえと言つたら放しねえコウ。」「御所望の通り、主人が試合サア願つてえと申しやせうから、お待ちなさろト言うたりやお待ちなさろ。」「このやア情ねえ、マア

モウ凶な奴につらまつたナア。」と、口小言を言ひながら、跡の方を見かへると、雲つくばかりの鉢坊奴が、仁王立につゝ立つて、武士「是れは／＼御修行人、はじめて御意得る。身どもは摩訶般若波羅密多流の元祖蕃妄切二六八門人土手焼團吾と申す者、其のもとには何御流儀を御修行なされ、誰どのゝ御門弟で御姓名は何と仰せらるゝ。」ト問ひかけられて、茶め吉は、「エヘ、、、、ヘイ／＼あの私は茶め吉と申上げまするが、ヘイ／＼天神橋御近邊に連中が待つて居つて、チトお急ぎなさいますから、ヘイ／＼お不躾にはござりますれど、マヅ／＼お先へ御免をまし上げたう、ヘイ／＼存じまする様に存じ上げます。ヘイ／＼。」團「最前は御姓名を六二本宮門とおほしられたでは御座らねえか。」茶め「ヘイヘイお左様さまのとほり、六二本宮門藤原茶め吉と申し上げます。」團吾「ハ、、、、それでは茶め吉と申すは御實名で御座るナ。」茶め「ヘイ／＼全く戒名に相違ございません。」團吾「何お流儀に御隨身で、何方の御弟子でござる。」茶め「ヘイ／＼師匠は清元延光と名びろめを致しましたやうに御座りますが、チト取急ぎますから。」團吾「延光殿は何お流儀をおつかひなさるゝ。」團「たしか神免二刀流だと仰しられましたナ。」茶め「ヘイ／＼神免二刀流の三味線を、少々かじりちらしまする様にござりまするが、チトお先を急ぎますから。」團吾「お流儀は三絃を御用るがあるとか、フンいかさまナアル、孔明琴を彈じて魏の勢を走らせ、張良簫を吹いて楚の軍を散す。固き中に柔かきをとらるゝ流法、

感じ入つて御座る。」茶め「へイ／＼チトお急ぎでございますから。」團吾「イヤ／＼決して急ぎはつかまつらぬ。」茶め「へイ／＼。」僕「これは僥倖、アレ／＼皆様がお出でなさりまして御ざる。」トいふうち彼方より巖乘作りの武士七八人うち揃ひ、いづれも馬乘袴をはき、三尺有餘の長刀を横たへ、面小手臑當を肩にかけ、大手を振つて大道せましと出で來りしが、團吾を見て、「是れは／＼土手燒先生、いづれへおん出で、今日は殼鮮此四郎どののお稽古はじめゆゑ、かしこへまゐらうと存ずるところ。」團吾「よきをりから各方にお目にかゝつた。是れなる御修行人は神兎二刀流の先生、清元のぶみつ殿の御門弟、六二木宮四藤原茶め吉とおほせらるゝ無雙の劍家、ちよつと知己になられてよろしくござらう。」「夫れは／＼御高名はいまだ承りませぬが始めて御意えます。拙者は西勝蟲芋九郎とまうすもの、自今お見知り置かれて。」茶め「へイ／＼／＼。」「拙者は不理窟談次、以來お心安う。」茶め「へイへイ／＼。」「身共は居日頭武六、向後御懇意に。」茶め「へイ／＼。」「在下は稚足權藏。」ト、ひとりひとりに名乘りかけられ、茶め吉はたゞへイ／＼と言ひながら、尻ごみのみして一句も出でず。團吾「御修行人を芋九郎どのの道場へおつれ申して、一本づゝお手合を願はうではござらぬか。」芋九「いかにも夫れが宜しく御座らう。しからば宮四殿、拙者宅はつい此の先、去來御案内を致すでござらう。」トすゝめ立てられ、茶め吉は醉ひさへ醒めて茫然たり。

二編　卷之下

馬說茶の吉は七八人の武士に、前後左右をうち囲まれ、息さへ支へて出来ぬ心地に、是非も茶の草ハ振離の、しな〳〵として亀戸の方へ一二町行くと、ある冠木門のうちへ無理むたいに引き込まれ、茶吉「イヤ〳〵ハイ〳〵、私儀は此上おさきをお急ぎでございますから」侍「ナニ〳〵左様な御斟酌なく、ふう〳〵あれへ〳〵」侍「何サお急ぎなさるには及ばぬ」侍九「サア〳〵是へお上り下されい」茶吉「ハイ〳〵」侍「大來お通りなされい」茶吉「ハイ〳〵」侍「おあがりなされ」茶吉「ハイハイア、是れは情ない。跛助や下太公は何様したらうなア」四五人「ヤア跛助で下太公とは、身共への当てこすりで御座るか、縦ひ跛助で下太公に致せ、師匠此四郎より免許皆伝の拙者」茶吉「イエイエ跛助下太公と申したは、私の友達の事」侍九「何は兎もあれ、あれへお上りなされ」茶吉「ハイハイ〳〵左様なら御免」侍「ヤアなぜ草鞋をお脱ぎなさらねえで、玄関へおふみ込みなしやれた」茶吉「ハ、、、、エヘイ〳〵御免下さいまし、ヘイ〳〵〳〵」と周章てふためき、草鞋をぬぎそこへ置き、恐怖びつくり又式臺へ上りかけると、侍「コレ〳〵、お刀サア差したる儘にてお上りなされては失禮で御座いませう」茶吉「ヘ、、、、、ヘイ〳〵、ア、ア何様も誠になれませぬこと故、何事もと

り違ひましてへイノヽ」と兩刀をとつて、草鞋と一所に上間へ置き、「此の上御失禮がござつたらもそつと小さな聲でお願ひまうします。其様にいかめしくお呵り被成ト、肝へこたへて成りません、へイノヽ。」と震へノヽ式臺へ上りながら、劍術者の家にては這入口の兩方に待伏して、不意に組み付くなどいふ事を兼て聞きかじりゐる故、若しや左様いふ事でもありはせぬかト、きよとノヽしながら敷居へ足を踏みかけ、玄關へ上らんとするト、脊中に脊負ひたる袱紗包へ括りし木太刀の先が鴨居へ突懸り、後の方へよろけ、ハット思ふその拍子に、式臺の中段を足踏みはづしてどたノヽどつたり。眞仰向に轉がり落ち、扨は上から手を出して抛られたるかと肝を潰し、「ア、いたヽヽヽ、ヱ、悪いお冗談かの。ア、いたヽヽヽ、ナンノ此様なことと知つたら、此の役は虚呂松にでもさせたものヲのア、いたいノヽ、脾腹の筋がアッたヽヽヽ。」と小言たらノヽ起きに蒐れど、脊中に縛せし木太刀が支へて五體は自由にならず、轉りノヽして居るを、クッリノヽ笑ひながら團吾は手を採り引き起せば、茶め吉顔をしかめながら立ち上り、「是れは先生、ア、いたヽヽヽ、痛いお世話に相なりましたトいふ時、鄰の下屋敷でスドンと放す大筒に、エ、と愕り茶め吉は亦尻餅をくつたり突き、ア、いたヽヽヽたゝ」○案下再說下太郎跳助の兩人は、虚呂松と茶め吉を見うしなひて其の行方を知らざれば、下太郎は虚呂松を尋ね、跳助は茶め吉が後をしたうて、所々方々搜しても見付からねば、猶あちこちと尋ね歩

行きて法恩寺橋通へ出で來り、龜戸の方より來る人に、武者修行體の者を見かけざるやと問ふに、その武者修行の人は、今劍術の稽古道具をかつぎたる人が七八人にて、彼處の冠木門のうちへ連れ込みたりと聞き「イヤアそいつァ臭い噺だ」と教はりし門へ往き、そつと中を覗いて見るト、果して玄關のかたはらの土間に、茶め吉が差したる朱鞘の大小が、草鞋と一所にうたあてある故、さてこそト心に點頭き、人の居ぬのを幸ひにこはごは門のうちへ這入り、玄關へ行きて見るに、茶の吉は衝立の陰に茶煙草盆などひかへ、けゞんな顔してかしこまり居るゆゑ、淺助は式臺へ手を突き首のばいだし小さな聲にて「オイ〳〵宮本先生、オイ〳〵武藏先生といつたら、オイ〳〵。」とよばれて、茶「ハ、、ヘヘイ〳〵。」淺「此處だヨ。」茶「ヘイ〳〵〳〵。」淺「エ、イ奧の方を見て拜ばかりして居やァがる。ト此處だヨ、」茶「へ、へイ、ヤなんだ淺公か、ア、ア有がてへ〳〵。」と、溜息しながら「自己アもう大變なめに逢つたぜ。」と、兩邊きよろ〳〵拔足をして式臺へ下り來り「まだれも居ねえのか。」淺「足下はなんで此樣なところへ這入りこんでゐるのだ。」茶「へ、なんで所のさわぎかえ、這入らねえといつて見なせえ、すぐに打ち殺して生肝でも拔きさうな見脈だから、誠にもう據ねえぞつにかかつて上つたのだ。」淺「チョッ夫れだから一人でひやかしに來なさんなといふのだ。足下が上つたら仕方がねえ、おいらだつて格子の先のすゞ歸りといふ譯にやァいかねえ。お前の遊君にさう言つて、

座敷ばかりでも宜いから、面の白いのを一人よんでくんなせえ。」 茶吉「ヱ、イ人の氣も知らねえで、むだ口所だ。コウ／＼其處らに誰も見えねえなら、お前はその草鞋と大小を持つて逃げてくんな、自己ア此處にやア居たゝまれねえ。」と言ふより早く飛び出せば、鼓助も何處となく底氣味惡く成つて來て、四邊數間々々草鞋と大小を引浚ひ、一生懸命逃げ出す。茶吉はこけつまろびつ四五丁程走り、寺の地内へ驅け込む故、鼓助もまたつゞいて驅け込み、鼓「す、せつねえ。」 茶吉「自己もす、せつねえ。夫れは宜いが追蒐けて來やアしめえかなア。」 鼓「ナンノ誰が來るものか。」 茶「それぢやア此處で仕度をしよう。」と、草鞋をはき大小を差しなどして、ホッと一息つくなるべし。

爰にまた當世風は、女の姿の衣裳さへ帶さへ花美な形ふりに、拔衣紋のござれ腰、小褄をたかく攝みあけ、赤き蹴出をひらつかせ、引きずり歩く駒下駄の、音さへコロ／＼ガラ／＼と、否味らしくあな身振ゆゑ、頭巾は深く冠りても、往來の人の目に付くにや、何かひそ／＼耳こすり、私語きあうて往くあれば、笑ひを含みて通るもある故、彌々からだに品をつけ、邃遙と歩行きながら、早後見は來さうなものと、折々後をふりかへり、見れどもいまだ下太郎もまた鼓助も見えざれば、無駄口をきく相人もなく、一人歩行の寂しさに、葭簀張の茶屋へ這入り、後見の者を待あはす心にて、何かわるふざけなどしてゐるト、表の方を彼の見えるような石町の大愚が、相も變らぬ大ばかしの、ナホン／＼

で行くを見附け、慌てゝ茶屋を驅け出し、虚ろ「モシヘ、アノ大愚はん、大愚はんツたらじれつたい、お待ちなはいよう、大愚はんへ」ト呼びかけられて大愚は振り向き、見れば見なれぬ大女が、頭巾に顔をすつぽり包めば、誰とも當りの付かざる故、訝しさうに鑑へて、大愚「ヤア僕に聲をかけ給ひたるは、貴孃でありやすかネ。」虚ろ「ハイサ、私なのでありますヨ」ト、何か否味な腰つきして、いきなりずつと側へより、大愚のからだへ凭れ掛れば、大愚は周章てゝよつと飛び除き、肝を潰した顔をして、上目でじろ〳〵見る可笑しさ。虚ろ「何だらうねへ、逃げたり何かして大概おやすう有りませんか。そして初卯には是非誘ふからト、約束して置きながら出し抜いてサ。夫れだから大方餘所のお樂しみでも連れてお出でのに違ひあるまいと、思へばくやし獅子文殊の獅子、トッピキピーの角兵衛獅子で、逆さに立つて歩いても、私の樣な一文獅子では、御意に入らぬは知れてゐるが、人の女獅子をまゝとぬいて、彼樣して出てお出でなはつたかと思ふと、なんぼお前はんが雄獅子でも、起請の詞がくるひ獅子と、思へば眞に腹の立つ、私は臆の手負獅子、見すてられればゐのしゝや、祭の先の獅子頭、餘所の囃しも恥かしし、エ、悔しや憎らしし、腹立たしし。」と言ひながら、手當り次第抓り廻せば、大愚は彌悩り驚き「エ、アレサ、あゝいたゝ、エ、ア、。」と、飛び除き〳〵不思議さうに、頭巾のうちを覗きても、何樣も見知らぬ女なれば、大愚「僕が俳名をお呼びのからにやア、知らねえ人ぢやア

有りやすめえが、何分思ひ出せやせん。」と、あつけに取られしその風情、廬円松は気に乗つて、「おとぼけ被成にも程があることでありますヨウ。」と、大愚が顔を媚目でじイッと見入れながら、「アノオ夕までも今朝までも、枕並べて一所に寝て、其方を向けの此方を向けの、いとしらしいの可愛の、肌目こまかだの餅肌だのと恥かしがるを撫でッ摩りッ、人なさんだ〳〵嬲つて置いて、誰だか知らぬの何の彼の、其様なそのよな言譯を、小さい時からなまなかに、手習までも一ッ所、何やら雙紙へ書いたのを其方に見せて問うたらば、戀といふ字と言うたのを、結び始めの殿御ぢやと、思うて居るにそのやうなこと」ト、大愚が體へかじりつけば、大愚はエ、と髭へあがり、冷汗をかきながら、頭巾の中を能く能く見こゝ、大愚「エ、なんの事だ、面白からねえ。何人かと思ひ詰すれば廬円松大人、チヨッ惡しき洒落をし給ふものかなァ。アレ〳〵人が集ひてじろ〳〵見るわへ。何らの御催しか知らねへか、その美姿では眞に詫び入る、是ればッかりは閉口つたこ。だれにねエシ、聞き給へ、今日は大人もお懇意の蘭英齋大人が、狩野家の妙筆を揮つて、押上邊から請地村の邊を、眞景にかいて遣るからといふ約束を結び、先生は波曉子椿亭子などいふ俳天狗と共に、面の白いのをお兩三人しき從へ、臥龍の園中へ頓くより鳳駕かきしつて居るといふのだから、拙も遅參に及んでは、其の罪また輕からずへこたゝシ大人、といふ譯だから、失敬は大容におん見なしとして、お先へ御免こ蒙り、羽織も恐れ入谷の鬼子母神に對す

るやつかネ。何は兎もあれ竃のツヒとおしげのヿオホヽ／＼」と迯げ出す、大愚の後をしつかりつらまへ、虎「なんだらうネヱ、オホン／＼と其のやうな、黄色い声をお出でないはらふに、一所に往つておくんなはいヨウ。何ぼ私がどた福だとて、天の岩戸の御扉を、開けば同じ女子のはし、お雑煮ばしや鐡火ばし、せめては天神ばしまでも、お供をさして下さんせ。」ト、否がるところへ付け込んで、悪しつツこくもた付き掛れば、大愚に殆んどあぐねし様にて、「チヨツ是れは何様だ、大人とも思ひ侍られえ、悪しきふざけはよし給へ。アヽいたヽヽヽ、又抓り給ふか、何様もたまらねえぞ。」ト、段々に人が集ふ、よし給へと言へば止し給へナ。」と、こまり果てたるその様子。虚呂松は瑞の中にて、欣みたる酒が次第にまはるのみならず、女の頭巾をすぽつりと、冠つて顔をつゝみしかば、天窓にふらふら目はちよふろ／＼、機嫌上戸の癖として、しきりに一人で面白がり、虚「私やアお酒を給べたせゐか、誠に逆上せていけないので有りますわ。」と、元より大の自惚故、剃出しにて面を見せ、十分請ける気に成りて、冠りし頭巾を一寸取れば、大丸髷の根の所へ、切こて／＼と捻り付け、其方此方へ、笄さし、牛の様なる襟元から、鼻の先まで真白に、塗る白粉のむらはげせし、顔突き出して髭の毛を、掻き上げながら、「オヽ熱や。」ト大愚が體へしなだれ掛れば、往来の人は是れを見て、笑ふも有れば囃すも有るに、大愚も今はたまりかね、大愚「オ、アレ、ちよつと見給へ、アレ／＼、是れは奇てれ

つなものだ、なんであらう、アレノ\。」と言はれて、盧呂松立ち止り「何か珍らしい物でも有りまふのかエ。」と彼方を向く時、後から来かゝるでつくり肥満つた男の陰へ、ちよいと隠れて横町へ、大愚はこそ／\逃げ込むを、盧呂松は氣が付かず「マア悪らしい、何にも有りもしない物を。顔を見せたが否だといつて、人に彼地をつん向かせてサ。夫れほど私が否ならば、程よく生まれて来ぬがよい。往来なかでも眞書でも、惚れたに加減がなりませう。此方の殿御。」と言ひながら、側へ来かゝる太つた男を、大愚と間違へ身をよせて、腰のあたりへかじり付けば、太つた男は肝を潰し「コ、この氣違あエ何をする。」と、握りッ拳を振り上げて、横ッ小鬢を突き飛ばされ、盧呂松は仰天し「何様するのだ。」と振り返る所をコッキリ又打たれ、盧呂「ア、いたゝゝゝゝいてえぞノ\、べらんめえノ\、何で自己を打つたのだ。」ト、躍氣と成つて能く見れば、太つた男は愈腹立ち「なんの愚痴踏み潰すぞ。」ト大手を廣げて盧呂松が天窓をいきなり引摑み、捻ぢ倒さんと力を入れ、引けば鬘はぼつかり脱け、力まけして仰向に、でんぐりかへるト生憎に、浚ひ上げたる小溝泥の、中へぼつたり嵌り込み、腰は半端埋まるを、見るより盧呂松突立ち上り「けはひ化粧や振の袖、女らしくつくるは世を忍ぶ、假の姿と知らざるか。べ、、、、べイノべつかつかう。」ト、尻を叩いて一散に、逃げ出す先の横町から荷ひて出づる糞桶に、出合頭突つかゝるト、桶は搖れてドンブヰコと、溢れる糞を盧呂松は、半身あ

びて向うへよろけ、鼻を撮んで立ちすくみ、喜「アヽツヽヽヽヽ、ヽ、ヽ、臭え／＼」七「往來の人ごとくに、くせえ、す、臭え」喜「へ、へ、へ、シヤウナイ、す、臭え、す、す臭え」

案上再說、船に殘りし喜次郎、飛八、野良七の三人は、遊川通を漕ぎ上り、天神川へ横ぎり、程よき岸へ船着けさせ、豫て落ち合ふ約束の、茶屋へ上りて待ち居たれど、何時まで立ても龍吉松も又茶め吉も出て來ねば、もしや突つかけ天神の、社の方へ行きたるかと、思へば尚猶不安にて、心にかかる事のみなれば、三人は相談つけ、此處にて彼是氣を揉むより、天神橋の橋下にて、待つこそ宜けれと決着なし、再び船に乘り移り、猶川上へ漕ぎのぼつて、天神樣の下に着けさせ、喜次郎は龍吉松茶め吉らが樣子を見て來んと、野ら七飛八を船に殘し、一人陸に上りて、其地此地尋ね捜す頃は、人もおひ／＼出盛りて、よき汐時とぞ成りにける。爰にまた茶め吉は、支度せんとて逃げ込みたる寺の、地內を立ち出でて、後見跛助と諸共に、ひたすら道を急ぎつゝ、豫て相談きめ置きたる、待合茶屋へ至らんと、法恩寺橋どほりを眞直に、天神橋の橋でまへまで來り、彼方を見ると喜次郎は、彼の歌修行のこしらへにて、向河岸を散眼々々しながらあるいて居る故、茶「ヤ、アレ／＼喜次さんが歩行いて居るぜ。」跛「ドレ／＼、ソウさ何さま兩方の脚であるいてゐるなア。」茶「隨分請けるこしらへだなア。見なせえ、觀音經の手や自我偈の構へやう位は、心得て居さうぢやアねえか。」跛「さうさなア

宜いが、何様か此地の方へ足の先がむいて来たぜ。」茶め「シテ見ると調度橋の上でぶツつかる見当だが、直におつ始める料簡ぢやアねえかナア。」喜「チヨツ待ちたまへ。」ト橋の下を覗いて見、喜「イヤアしめしめ、船も来て居るワ。しかし虚呂松が何様であらうか。」と、橋の袂の小高きところへ驅け行き、川縁どほりを伸び上り見ると、割下水の方より、彼の草色の頭巾をかぶりて、虚呂松らしき者が驅けて来るゆゑ、茶め「イヨウ見えるノヽ。何でも直におつはじめる手筈にして有るに違へねえ。お前は早く船へ往つて、その趣を通じなせえ。」喜「スツトよしノヽ。」茶め「ト、、、トンが切つかけだぜ。」敗「案じなさんなへ、承知だヨ。」ト、例の甲辛同志が二人で詐りのみこんで、敗助は桟橋を下り、茶め吉は身構へしながら橋の上へ行き向ふ。喜次郎はかかるべしとは夢しらず、猶虚呂松茶め吉の二人をたづね、有漏々々として此方へ来る橋の半ばで、茶め吉が袖すり合ふ程に行き違ひても、叢楽といひ、向うにばかり氣を入れて、心付かずに往かんとする、紙布の袂を鷲づかみ棒に、腕を伸ばしてしつかりつかまへ、「ヤア逃げるとて逃さうか。」ト引きとゞめれば、恟りし、振り向き見れば茶め吉ゆゑ、苦りきつたる顔をして、喜「チヨツ出抜に何様したものだ、後見は居ねえのか。まだ狂歌も讀まねえうちに、何で其様に取違へるンだイ。」茶「出抜だらうが取違ようが、もう彼様なつちやア武士の意地、縦ひ狂歌は讀まねえでも、讀みさうな面だから、未前を察してとらへた袂、成らば手柄に探つて見ろ。」ト

ナ、なんと、ヤイ坊主。」ト少し氣取つて仕かければ、通りかゝりの老若男女、アレ喧嘩だと立ち騒ぎ右へ左へ驅け走るに、喜次郎も今は是非なく、「コハ理不盡なるお武士、何科あつて留むるぞ、きりきり放して通し給へ。」ト、紙布の袂を捕へし手を、一寸拂つて突き戻せば、茶め吉後へたじ／＼と、よろける足を踏みしめて、「ヤアちよこざいな賣僧の腕立、觀念しろ。」と手を伸ばし背中の木刀拔かんとして、先に芋九郎が窠に轉びし時、木太刀は纏せし袱紗と共に、彼處の玄關へ置きざりて逃げ來りしを思ひ出し、ハッと狼狽へあたりを見ると、橋の上に荷をおろし、蜜柑商人の天秤棒が建てかけ有れば、周章てて驅け寄り引淩へて持ち來り、「汝等が樣なひよつとこ坊主は、木太刀などでは勿體ねえ、天秤棒で相應だ、覺悟をしろ。」と打つてかゝるに、喜次郎は困りきつたる顔しながらも、爲方なければ不承々々、襟にさしたる如意を取り、トゞあしらひて立ち廻る。然る程に又虚内松は、糞取桶に突き當り、むざんや半身黄に染みて、その臭きこと夥しけれど、喧嘩の相人につらまりては、何のやうなる目に逢はうも知れぬと、體は摑へとられても、幸ひ袂にのこりし頭巾を冠りながら逃げ來れば、往來の人は是れを見て、「ソレ糞女だ、ヤレ糞だ、オゝ臭やエ、エくせえ。」ト、かなた此方へよけて通せば、天神橋の橋際まで眞暗さんばう驅けて來ると、をりよく試合の最中ゆゑ、甘いとこだと舌打しながら、彼の糞だらけな形をして、遠慮もゑしやくも有らばこそ、虎ろ「まゝア待つて下さん

せ。」ト、二人が中へ割り入るに、その臭さ五藏をとほせば、喜次郎も茶め吉も、ウンとばかりに反りかへり、「こりや何樣したのだ其の形は、エ、エ臭え、オ、くさや、寄つ付かれてはたまらぬ」と、天秤棒を投げ出し、茶め吉あわてゝ逃げ出せば、喜次郎もまた逃げ出すゆゑ、そりやこそ喧嘩が此地へ來た、ヤレ糞女につらまるな。」と、橋の四邊の混雜は、宛然鼎の沸くがごとし。是れより先に跂助は、棧橋を下りたちて、船の中へ飛び乘り見るに、起きて居るは船頭ばかり、野良八も飛八も、容子を見に出し喜次郎が、歸りの遲きを待ちかねてや、踏んぞりかへつて大鼻息、前後も知らず寐入つて居るに、コレは何樣だと搖ぶれど、叩けどさらに正體なきを、無理無體に引きずり起し、橋の上には立廻りが、早始まりしと聞くよりも、二人は寐耳に水調子の、合ふもあはぬも足踏の、相圖も更にいらばこそ、周章てゝそこの三味線とり、ベンベコジャンジャラベンベコと、滅多やたらに彈きたてる所へ、喜次郎茶め吉は鼻をつまんで逃げ來り、船の中へ飛んで入る。此の時調度下太郎も、有漏々々此處へ來かゝりて、此の有樣を見るよりも、同じく船へ入らんとして、橋から驅け來る虛呂松に、思はずばつたり突き當り、下太「これはなんだ、オ、臭え、糞だ〳〵、オ、くせえ。」虛呂「わりやあ誠に臭い、臭い。」と、二人も船へ飛び乘れば、待ち構へたる船頭は、すこしもすかさず立ち上り、舫を拔いて船棹を、グツト突つはるその拍子に、船はゆら〳〵中流へゆらめき出づれば、飛八野らも此處を專途と

腰打ち付け、ジャンジャジャジャン／＼、スチャラカチャン／＼。幸「す、くせえ。」野「す、くせえ。」三味せんジャンジャ、ジャン／＼。虚「す、臭え。」與「吹けよ恋風あがれよ簾アれ。」三味せんジャ、ジャン／＼、一同「す、くせえ。」與「中の小唄アの顔見たアや。」三味せんジャンジャ、ジャン／＼、スチャラカ、チャン／＼と、天神川を押し下り、竪川通へ漕ぎ戻りぬ。

七偏人三編敍

怎麽妙竹林話の腹稿と云つば、人心不同七偏人、劉伯倫に似た酒風漢あれば、阮籍の如く醉放人たる白眼むもあり、阮咸に似て犢鼻褌を竹竿に掛けて、七夕祭をなす如き白漢あれば、王戎の如く日輪と白眼み競する倥侗あり。稽康に似て酒許り飲んで無言なるあれば、尚秀の如き寐好あり。又山濤に似た多辯あり。性愚あり性直ありて、計較に興あれば、言語に絶倒あり、其の筆頭の機關は、覗いて知れぬ江湖上の、滑稽洒落の中道を採り、人情世態を細末に穿ち、猪瑎も後れぬ當時の流行、世界の魁作者の旭、大庾萬株の楳亭主人、其の名は四方に隱れなく、匂ひは筑紫の邊地までも、風に薫りて飛梅の、しこんだ評判よしと聞き、書肆は次編を矢の催促、金鷲子は弓の張臂なして、當りを覘ふ得手の拳、玆に三編稿脱りて、未だ序文のなきを僥倖、僕も雑魚の大魚交り、韶陽魚の齒怒端書を、人並らしくも述ぶるに南。

春霞樓の北窗に筆を染めて

鶴亭秀賀識

扨も七人の能樂者どもは、春の朝の酒機嫌、妙義參りの初茶番、天神橋の一趣向、やこそと言はせる計較の、手はずが瓦落裏くびちがひ、遣りそこねしも一興と、用意の船にうち乘りて、竪川通を漕ぎ戻りしが、其の後はさせる事もなく、昨日に今日とうち過ぎて、暑さ彌增す夏の日も、水無月半端に成りにけり。扨も彼の靑柳橋なる能樂亭には、主人の喜次郎緣先に髮を結はせて居る側に、寢ころんで居る下太郎跂助、喜次郎は髮結に鬢のところを漉かせながら、「剃公お前は上方だの。」きたはち「左樣でございます。」喜次「上は何の邊だ。」きたはち「伊勢でございます。」下太「伊勢ならば膝栗毛の喜多八が、古市で髮を結はせたなァお前ぢやァねえか。」きたはち「膝栗毛の喜多八さんぢやつたやら、何ぢややらえらい旅人ぢやで、とんと分らんがナ。」喜次「おめへの前で左樣言つたら腹を立つだらうか、伊勢あたりは髮のいひやうか、何樣も下手だナア、とエ、たれ〳〵古い落噺に、蝮蛇といふ名は何樣して付けたのだらうと聞いたら、彼は蝮といふものが蛇だから、蝮蛇と付けたのだと言つたら、扨々蛇れば蛇るものだト言つたといふ噺が有るが、何でも上方の髮結は、江戸の髮結から見りやァ、髮結

といふのぢやねえ、化結といふので、お前なんぞのつかふのは髪剃だアねえ、化剃といふのだ」喜「然して喜次様の化毛でも剃り落すといけねえぜ。」三「宜いよう漿々しい。ナウ親方、いろのできねえ奴といふと、口が悪くつて成らねえものだ。」喜「エ下太公、今お前の左様いつた嘘東毛にある喜八が、古市で髪を引つつめられたと言ふ一件は、真に彼だッたらうか。」下太「何の彼様な事が有るもんか。自己なんぞも引詰つた髪が好きだから、思入固く結つて貰ふ方がせい／＼して、能い心持だ。」喜「左様でもねえ、悪く引詰められると、天窓へ何か輪の付いて居るやうで、爰へ来られねえもんだ。」下太「所が天窓を持つて提下げられる様なのが能いのだ。」三「だれでもお前の髪は極々宿…結つてあるぜ。」下太「是れだから何様も気に入らねえのよ。」と、二人が噺して居る所に、喜次郎は髪を結ひ上げ「ヤレ／＼大きに御苦労だッた。」と、立ち上り、後から振り向き「何様だ下太さん、お前も結つて貰はねえか。」下太「左様さ結つてもいい。何様だ化結さん、ぐつと引詰めて遣つて貰へてえが、引詰める事を知つて居るかね。」かみゆひ「お江戸なれんでなア宜うは結はれんが、遣つて見ませうかいな。」下太「其様なら一番束ねて見てくんねえ。」ト、喜次郎が立つたる跡へ割り込み、鏡台の前に顔を差しながら、髪結は後へ廻り、「是りやえらいよいお髭ぢやなア。」下太「宜いといふ程でもねえが、只女惚れのする髭さ。」三「下太公の髭は赤いが多いから、伸ばして棕櫚箒屋へ卸したら宜からう。」かみゆひ「彼

様いふお髭を長うしたらとッと埒明かん。私の知つとる人がなァ、ちやうど此方の様なお顔でなァ、棕櫚の毛のやうな髭を長う伸ばしてぢやつたが、子供等が蜻蛉をしばるとて、其の人の顔をなァ、馬の尻と見違へ、赤い髭を尻尾ぢやと思うて、引き抜いては逃げて往きよるので、蜻蛉の居る時分、おもてへ往ぬると、えらい災難をさるたらとて、家にばかり居てぢやッた。」 下太「馬の尻だなぞとおつう當て付けるノ。」 かみゆひ「オット動くと切りますぞえ。」 下太「切らなくつても、切られるよりやァ痛えから澤山だァ。エ殿さん、自己の知つて居る男がノ、此の髪結公と東埔寨ニッといふ鹽梅に似て居る顔よ、其奴が堀の内様へ參つた時、四ッ谷の街道を牡丹餅を買つて喰ひながら歩行いて居ると、向うから來た馬糞浚ひが、竹の先へ附けた鮑ッ貝を、牡丹餅をつまんで口へ入れようといふ拍子に、顋のところへぐいと突き付けたから、何をしやァがる鈍痴氣めエといふと、馬糞浚ひが肝を潰し、コリヤ何様ぢや、馬の尻の穴から糞が出るのかと思つたら、人間が牡丹餅を喰つて居るのか。物を言つたから口だと思ふが、默つて居ては何様しても尻の穴としか見えぬと言つたさうだ。」 かみゆひ「ナァ頭上を濡さんせ。」 下太「オット承知、そら來た。」ト、天窗を濡らして突き付ければ、髪結は下太郎が月代を揉みながら「イヤ此方さんのお頭を見たで思ひだした、先頃柳原で一面に凸凹のあるえらい大きな薬罐の直を付けたがな。」 下太「フゥム、青柳橋を廻る髪結の天窗に似て居る薬罐が出て居ると言つた

が、大方たれだらう。」喜次「何だかべらぼうと古戦があつて居るのだ。」鼓「下太公の天窗の上へ、親方の天窗が重なつて居ると、まるで銅の瓢箪といふ鹽梅に見えるから宜いぢやアねえか。」かみゆひ「兀げた天窗の青うなり、凸凹も見えんやうに成る傳授が有るがな。その傳授は、稗を買うて來て糊へ雑ぜ、その稗粒を天窗の赤う成つたところへ平たりと塗り付け、水を打つてゝは乾かんやうにして置くと頂天の熱氣で一晩も過たぬ中に、其の稗粒が蒼う芽をふくので、月代よりは何程か綺麗になる事ぢやか。」下太「すッと化結さん、其樣な根揃へぢやアいかねえ、もつとぐつと引詰めてくんなせえ。」かみゆひ「私やえらう詰める事は不得手ぢやでなア」ト、何かぐう／＼して居る故、下太郎は圖に乘つて、一膝栗毛の喜多八ぢやアねえが、上方仕込は根を詰めて結び得ねえから困る。もつと思ひ切つてぐつと遣つて見なせえ。何でも自己の樣な客には、結人の方から二十八文は出しても宜いのだ。根をつめて結ふことを敎へて貰ふのだものナ。」かみゆひ「是りやもうお前はんの言はしやる事が本間ぢやわいの。」ト言ひながら、下太郎が髮の根を力一ぱい引詰めれば、天窗の皮へ四ッ五ッひだが出來、眉毛も眼も釣り上つて仕舞ふゆゑ、下太郎ははつと思へど、今更寛めてとも言はれねば、下太「まだ少し緩いやうだけれど、この位なら不承して置かう。」かみゆひ「こりや大分端毛が長うなつたさかい、鬢の方へ融通して結うて置きますするぞえ。」と、下太郎が天窗の鬢を後の方へぐつと引き出して結び仕舞ふト、髮結は鬢盥

を直に引き下げ、「旦那さん左樣なら。」と忙がしさうに出で行く。喜次郎は下太郎の顏を見て「オヤオヤお前の顏は何樣したのだ。」跛「ホンニなう、开して其の髭は何のことだ。ヤア／＼天窗へ內藤東埔塞を見たやうに、竪に幾筋も襞積が出來たぜ。」喜次「其のはずだア、毛穴が一本々々に持ち上つて居るのだものヲ。开して、オヤ／＼泣辨慶を見たやうな眉毛をして、眼はもう夫れつきり明かねえのか。」下太「何にしても晴々とした。ヤア一ぷく遣らかさう。」と、首を居ゑて火鉢の側へ來り、何か搔きさがつてゐたりしが、「オイ跛さん、此處らに自己の煙管と煙草入が在るだらう、とつてくんねえ。」跛「いけ懶墮な男ぢやアねえか、自分でとらッしな。」下太「探らうと思ふけれど見ッからねえものを。」跛「直き膝の脇にあらア。开して何故首をすゑて向うばかり向いてゐるのだイ。」下太「下の方が見られる位なら、お前にとつてくれろと言つて賴みやアしねえわ。」喜次「エヽ、それ茶を注いで置いた湯飲をひつくりけへしやアがつたわ。何で下も見られねえ程、髮の根を引詰めさしたこだイ。」跛「引詰めさしたんぢやアねえ、化結だの何のと言つて惡まれ口をきいたもんだから、引詰められたのだア。」此の時表の格子が明き狼狽てゝ入り來る野良七飛八、「オイ／＼喜次さんヤ跛公や、下太さんは何處へ往つた。」跛「其處に居るのが見えねえのか。」野良「エヽこれ／＼。」と下太郎を見て「ヤお前何樣した。オヤすヤ其の顏は百眼の通人といふ眼に成つたぢやアねえか。」飛「ウヽッ其の髭は何といふのだ。自己

アお前ぢやアねえと思つた。」喜次「ヽ／＼天窓の毛の穴が一本々々に盛り上つて居らア、何故此様に引詰めて結つたのだ。それとも茶番の趣向でも有るといふのか。」下太「気楽な事を言つてゐなさんなア。」喜次「否に熬れやアがるぢやアねえか。」野良「下太公は癇が起つたのだらう、眼付を見ねえな。」喜「何にしても通り過ぎちやア詰らねえ。」喜次「喜次さん、下太公が首ッ丈といふ麦湯の姉さん殿が向うから来たから、一寸見なせえ。」と窗へ駈け往き、格子の間から首を出し、「早く／＼。」と呼び立てるに、喜次郎もどれ／＼と立ち出でて「アヽム、なか／＼美しい代物だ。」喜次「下太公、早く来て其の引詰めたところを見せて遣らつし。」下太「其様な甘口で謀される様な、自己だと思つて居るのか。」野良「否に疑りやアがるぜ。」喜「天窓の皮を引釣つたので、根性へ斜みが出たのかも知れねえ。」此の時表を通りかかつた年増女と新造が、野良七と飛八を見て、年増「オヤ野良さん、此処が貴君のお家なので御座いますか。」女「飛八さん昨晩は御馳走。」野良「些とおよりな、此処は自己の妾宅だから。」女「野良さんの囲女といふのをお知己にするから。」ト言ひながら、彼方に一人居つてゐる下太郎が手を採つて、「早く往つて顔を見せて遣らつせえ。」ト、無理無體に引き立てれば、下太「アイタヽヽヽヽ、エ何をひどい事をしやアがるのだ〳〵。」喜「何故横目で人を見るんだ。首は傾らねえのか。」下太「大聲をすると鬢へ響くから靜かにしろ〳〵。」飛「オヤ／＼お座頭を見たやうだ、ソレ／＼煙草盆へ蹴爪突くわ。何で此

樣な天窓に結やアがつたのだなア。」と窓の所へ連れてゆき、紫「サア野良さんのお圍樣を連れて來たぜ。」と言ふ時、下太郎も窓の格子から首を出し、「此處はわちきの家なんだから、些とお這入んなはいなねえ。」ト言はれて、女は顔見合はせ、少し猶豫ひ居たりしが、新造「オヤ下太さんで御座いますか。」としま「ホンニ下太さんだよ。」　新造「晩には急度おいで被成ヨ。」　としま「他へいらッしやると聞きませんよ。」　下太「亦恍惚を請けさせようといふ料簡か、何樣も成らねえぞ。」　としま「オヤ逆にじだヨ。」しんぞ「眞正にお往でなさいヨ。八ッに成つても七ッに成つても待つて居りますから。」　下太「ト言つて墮落の邪魔をされて、少數なんぞおやア恐れるぜ。」　紫「ヘンおたのしみな世かいだなア。」ト、手をのばして下太郎の尻の傍をチックリつめれば、下太「アイタ、タ、。」と、身を反らす拍子に、窓の上に在る輪七五三をかけた折釘へ、髷が緊り引かゝり、ぶら下げられた如くに成る故、たゞさへいたき鬢の毛がいよ／＼ぐつと引釣つて、耐へかぬれど例の見えばう、首衝きのばし足爪立て、いたさを忍んで髷ぶしを引掛けたなり、そしらぬかほ。下太「晩には枝豆と茹玉子の總仕舞とやらかしやせう。」　としま「きつとでございますヨ。」しんぞ「下太さんは大層丈がお高う御座いますねえ、形しておくびが長いから恰好のよいこと。」としま「夜お目にかゝると、此樣におたかいやうにやア見えないねえ。」　野良「何にしても這入んねえな、一杯遣付けるとしようぢやアねえか。」　としま「有りがたう御座いますが、ちつと急ぎま

すから。」しんざ「左樣なら晩ほどはお待ちまうして居りますヨ。」野良「穴ッはひりをしちやアいかねへぜ。」下太郎はよこめにて、二人揃つてあるいちやア眞に下雨だ。」飛「自己アぐつとかひ上げて、二萬兩といふ入札にしよう。」とします「オホ・・・・、左樣なら。」したゞ「其樣なにおしやかし被成と、晩にひどいめにあはせますヨ。」と、二人はこゝを往き過ぎる。喜次「なかなかおつな代物だ。」飛「年增も新造も、大元氣よ。」野良「晩に一所に出陣するサ。」喜次「自己が往つたら皆の鼻が明くだらうと思つて遠慮してゐるのだ。」飛「ところが年增の方は、ずつと自己にのつて居るといふ奴だから。」と、話しながら此方へ來れど、下太郎はなほ窗の外へ首を出して見てゐる容子に、喜次「其樣に殘り惜しいのか。」と下太「エ。」飛「もう諦めて此方へ來さつし。」下太「エ。」野良「イヤア下太公の天窗が格子へ支へて引込まねえのだ。」喜次「德利へ指をつんこんで抜けねえ時、うしろから擽ると、ハッと思ふ拍子で抜けるといふから、下太公も後から擽つたら、天窗がすぽんと抜けるだらう。」下太「エ、其樣な事をされてたまるものか。」飛「夫れでも首が抜けねえぢやア猶たまるめえ。ドレドレ。」と、後へ廻り脇の下を擽れば、下太「エ、此奴らア、ア、イタ、、、、タ、、エ、ア、首から格子が抜けねえのぢやアねえ、髷ッぷしへ何か引つかゝ、ア、イタ、、、、エ、此奴らア。」飛「オヤ蹴飛ばすな。」喜次「横の方からくすぐるがいい。」下太「ア、御免だア、タ、、、、。」喜次「ヤアヤア此奴ア妙だ。折釘へ髷ッぷしかひつ

懸つてゐるのだ。」 野良「オヤ〱可愛さうに茹魚章同然だ。」 喜次「ドレ〱、自己が採つて遣らう。もつと首を上の方へ、こいつア丈夫に引掛つた。」 下太「ア、イタ、、、、、。」 喜次「エ、弱蟲な、我慢をしろい。」 下太「夫れだつて是れで首は有りツたけ長くしたのだ、丈のびまでして居るンだものヲ。」 鼓「ナント宜いものが有つた。」 喜次「鋏をもつて來てどうするつもりのだ。」 鼓「これで髷ッ節をちよつきり切つてしまつたら宜からう。」 下太「エ、圖方もねえことをいやアがる。」 鼓「どうせ今日は用なしだらうから、最うちつと左樣して詠めて居るサ。」 喜次「それ採れたわ。」 下太「ヤレ〱手ひどい羅生門だ。しかしお蔭でねが緩んだ。」 野良「ホンニ生まれ付きの通りに眼尻が下つた。」 下太「流石は無雙の自己だから、涕も零さず辛抱したが、彼の髪結の外道めが、いちに成つて引詰めやアがつたので、天窗を〆木に懸けて〆めて居られた樣だつたア。」 鼓「してみりやア一九の書いたのも譃ぢやアねえな。」 喜次「全體人を馬鹿にしすぎるから、あんなめに逢ふのだアな。眞を明かせば先刻の髪結は、本郷四丁目の蔦豚の正吉といふのだが、自己が故意と上方と言つて聞いた物だから、向うが口を合はせて、伊勢だと答へたのだア。すると果して、鼓公と下太公とにはかに仕始めたので、たうとう〆木に掛けられて仕舞つたのだ。」 下太「忌々しい目に逢はしやアがつた。毛穴がいたいの〱たまらア。」 野良「夫れでも顔の風の變つた所を、麥湯の一女に見せたから怨みは有るめえ。」 鼓「エ喜次さん、晩に一所に

歩行びねえナ。」喜三「ありやァ梅の木といふ行燈の出て居るのか。」野良「左様さ〳〵、そして年増の名がお婆で、新造の名がお白湯といふのだ。」喜三「なか〳〵面白い代物サ。」喜三「夫れぢやァ晩に行つて見ようか。」下太「所が年増のお婆めは自己に九分九厘来つて居て、新造のお白湯は九分九厘九毛、今紙一重といふ所で出来るのだから、迷はして置かずに、ぜひ拵へて仕舞ひてえと思ふのだ。」喜三「段さん。」野良「眞に新造に下太公に氣が有るのサ。其處で年増の方は、自己に十分油が乗つて居るといふ證據は、惚れつたいよと言ひながら抓られた痣が、是れ見ねえな。」と二の腕を捲り「チヨット此方では無かつた、此方の手よ。」ノ、ソラ、紫式部の筆の綾といふところが、薄ら残つて居るだらう。是れだものを、耐へられねえのも無理は有るめえ。」下太「夫れにノ、新造めが、男が美くつて程の宜いものは、無法度な水性だが、おまはんは男もよし、程も能くつて實が有るのだから、頼もしいのだといやァがつたァな。」喜三「ア、いたゝ、エ、何故人の背中をくらはすんだイ。」下太「一ッや二ッ叩かれたつて、自己の様な好男子に似りやァ、ほんごら損も往くめえか。」喜三「呆れけへらァ、鈍痴氣めえ。」喜三「其處で晩に衆が彼奴のところへ往つてくれると極ッたら、下太しうと二人で、連中に恃みが有る、といふなァ外ではねえ、例の嗜みの隠藝をあらはして、彌惚れさして仕舞はうといふ段取だ。」下太「全體太棹でぐつと澀く往きてえのだが、未だ義太の方は不飲込みだから、矢張流行の哥澤節で出かけよう

といふのだ。」喜「そこで自己が例の美音で唄ひ付けると、下太公が三味すつて門附といふ趣向だが、下太公の三味線では撥あたりがいいが、何分手が廻らなくつて調子が合はねえから中だけれど、そこは自己が聲と唄ひ廻しで、紛却して仕舞ふ積りだ。」下太「足下が調子をとつ外すのと、相の手を待たねえのは、三味線で繕はうと思つてるるのに、唄ひまはしで紛却すもねえもんだ。」喜「其の妙なのが二人で門附に出て、石でも打つ付けられてえといふ心願なのか。」下太「人の善い事を妬嫉む奴等にやア噺は出來ねえ。エ喜次さん、お前の知つて居る通り、下太公が彈いておいらが唄はうといふなア、凡そ端唄多しといへども、我が物と思へば輕し傘の雪といふのと、夕暮に詠め見倦かぬ隅田川といふのと、櫻エ、さくら山茶花水仙といふのと、三つしりやア無えから、連中へ恃むのは此處の一件だ。先づお前達が梅の本の牀几に腰を懸けて居て、彼の年増や新造が嬉しがる樣に、自己や下太公の噂なんぞをして戯遊つて居る所へ、自己や下太公が、瓶覗きか何かの手拭を眞深に冠つて顏を隱し、鐵子縮の單物、本古久織のお美帶に、桐の厚齒の下駄か何かで、極淺りとこしらへ込み、チンチリンチ、チリンチ、テン、ツテ、トツチン、チンチテ、トチ、リ、ツシヤン、ト三味ひきながら通り掛ると、お前達が大分小意氣な門附だ、一番呼んで遣らせて見ようと言つて、二人を呼び込み、誰でも知つて居るものを唄はせなくツちやア、下手か上手か分らねえから、といふ風で、極つた物よりやア端唄を

遣つてくんねえ、夫れも夕暮なんぞが宜からうと言つて、望んで貰ふのだ。夫れより夕暮を唄つて仕舞ふと、我が物をもう一番と追ひ蒐けのお好みで、また我が物を唄ふ所が、例の美音名節で、惚々するやうに遣らかすもんだから、彼の年増と新造がうつとりする程水性に成り、思はず流す涎に滑りで地平の砂へ跛さんが、身に染々と戀しいなどと、我を忘れて書くところを、ほんに遣る瀬がないわいなと唄ひ納め、小意氣に冠つた手拭を採つて除け、此の愛敬で莞爾と笑ひながらお婆さん、茶釜へ蠅でも入らなんだかと、言ひつゝすつと這入つて見なせえ、人目がなけりやァ默りで抱り付くのは知れて居らァ。」下太「お前に年増が抱き付くうちにやァ、自己はお白湯ばうに頰端が何かを喰ひ付かれて居るといふのは、能い手廻しぢやァねえか。」野良「其樣な事を言つて居て、眞正に茶釜でも割れたらば、妙な物が出來るだらう。」と言ふ時、勝手の流しにて手桶の箍が反ねたのかバチン、水の零れる音サア、引。

三編　巻之中

日は暮れたれど此の頃の暑さに、結句日中より往來賑ふ往還を、喜次郎、野良七、飛八の側隙男うち連れだち、いつも機嫌のたかばなし。野良「ナウ飛公、跛助と下太州は、梅の本の女でれつにやァ、

よつぽど熱坊になつてゐるなア。」紫「だから門附の趣向か何かで、思ひ附かれようといふ存じ寄りのだアな。」喜次「跂助もなか〱甘え聲だし、下太もおつりきに三味ずるけれど、何にしても其の數凡そ第三ッと言ふのぢやァ仕樣がねえなア。」野良「兩人共おひうちに打合はして在るから、數は無くつてもヤンヤとうける氣でゐるんだアな。ところを一番面白可笑しく苦しまして、樂しむなどといふし法が有りさうな物ぢやァねえか。」紫「左樣さなア。」野良「かうしたら何樣だらう、是れからすぐに梅の木へ酒肴を持ち込み、一獻きこし召しながら、お麥とお白湯に思入綢繆き、きつきやと言はせて居る所へ、跂助と下太州が大めかしで、チ、リ、テツ、ン、トツ、ル、チンなどと彈いて來ても、一向聞き付けねえ振で構ひ付けずに置かうといふのだ。すると奴等が氣を揉んで、比羅金樣へ這入つた賊盜が見たやうに、何度も〱此方人の牀几の前へきて、まごつ〱と言ふのは一興ぢァねえか。」紫「併したれぢやァ請け込みが不約束に成るから、さうで無く往きてえもんだ。」野良「それなら丸ッきり餘所の見世へ上つてゐて、やつらが梅の木のまへを彼地へ往つたり此地へ往つたり、まごつ〱まごつ〱する所を見て、樂しんで居ようぢやァねえか。」紫「たれでも矢張此方のぶまにならアな。」野良「後で梅の木と間違へて、ツイよその見世へ這入りこんで、待つて居たといやァ宜ぢやァねえか」喜次「兩人をへゐるしましめるといふお茶番は、自己の方寸に有るから、まアどうするか默つて見て居さつし。」

野良「喜次さんの方寸も餘り當には成らねえノ。」喜次「何にしても賑しくなつたなア。」喜次「此處の見世おやアねえか、行燈に梅の木と書いて有るぜ。」野良「急けば早き古郷の、この口村にぞ着きにけりだ。」喜次「イヤ今晩は、お婆さまにお白湯さま、能いお天氣でおめでたうございッ。」野良「年増と新造の器量と程が大評判に付き、岡惚の我々までかたじけなく思ふでございッ。」と言ひながら、梅の木と誌したる麥湯の見世へ這入りこみ、傍の牀几に腰を掛ければ、其喜次郎が能樂亭の前を通りし年増と新造が其處へ來て、婆「野良さん飛さん、先程は。」喜次「晩に往くと彼仰つたけれど、よもやと思つたら能く彼篤入つて下すつたねえ、眞正に實有りだヨ。」喜次「先刻お婆さんといふお名だといふお前さんと、お白湯さんと云ふお名だといふお前さんと、自己の家の前を通御が有つたのを、一眼見るより何となく懷しく成つて、何分我慢が出來ねえから、日の暮れるのを俟ちかねて、二人を引張つて來たのだアね。」婆「オヤ〳〵左樣で御座いますか、能くまアお連れまうして來て下すつたねえ。」喜次「私やア實ありだと思つたら、夫れぢやア旦那が引張つて來て下すつたのだヨ、憎らしい。」婆「アッタ、、タ、エ、手ひどい抓り樣をする、腰を掛つた根太の天窗を、ア、いてえ〳〵。」と云ふうち、お婆は煙草を吸ひ付け、「旦那一ぷく召し上れ。」と、喜次郎が前へ出せば、喜次「難有え〳〵。」併し此の煙草を此處でむざ〳〵飲むなァ惜しいもんだ。」婆「ア、レ憎らしい旦那だヨ。」野良「アイタ、、、エ、何故

大人しくして居るものヲ抓るんだもの」喜次「オヤ鹿相、此の旦那かと思つて。」野呂「此の達磨かと思つて、此方の達磨を抓られてたまるものか。夫れとも思入が有つて、間違へた振で氣を引いて見たのなら、堪忍して遣らう」此の時お白湯は盆の上へ茶椀を並べて持ち來り、「一櫻のお湯に致しましたヨ」ト銘々の前へ出せば、野呂「茶椀を採る振をして、手を握つて見ようと思ふが、何と握り返してくれる事は出來めえか」虚呂「オホ、、、握り返しますとも。」野呂「ますともだけが覺束ねえノ。」喜次「覺付いてたまるものか、お白湯さんには自己といふ情合が有るのだものヲ。尤も其の情人といふ事は、お白湯さんもまだ知るめえけれど、去年の十月出雲の大社で、自己とお白湯さんといふ割振に縁結びの紙撚へ記してあるのを見て來たのだ。夫れだから今日は他人でも明日は墮落に成るに違へねえと、極りを付けて居るのだ。」虚呂「イヤ〳〵旦那、夫れぢやア私の方は、何ほど思つても無駄なので有りますネ。」喜次「イヤ〳〵お前の名の所にも自己の名が書いて有つたから、兩人とも情人に取持つて下さる思召しかも知れねえ。」喜次「すッとお前の名は其の後守消で塗つて仕舞つて、自己の名を其の上へお書きなすつたから、お婆さんは自己の墮落に違へねえことと、何か二人は婆湯の女に[illegible]つてゐるる、そのうちに後からおひ〳〵くる客に、おばくとおさのは亦もその牀几へ行つてしまふのゐ、喜次「時にさじきさん、跳助と下太州のこねえうち早く方寸の謀計を廻らして置けばいゝ。」喜次「今廻らさうと思

のてゐるさいちうだ。」飛「所を未だ廻らねえうちに、門附どのがでかけて來ると言ふのが落ちやァねえか。」ト喋る牀几の傍へ、笊をかゝへて莞爾々々しながら、六十許りのおやぢがきたり「旦那ァ、茹玉子と枝豆のヲ買つて呉れさつしやイ。おれお愛想に猿踊のヲ躍るべえから。」喜次「爺公、おめへでえぶ御機嫌だの。」延「今そこな酒屋でやたとやらを肴に、一合ぶつくりけへしたら、圖無く浮かれて來たがぢや。」喜次「お前若エうちに些たァ道樂をしたことァあるか。」延「おれから見えても色師の天井といふだッたからネ。先づ男が好いに聲がいゝ、程が宜いだから、鄰村の女子どもまでが惚れこんだといふ物だ。」飛「さうだらうヨ。今でせへ目尻がさがッて、鼻が素人ごしらへのおそなへといふ鹽梅なんざァ、なか〳〵うまみの有る顏だ。」きじ「どうだ爺さん、音曲のはうは些とァやつた事があるか。」延「音曲だらでかいもんだ、聲が美えからネ、鄰村の源右衛門が麥畑へ下りた鴈のヲ追ふとてイヤこりやァ鴈どもヲ何故來たホウと言うて呼ばるのは、五町四方しか響かんぢやが、自己追ひに出て、イヤこりや鴈どもヲ何故來たホウと言つて呼ばると、八町四方響くから、道樂寺さまのお林に眠つて居る木菟どもまでが驚くこつちやが。」喜次「そいつァ強勢な聲だ。時に爺さん枝豆と茹玉子は、不殘で何程ばかりあるのだ。」延「六百許りも有りますへえ。」喜次「夫れぢやァそいつを不殘買つて遣るから、今夜は商賣を是れッきりとして、自己に雇はれてくれねえか。」ト言つて六ケしいことを頼む

のぢやァねえ、今に此處へ男連の門附が來るから、其の門附をお前が呼び込んで。」ト、爺の耳へ口を寄せ、何か頻りに私語いて、懐中から金を出し、紙へ包みて親父に渡せば、親爺は無上に點頭いて、「ハ、、、、ハァ自己此樣な道化た事がチ大好きだで、味よく對談を遣つて見せやすべえ。」喜次「夫れぢやァ爺さん、お前は其方の腰掛へ往つて離れて居ねえぢやァいかねえ。」彌「門附めらが來たら、相圖のチ頼みますぜえ。」喜次「飲みこんで居るよ。」彌「姨捨山へ投りこんで、狸の餌食にでも仕て仕舞ふと言ふ樣な爺を引摺り込んで、彼が方寸を廻らしたのか。」野良「彼樣な半可通な半酔爺に、門附を呼び込ましたつて詰るめえか。」喜次「半可通の半酔だから、此方の誂ひ向きなのだ。まァ默つて自己の爲る事を見て置いて、後の手本にするがいい。」野良「枝豆と瀹玉子の有る中は、何とでも言ひなせえ。隨分六百丈の所は請けて居て遣るから。」彌「まァ〳〵お麥さん、玉子と豆の大番振舞が始まつたから、お白湯さんを誘れて些と下司張りに來ねえナ。」婆「すや難有う。お白湯さん。」さゆ「聞えましたぶす。」婆「早い耳だねえ。」さゆ「玉子といふ聲がしちやァ、我慢が出來ないのだからネ。」喜次「サアサア思入遣らかしねえ。」婆「私やァ枝豆が大好き。」彌「自己も勢分を付けて、八百投でも推始めようか。」婆「すホ、、、、。」さゆ「女は鶏卵を喰べても何にも役には立ちませんねえ。」野良「役に立たねえ事はねえ、澤山喰へば隨分腹は強つて來らァ。」彌「時にお麥さん、ちつと改めてお前に恃みが

有る、ト言ふたァ外でもねえ、情合に成つて貰ひてえのだと聞いたら、お前が私には勘平さんといふ間夫があるトいふだらうが、其の勘平さんといふ人の邪魔にはならねえのだ。なぜならば、今すぐ、ちやァねえ、此の次の世にいろに成つてくれといふのだ。尤も今すぐに成つてくれりやァ夫れ程な事にねえのだが、子の日の小松と来て、曳く手数多のお妾さんだから、たとひこがれて死ぬからと言つたつて、諾と言はねえのはこつちも承知だ。エお妾さん、死んで生まれ變るこんどの世から、かあい相だからいろになつて遣らうと承知してくれても宜いだらう。若し承知してくれるなら、此の世から都合をして置かねえけりやァ成らねえ、と言ふのは、お前が八十で死ねば、自己は七十三で死に、お前が百で死ねば、自己は九十三で死なうと言ふのだから、そのおめへの死んで行く年を聞いて置きてえのだ。なぜならば、七年先へ死んで七年先へ生まれてゐると、自己が二十三に成る時おめへが十六に成るから、ちやうど七ツめで相性といひ年頃と云ひ、五分でも拔目のねえ墮落ができようといふのだ。夫れにおいらは成駒屋と坂彥と成田屋で茄へ雜ぜた樣な男に生まれ、お前は大和屋と音羽屋と紀國屋で掻き廻したといふ樣な女に生まれて出るから、二人並んだ姿と言ふのは、梅に柳か櫻に桃か、牡丹芍藥あやめに杜若。」と言ひながら枝豆をとつて喰はうとして、「コウ／＼自己のお妾さんをくどいて居るうち、不殘殼にしてしまつたぜ。」　野呂「此の世ではからに成つても、今度の世にはお前にくは

れるとよ。」ぼく「飛さん夫れでは後世は、おまへさんと情合になりますから、其の時のてつけとも結納とも思つて、一ぷくつけておくんなはいな。」さゆ「私やア生まれかはつて、恍惚のきさてに成りますから、其の時の請負の前借に、玉子を思入れ喰べますヨ。」喜次「夫りやア能いだらいめえ、アレ下駄を枕にして寐始めやアがる。オイ／＼爺さん、起きて居なくつちやアいけねえぜ。」ぢい「芋の畑へ猪の番に往きやしても、そべり込んで居ると、猪めらがだれも居んねえとおもつて出てくるだア。それだからおれ臥りこんで居ると、門附めらも誰も居んねえと思つて出てくるだア。」野良「ウ、ツ。」喜「しゝと鳥追なら一所にしてもいいけれど、野猪と門附か従弟か兄弟のやうにでも思つて居やアがらア。」北「アレ／＼たうとう寐て仕舞やアがつた。」喜次「オイ／＼爺さん、寐て仕舞つちやアいけねえと言ふ事よなア。」おい「やれ分解んねえ自己猪なう番に。」喜次「これサ爺様、猪の番を為るのと、一所にしちやア違ふだらうぢやアねえか。」おい「ハア違ふかね、夫れぢやア自己臨へ損ねへたこ何でも猪が四四で十六、門附が三味線のヲ持つて来るで、其の三味線の三筋の絲の三と、猫の皮の四乳の四とを掛け合はして、三四十二と成るから、四四の十六と三四十二だら、大え違ひもねえと思つたぢやア。」野良「何でも宜いから起きて居てくれねえぢや往かねえ。」喜「折角一寐入り為べえと思つたに、何でもハア儘に成んねえ浮世だア。」ト、むずり／＼起き上れば、喜「ヤア爺さん、お前の一ッ節へ

枕にした下駄が引掛ッて居るはづ。」飛「道理で天窗かけえに重いと思つた。」弾「エヽ、牙をやア自己の下駄おやアねえか。」飛「何だか此處に脱いで有つたがぢや。」ト、手を上げて髷に掛りし下駄を採り「是れ大えに匂ひがする、エヽ、臭い履物ぢやア。」喜「くせえ筈だ、自己が犬の糞を踏んだのだものヲ。」野「何の事だア小穢え。」喜「エヽ、是れ何故はふつて仕舞ふんだイ。」喜「爺さんと懸けて旅の泊り、心は臭枕といふのは何樣だらう。」野良「自己は先には爺さんの家を、轉りと寐たやうと思つたが、矢張天窗臭だノ。」喜「天窗臭の鼻を撮みち何樣聖天町のだらう。」親爺は大口を開いて欠をしながら「野猪めらア何をして居るだアか、けえに遲いかだやア。」ト溢く折から、五ツの鐘ゴオヽと引。

爰に亦跳助と平太郎は、喜次郎飛八野良七の二人に別れ、夫れ／＼に支度調へ家を立ち出で、跳「平太公お前撥を忘れちやア往かねえぜ。」平太「撥は忘れねえけれど、三味線には恐れる。彼處の近所へ往くまでお前持つてくれねえか。」跳「夜だもののヲ構ふ物かな。」平太「儘よ引荷げか。」跳「すッと僕の[illegible]てくんな、此處等に藥種屋が有つたッけ、辟出藥を買はうといふのだ。」平太「今飲んだつて今驗きもしねえ。」跳「尤も生姜湯を立て付けて、二杯とやらかしたから、大分咽喉の鹽梅が宜い樣だ、一番唄つて見ようか。」平太「夕暮と我が物とたつた二ッで請けようと言ふのだから強氣ぢやアねえか。」跳「お麥めを惚れさせるのは宜いが、餘り手強くむら／＼とさせたら、直に女房に成らうなんのと言やアし

ねえか。」　下太「お白湯坊め自己の顔を見ねえ振で、ちよいと見るといふ目付が可愛くつて成らねえ。コウ惚れるといふ物は妙なもので、此方が飲みかけた麥湯を一寸置くと、何時の間にか其器を取つてぐいと飲みながら、オ甘いと舌打を爲る。その舌打のチヨツと遣つた奴が耳へ付いて、家へ歸つても寐そびれると言ふのは何様だらう。」　喜「何にしても喜次さんだの飛八だの野良だのと言ふのは、腹の内で嘸悋氣がやけるだらうよ。」　下太「兎も角も連中うちで、女に手ひどく惚れられたといふのはお前と自己許りだらう。」　喜「女といふものは少しの所で思ひ付く物だと見えて、此間の晩お麥めが腹が痛えと言つたから、自己が腹が痛くは吉野へござれと遣らかしたら、オヤ／＼跛さんは古風な事がお好きだと見える、古風な事の好きなお人は急度律儀で實がありますヨと言やアがつたが、夫れから些とツヽ趣いて來た樣だ。」　下太「何にしても徐々手拭を冠らうぢやアねえか。」　喜「違へねえ、もう本舞臺へ間近く成つた。」ト、是れより二人は手拭冠り、下太郎は三味線の調子をチン／＼と合はせながら、下太「此の位で宜からうの。」　喜「大道で遣るなア些と高え方が宜い。」　下太「餘り高くしても、三の所が出ねえと往かねえ。」　喜「我が身ながら小意氣な聲だよなア。」　下太「此處いらからおツ始めようぢやアねえか。」ト、推しも強くも下太郎が三筋の絲へ撥を打ち付け、チンチリンツ、チリ、ツ、テレツテ、トツチン、チンツン、トチ、リツシヤンと彈きながら行く。彼方からは麥湯の見世には、とくよりして待

お構へたる喜次郎が、「野良公飛公、ヤヽア三味線が其らしいぜ。」野呂「違へねえ、あれだ／＼。」喜「調子が合にねえと見えて、ヤヤ／＼妙な音がするっ」豆「すイ爺さんツし其處へ三味線を弾いて來たのが其だから、先刻の事たヨ。」喜「安心して居さつせえちゆッたら。」此の中下太郎跋助は梅の木の前へ來かゝり、見ると傍の腰掛に喜次郎初め皆居るゆゑ、下太郎此處ぞと反身に成り、チ、チリチ、チリンチ、チンツテ、トツチン、チンツテ、トチ、ツチヤンヒ・態と牀几の傍へよう通りかゝるゆゑ、豆賣の親父は爰ぞと大聲で、「こりや猫ども、エさうでねえ。四十二の門附めら、此處へ寄つてくれさつせえ。」ト、聞いてびつくり跋助は、下太郎が袖を引張り、ト「イヤ／＼。」跋「己等達の事を野猫だといつて呼びやアがつたぜ。」下太「其の中にやア喜次さんが聲を掛けるだらう。構はず向うへ往くがいい。」喜「是りや呼ばるのに何故こんがちや、一番唄つてくれさつせエ。門附ちゆッたら門附やイ。」喜「いかねえぜいかねえぜ。」下太「なぜ喜次さんは呼んでくれねえのだなア。」喜「ヤア今どなつた奴が履物をはいたぜ。」と言ふ中、親爺は驅け來り、下太郎と跋助が著物の袖を緊り捕へ、豆「主らに此の金をやるべえから、何でも唄つてくれさつせえ。」と、喜次郎より請取りたる金を跋助に渡し、無理無體に牀几の傍へ引いてきて、「義太夫でも新内とやらでも、常本でも富磐津でも、一番唄つてくれさつせえ。お前らがお蔭で十日べえ前から賣り殘つてゐる豆と玉子のチ、六百文で賣り拂つたちふもんだアから。」豆「私

らのは音澤節といつて、端唄が唄へやすのでございます。」要「そんだら祭文を唄つたがよかんべえ、せえもんだら新屋の孫十兒ィでせへ唄ふから、主等に唄へねえちふ事は無かんべ。」○「夫れともはァ祭文も唄へねえちふ事なら、笹松峠の鬼神のお松か、春は花咲く青山邊よ、鈴木主水といふ武士がちふ瞽女の坊ぶしでも唄つたが宜からう。」下太「エヽシ旦那、我等の遣るのは薬唄といふので、一寸々くとした小意氣な短え事ばかり唄ふので御座えやす。」要「夫んだらばハァ親爺陰囊ァを啇かさァらひと言ふのが宜かんべい。」下太「いかねえぞ／＼。」要「エ旦那夕暮に詠め見倦かぬといふのを一番唄ひやせう。」要「そすら困たぞ／＼、其の夕暮さア相成んねえゾ。夕暮ちふと我が物と思へば大し馬のものちふと、櫻え、櫻山花花水仙枇杷の花ちふ、此の三ッさア唄ふ事は相成んねえ。自己意地の悪い事を言ふだけれど、玉子と豆さア六百で賣りこんだちふ大恩が有るがおやかたら、夕暮も成んなけりや我が物も成んねえぞ。」ト、豆賣親爺につゝまつて、困る下太郎股助を、脇に見て居る喜次郎、飛八、野良七の三人は、袖を引張り膝をつッ突き、喜次「何様だ／＼、自己の方寸にゃえらいもんだらう。」要「なかなか甘く廻つたなう。」野良「マレ／＼、玉子と豆を六百で賣つたといふ事を亦言やァがつた。」喜次「エヽ自己があれほど言ひ聞かして置いたのに。」飛「ヨッ彼またあんな事を言やァがる。」下太「芋畑で鵠の番と麥畑で鴈の番ァさしちやァ、自己功名手柄のヲ顯はしたもんだァに、夕暮ちふと我が物ちふの

番に雇はれて損ねたと言はれちやア、玉子と豆のヲ賣つた六百文の恩といふ字に濟まねへぞだとよ。エ、いけねへ／＼段々化を害はしさうだイ。」喜次「こいつァ宜い、下太と跛助が逃げ出したイ」喜次「イヤアあれ／＼向うの屋代見世へ突掛りやアがつた。」野良「ヲヤ／＼親爺が追蒐けるわ。」喜次「こいつア妙だ。」野良「妙だ／＼、あれヤア下太めが轉んだわ、面白え／＼」と二人は笑壺に入りにけり。

三編　卷之下

再説跛助下太郎は、思ひ付いたる門附に、一番ヤンヤと請ける氣の、當が外れて横合から、田舍親爺に呼び込まれ、調子狂へば唄ならで、出る冷汗にたまりかね、三味線抱へて遁け出すと、續いて逃げる跛助も、共に羣集を押し分けて、やう／＼少し遠除く故、下太郎吻と息をつき、「ア、忌々しい、大汗に成つたァ。」跛「此處へ這入つて一息やらう。」ト、麥湯の牀几へ腰をかければ、娘が持て來る櫻湯を、驅け付け三杯飲みほして、下太「つまらねえ田舍老夫に出ッ交す物ぢやァねえか。」跛「些と甘え事が有らうとすると、直に魔がさすと言ふなァ、世の中の當然だから仕方はねえか、聞えねえのは此方の連中だ。」下太「左樣よ、自己とお前が苦しむのを見て、クッ／＼笑つて居やァがつた。夫れに彼の親爺めえ、夕暮と我が物と櫻え、の二ッは唄ふ事は成らねえ、豆といふ字の恩が有ると言やァがつ

たぜ。」喜「左様よなァ、希有に此方の唄ひ物を知つて居やァがるぢやァねえか。」下太「狐や狸は人の心を能く知るといふが、今思やァ親爺の耳は押立つたやうにおつに長かつたぜ。」鼓「して見りやァ彼の爺は野狐か古狸の化けたのかも知れねえわい。」ト、腕組したる後方から「オホン狐や狸殿との御鑑定無理ならず、一ッ穴の貉州と言ふのに誑され給ひたるものなればス。」と、聞いて悔り下太郎鼓助後方を見れば、石町の大愚が牀几に腰を掛け、扇遣ひをして居るゆゑ、下太「イヤァ是れは大愚先生。」鼓「何様してお前さんは、一ッ穴の狸といふことを。」大「其處は天知る地知る人知るの戒め恐るべしス。下僕が今彼處の麦湯店の畔を過ると、かたはらなる牀几に喜次郎大人、飛八大人、野良七大人の高噺、折から小便を催す故、其處なる溜桶へ龍頭を臨ませ、龍の水を落しながら、聞くとは知らず白毛の老父、夕暮と馬の物を押止めた鹽梅、なんとして美味かんべえト言ふと、喜次郎大人が、豆と玉子を六百で賣つたといふ事を幾箇に言ふから、仕舞には自己たちに恃まれたのを白状しやァしめえかと、大きに氣を揉んだといふことから、芋畑だの野猪だのと云ふ噺まで、大概聞きやしたが、此處へ来て腰を掛けると、両大人の談話、さては許り餘所の見る目も痛はしさに、喜次州に豆賣の翁とは一ッ穴の狸てふ事を告げまうよのも、下僕が寸志、ネホヽヽヽ」と咳拂ひ、遣ふ扇の風よりも息鼻荒く、噺すを聞き、眞「イヤ忌々しい奴等だなァ。」下太「道理で〱〱笑つて居やァがると思つた。」喜「し

かし宜い氣味がある、彼の親爺のお紙へ包んで金をくれたが、大方連中から出したのだらう。貫喰でもして遣るべいことと袂から取り出し「ヤア是りやア金ぢやアねへ。」下太「何だ大黒さまが付いて居るのかつ。」馬「何にしても意趣げへしか有りさうなもんだ。」下太「全く自己とお前が惚れられたのを猜んで、悪さを計較みやアがつたのだ。」「出來かゝつた情合を、共々に持つてくれようとはしねえで、邪魔をしやアがらうといふ存じ寄りなら、なう下太公。」下太「左樣さ／＼、此方も其の氣で附きあふのサ。」大「イヤ兎角婦人どもに思ひ染められると、端の五月蠅いといふには困り個詰サ。だから惚れられねえと宜いけれど、瓦の中に玉があれやア、誰の眼にも玉を欲しいと思ふのは當然、實に婦人てふものが浮世に無くば、人に憎まれる事も有るめえと、嘆息爲るのは毎度だから、身につまされて思ひ遣り梅、なにごともたゞ憂くひすの婆婆世界サネ。」下太「其りやア宜いが大愚先生、大分大きな包を持つて、好男には些と不似合な譯ぢやアねえか。」大「所が供に持たせると家へ知れると云ふので、自身力量を費すのも、矢張通が身を喰ふといふ本文通りサネ。」馬「ハヽア夫れぢやア彼の方へ仕送るのに、些と差しつかへといふ一條で。」大「是れはしたり、仕送られて暮す身を、仕送ると見られちやア情ねえネ。有樣は今日梅の木の鶯齋子がところで、茶番の下浚ひが有りやした。尤も忠臣藏といふ題で、下僕が五段目といふ鬮さネ、其處で定九郎を遣ると云ふやつだから、其の定九郎の著付が此の

包の内に殘らず有るといふ一件さ。」下太「夫れおりやァ突張つて居るなァ朱鞘の大小だネ。」太平「丕體定九郎と野猪を早變りに遣ると、大愚先生にやァ打つて付けさネ。」太平「併し豆賣の翁が居らァ、野猪も餘りヤンチでも有りやすめえ。」下太「豆賣の老翁といやァ何か意趣げへしがァ。」太平「イヤ有る〳〵、うめえことを臨へた。」下太「其りやァ難有え、どういふ趣向だ。」太平「なんでも喜次さんを引張つて、野良七と飛八めが、例の通り見世をしまふまで居て、お麥ばうとお白湯ばうを送つて行くに違へねえから、その送つて行く途中に俟伏をして居て、追剝といふ趣向で驚かして遣らうといふのだが、左樣するにはぜひ大愚さんに加勢をお賴み申さなけりやァ成らねえ、と云ふ譯は、定九郎の著付さ、ナァ下太公、大愚さんが此の苦みばしつた顏へ、中五分の髮で黑羽二重の紋付、萌葱博多の帶、朱鞘の大小を、しかも落し差しか何かで往來に立ちはだかり、サァ野郎ども、身ぐるみ脫いで置いて往け、と云ふと、自己とお前が著物の裾を尻ッきりくるりと端折り、手拭を東埔寨かぶりに顋の下で引結び、錦か森の雲助といふ見えで、オウ親分の仰せの通り、此の街道の夜よなか、女を連れて通らうとは餘り押しの強え奴等だ、著物はおろか犢鼻褌まで、振つて置いて往きやァがれと、棒ッ切で地平か何かを叩き廻して見なせえ、喜次さん始め大の臆病、震へ上るは必定だが、何と大愚さん、助太刀をしておくんなさることは出來ますめえか。」下太「大愚さんは見かけて恃まれた事なら、五分でも引かれね

と言ふのが誓願なのだものヲねえ。」ト〳〵　夫れは下僕が追剝の親方に成りやア、此の間からの定九郎で苦しんで居りやすから、隨分すこく遣つてお目に掛けやす。夫れに見渡した所おやア下僕を除けると、中五分の髷の似合ふ顔といふのが有りやすめえ。」下太「ホ　ニ私らや跛公が中五分を冠つちやア、頓間に成つて可笑しくねえ。ナウ跛公、左樣ぢやアねえか。」跛「違へねえ、此方人等が五分月代に成ると、地體の面が甘へばしつて居るのだから移りが悪い。」ニ「彼樣いふ所と出つ交した下僕の運の盡だ、一味連判へ加はりお味方を致しやせう。」下太「お前さんが荷擔人して下さりやア、鬼に鐵棒赤飯に胡麻鹽だ。」馬「大愚さんが助太刀だから、敵をとるにやア違へねえが、相手は喜次郎、飛八、野良七、夫れからお婆にお白湯と女兵を合はして總軍勢九人餘騎だのに、此方が大愚樣に自己とお前おやア、些と人數が不足だなう。」ト言ふ時、後方の薄暗き牀几に腰を掛けたりし一人の男が聲をかけ、「由井の茶め雪、盧呂木亦右衞門が敵打の助太刀しよう。」と言ひつゝ立ち出る盧呂松茶目吉、見るより下太郎手を打つて「難有え〳〵。したが何樣して自己達の此處に居るのを嗅ぎ付けた。」馬「自己と下太公が情合の出來ようと言ふ所を、猜まれて邪魔を爲れた一條を。」茶め「お前たちの來ねえ中から、後方の牀几に掛けて居て、委細の容子は皆聞いた。」盧ろ「敵とねらふ祐經が、落ち行くさきは薩州佐良。」大「アヽイタヽヽヽ。」盧ろ「イヤ是れはお前さんの足を踏んだか、私の下駄は樫歯だか

ら、別して恐れいつたッけ。」 太「誠にひり〳〵痛み入つた御挨拶ッ。」 茶め「いよ〳〵敵を打つ氣なら敵の陣所へ忍びを入れて。」 虚ろ「自己が物見をして來よう。」 下太「奴等が屯のその場所は。」 虚ろ「梅の本と聞いたから、茶目さんと二人で、後追蒐けて出て來たが、何か趣向が有りさうなと、此處へ這入つて相談を付ける折柄、敗軍して前なる牀几へ遁げ込む兩所に、いよ〳〵夫れと推察して。」 愚「愚癡馬鹿御曹子、愚頭木武者成とも思つて居る、お前が物見をしてくれりやア、誠に安心股くゞりだ。」 下太「併し島屋を極めて裏切をしちやア往けねえぜ。」 虚ろ「其樣な二心の有るものに、何で此の通り女が惚れるものか。」 茶め「何樣でも宜いから早く往つて、向うの容子を見て來ねえな。」 虚ろ「其樣なら一寸往つて來べいか。」 跂「いやアおイ。」 虚ろ「チ、チリ、〳〵。」

案下再說喜次郎、野良七、飛八は、枝豆賣の親父を雇ひ、跂助と下太郎を思ふまゝに苦しませ、追ひ走らして笑壺に入り、 喜次「何と飛公、甘く往つたぢやアねえか。」 飛「眞に自己ア腹の皮をよぢらかしたぜ。」 野良「跂助と下太公は何處へ遁げて往きやアがつたらう。」 飛「左樣よなア。」 ぢゝ「何でもはア谷底か樹森の生ひ茂つたところへ逃げ込んだんべえ。」 喜次「いよ〳〵野猪にして仕舞ふぜ。」 野良「爺さんなか〳〵甘く遣つた。」 ぢゝ「大層な事言ふんでねえけれど、糞桶なら自己一時に三荷宛は荷ぐといふ肩だて、夕暮の番人なんぞは麥飯の茶漬とも思ひましねえ。」 喜次「何にしても餘り笑つたので、

咽喉が乾いて来た。お茶でも一寸一杯つぎ、何でも宜いから持つて来てくんねえ。」ト何の彼のと呼び付けつゝ、[illegible]見たがる屁理屈をならべ[illegible]其儘に置いて居たが、[illegible]言つて、ト彼處の小さな腰掛に、腰を掛けて居る奴の噺を聞[illegible]事を言やアがるから。」[illegible]「[illegible]」ト耳を澄まして聞いて居ると、一人小さな腰掛に腰打掛けて居る男が、聞違ひも尤もらしく、「[illegible]お白湯ばう、自己の力の[illegible]を見ろ、ソレ小さな[illegible]に有つたらう、是れだから此の間も餘所へ往くと、然るところのお嬢さんが、島田へ掛けた金銀の丈長も[illegible]見た[illegible]して、二の腕を縛つたから、自己が[illegible]力を入れ、[illegible]で、[illegible]つりと切れたと言ふのは、何様だえ、[illegible]だれだから[illegible]引き[illegible]、[illegible]ますやア捧を捻り切つて仕舞ふのだ。何でも今の世の中は、力も強く[illegible]笑しな理窟に成るものさ。」[illegible]成程太層な事を言やアがるの[illegible]ソレ[illegible]自己が聞いて居たのだ[illegible]」[illegible]其の野郎を一番尻餅を付かせてくれたい。」[illegible]「何様して其様な事が出来るものか。」[illegible]處が見ねえ、彼の腰掛は片端へばかり腰を掛ければ、ほんとに上へ反ねるやつだから、譯はねえ。自己が一番遣つて見せよう。」[illegible]是れは近頃拝見[illegible]許しお前の手際では。」[illegible]ト[illegible]無言つて見て居ねえ。」[illegible]、煙草入を振下げて、彼處の床几へ出掛けて行き、[illegible]ト此處の火入に

ぇ、力が有つた。旦那一ぷく付けさしておくんなせえ。」と煙草を吸ひ付け、「コウ彼樣申しちやア失禮だが
お前さんは宜い御肉合で御座えやすねえ。」男「左樣でもねえが力は随分有りやすのさ。」呑「角力な
んどはお強からうね。」男「素人なら五人や十人は一時に寛つて來ても負けねえ積りさ。」呑「ちよツと一番
御願なせえ。」と牀几の端へ腰を掛け、「一體も相撲は些たア取りやすが、前川、鏡ケ嶽、陣幕に東ケ關
それには強いものさねえ。」男「ハ、、其芝居でもみるのかねえ。」呑「其芝居で役者がとてもまへ役の役をしたに、
眞正の相撲だッたら卜思ひ違ひやす。何でも相撲は腰に力が無くツちやアいけねえと言ふが、お前
さんなんども腰に力が有りやすからうね。」男「私など、腰は臆病で有ますから尻が下へ押つかつて腰へ力をや、
と入れるのさ、ミリ／＼と潰れて仕舞ひやすのさ。」呑「夫れですが其臆氣なもんだ、何でも尻の力が肝
心さ。ソレ二人相撲といふのが有りやすが、お前さんが最惜向うの端へぐツと寄り、私が此方の端に
ぐつと寄つて、此の仕間を明けて置いて私が腰へ力を入れてお前さんの手を引張ると、お前さんも腰へ
力を入れて私の手を引張る、私も腰へ力を入れる、ソレお前さんも腰へ力を入れる、私もまた腰へ
力を入れる、お前さんも、と腰へ力を入れる、私も腰へイヤサ、よりを入れるところを其時、向うの
男がひよいと立つて、牀几はぼつたり返ひ上り、野良七が尻餅を定めし、牀几下に在る[illegible]へ
はつと突出ひ、男「アッ／＼／＼、、、」「此の時彼方の牀几には、馬次郎や八蛇もつて突き輪を引

張り、野良七が容子いかゞと見て居たりしに、今腰掛がばッたりと反ねる拍子に、腰掛の端に乘せたる煙草盆を上の方へ反ね飛ばし、火入は落ちて飛八が天窓へ冠れば、飛八は「アッブ／＼ブル／＼アウ。」野良七は周章き痛さを忍へ、顔をしかめて起きんとすれど、權巾桶へすつぽりと嵌合んではひつた尻なれば、身を揉むばかりで抜けぬ故、野良「アッタアイタ、、、、エ、誰か來て起してくれえ。アッタ、、、、、尻へ何かが喰ひ付いた。アッアッタ、、、。」飛八は天窓へ冠りし火入をとり「灰が目と口へ、アップップッフッ、ハックシヤウハッハアックシヤウ、ブッフ。」お二「何だ是れ主が顔は、ヤア／＼雪降の化地藏ちふもんだ。」野良「アッアイタ、、、、、飛心はやく起してくんねえ。」喜次「エ、夫れ所か、アッブブッププハックシヤウハッハックシヤウ。」此の内お妻は野良七が手首を持つて引き起せば、野良七顔を皺めながら「オヤ／＼尻がびつしよりだ。」妻「何處もお怪我は成さいませんか。」野良「イヤ／＼お怪我は致さぬが、桶頬が有つたので尻がすつぽりはひつたのだ。」此の時喜次郎は手拭にて飛八が天窓をはたきながら「イヤハヤつまらねえ面に成つたゾ。エ、眼を明いては往かねえワ。物を高く買つたのを買ひ冠りといふが、お前のは灰かぶりだ。淺間の山の焼けた時にやア、此樣な亡者が幾箇も出たといふ事だ。」野良「今の野郎は何處へ往つた。」喜次「牀几を立つと直に種なし蕃椒だ。」飛「どうせ此樣な事だらうと思つた。」野良「歩行くたんびに腰ッ骨が、アッタ、

タ、、、。」彌「まだ灰が鼻の穴へハッハックシャウ。」一同「ワッハ、、、、、。」爰にまた跂助と下太郎は、虚呂松、茶目吉、大愚といふ、三人の味方出來ければ、喜次郎、飛八、野良七等をうち驚かして腹いせせんと、梅の本の容子を探るに、案の如く喜次郎等は、麥湯の見世の仕舞ふを待ち、お麥お白湯が我が宿へ、歸るを送るといふを聞き、跂助、下太郎、虚呂松、茶目吉、四人の者は手拭で顏をくるりと押し包み、尻引つからげ腕捲り、手毎に持ちたる棒の折れ、大愚は一人五分月代の鬘を冠り、黑羽二重の小袖著込んで挾帶、長き朱鞘の大小も、流石に暑き水無月、額に玉の汗をかき、大「オホン深更に及び、別して暑氣が甚しく成つた樣でげすナ。」下太「綿の入つた物を著ると、時候が蒸して來ると言ふのは妙な譯さネ。」喜「兎も角も土用の中に、綿入を著て居る位な我慢が無くつちやア、追剝の親方株にやアなれめえナ。」茶目「此の道をとほるに違へは有るめえなア。」盧呂「連中と知りながら強らしく見えるうちが宜いおやアねえか。」喜「其のはずだ、土用の裏に綿入を著込んで居る人さへ有るのだものヲ。」茶目「何にしても今夜は月と言ふ面明りが有るから宜い。」盧呂「ヤァ畜生めが頭を持上げやアがつて吠える存じよりおやアねえかの。」ト言ふうち、大愚の足もとに寐て居し犬が、ワンワンと大愚の裾へ齧み付けば、大愚は悃り、「ヒヤアあアエ、。」下太「大愚先生何故地平を這つて步行くのだ。」大「ホ、斯く犬共に吠えられた折から、四這に這つて步行くと吼え止むと言ふことは、

甲斐の信玄公の教へにしと言ふ時犬は猛つてワン〳〵と天窓を目懸けて噛み付かゝるに、大愚は仰天い
たしオイ〳〵下太郎さん助けなせへ。」ト旋へ上れば、下太郎棒を振り上げて「畜生めら。」ト彼の犬
を打ちに懸れば、犬は猶吠え付く故で軒下に寝て居した犬も皆起き出で、八方より吠えかゝるに、
喜「エヽ忌々しい奴等だ。」與「道で拂つてくれさ。」ト下「腕ッ節を見せて遣らうか。」與「自己ア
此方のほうの畜生めらア、あゝのやアおん〳〵、あゝのやアおん〳〵。」犬は彌吠えかゝれば、茶目
吉、虚呂松、下太郎も、おなじく棒を振り上げて、地平をひし〳〵叩きながら「あゝのやアおん〳〵お
ん、あゝのやアおん〳〵」と大愚は犬を遊けながら見て、熱くさうに腰を上り、「ヤ、あゝのやアおん〳〵お
んッ、あゝのやアおん〳〵ッ」と折から彼方の鼻頭を、下太郎はよく聞き付けて、「さて彼の聲は飛八だ
ぜ。」下「まア、たれに違へねえ。」與「アレ〳〵喜次さんの聲もするから。」大愚は頻に吠ね上り、「あ
あゝのやアおん〳〵ッ。」喜「お頭何だ其様にはねるのだ。」大「ヤレ〳〵今夜は災難でげすナ。」與「何
にしても大愚さん、追剝の親方が披衣紋に成つて居るのやア恐怖が無い。」喜「其處らに懸念し給ふな、
諸事下僕が胸三寸ッ。」下「今のあゝのやアおん〳〵で吠ねて居るお手際ぢやア、何をさしても大丈
夫だ。」喜「もう些と片ツ隅へ寄つて居よう。」與「其だれがいゝ。」と其處なる家の軒下に待つと知
らぬ喜次郎は、飛八野良七諸共に、お拳お白湯に打ち連れ立ち、披露處の親父さんへ、来かゝる道の無

多日に、喜「跳助や下太は何様したらう。」大「大かた此方人らの仕事だといふ事を臨機つて、茶目吉や虚呂松の所へ意趣げへしの相談にでも往つたらう。」[illegible]「お参さん、其様に先に往くと犬が吠えるぜ。」喜「オヤ否だ、気味の悪いこ」さゆ「もう七ツだらうねえ。」ト言ふ時、遥かに鐘の聲ボーン／＼、軒の下には跳助が大愚の尻を衝突いて「いいよ／＼。」大「まア待ち給へ、大おが頭を持ちあげたから。」下太「其様な事を言つて居ちやア、通り過ぎらアな。」大「然らば出ませうかナ。」ト[illegible]何か追剝も致し付けぬと、場うてが致すて」トむう／＼隠るゝを、跳助に腰へ手を掛け押し出され、余儀なく往来へ出掛りたりしが亦戻り、大「其處へらに蛇目の傘といふのが在りやしたつけ。」下太「傘を何にするのだらう。」大「是れは近頃尊大人の教諭とも思ひ侍らすへ、定九郎の役を勤めて蛇目の傘を持たねえと言ふのは、神武此のかたないはなしだえッネ。」茶目「往かれえ／＼。」下太「定九郎の役が傷れたなら、だか、追剝の親分を遣るのだから、天気の宜いのに傘を差して出ちやア往かねえわナ。」大「然らば[illegible]とも、御曹子牛若丸などは。」跳「なんでも宜いから早く出かけなくッちやア往かねえ。」ト[illegible]皆々の止めて往舞ひたア。」此の時喜次郎は先にたつて歩行きたりしが、今軒下から押し出されしに、黒き者をちらりと見て、忽ち其處へ立ちどまり、喜次「まア僉が待ちねえ、何だか可怪しい事が在るから。」[illegible]「何故何故。」[illegible]「幽霊でも見えたと言ふのか。」喜次「なアに幽公ぢやアねえが、コレ彼處の軒下から黒

束で長い刀をさした奴が一寸出て、此方人等の容子を窺ひ、直に引込んだからョ。」野良「正眞か、エドレ／＼彼處の軒下かえ。ヤ何か居るぜ、オヤ居るぜ／＼。」[illegible]「ヘン案じなさんな渇屋の懼だア。」コウリア大層な事を云ふんぢやアねえけれど、二本差した奴が恐怖つて、燒豆腐に喰はれるものかツ。」リア自己の後へ付いて衆が歩行びなせえ。」おいい「そんだ事を言つたつて、主もふるへて居るでねえか。」

おい「ヘンよしてくんな、江戸ツ子だア。」と、口には言へど大の臆病、足は進まず見えたりけり。

敍

徒然なるまゝに日ぐらし硯に向ひて、七偏人の四編の序文、ハテ何とした物だやらと、思案に出子を廻らせど、下手の考へ休むの喩へ、竹の林に名を得しは、中華にては七賢人、我が朝にては竹取の翁が娘赫奕姫、彼の譃つきの彌次郎は、竹の放屁の音にひゞき、竹になりたや七九竹、心の竹は小唄の一節、姿は見えぬ竹簾、竹の子笠に面を隠し、竹槍さげしは竹智光秀、小田の蛙の音にきく、鶯はやき梅亭ぬしと、名乗りて見れば竹馬の友垣、されども腹の布袋竹に、およばぬ余は青皮むけぬ愚才の竹やつこ、矢竹ごゝろにはやれども、弓とはならぬ寒竹の、筠燈臺をかゝげつゝ、木に竹を次ぐ百物語、例の滑稽妙竹林話、竹に八千代の寶物に、廻らぬ筆の今年竹、燈心でほる根なし言を、竹の柱にもたれつゝ、東叡山下の竹窓に述ぶる。

岳亭信春

再読下太郎、呑助に、虚呂松、茶目吉、大愚らを、自己が味方に引き付けて、喜次郎、野良七、飛八が、茶湯の女お奏お白湯の見世を仕舞にして、我が家へ帰るを送る其の道に待伏なして、思ふさまうお驚かして遣らんものをと、更けしに寂しき片側町の、月影届かぬ軒下に顔を包みし姿をかへ、俟ち構へしとは露知らぬ喜次郎、飛八、野良七は、両個の者の楽しに道はゞ、麥湯の女を送らんとて、枝道許の老爺なるも、連れて此處まで来たが、ふしか、喜次郎早くも軒下に、大愚が有漏つく姿を見出し、怪しみ恐怖れに立ち止るを、飛八は力へかへり「ナニサ己が自己の後方へくつ付いて來なせえ。ヘン恐怖いと思やア恐怖いし、亦恐怖く無えと思つて見りや、少しやア恐怖いけれども、荒木又右衛門や宮本無三四なんぞは。」「喜兵衛お前は強いよう、強いから行きつくさと先へ歩行びねえ。」「ナニコレサ飛公、後方へ付いて来いといふから、汝が後方の方へ廻つて居るのに、何を臨へ身振なして居るんだ」ぐんぐんと歩行ばッしたに「ナニ今天然と見られた奴等に、いさく以て済まないから、ちいッと仕置が手荒いから、道の都合を臨へて居るのヨ」「ナニ仕置を為るのに道の都合にも及ぶめへ」「コウ此方は道の都合にやア及

ばねえが、唎と云つて飛び出した時、向うの奴等が逃げるのに段取が有るだらうと思つてサ。」「向うの奴等が逃げる道の都合までかんがへずとも宜いぢやアねえか。」枝豆賣の老父は後方から聲をかけ、「何を立ちどまつて評議のチして居るだア、夜が明けるに往かつしやんねえか。」喜「サア飛公、お前の勢ひで先へさつさと往きねえナ。」飛「へゝ孔子のたまはく、箱根から此方へ野暮と化物があつておたまりが有るものかツ。」野良「野暮と化物は無からうけれど、追剝や盗賊は幾箇も有るから氣味が悪いのだア。」飛「エ、イ不景氣な、なんぞと云ふと味方の勢ひのくじける様なことを云やアがらア。」喜次「サア/\飛公の後方へ付いて皆が歩行びねえ。」ぼく「何だか誠に恐怖いねえ……」呂「吾儕もだがた振へるけど……」野良「飛公が先だちだから、何か出たら飛公を置き去りにして逃げようと思やア、此方人らは捕まる氣遣へは有るめえサ。」飛「氣の引けるやうな事を云ふなといふに、忌々しい。」喜次「何にしても彼様して居た分にやア果てしが付かねえ。」野良「サア/\飛公歩行ばつし。」と、女へ見榮に強がりたる口故、先へ立たせられ、喜次郎と野良七は、麥湯の處女お麥お白湯枝豆賣の老父を連れて後に付き氣味を悪々行きかゝる。軒の下には待ちまうけし下太郎、跋助、虚呂松、茶目吉、大愚にそれと知らすれば、大愚はオホンと點頭いて、裸で居てさへ堪へられぬ暑サをものの数ともせず、黑羽二重の厚小袖に、萌葱博多の帯をしめ、朱鞘の刀脇差を前の方へ出して差し、五分月代の鬘を冠り、定

九郎が五段目の茶番の形をその儘に、額と鼻のまはりから、玉のやうに出る汗を繻袢の袖で拭きなが
ら、否味に氣取つて飛八らが來かゝる向うへ立ちふさがり、「オホンおゝおい、おゝおい老父どの、後
の宿から仕けて來た。」ト云へば、側から下太郎が、「コレサ〳〵。」と小聲で云へど、大愚はそれを耳へ
も入れず、「縞の財布に五拾兩、その金此方へ貸して下せえ。」ト、頭を三ッ四ッ振りまはして、懐中か
ら手を突き出せば、先に立つたる飛八は、噫とばかりに仰天し、一言半句の辭も出でず。喜次郎と野
良七は只ぐわた〳〵と震へながら、後方のはうに立ちすくむを、見るより下太郎跂助は、面を包みし
手拭から、眼ばかり散眼々々光らせかけ、持つたる棒を大地へ突き立て、大愚が傍に立ちはだかり、
可笑しさ呑みこむ作り聲にて、「コレサ親方、うま〳〵鴨が掛つたのに、忠臣藏のせりふめかした洒落
どころぢやァ有りやすめえぜ。」 跂「左樣とも〳〵。サア親方甘々と押へた此奴らを、自己ッちの手で
料理うか、但しは朱鞘の新身のためし。」 大愚「チョッ不景氣な、アレ向うに寐て居る白犬が。」 下太「ハ
テ宜うごんす。四邊の事にお構ひなく。」 太「犬もなかざァ打たれめえに、益ねえ聲をして吠えるゞ。」
此の時廬呂松、茶臼吉は、いつか喜次郎、飛八等が後方へまはりて道を塞ぎ、割鐘聲へふしを付け、
茶「彼樣逃道を取り切れば、蟻の這ひ出る所もねえ、命が欲しくば衣物を脫け。」 廬「しかし女は格別
の情をもつて宥して遣るが、男はきり〳〵脫ぎやァがれ。」ト、持つたる棒を振りちらし、地平を破り

と打ち明けば、傍に立たる口太郎も喚助もまた棒振り蹴し、「さアく〜はやく〜」と、是れも亦平を叩きまはせ、飛八、呑次郎、野良七に、ひしやり〜といふ度に、悄れ〜と面皮にり、「エヽ脱ぎますく〜」「ヱヽ此様なことだらうと思つてから立ちどまつたに、お前がかれで、アつゝつまらねえ」「ヱヽ東公、自己には何とか云訓なしてくんねえ。裸に成つて追剥に逢ふたけても宜いけれど、お前も知つて居るとほり、第一衣物を持ち逃げ同然にして借りて今にのだから」「ヱヽ虚松、弟のきものを着逃げにしても、是非がしてえのならい、衣物にとるのならい。此方かにりたった「ッヽの命を貰はうか」「何うせ自己ァすでに見込まれたやうな、猫に追はれた座敷の小鼠、どうせ鼠の智恵が有つて、地獄の中へもぐらう駒うが、雷獣の性を避けて猫の上へかけあがる術が、引尾へ一度ふはされば、ささア確ヤ　狐の皮の細い財布かい、雞の腿の金銀を、猫の十六文も残らず權にむこうたる猫と思つて、裏の隙間見諸共に、麒麟を振り駄しましまへた」「ヱヽ棒組のいふ通り、此の衣紋竹へ軒端の藪の裏をはつて、夜つとも鏡玉子湯を、呑みぎて来て油蟲、我から火に入る夏蟲の、壺の尻のあかないうち、つくぐ惜しいと啼かずとも、衣服の蟬のはたか蟲、くそ溜桶の蛆々せずと、さる轡蟲かけられて、草を出されぬ蓑蟲と、あきら蚯蚓にすすの浮きしづみ、蟻はねばつたところのとしたる芋蟲が、胡蝶の夢を見たとおもひ、蟋蟀のきり〜と、身がるな蠅で其處へ螻ず、〜被

方の茶目吉が「鴨の眞似をする鳥の素野郎、水鳥はくらはねえで、麥湯の處女の頬白鳥や、目まだぐらい運羅の毛をむ白さぎ、もん／＼、鴨のうまい噺に鸚鵡とは、七面鳥にもおとつたる、御堂の鳩ひるてんの、木菟面では鶺鴒が強そわ。コレ自己の樣ないい顏鳥で、程や愛想も行々子の、黄ばはさへとまりやさま、四十雀の大年增、じふしまつの新造ツ子が、本色鳥といふ譯でもねえ、ナリ甘ずのでつぺん掛けて、家鴨のねらふ鯉の先まで、鴻を思ふ夜の鶴、妻こふ雉子の啼面さげ、夜の鷗が先にたつたら、かうがい取らしまさア、衣服も帯も襲で、其邊らへ一所に乙鳥、鶉鼻褌までも、鷸のとつて顋はまた襟、疾風寒いと雀錯漉」ト、少し反身でせりふめかせば、鷗丹根も都合にかゝり、沙魚彼の鮭もう腕れて、目らへ干鱈に大腹を、めぐりて好魚に由の鱧、鰻黒鯛になることを鯱伴、河瀨出雲の鰺鰡には、見はなされたる四文やの、鯑で女は見むきもせぬ、鰐の蒸付の鹽辛か、あんほうれたの鱵いて來野郎、せうさい河豚ほど面を脹らし、たとひ鰹と思つても、蛸鱶の章魚で手は出ませぬ、鯨うきうと諌めて、鰌のさし身にされねえうち、鎌倉海老の腰を折り、平目に成つて鰈ひ、鯉魚らぎれほど鯰魚の、袋の中から鯑け出し、命は泥鰌お助けと、合はせ鱚の手の平で、[illegible]魚申して鰻魚とうた、襟に成つて衣服を鱵、市か鯖買ひに鰤こかし、酒屋へはこぶ鯛鶏や、[illegible]の金子島賊たこじト、身二ので白眼めば大息も圖に乘り、鯔折りし褌をゆり直し、刀の柄へ手をかけて、目かたは

んとしたれども、根が不器用な生まれゆゑ、口をむぐ〳〵爲るばかりで、一言半句も出でざりしが、不斗思ひ出し越年の、晩に聞きたる靑物盡し、是れ僥倖と咳拂ひ、「オホンあゝら目出たいな」オホン目出たいな、目出たき今宵の追剝に、靑物盡しで威張りましよ」オホン一夜明くれば元日で、門には松茸しめ菜山葵、羽子薯蕷と、オホンあね山椒、二日はおたから蓮柚めに、三ツ葉布團を敷き重葱、御オホン二ツ竝べた眞桑瓜、旦那は柬埔塞の大あたまへ、彼の蓴菜のぬらめきを、胡桃々々と付蕪、御新造さまは混布卷の、オホン帶を解く手の早蕨に、海蘿の紙を揉大根、そろ〳〵根芋や人參に、サア新牛房しね生姜と、旣にあや款冬その折から、惡魔外道は蕃椒、ちん鳳れん艸おつ蓼て、烏芋とこから冬瓜の、白粉つけた顏を出し、何を茄子といふ所を、八百屋の小僧が搔いつかみ、茗荷たけとは思へども、大薩摩芋でころり〳〵と、おん厄拂つて、オホン置いて往けサエ、」と、又も天窗を振り廻し、ぎつくり白眼む可笑しさに、下太郎、跋助、茶目吉等は、吹き出す口を手で押へ、暫時はものをも云ひ得ざり。喜次郎、飛八、野良七は、肝魄も身に添はねば、何を聞いても耳へは這入らず、只ぐわた〳〵と震ひながら、帶引きときて其處へおき、衣服も徐々脫ぎかける。後方に蹲踞みし豆寶の老父は元よりきかぬ氣故、さいぜんよりして隙あらば、摑み付かんず勢ひにて、身構へなすとは夢知らぬ、大愚はいよ〳〵興に入り、今一言辭と考へて、幼稚き時に習ひたる手本の讀を思ひ出し、した

り顔にて咳拂ひ、「オホンあゝら目出たいな、オホン目出たいな、目出たき今宵の追剝に、五十三次宿宿の、名寄せで最一ツ威張りましよ。都路の行くほどは、五十路あまりに三ツの宿、時えて咲くや江戸の花、浪しづかなる品川や、やがて越えくる川崎の、軒端雙ぶる加奈川は、早程ヶ谷に程もなく。」と、刀の柄へ手を掛けて、足八文字に蹈み開き、首を振り立て振り廻し、眞赤に成つて云ひたてる、隙を付けこむ豆賣の、老父はつゝと走り寄り、物をも云はず手を伸べて、大愚が胸を突き飛ばせば、大愚は悄り仰天し、「ヒヤウ何する。」と蹣跚くところを、大愚が股へ手を突込み、陰囊とらへて締めんとするに、彌々悄り狼狽へて、「ア、下太さん、ア、これ何をする、ア、これし。」 おぢ「山猫村の佐五十が、追剝の大將を生捕つたぞ。」 大「エ、この老父、ア、下太さん、エ、陰囊。」 おぢ「何の是れ陰囊も下太だまも入んねえぞ。」ト、何樣やら彼樣やら股へ手をいれ、陰囊と間違へて、ぶらりと下りし陰莖を鰻魚摑みに引握り、犢鼻褌ぐるみ捻ぢ上げられ、大愚は顔を顰めながら、「ア、いたゝゝゝ、エ、人殺しイ、ア、人殺しイ。」 おぢ「サア大將を生取つた、繩さア早く持つて來い。」 大「ア、いたゝゝゝゝ下太さん早く助けてくれ、跋さん是れは情ない。ア、いたゝゝゝア、いたゝ。」と、苦し紛れに豆賣の、鬢の邊へむしやぶり付き、兀げた天窗へ喰ひ付けば、豆賣老人は齒を喰ひしめ、眞赤に成つて顔をしかめ、涙をほろ〳〵翻しながら、「いたいぞ〳〵、ア、これ、自己らが天窗を喰ひ缺いて、月代ま

しても追剝がうといふ存心だな。アヽいたヽヽヽヽコレ野郎ども、二人のものは死身になつて、掴み合ひたる大聲に、下太郎と跋助は、世間へ知れては悪しかるらんと、思へば中へ立ち入りて、ぢいさんコレ〳〵マア此の手を放しねへ。自己達は洒落の追剝だから。」と止めんとする出合ひ頭、老父と大愚は組み合ひながら、蹌踉々々倭儀けて下太郎が、體にどつさり打付かれば、跋合に彼方へおし飛ばされ、背へ掛された打水の、潴りに足を辷らして、仰向けさまにどつさりと、轉べば生憎飛八が、衣物の襟いで擲踞ひたる天窗と天窗がゴツキリと、當るに飛八仰天し「ヒヤウ、アツたヽヽヽコリヤ〳〵、いたヽヽヽヽ」と茶目吉、麻呂松、跋助は、老父をやう〳〵引き放し、大愚をわきへおしやれば、喜次郎も此の時に、追剝の者共は、下太郎と跋助が仕返しなりといふを氣が付き、共に親爺を止むれども、老爺はなか〳〵承知せねば、「コウ爺やア、眞正の追剝でねえといふ證據は、コレ此の通りだ。」と大愚が天窗に冠りたる鬘をぽつかり採つて見せ、「此様な馬鹿げたとん間な面で、何様して荒事が出來るものか。其して着て居るものは、ソラ夏もお小袖といふので、お茶番だといふのは察しるがいいぢやアねえか。」と云はれて親爺も納得するに、喜次郎は苦笑ひ、喜次「串戲も程があらア、愚蒼らしい。其して大愚先生は、ふかしたてのかしう玉といふ風に、ぽつぽと煙を出して居るぢやアねえか。」下太「その筈サ、裸でさへ凌ぎかねるといふ暑さに、お綿入を召しての組打だものヲ。」 喜次「いやはや呆れて

ものが云はれねえ。」い三「忌々しい不洒落をしやアがつて、自己ア地が濡事やつし方だから、此様な事は蟲が好かねえワ。」よ三「喜次さんはじめ是れ程のよわ蟲、夜入道だやアなからうと思つて居た。」下「お客様もお白湯はうも、自己の仕打が凄い程に甘えのだから、嘸恐怖かつたらう、可愛さうに。」自己アお前公、はやく帯でもしめさつしやい。居小便をしたといふ尻ツ付きで、何故地平に居り込んで居るのだ。」三「夫れでも何様も立つ事が出来ねえものヲ。」下三「腰抜だやア有るめえし、立たれねえといふことが有るものか。」「腰抜だやア有るめえし、ヘンあるめえしも押がつええ。」喜次「夫れおやア真正に腰が抜けたのか。」三「こんの面白くもねえ、腰の抜けるといふお茶番があるものか。」此奴等は気の弱いので、無智短才の奴ばら、少しく不覚をとつたのだものヲ。」「左りやア了得に負勇の自己だから、帯もやはり衣物も脱いでやつて仕舞ひ、十分油断をさせて置いて、一人も残さず丹波國の荒熊同然に、生捕つて仕舞はうといふ謀計を、帷幕のうちに廻らす所へ、下太公が出て、轉んで、自己の天窗へ、[illegible]、凸円頭のさい槌を、打付けられたが運の盡、はつと思ふと其の儘に。」「腰の蝶番が緩んだのか。」「何の人ヲ、緩むといふが有るものか。」三「それなら早く立たッしな。」「腰が抜けて仕舞つたのだもの立たれるものか。」「チヨッ厄介なことを云やアがるぜ、ドレ〳〵自己が立たして遣らう」ト、手をつかまへて引立つれば、飛八はやう〳〵と顔をしかめて立ちあがる。

喜次「ドレ歩行けるか歩行いて見なゝ。」下太「歩行は下手、轉ぶは自己の名でお下太やお下手。」喜助も手を叩き、「こゝまでお出で甘酒しんじよ。」喜め「其いくれゑ歩行が出來りやア、蒲次兵衞さんの御厄介に成らずとも濟むさうだ。」馬「坊はお白湯ちやんと抱子ちて往きたい。」虚呂「イヤはや穢い面つきで、其樣に腰が伸びねえのか。」喜次「大愚先生は何處へ往つた。」大「オホン是れに在庵。」野呂「イヨウ大愚先生も可笑しな腰ツ付きをして、爰して何を散眼々々さがして居給ふのだ。」大「彼の親爺めに把られたものを致してげすから。」野呂「ナニ把られものを被成つたヱ。」大「イエサ倅めを、オホン把りとられてげすから、其處えらに轉ばり落ちては居りやせんか。」下太「ヱ倅とは得手を把られたのかネ。」大「でげす得手を無くしました。」喜次「馬鹿な事を云つたものだ、竹の子か何かぢやア有るめえし、引つこ拔けてたまるものか。」大「イヤサ大人、しか宣へども、眞以て。」ト股へ手を入れ探つて見て、大「犢鼻褌のうちは空蟬の、殻風呂敷に成つてでげすから。」下太「夫れがいよ〳〵眞正なら、憚りながら一寸はいけん。」馬呂「お月樣の方へ向つて捲らねえと、手暗がりに成つて拜不見だらう。」喜次「何にしても一寸お見せなせえ、無くちやア大變だ。」大「然らば御高覽に預りやせうか。」ト著物の裾を引き捲れば、喜次郎は覗きこみ、喜次「成程何さま犢鼻褌のうちは、明店に成つて居るやうだが、脇の方から大分大きな尻ツ尾が如鼈り顔を出して居やすが、萬一夫れでは御座えやせんか。」ト云はれ、大愚は懷中から徐

と手をやり、股ぐらを探りちらして苦笑ひ、大「イヤ是れは本棹の方を探られやしたが、オホン掛替の方が殘つて有りやした。」ト、是れにて一同笑ひと成り、いざ歸らんといふ折から、明六の鐘ボオン、鷄の聲トツケコウ〳〵引。

東西々々、さて是れまでは第三編の趣向の居のこり、是れから先が四編の幕明き、そのため口上おようくりさやう。

○

光陰は矢竹に戰ぐ風さへも、いつしか秋の聲寂びて、昨日には似ぬ涼しさに、破れ障子も世に擧げられ、火桶もほしき雨の日の、徒然なるを慰めかね、青柳橋の新道なる、能樂亭に打ちまどふは、相も變らぬ茶目吉、虚呂松、跳助は大口あいて欠をしながら「噫あゝつまらないとて惡氣を出すなッ。」喜六「同じ欠をしながらも、噫々しん氣臭いとて達磨氣を出すなとか何とか云へばいいのに、働きのねえゝ。」喜六「自己ならつばな摘なと云て笊氣を出すなト言ふけれど。」茶の「ホンニ達磨氣エ、笊氣ぢやァねえ、惡氣といやァ横町の兩替屋へ這入つた、盜賊は甘くやらかしたぜ、先づ斯ういふ陰氣しきに。」ト袂から手拭出してくるりと冠り、尻を端折ッて立ち上り「テチッテチ、ニヽノ、」と言ひながら、無言狂言の身ぶりにて、其處等近所を掻きさぐり、段々蠅帳の傍へ行き、蠅帳の戸へ手をかけて「フ、

ム是れこそ兼ておぼえの寶藏、ありがてえ忝え。」と言ひながら、開きを明けて手を突込み、菓子皿に殘つて居た唐饅頭を引つつかみ、二ツ三ツ一どきに、口の中へ頰ばれば、「ハ、此の盜賊は眞正の盜賊かと思ひの外、とんだ事をしやアがらア。」「饅頭もむかいが自己の趣向も横しだらう。」「夫れよりお前道の質屋へ這入つた盜賊の方が。」「いや／＼盜賊の噺をする奴にや科料を出させるぞ。」「下太公が追剝のお茶番此のかた、連中の人氣が惡くなつて困りきらア。」と言ふ時、障子を瓦落裏とひきあけ、「へゝゝ下太公がされえもんだ、手前の音頭とりでやつたくせに。」「無茶の婦人も追剝さわぎで、何樣やら斯樣やら蹴散らかして仕舞つたな。」「しかし彼の時にや大愚大人もなか／＼妙だつたぜ。」「都路の行くほどはか何かで、強氣と人をおびやかしやアがつた、忌々しい。」「彼からいふと、天狗に成つて、何ぞといふと青物盜しの自慢をはきやアがるから、いゝ。」「世挪ひのか。」「先刻逢つたら後刻能樂亭許へよか出やすから、尊兄にも些と音信へなせえと言やすかつたから、急度今に出かけて來るぜ。」「何をか一趣向計較んで、追剝の敵をとつてやらうぢやアねえか。」「手前が頼んで定九郎にして置いて、敵をとるもねえもんだ。」「違へねえ。」「此の野郎も當人で在りながら、餘所々々しい。」下太「イヤサ當人は當人だけれど、自己ッちのするのは兄弟喧嘩で、大愚は赤の他人だアな。」「大愚ならば馬鹿の他人だらう。」「ばかの田螺をいつて貫

ハヽヽヽヽ。」下太「何にしても仕返しの工夫が在りさうなものだ。」喜次「又仕返しといふより、押しの強え
ものがあるぞ／＼。」下太「何様いふ工夫だ。」虚呂「工夫がやァねえ、蠅帳の中に唐饅頭が有る。」折から表で
「オホン。」茶め「そォら来たぞ。」

四編　巻之中

然る程に能楽亭には、茶目吉、虚呂松、下太郎、跛助、四人の者どもうち集ひ、主人の喜次郎諸共に、相も変らぬ冗談の、果ては何やら一趣向と、思ひ付いたる下太郎が、進めに跛助膝をよせ、「コウ／＼聞きやれ、いゝ趣向を思ひ付いたから。」虚呂「横町の両替屋へ入る盗賊なら御免だぜ。」喜次「まア聞かッしナ。」下太「下太公、この秋雨の極深閑と寂しいところから思ひ付いたのだが、大愚が来たら晩まで引き留めて置き、百物語といふのを押つぱじめ、驚かして遣らうといふ狂言だ。其処で其の百物語と云ふのは、燈心の中へ行燈をすらりと百筋入れて置いて、人々に気味の悪い話をしては、其の行燈を一筋づゝちよい／＼と消して仕舞はうといふのだ。」虚呂「成程おもしろい趣向だ。併し燈心の中へ行燈を百筋入れようといふのは、余程の伝授ものだらう。」茶め「何故な／＼、燈心の中へ行燈。」下太「言ひかけて少し癖へ、ヲヤヨツ聞き下手めエ、つまらねえ所で言葉咎めをしやアがらア。」喜次「いゝか

ら言辭とまけと言ひねえ。」 盧子「まアお咎けなら祟にとさして置いて、其處で氣味の惡い噺といふなア、湯屋の流しで赤膏藥を踏みつけたとか、雨に打たれて消けかゝつた犬の糞の傍を、跣で歩行くとかいふ様な事を言やア宜いのか」 長「成程はなせねえもつゝんがアだぞ。コレ能く聞けヨ。」 盧子「應よく聞かう。」 長「只今氣味の惡い談話と言つたのはナ、麤い恐怖い噺をすることだッ。」 盧子「氣味の惡いのいの字は、いろはのいの字を書くのか、らむうゐのゐの字を書くのか、又麤いとは出の惡い漬菜の類か、恐怖いとは親父ばかり存る子供の言辭か。」 下太「チヨツ宜い加減にしねえのか、騷々しくツて成らねえワ。」 盧子「夫れでも能く聞けヨといふから能く聞くのだア。」 來め「宜いサいいサ。」 下太「ナウ喜次さん、跛公の思ひ付きにしちやア、百物語といふのは近來の大出來だから、大愚の唐人が來たら、引つつらめへて押つぱじめるとしようではねえか。」 長「ナニ跛公の思ひ付きにしちやア、ヘンちやアとは何の事だ、ちやアが氣にくはねえワ。」 來め「ちやアでは氣にくはねえのは尤もだ、三六のでも宜いから酒にして貰はッし。」 下太「又口を出すヨ。」 盧子「ちやアでは御免だが、酒ならば自己も口を出さう。」 喜次「百物語も宜いけれど、麤いはなしをして、明りを一筋づゝ消すばかりおちやア詰らねえが、何れ其處にやア。」 跛「趣向は十ぶん有馬山、否といふかは知らねえが、先づ揺いつまんで言はうなら、大愚が例の臆病から思ひ付いた百物語で。」 來め「喜次さんや飛公だつて、餘り氣丈夫と

いふでも有るめえ。」跂「しかし今度は自己といふ、強者が味方に付いて居るから。」喜次「よしサ〳〵お前は強いヨ。ア、夫れから。」跂「明りを付ける燈心が百筋といふのは、百怪談のお定まりだが、百筋にして、もし眞正に化物が現はれ出でた日にや大騒動だから、燈心百筋といふ所を。」菜め「先には行燈を百筋だつけ。」跂「チョツ默つてるろイ。」と白眼みつけ、「ア、其處で百筋といふ行燈を、其の座の人數だけに減じるのだ。」虚ろ「夫れぢやア五人人が居りやア、行燈を五ツ出さうといふのだらう。」跂「エ、イ行燈ではねえ、行燈の油皿の中へ入れる燈心を、人數だけにするといふのだワ。」虚ろ「自分が雜ぜこぜに噺して置いちやア、熬れて居やアがらア。第一行燈といふからして釋らねえワ。」跂「何故行燈が釋らねえ。」虚ろ「左樣出て來るなら伺ひませうだが、行燈の燈とは何樣な燈だ。」喜次「亦始めるヨ。」下太「まう〳〵雜ぜずに聞きッこだ。」喜次「其處で。」跂「燈心を人數だけとして置いて、その燈心の數だけ鬮を拵へ、その鬮へ一二を書いて、一を引いたものは、一番に化物噺をして、一筋の明りを消し、二を引いたものは、二番に化物ばなしをして亦明りを一筋消すと、如斯順に消していき、仕舞の番に當つたもので殘らず消し、眞暗にしようといふのサ。」喜次「フムウ眞暗にして。」跂「而うして後に自己たちが、忽然と異形な妖魔に身を變じ、大愚先生を驚かしめようといふお茶番だが何樣だ何樣だ。」下太「こいつア隨分面くれえ、遣付けべえ〳〵。」喜次「しかし大愚先生を仕舞へまはす段どりに

しなくつちやア可笑しく有るめえ。」[illegible]「其樣なら、ばかばかしい。此處にはア七人居るとして、
貴方「居るとしなくッたッて七人だアな。」二「ハヽア左月鬮にくりつ、其處で七人の中へ大愚が這入るると六人になるから、六本鬮を拵へ、六本ながら六番といふ記を書いて置き、又別に一番と二番と書いた鬮をこしらへ、だれか隱して銘々に持つて居て、本鬮を引いてしまふと、隱して持つて居る鬮と摺りかへ、自己は一番だ自己は二番だと言つて出すと、大愚ばかりは取り替へが出來ねえから、六番で打留になるといふ手段はうめえ理窟だらうが、實に當時の智慧じやアねえ。一番に知れる事が有るから、些と聞きに來るのッしッさ。」[illegible]「ムウ成程さういふ理窟になつて、大愚が打留に極まつたら、其處が真暗に成つて居る所へ、化物になつて出たつて、此方の姿が見えねえから、何でも詰るめえが、其處には趣向があることだらう。」[illegible]「真暗な所へ、無言で言かけるのだアネ、分るめえけれど、ハテ此方が一番にまかり出でましたは、若ア[illegible]皿屋敷似ぎの幽靈で、次にまかり出でましたは鬼で御座い、[illegible]と思ふなら手を出して天窗を探つて御らうじろ、薩摩芋で拵へた角が額に有るで御座いと、一々名のるといふ。」下女「ェーイ默つて居ろイ。」[illegible]「まあ[illegible]、痛た、此の野郎人の面を突き飛ばしたな。」[illegible]「これはまた騷ぐなイ。」貴公「其處で下手公何樣いふ工夫が有るのだ。」下手「まア各々に料簡ばかりの變化になつてサ、その變物の内から一番安ッぽうに化けたものが、燭臺へ百目かけの蠟燭をとぼして、ゆる／＼と座敷の

眞中へ持て出すを相圖に、天井乃至緣の下から、思ひ／＼に現はれ出でようといふ段取さ。」[illegible]「何さま左樣すれば夫れもいいが、併し各々に變物の思ひ付きが、」[illegible]「サツト有馬の水天宮といふところから思ひ付いて、天狗に成らうといふのだが何樣だらう。」[illegible]「ナニ、そこの鼻である。」[illegible]「天狗といふものは、鼻の高いことに極つて居るといふへ、鼻びきの世間無類といふ低いのが現はれたら、天狗の變りもので變狗だと思ふだらう。」[illegible]「ナニコ、人の付けた渾名といふと、直に怪我を付けやアがらア。」[illegible]「面不相當なことを拵へやアがる、ほかのものばかり怨んで居やアがらア。」[illegible]「ナニ面不相たう、へ、自己の面に相當した化物といふが有るものか、但し面に相當したことが爲せたければ、業平の朝臣とか、光氏の君とかいふ役が當しるがいいわサ。」[illegible]「ドレ其の面でか。」[illegible]「コ、イ不景氣な人の面を覗くなエ。」[illegible]「オツト嬉しい、うめえ趣向を拵へつけたぞ。」[illegible]「ハ、ハ、、、先づ斯樣に喚ばはひをして置いて、サテ喜次郎は、我儕が冒客を持て出やアすから、ハテ左樣まもつてお頭なさると、髻から棒に當つたつて、愚痴蒙昧なる逆賊どもには隠るめえが、抑自己の化方といふのは、容色の手拭で天窓の髮をくるりと包み、まづ坊さんに成つて置き、その坊さんの天窓の上へ、黒塗の茶臺を埋一置臺坊主に擬へこれ、手遊の蛇の目の傘の柄をとり、鼻の頭の間へ張り付けるのだ。さうとも傘の紙の星を多く所へ穴をあけ、其處から眼の見えるやうにして、而も付けた蛇の目の傘を眼と見

せて、一ッ目小僧と身を變化、眉あげや腰あげのある着もので、胸高にしめた朱いはざい有る帯から守袋をぶらりと下げ、片手には燭臺片手には盆の上へ茶碗を乗せて、ちよろ〳〵〳〵と持ち出し、「モシお客さんお茶をあァがァれと言ひながら、舌をべろりとだして見せれば、大愚はキヤアッと言ひながら筋斗るに違ひはあるめえ。」卒「廿味々々、こいつァ妙ちき。」喜次「如才はあるめえが、ちよろ〳〵の時は、爪先で歩行かねえといかねえぜ。都て變化は爪立てゝ、歩行くがいゝと、梅壽の菊五郎が左様いつた。」茶め「ヘン化物道のことならお心添にやァ及ばねえ、此の間も古い煙管の鴈首を、ヤツカラカンの糖と化し、丸くすぼんと穴の明いた古犢鼻褌を屑屋にはらつて、海老の天麩羅するめの揚げたて、オット其の時だ、するめだと思つて、青蕃椒の揚げたのを喰らひこんで、辛さ〳〵監へ出しても涎が出らァ。」卒「ハヽア。イヤお前が青蕃椒を喰つて涎をたらすところの御面は、お十二銅ぐらゐのお初穂なら、驅け付けて往つても拜みたかつた。先づその顔を物に譬へて言はうなら、張子のお達磨さんへ雨漏のかゝつたところを、家の中病氣が踏みつぶしたといふ血色だつたらう。何と芥子坊主よりは、青蕃椒を喰ひながら出たはうが、人好のする變化が出來ようと思ふぜ。」茶め「ヘン趣向の付かねえ奴と、情合の出來ねえのに限つて、人の譏訴ばかり雙べやァがらァ。」虚ろ「夫りやァ眞正だ。自己なんざァ厳然と趣向が付いて居るから、大人氣ねえことは言やァしねえ。」喜次「フム

ウ夫れは近ごろお早いお手際だ。」虚ろ「其のくせ趣向は澤山だ。先づ化方は、此の白い顔を惜しいもんだとは思ふけれど、其處が趣向と諦めて、緑青といふやつで眞青に塗つて仕舞ひ、胡瓜のなるたけ疣々のある所を削いで取り、眉毛と口の兩脇と顋のまはりへ緊り張り村け、大きな烏芋の尻を切つて捨て、取手の尖りを角にして額の兩方へ生やかし、著付が柿染の筒袍か何かで、青鬼のいで立といふのは、何と凄い拵へだらうが。」下太「鬼になるなら著付なしの丸裸身がよささうなもんだ。」虚ろ「はだかもいいけれど、虎の皮の犢鼻褌といふのに違却するから。」下太「三毛猫を腰の所へ縛り付けて置いたらば、虎の皮のふんどしと見えさうなものだ。」虚ろ「左様しても宜いけれど、犢鼻褌がごろにやアごなんのと啼き出したら可怪しなものだらう。」下太「ナニサ啼いたつて犢鼻褌だとは思ふめえ、ふんどしに居る蝨が啼いたのだと思ふだらう。」虚ろ「蝨に啼くといふのが有るものか。」下太「けれども、鬼の蝨だから、鳴かねえとも言はれめえ。既に刀鍛治の名に、鬼の蝨鳴きやすといふのが有るぢやアねえか。」下太「そりやア波平行安といふのだア。」虚ろ「ハ、ァ少しの間違だ。全體先の辻番で教へ樣が悪いからサ。」茶の「道理で尾は雪隠へ逃げ込んだのを、和藤内は大門をはひつて、仲の町の方へ追蒐けて往つたつけ。」下太「夫れをサ、猿が花さき老父の握飯と取りかへた柿の實を採るとつて、かちかち山の土猫で見物して居て、下足を八文とられたとヨ。」あ「フ、ムウ其の時だ、築地に火事が無く

こゝ、麦畑で野猪が寝ぼけたら、青蟲が餘くるだらうと、阿彌陀さまの背中へ緋衣の文を書きた
るんだから、番太郎で拍子木ふたゝく樣になつたのは、何でもたゞもう〳〵と嘆いたねたら、見
れば時曉きの悪いことだと思ふと、銚子の濱で東海寺だといふ評判になれば、と地獄の沙汰
も金次第で、何も日輪さまが東から西へ廻れるのをみて見てようといつて、世界をを上闇に仕切つ
たといふ譯がやァ有るめへ、猫坊喜太八が階子を貸つたのが怨で、奇我左衛十郎が夏太夫をた入
ふにも及ぶめえ。だれとも餘が寄るといふたら、粋飾をしねえといふ譯でも有るめえ。」「其様
な譜らねえことを言つて居るうち、大愚が出かけて来て、もうおめえが取違てしまつてゐる顔になれえぜ。」
まアそのせ、大愚が取違ると、なほやう計と間違へたて、辯慶の力にや及ぶめえと思ふけれど。」
「まア五月蝿い〳〵、自然ばで、果の化方を披露におよばうよ、へ、先づ大蛸を隠しの手拭でぐるぐ
ると包んで、坊主といふのに成つてしまつて、さアこれから自己の足を突いてやうだぜ。」「ではてな薬缶で開
いて居るのしまア、其處で牛房を輪切にして、切口を額の眞中へ張りつけ、その上の方へ焼蕃椒を
横にくつ付け、牛房の切口を眼、焼蕃椒を眉毛と見せて、一ツ目入道と變がはり、喜次さんの例の大きな
辨慶縞の小夜著を著こんで、のつし〳〵とあらはれ出でた有様は、實に化物の座頭株と見えようが。」
「こ、牛房の切口がやァ、目で黒くつて尻の穴が額に有るかと思ふだらう。」ドウ左様さ、だたいの口

も尻の穴の様に見えるからなアー」（喜）「エ、其處で下太公、悪口よりやアお前の化方は」（下）「自己の化けやうか、ナ、自己の化様は、天窓へ菓子袋をかぶり耳の所を尖らせて、饅頭の餡をとり、皮の皿中へ穴をあけ、見える様に拵へ、目の上へ張り付け、其の饅頭を目と見せ、喜次さんの持つて居る羽根で織つた紙衣を着こみ、杉箆の化物に成る積りだが、どうだ／＼」（喜）「こいつア請けた、生のものの生のもの」（下）「目の尖りと人の行状、何處で役に立つ事が有るか知れねえ物だなア」（喜）「ナニサ喜次さん、お前の趣向を聞かうぢやアねえか」（喜）「自己は化下手だに化けこじれて仕舞つて、何分にも甘い思ひ付きが出來ねえから、外道の面を冠り、古い手拭で頬かぶりをなして、赤合羽を着こみ手達の箱提灯をもち、下僕の化物に成つて、ヘイお迎へで御座います、とか何とか言つて出かけるとしようぜ」（喜）「有りがてへ、能くも悪くもそれ／＼と」（下）「大息の商人がお気味をわる／＼、六本目の燈心の明りを消すと、四邊に忽ちしんの暗、折しも雨はそぼ降り出で、遠寺の鐘の聲もなく、もの凄まじく聞ゆる時、一陣の風さつとおろして欄間のあひだ、何となく様と聞ゆる、見えるを欄間に、一ツ目公の一ツ目小僧が、百目かけの蠟燭をともして、おふたり持ち出し、お茶を上げましよと出す茶碗に、大愚はわアツと驚いて、床の間にある脇差を採らうとすると、何時の間にか下太公が、掛物の下に突蹲んで、着物の化物と成つて居る故、こりやア耐らねえと逃げ出して、障子を見れば襖ひきあける、向ふ

にぬつくと立ちはだかつた羽公の三ツ目入道、南無三宝と引繰り返せば、彼方の隅から虚呂公の青鬼が現はれ出るので、こけつ轉びつ表の方へ逃げ出して、履物をはかうとする途端に、喜次さんの赤合羽が、ハイお迎へと言ひながら、外道の面で出かけて見たせえ、腰が抜かすに相違ねえだらう。」喜「青妙奇妙奇々妙々。早く支度に採りかゝらう。」虚呂「自己ァ買物をして来べい。」喜次「手遊屋と八百屋へ行けば調ふだらう。」茶め「虚呂さん僉の分もだせ。」虚呂「すツト承知。」下太「自己も一所に往くべい。」長「夜食の支度はどうするつもりだ。」喜次「些たァ仕込をして置いたから夫れで宜いとするサ。」虚呂「そんなら下太公往つて来よう。」と、二人はおもてへ出で行く。跡に喜次郎、茶目吉、羽助は、戸棚はいちやう引きあけて、膳皿小鉢を取り出し、酒の燗など付けながら、喜次「百怪談もいいが、長崎から強飯が来たぢやァ可笑しくねえかい、人々に一趣向づゝ在るとしようぢやァねえか。」茶め「いかさま其の事だ。」羽助「自己ァ先から左様思つて居ることだ。」喜次「お趣向が出来たぜ。」茶め「一日小僧からおつ始めよう。」ト、是れより二人は酒を飲み、何か相談して居る折から、表へのつそりかゝる大愚が、格子のそとから裏を窺ひ、反身に成つて咳ばらひ、「ナホン大人御在庵かナ、石町の變物でげす。」と聞いて裏なる三人は、虚呂松と下太郎が大愚の眞似をすると意得、喜次「ェ石町の愚鈍人そのまゝぢやァねえか。」茶め「おつう音聲を遣やァがつたつて、左様うまく往くものかッ。」大愚は少し聲を張り上げ、「大

人いかゞ御在庵かナ。」北「出ないヨ。」大「出ないとの辻占なら御在庵と見えるッ。」茶め「鬼の頭にする胡瓜と三目入道の眼玉にする牛房は、臺所の方へ廻して遣らッし。」大「イヤ八百屋では御座せん。鬼の按摩みそか入道なぞとは情ない、石町にすむ大愚なるものでげんす。御在庵なら漫りに推參。」と言ひかけて格子を瓦落裏と引き開ければ、茶め「ア、這入つちやアいかねえ。」大「でげすかな、何ぞお差合ひ。」茶め「石町のもゝんぢいが來たら、茶うけの餌食の燒麩の付けやきでも喰はせると、オホン是れは名菓、アメリカは製しが別でげんすなどといふから、序にごッ叩ッかけて來て下ッし。」大「ハテ下僕が町内には、鰻魚を商ふ店はあるでげんすが、山鯨を賣る店は見當らなんだ。形して金魚とひとしく山鯨も燒麩なる物を食しますかな。」北「まだ彼様なことを言つて居やアがらア。」と、障子の穴から覗いて見て、大「ヤ、正物だ〳〵。」茶め「エ眞正か。」と是れも覗いて天窓をかき、「オヤ〳〵〳〵こいつは大しくじりだ。」茶め「僉の寐言のふりにするから、早く其處等へ寢轉びねえ、自己が甘くまじくなはう。」と二人を寢かし、茶目吉は今日がさめたといふ振で、「アッア、引もう夜が明けるか知らん。すヤ〳〵喜次さんも下太公も白川夜船だ。アッア、。」と無理無體に欠をしながら、「ドレ〳〵目でも嗽がうか。」と、障子をあけて表を見遣り、茶め「イヤ是れは大愚大人、追ひにぎ以來で御座いました。大分早朝に、イヤもうタツから飲み續けでぐつすり寐込み、何か出放題に寐言をいつた樣子だが、些と

も知らずサ。さア／＼此方へ。」大「道理こそ分らざる綸言と思つたが、荘周が夢に盧生が寐言とはおりがたい。兎も角も一服いたゞき山としやせう。」ト上り来り「イヨウ何さまなア、喜次郎大人も跂助大人も、大分よくお寐込みでげス。」ぎめ「イヤもう大鼾サ。」と言はれて跂助仰向になり口を明いて、「ガウ／＼ゴウ／＼シコウ／＼」ぎめ「アレ彼の通りで御座います。」大「イヤ彼様に口を明いて寐た顔といふものは、破家けに見えるものでげんす。」ト、聞いて跂助意地になり、猶ほあんごりと口を明き「ガウ／＼ゴウ／＼。」此の時喜次郎が額の上へ、蠅がとまりておづ／＼する故、顔をしかめて追つて見ても、鼻の近所や目の縁を飛び廻りて動かねば、寐がへりをする振して、手を額の上向うへやると、膝の上の丼へ指の先がひつかゝり、脇の方へ刎ね飛ばすと、丼に入れ置いたる芥子漬の茄子が飛び散り、跂助が意地になり開きたる口へほつたり這入れば、跂助は何ならんと、ガオ／＼言ひながら、舌にて探つて見ようとすると、世にも利きたる芥子なれば、鼻から天窓へ一ぺんに、辛さがツーと突きぬく故、跂助は肝を潰し「アツ。」と、言ひつゝ起き上る拍子に、茄子はつる／＼と咽喉へはひりて鵜飲にし、喜「アヽ、ホツホオウスウ／＼ホオウ／＼。」ぎめ「ハヽア此奴は妙だ、アハヽヽ、ハア。それ跂公涎が、ア、夫れ／＼喜次さんの顔の上へ。」トいふ時、跂助ぬる／＼と、寐入つた振の喜次郎が、額の上へ涎をたらせば、喜次郎も耐りかね「ア、アこの愚鈍アは。」と飛び起きる。跂助は

猶「ホウ〳〵。」といきを向うへ吹きながら、涙をほろ〳〵零して居る。喜次郎は是れを見て、喜次「どうしたンだい汚らしい。」ト、額の涎を袖にて拭けば、跛助も涙を拭き、「何様したも押が強え、串戯にも程があらァ。」ト、二人の者が争ふを、傍に見て居る大愚と茶目吉、これへ兼ねたる可笑しさに、思はず腹をぞ抱へける。

四編　巻之下

扨も喜次郎跛助は、茶目吉が早速の工夫に、三人とも夕より酔ひ倒れたる其のまゝに、寐入りて居たりと大愚にいふ故、喜次郎と跛助も寐入りし眞似して在りけるが、思ひよらざる騒ぎより、二人は周章て起き上るに、茶目吉は可怪しさを、やう〳〵腹へ落付けて、茶目「何様だ〳〵四十年の夢がさめたか。」跛「しどい事をする、意地に成つて明いてるた口へ。」茶目「ほんにお前は夢の上が悪いから、兎角寐てるて意地に成つたり何かするのす。」喜次「堪忍々々。どうも寐入つて居てした事だから仕方がねえ。」跛「寐言をいつたのなら、何様な失禮なことだつて當然だから、咎めるところは無えけれど。」茶目「宜いわサ、愚痴ッぽい。何うせみんなが夕ッからの酔ひ倒れだものヲ、何をするか知れやァしねえ。」喜次郎は此の時はじめて、大愚を見付けた振をして、「是れは〳〵大愚先生、いつの間にやら能う

こそお出で。」羽助も涙をふき／＼、「是れは／＼大愚先生、アヽ胸のうちが、まだ／＼わく／＼と燒けた樣で御座います。」大「それは／＼。しかし下僕が此處へあがり、鰻魚で御晝眠の夢を覺さ、何ともお氣もじ恐れ煎山椒かネ。」喜三「タッから三人で此處へぐつすり寐こんだなりや、ト言ふに、大愚は首をかしげ、「ハテネ茶目大人も。」喜三「さやうさ。」大「是れはいぶかしいこと、シテ茶目大人、先刻髮ゆひ躰でお約束。」トいはれて大れと氣の付く茶目吉、「左樣々々、かみゆひ床でお目に掛つた時、アノお前さんが後刻能樂亭がりへまかり出やすと被仰つたので、其の手筈の首尾が、アヽ／＼、エヽしどい蚤だ、アヽ今日はめつきり雨が降るせゐかして、十五日で御座いますが、エヽ、ヱ何でも殘暑は秋に限ります。勿論この春ださうは。」喜三「コヽ／＼お前、衆を寐こかして、髪を結ひに往つて知らぬ顏とは、わるい／＼。」大「左樣さ／＼、そして大愚先生にお目に懸つて、後刻に此方へお出での在るやうに、お約束をしたのだ。夫れだから先刻衆に、エヽみんなに、アヽみんな左樣いはうとは思つたけれど、寐入つて居るからよしたンだア。」喜三「何にしても滅法に寐入り込んで居たから。」大「自己もタッから些とも知らずサ。」大「果報は寐てまてといふところへ、大愚山人などといふ阿房が舞ひ込んぢやア、近頃お氣もじ、エヘン些とお氣の毒でげすナ。アハヽヽヽ。」此折から虛呂松下太郎は、買物調へ歸りきたり、格子を瓦落裏ひきあけて、入るや入らぬに大聲あげ、虛呂「サア／＼化物を買ひ込ん

で来たから、もう石町のもゝんぢいが出て来ても大丈夫だ。」下太「喜次さん、外道の面は張子のにしたぞ。开して青鬼の頸にやあ奇妙といふ胡瓜が在つたイ。なんでも一ッ目子僧の蛇の。」喜次「エヘヽエヘン。」茶臺「何だ〳〵誰だ、何處の奴だ騒々しい。石町の大愚先生といふ大人が御來臨だッ。」虚呂「开して此處の三人は夕ッから寐入り込んで、今目が覺めたところだから十、ソレ左様思つて靜かにしろい。」虚呂「ヘン人を遣ひに出して置いて、其様な勿體ねえことをいふと、牛房の切口で目をこしらへた三目入道や、茶臺を冠つた罌粟坊主の一ッ目子僧に食はしてしまふぞ。」下太「开して石町の大愚先生が御來臨だ、ヘン偏生が聞いておきれらア。あの鈍間に何時に來るといふことは心得て。」ト言ひながら、障子をあけて入らんとするに、大愚が反身で濟ましてゐるゆゑ、下太郎ぎつくり行きつまり、下太「アヽアエ、エ茶ツ、ちや、茶目公、こけ町のたゝエ、た足袋在先生が何居るものか。アノそれ神田の苦町の足袋屋の五兵衛さんの足袋五先生サ、あんな鈍間にはねえ、此の間も自己が股引を誂へたら。」虚呂「何をくだらねえ事を言つて、這入口を塞いで居るこだ、さつさと內へ這入らねえか。手まはしをして化物拵へをして置かねえと、大愚が來てからでは間にあはねえワヽ。」下太「這入ねえ、足袋五足袋五々々が來ては間に合はねえ。ネエモシ石町の大愚先生、お前さんもアノ苦町の足袋屋の五兵衛を御ぞんじで御座えやせう。」大「苦町といふのは町名からして不案內サ、たゞし楠町の竹屋

四兵衛なら知己だネ」ト「ハテネ向うでは能く存じて居りやすぜ」ト廬呂松も此の時に良い思案を聞いてうれしく、「ナア、アノ足袋五が来ていふにやア、はき物拵へが間に合ふめえ、アノはき物といふなア、足袋といふ足へはく履物が、古く成つて汚れたから、濁りを付けてばきものと言ふのが汚れなければ履物ダ、夫れが汚れたならばはき物よ、其處でその汚れた履物を繕つて貰ふから、はき物拵へと言ふのだと、何やら事を紛らさんと、其處に有りたる瀬戸陶器を、探んあの早く振つて見て、いよ／＼くしだい、自己たちを買物に出して、もう明店にしやアがつた。此の時下太郎は買物の品を包みたる風呂敷を袖に隠し、竊と勝手へ仕舞ひ来り、下太「サア／＼一杯遣らかさう」「此の酒は飲めねえ／＼、夕お燗をした残りだから」「喜次さんも自己も、それ足袋五先生も足袋屋の五兵衛さんと、ゆふべ飲んだッきり寐こんでしまつたのだから」下太「ナニ足袋屋の五兵衛こ」「ソレソレ今お前が左様いつた足袋五先生サ、ノそれアノ昔町ノこ」下太「昔町の足袋五は分ツて居るけれども」「足袋五がわかつて居るならば、夕ッから皆が寐込んで仕舞つたのも、袋足五同然の理窟だから、釋りさうなものぢやアねえか。」ト、頻りに可怪しな目付をする故、何やら知れねど下太郎が、解せたる振にて少し點頭き、下太「フンウ左様か。足袋五が来て、夕ッから飲みたふれに寐こんで仕舞つたのか。其様ならさうと先刻自己たちを買物に出すとき、左様いへば宜かつた、紫金錠でも取つて来て遣

れたものサ。」 喜次「自己も跂公も夕ッから寐込んで、今目がさめたのに、先刻お前たちが買物に出るのを、何様して知つて居るものか。」 下太「夫れでもせめて寐言にでもよ。」 茶目「モウ〳〵いゝ〳〵、物言へば脣さむし秋の風だ、なんでも口数が多いと襤褸が出るから、酒々酒にするがいゝ。ナヽ喜次さん、今朝お前が湯に往つて、その帰りに内田から採つて来た正宗が一升サ、夫れから先刻跂公がこゝへ来がけに四方から一升サ。」 ハテ、ア、ア物言へば脣さむし秋の風ッ、あぶない〳〵。茶目公あぶない、人は言はねど我いふなかれ。」 茶目「ア、ムヽ、酒々酒だ。近江がつもりおやァねへ始めよう〳〵。」 喜次「酒々世話しない、もう瓶子ッと待つがいいねェ。」 下太「酒々しいとは盗賊上戸の事だァ。」 まァ猪口〳〵、ちとお燗を見ようッと。」 「酒やァ〳〵、お猪口の来るのを待つかァ〳〵。」と言ふとき、下太郎猪口をまはせば、上戸のたれも、がぶりとすべい呑みたァ。樽々かァ、次の方へ讓り葉かァ。」と、虚呂松が前へ杯をさせば、虚呂「酒は野暮から手でそッと差せば、無理な遊びの花はだりョァ、ヽ、クヽヽ〳〵、なう一日に飲んで仕舞ッて、ヘヽ大愚先生。」と杯回れば反身になり、大「ナヽヽ酒々ッ、ホヽ酒ナ、コ酒に車を押すごとく、油断をすると後へ戻るごとし、亦虚呂さんへお戻しだ。」 虚呂「酒のほうへ往かす酒うまに戻つて来るとは、酒の世からの能く〳〵深い因縁だらうヨ。」 喜次「何の因縁か知らねえが、酒の下じやれに御免だ〳〵。自己の所へ来ようといふ杯が、後の方へ蜻蛉がへりをして仕舞つたァ。

花日「人々に酒の側に許りへばり付いて居ねえで、一件の支度に取り懸るが宜いぜ。」虚呂「夫れが宜い一件のお飯の胡瓜や牛房のなア、夜食の道具だてにならア。」ト、是れより酒のあひ／＼に一人々々抜けて行き、一ッ目小僧木兎と、皆夫れ／＼に支度が出来れば、秋の日のいとゞ短くして、入相近くぞ成りにける。下太郎は折を見合はせ、下太「ア、酔つた／＼、この酔つた威勢で、何か一趣向遣付けてえもんだ。」吉「芥子漬の茄子ぢやァ耐らなく酔りがいゝ。」大「下僕も大酩酊、亂醉におよんで、恐れ入り山のオホン霜のもみぢば、眞赤にならの八重櫻、池田いたみのお酒の香が、京九重に匂ひぬるかなッ、何と妙ではげえせんか。」花日「ほんに匂ひぬるかなと言やア、ゆうべ然る家で、百物語といふのを遣付けたさうだが、中々おもしろかつたとヨ。」下太「そりやァ妙だ、此處でも今から遣らうぢやァねえか。」呂「宜からう／＼。」善次「大騒ぎな事なら御免だぜ。」虚呂「何のサ此のくれゑ竊りしたことはねえ、噺をしては行燈の明りを一穗づゝ消すのだものヲ。」大「是れは下僕も遣つて見たいネ。」花日「そらそら大愚先生も遣りたいと被仰るから、初めろ／＼。」下太「面ふろい／＼。」虚呂「夫れぢやア酒の方を、無官の大たおつ盛として、飯を喰らふが谷の次郎直實々々。」ト、是れより六人車座に飯櫃のまはりを取り巻きしが、程なく食事も果てける故、人々に立ちて後を片付け、行燈を取り出し、燈火をつけるものあれば、雨戸を繰り出すものありて、暫時混雑なしけるが、僉々やうやく落付きて、虚呂「サア是

れで安心だ。」次三「一二の鬮を揃へよう。」下卜「六本あれば宜いだらう。」次三「十二本。」喜六「ナニ十二本いるものか、六本々々。」次三「ウヽム左様よなア、十二本あつちやア手妻でも爲る様だ。」大「イヤ風の惡い無盡でげすナ。」喜次「ソラ〳〵、六ツの鐘がぼん〳〵と鳴らア、今が大魔が時といふのだ。」喜六「サアサア鬮をこしらへた、御神じん〳〵。」下卜「夫れぢやア行燈の皿へ燈心を六穂入れ、明りを付けて置いて、一番を引いた者が一番に噺をして明りを一筋消し、二番三番と段々順に行くのだらう。」喜六「エヽしつこい、先刻あれほど噺。」ト言ふを、喜次郎側から袖をひく故、虚呂松それと心付き、呂「噺ツ鼻血が又出たア。」大「兎角運落けでのぼせるでげすからナ。」呂「ヤア〳〵引いたり、鬮を引いたり。」喜次「大愚先生お前さんから。」大「然らばお先へ引くでげすと申すと、義理の固い鼠が鏡餅へかゝつた様でげすナ。」ト、是れより六人が鬮をひき、豫て謀みて置きたることゆゑ、何様やら彼様やら紛敷行つて、第六番を大愚にさせ、彼の摺りかへた鬮を取り出し、喜次「イヨウ是れは難澁、第一番の皮きりだ。」次三「自己のは二番だい。」下卜「第三番の半吉で、兎角女難が多いといふのだ。」呂「此方は四ばん。」喜六「自己は五人目。」と各々鬮の順が極れば、大愚は少し塞いだ顔にて、大「下僕が打ちとめへ回つては、些と失禮でげすから、座頭がぶに喜次郎大人か。」次三「ナニ〳〵其りやア矢張おひはぎの時の例に習つて。」喜六「大愚先生にかぎる〳〵。」と、寄つて集つて押しすくめ、喜六「然らばいよ〳〵六怪

撰が、百怪談のはじまりさやう。」ト云「ハヽヽヽヽ〳〵〳〵ヘヽヽヽ、コレ、モチイヽ」ト目と目とれ〳〵「白」がお膳をすゑよう。」と、片隅にある行燈を座敷の眞中へ持ち出し、油皿へ燈心を人數だけに六筋入れ、燈したてれば茶目吉が「さア〳〵皆居つたり。」と、一番二番の順をたて、六人ずらりと傍の障子の側に居並べば、喜次郎おつと摺り出し、燈火の下に座をすゑて、高慢らしく頭を下げ、「先づエヘン、今ばんは連中うち野良七飛八の兩人、あやにく他出致しまして缺席故、何やら不足のやうに思はれますれど、儕倖大愚大人の御來臨にて、急催しの百怪談を企て、私は第一番とまうすお鬮に當りまして御座いますから、わんぐりと耳まで裂けた口あけに、大きな眼の玉の恐怖いお噺を申し上げますから、ケタ〳〵とお笑ひなく、御聞きの程を希ひ上げます樣に御座います。扨ある時の事で御座いましたが。」と、言ひながら少し考へ、「はてナ是れは不思議、どうして齒から血が出たらう。」ト、思入ありこ、「眞にだれ〳〵。此の齒から血の出たので思ひ出しましたが、先頃この血齒の。」ト、言ひながら、齒の血を鼻へぬるまねをして、「赤鼻から目白の。」ト、白目をだして見せ、「方へ參らうと存じて、何處やらの原を。」ト、むねをひろげ腹を出して見せ、「通ります時分には、夜もしん〳〵と更け渡りました。」トおたまのふけを掻くまねをなし、「すると傍に此の樣なる流れ灌所がございますから。」ト、前をはだけふんどしのたれを廣げて見せ、「エ、不氣味なと存じますと、何所をどう步行いてか、荒寺の亂塔場に入つて居りましたが。」ト、言ひながら、「へ、〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。」ト、せきをするまねをして、「彼樣に咳が出

ましたから、是れが石塔で、そのサ、ヘン〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵せき十の陰から。」ト、云ひながらをかしな身振でたちあがり、

トうり「ありし郭の其の儘に奥州がたち姿、恨みも戀ものこりねの、もしや心のかはりやせんと、思ふうたがひ晴らさんたあの誓紙をば、何故に煙となし給ふ恨めしや。」思入あさい心と白絲の染めて〳〵ふしきなれ衣、ありしながらの一ツまへ、小褄そろへてひだけなく。」ト謡り歩きてそこへ坐り「彼様な化物が現はれ出でましたから、さてこそ幽靈サ、恐怖やと、一ツちゞみに成りましたが、跡で能く〳〵思ひますれば、何ほせき十の陰から出ましても、唄をうたひ躍を踊りましたから、幽靈では無くつて遊藝で御座いました。」ト、六すぢのうちの燈心を、一筋ひきて席へさがれば、

茶目吉「一番に居さら出し、扇子只今御亭主のお噺を承り、さて〳〵恐ろしい事と、實に魂を寒からしめましたが、イエサ江湖上には恐怖いことのあるもので、私が目のあたり見ましたこと故、茶椀と書き留めて置きましたが。」ト袂より砂糖のはひりし茶椀をとりだし「一所はたしか乾燒へんで、而も朝貌の。」ト茶椀のなかを見せ「花もなくなり絲底寂しい。」ト茶椀のうちらを出し「秋の末ツかた、しかも此の様に雨の降る夜で御座います。」ト鐵瓶の湯いで見せ、「また茶椀の。」トふちを叩きながら「彼方よりもの哀れな聲を致して、茶椀々々茶椀々々と鉦をたゝきながら、甘い湯ウだァ引甘い湯ウだァ引、茶椀々々〳〵甘いィ湯ウだァ引と、念佛を申してゐるものが御座います

から、この夜更に何物で有らうと存じて、徐と容子を見まするに、暗の事ゆゑ模様はしかと解りませんが。」ト、茶椀の[illegible]底を見せ、「甘い湯ウだア引と申すものは、砂糖の湯で御座いましたが、目も見えぬ砂糖の湯を、あんぐりと口をあいて一飲にいたせば、化物が御座いますから、ハテ恐ろしいことと、彼は何の變化で有らうかと、段々穿鑿いたしましたれば、砂糖の湯を飲みましたい、淨瑠璃天狗とまうす天狗ださうで御座いまする。」ト、言ひつゝ手を伸べ行燈の明りを一筋消して見れば、また居ざり出す下太郎が、「只今茶目吉さまが、砂糖の湯をのんだ淨瑠璃天狗のおはなし、扨々恐怖い事で御座いまする。それに付き私もサ、身の毛もよだち、足も縮身て歩行かれません程な、怖ろしいめに逢ひました事か御座います。勿論女の事に付きまして、筑前の博多から。」ト、帯へ指さして「色も美しへ參り、此處は何といふ地名だと承りましたら、太宰府だと申しました。」ト、ふところから財布を取り出し見せ、「して見れば是れが聞え及んだ、下財布かと浦の方を見ますと。」ト、さいふの裏を出し「錢の浪もしづかに櫻の花なども見えた。」ト、頬さんを見せ、「また山吹の花も御座います。」ト、二朱金をだす。「折から彼方より蒟蒻のやうな形でくだ／＼致し、細く長い尻尾の下りましたものが、ちやら／＼／＼と驅け出しました。」ト、財布の隅を持ち中の錢をならしながら紐を尾のやうにして引きずりまはし「此の樣に駈けまはりますから、肝を潰して見ましたら、御覽の通り小紋も縞もない無地で御座いました。」ト、財布の切を見せ、「所が此のサ、無地の貍の鳴く聲を聞きますると、紺々紺々と申します。」と、切の染を見せ、「全體こん／＼

と鳴きますれば、狐で無くつてはならないと存じて、僞物屋とまうす化物屋敷の方を狩り出して見ましたなら、其の雛の財布は、古い合羽の化けたので御座いました。」と言ひつゝ、是れも燈心を一穗へらして後へさがれば、跛助續いて其處へ立ち出で、「扨わたくしは第四番のお鬮に當りましたが、段々と皆樣がたの恐怖いおはなしを承り、誠に肝たましひを冷しまする事に御座います。イエサ、吾儕も氣味の惡いめに逢ひましたが、たゞれは彼樣で御座います。」ト、手拭を取り出し坊主かぶりにして、褄をおん〳〵端折にし、懷中より煙管筒を取り出し、「此の筒ははん天鶯絞と見せて、眞は綿天で御座いますが、染に上細だと申します。」ト、いひながら諸國行脚の體僧といふ身にて筒を持ち、「ハ箇々綿天だつ〳〵めんてん、箇々めんてん眞々めん天、ヤどつこい〳〵上細々々、ヤレ〳〵草臥れた。」ト、たちとまり、「此處は何處だ、ハヽア樣とめ皮だな。」ト、さんとめ皮の煙草入を見せ「是れはは〳〵、かんせい縫ひな事で、縞々さみしい。そして日が暮れたと見えて、棧留がはゝまつくらだ。」ト、皮の色を見せ「まつし〳〵、向うに一點あかりが見える。」ト、緒〆の珊瑚珠をすかし見「さらば彼處で一宿いたさう。」ト、また筒をとりいだし「ハ箇々めん天、眞々めんてん、イヤつゝ〳〵綸天、じつじつめんてん、ヤ上細々々、どつこい〳〵、ヤレ〳〵來たぞ〳〵。ヤ何だ其處にある白い物は。」トエヽ氣味の惡い、こりやア骨だ。」ト、象牙の根付を出して見せ、「オヤ〳〵此處にも何かある、アヽア是りや脚だわい。」ト、煙草入の金物の裏座に出て見れば、かの先を見せ、「此方の紐には骨があり、此方の裏座に脚があり、濃茶たまらぬ濃茶にはいつた

ト、煙草入の紐の色を見せ、「ハ箇々天々だつ／＼のんこんハ、イヤ箇々めん天、眞々めんこんハ、ヤどつこい上細、どつこい上細。」ト、座頭中ぐる／＼廻り、はしをりをおろし裾をとつて其處へすわり「此處まで逃げれば、もう大丈夫、ヤレ／＼氣味の惡い事だ、吻と一息致しまするに、細すい鶴首をながいと伸ばし、吸口を明き、何やらなばなり／＼呑みまする化物が御座いますゆゑ、恐怖いもの見たさに、彼の化物を見屆けようと致しますと、青い煙をふウつと吹つかけられますと、納戸の明りも、忽ち一すぢ消えました。」ト、三すぢ殘りし燈心を、一穗引いて次へ讓れば、虚呂松それにかはり「エヘン、拙者は古い長い恐怖いおはなしを申し上げます。天竺から此の様な古ふんどしが下り。」ト、ふんどしのたれを引き出し見せ「長崎から強飯が參りました。」ト言ひながら明りを一すぢ減らすついでに、後に殘りし燈心を油の中へすり込ませ、薄暗くして引きこもれば、否々ながら大愚が替りて、何か言はんとしたれども、長崎から來た強飯の先をこされて、むつむつ篤るうち、明りは次第に暗くなる。此の時こなたの五人のものは、一人無くなり二人へり、彼方の小子舍へ拔け行きて、各變化の身拵ひ、するとは更に氣の付かぬ、大愚は暗き行燈と、白眼めくらして在りけるが、何か言はんと反身になり、「オホン。」と例の咳拂ひに、思はず明りを吹き消す折から、遠寺の鐘ボオン引、天井を驅ける鼠の音グワタ／＼／＼。

敍

瀧亭大人が八笑人は、八人の連をあげ、また和合人は、六人の笑客を集へ、滑稽洒落の妙をはき、人を笑はし腹の皮をよぢらしし、其の筆先の羨ましさに、八人と六人の中をとり、七人の懶墮ものを引き出して、七偏人といふ名を付け、出放題なる戯言をものし、寶集堂の主人をおだて、お先眞暗厚面皮く一部の本となしてもて、書屋の肩を重らすものから、八笑人や和合人の玉や金の其の中へ、瓦に齊しき七偏人、嗚呼我ながら押強しと、案じたより産むが安く、少しは貨まると梓元の、辭を力におつかな悔り、段々後を書き次いで、何樣やらかうやら第五編、先づ此の本は是れ限りの、大尾とまでに漕ぎ付けたれば、胸と大きな息をつき、干からき乾魚を喰つたやうな、額の汗を拭きながら、此の敍書をする事しかり。

楳亭金鵞

妙竹林話 七偏人 五編巻之上

青柳橋なる能楽亭には、相も變らず茶ら吉、虚呂松、下太郎、呆助打寄りて、主人喜次郎をそゝなかし、袂涼しき秋の口の、雨さへ折々ふり出でて、人の心の寂しきより、思ひ付いたる百物語に、大愚を驚して遣らんものをと、既にその事始まりけるが、一番二番と順々に、はや物語すみければ、一すぢ残る燈火を、大愚が番にあたりける故、大愚は心静めなどもし、漸々擂り出し行燈の前にすわりて、何やらん言はんとなしても趣向は付かず、困り果てたるそのうちに、五人の者はみな竊々、座敷を抜けて行くとも知らず、大愚は黙ていつもの癖、「ェホン。」と咳をする拍手に、忽ちあかりを吹き消せば、ハッとは為れど詮方なく、そのまゝ其處に身を縮め、目ばかりはパチ/\させながら、澄して居ると生憎に、遠寺の鐘もの淒く、雨にすがるゝ蟲の聲さへ、いと寂し氣に聞ゆれば、生まれ付いての臆病もの、だん/\氣味がわるくなり、萬一其處らの隅の方から、青い首でも出ようかと、思ふト忽ち襟元より、ぞつとするほど恐怖くなり、喜次郎はじめ五人のものも、元の席に居ると思ひ、大愚は頻りに尻ごみしながら、「ェ喜次郎大人、モシ喜次郎大人、何だか寂寞として化物臭いぢやァ御ざへやせ

んか。」と、いへど返辭をするものなければ、いよ／＼うそ氣味悪くなり、少し監へまた尻ごみ、壁の方へ首を出し、耳を左右へそばだてゝ「モシ茶め大人、モ茶め大人と言つたら茶め大人ごと、呼びかけて見また監へ「是れは近ごろ大人氣ねえ。モシ／＼。」と言ひながら、膝の先にて徐々這ひ出し、たしか此處らに居つてゐると、思ふあたりを探つて見れど、手先に障る物も無ければ「ハテ誰も居ねえ、ハテナ今まで此處に居たものが。」ト、疑ひ起ればおこるほど、猶々底氣味悪くなり、すこし震へし聲音にて「是れさ喜次郎大人、わるさ串戯はよし給へ、魂魄を冷すのは壽命の毒だ。これサ應答をなし給へ、エモシ／＼。」と言ひながら、其處らを無上に探りまはれど、只茫々として、人の影形の有らざれば、今まで此所に居たものが、何樣して影無くなつたかと、いよ／＼怪しむ心より、總身の毛穴が一度にたち、只ぞく／＼と肩先より、水をさゝるゝ如くなれば、はやくこの場を逃け出さんと、氣は急かれても先ほどよりの、這ひまはりし暗闇に、何方が何樣だか途方をうしなひ、其處らをやたらに撫でまはし、探りまはした指先へ、さらりと障るは唐紙の、引手の穴のほつと息、そのまゝ直におしあけて、顔を突き出し其方此方を、見れど矢張黒暗に、齒の根も合はぬ震へ聲にて、「モシ喜次郎大人、悪いしやらく／＼を爲給ふな、胸がしく／＼痛んで參つた、これさ／＼。」と呼んで見ても、更に應答の無きのみか、自己が聲さへ何となく、四邊へ響きて今までとは、異なるやうに聞ゆ

れば「エヽ不景氣な、何だらう。」と、肩の所から身震ひし「何にしても此樣な不氣味な家に長居は無用早く表へ出てえものだ。」ト、いひつゝまたも這ひ出す、天窗の先にて何やらん、おし倒ばさばほつかりト、天窗へ冠さるものある故、ハッと思ふと魂魄も、消え入るごとく成りけるが、何時まで過つても夫れなりゆゑ、縮んだなりに震へ／＼、天窗へ手を遣り探つて見ると、何やら粉名を入れ置きたる、器をすつぽりかぶりしなれば、現心に監へ居ると、飜れし粉名が途中を舞ひ、息の拍子に鼻へ吸ひ込み「ハックシヤやえゝエ、ハックシヤウ。」と、嚔にすこし正氣が付き、また徐々と這ひ出す、天窗をぐわつたり向うへ打付け「ヒヱ、。」と後へ引く拍子に、上でぐわいたり鬚ぶしを、打たれてまたも仰天し、其のまゝ其處に天窗をすゑ、茫然として監へたりしが、頓て恐怖々々手を出し、其處らを徐と探つて見れば、是れ傍の押入にて這ひ入みながら中段と、小棚のおびだへ天窗を突込み、天窗の先で小棚なる、丼鉢を引つくるかへし、鉢の中なる何やらの粉を、天窗からあびたるなれば、やう／＼少し落付いて「イヤ次の間だと思つて這ひ出したら、此處は戸棚の中だ、道理で聲が可怪しく響く。併してこの粉名は何だらう。ハヽア先刻揚物を喰はせたから、其の揚物を拵へた小麥の粉名だナ。オヤ／＼天窗から襟から、五體中が粉名だらけだア。」と探りまはし「何にしても此處へ彼樣して這ひ込んだのが天のお助け、まことに奇妙な隠家だ。」と、戸棚の中へすつぽりと、這入つて固く身

を縮めながら、ひつしやり隔紙立てきり、息をこらして居たりしが、今にも何やら手を出して、摑みもされる心地する故、猶も我が身を隱さんと、其處ら四邊を搔き探れば、紐にてゆひたる莚を巻きしものが束ねて下げて有る故、何やら知らねど外して取り、天窓から被りて、息を殺して隱れ居る、とは知らずして、小座敷には喜次郎はじめ四人のものが、兼て拵へ置きたりし、野衾持遊夫れ/\の道具立にて身を拵へ、茶め「何様だ/\、隨ぶん甘く化けたらう。」喜次「宜い/\、立派な三ツ目小僧が出來たゾ。」茶め「さア青鬼の衣裳も着いたゾ。」下太「こいつは裝なしちやア聞えねえゾ。」茶め「閻魔といふのは何處へ往つた。茶臺が無くッちやア茶が出せねえ。」喜次「己は三ツ目入道と、下太さんは木菟と喜次さんのは。」喜次「すッと己は外道だから、もう差支へなく出來て居るのだ。」茶め「何にしても大愚めエ、何をして居るか、座敷へ往つて覗いて來よう。」下太「覗いたつて眞暗闇だから見えるものか。」喜次「目で覗いたらば見えめえが、鼻で覗いて嗅ぐのだア。」下太「容子を嗅がねえと言つたつて、隅の方に縮かまつて居るに違へねえ。」喜次「何にしても早く爲なくツちやア往かねえ。」下太「ヨットよし最う出來たゾ。」茶め「イヨ妙らい/\、霜げた木菟丸だ。」喜次「破公の三ツ目入道も化け榮えがして面白い。」ト、五人は打寄り夫れ/\の、仕度に餘念はなき折から、裏口の戸を引きあけて、「御主人御家に御在でかな。」と言ひつゝずつと上り來るは、彼の家主の源兵衛にて、「イヤ是れは眞暗、留守だと見

えるこ併しもう些と先刻まで嚔聲がして居たが。」と、提灯出して四邊を見まはし、「ハテナ茶碗や煙草盆、オット煙管煙草入も爰にありと。ハ、ア例の意地きたなが、蕎麥か何かを喰ひに往つたのだナ。なんぼ取られるものがねえからと言つて、戸締りを爲ずに出歩行きをするとは、餘り盗賊を踏みつけにした仕方と言ふもの。ドレ〳〵歸つて來るまで番をして居て遣らう。萬一何かの喰ひ殘りでも、土産に持つて來るかも知れねえ。ヤレ〳〵誠に世話のやけた蓮葉店子で困りきる。」ト、提灯の燈を行燈へうつさうとして苦い顔、「是れは何様だ、此のまア油の高いのに、此様な太い燈心を六筋入れて置くといふ身上知らずが、何處の國に有るものか。第一火の用心も悪いワ。」ト、小言たら〴〵行燈を燈して、自己が持ちたりし提灯の燈をフッと吹き消し、出口の上の鴨居へかけ、煙草盆を引き出し、一人烟草を薫らせ居る。戸棚のうちには彼の大愚が息をころして縮まり居ると、誰やら知らねど座敷へ來り、行燈ともすその容子に、少し心は落付くものから、猗喜次郎の五人のものの聲は少しも聞こえざるゆゑ、若しや變化の出で來りて、人に油斷を爲せるのかと、思へば恐怖さ彌まさり、身を震はして窺ひ居る。此の時彼方の小座敷には、一ッ目小僧、三ッ目入道、木兎、外道、青鬼と、化物揃へ出來揃へば、「サア〳〵一ッ目小僧が出かけるから、僉も續いて出て來なせえ。」ト、眞鍮の燭臺へ百目がけの蠟燭ともし、湯飲へ少し汲みたるぬるき茶を茶臺へ乘せて、燭臺と茶臺を兩の手に捧げ先へ歩行け

ば、四人は後方について縁頰より徐と座敷の方を覗くと、障子に明りがさして居る故、きよ「ヲヤ。」と顔見合はせて尻ごみ爲し、互に耳へ口をよせ、きよ「何樣して明りを付けたらう。」さ「誠に何樣も不測だなア。」さ「そして明りを付けるくれるぢやア、座敷にゐやうとしては居ねえ許だ。」ドぶ「ホンニ妙だ。」こむ「向うにも一趣向あるのぢやアねえか。」むめ「有るのかも知れねえテ。」き「何に強もあれ是れまではしたものだ、構はず出かけて見なせえナ。」ちよ「出かけるは出かけるが、正眞の化物が自己達より先へ顯はれて居るのぢアねえかと思ふから、些と氣障なところが有らアな。」きよ「まさか左樣した理窟もあるめえ。」ドぶ「バヽアノヽヽして居て氣どられると往けねえぜ。」きよ「思ひきつて這入つて見ねえナ。」さ「何さ構はず出かけて見よう。」ト、足を爪立してそろ〳〵と縁の板間を歩行きながら、障子の楼へ足を引掛け、さらりと明けて座敷へ這入り、彼の燭臺を突き出し、大愚と心得源兵衞が居り込んだる鼻のさきへ、藪から棒に茶臺を差しつけ、むめ「お客さんお茶をあアがれ。」と言ひながら、舌をへろりと出して見すれど、此の家主の源兵衞は、卒忽しきが持前なれば一向に氣が付かず、源「オヤヤヤお留守かと思つたら、矢張お家にお在でだつたか。幷してお客でも來やアしまいし、燭臺、イヤ蠟燭などには及ぶめえ。」といへど、此方も例の卒忽者、むかうの言葉は耳へ這入らず、早く變化の姿を見せんと見振をしても、ちつとつ、踊つて見ても氣が付かず。源「時に喜次さん、今夜上つたのは

外でもねえ、他所で催しの茶番の世話役を頼まれたのだから、是非々々お前さんに御苦労をかけなけりやア成らねえ譯す。」と、言ふても構はず茶日吉が、明りの先へ顔つき出し、四邊へ響く大聲にて、「もをチ、もをチ。」と牛の鳴く眞似をしながら天窗をふり、ぺろり／＼と舌を出せば、源兵衛此の時これを見て、「キヤアッ。」と言ひさま兩手を伸べ、一命懸命茶日吉が胸のところを突きのめせば、不意を打たれて茶日吉は、茶臺も茶椀も投り出し、仰向けさまに筋斗、障子のところへ倚かゝる故、障子は外れて瓦墮々々々々、彼方此方へ倒れると、後邊にぬつきり衝立ちたる三ツ目入道、靑鬼、みゝづく、外道の變化も飛んだり跛ねたり、身振をしながら白眼むれば、然らでも元の一ツ目に、腰の節ががつくりと、寔んで動けぬ源兵衛なれば、再び「キヤアッ。」ト聲たてて、其處へばつたりひつくりかへり、忽ち生氣をうしなつたり。喜次郎は是れを見て、狼狽へ慌てて側へかけより、「サア／＼事が始まつた。」甚「キヤア／＼大變だ、顚倒つて眼をまはした。」茶「エ、エ釋らねえ、眼をまはしたから顚倒つたのだア。」ドン「論はんどころの噺かえ、さつさと生かして仕舞はねえと、連中のこらず掛り合ひだア。」甚「チヨツ世話のやけた、何の眼なんぞをまはさずとも宜いに、氣の弱いにも方圖があらア。」喜「何樣したら生きるだらう。」ドン「燒酎を吹きかけたらば宜いだらう。」茶「草臥れた足がやア有るめえし、死して亡者を生醉にしたら、何を始めるか知れやアしねえ。」喜「大きな聲で呼た

で見たうか。」下太「だれよりか灸をすゑたら氣が付くだらう。」ト、三ツ目入道、一ツ目小僧、木菟、青鬼、外道の化物、小夜著袖なし赤合羽を著たるまゝに、立ち騒ぐ。瀧口松は勝手より茶碗へ水を汲み來り、「是れさ／＼衆が其樣に狼狽へなさんな。此奴を面へ吹きかけりやア、正氣に成るに違へねえ。」ト、言ひつゝ立ち寄り顔を見て、愕り、なかなか後じさり、「ヲヤ／＼こりやア源兵衛の家主さんだ、家守さんだ。」喜次「ナニ源兵衛の家主さんだ。」茶め「違へねえ家守さんだワ。」下太「何樣して此處に居たのだらう。」喜次「大愚の身代りに立つたのかも知れねえ。」下太「繼信が義經の身代りに立つたやうになア。」喜次「何にしても大騒動を引摺り出したナ。」下太「何か氣付になる物、ヤヽ待てよ、火鉢の引出に赤膏藥と郎功紙が有つたぢやアねえか。」喜次「たましひの垢なら何程もあるぜ。」喜次「ドレトよし／＼、薄荷圓が戸棚にあるぜ。」ト、大蠟燭を點したる儘に、戸棚の入口へ燭臺を持ち行きて、隔紙あけんと引手を持ち、ぐわたり／＼引張つても、ぎつちり支へて明かぬも道理、戸棚のうちには彼の大愚が、今源兵衛の倒れたる聲に愕り仰天し、兩手を伸ばし隔紙を一生懸命おさへて居るとも知らされば、喜次郎は眞赤に成つて推しても引いても少しも明かざる隔紙に、喜次「茶目さん下太さん、手傳つて引つぱつて呉んねえ、何だか支へて些とも開かねえ。」茶め「オット承知だ、ソラ引つぱれ。」下太「待て／＼一所に遣らかすから。」ト、三人一度に隔紙の、縁へ手をかけ引き開くれば、大愚も顔を

しかめたり齒をくひしばつたり、一生懸命兩の手足で押ふれども、力つかれて瓦落々々と、ひき開けられたる隔紙の、内よりぬつと面を出す、大愚はさきに丼鉢を倒して、冠りし小麥の粉に、天窗や顏は勿論の、肩から胸は眞白にて、髮の上には喜次郎がしまひ置きたる干瓢の束にしたるをうち冠れば、其の容世にいふ白粉地藏へ拂子を著せたる如くなりしが、表のものの足元を潜りて、彼方へ逃げ出さんと、戸棚の中より飛び出す、大愚がさまを見るよりも、喜次郎、茶目吉、下太郎が、一度にキヤアツと腰を拔き、そのまゝ其處へ平伏れば、大愚も外なる三人が、一ツ目小僧、外道の變化、また木兎の化物に、成りたる顏を見るよりも、同じくキヤアツト顚倒る、四人の者の聲に驚き、此方に有漏つく虛呂松助、「何だ〳〵。」ト言ひながら、戸棚の側へ往つて見れば、喜次郎、茶目吉下太郎がどつさり其處へ尻餅つき、口を何やら動めかし、眼許り散眼々々光らせて、無上に向うへ指さしする故、茶「何だなア不景氣な眼付をして、其樣な身振は蟲が好かねえワ。」茶「薄荷圓といふのを早く出して飮ませねえのか、何を可笑しな眞似をするのだ。」と、言ひつゝ其處に倒れたる、大愚が足を思はず踏みつけ、喜「オヤ何だ、誰の足だ。」と後をふりむき脇へ寄り、下「誰か爰に寐てるもの、エ、踏んぞりけへつて誰だ〳〵。」と言はれて此方の虛呂松も、「ホンニ何奴か臥さつて居る。」と、二人は側へ立ち寄りて、大愚が其處に倒れたる、顏を明りに覗き込むと、小麥の粉名と干瓢にて、只さへ異形に見えた

る面が、氣絶なしたる折柄に、齒を喰ひしばり眼を見はりて、二人を白眼むがごとくなれば、虚呂松も跂助も一眼見るより、キヤアッと聲たて、一度に後方へ筋斗る拍子に、折よく跂助の手さきで、倒れし源兵衛が腰のあたりを突きこくると、源兵衛忽ち正氣付き「ウヽ、ウヽ」と言ひつゝ起きかへり、何かうろ〳〵見まはしたりしが、周章てふためき立ち上り、倒けつ轉びつ一生懸命、表の方へ逃げ出したり。

こゝにまた野良七と飛八は、今朝まだきより二人して、川崎宿の海手なる、大師河原の厄除大師へ參詣なさんと出で行きしが、秋の日脚の短きに、雨さへ折々降り出でければ、道の行くても果敢どらず、此の時漸く歸り來り、一杯機嫌の高聲に、野ら「ア、草臥れた〳〵。」飛「自己ア足よりか口の方が草臥れた。」野ら「遠道へ出て雨に降られたのと、遊びに往つて女に嫌はれたのとは、何方が宜いだらう。」飛「何方が宜いか自己にやア分らねえ。夫れだから遊びに往つて、一度嫌られて見てえと思ふけれど、生憎とモテて許り居るから御恥かしい事だけれど、女に嫌られるといふ味をまだ知らねえのサ。」野ら「往來のものに聞かれると、大師様の罰でも當つて來たかと思はれるワ、、。」飛「何故々々。」野ら「何故、ヘン何故も押しが強え。」飛「夫んならば何故と釜とは何方が押しが強と思ふ。」野ら「何故の方は味噌汁がつよくつて、釜の方は飯がつよいのサ。」飛「イヤ飯といやア高輪に居た牛は強かつたなア。」

野ら「ほんに牛で思ひ出したが、連中能楽亭に集まつて居るだらうなァ。」喜「待ちなヨ、何様いふ譯で牛と言はれて、連中を思ひ出したのだ。」野ら「別に古事来歴はねえけれど、僉のいろ／＼して居る所が牛のやうだからヨ。」喜「違へねえ、何時だつけ餘所で馬の噺が始まると、お前のことを思ひ出したつけ。」野ら「此の野郎め。」喜「エ、草臥れて居るから、ふざけるなと言つたら。」野ら「そんなら料簡してやらうが、連中は喜次さんの家に集まつて居るに違へあるめえなア。」喜「そりやァもう何か出来ねえ相談でも、付けて居るに違へねえのサ。」野ら「自己とお前とあれほど僉を誘引つたのに、何奴も此奴も不信心な奴ら許りだから、言ひぐさばかり言つて居て、参詣に往かねえのは宜いが、雨が降り出したといふもんだから、其れ見た事か後生が悪いからだとか、天文を知らねえからだとか、澤をいはれるに違へねえが、何か巧え趣向をして、自己達も一所に往けば宜かつたと、羨ませて遣りてえもんだ。」喜「何様信心をしたり、愚鈍にされたりしちやァ可怪しくねえ。エ、待ちなヨ、ア、と彼様だから待てノ＼。」野ら「エ、なら待たなんで、彼様だからなら待てノ＼といふてにはに成るのか。」喜「左様ぢやアねえけれど、一しゆかうつけようと思ふから待ちなヨ、彼様だから待てノ＼と言つたのヨ。」野ら「フム左様かは下往の先だらう。」野ら「ナット妙。」飛「エ、悔りしたア。」野ら「金を拾つたと言はうぢやァねえか。」喜「奢れと言はれると詰るのえ、だから女に惚れられた積りにした方が宜からう。」

野ら「アノイヘねえ。」飛「お前が二十五六の年増で、自己が十七八の新造に、おもひ付かれたと言はうし、言ふだけれど、自己の方が新造好のする風だからノ。」野「イヤサその事を言ひつゞけにするわけやア、飛八きまぐれなどには一天四海皆歸妙法、おしなべて人は惚れだテノ。」野ら「南無妙法蓮華經。」飛「アヽア相談の付かねえ中に、力彌さんのお屋敷へ来て仕舞つたぜ。」野ら「何にしても、二人ながら女に惚れられて、大森の駿河屋で、鮑と御馳走に成つた上で、此の土産なしぞら皆貰つて来たといふはうまい。」飛「さうよ、明日か明後日は、その女の家へ往つて、ものにして来た、などと言ひながら来るうちト、二人はうか〳〵喜次郎の家の前まで来りければ、なほ門口に佇みて、ひそ〳〵噂をして居る折柄、内よりの格子を瓦落裏引き明け、飛び出したる源兵衛が、何心なく噺して居る野良七が後ろより、却合にかゝつて突きあたれば、野良七前へつんのめり、向ひあひたる飛八が、額へ額をコツキリ打つけ、野ら「アヽ、イタ、、、、、」二「痛タ、、、、、」と源兵衛は見向きもせず、路次の中へそかけ込みける。

五編　卷之中

野良七と飛八は、大師河原の戻り足にて、喜次郎が能樂亭へおしこみ、連中の者に、今日川崎へ往

きたるを、羨ましてやらんものをと、既に喜次郎が家の前まで來りたれど、猶門口に佇みて、評議して居るその折から、格子をあけて駈け出す家主の源兵衛に、突き飛ばされて額あはせによろめきたがら、雙方が額をおさへて立ちすくみ、野ら「エ、何奴だか手ひどい事をしやァがる。」飛「よもや連中のうちぢやァあるめエ。」與二「額と額がコキンぐわァんといふ間に、何處かへ逃げて往つてしまつたから、どんな奴だか釋らねえ。」飛「眼から火が出たァ。」野ら「自己の眼からも火が飛び出したァ。」與「全體眼から火が出たときにやァ、詞を詰めて眼火が出たといふと、天窗が飯櫃か何かのやうで面白いぢやァねえかえ。」野ら「眼火といふが有るものか、櫃の中のはめしだわな。ひとしでは文字がちがつて居らァ。」與「一寸聞きなよ、たれでもノ、米を火で煮て拵へるのだから、米と火とを一ッによせて、めひといふ名を付けたつていいぢやァねえか。」野ら「何さま左樣して見れば、夫れへおつ付けて喰ふから、味噌汁といふのかも知れねえ。」與「何にしても今の野郎は、忌々しい無憐氣をしやァがる。」與八「人の飯櫃から眼火なんぞを出しやァがつてなァ。」與「しかし眼火を出しただけの僥倖はある、ノ見さいせえ、格子を開けッ放して往つたから、先づ城中の景勢を窺はう。」と、拔足しながら能樂亭の格子の内へ徐と這入り、草鞋をはいた其の儘に、膝の先で這ひ上がれば、奥にはなにか連中が立ち働いて居る容子に、扨こそ奴等は集まり居れりと、點頭きながら次の間の、障子へ指で穴を明け、覗けばうちに

は燭臺へ、大蠟燭をともしたてゝ、此あり氣なる其の容子に「ハヽ何事をもくろみしぞ」と、障子の穴を嘗めひろげ、おほうり寄つて是れを見れば、こは奇代いかに座敷には、一つ目小僧、三ツ目入道、村兔、青鬼、下道の變化、また天窗から體まで、たゞ眞白なる化物が、何やら寄つて行燈の前に、倒れて居るさへ在りければ「ア、ツ」とばかりに仰天し、逃げ出さんと身を悶けど、腰のつがひが違つてゐると、竟ふでもつともなたれれば、へたり／＼と尻餅つき、眼ばかり白眼をなさせたりしが、やうやうの事にて居ざり出し、格子の外へ出るより早く、野良七が手を捕まへて、無二無三に引ずりながら、物をもいはず驅け出すにぞ、野「コレ、是れ何をするんだ、左樣逆にひつぱられちやァ、是れ浮雲へといつたら。エヽ、ャ、戯狂けちやァいけねえ。エヽ、ャ、」飛八は片手で野良七を引張り、片手で喜次郎が家を指さしながら「化、化、ば、ばゞ」と言つたッきり、口をもぐ／＼眼を光らせ、突きあたつたり爪づいたり、足はすくみ息は切れ、氣はせく程に驅けられねば、只腰許り前の方へ、ひよこりひよこり這つて居る故、野「何樣したんだ、エ何樣したんだよう。」腰許りひよこ／＼やつて居たが「ア、譯がわからねえ。」飛「化、ばゞ」野「化が何樣したといふのだ。」飛「化、ば、ば、ばゝ」野「ばゝばと言ひながら腰をひよこ／＼。フ、ム喜次さんが婆アさんと、色事でもして居たのか。」飛八は天窗をふり「ばゝ、ばゝけゝ」野「イヤ待ちなよ、頤を外したのか」飛「ばゝ、化物々々。」野「ヒエ、化

物だと」虚「化物」野呂「串戯をいひなさんな」虚「ほゝゝゝ本正だとよ、總身をわな／＼震はし
胸を撫しやうと撫でながら、虚「アヽ、恐怖かつた」野呂「茶目公や下太しうの驚かしにかゝつたのだ
らう、馬鹿々々しい」虚「おゝ驚きゝしたゝ所の、ご騒ぎさエ。天窓へおや／＼茶臺を見たやうなも
のを、かゝゝゝ冠つて居る一ッ目小僧、牛房の切口を見たやうな眼の玉の三ッ眼入道、夫れから何
だか種々居て、行燈の前には天窓から顔から胸から真ッ白な化物が倒れて居るゝのを、他の化ものが
喰はうとしてるゝる容子だつたゝゝゝゝ」野呂「カチ／＼／＼／＼／＼／＼といふの
は、歯がなるのか、何にも其様に震へなくつても、いいおやァねかナ」虚「なゝ何にしてもはゝゝ
は早く逃げよう」野呂「へゝてまけに弱がんねえ。お前の見たのが驚かされたので無くツて、真正
にした所が、高で野干か狸の化けたのだァ、恐れることが有るものか」虚「そゝそ左様言はれて見り
やァさゝ狐やたゝ狸は裏の斑狗よりやァ弱いなァ」野呂「此方人どもの遊び所を、篠田の森の浅茅寺に
押領されたといはれちやァ外聞がわりい。夫れに喜次さんや連中うちを化して居られたまゝでもねえか
ら、一ばん追拂つて喰はへえ」おめへら此様な事を言はねえで、自己と一所に歩行びねえまし」虚「自
己だつて野干や狸と氣が付きやァ恐れるものか、何故といふに、狐や狸は裏の斑犬より弱し、斑犬は
自己より弱いものナ」野呂「然し小敵と見て侮るべからずだ。何か其處らに手頃の鐵の棒でもあり

さうなものだが、暗くつて分らねえ。」と、きよろり／＼尋ねまはし、「オツトよし／＼。」と、他家の戸口に建てかけたる竹の杖を持ち来り、野ら「サア／＼お前、此の鐵の棒をもちなせえ、自己はお葺竹の木刀で澤山だ。」喜次「長屋の行事に左様言つて、僉に加勢をして貰はうぢやアねえか。」飛八「まだ其様な弱い事をいふよ。自己一人でも退治して見せる。」喜次「今日はお前は滅法と強く成つたなア。」野ら「ヘン是れしきの事。サア／＼来なせえ、狐めらに際期屁をひらせて呉れるから。」ト、先に立つてあとへ戻り、喜次郎が門邊に来り、野ら「うぬら何様するか見やアがれ。」と、手拭取り出し鉢巻し、片肌ぬいで手の平へ唾をはきかけ、木刀ひつさげ格子のそとから内を覗けば、飛八はあとにつき、同じく手拭で鉢巻しつ腕まくりして、胡麻竹の杖で地平をたゝきたて、後へ二足前へ一足、腰をぶる／＼震はしながら「サア来い、此度は此方も強く成つたぞ。」と、言ひつゝ耳をそばだてて「ノ、そら何様も魔ものツ臭からう。」野ら「成るほど些とをかしいやうだ。」ト、二足三足跡へ戻り、「まア待て／＼。」と、懐中より守袋を探り出し、鉢巻をしたその上から、天窗へくる／＼縛りつけ、唾で眉毛を無性に濡らせば、飛八もまた守袋を取り出し、是れも天窗へ縛り付け、唾で眉毛を濡らしにかゝれど、口中はから／＼干いて居るゆゑ、飛「こりやアいかねえ。オイ野良さん、アイ亀井戸でうる臥龍梅の梅干を、二十四文が所一度に口へは頬ばれしめえか。」野ら「エ、サそれどころの噺かエ。」野「だけれど眉毛へ唾を

付けてえが、口が乾いて仕方がねえから、梅干の噺をしたら、舌の裏のとこから唾が涌いて來るだらうと思つてヨ。」野ら「何サ呪詛だから付ける眞似をして置きやアいいやアな。」寒「仕方がねえ、水ッ鼻でも塗り付けておかう。」野ら「何にしてももう一人、助太刀があるといいけれどなア。」寒「はじめに太膽を拔かれたせゐか、腰の居りが惡くつていかねえ。」野良「たかが野干か狸の所爲だから恐れる事アねえ。何にしても遣つつけよう。」と、天窓へ縛つた守袋を撫でて見ながら、門口の格子へ首をつきこみ、中の容子を窺ひたりしが、また拔足してあとへもどり、野良「こりやア何でも飛さんが、化物のやうすを知つて居るから、先へ這入つて貰はう。」寒「とんだ事をいふ。自己ア お前ばかり中へ入れて此處に待つて居る積りのだ。」野ら「お前のいふとほり、何樣かんがへても、野干や狸よりやア裏の斑犬の方が強いやうだなア。」寒「左樣は思ふけれど、萬一斑犬より強いのが有るめえとも言はれねえ。」野ら「チヨッ左樣がた〳〵と震へてくんなさんな、氣に成つていかねえ。」寒「お前も膝から腰の所が、ひよこ〳〵として來たぢやアねえか。」野ら「自己なア武者ぶるへといふンだア。」寒「アレ〳〵家の中で何か音がするやうだ。」野ら「彼樣いふ時に大愚でも來ると、騙して先へ入れて、瀬踏をさせるけれどなア。」ト、二人は格子の側へよつたり亦逃げ出したり、有漏々々と評議に果てしはなかりけり。却說能樂亭の家の内には、戸棚の中より跳ねて出でたる大愚が異形な有樣に、皆おどろきて平たりと、言

何もなしに腰を抜かせば、大愚もあたりの變化を見て、忽ち倒れて正氣をうしなふ。されば五人は眼ばかり光らせ、疊へ尻の吸ひ附くごとく、立たんとしてはばつたり〳〵、尻もちを付いて居たりしが、喜次郎は戸棚の變化が、ふんぞりかへりし其のまゝにて、身動きさへなさゞれば、恐るゝうちに少しいぶかり、首を伸ばしてこは〴〵も、倒れし變化を覗いて見ると、冠りて居たる手瓶には、早晩轢へすれ落ちて、たゞ一面に眞白な野郎天窓に成つて居るゆゑ、喜次「オヽ、オイ〳〵虚々虚吉さん、茶々茶めさん。」ト、言ひつゝ、顋で彼方を指せば、二人は何の應答も出來ねど、恐々しながら變化を見るに、一人は殊更天窓の際、燭臺さへ傍に在れば、茶め「ヤ是りやァ大愚さんだぜ。」喜次「ナ何、大愚先生だと。」ト、聞くより皆々腰がたち、下太「とゝとは言ふものの油斷はならねえ。」虚吉「チヨツ太肝を抜かしやァがつた。」虚吉「此方の趣向を知つて居て、返討に仕ようと思つたのだらう。」下太「何にしても寐込んで仕舞ふとは、悠長なことぢやァねえか。」喜次「氣樂なことを言ひなさんな、氣絶して居るのだア。」虚吉「ヘン目をまはして宜けりやァ此方でまはさア。」虚吉「向うだつて目をまはして、割に合はねえといふ譯でも無からう。兎も角も此方には、化けたのが五人居るのだものヲ。」喜次郎は大愚が傍へ往つて見て、喜次「サア〳〵事だ、目を廻したに相違ねえ。」茶め「其の替り源兵衞さんが居なくなつたぜ。」下太「此のくれるに趣向をして、僉に返討をくはせながら、目を廻すとは何事だらう。」茶目「目を廻し

た振をして居るのかも知れねえ。」喜三「何様して／＼冷え／＼。」喜三「モウ／＼薄荷呑んでは懲りたから、誰か醫者樣を呼んで來て下ッし。何にしても大事だァ。」喜六「打捨つておいても生きさうなもんだ。」卒「氣樂なことを言ひなさんな。」下太「自己が醫者へ驅け付けよう、生かしてしまはねえと大變だァ。」と、急ぎ周章て提灯つけ、履物履くさへそこ／＼に飛び出す門口、表には飛八と野良七が、是れを見るより、「キャアッ。」と言つて逃げるも道理、下太郎は彼の木菟の拵へ故、天窗には紙袋、眼へ饅頭の皮をはり、羽根で織りたる紙布さへ著たり。下太郎も思ひよらざることなれば二人の聲に、「ヒエ、。」と驚き格子の中に逃げ込んだり。野良七と飛八は、四五間ばかり驅け出したりしが、木菟の化物は、格子の内へ入りたる故、野ら七は立ち止り、「ヒエ、恟りさせやァがつた。」飛八も散眼々々しながら、「ソノ眞正だらう。」野ら「格子の外に隠れて居て、化物めが出ようといふ所を、思ひ切つて打撲つて見ようぢやァねえか。」飛「何だか氣味が悪いがやつ付けようか。」野ら「音のしねえ樣に徐と步きねえヨ。」と、二人は拔足入口の羽目にひつたり身をすりよせ、一人は木刀一人は竹杖、がく／＼膝をやつと踏みしめ、出でたらば打たんと振り上げて、待つとも知らぬ下太郎が、漸つと胸を撫で下し、下太「唯でさへ戸棚の中の白束埔寨で、おびけの付いて居るところを、驚かされて耐るものか。何處の野良だか、ろくな串戲はしやァがらねえ。」と、何か喃々吶々いひながら、格子の口から菓子袋を冠りし天窗

を突き出して、表の容子を窺ふ所を、飛八と野良七は、震々ぐわく〳〵震へながら、彼の木刀と竹杖で、きよろ〳〵見まはす下太郎が、天窓をコツリ、ピツシヤリと、両方よりして擂節を、あたりを擲はせば下太郎は「キヤアツ。」と聲たて、提灯を投り出して、その儘に椽の上へ這上る。野良七と飛八は、かの化物の弱きを見て、少し勢ひ付きければ、野ら「此の野郎めらア。」喜次「此の狸めらア。」と杖木刀で叩きたて、格子のうちへ追つかけ込む時、座敷に有りける喜次郎等は、此の物音に驚いて、何事にやと燭臺さげ、三ツ目入道、一ツ目小僧、青鬼、外道のそのまゝで、入口へ立ち出づれば、野良七飛八これを見て「アツ。」と言ひつゝ天窓をかゝへ、逃げんとするに途方をうしなひ、わづか許りの沓ぬぎの、土間をどたばた這ひ廻り、果ては腰さへ利かずなり、二人諸共平張つたり。喜次郎は是れを見て「ヤ飛さんに野良さんぢやアねえか。」野ら「ウフ、、、。」飛「フヘ、、、。」茶め吉はわざと少し身ぶりをしながら「天窓から鹽を付けてかじつて仕まふです。」野ら「ウフ、ウフウフ、、、。」飛「フヘ、、、。」喜次「これサ自己たちだヨ。」虎六「こんな形をして居るから恐れるのだア。」呑「こはい事アねえ、百物語の茶番をしたのだから。」下太「自己許りやア宜い面の皮な、手ひどく天窓をたゝかれたア。」と、冠りし紙袋を取り、瘤に成つたる所へ唾を塗りつけ摩つて居る。野良七と飛八はこれを見て漸う落付き、野ら「お前たちも悪い洒落をするものぢアねえか。」八「自己ア眞正に肝を潰し

たアこたそれだから膝ががく〳〵して、震へがちつとも止りやアしねえ。」 喜次「二人が悔りしたのも無理はねえ、餘りうまく化け過ぎたので、大愚さんが目を眩して死んで仕舞つたア。夫れだから下太さんに、醫者へ往つて貰はうといふところで、お前達に天窓をコツキリ叩かれたのだ。尤も形が形だから、醫者でも肝をつぶすと悪い、野良さんか飛さんの内で、一ッ走り往つて来てくんねえな。」 喜「座敷に眞白に成つて倒れて居るのが大愚先生たのか。」 喜次「そうさ〳〵。」 野ら「何にしても死んで仕舞つちやアア大變だから、早く醫者を呼んで来よう。」 喜次「左様してくれりやア有りがてえ。」 野ら「飛さんも一所に歩行びねえナ。」 飛「大急ぎで無くッちやア往かねえぜ。」 喜「死人になつたのを置いて、悠々として居る奴が有るものか。」 野ら「草臥足だけれど仕方がねえ、大森で女に惚れられた報いと諦めよう。ナウ飛さん。」 飛「そうさ〳〵、お前が年増で自己が新造にナウ。」 喜次「そんなことを言つてるるとおそく成るわス。」 野ら「夫れぢやア飛さん、往つて来よう。」と、二人は表へ出で行きたり。喜次郎は燭臺をもつて座敷のかたへ運入りながら、「餘り取違つたので今まで氣が付かずに居たが、化物の拵へをとつて、素人に成つて仕舞にねえと、飛公や野良公のやうに、お醫者さまが来て肝をつぶすといかねえぜ。」 虚ろ「ほんに左様ス。狼狽ひ過ぎるもんだから、下太さんのやうに、天窓を叩かれる事が出来に及ぶのだ。」 愚「化物付がいいから、惜しいもんだけれど仕方がねえ、生まれ付いた通りの好男子に

成つて仕舞はう。」ト大「大愚大人ばかりは、白いまゝで置いてもよからう。」土「戸棚から出たお化が生きけへらねえ目にやァ騒動が大きイぜ。」なめ「車前の葉を冠せても生き返るだらうと思ふやうだ。」喜六「サア左様には違へあるめえけれど、隨分雜坊な男だからノウ。」なめ「睡るのと眼眩したのと一ツに成るものかナ。」喜六「ハァ少しやァ違ふかねエ、」土「全體百物語をして、おどかさうといふのは悪い趣向だッた。」喜次「しかし氣を失はうとも思はなんだからノウ。」と、五人は了得氣にかゝれば、竊り／＼と著物を著かへ、顔の付物塗り立てた墨繪の具など洗ひおとして、變化の道具を取りかたづけ、待つ間もあらず歸りきたる野良七飛八は門口より、「どうだめつぽふと早かつたらう。」と、いひつゝわらぢを足袋のまゝ、其處へ脱ぎ捨て上りながら、野良「大師河原から歸りの儘だからいくぢはねえ。ナア／＼お前さん此方へお上んなせえ。」ト、目くら縞の股引に角字を染めた半天を著たる男を伴へば、肩に掛けたる手拭をとつて手でこき握みながら、男「ヘイ眞平御免ねエ。お急ぎだといふから、仕事をして居る形でめへりやした。」ト言へば、喜次郎きよろ／＼しながら、「サイ野良さん、此の先生にお願ひ申したのか。」野良「さうさ／＼。」飛八「明日の朝往かうと言つたのを、無理に引つぱつて來たのだ。」喜次「夫れは夫れは夜分と申し、御苦勞さまで御座いました。」なめ「何は兎もあれ早く見て戴いたらよからう。」喜次「すイ虚呂さん、お茶の支度をしてくんな。」ト言ひながら、角字の半天を著たる男の前へ手をつき

「左様なら貴君、此方へいらしつて下さいまし。」と、聞いて彼方は不怪な顔、男「何かお誂へなら此處で。」喜次「しかし連れてまゐると申しては、大事で御座いますから。」男「寸法でも取るので御座えやすか。」喜次「夫れはお流儀によつて、いろ／＼で御座いませうが、何卒まァ御覧なすつて下さいまし。」と、踏んごり反つて倒れて居る大愚の側へ誘れてゆき、喜次「もの驚きをして氣絶したので御座いますが、もう餘程に成りますから、其の積りで御診察を願ひます。」男「ヘエ、夫れぢやァ此の御方の像を刻むので御座えやすか、私やァまた、急に石塔を誂へてえとお言ひなすつたから、其の積りで居りやした。」喜「イエ此の通りで御座いますから、見てお貰ひ申して、お薬を戴きたい積り、石塔を拵へるやうに成りましては、一同落亡でも致さなくつては成りません。」ト、言ふを後方に聞いて居る野良七と飛八は、顔を見合はせ居たりしが、野呂「オイ／＼喜次さん、なにを取違るのだ。」喜次「何故々々。」野呂「何故と言つたつて、何様して其の男に薬がもられるものかナ」喜次「薬を盛る事の出來ねえお醫者さまといふが、何處の國に有るものか。」野呂「イヤサ、醫者なら薬を盛るは當然だが、石屋を呼んで薬を盛らせようといふのは、無理ぢやァねえか。」喜次「醫者でなくッて誰が薬を盛る。」野呂「チヨッ譯らねえ。醫者ならいいが、此の親方は石塔を拵へたり、地藏樣を刻んだりする石屋の棟梁さんだといふ事さ。」喜次「石屋さんだト。」野呂「お前が石屋を呼んで來いと、言つたのぢやァねえか。」喜次「馬

此奴もなか／＼樂しみらしいぜ。」虚呂「こりやア奇妙だ、自己も疾へ氣がついたから、嘴の蓋を明けて見ようと思つて居たのだ。」茶め「成程氣のよるときにやア寄るものだ。自己ア五六日先から、もう親孝行をはじめて居て、既に夕も按摩といふので、大苦しみで遣つたのサ。といふのは外でもねえ、親父が一杯きげんで火燵へつゝぷし、茂林寺のお所化さんをきめて居るから、オイ親父さん、天窗をちつと叩いて上げようと言つて、背中へとッつくと、親父が大悦びか何かで、でこすけをむつくりと持ち上げたから、打かうと思つて、藥罐の上を撫つて見ると、橋の欄干に付いてゐる擬寶珠か何かを撫でるやうな手障りだから、これでも毛が生えて居るかと、爪の先でちよい／＼と摘んだら、親父が不意をくらつたもんだから、身振ひをしながら、アヽ痛てゝ、ヱヽ月代をむしつて何様するのだイ愚鈍だと、言はれて此方も悔りしたのヨ。だから兀けて居ると思つたつて、なか／＼油斷はなりやアしねえ。」飛「夫れで市がさかえたのか。」茶め「まアさ聞きねえ、親父の天窗といふのが、御影石のやうに固いのだから、只叩いちやアとても利くめえといふ勘で、握り拳をこしらへると、榮螺の角のやうなものが出來るだらう、彼の角のやうなところで、力一ぱいに百會の上のところを、コツ／＼／＼と打しつけると、親父がだん／＼首をすつこめ、エヽ此の野郎なにをする、木槌なんぞで叩かれてたまるものかといふから、自己が、なに木槌で叩くものか、此處のところで遣らかしたのだと、榮螺の角を

出して見せたら、イヤ滅法界な事をしやァがると大呵られサ。しかし其の筈でも有らうかエ、親父の腦天が岩石たゝきを見たやうに、凸凹だらけに成つてしまつたのヨ。然れども此方はそしらぬ顏で、エ親父さん、倅が孝行をはじめたので、大分うれしいと見えますネ、その證據には、お頭上が悅ぶだらけに成つて來ましたと言つたら、愚鈍めがと苦笑ひをして居たから、宜いぢやァねえかこれから猶トコノヽ遣つて居るうち、按摩も少し秋の空と來て、かはつた事をしようと思ひ、エ親父さんちつと足力といふのを、遣らかして上げようかと言つたら、親父が、手でさへ天窗へ叩き毀しが來たかと思ふ樣だのに、足で踏みこくられて耐るものかと、以ての外の不承知、仕方がねえから、握りこぶしで拍子をとり、朝顏日記の宿屋の段といふのを、例の美音か何かでうなり付けて聞かせたら、殊の外御意にかなひ、直にあとがまだ葉唄ども、一、ひき續いて音色が、成駒屋に播磨屋のかけ合ひ、不破に名古屋の鞘當サ。そりやァ出たやうに遣つて聞かせたが、譃だと思ふなら、此處で一ばんやつて見せようか。」三云「ホンノ譃だとも何とも思やァしねえ、お前の上手なのは僉が知つて居るから。」虚云「全體役者よりやァ猫のいがみ合ひの聲色を、遣つて聞かせれば宜かつた。」茶云「下戸のいがみ合ひだと、肴をあらす所だけれどなァ。」野云「まァ サ雜ぜずに聞かッし。」下太云「自己も此の節は孝行をしようと思ふ氣が、鳴尾のとこまで込みあげて來て居るけれど、誰やらの狂歌に、

あらためて孝を盡すも不孝なり大事の父母の肝やつぶさん
といふのがあるから、じり〳〵段々に遣らかすつもりだ。何のこたァねえ菜や大根の香物とおんな
じ格式で、おふつたり鹽を振つたり、押しを置いたりして拵へあげるのだ。」貞「そりやァ下太樣の
言ふのに違へねえ。自己の料簡かたも其處だから、行ひをあらためるにやァ、第一朝寢をよして、早
起にならなけりやァ正眞でねえとおもつて、此の間の事だが、明日の朝こそ一はながけに起きてくれべ
ヱト、まだ暮れきらねえのに寢込んでしまつて、夢か何かを見てゐると、ゴオンと響く鐘の音に、たち
まち睡りをさまされたから、此處だと思つて起きて見ると、親父や親母が火鉢の傍にすわつて居るか
ら、ハテ殘念な、今朝こそと思つたに、矢張このおれが遲れたかと、しを〳〵楊枝ばこを持ち出すと、
親父が額へ九の字を出し、今時分齒をみがく愚鈍があるものかと、大小言だから、不測なことをいふ
ものだと、能く〳〵聞いたら、まだ誰も寢ねえので、今なつた鐘が、石町の四ツだとは、何と馬鹿げ
たはなしさね。其處で仕方がねえから、衆と一所にまた寢の五郎サ。だけれど氣に留めて居るといふ
ものは強いもので、いつもの寢坊が度々眼が覺めるから、もう明方といふ積りで、徐々起きかけ、茶
釜の下を焚きつけて、先づ湯をわかし茶をこしらへ、飯もついでにと思つたが、焚いたことがねえの
で遠慮をして居るうち、何處かの鐘が聞えるから、かんぢやうをして見ると、七ツといふのだから、

チヨツまだ早過ぎたか、今から寐るでも有るめえと、火鉢の緣によりかゝり、空然かんとして居て見たが、何分にもしようがねえので、儘よもう一寐入り遣らかせと、折角たゝんだ夜具を廣げて、横に成つたと思ひなせえ、天窗の上でカア〳〵と、烏が鳴いてとほるから、今度ばかりは上加減と思つて直ざま飛び起きると、家內殘らず其處に居るので、ハテとろ〳〵と遣つた間に、飯も何樣やら濟んだやうす、成程僉が早起きだと、心の內で我を折りながら、緣頰へ出て見ると、太陽さまが西の方から昇りかゝつて居るので喫り、是れは大變何樣した事と、往きなりまつ青くなり、倩〳〵あたりの容子を見るに、宵から度々眼を覺したので、ついとろ〳〵と眠つたと思つて居たとろ〳〵が、とろ〳〵〳〵のとろ〳〵、又とろ〳〵の大とろ〳〵、しんにふかけてとろ〳〵〳〵、法衣を著せてとろ〳〵〳〵、滅法界にとろ〳〵〳〵、家中一ぱいとろ〳〵〳〵、何のこたアねえ牛の小便のとろ〳〵を見た樣に、恐ろしく長いとろ〳〵で、明の烏だと思つたのが、塒へ歸る夕烏、朝日の影かと怪しんだのが、夕日の居殘りとは何樣だらう、夫れから窩々飯を喰ひ、手拭をもつてずつと朝湯、とは往かねえが自分許りの其の積りさ、けれども折角早起きをして、悦ばせようと思つたのが遲起きに成つて仕舞つたから、腹癒にその晩、慈母を蕎麥屋へ誘れて往つたところが、慈母は貝柱蕎麥を一杯半でげんなりさ、此方は夜食一食で、朝飯と晝飯を喰はねえもんだから、洗湯へはひつて歸つて來ると、忽ち腹はへつこ、

サ。然から先づ熱盛にして十三杯と遣らかしたが、疝氣に障るとつまらねえと思つて、直に天麩羅とお太鼓を直し、こいつを又十三杯と遣らかし、此度はうどんの花巻と出かけようと思ふと、慈母に呵嘖られたから、夫れでお仕舞さ。すると後で食滯でもしやアしめえかと、大きに苦勞にしたさうだが、朝起きをしようと思へば夕起きになり、悦ばせようと爲ると氣をいためさせ、何うぞ始まりッから肝を潰させるやうな、孝行になる事は出來ねえやアな。」丹「かう理につんで來る噺に成つたら、自己も本心を現はさうか。近頃何となく辛抱心が出て來たから、此の十八日に祖母を連れてお寺參りと出かけたのョ。爲ると年寄だ物だから、外へ出りやア奢るといふのを聞かずに、午時飯のお菜に煮た芋をせしめ込んだせいか、夫れが熟れてきたと見えて、歩行きながらブイと一ッ屁を放ると、並んで歩行いて居た女連中が、じろり／＼自己を見るから、否でならねえけれど、濟ました顔をして往くと、また一ツブイと放つたので、新造や年増が一時にクツ／＼／＼と笑ひ出し、自己が放つたんだと思ふもんだから、じろ／＼面ばかり見やアがるのさ。なんと耐へられめえぢやアねえか。其の内女連は横町へ曲つたから、祖母さんに、後生だと思つて屁を放るのは堪忍してくんなせえ、往來のものが自己だと思ふから、否でならねえと言つたら、婆坊は馬鹿な子ぢやアないか、後生を願ふ年寄はみんな放屁をするものだ、放屁は數珠の大きい玉とおんなし事で、南無あみだぶつ／＼と十遍となへては、放

屁を一ツブイと鳴らし、南無あみだぶつ〳〵と百遍となへては、放屁を一ツブイと鳴らすのは、お念佛の數取なり、又一ツには木魚の音をさせるかはり、祇園精舍の鐘のこゑは諸行無常と響くなりと言ふ事を、御法談で聞いて來たが、自己の放屁も祇園豆腐の精進物で、諸所無じやうと響くのだから、なんにも惡いことはない。ヤレ有りがたい南無あみだ南無阿彌だ。ブイ。ホイ是れはまだ數取には早かつたと言つて、濟ました顏をして居るのだから、何と手が付けられねえぢやァねえか。左樣かうするうち、お寺の前へ來ると、自己がお花を買つて往くあひだに、お墓の掃除をして置けといふから、オツト承知と閼伽桶へ水を汲み込み、卵塔場へ往きは往つたが、幼稚のうち參つたツきりだから、何が手前の家の墓所だか忘れてしまつて、からつきし迷子同然サ。だけれども婆アさんの來るのを待つて居るのも口惜だと思ひ、其處いらを見て歩行くと、茶釜蛟屋といふ自己の家の家名を付けた石塔があるから、〆めこんだりと先づ掃除をし、水を上げて待つて居ると、知らねえ親父が出かけて來て、自己を横目できよろ〳〵見ながら、お花を上げて拜むから、ハテ間違つたかと思ふ途端に、うしろの方で屁の音がブイとするから、首を伸ばし鄰の墓場をのぞいて見ると、祖母が掃除をして居るから、周章てて其處へ往きやしたが、何樣かんがへて見ても、手前の家の墓場なんぞは、覺えて居る方が善ささうだヨ。」 下太「夫れでも宜い事をした。自己ァまだ墓場どころか、寺の名も知らねえから、家へ

歸つて聞いて置かうヨ。」 野ら「此方ア皆と違つて、陰徳の方から先へ押つはじめたが、陰徳といふのは盡法界と骨の折れるものだぜ。」 茶め「フムウはてネ。」 野ら「聞きねえ、此の間湯島へ用があつて、明神坂の下まで往くと、米を二十俵ばかり積んだ車をおし上げて居る、ところがなか／＼上らねえのヨ。夫れから妾らが陰徳だと思つて、手傳つて押して遣つたが、かけ聲の美音なのにやア車力も驚いたのサ。何故といふのに、車力てきに骨が折れるもんだから、たゞウ、ン／＼といふ許りだが、此方はえんホイえんさかホイ其處高ホイ、イヤ噺ばかりぢやア可笑しくねえ、オイ茶目さん、お前の手を横の方へ突張つて貸してくんねえ。」 茶め「かうしてか。」 野ら「よし／＼有りがてえ、エ此の茶目さんの手が車の横木だぜ。」ト、茶め吉の二の腕と握り拳をしつかり掴み、肱のところへ腰をあて、「えんホイえん坂ホイ其處高ホイ。」 茶め「ア、痛え／＼。コレ何をひどい事をするんだイ。」 野ら「自己が押すからお前がだん／＼揺り出しねえ、左樣すりやア痛かアねえ。えんホイ新造だホイお尻がホイ。」 茶め「是れさ痛えといつたら、ア、いてヽヽヽ。」 野ら「痛くつたつて何だつて、此處にやア石が出ばつて居て、餘つぽど骨が折れる所だ、我慢をしねえ。ア、ウ、ンもう些とだ、ソレ〆めた。ア、えんホイえん坂ホイえん。」 茶め「これ何樣するのだ、手が折れてしまふわ。ア、いたヽヽヽ此の野郎ア、いたたヽヽヽ。」 野ら「チヨツそんなら堪忍して遣れか。」 茶目「堪忍して遣れから押しが強え。」 野ら「おしが

つえゝから、車が坂を上つたのだァ。」下太「坂を上つたらもう宜からう。」野ら「どうして〳〵、夫れから竈を荷いで遣つたが。」喜あ「否だ〳〵もう〳〵聞かねえ。」野ら「ヘン惡魔外道め、人の陰德のさまたげをして。」下太「陰德といやァ、自己も餘程の陰德をしたぜ。然も今朝のことだが、背中がむづむづ痒いから、扨こそ奴ばらござんなれと、先づ物干へ飛び出し、光り輝く朝日を身におひ、あか裸にて繻袢を見ると、隱元豆を見たやうな蝨が背筋に五六疋、押し潰してと思つたが、一ノ谷の合戰に、熊谷次郎直實が、無官の太夫敦盛を組み伏せたのとおんなしことで、忽ちこゝろにあはれを催し、平山の武者所も有らされば、命をたすけ參らせんと。」虚六「其樣な事を言つてゐると長くつて往かねえわナ。」下太「イヤサ命を助けて遣らうと思つたけれど、其の儘おけば軀で痒し、他所へうつせば人が困る、と言つて放し飼ひにすれば直さま往生、ハテ何樣したらと鑑へたが、餘程うまく案じたネ、其の仕法は、踵の皮を削りとつて曲物へ入れ、その中へ蝨の太夫敦盛をおひこみ、上から切をかけ蓋をして、火鉢の引出へしまつて置くと、人肌ほどに溫まるから、踵の皮を餌食にして、冠せた切が衣類の代り、女郎に嫌られた人が有つたら、いつ何時でもお出でなさい、蝨の生洲は拙者新製ッ。」喜「どんな陰德かと思やァ、ヘンあきれけへらァ。」喜次「併しみんなか頼もしい料簡に成つた。自己も氣の付きやうが遲いけれど、此の節に成つてつく〴〵思ふに、人の親になるほど割の悪いものはねえ。二

歳四歳に成るまでは、取りわけ女親の丹精が大變で、子供が腹へ孕ると、から半病人に成つて了ひ、五月からは猶の事、夫れも毒だて是れも毒だし、甘い物は些とも喰はれず、珍らしい物が有つても、悶るからとかいつて見もせず、荒く歩行くな手を伸ばすな、並つて轉ぶと大變だの、心遣ひの其のうちに、ひよつこり其處へ産み出すと、横にはなれず物は喰はれず、椅子で眠つて湯のやうな粥で命をつなぎながら、もう徐々と赤子の世話、枕直しの濟むのも待たず、負ひ抱へて臺所働き、土用のうちの暑い日も、乳よ甘よで取り付かれ、團扇遣ひも容易に出來ず、雪の降る夜の寒さにも、小便よ糞に起されて、温まる間も泣き立てられ、やつと漸して愛らしく成れば、胎毒疱瘡に疾む子供より、母親の世話がいやます大病人、我が身の勞れいとひもなく、夜の目も寝ずに仕上げると、手の放されぬよち／＼歩行き、怪我をさせまい、若し萬一悪い蟲でも出ようかとの、案じがかうじてお宿をする、地藏菩薩の百萬遍、鬼子母神樣のお草履取、七ツ八ツの頃からして、手習讀物十露盤の、稽古に行けと追ひ出しても、表へ出るといたづらや、喧嘩の後に氣を揉ませ、着物や帶のかぎ裂きか、止んだと思ふと稽古所這入り、何ら張つても相談の、つかぬ地色をもどかしがり、一寸と一度が病み附きで、船ぢや浮雲い、ホイ駕籠の、四本の足でお女郎買ひ」ヱヽ、もう止してくんねえ。親父の臍をゑぐり取つたり、慈母の臑をかじり缺いた事まで言はれると、哀しく成つてこらへられねえ。僉は兩親があ

るから、孝行しようといふけれど、自己ア喜次さんの言ふ通り、慈母や親父の世話に成つたのは、江戸中一ぱいでも過かねえから、その恩をけへしてえと思つても、慈母や親父も死、死んでしまつて、親といふものは一、一人もないから、他のものが羨ましくつて、こゝ耐へられねえ。自己一人なゝゝ何の因果で、親に親に、おゝゝゝオ、イオイ〳〵オ、イオイ。」喜次「是れさう泣かずとて宜いぢやアねえか。」[illegible]「カ、、、、哀しくつて、親が戀しくつて親、親、オ、イオイ〳〵オ、イオイ〳〵。」此の時格子をぐわらり明け、すつと入り來る家主源兵衛、にこ〳〵家主は此處に居る、泣くな〳〵、飛坊泣いたこ」と作郎の洒落に、喜次郎初め思はず笑ひを催す折から、「オホン。」と門で咳ばらひ、大愚お續いて上り來り、「噺は表でみな聞いたが、紋切形の言語でげすが、御連中のおしうち、實に恐れ入山感ぶつ、茶釜かま、親孝行とは有りがてえ、陰徳でござりやう。小生は七太人の外ではげすが、ネエ、モシ源兵衛の大人、御同然に是れまで御突きあひをしてゐるからんではございからは、親孝行の仲間へ入れ仕やうぢやア御座ませんか。」家「左様々々家主からも〳〵、ゝ、モ、何にしても斯う氣が揃つたと云ふ嬉しい事だ。年忘れなりの遊び固めたのに、目出たく一杯遣りかけやせうではこと、酒肴など取り寄せ、喜次郎、茶目吉、瓢呂松、下太郎、鼓助、野良七、飛八の外に源兵衛、大愚をまじへ、その日は此處に飲み暮し、夜更けて各かへりけるが、其の翌日より今までの野暮をいとに打つてかはり、朝はとく

起き夜はおそく寐、家業を身にしみ親に孝、友に誠を盡しければ、德孤ならずの敎へに差はず、源兵衞大愚も是れにかぶれ、陰德あれば陽報に、榮え久しき妙竹林話、七偏人の人々は、目出たき春をぞ迎へける。テン〳〵テン〳〵テレンコテン、イヤ御退屈で御座いッ」

妙竹林話　七偏人　終

醒睡笑

安樂庵策傳

醒睡笑序

ころはいつ元和九癸亥の稔、天下泰平人民豐樂の折から、策傳某小僧の時より、耳にふれておもしろくをかしかりつる事を、反故の端にとめ置きたり。是年七十にて、誓願寺乾のすみに隱居し安樂庵と云ふ。柴の扉の明暮、心やすむるひまく＼、こしかたしるせし筆の跡を見れば、おのづから睡りを醒して笑ふ。さるまゝにや是れを醒睡笑と名づけ、かたはらいたき草紙を、八卷として殘すのみ。

醒睡笑　巻之一

謂彼謂物之由來

○そらことをいふ者を、などうそつきとは言ひならはせし。さればにや、うそといふ鳥の木のそらにとまりゐて、琴をひく縁によせ、そらことをうそつきといふよし。

○いづれもおなじ事なるを、常にたくをば風呂といひ、たてあけの戸なきを石榴風呂とはなんぞいふや。かゞみいるとの心なり。

○かいさうの類にお則といふ藻あり。かのおごもよく食をすゝむる效能あり。さこそ武家の臺所に、飯をはからひもり、人にすゝむる役者をおごとはいふならし。

○よろづ物のむさき事をきたないとは如何に。北は水の方なり。水なければ萬物きよからず。しかるあひだ水ないといふになぞらへ、きたないといふかや。

○宗祇宗長とつれだち、浦の夕に立ち出で遊ばれしに、漁人の網に藻を引き上げたり。「是れはなにと名をいふぞ。」と問はれたれば、「めとも申し、もとも申す。」とこたふ。時に祇公「やれ是れはよい前句

やつしとて、　おとをもいふたりおともいふなり

宗長につけられよとありければ、

　引き連れて野飼の牛の歸るさに

牝牛はうんのおとなき牡牛はうんもとなくなる。祇公感ぜられたり。宗長の一句沙汰あれと所望にて、

　よないろは教ふる指の下を見よ

ゆの下はめなりひの下はもなり。

○隨八百とはなにをいふ。聟が舅のもとに行き、いんぎんに一禮ありて後、舅がいふやう「今までは公界のむきよし、此の後は隨をいたいてあそばれ候へ。」と。聟ききて肝をつぶし、京へ俄に隨を買ひにのぼする。高聲に隨を買はんと呼ぶ。利口なる者行き合ひ、龜の子をいきずる是れなりとて八百に賣りたり。聟よろこび座敷へ持ちて出で、隨を出しまゐらするとておゆませたり。それより隨八百とはいふと、をかしや。

○餅をかちんとは、かちんの手拭にて、髪をつゝみゆうたる女房の、いつも禁中へもちを賣りに參りつけたり。餅賣とあれば詞のさまいやし。いつものかちんが參りたるなど沙汰あればよろし。

○餅のちと赤きやうなるをしんかうといふ事、あかき小豆をうへにきする、あかつきといふ縁にていふなり。

○河内國に珍といふあり。大和に場といふあり。二人ながら兵法の上手なりしが、ある時試合をし、雙方片足をおとし落され、既に死にのぞむ時、金瘡の上手とて來る。あまりあわてふためき、其のぬしぬしの足をば取り違へ、我がを人に、人のを我がにつぎかへたり。さるまゝ一人は足長くなり、一人は足みじかくなり、腰をひきしより、今もかかるありきの人をちんばといふよし。

○いそがば廻れといふことは、物毎にあるべき遠慮なり、宗長のよめる、

武士のやばせの船は早くともいそがば廻れ瀬田の長橋

○和州より出づるほてんといふ瓜は、延暦寺傳教の弟子慈覺大師、天長十年四十にて身つかれ眼くらし。命久しかるまじき事を思ひわきまへ、叡山の北谷に草庵をむすび、三年のとふ行して終りをまたれければ、ある夜夢に天人來りたり。これ靈薬なりとて與ふ。そのかたち瓜に似たり。半片を食す、その味ひ蜜のごとし。人ありて告ぐるやう、これ梵天王の妙薬なりと、夢さめて口中に餘味あり。しかうして後やせたるかたち更にすくやかに、暗きまなじりますく明らかなり。その半片を土にまきければ、まつたき瓜の生ぜし、いまの梵天これなり。元亨釋書に見えたり。

○瓜の糟づけ奈良づけといふ事は、かすがのあればよいといふ緣なり。

○何事も油斷の樣に取り合ひのおそきを、ぬかるといふなる。俊成卿の歌に、

　せき入るゝ苗代水やこぼるらんぬかりて道の乾くまもなし

○何にても水に入りたる物を、湯いりとは何しにいふぞや。沖なかでそこねたとのえんにや。

○こほれさいはひとは何をいふ。昔女子二人一つ枕にいねたりし。姉夢見るやう、我が身の上へ富士の山がころびかゝると見たとかたれば、人ありてあはせける。それこそ富みたる男をもたんずる吉夢なりと祝ひければ、次の娘いふ「あれほど大いなる富士の山か、姉御ひとりの身の上ばかりへはころぶまじ、兩方に寐たる者の上へもかゝりこそせめ」と、うれしげにて居たりしが、はたして二人ながら、目出度く富貴の男をえたりし。これよりこの辭はありとなん。

○物を無用といふ詞のかはりに、よしにせよといふは、

　あし垣も戶ざしもよしやするかなる清見が關は三保の松原

此の歌にて心得ぬべし。三保の松原の面白き景を詠むれば、關におよばずえ行くまい程に、清見が關はよしにせよとよめり。

○瘦法師の酢ごのみとは、やせの寺は昔より禁酒にて酒をいれず。僧の中に酒をこのみ、えこらへぬ

あり、常に土上李をもちて行き通ふ。若し人問ふ事あれば、酢にて候といふ。日を經すかよひしけし。又問ふ時も同じ返事なるまゝ、諺にいひならはし、やせの法師はすごのみや。

○なべて上臈がたにはさゝぢんといふを、禁中にはまちかねとかや、もてあつかひ給ふ事、こゝかといふ詞の縁にや。

○わらんべは風の子と、しるしらず世にいふは何事ぞ、ふうふの間のなればなり。

○山城國伏見のつゞきに、法性寺といふ在所あり。人此處をばなにとて寺の名を呼ぶぞや。老いたる男出で合ひ「さる事候、昔此の地に莊屋あり。かれ燒米をすいて食ひ、終日かみくたびれ、頰にふくみながらねいりたり。鼠にほひに便り、くひ破り大いに口をあけたり。其の朝地下の者共とぶらひくる中に、金瘡の上手あり、風を引いてはあしかりなんと、先づ障子を折りて疵の口にたてしより、ほふしやうじとはいふなり。

○日叱のもとへ、やき米を三袋おくりければ、

いち早きこめらうどものなす業を奥歯に入れてかみふくゝるかな

又誹諧に、

まはる度にぞ米を見せける

さしてなきとがする臼に繩つけて

○鬼に瘤を取られたといふ事なんぞ。目の上に大いなる瘤をもちたる禪門ありき。修行に出でしが或山中に行き暮れて宿なし。古き辻堂にとまれり、夜すでに更に及ぶ。人音あまたしてかの堂に來り酒宴をなす。禪門おそろしく思ひながら、爲方なければ心うきたる顔し、圓座を尻につけ立つて踊れり。明方になり、天狗共かへらんとする時いふ、「禪門うき藏主にてよき伽なり、今度も必ずまた來れと、約束ばかりは僞りあらん、たゞ質にしくはあらじとて、目の上のこぶを取りてぞ行きける。禪門質をまうけたる心地し、故郷に歸る。見る人感じ、親類歡喜する事かぎりなし。

○あさ謡はうたはぬ事とも、又朝うたひは貧乏の相と言ひ傳へたり。いな辭言なり。長老は飯をたく時、謡をうたふなと誡むる。其の故は飯はふしをきらふ程に

○へちまの皮とも思はぬとは、紀の國の山家に、大へち小へちとて、峯たかう岸けはしくつゞらをりなるつたひ道、人馬の往來たやすからぬ切所あり。彼のあたりに使ふ馬は、鞍につけ荷につけ、大豆などは申すにおよばねば、實に骨許りなる樣なり。さる程にかしこの馬の皮を剝ぎてもせのあと瘡の跡疵のみにて、何の役にもたゝぬ物を、へち馬の皮とも思はぬ事にいふならん。

○世間に下手なる者を饂飩くらひと云ふ事は、けしからず饂飩をすく者あり、流石買うては食ひとも

なれ。利口になき坊主に向ひ、「そなた我が髪をそりてたび候へ、もしきられ候はば饂飩をふるまはれよ、難なくそられたらば我振舞はん。」といひあはせ、そらるゝにはや斬らずに剃りはてんとするつがひにふと立ち、少しきられんとしければ、耳を一つ落されたり。腹をばたたで結句よろこびぬるは、めづらしきうつけなるかな。

○七歩とあるゝとは何事ぞ。されば釋迦誕生の時、阿難陀龍王は湯を吐き、難陀龍王は水を吐き、此の産湯に濡れながら、七歩を行かせられしよりおこりたる詞ぞかし。淨土の無量壽經に、從右脇生現行七歩といへり。しとゝ濡るゝも七歩となり。

○鵜のまねする鳥は大水をのむとは何ぞ。

水に入る道をばしらで山からす鵜のまね學ぶ浪の上かな

○豆腐を串にさして燒くを、など田樂とはいふ。されば田樂のすがた、下には白袴をき、其の上に色ある物をうちかけ、鷺足にのりて踊るすがた、豆腐の白に味噌をぬりたてたるは、そのまゝ體に似たるゆゑ、田樂といふにや。夢庵の歌に、

たか足を踏みそこなひし面目をはひにまぶせる冬の田樂

○僧の米をもちよりて食するを、打飯とはいかでいふ。だとは出し合はせたる心なり。八人の爐打

話火の字の分字なり。

○ある人北野に籠りて本地を祈りければ、

かくらくの泊瀬の寺の佛こそ北野の神とあらはれにけれ

○鰯をば上臈方のことばに、紫ともてはやさるゝ。紫の色はあるにはましだといふえんとや。されば下司らしきいわしも、其の人のすきなれば鮎の魚にもまさるよなう。

○理をば非になし、非をば理になし、顏をあかめ興をさまし、むさと物每によこぎれにわるく背ふ、なべて世の人、あれはいかいどろふみよといふ事、はだしちやとの緣語なり。雄長老、

春雨の風に隨ふかいだうはしるくなれども早かわきけり

○あわてふためき、前後を忘じたるを、とち目になつて尋ねたは、とちめになりて走り歩きたるは、などいふ事なんの故ぞや。昔あるもの木から落ちて、目をつき破りかなしめば、人かれをあはれみ物をとらする。さる程にはじめよりも富貴になりぬ。うつけ是れを見うらやましき心出で來、態と山に行き無理に落ちたれば、不思議に大いなる岩に頭のあたり打ちわり、目の玉ぬけたり。さぐりて見肝をつぶし、玉をたづね這ひ廻るに、折ふし橡一つ手にあたるを、玉とおもひ押し入れたる。ほんの玉にはなかりしを入れたれば、とちめになりたる事よ。あまり痛み悲しみ泣きゐければ、とち程の涙を

流すとこといふ由。

一月次の連歌にて宗匠たる人、朝顔と云ふ詞をせられたれば、何から面白しと一座みな感ずるを聞き居て末座より、夕ぼらけと五文字を出すに、宗匠あら珍らしやといはれぬ。又其の儀ならば晝ぼらけとなほしけるを、宗匠それは猶いな詞ぞとおつこめたるに、右の作者うく、これ〳〵、

我はして人のほらけやきらふらん

○遣唐使もろこしにある間に子あり。日本へ歸る時、妻に此の子乳母はなれん程には、迎へ取るべしとちぎりて歸朝しぬ。遣唐使のくる毎に、消息を尋ぬれど音なし。母大いに恨み、兒の首に簡をゆひつけ、縁あらば親に逢ひなんと、海になげ入れ歸りぬ。父難波の浦を行く、沖より浮びて物の見ゆ、馬をひかへて見れば、四つばかりなる兒なり。大いなる魚の脊にのれり、取らせ見ければ札あり、我が子にこそありけれ。いひ契りし兒をとはぬを、母が腹立てて海になげ入れしが、縁ありて魚にのりきたるなめりと、あはれ覺えいみじう悲しくてやしなふ。此のよし書き遣りたれば、母も聞きて今はなき物にと思ひけるに、希有の事とて悦びける。此の子おとなになり、手をよくかけり。魚に援けられたる故、名を魚養とぞつけたる。七大寺の額どもはこれが皆書きたるなり、あな面白の由來や。

○旦九郎といふ兒あり、性鈍にて富めり。田九郎とて弟あり、性さかしくて貧しく、ある時弟釜をも

とめ庭にて湯をわかす。たぎりゐける處へ兄來たるに、其の釜をぬき出居の火もおかぬ爐にかけぬ。旦九郎見つけ、「是れは火もなうてたぎる事如何に。」とあれば、弟、「それこそ此の頃求め候へ、火もなくて湯のわく寶なれ。」と語るにぞ、兄瞻をつぶして金十枚にかふ。金を渡して後あらひてかくるにわかず。腹立しといへば、「其の儘水を入れ給はばわき候はん物、あらはせ給うたほどに、今からは湯わくまじき。」とて歸りぬ。又ある時馬を一疋かうてつなぐ、其の馬屋に金を二枚入れて置きけり。旦九郎來り馬はいづれよりと問ふ。弟申しける、「是れこそ世にためしなき名馬に候へ、三日に一度はかならず金を糞に仕り候。」又うそをつくとてしかる「馬のゐるあたりを御見せ候へ。」と、人をして見するに黄金あり。「今は疑ひなし、それにくれよ、其の價金子五十枚つかはさん。」とて買ひたり。馬屋の結構にしたるに、兩はうなにつながせ、今や／＼とまつに其の樣子なし。大いに瞋りて、旦九郎なまびはをぬくに、「いや／＼板の上につながれし故、心たがひてあり。其の後は中々きどくあるまじき。」とぞ申したる。是れよりうつけを旦九郎とは云ふなり。

○娘ひとりに婿三人と云ふ事は、昔富める人のむすめを持ちたりしが、ある時舟あそびに出でぬ。如何したりけん、娘ふなばたを踏みはづし水に落ち入りぬ。父母おどろき悲しみ、高札をうつやう、此の娘をたすけたらん者を必ず婿にせんとあり。占ひする者來り、いづくの程に其の姿ありと教ふ。又河

だちの上手一人来り、我とりあげんというて即ちいだきあげたり。されども息たえてなし。時に醫者来り藥をあたへ二度蘇りぬ。其の後卜人云ふ「我始め娘のあり處を云ひてあればこそ、取りあげたれ、聟にならん」と。又水練が云ふ「我抱きあげずんばなんとしてか蘇生すべき、我聟にならん。」又くすしいへらく「我藥をあたへずんば、爭で二度壽を保つべき、我聟にならん」と爭ひ、所の地頭に伺ひければ、批判左右なく濟まず。終には都にのぼり、多賀の豐後守に義をうけければ、「さる事あり、欲界に生をうくる者、凡そ三百六十種としるせる中に、人これが長たり、婚合の法形をまじふるにあり、しかる時は水練の者娘に身をそへ膚をふれたり。是れをこそ尤も聟にとるべき。」と掟し畢。

○丹後國與謝郡に、あさもがはの明神と申す神います。是れは昔浦島の翁の神になれるとなん云ひ傳へたる。

○或人云く、貫之が年比すみける家の跡は、萬里小路よりは北、富小路よりは東の角なり。

○京にて乘物をかき、あるひは庭にて働く男を、六尺とはなどいふならん。さる事候ふ。屋敷につけ家につけ、たゝみにつけ、一切竪横間をさだむるに、田舍のは一間を六尺にとる法なり。都のは間尺を六尺三寸にとつて一間とする法なり。されば亭主をば都六尺三寸の間にとり、つかはるゝ男をば田舍六尺の間にとる。其の故は主人たる人の心と下男の心と、物毎はるかに違ひて、まにあはぬ故に、

かの下人を六尺とはいふと云り。

一世話に鬼味噌と云ふはなんぞ。或山寺に修行底なき僧、老年まで久しく住せしが、かれ圓寂の後看坊をすうるに、一夜をあかして見れば跡なし。いくたりも右の如くなるまゝ、恐れて彼の寺に住せんといふ者なし。或時行脚の比丘來たるに、件の旨を語り聞かするに、即ち我ゐてみんといふ。あな傷はしや、又とられん事よとは思ひながら寺を渡しぬ。件の看坊しん／＼と坐す、更の後僧一人來れり。「そちは誰ぞ。」「我は此の前住なり。」と。「汝世を去つて程ありと聞く、如何なれば再來するぞ。」「我汝をあはれみ、一鉢の飯を與へん爲。」と。「不思議や亡魂の作法に終にきかず。」といふ。彼の靈「我は鬼にもなり、畜生乃至食物にも神通無礙なり。」とかたる。「さらば湯づけを出し、燒味噌をそへて振舞はれよ。」「やすき事。」と身を變じ、燒味噌となりしを口へ入れ、一嘗にしけり。其の後は彼の寺になにの祟りもなければ、案の外煩ひなく住みぬ。此のいはれにより、昔はおそろし左右に聞え、さもある下僧も奇特もえせぬものを、あれは鬼味噌ぢやと、一口にはいふよし。

○芋掘僧とは、いかなる因緣ありていふ詞ぞや。されば巨細あり。たとへばいづれの佛地にても、一寺一院と相續するほどの所には、或は山林、或は田村、分々に似合の資糧あり。又は校割の靈寶財祿あり。みなこれ供養三寶鳴二法鐘一勤二讀誦一大乘妙行解二第一義一爲レ導二六趣四生一也。爾をば四沙門

乃中、纔か外道比丘にても、因縁勝劣一師となり弟子となすべき法用なるを、末世のこの作法悉く背之、法器をば更にえらばず、唯我が好我が從子などいつて、其の類親をたづね出し、寺院を他人に誤りても、不讓を法とする儘、山の芋はつるをたゞしてこそほらるれば、芋掘僧といふならん。

○婆婆で見た彌次郎かともいはぬとは何ぞ。いにしころ佐渡の島に銀山出で來、人多く集まりぬ。其の時一人の聖ありて、十穀をたち禁戒をまほり、六時不退の稱名たゆる事なく、いき佛とはこれならん、參れや拜めやとて晝夜のわかちなく、男女袖をつらぬる中に、彌次郎といふ者、其の道場をはなれず給仕しけり。彼の聖、年月を經て後頼りに入定せんと披露す。各落涙し名殘を惜しむ。來る二十日をかぎり、時を定め山の原に大いなる穴をほり、法衣を著し入りすまし、外より土をよせ、かたく埋み畢んぬ。奇特なる行狀なりし。かたはらに沙汰するをきけば、かねほりを頼み、過分に物をとらせ、ぬけ道をほり置き、其の身は恙なく行ひうせたる、などいふ者もありけり。斯くて三年を過ぎ、彼の聖を信仰せし彌次郎越後に渡り、ある所にて件の聖にあひぬ。疑ふべくもなし。すなはち近くより、「そなたはそれではなきか。」聖「いやそちをば夢にも知らぬ。我もさいふ者でもなし。」と爭ふ。俗あらぬかに證據をひきしかる時、かの聖「げにも／＼よく思ひ合はすれば、婆婆で見た彌次郎か。」と申したりき。それより此の言葉はありといふ。

落書

○田中の眞宗とかや云ふ者、ちひさき茄子の茶入を所持し、けしからず祕藏して出しければ、

二服さへいらぬ茶入の生茄子あへて其の身の顔よごしかな

○さやの宗久といふ者、初花の茶入を持ちてゐたりしに、ある人三好松山殿をたのみて其の威光をかり見度きよし催しけるに、

もの知らぬ人のしわざか初花に松山風をふかせきぬるは

○信長公諸大名をよせたまひ、馬ぞろへ遊ばし、思ひ／＼の出立はなやかなりし風情にて、綺羅をみがきあたりをかゞやかせば、いにしへも例まれなる事と沙汰しあへり。即ち主上も簾中より叡覽なされし。

金銀をつかひすてたる馬ぞろへ將棊に似たるわうの見物

○信長公始めて京都に石垣の普請おほせつけられ、毎日石をひく音喧しかりければ、

花よりもだごの京とぞなりにけるけふも石々あすも石々

○信長公洛中に御普請の時、餘國よりも都へ方角ちかき故、江州の衆殊更苦勞あれば、

なまなれの鮓にも似たる近江衆石を重しと持たぬ日もなし

○攝津國高槻の城主たりし和田といふ侍、信長公御前世に越えて出頭がはなはだし。

信長のきては破る、京小袖わたが指し出て見られざりけり

○山門より三井寺を打ち破り、鐘を叡山へ取りし時、

三井寺の兒ははしたになりぬらん撞くべき鐘を山へ取られて

○美濃國にて土岐殿と齋藤山城守取りあひて、終に土岐殿方まけになりし頃、

ときはれとのりたてもせぬよの袴みのは破れて一布にぞなる

○信長公の御前にて、直に理を御すえしなされたりし公事あり。出頭人の馬丞といふを頼み、今一度對決のあるやうにと、馳走ぶりするを聞いて、

ぜにぐつわはめられけるか馬丞人畜生と是をいふなり

○秀吉公の御時、ならかしといふ事ありて、かしたる者もとを失墜せしうへに、猶放埒のはたらき罪科輕からずとて、再び黄金を出させ給へば、

奈良かしや此の天下殿に重取とにもかくにもねだれ人かな

○攝津國蟻岡の城を、信長公とりまきておはせしに、

君にひくあらきの弓の筈ちがひいるもいられぬ蟻岡の城

○越中の太守神保殿は、美濃の土岐殿の聟にてありし。其の御家を我意に任せて、ふるまふ作法みだりなりければ、

　神保が家は破れの窓しやうじみのうす紙のはり意見かな

○江州六角佐々木四郎と、三好家とどりあひ、鴨川まで出でらるれども、三好家つよくして、佐々木しりぞかれぬる時に、

　世の中をしら〳〵と言ひけれど鴨川までもしようていはなし

○伊勢の桑名にて、法華宗門の中、一致勝劣の争論出で来、所をさし日を定め、雙方對談の上に、兎やありけん、頭をくはせくんづころんづ勝負なかりつるが、勝劣方の僧、一致方の坊主のふぐりをしたゝかにしめければ、その痛み堪へがたきなど沙汰する刻、

　法門のその勝劣はしらねどもきんをしむるは一致あいわく

○紀州根ごろより、普光院御所へ言上し、覺鑁の大師號を望み、万疋千貫つみ参らんとまで申遣りつれども、頻りに高野山よりさゝへにて成就せざりしを、

　千貫でこざれどならぬ大師號御所はねごろに思しめせども

○紀伊國にて湯の川といふ侍、諸大夫になられたれば、

湯のかはが宮内の少輔になるならば蜜柑柑子は近衛關白

○宗長は江州にて進藤といふ武士の養子なり。生得は駿河島田鍛治の子なりしゆゑ、

引拔は新藤ごには似たれどもよく／＼みれば島田かぢなり

○山崎にて、上の殿へ下の殿の日記箱を取りておき、何と乞へども渡さず。後にはいさかひになる。宗鑑、

下の殿はつを放つておこひあれ上なる筥の下らぬはなし

○甲斐國武田信虎公の息女を、菊亭殿へ契約ありしが、いまだ聟入もなき先に、信虎公菊亭殿へおはしける時、

むこいりをまだせぬ先の舅いりきくていよりも武田入道

○三井寺に一山相談の事ありて、幾度も鐘をつき集會はあれども、つひに落着はなかりし。

山寺の春の談合來てみればよりあひの鐘に腹やへるらん

○諸行無常を、無常諸行と書きたる卒堵婆のわきに、

無常とはいかなる人の諸行ぞや外は恥かし内にたてておけ

○荒木攝津守鵜岡の城を退出の跡に、ありつる女房達をみな／＼車にてひかれ、信長公より御成敗の

○家康將軍に對し、石田治部少輔心替りつかまつり、關が原陣に驅け負け捕人となり、頭をはねられし時、雄長老、

大垣の陣の張の樣へだけにてはやまくれたるおぶのせうかな

○天正十八庚寅三月朔日、大相國秀吉公、小田原北條左京大夫氏直退治の爲、駿河に長陣ありし時、すその野にて曾我兄弟が乘りし馬に、水より外かふ物なしといひけるを、今身の上に聞えぬるとなげくをききて由己、

在陣をするがのふじの山よりも高ねにかふは馬のまめかな

○同じく三月二十九日山中の城を攻め落されたれば、其の勢ひに恐れ箱根足柄の城をあけのきけるに

山中をせむればおくる箱根山にげゝるも早きあしがらの敵

○西陣といふは絹屋のあまたある所なるが、一とせ黑舟わたらふ絲高直なる故、手前不如意なれば孝養のいとなみも調へがたし、さるにより、まづ暫くは月忌の僧衆もおはするなど申しあへる時、

西陣にいかなる敵のあるやらん鬨もあげけり旗もあげけり

○上京に誓願寺のありし時、事の惡緣によりて炎上せしが、戒光寺の釋迦堂をば借りて、假屋にせよやと毀ちとりて、彌陀を置きたりし時、前の山科殿、

釋迦むりに彌陀に御堂を取られけり阿難むさんや何とかせふと

○慶長十九年の冬、源將軍大坂の城へよせさせ給ふとき、日本六十餘州の軍兵一騎も殘らず出陣ある。本陣は天王寺の茶臼山にてありしを、何者やらん、

大將はみなもとうおの茶うす山ひきまはされぬ武士ぞなき

○後柏原院の御宇に、松木殿天氣にかなはせ給ひて、即ち儀同になさせ給ひければ、

權門にひきまはされてめでたやな松は茶臼のしん儀同殿

○駿河の今川殿を松の下の弟子にとり、誹諧稽古の時、雄長老、

今川がくゝりたてたる駿河鞠松の下ちかくよりてけられた

○越前朝倉どのに子息十二人あり。金吾は十二番目なり。四番目を小太郎といひ、五番目を五郎と云ふ。五人ばりをひかれしつよ弓なり。或時兄弟寄り合ひ給ひ、雙方の侍衆相撲をとるに小太郎方勝ちぬ。小太郎弟に向ひ、參りたり／＼のと名乘られし。五郎無念に思はれ、近々とより一刀に小太郎を切り殺されし。小太郎女房尼になりて後ゐこんやまず、人數をもよほし、五郎の館へおしよせ、つひに國に置かれざりし時、

越前にもりきれ二つ出で來たりあまくに太刀に五郎入道

昔能登太守畠山殿の不慮の取り合ひ出來、合戰のありつる陣のはり樣、一番に松浪、二番に小島、三番に梶と三段なりしが、先の松浪敗軍し、次の小島討たれにければ、先くづれたりとも、三番目の梶がすけたらんには、大事有るまいものをと沙汰せし時、

おき津舟小じまがさきにこぎみえしは松浪あらく梶よわきゆゑ

○美濃國土岐二郎は、齋藤山城守聟にてありしを、たばかりて害し參らせたれば、

とき世とて聟を殺すはみのをはりむかしはおさ田今は山しろ

○後陽成院御卽位の日をうけたまはり、聞く者市をなして參りたるが、晝より暮におよび、夜ふけても儀式ばかりに過ぎ時うつりければ、

暮るゝまでおしねやしたる御そくいひ世々の續目を違へじが爲

ふはとのる

○忿怒の前には、不動劍をひつさげて、降魔の儀をしめす事あり。さればにや昔五山の僧に、幸藏主とて兵法の道に達せし人あり。都にのぼる達者、みな一打二打うたぬはなかりしが、ある時奥山流の兵法者上洛しけり、例のごとく試合の日さだまりぬ。京中知るも知らぬも、ことごとく物見に出づるに、幸藏主は槍、兵法者は太刀にて向ふ。槍をさつとふりまはすを見て、其の儘太刀をなげすて間

訊しけり。「こは何事ぞや。」と問へば、「幸の槍先より火焰出でたり、活身の摩利支天なり、尊きに太刀をすつ。」といひければ、幸大いに悦喜し、みづからすゝめて、彼の兵法者に弟子どもあまたひきつけたり。のぜすまいた上手。

○仁物らしき男、朸の前後にたひを入れ擔ひ、たひは〳〵と賣りけるを、ある家の主呼び入れて、「けしからず寒き日なり、まづちと火にもあたり茶を飲みておとほりあれし、ちらと一目見しより、これはたゞならず、昔はさもありし御身なりしが、思はずも世におちぶれて、かかるわざをもし給ふにやと、涙をこぼし候ひぬ。」と、言ひければ、靜かに火にあたり、茶など飲みて、たちざまに大いなるたひを一つ、亭主が前に差し出したり。「こは何としたる事。」としんしやくしければ、「いやけふは心ざす先祖の賴朝の日なり。」

○始めは鍛冶にてありつる者、傍に鞠を好いてけたり。てんねんと器用ありければ、人々な褒めそやすにより、家職をすてて飛鳥井殿に出入りし、葛袴と沓をゆるされ、田舍へ下らんと催す時、知音の者意見し、「そちは生まれつきいつくしく、自然と殿上人の形あり、とてもの事に其の風を似せよ。」といふに同心し、五體つけの具をひた物しけり、すでに位らしき樣になりすましたると思ひ、ある所に行きたれば、人々かのあたまの逸興を見つけ不審しあへり。刀の中心にてやきたる故に、備前長船

祐定作といふあとあり。さすが俄になほされんよしもなければ、又もとの鍛冶になりぬる事よ。

○下部檢校叡山にて大衆集會の砌平家ありし。山法師をりのべ衣うすくして、恥をばえこそかくさゞりけれとあるを、いかに心の涼しかるらんとなほして語りけり。其の時大衆あつと感じ、平家過ぎて同音にほめつるを、大いに慢じ山を下りたるか、思ひの外俄に日の暮れぬるまゝ、燈のあるをたより宿をかりぬ。亭出でて挨拶し、即ち一句所望せしを、あなどりて、あそこゝ落しかたりける時に、亭主、

うぐひすの聲ばかりして一の谷平家はおちてきかれざりけり

此の歌を吟ずるまに、もとの如く天地あきらけし、是れは此の檢校自慢の心より、天狗の所爲なりとぞ。

○足利にての事なるに、鹽を／＼とよんで、いかにもいつくしく若き商人來れり。こざかしき學侶一人出合ひ言ひけるは、「たゞさへも道を二里三里とは、たやすく步行なりさうもなき、いうにそだちのすがたなるが、此のおもき物をもちては、何としてありかれるや。」など語り、時刻うつり、やう／＼かへらんとするとき、升に鹽をはかり僧にあたへぬ。「こはなんの故ぞ。」と問ふ。「親に泣きよりといへり、われならで誰とはん、次信が日なり、こゝろざしに參らする。」

○悴侍の妻あり、ふしぎに夫にはなれぬ。日頃かれが頼みし寺によせて、追善のいとなみをなせども、しか〴〵の事もなかりし。七日にあたる今日ゐはいのまへに參り、愁涙袖をしぼりけるに、住持出で合ひていはるゝやう、「冥途はきりもなくはれがましや、あらゆる大名小名のつきあひにて候に、一字をうけたる人の、挟箱を一つもたせぬ程なれば、身すぼらしく候と、たしかに經文に見えてあり」と示しければ、「いたはしや、なりがわるからうず。」とて、唯一つある挟箱をぞ施しける。

○壁に耳ありといふ事をわすれ、そんじようそれは中々人ではないといひ出しけるが、うしろを見れば其の仁ゐたり。肝をけして唯活佛ぢやといふ。そしらるゝ人ほむるを聞いて悦び、そのまゝ阿彌陀の印を結びたることとよ。

○奉公人のはてと覺しきが宿をかり、四方山の事をかたりつくしけり。亭はあて「いかさま唯の人とは見え候はず、もはや休み給へ、夜著を參らせんや。」といふ。「いやいかほどの野陣山陣をしつけ、せうぜう寒き事をば知らず、無用に」というて著いまゝいねけるが、夜ふくるに從ひ、ひた物さむし。「時に亭主々々是れの鼠には、足を洗はせたか」と問ふ。「いや左樣の事はなし。」と答ふ。「それならば、むしろを一二枚きせられよ、鼠がきた物をふまばさむからうずに。」

身ひとつは山の奥にもありぬべしすまぬこゝろぞおき所なき

○十許りなる娘の容顔美麗なるに、女房たち二三人打ち添ひてゐけるを人見つけ、「是れはこなたの御息女候や、さて／＼いつくしきはかりなき花の形は、名に聞きし楊貴妃李夫人もかくこそありつらめ」などほめければ、親父是れを聞いて、「されば此の娘はそのまゝ母の顔ぢや」と。

○ある人連歌の席に句を出し、けしからず慢じたる顔を見つけ、鼻かはいき天神とぶうて唾をつきければ、「あまりなつかれそ、社壇がゆるがに。」と申されし事は。

鈍副子

○鈍なる弟子齋に行き、檀那汁菜をとゝのへてもてなせども、あへて感ずる事もなし。坊主傳へ聞いて、「汝うつけたり、明眼論に云ふ、一日師壇百劫結縁一度述レ請師僧以二其壇那一如二親子一とも書かれたり。人の賞翫するをも知らず、むざとたまはる曲事ぞや、膳にむかひ箸を手に持ち、御造作などいひて食へ。」と指南せり。尤もと同じ明朝齋に行き、例のうつそりぞ、やき鹽許りにてよしとて膳をすゑけるに、教への如く弟子箸をきつと持ち、いふやう、「めしは御造作に、お汁ばかりがよう御座あらう物を。」と。

○小姓をおきて、試みに始めて茶をひかする、事の外あらし。是れはと叱りたる時、ぬと座を退り、「それはまづあらびきで御座る」と。「扨々汝は、日本にまた二人ともあるまいうつけや。」とあれば、

又きつと手をつき、「いや日本も廣う御座るほどに、お尋ねならばまだも御座らう。」と。

○日本一の鈍なる弟子が、師の噂をいふやう、「坊主のいつも色々の事をいうて叱らるゝ中に、近頃聞えぬ無理を三ついはるゝ。一つは先づおのれを、なんぼうの辛苦にて人にないたと仰せある、我が犬の子にてもあらばこそ、生得人の子にてあるを、人にないたとは何事ぞや。二つはいかほど氣をつくして經を教へし、その恩を仇に思ふとの折檻。これもいはるゝ所道理にてはあれども、其の習ひよみたる經を、一字もわれが覺えばこそ、みな忘れ果てたるまゝ、少しも恩とは思はぬなり。三つには寺屋敷資財雑具殘りなく、汝にとらするわと仰せあれども、これ又少しも恩とは思はぬ、おつかしいに、取つておかへりあらうまでよ。されば三つながら一つも坊主の道理はない。」と。

いだたきへ恩にておくふいはれありおんを忘るゝ人は人かは

○ある寺の院主に知音の人ありて、門前までおとづれいれけるを、弟子出でて見つけ、そのまゝ方丈に行き、「ものの御出でにて候。」といふ。院主大いに腹をたて、「ものとは誰が事ぞ、さてもうつけを盡す奴かな、いざわれ出でて見ん。」とて、窗よりそと覗きつくづく見るに、顔ばかり覺え、つひに名をばうち忘れ、弟子に向ひ、「誠にものぢやよ。」といへり。

○洛陽にて淨土宗の寺へ、ある尼公の參られ、一人の弟子をよび出し、「十念を受けたきよし披露して

たび候へ。」とありしかば、心得たるとて方丈に行き、「下京にて何といふ人の女人の參りにて。」と申しもあへぬに、長老はを出し「上臈とか女房とこそ申すべけれ、女人といふ事やある。」と大いに叱られければ、弟子の返答に、「其方は我に阿彌陀經を教へて、善男子善女人というて置いて、今は又さういはぬとは、一事兩樣なる事を。」など、それ〴〵にからかひて表へ出でける時、尼公赤面し、寄止や、機嫌のあしきをと、すぐ下向せんやと申されたれば、弟子いふ、「いや苦しうも候はず、あと女房ごとの出で入りで御座ある。」と。

○三井寺に貧しき僧ありしが、寺内の兒に思ひを寄せ、爲方なくあこがるれども、言ひよらん緣さへまれにて過ぎけるに、かのちごの後見の法師聞き附け、あはれみて先づせめて兒の言葉になりともかけたきまゝ、「いつの日の入相の頃、壺の內なる梅のもとに來りゐよ、今を春邊と花のかほばせを御覽ぜよかしなど、さそひ出でんする時、あれなる花の本のは何者ぞやと兒尋ねたまはば、梅法師で御ざあるといへ。」と教ふる。切なき志やとかんじ、行きてゐければ、案の如く伴ひ出でて、あれなるはと兒の問はれければ、「梅づけで御座ある。」と申したり。

　人ならばうきなやたたんさよふけて我が手枕にかよふ梅かか

○磨師にある小名の刀をあつらへ、程ふりてのち宿をとひよられければ、お日にかけんと持ち出でた

り。さつとぬき見る／＼、「さてこちあら下手や、あたら一腰をすてたよ。」と腹立し、小姓にわたさる。
亭主赤面しながら門送りして、彼の袂をひかへ、「殿様は私をさんざ／＼におほせ候が、下手がこれ
やうに大きな家をもつ物で御ざるかや。」
○ひたいかい雷震といふ觀音經の文を、何としても忘るれば、師匠餘りの事に弟子が額をつかまへ
て、こゝの事を思ひ出でよと敎ふるに、又忘れておのが額をとらへ、こゝがいたいしんと讀みし事、
申しふりたるどんふくすや。
○病癒えて後よろこび事の振舞あり、酒宴のなかばに、臺の物に鶴のつくりたるを取り上げ、鶴の舞を
見ばやなどはやされ、よきふりに舞ひ收めしを見、一瓶ぬけたるおかた立ちて、床にたてたる矢をと
り手に持ち、やまひを見ばやなどはやされ、又矢を一つとりそへ、二つの矢の根をつぎ合はせ、羽り
かたなを左右へなし、ながやまひを見ばやなど舞ひ納めし。
○うつけたりし坊主のかたへ、折ふし出入する農人ありし。道ゆきぶりに相逢ふ、見れば不淨をに
なへり。件の出家、「そちは骨折や、今より後かまへて田畠に糞をせんと思ふなり、其の代りにおれが
仁王經をとらせうぞよ。」
○いはんかたなき鈍なる弟子あり。檀那のあつまりて、茶うけなどある座敷に、年さんだんのあるは

常のならひなり。然るに彼の弟子、やゝもすれば、未だ三十の者をば四十と見損じ、五十許りの者をば、六十あまりと見そこなうて笑はるゝを、坊主聞き兼ね、「さてうつけに藥がないとはまことや、我ら人の年のふりたきはなし、誰をも若いといはんこそ本意ならめ、あなかしこ、そこつに人を年寄といふな。」と敎へられ、ある日彼の弟子使僧に行き、女房の子を抱きゐるを見附け、「此の御子息はいくつにてありや。」「是れはことしむまれ、かた子でおいりある。」と答へけり。弟子、「さてかたこには若く御座あるよ。」と。

○鈍なる男兵庫の町を通りけるに、黒犬の大いなるが出でて、したゝかに脛を喰らひけり。あら悲しやといふ聲聞きつけ、犬の主おひ散らしぬ。此の男爲方なく無心なる事に思ひ續け、尼が崎まで來りしが、黒き犬のこのあるを見附け、ひた物蹴つふみけるを、主人出合ひ、「これは癖者なり、なにの咎にさやうにはするぞ、打ち擲け。」と人あつまりたれば、「まつぴら御免候へ、兵庫で足を黒犬にくらはれたる、無念の腹をいんとて蹴た。」とこそ。

○塔頭の僧、途中より客をつれだち歸る。小僧出でて、「愛なる緣には蝨が候。」といふ。坊主目をたて、「其のやうな事を高くは言はぬ物ぞ。」と叱られし、かさねて立ち寄り、蝨と思ひしをしづかに見、坊主にむかひ、さゝやき、「蝨ではおりない、わたかみのおちたで御ざつた。」

しかるほど世をへつらはぬ者はなし貧なる者になほも近づく

○石州銀山にていふ事ぞとよ。常によりあひぬる者一人入道し、法名を芝恩とつく、友達に鈍なる男ありて、つひに芝恩といふ名をわすれ、お禪門〳〵と呼ぶ。禪門腹立し、「しをんといふ草あり、見られたことはなきか。」「いやまだ見ぬ。」と。「さらば見せん。」とてつれだち、ある人の前栽へ行き、しをんとしやがと花さきてありしを、これはしをん、是はしやがといふと教へ、此のしをんの花の名をよく覺りれば、我が名と同じことぞ、忘れたまふな。」と言ひ含めてかへりぬ。くだんのをとこ領掌しけるが、又二三日ありて後よりあひしとき、しをんをばうち忘れ、「さてもしやがお久しい。」と申したり。

○福は宿善の果なれば、鈍なる人にまゝたのしきあり。堺にてさる町人家を建てしが、藏にも居間にも對面所にも、唯九間四方のぬり屋一つつくり、戸口を都合一つあけけり。見る人わらひさんだんする。知音の者笑止がりて、此の大きなる家に出入口一つあらんは、なげに不覺のいたりなり、火事といひ、何はにつけ、せめて裏と表に二つなうてはかなはぬ事や。」といひければ、彼の亭主の返答に、「せんない意見や、我は一口さへあけまいと思うたもの。」夢庵、

いかなる罪のいまなくふらん

くちなしに咲くこそ花も悲しけれ

○小僧あり。小夜ふけて長棹をもち、庭をあなたこなたと振り廻る。坊主是れを見附け、「それは何事をするぞ。」と問ふ。「空の星がほしさに、打ち落さんとすれども落ちぬ。」と。「扨々鈍なるやつや、それ程作がなうてなる物か、そこから棹がとゞくまい、屋根へあがれ。」

お弟子はもと候へ、師匠の指南ありがたし。

星一つ見つけたる夜のうれしさは月にもまさる五月雨の空

○始めて奉公する者あり。お殿様、おわかう様、おかみさま、何にもおをつくる　主人かれに向ひむごとおい字をつけまい、聞きにくしとあり。此の後膳をする。跪きゐけるが、主の髭に飯粒つく。右の男、「殿さまのとがひに、だいつぶがついた。」と申しける。

○一番にかまへられたる聟殿、舅のかたへ始めて行きあたるを、友の教へけるやう、「初對面に物をいはずば、うつけとこそ思ふべけれ、相構へ何とぞ時宜をでかせよ。」心得たりとうけがひつるが、一言の挨拶もなし。既に座を立たんとする時、聟殿がいひ出すやう、「なにと舅殿は一抱へほどある鴫を、御覧じた事はおりないか。」「いや見たる事はおりない。」「私も見まるらせぬ。」と。いはぬはいふに勝るとやらん。

○うつけありける亭主の腰まはりへ、下司あやまちに水を滾しぬ。果せずこれを叱る。其の申し様「しきに腹がいたい。此の水は疊の上なればこそ苦しからね、又此の月が霜月なればこそ大事なけれ、このこぼれ物水なればこそあれ、若し疊がわが身で、此の月が師走で、此の水が油ならば、そも／＼よい物か、しはす油はかゝらぬ事といふなるに。」

○旅人寒夜の物うさに、古疊を一でふ所望してきせられ、

下にしき上にもきたる古だゝみ二條殿とや人の見るらん

○大客のあらんよしを舅聞き附け、俄に造作をする故、材木をえらばず、節穴おほしとて氣の毒に思へり。彼の娘たゞに教ふるやう「見舞にゆかれんにふしあなの事を申されば、短冊や色紙にて張りたまへといはれよ。」尤もに思ひ行く。案のごとくの時宜なりき。舅大いによろこび、此の年月婿なうつけといひつるはうそやと、其の後舅に腫物出來たり。又見舞に行き、見參らして「若し藥を知り給はぬや、唯腫物の上に短冊色紙をおしたまへ。」と。平家物語に書きたる平基盛公勢田山中に麥漆の指南と同じ。

○人くらひ犬のある處へは、何とも行かれぬなどかたりけるに、さる事あり。虎といふ字を手の内に書いて見すれば、くらはぬとをしふる。後犬を見虎といふ字を書きすまし、手をひろげ見せけるが、

何の爲んもなくほかとくうたり。悲しく思ひ、ある僧にかたりければ、「推したり、其の犬は一圓文盲にあつたものよ。」

〇京にてくちわきしろき男、ちと出家をなぶり、理窟につめてあそびたやと思ひつゝ、さかしき人に向ひ問ふ。「やすき事なり、をしへん、されば沙門にあうた時、お僧はいづくへといふべし。さだめて風にまかせてといはれんずる、其の時風なき時はいかんといへ、やがて閉口すべし。」「此のをしへを得、ある朝、東寺の門前にて出家に行き逢ふ。「お僧はいづくへ。」と問ふ。僧の返事に、「たゞうりの勘介が所へ齋に行く、なにぞ用ありや。」男とつてにはぐれ、「あらお僧は風におまかせないの。」と。

〇越中に非見の莊殿といふ大名あり、世にすぐれたるうつけなりし。母儀常にくやみ歎き給ひしが、ある時の見參に、「笑止や、そなたは内の者侮り、何事もいひたきまゝにいうて、道なき作法と聞く、ちと折ふしは歯をもぬき、折檻もあらば、さほどまではあるまじき物を。」と教訓あれば、心得たりとうけがひ、是非ともに一歯ぬかん物をとたくまれし。去る程に八朔の禮とて諸侍出仕ある。家老の人申す様、「今日の御祝儀千秋萬歲、ことに天氣能く。」といはふなかばに、彼の大名、「なにと御祝儀天氣もよしと、左右いひたきまゝにはいはせまいぞ。」

〇わかき男の婿入するといふに、知音の者意見し、かまへて、時宜を出かせ。心得たる由にて行きし

が、一圓言のはなしゝあまり本意なく思ひ、立ちさまに手をきつとつき、「此の中柱はこなたので御座あるか、どれからまゐりたるぞ。」

○田舎より主從二人始めて上洛し、京の町に逗留せし、休息の後見物に出づる。下人にむかひ「都はいづれも同様なる家作りなり。よくよく目じるしをせよ。」といひふくむ。心得たりと領承せしが、晩にのぞみ宿を知らず。主腹を立て叱る。返事に「いや門の柱に唾にて書附を、たしかに仕りしが、消えて見え候はず。其の上に猶念を入れ、屋根の上に鳶の一つありしを目附にしたりしが、それもいな事で見えぬ。」と。

○不斷光院の住持近衛殿へまゐられし時、三方を許すとあれば、其の後常に三方にて齋非時を給はれり。此の由三藐院殿聞召し給ひ、

かり初にゆるすといひし三方を不斷くはふはむえきなりけり

○筆者を頼み伊勢物語を寫させけるに、昔男と云ふを假名にむかし男と書き、かの字を落したり。主人見附け、最初の三字の内をさへおとされたるやと腹立する時、彼のかきて云ふ、「ひとつもの書きはかば、如何程も末にいや字の候はんを、たしに仕り候はん。」と。

無智之僧

○幼少より、つひに經におかうたる事もなかりし坊主、千部の經に座列するまゝ、よく案内知りたる人、そとおしへより、「そなたは何事をいうて、一座の役をば勤むるぞや」と。「されば」とよ、「一首歌をよみたるが、これを吟じて理をすますは、われ師匠に習ひて覺えたる文唯一つあり、いはゆる阿耨多羅三藐三菩提なり。此の外は無し」「其の歌は」と問はれてなん、

あのくたら三みやく三ぼだいこそ佛なれのこる文字ともまとなたてして

恥といふ事を知らぬ、あのくたらよみやされ。

○大般若を轉讀の施主あり。かたちばかりは出家の身、讀むべきかてはなけれど、いかやうにも座をはり、布施を得たき望みあるゆゑ、法衣をまとひ膝を組み、人々大般若波羅蜜多と高聲によめば、經をひろげおなじ調子にあげ、大だんな三藏ほつしあなか、ちやうたい物をもてきておいて、人に離依なきくわれやといへども、人はきかたんだけな。

○海邊の者山家に聟を持ち、いんしんに、蛸と辛螺と蛤と三色を持たせやりたり。其の文をよむ者もなく、ここいろを見しりたるもなし。文をば物しりの出家をたのみてきけやとて、わざと遠路を行きて見せければ、うちうなづきていふやう、「何もいんしんの物は無いか」といふにこそ、「ここいろまで候へ」と。「其の物をも見知らぬ儘、これへもちて參りたり」といへば、一目みんとて見れば、山賤ども猶

劣れり。されど口はかしこくて、文をひろげて婿殿へ申す、むすめの大切さに、龍王のへのこねこぎにして十許り、鬼のきくぶし二十許り、手ごろのつぶて百ばかり、三いろともに山海の珍物にとぞよみける。

此のみの果てにはなにとなるらん
海士の屋の軒より高き貝のから

○人ありて千部の經を執行せらる、施物は米二石なり。志の沙門は兼日より集會有るべき旨觸ありて、ある一村に本覺坊と、法藏坊とてあり。多寺の中に法藏坊は、法華八軸を空に誦する達者なり。本覺坊は妙法の二字をもおぼえず。此のふれをはりてより、本覺思ひたくむやう、二石の米をとりにがさんは不覺なるべし、所詮法藏坊をたのみ、我がむかうの座になほしおき、大衆まねをせんに仔細あらじと出仕をとげたり。かくて導師經をはじめければ、本覺よみけることば、法藏坊はおれを見る、おれは又法藏坊見るとよむに、少しも讀經にたがはず。さりながら經はやくおはりければ、導師磬をうちきると、本覺ひとり法藏坊といひけり。なんぞと返事あれば、山椒をまゐれといひし。

○同千部講讀の請狀まはりけるに、一文不知の經たつ坊あり、つかふ小者を松若といふに向ひて、「此の度の出仕生涯の大事とおぼゆるぞ、おのれねぶりをとゞめ、我がうしろの方にきゝゐるよ、も

しよぶに返事遲くば曲事ならん。」といひつけ、かくて大衆の席につらなり、讀經すでにはじまり、序品第一とつくるから、かの經だつ坊、「松若々々。」と如何にも靜かにいふ。連讀少しも違はざりしが、經しどろよみの時、例の磬をひしとうちきる。彼の坊が唯一人松若と讀みたり。松若やつと返事するに、「お湯のまう。」と。

○博奕にうちまけ窮方なき者、冬の暮髮を剃りて法師となり法華宗の寺に行き、座敷の掃除をも仕り候はんといふ時、「經をばおぼえたるや。」と問はれ、「なかなかの事。」とこたふ。さらばまづおきても見よとありけり。其の晩景檀那のもとより使者來り、明日は親の年忌なる條、僧衆十人にて一部經をつとめ給へとなり。彼のあたらし坊主、終夜工夫するに經をよむべきやうなし。我わかき時藥屋に奉公して、藥種の名をおぼえたり。これにて間をあはせんとおもひ、既に妙法蓮華經と始まりける時、その儘彼の人一くみ、桔梗、人參、續斷、白朮、干姜、木香、百部、黃蓮といひけるを、藥屋の亭主聽聞して、「あら有りがたや、われわれがうりかふ藥種は、みな法華經の肝文にてあるよな。」と、彼の坊主をおひて物をおくれりと。

○剃髮染衣の僧秘鍵をならふ。眞言は不思議なり、觀誦すれば除無明と教へけるに、いやそれはかたことさうなと疑ふ。大師の言葉これなり。そちは又なにとよまんや。彼の僧我はたゞ勸進すれば、

もえたもらうでまらうとなにしけり。

祝ひ過ぐるも異な者

○けしからず物毎にいはふ者ありて、與三郎といふ中間に、大晦日の晩いひをしへけるは、「今宵はいねよりとく宿にかへりやすみ、あすは早くおきて來り門をたゝけ、内よりたそやと問ふ時、福の神にて候とこたへよ、すなはち戸をあけて呼びいれん。」と、ねんごろに言ひ含めてのち、亭主は心にかけ、鷄のなくと同じやうにおきて門にまちゐるけり。案のごとく戸をたゝく。「たそ〳〵。」と問ふ。「いや與三郎。」と答ふる。無興ながら門をあけてより、そこらと火をともし若水を汲み、かんをすうれども、亭主おほりさきあしくて、さらに物いはず。中間ふしんにおもひ、つく〳〵思案しゐてよひにをしへし福の神をうちわすれ、やう〳〵酒をのむころにおもひ出し、仰天し膳をあけ座敷を立ちさまに、「さらば福の神で御座る、おいとま申し参らする。」といふた。

○和泉の堺に寺門といふ在所あり。一人の百姓名を好みて、びんばふとつきたり。又一人は東とつく。其の所の地頭、元日にもしびんばふ禮始めにや來らんといやがり、出でうかがひて氏神へ参りしが、下向する道にて、東に行き逢うたり。「東はどちへ。」「そなたより出て参る。」と言ふ。「あら氣がゝりや。」と歸りければ、又びんばふに行き逢へり。「貧乏はどちへ。」「殿へまゐる。」と申しけることよ。忌むといひ

ふ字は、おのが心とかきたり。

　びんばふの神も出雲に行くならば十月ばかり物は思はじ

○ある女房のもとにつかはるゝ下司の名を、福といふ有りき。大歳のゆふべ下司にむかひ、「そちは宵から宿へゆきてやすみ、あすははやくおききたり、門をたゝけ。」といひふくめやりぬ。夜もふけすぎて、五更におよべどもきたらず。されども門をたゝくおとせり。すはやと思ひ誰ぞといふに返事なし。あまりにたへかねて「福かやれ。」といひければ「いや與三郎でござる。何しにふくであらう。福はよひからよそへいた物を。」とぞつぶやきける。雄長老、

　鬼は内福をばそとへ出すともとし一つうゝないせずもがな

也足の判に與あり。されどもたとひ年は一二よらせ候とも、福をそとへ出さん事、いかゞと申すべくや、一笑々々。

○貧乏神とわりなき知音の者ありしが、ちと酒にゑひて壁にもたれ、ゐねぶりしけるみぎり、肩から物が何とも知れずどうと落ちけり。目をさまし手をあはせ、やれ／＼嬉しい事や、此の年月かたにゐたる貧ばふ殿が、今日といふ今日おちて、我が身をはなれたよと合點せしが、たれいふとも知れず、「あまりおほくよりあひ、そちがゐねぶりするあひだ、油びやうしを踏むとてとりはづし、ひとりお

ちにき、いまだはてはないぞ。」といへり。なにと心にいはうても笑止や。雄長老、

　大きなる柹うちはがな二三ぼんびんばふ神をあふぎいなさん

也足の判、柹團扇は貧乏神のつくといへば、二三本にてあふぐ事いかゞ、彌增しに長居すべくや。

○ある者正月三日の夜、夢におもひよらず、我が身に癩瘡いできたるていを見、目さめつく〴〵案ずるやう、かれをば物よしといふなれば、仕合なにはに物よからうはしかやと、その分にてよかりしを、猶うたてしき事に思ひ續け、うらかたする人の許に行き、「過ぎにし夢を合はされよ。」といへば、書物取り出し算などおき、あげくに、「過ぎし夜の夢のやう定かに語り給へ。」といふ。さる事よとありのまゝつげければ、卜人つく〴〵思案する體にて、のち、「たゞ養生をめされよ、いき身ぢや程に、ほんはあるまい。」と判じける。

○商人の常に祈念を頼みて行き通ふ寺あり。四國のかたへくだる朝、「今日舟の出づるまゝ暇乞に參りたる。」由いひければ、院主の口上「とくより田舍への下向とききて、祈禱の旨ゆるがせなし、今朝もとくから起き、尊勝陀羅尼をいかうよみたるぞなう。」

○六十におよぶ僧ありしが、歲の暮に風を少しひきければ、元日にてもあれ、たき火によせ、せなかをあぶらんには過ぎじと思案し、ひとりある小僧にいひつけて、火をたかせけり。小僧、「みられぬ今

日のせなかあぶりや、正月としわがごとき者共の、互にあそびくらふ日なるにとて、腹を立つ／＼、薪をくべ、ひたもの火をふきければ、坊主のあたまよりきる物にいたり、ことゞくはいにまぶさり。老僧つく／＼見て氣にかゝり、小僧にいはうて、はいかいの發句をせんとあれば、なか／＼よからんといふ時、

　小僧あがふくとくわれにふきかけて

小僧やがてわきを仕らんとて、

　坊主を見ればはひにこそなれ

とつけたり。いらぬいはひごとや。

○有馬の湯に入りける者、宿主と語るついでに、「鷄は羽音をばた／＼として、とつてかうと鳴くといふは、まことかやといふ者ありしに、宿主、いやとよ、ありまの鷄は一向よそのとかはりて、元日の曉より歳のくれの夜あけまで、はおとをかさ／＼として、かつけかうと鳴くなり。」とぞ。身を思ふから道なき事を。

○信濃國より出づるなるからむしとも、又はまをともいふ麻を、せんとつくるところあり。其の一村に行きかゝり、商人一夜の歳をこゆるに、所のならひにや、元日に宿主のいふことば、「あきましや、

ことしは子供におくれて」と、三度こそ申したれ。おもひ内にある事を、色外にいはふことばぞや。

○行き暮れて旅人立ち寄り一夜の宿をかりし。亭主出で合ひ物語りの序に、「客は如何なる藝能か候ぞ」「ちと歌道を心得てあり。」と。「さらば幸ひの仕合なり。子をあまた持ちたるにいはうて、發句を沙汰あれかし。」とのぞむ時、

　むす子たちかしらかたかれいしほとけ

○窮貧の者ありて五つ六つなる子にむかひ、「あす元日の明方に、われ／＼錢を手にもち、目にあててゐる時、あれとゝの錢のなかからあを見出いて御座あるわといへ。」と、ねんごろに教へおき、あけの日錢を目にあて、むすこが方を見れども、いとけなければわすれはて、夢にだもおもひ出さず。あまりたへかね、ゆびにて錢のまねをし、しきりに、「千代松よ、ゆうべからをしへたる事をいへ。」といふとき、ちとかたちをおもひ出して、「とゝのあなの中から目見だいてや。」と言うたる。そのとし秘所に行く。

○江州の坂本に侍あり。元日の夜、湖をひきかたむけてのむと夢見る。目さめて思ふ、水は方圓の器にしたがふなれば、おもふに思ふ事かなはんといふつげなるかやと。此の心うらに一とよかりし物を、わが身はひえの山風にふかれ、行く道とほく土御門を尋ね、占方の上手といふにたちよりぬれば、清

明流の博士、「まづ夢の相をおかたりあれ、其の言句にたより吉凶を申さん」と。件の樣をありの儘なり。時支干をかんがへ調子をはかり、書籍をまいつ開いつして、あげくに、まづ案じても御覽ぜよ、寒夜には水を一口二口のむだにも、腹中におちたるは習ひぞかし、いはんや湖水をみなのむと見れば、ときに養生なされよ。大器腹を煩ひ給ふ事あらん」と申し合へり。無興なり。

○和泉國に大島といふ在所あり。其の莊屋が總領の子六歲なり。こゆみに小矢をとゝのへもたせけるが、元日の朝矢を一つはなし俵にいつけて、「とゝよ〳〵俵をゆうた。」と。親大いによろこびて、「さてさてめでたや、ことしは尺のほたけもながく實のりて、をさむる俵のかず〳〵をいはん事よ。」と祝ひぬ。もはやこれにておきもせで、「今一度矢を射て見せよ。」と望み侍り。むすこほめられ、心よげに又射たりしが、今度は門の戸にあたれり。「とゝよあれ見よ、戸をゆうたわ。」とぞ教へける。射たといふ事、わらはべの詞にゆうたといふにや。

○商人元日に惠方より持ち來る若夷を、むかへんと思ひまちゐるたれば、あんのごとく歲德の方よりうる者來れり。家の内へ呼び入れ、うけんといふに、をりしも其の朝小雨ふり、版にすりたる紙ぬれけり。賣主一枚取つて見て、「是れはめでたい。」懷へ入れ、又取つて見ては懷へ入れ、やうやくみなになる時分、ちとぬれたる一枚あるを、「是れはなほめでたう候。」というてわたしたり。うくる者と

りて見、「このゑびすはぬれて候わ」といひければ、「それこそそちでおあぶりあれ」と。

○春の始めの朝より、千秋萬歳とも又鳥追ともいふかや、家毎にありきて慶賀をうたふに、千町萬町の鳥追が參つたというて、ある門の內へ入らんとしければ、戶のわきに子をうみて人におそるゝ犬ありしが、不圖おかうすねをしたゝかくらひけるまゝ、あらたのしやといふを、いたさに「あらかなしや」と。

○元三をいはひ、膳部とりあつめ、目出たいなといろ／＼したゝめてすわりぬ。杯あなたこなたとめぐるなかば、十ばかりなる總領、ふと座を立ち、親の汁に殘れる鯛の頭をとりて、手がひの犬をよび、「これはとゝのかしらぞくらへ」といふに、七つ八つなるむすめのはしり行き、母のくひ殘せる魚の骨をもちて出で、「これはかゝの骨を食へ。」といひし。無興なり。

○こびたる禪門山林に行き暮れて、一宿せり。亭坊向顏の後、「其方はいづれの道をか心にかけ給ふや」と問はれ、「打成一片歌の道に嗜みあり。」と。「さあらば我が身老衰せり、松鶴の齡によそへ目出たう發句を」とありしに、暫く案じて後、

此の寺の坊主を松につるすかな

○町人の物いはひするあり。大晦日に薪をかひ、庭なる棚につませけるが、なにとやらん崩れさうな

り。亭主あやふき事に思ひ、下主にむかひて、「もし五ヶ日の内に、おれなる薪が崩れば、崩るゝといふな、薪がめでたうなるといへ。」と教へけるが、果して元三のかんをいはふ時崩れ懸れり。亭主「こなう与二郎、薪がめでたうなるわ。」と呼ぶ。与二郎はしりきたり「任せておけ、与二郎がやらう間は、何ともあれ、めでたうはなすまいぞ。」と。

○大晦日に六つになるむすこをよびかけ「元日の朝わが頭巾を手に持ちたらば、とゝのあれともかうら頭巾を持たればといへ。」と教へおきて、明朝頭巾を手に持ち、かぶりたきをこらへ、おもこおし見せければ、むすこ「とゝはともこもさうと仰せあつたが、ともかうともえおしやらぬの。」と。

○陸奥の者を中間に置きたり。亭主大晦日に「明天早朝には、何事をも祝言許りいふべし。あやまつて不吉の儀いはぬやうに。」とて教へける。件の男手水をつかひさし「餅ぶんだしなされよ、焼き申さう。」といふ。亭大きに腹を立て、いろりのきはにありし木をうちつけたり。中間かきねて「愛な旦那のなげきしなさるゝわの。」

○人にすぐれて物祝ふ侍「今夜の夢に、梟が家の内へ飛び入りたると見たわ。」とあれば、被官の候うて、「それは目出たし、鬼は外へ、ふくろは内へと、申しならはして候ほどに。」といへば、侍大いに悦喜し、小袖を一重ねかはしけり。如何にも鈍なる傍輩是れを見、我にも夢物語せられよかし、

氣にあふやうにいうて、小袖をとらん物をと思ひゐつるが、彼の主人ある朝、「又此のゆうべわれがあたま落つる／＼と夢見たわ。」とかたるに、彼の鈍なる男ふと出でて、「それこそ目出たきまさ夢／＼。」とぞ申しける。

○尾州に米野與兵衛といふ武士あり、たゞ事ならず物忌する人なりし。熱田大明神を信仰し、折々參詣の度、先へ侍をはしらせ、右の方に不吉の物あれば、右へ向きてたんほゝといふ。すなはち彼の人顔を左にし行き、左の方に不吉の物あれば、左へむきてたんほゝといふ。すなはち彼の人かほを右にふりて行く、奇妙の仕合なりし。ある時の參りに、道に鴈のいきたるがえ立たずしてゐたり。すなはち右の與兵衛、急度鴈をつかまへ、「是れはかりがねいやなもの、かしかねなればよいが。」又とりまはし「是れはがんすまぬ物いふ／＼し、唯もていて捨てよ。」といへる、をかしや。

○鍛冶屋の土佐といひて西洞院にありし、物いはふ事人に過ぎたり。年の暮に孫の七八なるを近づけ「元日に我が顔を見、日本のかなとこには、皆ぢいのかなとこといへ。」と、懇に教へし。あくる朝、「やれ松千代昨日の事は。」と問ふ時、「日本のかなしみは、みな爺の悲しみや。」といへり。

醒睡笑　卷之二

名津希親方

〇いろはをも知らぬこざかしき俗あり。ある東堂の座下に參り、「われ／＼年もなかばに更け、若名にてあらんもいかゞに候。何とぞ左衞門か右衞門と、名をつきたき。」よし望みしかば、東堂、「大方それのつきたいと思ひよりたるを、いうて聞かせよ。」とあれば、「さらば日本左衞門とつきたき」よし申しけり。東堂あざわらつて、「さやうの大きなる名はあぶらし過ぎて、愚僧まで人の褒貶せんずるはいかに。」とあれば、くだんの男、「いやあまり大きなる名とは存じ候はず、とう左衞門とつきたるさへ御座候わ。」

〇豐前國の太守長岡越中守殿、京より壁ぬりの上手を一人つれて下向あり。過分に知行をも給はりしかば仕合比類なし。とてもの義に名字を下され、名をつき替へ度き旨懇に申しければ、「心得たり、一段のぞみ神妙なり、かくこそあるべけれ、つけてやらん。」とて、數寄藁朝臣鏝次下地壁右衞門とつ〻奇妙奇妙。

〇人ありて沙門の家に入り、ほつたいして後戒名をつけん事をこふ。住寺の僧問ふ「なんぢが心にのぞめる意旨は無きかや。」「たゞ私のねがひには、ねうだうとつきたう御座ある。」「そも何といふ仔細ぞや。」「さん候、我が親は法華宗にて候。また母は浄土宗にてありし程に、ねう法蓮華經のねうの字と、なまいだうぶだうの字をとりあはせてねうだうだ。」と。

〇雄長老の小者に鳥をさす上手あり。前大樹御耳にたちたまし、内々尊意の旨長老承りおよび申され、「忝き儀なり、様子たゞ聞き罷り出よ、名をば松若といふなる、此の儘にてはいかゞ。」と伺ふ。「さらば伯耆になれとありければ、それは餘り分に過ぎてと恐れたり。「大事なし、幸ひ柄さしはうきよ。」

〇河内國の内山のねぎといふところに、さのみ事もかかで世を送る百姓ありしが、われとわが名を畠山右兵衛佐とつき、まんじくすみ、いやおうの返答をうけければ、人皆をかしき者にいひなし、褒貶はすれども、誰ありて無益と教ふる者もなかりしに、親類の者ども聞き兼ね、あたりに物よみ讀みたる僧のありけるをたのみ、右兵衛佐と引合はせ、つねづね出入をいたしければ、庭にて逢ふにはたあざるになほくなるいはれにや、僧の教訓とあればそむかず、たふとみあへり。よきみぎりを見合はせて、僧のいはれけるは、「そちの名を畠山右兵衛佐といへば、何とやらんいひにくかる程に、下をうへになして、山畠助兵衛といふてはいかゞあらうず。」と直しければ、ともかくも、あしきことはよも

宣はじとて合點しけり。

○かたのごとく人のもてはやす侍ありしが、いろはよりほかには、假名書の文をさへ讀む事なし。ある時地下人參りて、我が名をかへたきよし望みければ、れいのいろはをかたはらにおきて、「い兵衞とつけうかや。いやそれならば、ろ兵衞とやつけん、いやは兵衞、に兵衞、ほ兵衞。」とつくれども、「いやたゞ今すこし長うて、はねた名をつきたう御座ある。」と申したれば、「さらばへとち左衞門とつけうず。」といへり。

○心うきたる侍のひくわんに、五十にあまるものあり、名を彌十郎とぞいひける。あるとき主たる人、かの彌十郎をよび出し、「そちは年よりも餘りに名がわかいほどに、けふからは右馬丞になれや。」とありし時、ゑみを含み、いひ／＼わらひければ、「さやつ右馬丞とつけたれば、いさみてはやいなゝいたり。」と。

○細川右馬丞殿へ松月の參られたれば、七夕の馬といふ題を出して、

　七夕にかしつると見えて木幡山けふはかちにてこゆる旅人

○東西わきまへざるをとこ、年も六十にちかづきければ、棄恩入無爲の心ざしを思ひより、菩提をたのむ寺にまうで、しきりに法體の望みをとげんとす。住持の僧すなはちかみをそりて、名をば法漸と

つけたり。法とはのり、のりにそくいひのこと、ぜんとはやうやく、やうやくはかうやくの事と、道すがらおぼえ家にかへれば、人あまたあつまり法名を問ふに、法漸と答ふ。法の字のよみはのりを忘れてそくいひと、漸の字のよみはやうやくを忘れ、しばし工夫し、かうやくとこそ申しけれ。

○佐渡に本覺坊といふ山伏あり。治部卿とて弟子をもちしが、ある年名代と號し峯入させけり。雲に臥し岩を枕の難行事終り、本國に歸りぬ。師の本覺對面の時、治部卿申しけるやう「今度は先達懸を加へられ、名を替へ大夫になされて候。」と語りければ、「なにと大夫になつた、曲事なり、われさへさやうに大なる名をばつかぬに、中々のことなり、さりながら本山にて、つきたる名をよばぬも又いかゞなる條、たゞ中夫になれ。」とぞなほしける。

○いかにも文盲なる者の、さすが時々寺に出入するあり。茶をもらひて飲むたよりに、「ずんぎりといふ字は何と書きまするぞや。」直切と書くと教ふる。「さらば書いてたまはれ。」と所望し、火打袋に入れて持ちぬ。齡ふりてかしらを剃り、自ら名を道すんと呼ぶ。聞く人皆、「珍らしや、つひに聞きたる事もない名。」といふて、「すんの字は。」と問ふ。「直切のすんの字をさへ知らいで、物かきだてはおやめあれ。」と、けつくに。

○禪門になりたる者にむかひ、「名をば道見といふべし。」人ありてよみを問はば、道はみち、見はみる

とよむと答へよ。」「かしこまりて候、ありがたし、見るといふ物は、そのまゝひじきに似たる物の事で御ざあるほどに、中々忘れは仕まい。」といひしに、ある人「そちが名は道はなんぞといふが、見は。」と問へば、見はひじき。

○ふとおどけたる禪門、法名をこふに、「われらはうかとしたるよびごゑはいやで御座ある、二つながらはねた名をつけてたまはれ。」とのぞむ。心得たりと順欽とつけたり。「順はめぐる、欽は欽明天皇の欽の字ぞ。」と教へければ、手をあはせて、「それは王様のおなの字なり。又用明天皇と申すも候か。」と問ふ。「中々それも同じ帝王にてあるぞ。」「とつくと合點仕たる。」とてかへりぬ。人、順欽の二字を問ふ。「順はめぐるなり、欽は用明天皇の欽の字よ。」すりちがうた。

○年八旬にあまり、はじめて男子をまうけ、悦びかぎりなし。ある東堂のもとにつれ行き、「優曇華の花まち得たる心ち候、此の子に名をつけてたび候へかし。」と申しければ、やすき事として千代もとつけらる。老父なゝめならずに思ひ、やどにかへり、あたりの人をまねき、酒などもりながしけり。その座の中にまた東堂へ出で入る者ありて、千代もとつけられし仔細を如何にと問ひし時、「さればとよ八十にあまりての子なれば、ぬしが子ではあるまい、たゞ人の子にてあらんと思ひ、さてちよもとはつけたよ。業平の歌に、

世の中にさらぬ別れのなくもがなちよもと祈る人の子の爲
とあるわ。」と返事なり。

○才智のたらざるをばかへり見ず、高慢したる體の者、和尚の席に詣でて、切りに齋名をこふとき、「なんぢ何事ぞ、修行底の徳功ありや。」とのたまへば、「さん候、東坡山谷のやうにこそあるまじく候へ、およそ詩聯句の道にはくらからず。」と申す。和尚にくき心とやおぼしけん、「めでたうは、さらば東坡の坡と山谷の谷をとりあはせ、坡谷齋とよばん。」となん。

○又東堂にむかひ、「それがし若年より心にかけ、碁、將棊、連歌、弓法の道を心得てさふらふまゝ、その旨を工夫ありて、齋名を與へたまへ。」と乞ふ。僧ほめて、「人に一徳ある事まれなり。それならば唯四徳齋といはん。」

いやな齋名の。

○名字の讃歎する時ある者のいふ、「昔より今に公家には草や木の名をつき給ふ事や。」「なにと。」「すすき殿、松の木殿、竹の内殿、藪殿、葉室殿、柳原殿など。」「いやまだある。」「誰ぞ。」ととへば、「とうざんせう殿とこそ。」

○傍より申しけるは、「お公家衆は鳥獸の名をこそつかせ給へ。まづ烏丸殿、鷲尾殿、鷹司殿、猪

熊殿。」といひければ、又そばの者「まだあり。」「たれぞや。」「萬里のこうじ殿の。」

○小姓の名をかけがねとつけて呼ぶ人あり。なんのゆゑぞやと主に問ひければ、「唯の時は我がまへにゐるやうなるが、少しなりとも用のあるときなれば、はづすといふ心なり。」と。

○相撲とりあり、雄長老のもとに出でて、なにとぞ名と名字をつけて給れと望みしかば、「荒磯浪助。」ついでに名乗をこふ時、「堅苔。」と。

貴人之行跡

○信長公に對し、公方御謀叛の時節、御出馬ありて上京放火なされし事ありし後、連一撿校御前に候うて、「今度御陣洛中のさわぎ、上下おぢ恐れたる事、前代未聞。」と申し上げければ、「さあらうずる。扨その恐れたるやうすは。」と仰せあれば、「されば上京に火かゝると見て、二條に候ひし者の妻、まづ我が子をさへ連れてのけんと思ひ、三つ四つなる子をせなかにおひ、走りふためき、四條の橋のもとまで逃げきたり、あまりくるしく、ちと子をおろしてやすまんと思ひ、地の上にだうとおいて見ければ、石臼にてぞ候ひける。」

○護明僧正の母上幼少にてわかれ、つひにあはぬをうらみの歌となん。

春雨のをやみもはてぬこはいかにふりすてられて濡るゝ袖かな

○紹巴のかたへ烏丸殿其の外公家達の御入ありて、樹木など御覧あれば、桃林のもとに人のなりをまね、弓と矢をもたせたるおほし。烏丸殿「あれはなにの用心ぞや。」「されば鳶のきてはなり物をあらす威しなり。」と申されたれば、烏丸殿「鳶かや、其の次のものの用心ではないか。」と、時の興にはあいらしやと人みな申せし。

○濃州のたいねんといふ人、徹書記年頭の祝儀に参られ、土産を懐よりとり出し、上らるゝ。取りて見給ひければ、

　ことしよりなししほしの二心うすくなりせば國ぞをさまらん

千金の携へにもまされりと褒美ありし、尤も奇なるかな。

○太閤の御時、二徳といふ者別して御氣に入りたり。ある朝生鶴の汁を食はせよとあれば、愛宕精進をいたす、下されまじきと申し上ぐる。「己がしゆつな、何事をいのる。」と。「私はたゞ太閤樣の御宿願に候。」「何事をいのるぞ。」「臆病にならせらるゝやうに守らせられよ。」と。「臆病でよからん事は。」「さればあまり命しらずに、鐵砲のさきへも構はせ給はねば、若しあたりて果てさせられては、私になにことならうと存じて。」と申し上げければ、さもあらんとの御氣色なりし。

　慈悲の目ににくしと思ふことはなし咎あるに猶哀れなりけり

ともあれば、天下の主に似合ひたりとや申さん。

○大名の世にすぐれて物見なる大鬚をもちたまへるあり。あまりに鬚をまんじ、来るほどの者に、「我がひげをばなにといふぞ。」と問ひたまふ。「たゞ世上に殿様のおひげを見るものごとに、から物と申さぬ者は御座ない。」と申しあへり。大名うちゑませたまひ、「げに誰もさいふよ。」と、ひげをなでくして、「そこなる者こえよ。」とまねかせたまひ、身ちかく寄せさゝやきて、みづからひげをとらへ、「弓矢八幡ぞ、日本物ぢや。」

○河内國に交野といふところあり。かた野の御狩とかけるこれなり。彼の領主に大塚彦兵衛とかやいうて、あたりまで崇敬の人ありき。宗祇と入魂他にことなり。卯月の始めつかた、祇公たちより給ひ休息のほど、ありしいろ〳〵風流の物語に時うつりて、「なにと祇公はいまだ郭公のはつ音をば聞き給はぬや。」「いな夢にだもおとづれず。」とあり。大塚、「さらばわれ發句を仕りなかせん。」とて、

　なけやなけわが領内の郭公

とあれば祇公の脇に、

　孫子をつれてなけ時鳥

第三をする人なし、「とてもの事にさた候へ。」とあれば、また祇公、

とにかくに御意にしたがへ郭公

時にあたり人の心をやぶらんは、興さめて見えぬべし。祇公のあいさついたされ候かな。

○かたちことに痩せくろみて渡らせたまふお大名ありしが、近習の侍にむかはせたまひ、「予が顔が猿に似たと人みないふと聞いたが、眞か、うそか。」臣うけたまはりて、「これは勿體なき御諚に候。たれやの人さやうの事をば申し上げけるぞ、世上には只猿が顔が殿様に似たとこそ申し候へ。」大名聞き給ひて、「ゆゝしくも申したり。さこそは侍らんず。」とて、いさゝかも憤りなかりしは、下劣の申しならはす、大名は大耳なれや。

○少年にまなびざれば老後に知らずといへり。貴人とあるはなさけなけれども、我が意にまかせそだておこなふ故、大略は文字言句にうとき人まゝ有り。然るあひだ、さる大名の直筆にて、連書を廻さるる事あり。わかき侍のもちありき、返書をあけながら、「さて今度の御使に罷り出でてこそ肝をつぶし候へ、日頃存じにかはり、あれやうにこなたの殿に、人のおぢひろめくことは御座ない。」と申しけり。「さて何というておそるゝぞ。」と問はれしかば、「其の義あり、こなたの文をひらきては、そのまゝあつこはいで〳〵と、さき〴〵にて感ぜられた程に。」といへば、さぞあらんとばかりなりしも、大名に似合ひてあり。

○大相國御前に二德かしこまりぬ。「いかなれば汝は、此のほど見えざりしぞ。」と御諚ある。されば九世の戸の文殊へ參れといふ告により、參詣仕りたる由申し上ぐる。「なにと文殊にあうたるか。」と御尋ねあり。「中々お目にかゝつてお言傳が御座ある。」「何とあるぞ、言上せよ。」とあれば、「二德めに目かけてたもれ、とゝさまかゝ樣。」と申しければ、そのまゝ落涙ありとなり。

かくてこそ神は正直のかうべに宿らせ給はんずれ。唯大人はうかとしたる體にて、色々の事をいはせ聞き、其のよきを行ひ惡しきをすて給はんが肝要なり。時の威に恐れ、たまたまも御氣に入る事許りこそ申さんずれ、國のため人のためによき道は申さぬなり。大臣重レ祿不レ諫、小臣畏レ罪不レ敢言、下情不二上通一此患大也。と後漢書にあり。

雲はみなはらひはてたる秋風を松に殘して月を見るかな

といふ歌吟じつゝ、太田道灌つねにいへるやら、勝つて甲の緒をしめて候よ。

○大名のもとへ客あり。振舞に湯漬出でたり。其の席へ又客あり。それにも膳をすゑたり。又客來あり。膳を出せとあれども、つひに出しかぬる時、物まかなふ者をよび出し、「何とて手間もいらぬ事のおそきや、湯を得わかさぬか。」とはたぬかるゝ時、手をつかねて、「湯は御座るが、づけが御座ない。」と申したるにぞ、どつと笑ひになりにける。

賤

○脾のぬけたる仁にえびをふるまひけるが、赤きを見て、「これはうまれつきか、又朱にてぬりたる物か。」と問ふ。「生得はいろが青けれど、かまにていりてあかうなる。」といふを合點しるけり。ある侍の馬にのりたる先へ二間まなか柄の朱槍、二十本許りもちたる中間どものはしるを見、手を打つて、「さても世にひろし、きどくなる事や。」と感ずる。「なにをそなたは感ずるや。」と問ひたれば、「其の事よ。いまの槍の柄の色は火をたいてもいたものぢやが、あれ程ながい鍋がようあつた事や。」と。

三月盡を　　雄長老

春の日は長槍なれど篠の葉のひと夜ばかりになれる石つき

也足の判に、さゝの葉槍石づきになれる、三月の名殘よくいひつゞけられたり。作においては吉光にこそ。

○美濃國立政寺の老僧に天瑞といふありき。始めて京へのぼらんと用意するを見、人指南するやう、「京は物のそらねをいふ處ぞ、たとへば一錢にうるべきをば十錢といふ、其の心得をしたがよい。」とをしへたり。「それていの事をばぬかるまいぞ。」とうけこひ、やう〳〵都にのぼり祇園あたりにて、もと空腹にやおもひけん、餅を出したる棚によりて、「此の餅いくら。」と問ふ。「一つ一文」といふ。天瑞ふく

やく合點し、「一文とはそらねおや、たゞくはう。」

　　夜から起きてほねををり、物のいりたるもちをたゞまゐらせう仔細はなし

○座頭の出居にやどをかりて、いねたるをうちわすれ、よびも出さず、つきたる餅のあたゝかなるを家内の人ばかりくふ座敷へ、

　　餅つくと目にはさやかに見えねども杵の音にぞ驚かれぬる

○夜ふけ三更のをはり、奈良の都に火事出來す。ある家主いそぎ二階にあがり火もとを問ふ。鄰の者みな橋本のかどより三間目よといふ。それは我が姉の許なりと肝をつぶしそのまゝはしると思ひ、だうどおちて腰をうちをりたり。日を經わづらふ。人みまひたれば、「かまへて此の後になにと大切なる人の家が燒くるとも、二階からすぐにお走りあるな、おつるにすうだ。」

　　恐るべし用心もせでくやむなよ火ごと盜人さては後の世　　最明寺時頼禪門

○ある人風呂に入りてゐけるが、俄に顏色かはり、「あら苦しや、ふな心がある。」といふて吐逆する。「こは何事ぞ、海はなし船はなし、異な病や。」と不審しければ、「さればよ只今是れへ入られたる大ひげの男、此の程のりし船の船頭に、よく似たと思うてあればそのまゝ醉うた。」と。

○堺の正法寺に惠雲とてけしからず犬におそるゝ坊主あり。珠旭といふ寺僧とつれだち邏齋に出でし

が、途中にゑのこあるを見附け、そのまゝにぐる。珠旭彼の僧をとらへて、「あれは犬ではない、ゑのこにてあるぞ、われとつれだち通れ。」といへば、「いやとよ、子があればおやがある物。」といふ〳〵逃げてかへりごとは。

○藤五郎とてこざかしき者と、專十郎とてうつけと、ともに田舎の者、在京するに同じ宿なり。二人つれだち講堂の風呂に入らんとす。藤五郎此のほど專十郎がうつけををかしく見つけ、さいはひの事や、小風呂にてあたまをはらんとたくみ構へて、「專十郎、京の習ひに、風呂に入るものはかならずあたまをはるぞ、腹をたつるを田舎人といふ、はられてもこらふるが都人ぞ。」といひ教へ、小風呂にともなひ入れ、思ふさま目と鼻の間をはりけり。專十郎いふ、「藤五郎はやくはせたわ。」と。「沙汰するな沙汰するな。」とて、又一つはりてけり。「藤五郎又くはせたわ。」と。專十郎思ふ、我ばかりはられて、歸らんは本意なしと案じ、老人のよぼ〳〵と入る者をまちて、おづ〳〵一つはりたれば、彼のおひて大いに腹を立ち、「いづくのうつけめぞ、是非はりかへさん。」とわめく時、專十郎いふやう、「藤五郎いかいるなか者があるわ、初心ものぢや。」と。

風呂たきのわが身はすゝになりはてて人の垢のみ落すものかな

○下手なる長談義の席に、よはひ五十にあまる女房かたびらをかつき、聽衆みな〳〵立ち去れども、

つひに一人立たず居たり。長老高座よりかんじてほめんとおもへる刻、彼の女房、唯今日こそあたるかほにて見あげ、「昨日の長老のまだ御座あるわ。」と。

うつとりがふたりある。

○利根をよそにあづけたる亭主、なまじひに小便當にて、使ふ者のあまたあれども、うつとりにし、あごおきなどする者なし。或時中間の名を呼ぶまではなく、われは寢てゐながら、夜はほのぼのとあかさかやと舞ひければ、內の者きく／＼、待てしばし、待てしばし、夜はまだ深きぞ、しぼむは花の陰なりけりと。よい返答の。

○或人錢をうづむ時、かまへて人の目には蛇に見えて、我が見る時ばかり錢になれよといふを、內の者聞き居て、錢をほりてとりかへ、蛇を入れて置きたり。件の亭主後に掘りて見れば蛇有り、「やれおれぢや、やれ見忘れたか。」と、幾度もなのりつるこそ聞き事なれ。

○今春禪風毎朝の看經怠慢なし。ある朝艮方にむかひ、手を合はせ數珠をもみ、そのもの／＼しと許りにて、神の名も佛の名も、更に出でざりしかば、側にある者、「春日大明神か。」と。「それ／＼、其れを春日々々。」と。是れは健忘とて大智の上にもある病なり。あやまりにあらざれども、時にあたりては、うつとりのやうにて此の部に入る。

○ある長老の高座にて諷誦をよみをはり、施主の高悦といふ二字の内、一字よみを忘れ施主高々と何遍もいひて、あげくに、施主高よろこぶといはれしも、健忘の病なるべし。

○ある湯に入りたる者いふ、「此の湯あつくてたまられず。かうの物を早くもち来れ。」「何の用に。」と問へば、「飯のゆのあつき時、かうの物にてまはせばぬるうなる程に。」

ほしひのかうの物といふ題にて、

義經の命にかはる繼信は今もほしひのかうのものかな

○ちと利口になき二十餘りの總領あり。父これをさそひ外面に出でて遊覽す。折ふし頃は五月のすゑ澤邊に眞薦しげりあひたるを見、「親おや人、此のちまきの木に實はいづるかや。」と。

○男子一人あり。親の弔ひとて神子を請じ口よせする時に、神子、「親人は鮒になり水にあそぶぞ、心安く思へ。」と。さらばとて池を掘り、鮒をたくさんに放し、毎日食を投げあはれむ事年久し。朋友よりあふ度に、汁にせよかしとすゝむれども嘗てゆるさず。かかりしが、主人をうつけと見なし、あるとき推して鮒をとり、汁にするさへをかしきに、子にむかひ、「まづ汁をすうて見よ。」といふに、うけとり、「あつたら親おや人に、しほがないこと申すことは。」

○うつけらしき友達どものよりあひ、おのれ／＼が妻のうはさをかたる。なかに一人いひけるは、「我

が女房は手きいて、所帶ようて、すがたいつくしく、愛敬あり、いはんかたなくおほゆれども、とかく心が短慮にて、月々に一度二度われをたゝくにくたびれた。」又ひとりの男も、「それ〳〵われが子持もそしる事は努々とないが、ともすれば頭を杖にてきするにあきはてた。」今一人がいひけるは、「とかく女房にたゝかるゝは、日本一のうつけ者ぢや、さて〳〵そちどもはほれ者や。」とわらふ時、先の二人、「何卒女に叩かれぬ身のもちやうがあるかや。」「中々祕事がある、知りたる者があるまい。」というて、揚句に、「はきものはかずに逃げたがよい。」と。

○わきに出づる大夫、樂屋にて目に佛をうしなひ、物をたづね廻る風情あり。人みな不審し、「なにが見えぬぞ、とも〳〵たづね見ん。」といへども、いやちと物がと祕しよして言はず。あり〳〵てのち、「唯今爰におきたるゑぼしが無い。」と。「そちがあたまにきて居るわ。」と、わらふ時にござ〳〵り見て、「實にけんにようもない所にあつたよ。」

○振舞の汁に大いに見事なる筍出でたり。人みな、「大竹にならんものを、むざと食ひ捨てんはをしい。」など沙汰しければ、さるうつけ、「いや竹は大事もない、大木になり、ひき物につかふべき松茸をさへくふほどに。」

落ち行く河の末も知られず

筍は本よりふしのあらはれて

○蒲生飛驒殿所勞すでに一大事なるとて、人々あつまり氣をのみ居たりし中に、うつとり二人頭をあはせさゝやきけるは、「せめて飛州のことぶき、三年つゝがなかれかし。」と歎きけるが、一人いふ、「よき毒をとゝのへてあげたい事ぢや。」「それはなにとしたる分別ぞや。」「されば、たかい毒をのめば當座に死なず、三年してしぬといふほどに。」

○京の町にて、人あまた二階にあそび居けるが、目藥はノヽといふ聲を聞き、其の座にありしうつとりふと立ち、目くすし殿と呼び寄せ、「一こじそれから申しうけう。」と。上瞼したまぶたを、我が手にて開きまちけり。目くすし、それまで屆く目はうをもたぬ。時に手を合はせ、「療治を申したい。」と。

○龜はいかほどいくる物ぞ。萬年いくるといふ。分別ありがほの人龜の子をとらへて、「今からかうて見ん物を。」と言ふ。かたはらの者あざわらつて、「命は槿花の露のごとし、たとひ長壽をたもつも百歳をいでず。萬年の命をなんとして心みんや。」といへば、「げにもわろう思案したよ。」と。

○道行ぶりにむかうより來る者を見れば、百八の數珠をくびにかけ、高野笠の樣なるをきてありく者あり。うつけものこれを見附け、手をうつてかんずる。「そなたがきたる笠は事の外大きや、何としてそのじゆずをば、うなじにかけられた。」と問ふ。「いやこれはまづ數珠をくびにかけて後に、笠をきて

候。」というたれば、「とかく物をばきかいでは。」と。

○三好中納言殿へ、むかし甲を持ちてまゐり、見せ参らせたる事あり。「是れは異な物や、あまり甲の鉢大いなり。」ほど褒貶の時、ちと鈍なる客人手に取り見て、「段々結構に御座ある、めしなかれてよからん。」と申す。「いらぬ物を何にせうぞ。」と仰せあれば、「唯常住甲にさしられよ。」と。

○盗人におひて、「これはどちらの方よりいかていの者のしわざぞ、いかさま内より引手ありや。」と種々算段ある所へ、こざかしき者ふと来りて、「此の盗人に入りたる者こそ、我がよう知つた〳〵。」といひけるほどに、「なに者ぞ聞かせてたべ。」とあながちに尋ねければ、そとさゝやきていふやう、「此の盗人はものがほしさにはひりたり。」と。

こざかしき人、数寄に行き路地へ入りたれば、植ゑたる竹の先を包みたるが何本もあり。つくづくく見て、「あら奇特や〳〵。」と感ずる。相客ふしんに思ひ、「何事やらん。」と問うたれば、「其の事よ、あれほど長い竹のさきへかゝる様子あつたが不思議ぢや。」

○思ふどち四五人いざなひて清水へまうでしが、茶屋に腰かけながらひたもの餅を喰ふ。をりから一人俄にいひいだしけるは、「やれ〳〵頬がすくみ、口のあかれぬやまひが出たわ。」とてかうべをさげ、難儀なるさまなりしかば、人みな肝をけし、こはいかなる事ぞとうかゞひ見けるに、編笠をきながら

謝を喰はんとせし故なり。篳篥の緒を解き、頬をすまいて「いかゞあるや。」と問ふに、彼の男しばらく思案して、「秘事はまつけおかや。」と。

○十人許りつれだちて、北野へ夜ぶすまに参詣しけり。二十五日の聚集なれば、おしおされ下向する道すがら夜もはやかにあけぬ。友達の中に一人腰のまはりを見れば、脇指のさやばかりに刀をそへてさしたり。「こは何としたぞ。」といふに、きもをつぶし、さやを抜き、ふいて見つたゝいて見つすれどもなし。揚句にいふ事は、「おれなればこそ鞘を取られぬ。」

○あとたゝふだのありしが、人にむかひて、「われは日本一の事をたゝみだいたわ。」といふ。何事をかと問ふに、「されば臼に米を搗くを見るに、勿論したへさがる杵はやくにたつが、上へあがる杵がいたづらなり、所詮上にも臼をかいさまにつり、米をいれて搗かば両ともに米しろみ、杵のあげさげそつになるまいと、思案したり。」といひはてぬに、「扨つりさげたる臼に米のたまれやうは。」と問へば、「そこそこに其の思案はせなんだに。」

○摂籙の時亭主出でて、「なにも不調法に候ゆゑ、そさうにおやれといたいた。」といふ時、あいさつの人客をとりたはし、「まことにこれよりほか、おやれとてなされやうは御座あるまい。」と。

うまいしからぬ者いかゞしたりけん、取り外して井にはまりし事あり。人こぞり梯子などさげ、「早く

上れ／＼といふに、我は一世の面目なうしなうた、上りても人間はなるまい、これからすぐに高野へのぼる。」と。

○石州に板持といふ侍あり。このかたのことくなる大名なり。されどもうつけ比類なし。ある時西浄に行き、「やれへびがくひついたわ。」と、高聲にわめかるゝ。人みなあわてゝ行けば、木履にて陰嚢をはさへたり。

第一種も平等だうりと聞えて侍り。

○件の板持馬にのり坂をのぼりける時、胸懸ひたもの下れば、鞍と馬の頭との間大いに延びたり。「やれ勿怪が出來たわ。」とよばはる。郎等ども何事やと尋ぬれば、「俄に馬の首が長うなつたわ。」と。

○同じく板持かたへ客あり。家のおとなの若狹守出で合ひて座敷に請じ、「主人は他行に候。」ともてなし、よきに相計らふなかば、ふと障子をあけ、次から頰を叩いて、「若狹よ／＼われはるすの分ぞ。」と。

とらへて置かんやうもあるまい。

○都一條あたりにて、中間夜に入りねいり居ける間に、ちやくと長刀をとりたり。目さめ肝を消し、殿を呼び出しいふやう、「事の外盗人がはやる體に候、刀の用心をめされよ。」「まづおのれがもちたる

長刀を失はぬやうにせよ。」「されば其の長刀をとくにとられて、それに仰天し參りて申す事よ。」との。

○ある者饂飩の出たる席に、かたの如くたまはり、揚句にいふ、「方々にて實ばかりを下さるれども、終に此の花を見た事は御座ない、こなたにならではあるまい、とてもの思ひでに見參らせたい。」といふ。「何事をいふぞや。」と問へば、「誰も知りて申すは、うどんげのはな。」と。

○京にて盜人にあうたと興さめがほし、鄰家の者あつまり居たる處へ、沼の藤六立ち寄り、「何が失せた。」と問ふ。「鍋が見えぬ。」といふに、「其のとりては我が知りたる。」といふ。扨々聞きたやと立ち出でけり。手招きして亭主を傍によびのけ、「これはていど公家がたの御内の者がとつたぞ。」「なにとて。」「昔からなべとり公家とてあるほどに。」

○七月風流を、他鄕にかくるの太郎左衞門といふ、地下の年寄なれば、彼が許に集まりならしけり。狂言をする者、うつけたる土民に、「此のゑぼし風流に入る物ぞ、そちに渡す。」といひをしへ、卽ち出居におきぬ。かくて一兩日も過ぎ、風流をかくるみちみちも、ゑぼしはあるかと問ふに、中々あると答ふ。唯今狂言に出る時ゑぼしをこひければ、太郎左衞門殿のでゐにあるとの返事は。

何も時の筈にあはぬを、太郎左衞門がでゐのゑぼしとぞ。

○昔千代とて十四五にてうつけたる子あり。門より走せ來り、「かゝよ／＼錢をひろうた。」といふ。母

が、「ようひろうた、其の錢はどこにあるぞ。」「いやひろひごとはひろうたが又おといたわ。」

正體なく身をもつものは、岩千代が拾錢とやいはん。

吝　太　郎

〇人ありて無心の申し事なれど、はれがましき處に出で候條、貴所の綾の小袖を、ことのほかお借しあれと文をやりたれば、返事に、やすき事の御用なれど、それへ小袖を借したらば、人の聞きて我をあやかしといはん、また貴所をもあやかりとや申さんなれば、態と參らせぬとこそかきたりけれ、

〇和泉一國、德政のゆきて、貧なるものはくつろぎたるといふを、一路、

德政をやりひつかけてつく〴〵と思へば物をかりの世間

〇すぐれてしはき者のたま〱得たる客あり。何をがなと思ひしも在鄕の風情なれば、心許なやなどといふ處へ、豆腐は〱と賣りに來れり。亭主、「豆腐を買はん、さりながら小豆の豆腐か。」「いやいや、より大豆ので候」と。「それならば買ふまい、めづらしうあるまいほどに。」と。

亭主の口上作意あるやうにて、とかくきたなし。

人性欲レ平　嗜欲害レ之と。淮南子にも書きたり。又蜷川新左衞門親當が歌に、

紫の色よりもこき世の中のよくには恥をかきつばたかな

○家主朝食を喰ふ處へ、常によりあふ人きたりぬ。「なにとめしははや過ぎたるか。」と問ふに、「いまだしらず。」「あらお頼もしや。」とてかまはず。また人來る時、「めしは喰はれぬか。」と問ふ。「はや過ぎたり。」といふ。「あらおこゝろやすや。」

とかくくれまいぢや。

君子に三の費えあり。飲食その中にあらず。幼うしてまなびて老いて忘るゝ、これ一つの費え。君に功ありて輕く背く、これ二つの費え。久しくまじはりて中絶す、これ三つの費え。

○三河國に宗惠といふて有德なるものあり。生涯のあひだいかなる煩ひあれども、つひに藥を一度のまず。年至極し既にいまはの時、知音の人竹田の牛黃圓をあはせあたへんといふに、すこしも口をあかず、齒をくひしばり居たる時に、こざかしく「此の牛黃圓、錢の出る藥にてなし、たゞぞ〳〵。」というて聞かせたれば、口をがばとあき、飲みけりとなん。彼の國の左譃ことばに、宗惠が牛黃圓でただぢやといひけるはこれ故ぞや。

○ある寺の住持弟子にいひつけぬるやう「客あらんたびわすれざれ。まづ杯を出しては愚僧が手の置き處を見よ、額にあらば上の酒、胸をさすらば中の酒、膝をたゝかば下の酒、此の掟をたがへ事なかれ。」と示す。一度や二度こそあらめ、人皆後は見知りたりしに、さきらぬだんな參詣する。例のごと

く「酒を一つ申せや。」とて膝を叩きしかば、だん〳〵手をつきて、「とても御酒をたまはらば、額をなでてくだされいでこそ。」

○わが門に立ち出でて遊びゐければ、ふと知音の者の通るに見参したり。「やれめづらしや立ち寄りたまへ。」ととむる。「嬉しくもあひたり、ちといそぐ用のありて行く、此の度は許し給へ。」といへども、「さりとはたまの事なり、ふるまはずによられよや。」と、しきりにとゞめしかば、去りがたくて立ち寄りし。かくて待てども〳〵茶をも出さず、日も暮れかゝり目もくらうなる程なれば、客腹立し、「人をうつけ者に仕なしたるわ。」といふに、「さればこそ、われは始めよりふるまはずに寄れというたわ。」とて、まはとずとのあひだに句を切りたるぞをかしき。

○客来るに亭出でて、「飯はあれども麦飯ぢやほどに、嫌であらうず。」といふ。客は、「生得むぎ飯が好きぢや、麦飯ならば三里も行きてくはう。」といふ。さらばとてふるまひけり。又ある時件の人来る。「そちは麦飯がすきぢやほどに、米の飯はあれども出さぬ。」といふ。「いや米の飯ならば五里行かう。」とて又食うた。

○美濃國にてある侍の内に、丹波助太郎とて大慾心のいたづら者あり。誰にても目下たる人といへば、ねだれて物を取る者なり。あるとき在郷にて百姓、助太郎がありくを見附け肝を消し、いかに

も隱れんとしけるを、「そこなるはどこの者ぞ。」と問ふ。「たゞ地下の百姓。」と答ふ。その儘助太郎、かれに禮を百姓といふや、思ひもよらず、せめて二百姓とよ。」とぞまふとはれける。

○伊勢の桑名に喜藏庵とて、いかにもしにい坊主のありし。たまさかに賓客の來れり。對面の後眠藏に入りて再びいでず。客不思議に思ひ、そこらあたり尋ねるついでに、めんざうを見られたれば、脇指をぬき、百つなぎたる錢緡の口にあてて居けり。「こは何事ぞ。」と問はれしかば、「さればに候、此の百錢の口をきらうか、さらずば腹をきらうか、其の思案を仕る。」と申しあへり。

○ある醫者の親子つれだつて貴人の前に侍りしが、子にて候十四五歳なる者、大名の御座あるまはりにありし脇指ののしつけを取りて見、ひたものほめければ、親がいひけるやう、「さやうにお腰の物などをむざとほめぬものぞよ。大名はひよくと下さるゝ事がある物ぢやに。」と。

○若衆あり。念者にむかひて、「今夜の夢に、鷄のひよこを一つ、金にて造りわれにたびたると見たこ」とぞかたられける。「さて／＼われも只今の夢に、其のごとくなる物を參らせたれば、いやといふて、それよりやがてお返しありたと見たことよ。」

○雨ふる日のさびしさに、よしある方に尋ね行き、上戸の二人よりあひ、しめ／＼とはなしども、時すぐれど、さらに杯の噂もなければ、客やうすを見きりいふ、「貴所の酒でも我が酒でもなうて、大酒

がしてあそびたいもの。」と。

○殊更からひさき土工李に古酒を送るとて、

　天の原ふる酒見ればかすかなるかさもりのふたやがてつきかも

○念者が若衆にむかひて、「眞實そなたをいとほしい。」といひければ、若衆の言葉に、「にの字をそへいはでいとしくはぜ。」と。返答に、「さやうの事を聞けば戀がさつ。」と。

○紀州根來に小谷の西原と云ふ人、かたの如く有德なりし。中間おかんとする時、內の者にいひわたすやう、「給分をばいかほどねぎりて定むるよ、日に三度の食物はほしいほどくはせん。」と、かたく約束をばしながら、一向左はなく、けぎやういかにもかんそに、ひもじさやるせなし。案に相違したるむね訴訟しければ、「さればこそ始めより食はほしい程と定めたわ、腹一はいくはせうとはいはなんだ。」と。

　いづれ身をもつ人の工夫はそともくづがない。

　吉野川その水上をたづぬれば檜原が雫横の下露

○貧僧ありて弟子まゝにすれば、案の外おほく酒をとりよする。所詮今よりは錢二十には、ゆび二つあたまにあげんと定めけり。ある時指二つ鼻のわきにあてて見する。振舞過ぎて問ふ。「いかなれば今

日の酒はおほかりつる。」と。「今日のは二十にてなし。其の故ははなの中にして、ゆび二つを両にあてられた程に、はなを十文になし、三十がとりふせたるわの。」

○濃州の岐阜に不動院とて眞言宗の老僧あり。正月の菓子に國の名物なる枝柹三つすゑて出し、其の分にて毎年時宜調へぬるを、おどけ者よく見知りて、餘りにしは言働きをよく見、例の菓子出でける時、「あら珍らしや賞翫申さん。」と、一つならず二つまでくひけり。院主は苦々しき事に思はれ、「あのていならばみなくはれん、さらば愚僧も相伴仕らう。」と、取りてくはれける心の内ぞをかしき。

客退出のあとに、せめてもとをひいたと。

○我等は雑炊嫌ひなりと常にいふ者あり。晩がた雑炊半ばへ来る。「ちと申さんすれどお嫌ひなるまゝ是非なし。」とあれば、「なにと此の雑炊に胡椒はいらぬか。」「いやいらぬ。」「それならばちとたべう。」と。

○有錢の家主あり。夏六月下旬の頃、遊山翫水の歸りに、我が門の下を見れば、黒犬のゆたかに肥えたるが、餘念もなく四足を伸ばしたるを見附け、主人の語るを聞けば「けなりの黒犬や、夏来を蟲のくらふも知らいで。」と。

賢 だ て

○ぬからぬ顔したる男、大名の許へ參りつゝ、「何とて久しく見えなんだぞ。」手をついて、「此の一兩月は頓欬に取り紛れ不參仕り候。」と申し上げし。友達と座を出づるに、「そなたは咳氣をこそ煩ひつれ、ありのまゝ申さずして、いらぬ病の名をいひつる事よ。」「いや咳氣は初心に誰も知りたり、ちとこばして、てんかんといはいでは。」

○古道三洛中歩行の折節、ある棚の傍に、靑磁の香爐おもしろきあり。立ち寄り見てうつけたるふりに、「此のかうろんいくらぞ。」と問はれければ、内より、「なにとはねても銀一枚。」と。

○和泉國に鹽穴といふ侍あり。馬上より錢のおちたるありと見附け、馬をとめ中間に、「あれなる物をとりて來れ。」と。中間とりあげ、「是れは佛の錢で御座ある。」と。「我も佛の錢とは見たれ、されども馬がおそるゝ程に、それにとらせた。」

○出家の樣かへて武士になりたるが、馬にのり遊行する道に、何やらん珍らしく、赤漆にて塗りたる物ありと見附け、小姓を招き取り寄せけるに、小姓わたしさまに、「これは伊勢海老にて候。」と申したるに、「そなた體さへ知りたるいせえびを、我が知らいでならうか、これは朱のさしやうの珍らしさに見るよ。」と。

朱をまぜて漆ぬるでのもみぢばはまづ秋風にまけてあるらん　雄長老

○日本第一の智者と額を打つて諸國行脚の僧あり。小喝食かれに向ひ、土の上に一文字を書き、此の訓をこふ。種々によむ、終に當らず。喝食土の上に一文字は王にてあり、汝愚と。

しる故をば知らぬといはで醜さはよくしりたるを忘れたる顔

○ある僧小者を一人つれて錢湯に行き、帶ときふたあきて、頭巾かつきながら小風呂に入りぬ。常に何事も利口をいふがにくさに、小者も見ぬふりし、二風呂めに「頭巾をとり給はで。」といひければ、騒がぬていに、あたまをさぐりて、「もはやとらうかな。」と。

○人の親の大事にわづらふ時、針立の上手とてよび來る。針立すなはち天突の穴に針をさす。息女あまたまはりにゐて見る内に、氣色かはる。「父親の顔の色か變りたるわ。」と、はしたなく泣くを見て、針立目を見出し、「何事にむざと泣くぞ。」と誡め、針をぬくと同時に、「さあ泣け。」といふ。わつと泣く紛れに出でて逃げたり。

○目醫者あり。其の身の目はくさりてゐながら、目藥は天下一なりと自慢し、「一度さゝばすなはちあ、二度さゝばあけら切る。」となど廣言せしを、扨そなたの目に何とて治らぬぞ、といへば、「されば我が藥妙なればこそ頰先にて止めたれ、さなくば頤までもくさりなん。」と。

○老父あり。唯さへかすむ目もとの暮がたに、二階よりおりんとする。下にすこし居ける客人ふと

思ひ、ひたちのいんぎんに請じけり。後に、「私で候。」と申せば、「それとは始めより我も知りたれど、汝がやうなる公界知らずには、ちと仕附を教へんとて、それにいうたよ。」と。

○花見の興のかへるさもたそがれ時になりぬ。道のほとりに人のたちたる姿ありければ、頭を下げ手を合はせて禮をする。伴の者、「あれは石塔なり。」といへば、彼の人いふ、「當世はあれ體の人にも禮をしたがよい。」と。

○力はさのみなうて、手のきいたるをたのみにし、相撲を好く男あり。又手をとる心はすこしもなくて、唯力のあるをうでにし、相撲を好む坊主あり。雙方名乗り合ひ、僧と俗といくたびとれども、力のつよきにより手を役に立てず、坊主かたんとはしければ、俗腹を立ち、見物のおほき時、負けてのきさまに高々と聲をあげ、「いかほどの坊主ともすまふとりたるが、あの入道ほど鮓くさいやつにあうた事がない。」と、惡口許りに勝ちしをかしさよ。

○秦始皇の代に天竺より僧渡る。御門、「是れはいかなる者ぞ。」僧云ふ、「釋迦牟尼佛の弟子なり、佛法を傳へん爲渡れり。」と申せば、御門、「其の姿あやし、かみかぶろにて衣の體違へり、佛とは何者ぞ、怪しきものなり、返すべからず、人屋にこめよ。」と閉ぢ込めておく。此の僧、「惡王に逢うて悲しきめを見る、我が本師釋迦滅後なりとも見給ふらん、助け給へ。」と念ずるに、釋迦丈六紫磨金の光を放ち

空より來り、獄門を踏み破りて僧を取り去り給ひぬ。ついでに多くの盜人皆逃げ去りぬ。此の由を申すに、帝おぢおそれ給ひけりとなん。

其の時わたらんとしける佛法、世くだりて漢の代に渡りけるとぞ。是れは始皇のかしこだてによつてなり。

○秀次關白殿より遊行上人へ遣はし給ふ。

上人は霞の衣きりの數珠あまけはなれぬそら念佛かな

返歌、

水鳥は水に入りても羽もぬれず海の魚とて鹽もしまばや

秀吉太閤この由聞召して、秀次の御もてあつかひ更に詮なき作法やと御噂ありしが、はたして上人には一宇建立ありてつかはされし。今の法國寺これなり。

名僧となのらずとても善知識身をふくにこそ人は秋風

○二條院和歌好ませおはしましける時、岡崎の三位御侍の歌讀にてさふらはれけるに、此の聞え高きによりて、清輔朝臣めされて殿上にさぶらひけり。いみじき面目なりけるを、或時の御會に清輔いづれの山とか、このもかのもといふ事をよまれたりければ、三位これを難じていはく、「つくば山こそこのもかのもとはよめ、大方山毎にいふべきにあらず。」と難ぜられければ、清輔申していはく、「つくば

山までは申すべきならず、河などにもよみ侍るべき事こそ。」と呟きければ、三位あざわらひて「高歌奉れ。」と申されけるに、清輔のいはく、「大井川の詞に躬恒が序かける時、大井川のこのもかのもとかける事、正しく侍るものを。」といひたりければ、諸人口を閉ぢて止みにけり。あながちに物をば難ずまじき事なり。

○革草鞋を穿きて歩くもの、あやまりに足を蹴破り、ことの外血の流るゝを見、「笑止やいかに。」といふものあれば、「いや苦しからず、昔より革緒に塗る血とある程に。」「扨もいやいや。」と人々ほめければ、我もほめられんはやすき事なりとたくみ、足をやぶり血を流す。「何としてぞ。」と人の問ふ時、「いや是れは大事なし、昔もいろはにほへとゝある程に。」

醒睡笑　卷之三

文字知り顔

○或人小姓をかすなぎ／＼と呼びて使はるゝ。客不審に思ひ其の故を尋ねければ、「さる事あり、春長と書けり、かすは春日のかす、なぎは長刀のなぎよ。」と。

○元三に利口なる人禮に来れり。亭坊智徳なきゆゑ、こびたる顔に仕なしたがら、對面を遂げ祝儀を述べ、「さらばこそ煮餅を参らうか、やく餅を参らうか」と問ふ。客たゞ「煮餅を給はらん」と。さて膳を据ゑ齋進を出し強ひける時、客「未だ持餅が候。」と。無理に一つ盛りければ、「あら咳病や。」と。

○振舞なかばに亭主、「鹽打大豆々々々々。」と呼びければ、鹽打豆を持ちて出でけり。又一度呼ぶ時、「いやなし。」と申したれば、「不及力々々々。」とうなづきたり。客大いに感じ、家に帰りて人を請じ、次第を忘れ、始めに「不及力を出せ。」といふ。鹽打豆を出せり。かさねて乞ふに、「最早ない」とこたふる。「鹽打大豆々々々々。」と。あとをさきへ入らぬ文字あつかひや。

○笛といふはちゞみえか、末のゑか、何れがよいといふに、「されば定家のかなづかひにも、源氏などに

も、ちゞみえを書きたるわ。」「いやよこえがよい。」「何とて。」「笛は横にして吹くほどに。」そばに居たる禪門うかべたる體なし「げにも／＼尺八の八もよこえぢや。」

○備後國に久代とて形の如くの大名あり。土生といふ侍を藝州元就へ歳暮の禮儀に遣はされし。對面あつて「出雲國に雪はいか程降りたるぞ。」とあれば、彼の土生手をつき「雲州の雪は馬足不立にして恰も鐵をのべたるが如し。」と申し上げたり。大いに氣色損じ「今より以後此の音使に無益。」とぞ。唯出雲は大雪にて、馬のかよひも御座ないと申さんものを。又彼の土生在郷に住む侍なれば、過半耕作などしけり。或五月雨の晴れ間に、鋤を杖につき徐かにありく。百姓きあひ、「いづれへ。」と問ひければ、「田水見行。」とこたふ。田の水を見に行くといふたはまし。

○醫者にむかつて「白朮とは何を申すや。」「をけらといふ草なり。」と。こびたる事におもひ、客を設けたる席に、中間彼の草を緣のはしに持ち出で、白朮を摘りて參りたりと言はせ、其處にをけらといふてくすめり。近頃文盲なる人感にたへ、歸りて中間に敎へおき、態と人を呼び振舞ひけるに、中間が打ち忘れ「をけらをほりて參りた。」と。亭主よういふかほにて「そこに白朮せよ。」と。

○作意ある人の犬あり、名を二十四とつけたり。二十四々々と呼べば來る。「何としたる仔細にや。」と問ふ。「白く候へば。」さて實にも／＼と感じ家に歸り、白犬を求め二十四と呼ぶ。「いかなる心持ぞ。」

と尋ねられ、「白う候へば。」

○革細工のかたへ侍のもとよりとて、太刀に文をそへ持ち來る。開き見れば、此の日々念を入れ給はり候へと有り、つひによむ者なし。亭主わざと侍のもとへ行き、直に尋ねければ、「それこそ誰も知るべき文字よ。かしらの日はついたちのたち、次の日は二日のつか、太刀のつかを巻きてくれよにて、すみたるものを。」となり。

○宗祇東國修行の道に、二間四面のきれいなる堂あり。立ち寄り腰をかけられたれば、堂守のいふ、「客僧は上方の人候や。」「なか／＼。」と。「さらば發句を一つせんずるに附けて見給へ。」と、

新しく作りたてたる地藏堂かな

物までもきらめきにけり

と附けられし。「これは短いの。」と申す時、祇公「汝のいやことによるかなを足されよ。」とありける。

○堺の中濱に道海とて富める者あり。ちとはれがましき客を請じ、朝食の膳を出し、上座にきと手をつかね、言ひける事こそはらをかしけれ。「西宮に人を遣はす、大風頻りに吹いて新魚無之。鹽魚買來不及力。」たゞ西の宮へ人をやりたれば、大風が吹いて新しい魚がをりないと言はいで。

○坊主と弟子といひ談じて、つね／″＼愚人をあひしらひし、その風をあてことにし、ちくと文字のあ

る客の時、弟子出でてはゞからず、「水邊に酉あり、山に山を重ねんや。」とは酒を出さうかといふた。師匠が返答に、「ノ丶夕夕。」人が多いに無用といふ。賓客とみにきつし、「玄田牛一。」とは畜生めおやとて、座敷をたちたる仕合なり。

○ある武將のうらかたに、瘧をわづらへる事あり。侍を使として醫者のもとへ、「文までもなし、女どもも瘧病にいたはりぬる間、藥調合の儀たのむといへ。」「畏まり候。」とて、たちけるが打忘れ、次にて、「瘧の名は別になきか。」と問ふ。「ぎやへいといふぞ。」うなづき行き醫師に向ひ、「ぎやていの藥を。」と申しけり。をかしく思ひ、「腹ぎやていか、腹そうぎやていか、知れぬ。」と言はるれば、「さる事候。右の脇ちといたくて、後ふるひ給ふ間、さだめて腹ぎやていにて候べし。」心得たりとて藥を遣はしたれば本復してんげり。醫者、武將に逢うて右の趣を語りけるに、「さたのかぎり、そいつは觀音經を一部いうてあつた。」と。

始めよりおこりといふがよからん。入らぬ御使のこびたるにて、主殿まづ恥をかかれた。

○美濃國うるまの大安寺に、般若坊とて狂歌に名を得たるありし。知音たる人のもとより、此の冬の暮れ行き仕合なにとかなどいひ送りたれば、

心經の摩訶の下なる般若坊ことし一切くやくなりけり

○武士たる人の、殿々といふが、殿の字の聲はでんと教ふる。また月といふ字の聲はぐわちとをしふる。此の二字をならひ得て、いかさまはれがましき處にて、言ひ出さんとたくまれけるが、或時館に座敷能のはじまりしを、物見のため人多くあつまり居けり。其の砌、彼の武士威儀をただしくかいつくろひ、「殿原よく〳〵、それにゐる者どもを、みなえんから下へ月こさせよ。」

せんないいたしなさうな。

○金子と書くべき處に合子とかきたり。これはと不審しあへれば、「金といふ合の字を、時々はせしむると讀むすべをさへえ知らいで。」と、けつく慢じごとは。

○おへものの菜をば、なん時も本皿には盛らず、鉢にても重箱にても盛り入れて、ひきざいにしたがよいと、庭訓にあるといふ。いづれの文にありやつひに見ぬ。かくれもない、おへてもつては、後日の恥辱をまねくといへり。

たんぽゝのおへ物くふやしたつゞみ

○脈とては浮中沈をも辨ぜず、七表八裏九道二十四の名をさへ、知らぬ程の醫者あり。脈をとりて後病者に問ふ、「胸は痛む心ありや。」「なかなかあり。」「左様であらう脈に左様候。さて足はひゆる事ありや。」「いやあたゝかなり。」「左様であらう脈に左様なる。」「頭痛ありや。」「いやなし。」「左様でさい

う脈にあうた。」と。此の作法にてもおくすしさまではある。

　病人となりて、薬を申しうけんはこはものぢやの。

○地藏講の式目といふ外題を見、大藏といふ人は地くら講とよむ。武藏といふ人は地さし講とよむ。又傍にのざきゐたる或泉坊は、式目の式を或目とよめり。聞き事なり。

○武士たる人、ある神社にむかひ、「そちは神道を心得たるや。」「いや白張きたるまでに候。」「いたはしや本來無東西、何處をなんぼくといふ大事をも知らいで。」と笑はれければ、神主、「私は佛歌、神歌、道歌を、ぶつかん、じんかん、道かんにて理をすまし參らする。」と申す時、彼の武士、「それはふかい事、おもしろさうな。」と感ぜられたるにてすうだ。

不文字

○朝倉の山椒を一袋もたせ、侍のもとへ音信に遣はしけり。折ふし彼の侍途中にて行きあひ、「文そへて上げければ、そちの見る如くなるまゝ返事に及ばず、又一袋の御重寶悦び入り候。」とよし、使聞き届け道の二三町も行きしが、よくよく思へば、今のことばがすまぬ、今一度ことわらんと、息をつきかね走りもどりぬ。馬をとゞめ問はせけるに、「今の一袋は御重寶では御座ない、朝倉と申す山椒にて候。」と。

これなんふしぎの御重寶

○脾胃の虚したる人にやありけん、平胃散を調合し服せん事を望み、常にたのめる醫師のもとへ、比叡山のはうを書きて給はれと申し送れる。醫師やがてさとり、比叡山の方の義承り候、王城より艮にあたれりと返事しけり。

○元日にかんをいはふ處へ、數ならぬ者禮に來る。亭主、「膳を出せ。」といふに、その儘參りたり。亭嬉しげに、「積善の餘慶ぢや。」など感ずるを聞き、扨はかやうに下には芋大根を盛り、中に餅、上に豆腐くゝたちを盛るをば、積善のよけいといふ事よと覺えて立ち、件の者又さるかたへ行く。膳出でたり。見れば今度のは、豆腐とくゝたちを下に盛り、中に餅、上に芋大根を盛りたり。箸をもちてほめけるは、「さても此の餘慶の積善に、一段あたゝかに出來まゐらせ候よ。」と申しけり。

○同じやうなる者三人ともなひて貴人のもとに行き、まづ上座の者、「とく罷り出で候はんを、我等の子持が乳に癰出來、なほりては平癒し、平癒してはなほり、正月より此の三月まで、それに取りまぎれ參りおくれたる。」と言ひければ、次に坐したるが膝をつき、「こゝな人はお前でさやうのかた事を申す物か、なほるとはへいゆ、へいゆとはなほる事なり、一つことばをくり返し何事ぞや、さやうの丈尺かさねてつかはしますな。」といふを、其の次の者聞きて、「さてもお身の丈尺ことばはなんぞ、大

工やなどのうへにこそ言ふことばならんめ、御身達がかたことをいふを聞いて、おれが顔はそのまゝせきはんしたり。」と。

○人皆歳末の禮として持参しゆく。たちざまに「来春はおほしめすまゝの御しうぎ申さう。」といふを聞き、文盲なる者口眞似し、さき／＼にて「来春はおほしめすまゝ、御座らう。」と申せし。

○三人行き合ひて一人がいふ「さて／＼昨日のなゆは。」又一人いふ、「なゆではない、じゆしんがほんぢや。」今一人が、「なゆやらじゆしんやら知らぬが、世はねつするかと思うた。」

○手跡の讃歎ある席にて、口あればいふ事と、伏見院殿、又後奈良院殿、後柏原院殿のは、皆勅筆とおほせ候が、近衛殿のをばなにとて、勅筆とは申さぬぞふしんな。

　　我が身の恥をわれとあらはす
　犬櫻さかでも春を送れかし

○ある侍中務になられたといふ時、百姓ども祝儀とて、料足十疋宛つなぎ集め、禮に持ち出でしが、又二十日ばかり後、訴訟のむねありて中務に参る。門の傍に並び居て聞きければ、客人の渡り候が小姓をよび出し、「中書は内に御入りあるや。」と問はれしを、百姓目まぜしさゝやきいふ、「中務がほどもなきに中書になられたわ、南無三寶百疋出いてつくばはうずよ。」と。

○始めて奉公に出づる侍のありしが、奏者する人に、「御名字は。」と問はれ、「礒貝。」と答ふ。「礒は。」といへば返事なし。「定めて礒邊の礒なるべし、がひは。」と尋ぬれば、「よからうやうに。」といひしりがいがよからう。」といふ時、「せめておながいのがいにして下されよ。」と。されば時頼禪門も、

よみかきのことさらいるは弓矢より急度注進急度回文

○中間どものあつまりて、人の名苗字を沙汰しけるが、一人いふやう、「おれが殿は名を三度かへられたが、皆こしから下への事ばかりぢや。始めに次郎四郎、二番に次兵衛、三度目に修理大夫を、しりの大夫と噂したり。」

○奉公する人の問ふやうは、「某がたのみたる殿を下野といふ者もあり、野州といふやからもあり、いづれがよいぞや。」どちらも大事なしと、大いに合點せしが、ある座敷に出でて、しもつけの花のいけたるを見つけ、きつと手をつき、「さて〳〵この野州によういかり參らせたよ。」と。

○遊興參會の物語に、「此の家中のおとなは伯耆下野とて兩人あり。されば伯耆なれば伯州といふは聞えたが、下野は野州といふがおかしいともすまぬ。」と。

○物はおかねど利口な者に、「てんびんとは何とかくぞや。」「繼母とかく。」とこたふ。「それは不都合なる事。」といふ。「さればこそ唐から本の文字はおなうとふゝよ、まゝはゝと書くがよい、なぜになれば

くへどくはねどたゝきたがる。」

たゝいてはすりたゝいてはすり
髪惜しむうひ子を膝にだきのせて

○服部といふ侍に文字を問ふ。つひに名字のこたへやうを知らず。人をしへてふくへと書くと言ふくべとはへうたんの事かや。」「なかなか。」ある者、「御名字のはつとりとは。」「それこそへうたんとかき候。」親當。

世の中に書くべきものはかかずして事をかくなり恥をかくなり

○いろはをもよまぬ者ありて、「常に人の酒飯といふは何事ぞや。」「酒はさけといふ、飯はめしといふぞ。」「忝し。」と覺え、ある振舞の座にて、「今日のもてなしは、酒飯ともに出來まゐらせた。」とほめる。かれがそだちをよく知りたる者あり、「酒飯とはなんぞ。」「酒はさけ飯はめし。」「扨ともには。」と問はれ、「椀折敷で御座あらうまでよ。」と。

○物かく者をたのみ、文一つあつらへ、宛處をとへば、「新のくと書きて給はれ。」「新六とこそかかれ、のくというては知らぬ。」「扨そなたはあさましや、六日市のむいの字をさへ知らいで。」と。

○小豆餅のあたゝかなるを、夜咄のもてなしにいだす。その席に奥山の者ありし。中老ほどの人餅を

見る／＼」とかく夜食はおほく食ふが毒にてある。」とかしいふを聞き、扨は餅のことぞとおもひ、彼の山崎在所にて、叢の雛掌に大豆の粉をそへ餅をいだす時、「かまへてみなお聞きあれ、さる人のいはれしが、此の夜食はおほく食ふが毒にて候。」と。

○日くすしに出でんとする人、銘をかくべきあてもなければ、つゝみ紙を澤山に折りて人を頼み、「みなみな紅梅散と書かせられ。」風眼にも、うりひにも、一つ銘許りうたし故、あなどり笑ひけるまゝ、旅宿にて銘をたのむ。「いかゞ書かん。」と問へば、「牛黄圓。」とのぞむ。「目のくすりにはいなものや。」といはれて、「それならば木香丸。」と所望した。

○山家に信函の隙指をもったる者銘をしらず。淨土宗の僧によませたれば、しなけきと讀む。「しなには信濃のしな、けきは喜衛門のけき。」といひつる、あさましさよ。

○侍あきたる者の社に向ひ、「おかべのしる、おかべのさい。」といふを、「さやうのことぞ、女房衆の上にいふ事ぞ。」としかられ、げにもと思ひけるが、ある時主の上﨟にともして、ふるまひより歸りたるに、主人座敷で始終を問はる。「朝食の上にはやしの候ひつる。」と語る。「諸はなに……」と問ひしかば、「しかとは存ぜず候、なにもとうふごしに承りてあるほどに。」と。

○月迎にありし殿の臺所とゝのひかたし。せんかたなさに家老の人おゝく出し、有力なる百姓のもと

へ行き、「それは貞心に事をきたする條、重寶の者なり、歳の暮の祝ひに名字を遣るべき旨なり、目出たき事や。」といふ。「いや只今の分にし、御許容あるやうに御取成しを頼む。」といへども、とかくいひなし、同心させけり。「さりながら、それは禮儀いかほど入り候はんや。」と尋ぬる時、「三十石程がよからう。」とあれば、なかなか隔心のけしきなるまゝ「さらば二十石にても苦しかるまじき。」になりぬ。さて「名字は野々村といふべし。」と。「さらば御禮申さん。」と、老父名代に總領を遣はす。遠侍までは伴せしが、彼の家老が袖を扣へ、「是非きはまる處十石になされよ。よく思案仕るに、野々村と賜はりても野々は生得家に傳はる、村ばかりこそくだされけれ、十石の外はとゝのへまい。」とぞ申しける。

○昨日は一日妙圓寺といふ寺にあそびつるね。」とかたる。「つひにきかぬ寺なり。妙は妙法の妙にてあらうず、ゑんは。」「ぬれゑんぢや。」「いやとよ書きやうは。」「藁繩のまはしがき。」「こゝな人は、字の事を問ふに。」といへば、「字はすな地ぢや。」と。

○風呂をば、いづくに有るもせんたうと言ふとばかり心得て過しけるにや、ある大名の内風呂をたかせて、人々入りけるなかば、「なにと風呂はたつや。」と尋ね給ふ時、くだんのがてんしや、「いづれのせんたうへも入りまゐらせたが、これやうにようたつせんたうはをりない。」とぞ申しける。

○あなたこなた年頭の禮にありきけるさきざきにて、持參の扇を見ては亭主のことばに、「五明はかた

じけなや。」と禮あるを聞き、さてはなににても、正月の持參はみな五明といふものなりと合點し、其の身はもとより塗師の上手なりければ、上々の茶桶を持參するに、たもとより取り出し奏者にむかひ、「是れは我等の五明で御座ある。」と、持ち行くほどの處にていうたと。

あたご殿の發句に、

ひらかぬは風のつぼみの扇かな

三光院殿

秋風を腰にさしたるあふぎかな

○御札のごとくと文をよむ。かたはらに聞く者問ふ、「御札のごとくとは何といふことぞや。」に「人のもとへ文をやりたる其の返事のことばぞ。」と教ふる。しばらくうなづきゐて、大道をありくに、知る人はたとあふ。「扨もおひさしや。」と言葉をかけたれば、「ぎよさつのごとく。」と申しけり。

○人客を得て菓子に蜜柑を持ち出で、「これは庭前のにて候。」といふ。客とりて見、「さて／＼新しや、畠などにあらんはいかでかやうには候べき。」と、大いに感じけるを、面白き時宜とや聞きなしけん、今度客にふるまひのあげくに、麩をにしめて重に入れ、其の席へもち出で、「これは庭前の麩で候。」と申したわ。

○八景のうちに遠寺の晩鐘と、村里とある山寺に、入相の鐘の声、つくづく聞くこともなかりしかな」どいふを、こびたることと思ひけるが、ある時客に寺へ行き、夕陽西にかたぶく頃より茶をうち[illegible]め、火をともせども立つ事をわすれたるに、初夜の鐘も早や鳴りぬるとはいはいで、さはや皆おちあれかし、遠寺の晩鐘もよく鳴りたること。

○此の四十年許り以前、江州永原に而毎月連歌ありしに、其の日京より永原へ行き、侍一人道にて休みけり。石にこしかけやすむ砌、杖をつきたる白髪の老人、静かに歩みよりていろいろの事をかたり、われはけさとくより先程まで、連歌の有りつるを聞きてゐたり。面白い句のありたる。

おぼろおぼろに鐘ひゞくなり

老いぬれば耳さへもとの我ならで

是れに心なぐさみぬ」と、立ち行き給ふ其のけしき常ならねば、侍も心ありけり、跡を忍び送りけるが、つひに見失ひぬ。まがふべくもなき北野の神ならんと沙汰しあへりき。

老いぬれば人の教へを初音にてわれとは聞かぬ山ほとゝぎす

いつの日のいつの時より聞きはてん我がすむ山の入相の鐘

○人ありて作善をつとむる毎に、僧と同じく大俗列座し齋を給はるを、何者の言ひ出しけん、[illegible]僧と

これを呼ぶ。此のひげそうといふを覺えそこなうて、しかもこばかしたがる者あり。○堺にての事ごと

に、ある禪門十德の袖の長きを著、知人に行きあひぬ。「何れへ。」と問ふに、禪門、「今朝はひらのやへ齋ありて、會下僧に行くわ。」と。

○つれと假名をよむ人のいひけるは、「此の程つれ〴〵草をさい〳〵見てあそぶが、おもしろう候よ。」とありしかば、其の座にゐたる者のさしいで、「かまへてくちあたりよしと思うて、おほく御まゐるな、つれ〴〵草のあへ物も、すぐればどくぢやと聞いたに。」

○のり物を乘物といふも、又魚をぎよぶつといふも、一つことにや思ひけめ、上人ばかりつれだちて振舞のあへるさきに、くだんの者いひけるは、「おの〳〵はぎよぶつぢやほどに、さきへ御入りあれ、われはかちにて候ほどに、靜かにまゐらうずよ。」と。

○禪宗のだんなと、一向宗のだんなと寄り合ひ語りゐる、「なにといふ事に、お御堂の、御よりあひの、おさへだんの、おすゝめのと、何にもおの字をつけていふぞや。」と問ひければ、「こちの宗旨ばかりおの字をいふでもあるまいぞ、そちの家にもおの字を附けていふわ。」と。「なに物につけたぞ。」と。「をしやう樣といふわさて。」

○人あつまり居たるついで、「膏粱の美食として、あまり活計も過ぐれば、脾胃の虚損となる。されば口々

所レ嗜不レ可レ隨也とこそ、書きたるれ。」といふ時、膏粱の美食といふ物を見た事がない。「肉食の事よ。」「それならば我等がとなりの亭主は、いかい肉食をする人ぢや。」「してなにを喰ふぞや。」「毎日餅を七つ八つほどづゝ喰ふ。」

○京都四條の河原にて、將棊の馬をひろひたる者あり。何とも知らで主に見せたれば、「是れはすごろくの棊石といふ物なり。」と。

○南無の二字ばかりをいかゞしてか見知りたる、其の餘の文字はやみなる男、天神の名號のかゝれるを見、なむあみだ佛とよみ數へければ文字あまれり。あげくにいふ、「此の念佛はちとふがいよ、融通念佛か知らぬ。」と。

蓮生法師

約束の念佛は申すまでぞかしやらうやらじは彌陀の計らひ

極樂に剛のものとや思ふらんにしにうしろを見せぬ熊谷

イにしにむかつてうしろみせねば

○永玄といふ禪門あり。人來りて、「そちの名の永はながいであらう、玄はくろげんか。」と問ふ。「否しろげん。」といひし。知音する者ききつたへ笑止に思ひ、「此の後源を問はばみなもとといへ。」「がつて

んがつてんし案のごとく源を問ふ時、「むなもと。」と答へけるこそ、

○「了有と名をつけて、了はと人の問はば耳かき了と答へよ。」「こう〳〵覺え易きよい字ぢや。」とよろこびほめつるが、「了は。」と問はれ、「みゝかきで御座る。」と言ひけり。

○一圓不文字なる侍、小知行の代官になりてわめきありく。ちと卑陋渠とおもふ折節、莊屋のもとに立ち寄りたり。「麥飯の候出し候はんか。」といふに、「いや嫌ひに候。」とて立ちぬ。そこもとありき、「麥飯とは何ぞ知らぬ。」と語る。「麥の飯の事。」と聞き、さらば又行きてくはんと思ひ、莊屋が家に入りつれば、人を出し、「俄に下風の起り難儀さに、火にあてゝあぶる。」由いへば、かの代官「その下風をあぶらばあぶるまでもなし、其の儘すゑよ、くはん。」とぞ申したる。

○ある者のむすこ百人一首を、本にむかひたう〳〵とよみければ、親にて候人申されたるこそやさしけれ、「なにやあ、それやうなる物は、反點のないでひがよみなりがたいに。」

○古田織部の數寄に出さるゝほどの物をば、其の道をまなばぬも、天然と賞翫し、もてあつかひしける。中酒の座敷へ用ゐられつる杯までも、なべて人織部杯といひならはしてするまゝ、京に六兵衛といふ者あり。ここに杯をばいづれもおりべといふものぞと合點しゐたり。あるとき八分顏ながく、機嫌よきさうなるを、人見つけて、「そちはあはけなくあひたる體ぞ。」といへば、「道理かな今朝

いふなまひに、汁の椀のおりべで、いにしへさまに杯のいれたるもの。」

○東寺のなにがしに遍照心院といふあり。つくり庭があまたの人の見たがる所なるに、客衆達がいはれけるは、竹杖など持たせいましむる。望みの方へ見度しとて立寄れば、「いや／＼庭へ行くまい、後生未聞おやにて。」

○京よりいたらぬ若ども連立ち石山寺に参り、縁起を所望してよませ聞き、抑此の石山寺は、前に湖水あり、うしろに山あり、峯に塔あり、谷に塔あり、楼門あり。既によみはてぬる時、一人が申しけるは、「誰人の建立とこそ存じつれば、扨は飛鳥井殿のたてさせ給ひて候よなう。」「其の願主は、なにの合點ぞありいふぞや。」「其の事よ、縁起の次第が、いづれの言葉にも何かな彼かな、あり／＼とよまれたほどに、さうかと思うて。」

○「そちの親の煩ひは、何にてありつるぞ。」と問はれたれば、「其の事に候、我等が親のやまひを京の大いん達に見せたれば、にやくをとつて見、病はやうかんぢや、やいひの灸を百やうにしたらよからうとて、ひたものすゑたれば、揚句にしきよく仕りて候。」と。

○こびたるかほの亭主いふ、「餅をやいて食ひたい。」と「いくつ焼き参らせう。」と問うたれば、「昔よりさだまつてある事よ。心經にも、もちやけ六つくはうとこそ。」

〇夏の振舞に、燗をしたる酒と冷酒と出し、「いづれをなりともご」と酌する者言ひけり。座上になほりゐたる宿老いはれけるやう、「今時こそ酒を自然冷にて飲む人あれ、昔は大名小名おしなべ、燗をしてのまぬはなかりし。」と、まことらしくいひてうけられけるを下座より、「たゞそれこそ書物に候や。」と尋ぬれば、「なかなかの事、禮の篇に、臣も君も此の篇をかゝせぬ人はなかりけり。」

〇ある男三人つれだち、誓願寺にまゐりけるが、外陣にある額の六字を見、「せいぐわんじの額ならば三字こそあらんずれ、何ぞ三つあまりたるぞ。」といふ。一人が「あれをよまぬか、せいぐわんじと云のさうらふと、かきたるわ」と申したるこそをかしけれ。

〇一宇の御堂造立すでに成就し、棟札をかかんと法印出で筆を染め、いはれけるは、「此のおもてにあらゆる佛菩薩、ならびに日本の神々をかきつくるぞ。」とあれば、かの大工、「われらをも諸神のうちへ入れてあそばし候へ。」といふ。法印大きにわらはせ給ひ、「なにとてさやうにおもなき事をいふぞ。」と尋ねられし時、「我も神の内なるまゝなしからず。」「なにとして神にはなりたるや。」と尋ねらるゝに、大工かしこまり、「われらくしこそ若狭のかみにて候ほどに。」

女之品

〇異案にして若室の陰松とかや聞えし若衆に、ぞこんなき法師のおもひを寄せながら、いひ寄られたま

りちなければ、せめてかきする人をかたらひ、「文を一つ書きてくれられよ、ぶんしやうの事にわれにこいまんぢに」となり。ともかくもと筆を染めうかゞひ居ければ、「おれはそなたにほれたげな、戀の心がわしらがいたい。」と。

○青蓮院殿へ出入する筆匠あり。尊鎭門跡に言上するやう、「別して御中よきその某殿へ、書狀を一通下されよかし。」と。御領掌ばかりにうち過ぐる。折々是れを望めば、「餘り去り難きまゝ、心得たり。」とて遣はし給ふ文體、此の筆匠それへ參り候、ぬしは上手と申し候、

さはらずしてすうだ、

○侍たる人右筆をよびて、「此の程は久不レ懸二御目一滿足仕候」とかけ」と。「それはいかゞ候はん。」とて、筆をもちゐけるに、「それならば、よくきこゆるやうに、此の程はおめにかゝらず、本望に存じ候。」

○「さる處にて釋迦の文を見たれ。」と語る。聞く人感じ、「聲聞緣覺羅漢の内、誰々へのあて所ぞや。」「耆婆が方へのふみなり。」「さては竹はしに梵字か、文章いかにや。」と問ふ。「其の事よ、紙は日本一の播磨杉原に、鳥飼樣を以て、いかにも墨をかうかうと、此の程は久不レ懸二御目一候、四五日以前靈鷲山の麓にて風をひき、咳氣散々に候。藥一二貼可レ給候。賢。耆婆殿まゐる。釋迦判。」

○かゝ侍のもとより知音の方へ文有り。ひらき見れば、筆たてに日の字ありて、其の下に四五斗たまはり候へと書きたり。何とも合點ゆかぬとて文を返しぬ。後に見參して、「以前の文の内なに用のありつるぞ、いかに讀みえずして、本意なき。」よし語られければ、「そなたは隨分の人にてあるが、七日のぬかといふ字さへ見しりあらぬか。」と。

○祖父と祖母と何事をかいさかひけん、さうなく祖母を追ひ出しけり。しかはあれど、老いたるを愛するものなければ、日にそひて互になつかしく思ふ折節、魚をうる商人來れり。祖父よろこび、「其の里のそれとたづね、この文をとゞけて給び候へ、もし又返事のあらばたちよりて、とりたび候へ。」など、いひふくめけるが、姥文を見て、あめやさめと泣き、久しくもあはぬに文章のあがりたる事やと感じ、返事とてたゝみわたす。商人かへるさに祖父にわたしてあれば、とおほどたる涙をながして手をはなさず。商人あはれさに文のやうを尋ね聞く。祖父のかたよりは、いばらに小石をつゝみそへつかはしぬ。うばがかたよりは、其の中へこぬかをつゝみそへてかへしぬ。おばら戀しとあるに、おばら戀しくばこぬかと、互に通ふおもひまじき、よむも書くも同じ心なる、濱の眞砂の數々なり。

年よれば腰にあづさの弓をはりしわのいる矢にしゝぞ少なき

莊子 壽者 多レ辱

長かれとなに祈りけん世の中のうきを見るに命なりけり

あはれ数ならぬ身の残るかなしさ

いづくにも道ある人はとゞまらで

樂天今朝向レ鏡看疑是逢二別人一

ますかゞみむかひて見れば我がすがた知らぬ翁にあふ心地する

老いにけり今年ばかりと詠むれば花よりさきに散るなみだかな

○とかく當世は、文章のみじかきがはやるといふを聞きて、侍たる人のかたより、知音の僧へつかはしたるとなん。

送り進らする十八本松茸恐惶謹言

圭侍者へ　　　　　　　　平井伊賀入道

○又商人、遠島より古郷へたよりあるといふ時、妻のもとへ、文ならびにいんしんをしけるが、「態と一筆、針三本、千松なかすな、火の用心、かしく。」と書いたり。

○さうといしき女房の下司などつれたるが、清水寺にまうで來て、舞臺のこなたかなた立ちやすらひしが、頬被のやたてをおとし、侍のゐけるあるを見つけ、下司をつかはしたのむやう、「おかごろはゞか

りおぼえ候へども、人のくれし文のかへり事を、たれたのまん者もなし、ひたすらに扶持をえん。」とあれば、とやかうの斟酌におよばすかたはらにいたりぬ。女房懐より料紙とりいだしわたし、いろいろのぶんを好む。かの顛禮はいろはをさへならはぬ者なりしが、今度西國物詣での樂書をせんまでに、筑後國の住人柳川のなにがしと、これよりほかに一字もなし。くろみすぐるほど、紙一かさねに書きくどきたる文のうち、いづれも／＼、筑後國の住人柳川のなにがしと、うはがきともにこれなれば、戀のさめたる風流や。

○文盲なる人、ゆがけを借りにやるとて紙をひろげ、手のひらに墨をつけ、ひたとおし、うでくびのかたに細きすぢをたにし書きて、これをお借しあれというて、もたせつかはしたり。見るにうなづきゆがけをかせといふ事の返事せんといふまゝ、皿と椀のなりを書きて戻しけり。かりにやりたる仁がつてんじ、さらはぬといふ事の是非におよばぬ。

自　墮　落

洛陽に毒椎といふ坊主墮落し、娃女なりける比丘尼を妻にもちて居けり。越方の等閑なきに宿を尋ねおとづるゝが、かの毒椎案の外隔心し、内へよばざりければ腹立ちあまり、

秘事して人に見せぬはめいわくのあまくになれば身をもたぬなす　元理

○世度卑なる出家あり。一人の弟子にいふ、「明日は吉野の花見に行かし、先途程遠し、暁とくおきて出立を用意せよ。」心得たりと夙におき、酒飯とゝのへ戸を叩きければ、坊主「未だ夜深なり。」とておきず。さる程につれ〴〵弟子にかくし、いねざまには焼味噌と合して鶏の玉子をとゝのへ、肴に用ゐて酒をのむ事を心に無心に思ひゐけるが、その時こそいへかれ「夜が深いか浅いかは知らぬ、やきみそたてゝはもはや三番ないた。」

○つねに人のから干鮭は、身をあたゝめてよき薬などいふを聞きて、われも養生にくひたき事やとおもひ、老比丘、うつけたる中間にむかひ、「薬になるといふ事あり、からざけといふ物を買うて来れ。」とて代を三百わたしけり。すなはち買ひもとめて来りぬ。そのをりふし、客のある座敷へ、くだんのうつけ、はふりと出しけるに、老比丘きもをつぶし「其のからざけを、はやく泉水へはなせ。」と申されたり。

○いちほり僧のありつるが、秋も最中の月澄みに、百姓出でて田をまもりゐたり。夜ふけ物音せぬゆゑ、ぎり、笠をき、白き帷子をはしをりたる男、さうけと小桶とを持ちて来りぬ。百姓ふしんなる物に思ひとがめければ、かの男いふ、「俗人鰌すくふに、なにのくせごとがあらうぞ。」と。

○板がへしをせんと屋根葺に二三人やとひ出し、すでに板をまくりけるが、ふきし天井をのぞけば、摺

鉢になからほどなますの見ゆる」お坊主、ほこりがするに、これなる膾を取り給へ。」と。坊主きいて「それは門前の者が、昨日もてきて質においたが、まだうけぬものぢやよ。」と。

○ひそかにつかはす使の小者、ひさしく病にふしけり。せんかたなくて坊主みづから魚屋に行く　いかにも夜ふけ靜まりたるに、門を敲く音せり。内より「たれ人ぞ。」と高聲にとがめければ、「在家屋から魚かひにきた、戸をあけよ。」と。

○窮貧の沙門にて、年もまた至極せるが、しかと給仕の人もなければ、自身しろき手拭にて頭をつゝみ、魚の店に臨めり。折節なにも魚の類なく、たゞ鱆といふもの大と小とござありける。亭主「お出であれ。」「それに候てふはんなりの魚はいく〳〵らにてあるぞ。」「小はやすく大は高なる。」よし。「合點で候、小をば其方のいふごとく買はうず、大なるをば寄進せられよ。」と。

○噌を反古に包み燒き、飯にそへて食せんとする時旦那來れり。坊主れうけんなく膳をもちて立ち、酒を出しふるまひぬ。其の後種々思案し、ある時反古に大根をつゝみやきふるまひて、以前のにまぎらかさんとたくみ、件のだんなを請待する。即ち領掌し時分に來りしが、かの燒く體を見、座敷へ率爾に入らずたゝずむ。嫗のあるが出でていふ「いやあれは噌ではありたい、大根おやに御座あれ。」

このまへのがいよ〳〵鱈にすうだ。

○あまりに齋をくひ過して、腹便なと歸るさに、もちたる數珠をおとしながら、うつむかんやうなさふさに、足の指にて挾みつゝ、「じゆず御免あれ」と申せしも、ちとじだらくの類かや。

○僧俗ともにふじはり語りなぐさむ座敷にて、ある坊主急に咳をしけるが、喉より痰のかたまりたる樣なる物をはきいだしたり。そばにゐたる男の取りて見れば、蛸なり。「是はいな物が出た」と、口をそろへていひければ、「されば喝食の時くうてあつたが今出た、われに蛸はきえぬるといふが誠ぢやよ。」

○都の寺に檀那朝とく參り、本堂を拜し、茶堂の傍にて數珠を繰り、佛名を念じけるが、爐にかけたる釜の湯おびたゝしく煮えあがりて、蓋をたゝく。釜と蓋とのあひだになにやらん見ゆる物あり。蓋を取りたれば蛸なり。「これはなにぞ、蛸ではなきや。」といふ時、坊主の返事、「さる事も有るべし、ゆうべ蛸藥師の水をくみよせて、茶の湯をしかけさせたほどに。」と。

○大名の家に奉公の望みをかけたるが、漸く調ひぬれば、奏者について出仕をとげし次手に、せがれを御目にかけたきむね申しふくむる。即ちつれて禮儀すみけり。時に主たる人、「そちは近き頃の落墮といふが、成人の子はなにと、養子か。」と問はれて、「いや喝食でのせがれ。」と申し上ぐる。

○學跡なきもののききける程の沙門、鴫を板折敷の裏に置き、ながたなにてきる處へ、おもひもよらぬだんな參りたり。少しも色をたがへず、「世界みな不思議を以て建立す、これは蓮々山の芋が鴫になると人のいうてあれど、まだみて虚說ならんと疑ひしが、これ御覽ぜよ、山のいもを汁にしてくはんとおもひ、取り寄せおきたれば、見るがうちにかやうになりて候ふ、何事もものの變ひあるぞや、これ御覽ぜよ」とこそ申されける。

○ある一人坊主、烏賊をくろあへにしてたまはる處へ、ふと人來れり。口をぬぐはん料簡もなかりけるに、「そなたの口はなにとて黑いぞや、鐵漿をつけられたか」と問ふ。「いやされば寒さに、只今黑まさしを一口くうたれば」と。

○一日の精進を千日とおもひ、これへかねたる人はまゝあり。さるあひだひとりの老人、他事なき知音のもとに終日物語りし、暮におよんで座をたつ時、「明日は我が親の日なり。無菜の齋を參らせられ候へ」と亭主いひければ、手をあはせ、「まつぴら御免あれ、私の親の日さへ難儀するに、そなたの親の精進までは、なういやや。」とぞ申しける。

○信心ふかき人山寺にまうで、ある寺坊に宿をかり、本堂の觀世音に通夜しけるついで、老僧に對面し、「此の寺家に法師いかほど候や、中にも勤行不退のかたやあること」など、委細に尋ねければ、老僧の

返答に、「此の寺にたふとい者は我親仁、鄰の坊主の壻しうと」。

○天に目なしとおもひ、ぬたなますを喰ひゐる處へ、だんな來り見附けたれば、ちと物おぼえたる僧にやありけん、「よき砌の入堂なるかな、茲に歷劫不思議の法味あり、まづ天地のあひだに七十二候とて、時のうつるに應じ物のかはり行く奇特を申さん、田鼠化して鶉となり、雀海中に入りて蛤となり、鳩變じて鷹となるといふ事あるが、愚僧が菜にすわりたるあへもの、變じてぬたなますと眼前になりたる、此の奇特を御覽ぜよ。」と。

○ある僧喉痺にてはなく、喉をいたむる有り。心やすき人の見舞ひ、「何ぞ物のたちて苦しむるにや。」と問はれけるに、「そのごとし。」「さらばかやうの事よくまじなうて、いやす修行者あり、かれをさそひきたらん。」と同道せり。時になほす人、「竹のをれかや、魚の骨かや、その物により觀念かはれり。」と。僧息の下より、「竹ではあらうずれども、まじなひは魚の骨の心持にて御沙汰候へ。」と。

○我檀那寺に參りしばらく雜談し、たちさまに、「明日無菜の齋を申さん」といへば、庫裏からあうむ楚忽に出でていひける、「幸ひの事や、あすはお坊樣の精進の日ぢや。」

　俗の方より檀那をよばんに、いふべき仁義ではをりないか。

○仁王經に　比丘　地立　白衣　高座。白衣は俗なり。

世のすみは墨の衣も武士の奴となれる法ぞかなしき

中峯和尚修行ノ記ニ身ニハ著ケドモ法衣ヲ思ハ染メリ俗塵ニ。

黒染の衣に似たる心かと問ふ人あらばいかゞ答へん

遁世の遁の一字を書きかへて昔は遁れ今はむさぼる

○坊主いつも鮎の名をかみそりとつけて、箱に入れもとむるを、常の事なれば小者よく知りたり。ある時彼の僧河をわたるに、鮎のおほくありくを見て、小者後より「御坊様いつも秘藏して、こなたの入物にあるかみそりがありくに、足をきり給ふな。」といひければ、坊主「今は八月なり。かみそりがいかほどあるとさびようほどに、足はきれまいぞ。」といへり。

○昔よりやせの寺は禁酒なり。寺中に酒を好む僧の企みて、經箱をこさせ角をとり、いかにも結構に塗らせ、上に五部の大乘經と書き付け、それを通ひにしけり。酒を取りてくるに人「それは。」と問へば「是れは五部の大乘經なり、京にいたゞかん事をねがふ檀那あり、其の故に折々もちて行きかよふ。」とこたふ。あまり京がよひのしげければ、人あまねく推してけり。ある時内の者經箱をもちかへる途中にて、酒のにほひをきき、飲みたさやるせなし。そと口をあけ給はりぬ。そろ／＼寺にかへるに、「それは何ぞ。」常のごとく、「經にて候。」といふ。「さらばちといたゞかん。」と手を取りふりて見、

「まことにお經やらん、内に五ぶ／＼といふ聲がする。」

○僧俗よりあひての物語に、今程は寺の外聞がやすきよし、坊主のいはれけるを、俗いふ、「奇特な事や、こちさへ知らぬ。」とあてたれば、「いやわれは知らぬ、寺中の取沙汰ぢや。」と。

○ある出家、ふかくかくして鯰をくひける處へ、ふと檀那來れり。爲方なさに皿ともにあたまへうつぶけ、手にておさへたれば、頬からおとがひへ汁のながるゝを見附け、「こなたには腫物ができまゐらせたか。」と問ふ。おうといへばよかりしを、あまりに膽をつぶし、「いや俄におなまずができて候。」といひけり。

清僧

○人跡絶えたる山中に一宇の堂あり。甍やぶれては霧不斷の香をたく境界なれば、世にあらん人の晝だにも立ちよるべきよしもなきに、いかなる不惜身命の行者なれば、此の佛閣にはすみけると、あはれむ者もおほかりし。又惡性の者あり、うたがひおもふ。あれほどおそろしき處に、何としてひとりはすまれん、たゞ女房のある者よと、嵐冷まじき冬の夜立聞をしけり。彼の僧終夜の語に、「そなたがゐればこそ、此の寒夜にもあたゝかなれ、いとほしの人や。」といひけり。紛れもなき夫婦にこそと、人あまた押し入りて見れば何もなし。坊主の愛せらるゝものは何ぞと問ふに、「これなん我が伽なり。」と

いつて、三升ほど入る大徳利をばいだしつる。

○禪に一路とて得法の僧ありし。和泉國大鳥のあたりに草庵をむすび、友もなく星霜をおくらるゝ。財寶とては手とりとかやいふ、ちひさき釜に口のあるを所持し、朝夕の煙を立てられき。ある時たはぶれて、

手どりめよおのが小口のさし出でゝ雜炊にたと人にかたるな

身をかくす庵ののきの朽ちぬればいきても苔の下にこそあれ

月は見ん月には見えじながらへて憂世をめぐる影も恥かし

○百三十年あまりの跡かとよ。筑前國宰府の天神の飛梅、天火にやけてふたゝび花さかず。こはそも淺ましき事やと人皆涙をながし、知るも知らぬも集まりて、思ひ〳〵の短冊をつけ參らする中に、權梗坊とて、勇猛精進なる老僧のよめる歌こそ殊勝なれ。

天をさへかけりし梅の根につかば土よりもなど花のひらけぬ

たんざくを木の枝にむすびて、足をひかれければ、すなはち綠の色めきわたり、はなさく春にかへりしことよ。人々感に堪へで、かの沙門を、神とも佛とも手を合はせし。「梅はこれ我が愛木。」と賞せさせたまひ、

いづくにも梅だにあらば我とせよたとひ社はありとなしとも

梅あらば賤しきしづが伏家にもわれ立ちよらん悪魔しりぞけ

○さしもたつとき老僧のもとへ、松茸のさかりなるを人のおくりたり。とりはやし賞むるける處に、そこつなる小僧の出でて、松茸一つ取りあげ、「これはそのまゝ、これの地藏のあたまに似たわ。」と申しければ、老僧涙をながし、衣を著し、地藏のまへに参り、「今小僧めが申せし狼藉を、まつひら我に對してゆるし給へ。」と悲しまれしは、思ひやられてありがたや。

○栂尾の明恵上人は、春日大明神直に御言葉をかはし給ひしが、

けがさじと思ふ御法のともすれば世わたる橋となるが悲しき

○大和國の龍門の聖といふあり。聖と親しき男の、明暮鹿を殺すことをしといふ事をしける。闇き夜ならひがりに出でたり。目をあはせたれば、鹿ありとておしまはし／＼するに、慥かに目をあはせたり。ほぐしに引掛け、矢をはげ射んとふりたて見るに、此の鹿の目の間、例の目の色に變りければ、あやしと思ひ弓を引きさし、矢をはづして火をとり見るに、鹿の目にはあらず。ちかくより見れば身は一定の革なるが、靜かに火をふき見れば此の聖の目うらたゝき、鹿の皮を引きかづきふし給へり。こはいかにといへば、ほろ／＼と泣きて、「わぬしが制する事をきかず、いたく鹿を殺す、我鹿にかは

りて殺されなば、さりとも少しは留まりなんと思へば、かくて射られんとして居るなり。」男ふしまろび泣き、即ちやなぐひ皆うちをりくだき、髻切つてつかはれてぞゐける。

○昔もろこし寶誌和尚といふあり。道徳おはしければ帝彼の姿を影にかき留めんとて、繪師三人を遣はし給ふ。三人めん〳〵にうつすべきよし仰せふくめらる。和尚へ参りかく宣旨を承りまうでたるよし申せば、「しばし。」といひて、法眼の裝束し出で合ひ給へるを、三人各かくべき絹をひろげ、既に筆を下さんとするに、聖「暫く、我まことの形あり、それを見て寫すべし。」とあり。左右なくかかず御顔を見れば、大指の爪にて額の皮をさしきりて、皮を左右へ引きのけたるより、金色の菩薩のかほをさしいだしたり。一人は十一面觀音と見る。一人は聖觀音と拜み奉りつる。見るまゝに寫し奉り持ち参りたれば、御門おどろき、別のつかひをたてて問はせ給へば、かいけつやうにうせ給ふ。

○天竺に一寺あり、住僧おほし。達磨和尚僧どもの行ひを見給ふに、念佛するあり。或房に八九十許りなる僧、只二人碁を打つ外は他事なし。達磨件の房を出で他の僧に問ふ。答へて言く、「此の二人若きより圍碁の外する事なし、仍つて寺僧卑しみ、外道の如く思へり。」と言ふ。和尚聞きて、定めて様あらんと思ひ、彼の老僧の傍にて碁打つ様を見れば、一人は立ち、一人は居ると見るに、忽然として失せぬ。怪しく思ふ程に、立てるは歸り、居ると見れば又居たる僧失せぬ。さればこそと思ひ、「圍

果の外他事なしと承る。其の故を聞き奉らん。」と宣ふに、答へて言く、「年来此の事より外はなし、只黒勝つときは我が煩悩勝ちぬと悲しみ、白勝つ時は菩薩勝ちぬと悦ぶ。打つに随ひて煩悩の黒を失ひ忽ちに證果の身となり侍るなり。」と云々。

　山のはにさそはば入らん我もたゞうきよの空に秋の夜の月

解脱上人の、世に随へば聖あるに似たり、俗にそむけば狂人のごとし、あな憂の世の中や、一身何れの處にか隠さんと書かれしを、右の歌に引き合はせて衣の袖をしぼりにき。

聞多批判

○貴賤袖をつらね、われも人も數珠つまぐる體を見、被官たる者「やさしやひうがんとて、佛まゐりをつかまつるよ。」といふを主聞き附け「ひうがんはかたことや、ひがんといへ。」と「これはかかる事われらもはや五十にあまれども、つひにひうがんとこそ申しならはし候へ、彼岸といふは聞かず。」主大いに腹を立て「あひてに足らぬ事なれども、あまり汝あらそふがにくき程に、地頭に儀を得よや。」とて、彼の批判を聞きたれば「雙方に理あり、彼岸は春と秋とにわかてり、秋は收納のいとなみ、月は夜田かるいそかはしさに、如何にも言葉みじかきを要とし、ひがんといふよし、春は四方の山並うち霞み、百囀りの鳥のいろ、花ならねどもかうばしく、隙ありけにも胡蝶まひあそぶ、いとゆふ織りぬれば、ひうがんこそよろしからめ、あなかしこ、あらそふ事なかれ。」

○西三條逍遙院殿、御養生に有馬へ湯治ありし、其の時歌の點を望みて參らせあぐる。兎角よろしからねば、

案の外他事なしと承る。其の故を聞き奉らん。」と宣ふに、答へて言く、「年來此の事より外はなし、只黒勝つときは我が煩惱勝ちぬと悲しみ、白勝つ時は菩薩勝ちぬと悦ぶ。打つに隨ひて煩惱の黒を失ひ忽ちに證果の身となり侍るなり。」と云々。

　山のはにさそはば入らん我もたゞうきよの空に秋の夜の月

解脫上人の、世に隨へば聖あるに似たり、俗にそむけば狂人のごとし、あな憂の世の中や、一身何れの處にか隱さんと書かれしを、右の歌に引き合はせて衣の袖をしぼりにき。

聞多批判

○貴賤袖をつらね、われも人も數珠つまぐる體を見、被官たる者「やさしやひうがんとて、佛まゐりをつかまつるよ。」といふを主聞き附け「ひうがんはかたことや、ひがんといへ。」と「これはかかる事われらもはや五十にあまれども、つひにひうがんとこそ申しならはし候へ、彼岸といふは聞かず。」主大いに腹を立て「あひてに足らぬ事なれども、あまり汝あらそふがにくき程に、地頭に儀を得よや。」とて、彼の批判を聞きたれば「雙方に理あり、彼岸は春と秋とにわかてり、秋は收納のいとなみ、月は夜田かるいそがはしさに、如何にも言葉みじかきを要とし、ひがんといふよし、春は四方の山並うす霞み、百囀りの鳥のいろ、花ならねどもかうばしく、隙ありげにも胡蝶まひあそぶ、いとゆふ織りぬれば、ひうがんこそよろしからめ、あなかしこ、あらそふ事なかれ。」

○西三條逍遙院殿、御養生に有馬へ湯治ありし、其の時歌の點を望みて參らせあぐる。兎角よろしからねば、

昔よりきどく有馬の湯ときけど腰をれ歌はなほらざりけり

○市のたつ町のかしらに小宮をたてて、えびすの作りたるあり。立ち寄る者、「あらいつくしのえびすや。」とほむるを聞いて、「あれをえびすとはいはぬ物ぞや、きびすといふがほんなり。」とからかふ。町奉行へあげてすませよと、雙方出でたりければ、「どちらも大事なし、木にて作りたるは何どきもきびす、紙に書きたるはいつとてもえびすといふべし。」

○比叡山にて、北谷の兒は雪に過ぎたる物やあらんと愛せられし、又南谷の兒は花にまされる詠めやあらんと興ぜられし。かかりし程こそありけれ、後にはあなたこなた心なきに心をつけ、いさかひになり、花をばあしくいひちらし、雪をばいなものに言ひ消し、雪のかたよりは、花をほむる狼藉の類をよせてかたんといふ。又花のかたよりは、雪をほむるうつけどもを、たゞはたいてのけよと、互にいかれる心たけく、山のさわぎことの外なりし。西三條逍遙院殿つたへきこしめされ、わざと山におのぼりあり。「雪にめでられしも理あり。

花ならば咲かぬ梢もあるべきに何に譬へん雪のあけぼの

花に心をそめられしも尤もゆゑあり。

雪ならば幾度袖をはらはまし花のふゞきの志賀の山ごえ

自今以後勝劣をあらそはず、中をなほりて、同入和合の牀に勤學あれ。」と、しづめてこそ御歸りありけれ。

○從一位の右大臣征夷將軍源家康公天下を治め給ふ。この御代に賢臣義士多き中に、板倉伊賀守京都の所司代として訟へを聞き、理非を決斷せらるゝに、富貴の人とても、へつらふ色もなく、貧賤の者とても、くだせる體なし。然る間上下萬民裁許を悅んで、奇なるかな妙なるかなと、讃嘆する人ちまたにみてり。一滴舌上に通じて大海の鹽味を知るとあれば、其の金語のはしをいふに餘は知りぬべきや。しかる時、越後にて山伏宿をかりぬ。其の節國主の迎ひに亭主罷り出けるに、かの山伏のさしたる刀、こしらへといひ、つくりといひ、世にすぐれたる物なるをかりて行き、いまだ宿に歸らざるあひだに、一國徳政の札たちけり。去る程に亭主かへりても、刀をかへす事なし。山伏こらへかね、しきりにこふ。宿主返事するやう、「そちの刀かりたる處實正なり、されども徳政の札立ちたる上は、此の刀もながれたるなり、さら〳〵かへすまじき」といふ。出入になりければ雙方江戸に參り、大相國御前の沙汰になれり。其の砌京の所司代下向あり。御前へにはんべられし。此の裁許いかにと御諚あるに、謹んで、「造作もなき儀と存じ候、幸ひ札の上にて亭主が借りたる刀をながし候はば、又山伏がかりたる家をも、みな山伏がに仕るべき物なり。」と申し上げられしかば、大相國御感甚しか

りし。當意即妙の下知なるかな。以二正理之藥一治二訴訟之病一、挑二憲法之燈一照二愁嘆之闇一といふ金言あらそはならず。

さすがおくかとおもふ守宮
一腰の刀ならではしらもなし

○大佛の前にて、若き侍の小者二人つれたるが、茶屋によりひたもの餅をくひ、時宜なしにたたんとするに、亭主「錢は。」といふに、「一錢の當てなし。」「何處の人ぞ。」「我は關東の者なり、頼みたる人の使に京へ上る、今朝は夙く出でたり、軈て返辨に及びなん、此の度はかけられよ。」と。亭主返答もせずあざわらつて、「かくるとは二文や五文の事候よ、十疋は過分なり、錢なくば脇指を質にとらん。」と。侍「主の使に行く者の丸腰はいな物なるべし、許されよ。」とわびてもきかず。「侍程の人料足なくば、くふまじきにてこそあらんめ。」とかくわやくなり、いざ板倉殿へ行け。」と、町の年寄をつれだち所司代へ出づる。茶屋右の趣を申せば、「此の事いかに。」と尋ねとはるゝに、侍も陳すべきやうなし。伊賀守雙方を聞きて、「詮ずる處是れは十疋の料足さへ取れば、茶屋も言分あるまじきか。」と問はるゝ「なかなか別の仔細候はじ。」と申す時、「さらば鳥目とらせよ。」と、十疋を遣はしてぞかへされける。侍には、「御邊關東の人といふ、京伏見は、故郷にて知音などある所にかはり片通りなれば、

後に返辨せんなどいひ、物の代をすまさず過ぐる事はなるまじきぞ、以來其の心得あれ。」と、意見し
こそさとされけれ。

〇山科の百姓薪をこり、負ひたるまゝ山よりすぐに京に出でて賣る。さるほどに彼の薪の上にさして置きたる鎌をうちわすれ、宿に歸り漸く思ひ出し、右の薪かうたる人のもとに行き、件のよしをいひてければ、主人出合ひ、「我は薪をこそ買うたれ、鎌をば買はず、何事をほれていふやらん。」と、一向とりあはねば、是非なうて所司代へ申しけり。雙方よびいだし聞きての上に、伊賀守、先づしばらくほどあらんに、肩衣袴をぬぎゆる／＼とゐよと氣をくつろげ、ぬぎたるをとりよせ、さとへもたせつかはし、「此の肩衣袴と、そちにある鎌をかへておこせよ。」とあれば、女房うたがひなく思ひ渡せり。其のごとくなる鎌を五六挺まぜて出し、百姓に見分けよとあれば、「是れぞ私のなれ。」と、取りたり。其の後鎌をかくしつるものに、過錢として三貫文いださせ、以前の百姓に扶持ありし事とぞ。

〇慶長七年七月七日に、せなかに負簏などいふものをかけつる人足、やせくろみ竹杖にすがり、京の町をとほれば、見る人、「あな恐ろし、げにやらん、この頃は地獄の釜のふたもあき、罪人聖靈となりくるなると聞くが、さやうの者にや。」といひあへるに、此の者みすごによりて、「瓜を一つ、いか程。」といへば、「二文。」と答ふ。「腰に只一文あり。錢の結縁と思して給はられんや。」と、「其の分にもせん。」とあ

り、即ち瓜をとり、頭よりかぶりくらひて後、はさみたる錢を見れば、おもて纔ばかりぞ候ひける。「瓜の主人慈悲と思召し恕し給へかし。」と歎くに、此の人天然と慳貪にて、「沙汰の限り、すりのたゞひと覺ゆるなり。出させ給へ。」と町の人を催し、やせたる男を追ひ立て、板倉殿垣の内に引きずる、右の樣子具に訟へ申す。人足もありのまゝ言上す。伊賀守聞き給ひ、「何れも事の實否を糺明すべし、先づこの者を瓜賣に預くるぞ、二時の飯をそちあたへ、晝は町としてよきに番すべし、ゆるがせならば我を恨むな。」とて歸されけり。只一文の事にいらぬ儀をいうて、造作する物とは思ひながら、一間なる所におしこめ、番をする、毎日の食をぞあたへける。六日七日に及べども、糺明なければこらへかね、各參りて、「御糺明あれかし。」と申すに、伊賀守、「事の多さに忘れて候、今思案するに、時は盂蘭盆、科は瓜一つ、是れほどの裁許は初めにすべかりしかど、瓜賣の慳貪なる心根がにくさについつるぞ、飢ふに臨みたる者を見ては、招きても與ふべきに、せんかたなき者をとらへきて、錢一文の事にくびをはねよとはなんぞ、慈悲をせさすべきために、此中はやしなはせたり、いそぎその者ゆるしかへせ。」と下知あれば、其の席にありし人、みな頭をかたぶけ、感涙をながさぬはなかりし。

○下京に、ちと有德なる者男子を一人持ちたり。彼二歳の春母にはなれぬ。繼母にそはんをいたはりながら、さすが男やもめにて送らんよしもなければ、かさねて妻をもとめ置きしが、總領すでに六歲

の春、父病の牀にふしぬ。かなふまじき事を得心し、兄にむかひ、「我が子幼稚なり、そちへとり養育成人ののち、家をわたしてくれられよ。」といひ置き、終にむなしくなれり。遺言のごとく、子を伯父の方へよびとらんとするに、繼母いふ、「我が腹を出ぬばかりに、いかほど辛苦して年月そだてたるぞや、その上此の後父たにそはんにもあらず、髪をそりあり子をそだて家をもりたてんもの、なか〳〵そちへはやるまい。」と怒り、雙方伊賀守の前に出でたり。「いふ處いづれも理あり。それなる子愛へ越せよ。」と呼び膝のもとに懐け、火燵にあたらせ、菓子などとりくはせ、心やすく思ふかほばせの折、「そちは伯父のもとに居たいか、また母のところに居たいか。」と問はせ給へば、「伯父のところに居たい。」といふ。「さらばもとの處へゆけ。」とありしを、をぢと後家と子の手をとりうばひ呼ぶ。子はなくなくをぢのひざに居けり。伊賀守下知せられけるは、「まづしばらくをぢのかたにあづけよ、とかく子は伯父になづいたほどに、後はともかくもあらん。」と、やはらかにいうてもどされし。

○京にて猫をうしなへる者あり。廚子小路にいたり、身をやつし尋ねしが、ある所にて不思議に見附け、「これは我が猫。」といふ。亭主出でて、「そちがといふ證據は。」「又汝といふ證據は。」惜しく欲しくのあらそひなれば、是非終にわかたず。板倉伊賀守是非のあひし二人對座させ、件の猫を座敷の中にはなち、「もとの主も、今の主も、手に鰹節をもちて呼べ、生まれてよりそだてなれたる方

へこそ行くべけれ。」と、案のごとく、始めうしなひし者の膝の上へ、なく/\行きし事よ。

〇京矢田の町に夫婦の人ありしが、夫さきに立ち、妻歎きにあけくれ一週忌も過ぎぬ。後家、惣領の子と其の妹を呼び、なき人の事かたり出し、涙をおさへつゝ、惣領にむかひて、「御身ははや家をも請取り、譲りをも取りたれば、今この家と少しの殘れるものを、妹の子に聟をとりて渡せとの遺言なり。」よし言ひければ、其の子「我はさせる譲りをも取らず、此の家も財寶もここそやるまじき。」と、座敷をけたてて立ちたりし後、結句家を請取らんといふ使を立つるゆゑに、老母腹を立て、「燒いては燒つるともやるまじきものを。」とあれば、町衆あつかひに入り、先に母のいひわたしけるごとくに、教訓するもとゝのはず。惣領目安を認め所司代へ出でにけり。伊賀守其の趣を懇に尋ね問ひて、對決に及ぶまでもなく、大いにいかりて、「孝は百行の始めなれば、不孝百惡のもとゐなるべし、たとひ母のいふ所僻事なりとも、孝の道を存ぜば、獨りある老母に隨はぬ事あらんや、諺にも、親ものに狂はば、子は囃すべしといひならはせり、其の上是れは母の理至極なり、亡父が遺言を背くといひ、老母の命にしたがはざる不孝不順の過ちと云ひ、旁以て曲事なり、汝ごときの者を其の儘洛中におかば、又よの人にも惡行あらん、はや/\京を出でよ、延引せば計らふべき事あり。」との下知にて、言葉もなく/\うち行きぬ。

○綾の小路にて板かへしする日、家主の女房屋根にあがりしが、いかゞ踏みはづして落ちたり。となりの女房其の下にゐあはせ、あたまの上へころび掛れば、くびの骨ちがひて死にけり。其の女の夫理不盡に、態と殺さんとて落ちたるものなり、是非こらへまじきといひ所司代へ出づる。伊賀守殿、「餘儀なき存分なるまゝ、幸ひ手本あり、右家主の妻を我が女の居たりし處に置きて、その屋根にあがり、最前のごとく落ちかゝりて、にくしとおもふあひての女を殺せ。」とあれば、言葉もなく歸りつる事よ。

○板倉伊賀守殿、齢七旬に餘れば、功名かなひとげて身を退き、嫡子周防守殿次いで天下の所司代たりしに、上京にある家主あひはてけるに、二十あまりの子あり。母は繼母、「其の總領には家を渡すまじ、我に跡をしれと夫の遺言なり。」といふ。總領は眼前の親子たる我なのけ、別に誰か家をしるべきぞと怒り、所司代へ雙方出でけり。母の意趣をいふ口上に、妻の申すやう、「後家と書きておかにとふれ參らする。」と。周防守のたまふ、「家とゞのむとあれば、其の儀ならば我等のしらでかなはぬ事にこそ。」と申す時、「まづ立ちて歸れ。かさねてせんさくしすまさん。」となり。宿に戻り、「公事かちたり、さらば尼にならん。」と親類いひ合はせぬ。再び裁許とて又決斷の座に出でたるに、「それには髮を剃りたるか。」と尋ねらるゝに、「なかなか、二度夫を持ち、うき世に望みあらばこそとおもひさだめ、出家のすがたにまか

りなりて候。」と、其の言下に周防守殿、「さらば出家とは家を出づると書きたるまゝ、此の座敷よりすぐに家をいでよ。」と。

○刀のうりかひありし。もちぬしは二尺三寸にあまりたれば二尺五寸といふ。又買ふ人はいや五分や三分ながくとも、二尺三寸というてあらそひけるが、めききするうへにこそ、其のあらひはあらんずれと、鍛冶の許に行き聞きてあれば、「両方ながらよく見られた。これは二尺四寸といふものぢや。」

○河原の院は融の左大臣の家なり。陸奥のしほがまのかたをつくりて、潮をくみよせ、鹽をやかせなど、さま〴〵可笑しきことをつくし住み給ひける。大臣うせ給ひて後、宇多院には奉りたるなり。延喜の御門たび〳〵行幸有りけり。院のすませ給ふ夜半ばかりに、そよめきて人の参るやうに思され見させ給へば、緋の装束うるはしくしたる人の、太刀はき笏とりて、二間ばかりのき、畏まり居たり。「あれはたそ。」と問はせたまへば、「こゝの主に候翁なり。」と申す。「融の大臣か。」と問はせたまへば、「しかに候。」と申す。「さはなんぞ。」と仰せらるれば、「家なれば住み候よ、おはしますが忝く所せく候なり、如何仕るべからん。」と申せば、「それはおとゞの子孫の我に得させたれば住むにこそあれ、我おしとりて住むにはあらず、禮も知らずいかにかくは怨むるぞ。」と、高やかに仰せられければ、かいけつやうに失せぬ。唯の人はそのおとゞの靈鬼に逢ひて、さやうにはいかで言ひてんやとぞ、時の

人感じ奉りし。

○京にて家を買うたる者、其の家につきたる廊下あり。これをもこぼし取らんとす。賣主「念もなし我は家一つをこそ賣りたれ、廊下のことはおもひもよらず。」と、牛角に理を言ひつのりに、一向すむべき道もなければ、互に公儀の沙汰となる。所司代多賀豐後守掟して、「廊下はこれ通路のためなり、後につゞける家の方へつくべし。」と下知せられたり。

○春のころ野遊びに人あまたさそひ出で、このもかのもを見る折から、胡蝶の三つ連れて飛ぶを、「蝶ならば二つか四つこそあるべけれ。」といふに、兒のうちより、

一つをも千鳥といへる名のあれば三つをもてふといふべかりけり

○平安城にて質に具足をおき、うけんとする時に見れば、鼠が絲をくひたり。うけぬし難儀に思ひ、いろ／＼理をいうてなげきけれ、さらば利足をたりとも、少しはゆるされよ。」とわびけるに、質屋さらにきかず。剰へ鼠を一つ殺して、「これが藏にゐて具足をくひたる科人なり、然る間成敗して候。」ともたせつかはす。しちおき口惜しき事に存じ、所司代へ罷り出で、始中終を具に申しければ、多賀豐後守下知せられけるやう、「扨は鼠は盗人なり、盗人の居たる家なる間、闕所せよ。」とて、家財をこと／＼く取り、しちおきに出されけり。

ありがたき心の水也なり

窮鼠還噛猫とされば、いくた處任惑なる鼠根性なるかな。

○九重の内、油の小路通りに、何事やらん雑人あつまり、かまびすしく物あらがうていあり。沼の藤六行きあはせ、立ち寄り様子を聞きゐたるに、一方は丹波より荏をもつて、賣りにのぼりたる商人なり。一方は京の油屋にて亭主なり、亭主は「荏をかひて買はん。」といふ。丹波の者は「昔よりひきに賣りつけたり、今更何事にかひては賣るまい。」といふ。口論はてず。時に藤六、「近頃さしいでなれども、洛外にてはともあれ角もあれ、都の内ならばなか〳〵ひてとる事はなるまい、其の仔細は、いろはにゑひもせす京と定まれり。ひずに買へ。」と。

□親子諍ひ子が俳事と云ふ題出でたれば、徹書記、

落葉かきに親子いでての諍ひはおゝりなりけりからさきの松

□北野の神前にて祈禱連歌あり。

かくなるもいかさすらへの果て

この神のかへり北野に跡たれて

此の附句執筆かきとむると同じく、社頭震動し暫くやまざりつるは、神も大いに納受し給ふにやと、

人皆感じ申したるよし。

○陰極まつて陽生ず。

　あたゝかになれとて寒き春の雨

陽きはまつて陰生ず。

　寒かれとあたゝかに降る秋の雨

　蛬そのおやくはいかならん

といふ句あり。紹巴の非言に、蛬の先祖御尋ね詮なく候。

○人ありて所司代に出で申し上げけるは、「我等の家へ常に参る乞食の候、ゐざりにてあればふびんに存じ、折節は庭のすみに伏せりなどいたし候ひつるが、外より盗人の入りたるとも見えざるに、飯を仕る釜の失せ候、案ずるに彼のゐざりの取りたるものならん、如何。」と申せば、多賀豊州聞いて、「其のゐざりはいづくに居るぞ。」とたづね、「さらばそちは歸れ。」とて戻されたり。後かのゐざりを、物取らせんとなり、参れやとよびよせ、「ふびんの姿なるに、あれにこゝなる釜を取らせよ。」とて、失せたりしほどの釜をやりければ、彼のゐざり悦びあたまにかぶりて歸る。「さては件の釜をぬすみたる事うたがひなし。」とて下知せられる。

〇一「そちは生得貧乏なる體を見およびしが、今はひきかへて、けしからず有徳になりたるよし風聞するは、實か。」と問ひければ、「なか／＼の事や、我等ごとき者をも、富める人の内にもたするかよ、總別無力にて人の物をばかり借り居たる身の、當時わづかの財へあるを見て大いにいひなすよなう。是れをおもふに、牛には大いなる角二つあれども、見つけたれば目にも立てず、若し馬に角あれば、ちひさけれども目に立てて、名をたかういふ心是れなるべし。」

　葛かづら先へ這はずと後へ這へ

紹巴の非言に、御國元のくずかづら御折檻が尤も／＼と。

〇そのかみ大樹より仰せ付けられ、彦坂九兵衛駿河の町奉行たりし時、藥院のとて藥のつゝみ紙を馬につけくだりしが、馬田へころび紙をぬらせしに、荷物にそひたる侍腹立して、思ふさま馬追を叩きたり。其の上に町奉行へ出でて、「馬追に辨へさせられよ。」とあれば、九兵衛聞いて、「尤もなり、さりながら辨へさせたらば、又そちをも叩きかへさんずるはいかに、叩かずば道理至極せんものを。」と申されゝにぞ、たゝかれんがいやさに口を閉ぢぬ。

〇京にて銀子三拾貫目持ちたる者、命終る時妻にむかひ、「我が先腹の男子六歳なり、十五まではそだてて、十五にならば銀を五百目わたし、いづくへも商ひにつかはすべし、殘る銀はそちまゝにせよ。」

と、遺言して書物をし渡しぬ。彼の子既に十五になる時、右の後家銀子を五百目子にやり、「何處へも出でよ。」といふ。子、さりとも難儀なる旨、所司代板倉周防守へ申し上ぐる。母と子とを呼び出し、委細にいはせ聞き給ひて、其の町の年寄どもにかの親の行跡はとあれば、一同に申す樣、「世に越えたる理知義者、又才覺もあり、公義の御用をとゝのへ、町の重寶にて御座候へ。」と。周防守殿後家に問ひ給ふ、「その銀子は元の如くありや。」「なか／＼あり。」「さては汝が夫、日本一の思案者なりしぞかし。其の故は、人の親として子に物のをしからんや、女房に取らするといはずば、銀子をみな遣ひすつべしと、工夫の上にていひ置きたるなり。然る間、後家に取らするといひし三拾貫目をば子にやるべし、子に遣はすといひし五百目をば後家にわたし、それをもつて寺參りの香花にあて、それは一圓子に打ちかゝり、心の儘に馳走せられ、安々と世を送れ。もし子があひしらひあしく、氣にあはぬ事あらば、こちへ知らせよ、曲事に行はんぞ。」と下知ありつれば、聞く者皆涙を流さぬはなかりき。かくて座を立たんとするに、件の親がいとこたる老人とて、書物を一通持ちて出で、周防守へ捧げていはく、「さだめて一度は子と後家と、出入りあらん事うたがひなし、これを上げて申せ、後家にいひわたしたるは始めの日附なり、それへ書置は日附後なりと申せし、今仰せ出さるゝ御下知を謹んで承らんため罷り出でたり、親が存じたりし心底と、御批判の趣すこしも違はず。」と、手を合はせ禮して

感じたり。

いやな批判

○母の娘にむかひ、「そちは早年二十になれど、つひに学なうちすべきへ知らいで」としかりけるを、隣なる家主の女房居あはせて、「それやうにおひたてなさうに物はいはぬものぢや、これのお五はことし二十にこそなられ、智慧もつく時分があるものぞ」と言ひなだめければ、「そなたより我がうみの母にて、よく知りたり、あれは二十になるにすうだ」といふ。「二十でこそあれ」といさかひ果てず。かかるところへ年至極の姥来り、「何事をいうてからかひ給ふぞ。あのお五の年ならば、何のたぞれもない事か、われが處にある、とりて来て理をよまさん」と、急ぎ内に行き、大いなるふくべを一つとりて来れり。「こは何物ぞや」と問ふ時、「これでざつとすうだ、あのお五のうまれどしに、此のふくべがなりてあつた」と。うばが年代記にていよいよ知れず。

○道ゆきぶりに蛇の竹にさしてあるを見、先なる者「いかいへべうがあるわ」と。次なる者「いやこれはへべうではない、ぐつねふといふものぞ」と、互にあらそひしが、此の上の山寺に物しりの出家ありと聞き、それに行きて理をすまさんとかしこにいたる。坊主見て「どちもわるい、これはまなさうといふものにすんだ」と、二人ながらこゝろにはすまねど、物しりの批判なれば、あまりにちが

ふまいと合點す。

○一生よふかきの望みもなく、唯富貴して世を送る人あり。名を福右衛門とつき、總領を市太郎、弟を市二郎とてあり。貧者あつまり、手をつかね、ひざをかゞめもてはやしけり。ある時市二郎を始めて見たる者、「これはどなたにて候や。」と問ふに、「あれこそ市太郎殿の舍弟候よ。」とかたる。「さればかりそめ見たる體、兄ごよりの舍弟の器量はまして。」などほめけり。その一座過ぎて市二郎親に向ひて、「われになにとも名がなくば大事もないが、結びてゝの市二郎とつけておかれたに、やゝもすればうつけ者が來りては、市太郎の舍弟々々といふ、たうどこれが氣の毒や。」と。福右衛門きゝて、「さもあらうずる、それほどの事をばこらへよ、世の中はふせうばかりぞ、われがまへでも福右衛門といふ名をばいはずして、ひやうふつと市太郎殿の御親父とさへいふ程に。」と云はれた。

○山ふかく住む者、二人つれだち國中に出でけり。ふるまひの膳部に、螺の壺入をすうる。珍しき物なりとて、二人ながらかの螺殼を懷中して歸りぬ。一人はへふぐりといふ物と、一人はまどひきといふ物とあらそひ、寺の若衆だにこそ、かかる物をば見知らんずとてさし出したれば、よく見知りたるが故に、造作もなく、「へふぐりでもまどひきでもなし、にかはづけといふ物によ。」

○何者のおほりくだりにおとしたるやらん、信濃國の山道に烏帽子あり。ひろひきたり、かやうの姿

〻なる物世にためしなし、いかさま天人の道具か、山姥などの寶かや、老いたるも若きも、是れを見よや拜めやと、かちはだしにて走りあつまる中に、一人、「是れは禰宜の頭巾といふ物ぞ。」一人、「いやこれはありけうがりのあたまかくし。」といへば、すこしもまことにせず、「唯奥の山の刑部兵衛こそ、若き時殿の夫にさゝれて京へのぼりし者なれば、かれに見せずばすむまい。」と、はるばる持ち行き見せたれば、「是れこそ賀茂のまつりに能といふ事ありしが、一番に出た三番叟といふ物よ、これこれ、されども顏から額がうせたほどに、必定三番叟のぬけがらといふ物ぞ。」と。

○石榴を見て、一人はざくろといふ。一人はじやくろといふ。あらそひ遂にやまず、あたりの物知りに問ひければ、「二つながらかたことなり。にやくろといふがほんのことよ。」

○山中に祝言の事あり。たこを買ひにつかはす。使そのかたちを問ふに、功者めきたる男、「つるにいぼあり、いかに似たる物、わるうすれば見ちがふる。」とをしへけり。堺の津に出でて大道をたづぬるに無し。ある横町にをしへのごとくなるものありて、穗俵をぞ買ひける。山に歸り彼の功者に見せければ、「これは蛸ではないいかぢや。」「いやたこにすうだ。」「さらば殿の御目にかけ、理をすませ。」とて見せ參らせたれば、「蛸でもいかでもなし、からさけといふものなり。」

○人ありて晝は振舞に行くといふ。一人いふ、「ふるまひにてはなし、ふれまひがよし。」と、二人の論

つひに果てず。折ふし廻國の沙門あり、「理は左右方ともにあきらけし、予が決するいはれを聞け、兼日より人をまはし文をつかはしよぶや、よばるゝをばふれまひといつて其のくらゐおもし、自然天然と行きがゝりに、とりあへずふるまひふるまはるゝをば、ふるまひとよんで、くらゐかろくよし。」

○始めは富みて世を過しける人、俄に落ちぶれたればせん方なく髪を剃り、なにのあてことはなけれど田舎にくだり、傘をさしかけられ、位だかなるふりをしてありく。人是れを見れば、「なにとしたる家高ぞや。」ひとりがいふ、「唯公家といふ人であらうまでよ。」「いや一とせわれも在京して、公家たちのふりをも見たりしが、あれやうなるは見ぬぞ」と。ひとりがいふ、「くげでなくば十げといふであらうず。」と。

○山家にはれがましき客を請ずるとて、白鳥をもとめにつかはす。使、鳥のすがたを問へば、たゞ白き鳥なりとをしふる。心得て市に出でたづぬるに無し。あの棚に白き卵のやうなるものあり。是れをしりめにかけ、白鳥かはう／＼とよばはるまゝ、かしこき亭主にて、白鳥をうらんとよび入れ、まんぢう二十を一貫にうりけり。取りて歸り庖丁人に見せたれば、疑ひもなき白鳥なりと、切りて中を見るに大概小豆の風味あり「今年のつきがたかい／＼といふたは道理かな、いくらの白鳥か、此のごとく喰らふほどに。」と。

の人のかよひもまれなる山中にて、座頭の琵琶を負ひ、岨のかけぢをつたひゆくに、薪をひろひ居たる賤の男これを見附け、むかうの谷に友達のゐけるを高聲に呼び、「やい〳〵あの杖つきなしの出たるを見よ、あら珍らしや、つひに一期に見ぬ蟲や。」と呼ばはる時、「此の十年許り先に、あの蟲が此の道へ出てあつたが、その年そばがよかつた、今年もさてはそばがよからうずよ。」と。

○鳶は木にとまりゐるに、蘆邊にすむ鷺にむかひ、「そちほど色白く、いつくしき姿は無し、如何にもものいひが粗相にて賤しいわ。」といふ。鷺腹を立てて、「そちは鳥の中にても、四十八鷹の内に入つて、空をたちまふ風情のよさ、そしらんやうもなきが、物ごしのくぜう、ながら、聞かれぬ、我が如くことに葉ずくなならば、よからんものを。」と、こなしこなされ、かくてはこらへられず、誰そに批判をうけんと、おのれ〳〵が土産を用意するに、とびは例の腐りたる鼠をもとめ、鷺はかひ〳〵しくとび躍る鰌をとつての、鷲の棲むなる峯に飛ぶ。鵰の聲を聞きて、「鷺はいかさま言便なじかく當風にあへり、鳶はなにとやらいゝまでにてよからんものを、後のりよ〳〵が長過ぎて聞かれぬ、古流なり、とかくまけよ〳〵。」と、これをや、草のとに國かたぶくとも申しつべし。

○道の傍にはにふの小屋あり。かれに住む者、夜半過ぎて人しはぶきもなし、しづかに通る音を聞き

附け、女の聲にて内にいふ「なにものぞ、さて此の路のわろきに、いままでいねずしてうと〳〵とありくは。」と。男の聲にて「あれやうに今時分ありくに別の者があらうか、ばくちうちか、數寄者か、連歌士か、三色の内でなくば盜人であらうまでよ。」と。

○風呂に入りて聞き居たれば、一人吟ずるやう、「山高きがゆゑにたつとからず」と。一人耳をすまして「心がけたることや、庭訓をよまるゝ。」といへば、一人「あれは庭訓ではない、式條といふ物ぢや。」と。

○ある者山路を行き、不思議に白鳥をひろうたり。更に鳥の名を知らず、人に向ひかくと語る。聞く者「それは時鳥であらうず。」といふ。「いや大いなる鳥なり、なか〳〵小鳥ではない。」「さりとも時鳥にすうだ、たゞとる山の時鳥とて、昔からある事よ。」と。

曾而那以合點

○何のとりえもなき者あり。ほど近にさすがなる侍のすまれけるへ、明暮に出入するに、武藏鐙の下の句の心や、問ふもうるさき樣なりしかば、小姓にいひをしへ、件の男來りたらば、長數珠といへとなり。案のごとく暮方に來れり。小姓出でて「殿のいつも噂を仰せある。」「何とや。」と尋ねければ、「そなたをば長數珠ぢや。」とは、くるに草臥れたといふ事なるを、彼の男は逆樣に得心し「さうであ

ちう、くるがおそいといふ事のこと。

人の上のふつけ鳥のしだり尾の長物がたりこそあるべし

○無上の果位にのぼらせ給ふ釋迦だにも、二月十五日の夜の雲にかくれたまひし有様を、見てこそ知れとや寺々に、ことわりがほの涅槃像、かくるたのみある後の世を、知るや知らずや参りけるに、なかにことさらかたくななる姥が、うなづきいふやうは「しやかも果報な人や、やれ今日のねはんにお死にあつた。」

○山中にて来更著中旬に、農夫二人つれだち出で、一人は山の北原、一人は南原一町ばかりをへだてて畑をうちけるが、南原にいたち一つはしり出でたり。見附けしを幸ひに、やにはに棒をふりあげ、打ち殺さんとしけるを、北原より「やれ彼岸ぢやにおけ、ひらに彼岸ぞ、たすけよ」と呼ばはる。さらばとてたすけしが、彼の南原の男「さて／＼つひに彼岸といふ物を見なんだに、今日はじめて見たよ。彼岸が姿はそのまゝのいたちぢや」と。

○折々柳原の道三へ出入りの人あり。病者にむかひ「瀉するか、結するか」と問はるゝを聞きゐて、あるとき其の仔細を問ふ。「瀉するとはくだるなり、結するとはくだらぬなり。」「これはこびたる事やとおもふ砌、親類の中なる商人来りて「明朝藝州へまかり下るが、御用の儀は候はぬや。」といふ時に、

「なにと藝州に瀉する、やがて結せよ。」と。
○兒に髪をゆひてまゐらする侍從、ある朝、「われをば何ほどふびんに思しめすや。」と問ふ。兒櫛のはに水をつけ、その雫を落し、「此の露ほど大切。」なるよしあれば、「曲もなや、なんぼう奉公いたすらいたづら事や。」と、ふかくうらみける時、

露といふ心を知らぬはかなさよ消ゆるばかりにおもふ我が身を

人の身を露の命といひけるもつひには野邊に置けばなりけり　僧都源信

○始めて奉公をする人あり。主人ちかづけ問ふ、「何ぞ藝があるかや。」「されば我等の兄にて候者、かたのごとく弓を仕り候。」と。
○奉公を仕らんといふ。「何も能はなきかや。」「鼓の胴をつかん。」といふ。「それは難波かゝりか千草かゝりか。」と問ふに、「されば私箸をけつりまゐらするに、中にはほそくて、兩の端がふとう御座るほどに、大畧は鼓の胴をもつがんや。」と申されし。
○能を見物せんとて芝居錢十文つかはし、鼠戸をば入りしかど、一圓おもしろき心なかりしかば退屈して、そとへ出たきよしをいふ。番するもの是れをこらへゆるさず。「さあらばいかほどにても、錢をやらん。」とわびたるに、百とりてぞゆるしける。彼の男やう／＼垣の外に出で、笠をぬぎてから世上

なふかゐ、ふたつ三つあたまをふりて、「あけくに百ではでものぢや。」と。

○愚かなる女房の夫にむかひ、さらさらなき事をいひつゞけ、ねだれたる事あり。何といひふくめてもきかず。傍なる者に「其の儀ならば大いなる誓文を立てん。」と、扇をもつて座をたゝくたゝく「下化衆生して金輪際におつる法もあれ、さうではないか。」と喚きければ、女房ふことに思ひ膽を潰し、「それやうに恐ろしい事はいはぬものぢや。」と。

○「神々の祭禮といふも、佛閣の祈禱といふも、主のとぶらひ、親の年忌、何れが祝言、不祝言、飲むと喰ふとにもれたるやある。」と、物語りするを聞いて、「さればこそ天照太神も内宮外宮と建たせられた。」「それは何たる仔細ぞや。」と問へば、「ないもくふ下もくふといふことよ。」と。「それなれば富貴の人のくふむねになきかや。」「それこそ飯酒はおんそなへかけて、さいぐうとたち給ふわ。」

天平十三年、皇太神於二内宮南大杉下一、行基持念七日之夜、神殿自開け大聲にて唱へて曰く、實相眞如之日輪照二生死之長夜一、本有常住之月輪灼二破煩惱之迷雲一。

○月次の連歌の會に、

かま鷺は山の途中に飛びおりて

といふ句を出せり。宗匠たる人、つひにかま鷺のことばをきかずとあれば、本歌ありとも申すまじく

候や。

うつり行く雲に嵐の聲すなりちるかまさきのかづらきの山

○一句出したるに、執筆、舟が近い／＼といひけるを、とくと思案して、

舟でなし中くりあけた木にのりて

○手負には有馬の湯ほど藥はないと、人みないふを聞きたる庖丁人あり。さる所のふるまひに鳫の汁をするとてやとひければ、亭主にも問はず、客人のいくたりあるにも構はず、わざときりたるに役にたたず。亭主大いに腹立しければ、かの庖丁人「其の儀ならば別の鳫をきらしやれよ、此のきりたるは手負なり。ありまの湯にいるれば治る、大事ない。」と。

○こしをひく人をみて、「そなたの足は、つれに片足みじかい。」と問うてあれば「いやかたあし人のよりもながい。」というた。

これはなにとしたる返答ぞ。

○ばくちうちが夜半過ぎに宿に歸り、女房を起し「一世の間に、これ程嬉しい事にあはぬ。」と悦び、ふしまろび滿足するまゝ、扨は今宵ばかりは、ばくちにかちたる物よと思ひやり「いかばかりの仕合にや侍る。」と問ふ。返事に、「今宵もばくちにまけ事はまけた、されども、此のまへ五百目に買うて、

もちたる脇指を、一貫目にしかけてやりたるまゝ、一貫五百目のまうけをしたわ」と。

たゞしつゝいさうな。

○日のあるあひだを晝といひ、日のいりて後を夜といふは、いかさま仔細あらんやと思ひ、われに折角思案していとしあてたわ。」と語る。「なにと工夫したぞ。」「たとへば朝になれば、とくからおきて山にゆく者もあり、海にうかぶ者もあり、市にたつもあり、奉公に出仕するもあり、日のくるればいづれも皆我が宿々にかへりよるほどに、さてぞよるといふなるべし。又日ひんがしに輝けば、そめやはそめてかけ、ぬる者はぬりてほし、穢き物をも洗ひてほすに、いづれも殘らずひるほどに、さてなんひるとはいふものよ。」と。

物しらずか勞瘵やみか。

○盗人物をとりすまして、人なき所にあつまり、それぞれに資財をわけどりにしけるが、「唯今までありつる身のくびが見えぬ、異な事や。」といふ。一人つらをふりふり、「あら不審や、誰もこのうちにぬすみさうなる者はないに。」と。

○若輩なる者ども三人つれだち、長谷寺へ参りしに、宿のけす客にむかひ、「行水をとるべきや、まづ入堂をめされんや。」と問ふ。一人が傍に行き手まねきし、「今下女の入堂をめさるゝかといふたは合

點ゆかす」つれ聴きて「それこそわれがよく知りたる事よ。此の跡高野參りの時、男の髪を剃りて坊主になりたるを、さてよき入道やとほめつるが、今も入道になる者はないかといふにてあらん。」又一人出て「それならば兎角、入道は若い者でいらぬといへ、無理になれとはいふまいぞ。」と呼きけり。

○木鎌をもちて山へこそゆけ

といふ句を出せり。

宗匠「きがまは如何。」と申さるゝ「古歌の候。

行きやらで山路くらしつほとゝぎす今一聲の聞かまほしさに。」

○たにへんともなき者ども、三人つれだち清水へ參り、みちにて先に行く男「あの清水の觀音はなに觀音といふ物ぞ、奇特に人のたつとむ事や。」と。次なる者が「定めて釋迦か藥師か親類の觀音であらうまでよ。」と。後なる男あたまをふり大いに感じ「とかく物しりとつれだたねば理がすまぬ。」と。

○中風を煩ふ者あり。醫者のもとに行き、脈を見せければ「藥ばかりにしては治しがたき症なり、ふじ三里に灸をすゑられよ。」といふに「いづれも重ねて談合候はん。」と、いそぎ宿にかへり「さて／＼うつけたるくすしの申されやうや、富士はきき及ぶ大山なり。其のふじ三里が間に灸をせよとは、如何に病がなほるとても、桐もぐさが續くものか。」と。

灸するとて富士に煙はたやさねど猶ちか〴〵と足曳のやま　　雄長老

〇俊藏主といふ出家の子をもちたりしが、俊首座になりたる時、母の人にむかひいへるやう、「おれがむすこ坊主始め俊上すといふて聞きよかつたに、ひた物錢を入れ、揚句に今は一の俊すそになりたの。」と。

〇「なにとて芍藥をば歌によみたるなきぞ。」と、不審する者あれば、「それこそよみたる歌あれ。

難波津に芍藥のはな冬ごもり今をはるべと芍藥のはな。」

〇「猿牽めが來たわ。」と子供のいふを聞き、姥が出て、「左右は惡ういはぬ事ぞ、おさるまちとて、人のとりをかざりにおまちあるは、あの人のことであらうずれ、勿體なさうに。」と。

〇主は馬上にあり。中間槍を持ち立ちながら小便をする。主見附けしかりければ、其の返事に、「人肥えたるがゆゑにたつとからず、手槍を以てたつとしとす。」といふ。主聞き、「それやうに仔細ある事ならばせんかたなし、奇特な奴ぢやよ。」と。

〇兒のあそびに草合あり。一方より蘩蔞とて出さるゝ。侍從わきから笑止なる顏にて、「いやこれははこくさ。」となほしたり。

兒のはききにくからず、侍從殿のはめづらしすぎた。

○老いても文を好む人あり。机によりかゝりゐるられたれば、文盲なる者来り見、「こなたさまのそくさいにあることそ道理にて候へ、昔から机による人は養生の薬になり、命もながき物や。」と、うらやむ事限りなし。「そちはえならぬ時宜をいふ、なんのいはれぞ。」「いやあいはしよくにあり。」と。

○上手の碁が、今朝あし過ぎよりやつきがりになるが、いまだ一番果てぬといふを聞きて、「それは道馬になつた物であらう、はてまいぞ。」

○美濃國に野瀬といふ碁打いまはの時、

王故に歩をも馬をもたて置きてかくきやうの外に使ふ金銀　雄長老

碁なりせば劫を棄てても活くべきに死ぬる道には手一つもなし

○法華宗の寺につかはるゝ小者、飯米を買うて来り、ときしあわ非時を調へて、坊主には参らせず、おのれ一人喰らひけるが、物語するやう、「此の米を持ちて来る途中にて、或者念佛を申しかけて候まゝ、氣味がわるかりつれど、是非もなく飯にしたり。」と。坊主聞きもあへず、「其の米をば持ちて堀へ棄てよ、又おのれは早くくだしを飲みて、念佛の腹になきやうにせよ。」と。教へのごとくくだしを飲む。明朝とふ、「なにとくだりたるや。」小者、「なかなかはやなむあみだまではくだり、今一字くだりかねてや、腹中がぶつぶつといふ。」と。

○小文字ある出家、俄に連歌を稽古せんと思ひたち、みやこにのぼり、心ざしある人の許に頼みより、先づ床を見れば懐紙あり。「あれは連歌。」「いやなか〳〵。」「さて賦何木連歌とあるが、くばるはなんぞや、れんがうたとよみ、理のすみたるといふ顔つきも、奇特の客と申されし。

○宗長杵の神へ参詣の刻み、

つくやうに守らせ給へ杵の神

米をばもたず連歌なりとも

くなり〳〵と秋風ぞふく

わが恋は松を時雨のそめかねて真葛が原に風さわぐなり

「證歌の候や。」「なか〳〵。」とて、

○酢をおほくすへば皺がよる、大毒なり、かまへて酢をおまゐるな。左右もあらう、なにとして知りたるぞ。鼻のさきなる事をお知りあらぬか、我も人もちとづゝ飲めとこそ思へ、年のよりて見苦しうなるいはれに、一年中のきはまり月を、しはすとはいふならん。

○神農といふは百草をなめ、もゝたび死して百たび活くとやいふん、人は皆くすしの上手とほむるが、我はいさゝかも思はぬ、たゞ下手にすうだと思ふ。さてそちは神農の療治を受けたるか、いや推にも

知り易き事がある。目の上の瘤をば誰もいやがる物にてあり、ぬしが額にある角をさへえ除けなんだもの。

○田舎のかせ侍、長陣の慰みに誹諧をして遊ばんといひつゝ、

人はらんばうをしてさへ送る世に

とあれば、さらばつけ申さんとて、

われらは野兵糧だにもなし

又ある人の句に、

おもきかろきは戀にこそあれ

としければ、

あさがらやかたきの手棒鷹するて

○山家の者とて老いたる姥の、杖にすがり京に出でたるを、ある者ゆきあひ、「そちの年はいくつぞ。」「百に一つ足らぬ」と語るにぞ、「さてさてめいじんや。」と、幾度もほめけるを、始めより道づれしたる者、「何事あれば感にたふる。」「さればよ、いきめいじんとはあれをやいふらん。」と。

○夜も未だあけやらぬに、中間なる者戸をあけ、「さてもおびたゞしく雪の降りたるわ。」といふ聲しけ

り。亭主聞き付け、「如何程ふりたるぞ。」と問へば、「されば深さは九寸ほどつもりて候、幅は知れぬ。」と申したり。

○或僧若衆のかたへ、

君をのみ戀ひ暮しつゝ手すさびに前なる山の花をこそ摘め

此の御聯句を心得たる出家居合はせ、對のむねにて返歌したりし。

われ蝨たいおかしつゝ足もんぢやう後の藪の竹をこそきれ

○「ゆうべの説經に姥の泣かれつるは、何の哀れをわきまへてぞ。」と問うてあれば、「何も我聞きわけたる事はなかりし、隣のかゝのあやめさめと泣かるゝ程に、定めてあしき事ではあるまいと思うて泣いた。」

○人皆連歌をしならふとて、一順の月次のなどとてはやらかす羨まし、我もちと稽古せんとおもひたち、宗匠する人にむかひ、「大體一句のしたて如何なる心持にて工夫いたし候はんや。」「さればよ此の道を學ばんとすれば、いと深く藻屑もよらぬ和歌のうらなれば、言葉みじかうききたかく、心を深う物あはれに、華奢風流につくやうに。」彼の人聞くと同じく、「はや合點まゐりて候、一句申さん。

くびぎはや二季の彼岸に茶香杵。」

「心」はと問はれ、「されば水のわたるに、くびきはにおよぶは深ければなり、物のあはれは二季の彼岸、花香風流なるは茶と香と、つくやうには餅つく杵。」

○十月の五日は達磨忌とて、例年禪家に法事あり。其のつとめにあはせんと、喝食をむかへに人をやりたり。御親父は莊屋なりしが、迎への僧に出でていふやう、「あすはそなたの達磨忌の、こなたは又麥まきなり、いそがはしくて人ひまなし、えやるまい。」とぞ申しける。

○山より里に出る者二人つれだち、ある河の橋をわたるとて、水底をありく魚を見、一人がいふ、「あれは口わき白し、鮎なり。」と。つれのいふ、「鮎ではない、鮎ならば飯がつきてあらんものを、あれは鯖であらうず。」先に鮎といひつる者、「いや〳〵鯖ならばおはれてあらうが、一つありくほどに、なかなか鯖ではない。」と。是れをおもふに、一人は鮎の鮓ばかりを見附けたり、一人はさし鯖ばかりを見附けたればなり。

○「昨日吉太夫墨田河をして皆に泣かせたれ。」と語るを聞き、竟に能といふ物を見た事もなき者、あけの日早朝に行きしが、翁せんざいふをしまひ、三番叟の時さめ〴〵と泣く。見る人、「是れは何事にや。」と問ふに、「あの墨田河があはれさに泣く。」といひしは。

○連歌する人の小者正月の末に寄り合ひ、おもふ事さんけ物語の後、「朝とくよりともし夜更くるま

でつむる辛勞、いやにはあれど、さりながら今一季あさらうか知らぬ。」

○借錢をこひに、幾度人を遣はせどもなす事なし。さらばとて直に行く。これの亭主道善に逢はんと言ふ。亭主出でて、「道善は留守に候。」といふ。「いやそちは道善ではなきか。」「扨こそ、其人は、亭主の道善が直に逢ひて、留守といふをうたがはるゝかや。」と。

○馬を買うてひき來たれば、見る者ごふやくといふ。「いや餘りのごふやくでもあるまい、始めの騎馬の子ぢや。」作の男をかしがり、「騎馬にてもあれ、荷馬にてもあれ、ごふやくにはすうだ。」と。

○唐船の謠に、身もがな二つとあるを、一人はいもがな二つとおぼえたり。一人は身もがな二つとおぼえいさかひになり、此の在所にて問はん人なし、寺に行き住持の僧に問はんとて、二人つれだちかくといふに、彼の僧本をよむまではなくて、「一番うたひ給へ、聞いてすまさん。」とうたはせて後、「一處には身もがなとあれども、唯いもがな二つがよい。」「如何なれば。」と尋ねければ、「日本人も隨喜せりとあるほどに。」

○酒の出たるを一口飲みて、「扨々よき御するで候。」とほむる。人みなわらふ。腹立して、「我が物を知らねば、かならず人の金言をえ聞かぬぞや。かやうによき酒をば、昔から御するといふが本にてあるぞよ。」「それは誰に聞かれたるぞ。」「いや楊貴妃に、先づ天上の在するとつくつたわ。」

唯　有

○伊勢の桑名に本願寺とてあり。一代の住持秀海長老は、七日以前より死期を辨じ、春の時正法說の後、十念をさづけ、高座にありながら合掌して命終す。秀海存日に報恩寺とて名ある侍の屈請せらるゝ其の刻み、弟子祐光師の長老にむかつて、「振舞とあれば、何方も崇敬のあまり賞味を專らとす。しかはあれど、一言の褒美もなければ、亭主氣を失ふ風情まゝあり、明朝のもてなし超過ならん、相構へて失念なくほめられ候へ。」とあれば、異議なく合點し、即ちかの殿に臨めり。歷々と座列す。幕をあげ給仕膳を持つて出で、屹とつくばひたれば、長老「報恩寺殿々々々々。」とよびかけ、汁も菜も見もせいで、御馳走と申されたり。弟子祐光にらみければ、うなづいて「わすれぬさきに。」と。殊勝な。

○下總國とかや聞く。墨染の衣きて掛絡をかけたる僧行脚す。又武士の馬上にて行くにあふ。かの僧愚鈍なり。覺えたる事とては、天下泰平國土安穩、此の一語の外は知らず。さるまゝ彼の侍をむつかしく思ひ、掛絡をはづし懷に入るゝ。即ち馬より飛び降り、「敵を見て旗を卷くとは如何。」とありしに、言下に、「天下泰平國土安穩。」と、武士問訊す。

運は天にあり、もちあはせたる竹槍にて大敵を拂つたわ。

○長岡越中殿、伏見より雄長老のもとへ、旗棹をもらひに使者のありし時、狂歌、

呉竹のふし見にあらではる〱と京まで切りにのぼり棹かな

○途中にひとりの姥やすらひ、物あはれさうに泣きゐたり。行きあうたる者「何事のかなしみありてそちは涙にむせぶぞや。」と問ひければ、「さればとよ、あれへ行く男を見れば、かもんのかふしもた腰につけ、傘をうちかたげ、ふところにさゝらのやうなる物の見えたるは、うたがひもなき説教ときなり。あの人の胸の内に、いかほどあはれに殊勝の事のあらうぞよと、おもひやられて袂をしぼる」と。

たゞありの人を見るこそ佛なれ佛といふもたゞありの人

いさゝらば泣いて手向けん七夕に涙より外身にもあらばや

○富士の人穴の勧進というて、門々をありく者有り。「不思議や人穴の上に堂が建つか、又常燈をともしほさんとの事や。」と問ふに、彼の聖おのれが口をがばとあきて、「此の人穴のくわんじんなり。」と。

○長老達四五人休座の物語り程過ぎ、あげくに、「一文は無文の師として、學解なきも法輪に望むは常の習ひなり。誰が身の上もおのれとは知らず、くせがあらば互にいうてなほさん。」と、其の癖々をいふ中に、一人はそと座を立ちて歸り、うつけをつくし、われ〱のはぢをあらはすなるべしと自讃し、

弟子にむかひ、「左はありながら、我にもなにぞ癖があるといふか。」と問はれければ、「いやなにとも癖は別にない。唯談義の下手ぢやと申す。」といへり。

弟子の口上正直なるかな。

○學もすくなう療治も秀でたる覺えなき醫者の、田舎より堺の津に來り、日をかさねてもしか〴〵崇敬する者なければ、たしなみしお足もとぼしくなり、すこ〳〵と舊の舊里に歸らんと思ふ曉、

假染のすまじき物はやぶくすし自然乞食となるぞ悲しき

○宗祇東修業の道にて、人謎をかくる。

ちやんきのもんきなに

祇公、「富士の雪。」といへり。其の心は何としても解けぬとなり。件のなぞをかけし人、見るが内にきえて跡なし。

○夢庵堺の津におはしけるに、方々より年の内の立春、又元三の發句などあまりのぞみおほかりしかば、内の者に、「かまへて誰より申し來るとも、所勞の事ありというて取次ぐべからず。」と、かたく制し休息ありけるが、正月五日の朝とく、未だいねておはせし所へ、内の者そとうかゞひけるやう、「ある方より、子日の發句所望の由申しこされ候は如何。」「兼てよりいひつけけるを。」とて叱らる。

「いや祝儀に料足三貫參りたるわ。」としけるにぞ、「そんならばいでおきて發句せん。」と。

○本願寺の門跡、ある冬堺の津に下向ありし時、男女みな〳〵迎へに參りぬ。門跡輿よりおりて、住吉大明神にむかひ、手をあはせ念誦し給ふを見、ひとりの姥宿に歸り、「あの住吉といふお人はなにとしたお人やら、本願寺さまさへ、お輿からおりてをがませられた。」と。

　讃念經の一心不亂聞き得たり決定の儘。

○西行内宮のふしをがみにて、

　何事のおはしますとは知らねども忝さに涙こぼるゝ

○親である人お聞きあれ、錢をせぬとは、かたことなり。もつともらしきいけんなれど、そちが錢をばうらかせぬか、いはする事をおもへたゞ。

○母におくれたる者宵栢のもとに來れり。愁傷のほどおしはかりぬ。わづらひは何にてなど問はれける時、「はじめ血の道にて候を、醫師の見そこなはれ、風の療治をせられ、藥ちがひにて候ひつる。」と申しあへり。宵栢法印、「おう〳〵いつれ一度は、たれも藥ちがひがあらふ。」と。

　人を送りてかへる夕暮

身はいつの煙の爲に殘るらん

○正觀音經に、毘舍利人民平復如本と說きて、現世に五種の鬼病を除き給ひし阿彌陀なり。天竺、百濟、和朝に傳ひ來りし善光寺の如來と拜したてまつる。彼の堂の柱に蟲の食うたりし歌、

待ち侘びて歎くと告げよ皆人にいつをいつとて急がざるらん

○莊周が夢に蝶になりたるとやせん、蝶が夢に莊周になりたるとやせん。

百年は花にやどりて過してき此の世は蝶の夢にぞありける

○親鸞聖人の和讃に、すなはち往生すと書き給へる詞あり。然るに參詣の中に、まつたき姥のありて同行の人にむかひ、「唯今の一句を聽聞せられ候や、おすなもおはちも御往生との上は、ましてわれらが往生なやこ」とて感涙をぞ流しける。無量壽經、若人無二善本一不レ得レ聞二此經一といふ世尊の金語にあへり。

○はれがましくなみ居たる座敷にて、ひた物ねぶる者あり。そばに居たる人笑止がり、膝をつき起したれば、目をするかた〳〵に、「やれ〳〵談義の座敷かとおもうたよ。」

○一人は兎も角も世を過しかねず、一人は手前おとろへたるに、舊友兩人出合ひ貧なる身の、しみじみとほしき物語にて立ちたる跡より、

ある時はあるに任せて過ぎて行け又なき時はなきに任せて

とよみて送り返歌に、

ある時はあるに任せて過ぎしかど又なき時はここそ任せね

我が世帯あがる雲雀の如くにてさがる事こそ矢よりはやけれ

○普光院殿御影に、

面影はうつすもやすしとにかくに命は筆もおよばざりけり

年よらば飯やはらかにそつとくへ酒は過ぐとも獨り寐をせよ

憂き事も嬉しき事も過ぎぬればその時ほどは思はざりけり　夢庵

捨て果てて身はなき物と思へども雪のふる日は寒くこそあれ　西行

○住吉の牀菜庵に居住の時、

住吉と人はいへどもすみにくし錢さへあれば何處も住みよし

○客をえて食の用意をしけるに、亭主はしりまはり「たまさかの來臨なるに、いかなるめづらしき物もがな」といふ。七つ八つなる子ありて「とゝ／＼、納戸に鳩がたんとあるわ。」

○大名の前にて座頭のひた物ねぶるを見給ひ「何の仔細にそれほど眠るぞ。」とあれば、「昔より春は蛙が目をかりると申し傳へて候。それはよき日の事に候はんや。我等の樣なるあしき目をもかり候は、

よく〳〵蛙のよりあひに、目のはやる仔細御座候や。」と申しける。

○ある庖丁人のいひけるは、「誰も常に山の薯蕷より、野老は一倍おもしろいものと仰せある、我等はさやうに一向おもはぬ。其の仔細は、野老と薯蕷とを調へて出すに、にがきところはいつもかへる事あれど、わるういはるゝ薯蕷のうまきが殘りて、かへりたるためしがない。」

○後京極攝政殿にはなれ給ひて愁傷のあまり、

昨日までかけとたのみし櫻ばな一夜の夢の春のやま風　定家卿

○宮づかへする侍あり。人まねして清水へ千度詣でを二度したり。後傍輩と雙六をうちまけて、いたくせめければ、「われ持ちたる物なし、清水に二千度參りたるあり、それを渡さん。」といひけり。聞く人笑ひけるを、勝ちたる侍、渡さばえんと、其の口より精進し、三日といひける日清水へつれまゐりいふまゝに文かき、御前にて師の僧よび、事のよし申させ、二千度まゐり某に雙六に打ちいれつと書きて取らせければ、請取り悦びふし拜みて出でけり。まけ侍は思ひかけぬ事にとらへられ、牢屋に居にけり。とりたる侍は徳つき、司に成りて樂しくぞありける。目に見えぬものをも誠をいたしとりければ、佛あはれとおぼしたりけるなんめりとぞ、人いひける。

○山科の道づらに四の宮河原と云ふ所、袖くらべとて商人のあつまる宿の下司ありけり。地藏を一體

作り、開眼をもせず櫃に入れ、世の營みに紛れ程經忘れけるに、三四年過ぎ夢に、大路を過ぐる者聲だかに人を呼ぶ。何事ぞと聞けば地藏を呼ぶ。おくの方よりいらふるなり。「明日天の帝釋の地藏會し給ふに、參らせ給へ」といへば、小家の内より「參るべけれど目も見えねば、いかでか參らん。」といふ聲すなり。打驚き、何のかくは夢に見ゆると、思ひまはすにあやしく、夜あけ奥をよくよく見れば、置きたりし地藏を思ひ出でて見出したりけり。これが見え給ふこそと思ひ、いそぎ開眼し奉りけるとなん。

佛にも實の慈悲はましまさず思ふ人をぞおぼしめさるゝ

世の中は幼き子の面ぎらひみしがたきにぞ音は泣かれける

竹馬をいまは杖ともたのむかな童あそびを思ひ出でつゝ

○或者戀慕したる若衆の東國に下るを、かなしみの涙とともに大津までおくり、なくなくしる谷越をのぼる。清水の南に若松が池と云ふあり。其の邊にのぞみ思ふ、命あればこそかかるうき目にもあへ、不如身を投げて死なんにはと、帶をとき池に入り、頭ぎはまでつかりたるが、思案かはりて急ぎ陸にあがり、

君ゆゑに身を投げんとは思へども底なる石に額あぶなし

○石山寺にて連歌興行の事ありし時、公家達の交はりなれば、少し直したき言葉をも恐れていはず、膝を立てよほしけるが、大いにこまりはてて、宿にかへりてかくなん。

今よりは望みもなしやこの御會連歌も膝もむりやりにして

敷島の道をたゝねばすぐにゆけ入江小島に舟よせずとも

○夢窓國師住吉參詣の時、

来て見れば愛も火宅の内なるを何すみよしと神はいふらん

明神の返歌、

松風の聲の内なるかくれ家はむかしも今もすみよかりけり

○京の町を大根賣り、大こかう／＼といふて通りける朝、世をまなぶ僧の、二重韻を見て居たるが、彼の大根うりをよび入れたる。「大根をめすか。」と問ふに、「いな、そちがうる物を大こといふ、大いなるかた言なり。元魂魂の韻について根にすうだ、相構へて此の後は大こといふべからず。」と教ふる。商人「こゝな坊主はなりふりも人がましきが、大こを五十本も二十本も買はるゝかと思うたれば、一向錢も持たれぬくせで、つきもない事を言はるゝ」と、散々惡口して出でけり。

醒睡笑　卷之五

婲心

○夢庵は常に牛に乘りて遊行ありしに、月しらけて興ある夜、野に出でらるゝに、牛芋畠へひきゆく。畠主腹立しわめきければ、「こらへよ、歌を詠みてそのことわりを聞かせん。」と、

　月も見ずいもが子供の寐入りたを起しにきたは如何あるべき

○もとは都に住みて子ども五人持ちしが、住み侘びて筑紫にくだりし。或時妻の方への文に、絹十疋綿百把まゐらする。たゞし僞りなりとかきたり。その返事に、

　心ざしあるかたよりの僞りは世のまことより嬉しかりける

となんいひやりける。女房のおもはくためしなうこそ。

○昔語に、女院へある時おほきなる杓子をあげける事ありし。御覧じ始めなれば、なにとも御知りなくて、左右へ御尋ねあれども、おなじく存ぜずと申さるゝ。されば下司に問へ。」と仰せある時、おはしたに右のむねを尋ねらる。聞く者をかしがりて、「名を存じたる者なし。」と申せば、女院の仰せあ

あやう「われはこれを推した、鬼の耳掻であらず。」と。

　思ふべし人はすりこぎ身に杓子思ひあはぬは我ゆがむなり　　時頼禪門

○細川幽齋公の姉御前に、宮川殿とかやいうて、建仁寺の内、如是院といふにおはせし事ありき。長岡越中守殿より、大津にて米を百石参らするよしの文を見たまひ、その返事に、

　御普請の役にもたたぬこの尼が百の石をばいかでひくべき

とありしを、げに理やと、即ち車にて送り給ひし。

○こぞの宮川殿子息雄長老頭痛のなやみと聞き、とつがはへ湯治し給ひし時、おとづれ人をつかはし給ふたよりに、

　御養生の湯入の心しづかなれやとつかはとして上り給ひそ

○夫の心儀にかはり、妻に暇をやるといふ。とかくことばなく出ていなんとするとき、あたりに馴れし女房あまたとぶらひ来り、「とてもかなはぬ仕合なれば、身に添へん物をもなど認められぬぞや。」「いかな殿ほどこれしき物のなにかあらん。殿を置きて行くからは、なにも身に添へんとは思はぬ。」と語るを、ひそかに聞き、やるせなき心つき、ながき別れまでに添ひし事とか。

○ある大名の扶持を受くる座頭あり。茶をひかせられしが、呑みて見給へばあらし。おほきに機嫌そこね

しに、

　粗くとも我がとがのみと思すなよ茶臼に目なし碾人にもなし

このことわりにて事すみぬ。

○美濃國に石谷といふ侍あり。齋藤山城守と同心にて鷺山の城にこもれり。寄手は齋藤新九郎とりまき、やう／＼落城におよぶ砌、かの石谷文武に心がけの功あるををしみ、矢文を射、使者をたて、是非出でられよ、未練にはなるまじきとことわり、返しに、

　命やはうきなに替へん世の中にながらへはつる習ひありとも

同じ時妻女のかたへ、

　靡くなよませの内なるをみなへし男山より風はふくとも

二字飜案に返し、

　靡くまじませの内なるをみなへし男山より風はふくとも

と書きてつかはし、國の內花藏院といふ比丘尼所に走り入りて、むなしきあとを訪ひしとなり。

○普光院御所へ重寶の劍を進上す。卽ち科人を召し出し、きりて見んとひき据ゑたるを、あなた此方へなほして斬れとある。其の時かの科人「しばらく待たせられよ、存ずる旨を申さん」と、

洗ひ乾す賤が襤褸のさをつくみ引き直さねば斬られざりけり

是れをきこしめされ、「やさしき者の心や。」とて、命を許されけるとなん。

○備中國高松の城守を清水長左衛門宗治といひし。先の太閤羽柴筑前守殿の時、大軍をもつて水攻めにし給へば、諸勢の命を乞ひたすけ、小船に乗り、河にうかび、切腹の時、

をしまるゝとき散りてこそ世の中の花も花なれ色も色なれ

○伊勢より熊野へ參詣の武士あり。おとなしの天神といふあたりにて、一木の梅さき、ふかき匂ひのもれ來るを、供したる人夫とりあへず、

音なしに咲き初めかゝる梅の花匂はざりせばいかで知らまし

といひけるを、主人聞き付け馬上より、其の者のいにしへを問へば、

花ならばおりても人の訪ふべきに成り下りたる身こそ辛けれ

とよみし、いよ〳〵主人感にたへ、やがて侍になし、身ちかう情をかけつるとなん。

○和泉の堺に宗椿とて手書のありし。源氏を寫すこと二十三部、二十四部目の朝顔の巻にて空しくなりぬ。牡丹花かれが心の程をあはれみて追善のため、

筆にそみ心にかけしちぎりにや折しも消えしあさがほの露

○町屋の棚に面をかけて置きたる。いとけない人有りて立ち寄り、「それなる上臈面を見たき」といひければ、暖簾の内より、いかにも色くろく逞しき男の、手にあふさし出しさまに、「代は五百でおはやりします」と言ひけり。いやこれはおどけ者よと思ひ、「それに候鬼の面を見たい。」といふ。又さし出しさまに、大きに頬を膨らかし、恐ろしげなる聲をして、「八百。」といひたりける。その物々に心をなしたる、やさしき人の作分にやあらん。

○藝州に大場といふ侍あり。兄弟の中如何の仔細にや、庶子家をつぎて總領は筑紫に行き、浪人の後太閤御所薩摩御陣立あり。庶子のなにがしも御供し、宿札をもちて行く。折節兄の家とも知らず行きたり。宿とりを主人伺ひ見れば、件の弟なりし。さすが昔のゆかしくて、

　大ばゞば茶にさへ厭ふ物なるに何の縁とて宿をかるらん

庶子よりの返歌、

　大ばなば、茶にさへきらふ物なれど心砕けば別儀あらじな

○住吉の花のさかりに、少人を誘引したる方へ、

　色もなき此の一枝をおくるなり人のこゝろの花の見たさに

返歌、

水莖をかきながすべき方もなし人の言葉の花にせかれて

○又いつの春やらん。住吉にて花のもとに、顏をつゝみまはして居たる人のもとへ、

よしやきみ霞の衣おほふとも匂ひをもらせ花のかほばせ

返し、

匂ひをもいかで漏らさん人しれず身は埋木の花し咲かねば

見る人に身をわくる花の匂ひかな　宗祇

待ちをしむほどや心の花ざかり　同

○和泉の堺に森川といふ太鼓打あり。數寄を心におもしろくおもひ、煎餅をちひさくわりて菓子に出しわるゝ茶をたてて、わびつゝも客を送りていで「お禮なしで御座る。」といふ。知音の者あり「珠光紹鷗などのいはれさうなる時宜もきて、お禮なしとはなど言ふぞ、唯お出で忝しとばかりあるべからうに」と意見しければ、「さればよ我も身ながら傍いたくおもへども、浮世の數寄者たる人結構に會をし、一軸花入興を盡し、極上別儀の濃茶うす茶、式法過ぎて門送りし、路地のくゞりに手を押へ、「お禮なしで御座あるといはるゝがけなりさに、せめて食ふまねしてあそぶ。」と。

○久しく相馴れし夫婦の中に、おもひよらずいさかふ事ありて、妻にいとまをやりぬ。家をはなれん

とする日、けしからず大雨ふりしかば、相馴れたるわりなき友あつまり、いたはしやなどいふに、

降らばふれ曇らば曇れてるとても濡らさで行かん袖ならばこそ

と詠みしを、あはれと、え去りがたくてとゞめけるこそ心あれ。これを誰そとしづかに聞けば、和泉式部がいにしへ丹後國にての事とかいふ。

○牡丹花の、兒にて机にかゝり、いかにもしとやかに手習し給ふを見つけ、ある人うしろより、

ものをもいはでものならふ人

といひしに、筆を持ちながら、

口なしの花のいろはやうつすらん

○丹後國に鉈の莊とてあり。彼處の百姓同じ百姓に米を貸しぬ。乞へども遂になさず。狂歌をよむ。

借錢を乞へどもくれぬ氣の毒やなま木に鉈の莊のものかな

幽齋公御聞きあり。其の風情なる土民の上には、何として言ひけるぞ、やさしやと感じ給ひ、米を三石つかはされし。忝しとて御禮に參り、其の座にて「何とぞ申せ。」とあれば、

日本さへ及びなき身に三石をまゝにせよとの御意ぞめでたき

○江州坂本にある母の許へ、年の暮の文に、叡山より兒の書きてやりけるは、小袖一重ね、料紙十帖

帯一筋参らするとあり。使に問へばなし。重ねて見参の時、その旨趣を母問はれければ、「我がおとなしく寺のぬしになりたらば、それ〲を参らせたいとこそ候よ。」

○博奕の上手二人、一度に死して炎王宮にいたる。青鬼立ちて、先にとほる者をとらへんとすれば、「私は拈諍たし、おとほし候へ。跡なる者口きいたり、何も御尋ね候へ。」と申すにぞ、さらば二番の男をとらへ問はんとて、赤鬼立ち寄りたりしを、彼のばくちうち、鬼の尻をそと知らぬふりしてつめりけり。鬼がいふ、「爰な人は晝なるに。」と。

鬼も十八といふ事あればおくゆかしや。

○教月坊例の狂歌を持たせ定家のもとへ、

教月がしにすのはてのそらは印地とこうち越さん石一つたへ

よねを五斗参らせられし、

定家がちからの程を見せんとて石引き分けてなからこそやれ

○庵屋の夕顔といふ題にて、夢庵、

賤屋とて思ひやつさじ夕顔のはなのかつらに露のしらたま

○新続古今を撰ぜられし時、其の歌人の数に入りなん事を望み、二百首よみて上げけれどもなし。又

百首かきねて上げ参らする包紙に、

かきすつる藻屑なりとも此の度はかへらでとまれ和歌の浦浪

此の一首とまりてあり。彼の蜷川新左衛門親当心ざしのほどこそ、

いとはるゝ物のにくしとは見ず

うぐひすの羽風に花のうち散りて

○周防太守大内殿の北の御方在京のほど、ある内にふみ二つのぼせり。御臺へのをば取りちがへて、おにゐといふ女房たちへやり、お花のをば御臺へあげまゐらせし時のかへり事に、

思ふかた二つありその濱千鳥ふみちがへたる跡とこそ見れ

○鎌倉の中納言爲相は定家の孫なりし。相模の稱名寺といふ律家の寺あり。かしこの庭に山々にさきだち、いかにも早く紅葉する楓の木の候に、短冊をつけらる。

いかにしてこの一本のしぐれけん山に先だつ庭の紅葉ば　爲相

其の翌年よりつねの色にかへり、紅葉をごとゞめける。

色にはみせていふ事はなし

春秋を草木にうつす天津空　兼載

○後柏原院崩御なされし時、三條の桶屋が娘、

　およびなき雲のうへなる歎きにも天の下とてぬるゝ袖かな

○木こりの斧を山守に取られ、心うく思ひつゝ、杖つきて居ける。山守見て、さるべき事を申せ、取らせんと言ひければ、

　惡しきだに無きはわりなき世の中によきを取られて我いかにせん

と詠みたりければ、山守返しせんと思ひて、うゝと呻きけれどもえせざりけり。さて斧を返し取らせてければ、うれしと思ひけりとぞ。

○かくし題をいみじく興ぜさせ給ひける御門の、ひちりきを詠ませられけるに、人々わろく詠みたるに、木こる童の曉山へ行くとていひける「このごろは篳篥をよませさせ給ひたるを、人のえよみ給はざんなる。童こそよみたれ。」と言ひければ、具して行く。童「あなをかし、かかる事ないひそ、ざまにも似ずいま〳〵し。」といふに、「などかならずさまに似る事か。」とて、

　廻りくる春々ごとにさくら花いくたび散りき人に問はばや

といひたりけるぞやさしき。

○越前守の時に、高忠といひける侍の夜晝まめなるが、冬なれど帷子をなん著たりける。雪のふる日

歌をよめとありければ、この侍、「何を題にて仕るべきぞ」と申せば、「裸なる由を詠め。」といふに、

はだかなる我が身にかゝる白雪は打ち振へども消えせざりけり

と詠みければ、感じ給ひて、着たる衣をぬぎて取らす。北の方もあはれがり、うす色の衣のかうばしきを取らせけり。

○朝夕に木をこりて、親をやしなふ孝養の心天に知られぬ。楫もなき舟に乗りむかひの島に行くに、朝には南の風吹き、北の島に吹きつけ、夕には又舟に木をこりつみたれば、北の風吹きて家に吹きつけつゝかくの如くする程に、年頃になりて公に聞召し、大臣になしめし仕はるゝ、其の名を鄭太尉といひける。

○事たらぬ世をわびてすむ人の妻あり。天然と和歌に心ざし、たち居に此の事のみなれば、夫いふ、「その風流はかかるまづしき身に、さらさらにあはず、二人がともにはしたなくてさへ、危かるべき渡世ぞかし、何として添ひは果てまし、別にあく色もなけれど、唯歌をすけるに厭きたり。いとまを遣はす。」といふ時、鄰なる農人の、稲を荷ひながら立ちより、「亭主左右な言はしましそ。うらが處の子もちは歌をも詠まず、夜からよるまで働きぬれども、不便さはこれにまさりたり。なにも皆前世の約束と見えてあり、女房桀亭のいふ事にとりあはず、たゞ詠みたくば歌ようで、そのひまひまに働き

たまへ」といふに、彼の妻夫にはとりあはず、鄰の男にむかひて、

　ほに出でていねとや人の思ふらんはかなの我や秋を見ながら

○建仁寺の開山千光祖師在唐の時、老母のうへを悲しみて詠み給ひし唯此の一首、集に入りぬるとなん。

　もろこしの梢もさびし日本のはゝその紅葉ちりやしぬらん

○頼朝公より、慈鎮和尚へ、何にても用の事あらば、文を委細に書き越し給へとありつれど、終に便りもなかりしゆゑ、此の歌を送り參らせられしとなん。

　陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬかきつくしてよつぼの碑

○深草に薄墨の櫻とも、墨染の櫻ともいふは、兒あり、手習硯の水に、白き櫻の散り落ちて、墨にそまりければ、

　世のなかを花もうしとや思ふらん白きすがたを墨染にして

と此の歌詠みて兒死にけり。明の年のなき日にあたり、師の坊に、

　去年のけふ花ゆゑうせし兒のためいまうちならす鐘の一聲

と詠じ、靈前に備へければ、即ち返歌あり。

花のゐにとはるゝ事のうれしさよ苔の下にも春は来にけり

○大内殿在京の時、京より御臺へ、

なびくなよ手馴れし庭の絲薄いかなる風のたよりありとも

大内殿御臺の返歌、

風もなしなびかぬものを絲薄君を思へばこゝろみだるゝ

○左衛門尉藏人頼實はいみじきすき者なり。和歌に志ふかく、五年が命を奉らん、秀歌よまさせ給へと、住吉に祈り申しけり。其の後年經て重き病を受けたりける時、祈るとも死にければ、家にありける女に、住吉の明神つき給ひて、兼て祈り申せし事をば忘れたるか。

木の葉ちる宿は聞きわく事ぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

といへる秀歌よませしは、汝が信をいたして我に志し、祈り申せし故なり。されば此のたびはいかにも活くまじきぞ。」と仰せられける。

○光源院殿、京都四條道場に陣を取りて御座ありし時、夜九つの太鼓をねぼれ、七つの時打ちけり。公方より御使ありて番の僧を召す。さだめて折檻に及びなんと、悵ふく〱参りければ、やうす御尋ねありつるに、「さん候、深く睡り入り目覺め仰天仕りての故。」と、有のまゝ申し上げければ、案の外御

機嫌よくて、

此の寺の時の太鼓は磯の浪おきしだいにぞ打つといふなる

とあそばされ、僧には方兄をあたへ給ひぬとなん。

○三條三光院殿十六歳の御時、禁中にて懐舊といふ題出でたりつるに、何ともよみにくしとあれば、一座みなおもしろき顔に見なし、誰も題をとりかへ詠まんといふ人なかりしに、

程ちかき我がむかしさへ戀しきに老はいかなる涙なるらん

○宗長法師あるかたにとまり、暁いそぎ歸るとて、下帯を忘れ置かれしを、もたせて送りければ、詠みてつかはす。

思ひきや落すたけなの濱風に浪より高き名のたたんとは

○美濃の岐阜に宗湖とて、連歌の上手家ましかりし。堀池といふ福人のもとに質を置き、毎年うくる事なく過ぎし。此の冬の小袖をば、何とかせんと思ひつらね、

質の内に何なる河のあるやらん我がおく質の流れぬはなし

是れを送りければ、堀池、詩作りて酒をかはれたる廬山の遠公にも、心さま似たりといとほしがり、質になにやらん添へて、もどしたると聞く。

上戸

○雲静かに風條をならさぬ日を幸ひ、一瓶を携へ東山に出づる俗あり。又痩せ黒みて白髪たる抖擻の僧、始めより八坂の塔に休らひし。是れも靈山の方へ歩むを、かの人道づれして詣り行く。清水奥の千手堂舞臺の端にて、彼の提物を開き、飲みて進む僧、僧曾不取合。俗云。生得酒嫌歟、又有子細否。僧曰。予元來惡客也。俗云。此靈地也。衆峯環峙、萬木清流、林茂碧深、花奇紅酣。異木累葉、叢草飛英、不是境待人乎。惟時可惜酒不愛、對花啜茶、殺風景一哉。但願得美酒朋友常共斟、柳文書。又花開に置酒清香發。李白詩、花間一壺酒、獨酌無相親、今更思當。僧下戸、友侶無爲方。僧曰。我好處在餅、哀振舞人、飽滿面恩。宴安鴆毒不可思見物。俗云。飢不選糟糠實哉。素問云。天食人以五氣、地食人以五味。其氣味無取相者、唯飽望足故。風味好、那堪把酒對西山、山谷愛、何無興麁抹食噎餅。僧曰。心不同如面、貴賤好惡爭一般。毎物愛易不知其惡。汝賤餅我所賞也。烹茶煮餅坐僧房。又煮餅臥北窗、保此已微幸書儒者有候。人間萬事醉如泥、詘酒貪著右流左止。俗云。從釋提桓因賜忽刻種子唯五道論之中初而已。酒德輕誤無愛好者、却堪羨。愚也恆願清酒置不論、得酒醪一樽

霜朝雪夜變寒爲溫轉憂爲樂。去晉賈謐云於金谷園聚二十四友、各作忘形友結莫逆盟遊良有以也。加之吟詩作歌舞、如詩不成罰依金谷酒數。以文盞三杯續盛之。或酒宴席詩、不才身野詩難詠。可愧罰觥金谷等作亦謂之乎。人無更少時須惜年、不常春、酒莫吝、小野篁作勢最有感哉。又昔人思廉夢、吟詠歌。

酒瓶爾我身遠入天邇波耶醬色仁志骨和成共
夜光玉登云共酒飲天醉鳴譟爾豈如兎那裳

角逵雨友、一人開瓊筵坐花、一人飛羽觴醉月、莊氣容間天乙女與、立舞袖鸚鵡杯思方指、飲盡鸚鵡返、榮期酒飲、木不言、大德自今已後酒少宛參。僧曰。汝對持戒勤修僧侶、頻勸飲酒、甚以奇怪也。酒是世尊大禁處、梵網十重禁者以酤酒戒、第五波羅夷罪。況取手自飲、勸人事罪過不輕。般舟讃云、唯知目前貪酒肉。不畏地獄盡抄名。愚夫顚倒而樂暫時沈醉、不期當來苦果著此猶、爆背行於怨火。僧云。按飲酒佛戒耶。一陣既敗忽如得後詰、珍重々々猶飲、聽未曾有經説、末利夫人弟子守戒法。或時波斯匿王遊獵大瞋事。修迦羅云尉官斬。夫人聞之酒饌調至王所共飲。王瞋歇亡命、莫殺尉官。王明日見顔色憔悴。夫人何患問。言昨日瞋火所逼怒殺尉官悔愁

耳。夫人笑テ其人猶在。大夫ニ歡喜シテ白レ佛。末利持テ五戒ヲ犯ニス飲酒ヲ其事云何。世尊曰、假ニ此犯戒ハ得ニ大功
德ヲ無罪者也。然則飲メトモ過ナシ。飲マズトモ修善ナシ。僧云、汝愚也。如ク文取レ義ヲハ、世諸佛怨トシテ夫人不ンハ飲酒ヲ尉
官ヲ而忽誅セン、以レ飲ヲ助ケシ。見ヲ惡念ヲ善ト而破ヲ持スル也。毘婆沙論ニ以テハ、有ニ一ノ優婆塞週ニ桒椹仁賢ト受テ
持ス五戒ヲ、專精不犯。後一時爲レ渴所レ逼、見ニ一器ノ中ニ有レ酒如シ水。遂ニ取テ飲レ之。犯ス飲酒戒ヲ。時ニ有ニ鄰雞一入ル
其舍ニ。盜殺而食フ。復犯ス邪行戒ヲ。告ル官ニ。訊問スルニ拒諱テ復犯ス妄語戒ヲ。如レ是五戒皆由テ酒犯ス。一波起處萬波
隨來哉。酒戒破テ四戒同滅ス。可レ思。十地論ニ、膽蔔華雖レ萎勝ニ餘諸花ニ。故破戒諸比丘猶勝ニ外道ニ有リ。彼ハ持
戒ノ者既落レ過ニ、況ヤ一生無戒而酒愛、外觀辭於無ニ一毫ノ者ニ歟。俗云、某若時側レ耳傾レ心有ニ聞未會有經
云、祇陀太子白佛言、向キ受ニ五戒ノ酒戒雖レ持、畏クハ脱ニテ得ル罪ヲ、今欲ニ捨レ戒ヲ、受ニ十善法ヲ。佛言ク、飲酒
時有ニ何ノ惡ニ耶。答曰、國中ノ豪族雖下時々相牽テ賚ニ持シ酒食ヲ共相娛樂スト上、自餘ハ無レ惡得ニ。酒ノ念ノ戒ノ不レ行
惡ヲ也。佛言、若如汝者終レ身飲酒ナリ、有ラン何ノ惡カ哉。五戒中飲酒戒ヲ許（ママ）太平樂ノ飲物也。文酒中ニ那ゾ有レ
失、醉則不レ驚レ鳴東坡モ云ヘリ。然者眞俗共無過。僧云、汝寄ニ安ニ心ヲ者好、致處也。因テ性好ム酒ノ、辨ズル
義亦依怙タルノミ。長阿含經ニ飲酒説ニ六失ヲ、中ニ有ニ惡名流布ノ失。佛在世鄰國ニ惡龍蛇リ、或時ハ大雨或時ハ大旱
令レ惱ニ亂人民ヲ。其國祝髮宛志詣シ佛所ニ詳奏ス。即娑竭陀比丘云弟子ヲ遣シタマフ。輒降ニ伏ス惡龍ヲ。國民悅テ酌ニ
美酒ヲ、醉テ失ニ正路ヲ田畔ニ睡臥セリ。蝦蟆小蛇比丘ノ在ニ腹上ニ。佛與ニ舍利弗一通見。自今已後我弟子必不レト飲

酒。制法從是起ル。梵網ノ古迹ニ、酒者迷亂起罪之本ナリ。昔是伏龍之勢ナレドモ而、今ハ不レ禁二蝦蟆ヲモ一。乃至四逆從
此而生ス。又一切聖不三飲酒一者以テ二諸聖者具ルヲ一慚愧ヲ一ハ、故ニ飲令レバ失ハ二正念ヲ一故云々。聖者有レ恥。增シテ世人分過
酒ニ有耶(とらい)ナシヤ。俗云、聞說、晉惠遠ハ居二廬山下ニ一持律精苦シテ過レバ中ヲ不レ受二蜜湯ヲ一。而作レ詩換レ酒飲二陶ニ澤ニ一。
送レ客ヲ無二貴賤一不レ過二虎溪ヲ一。廬山記ニ、遠師送二陶元亮陸修靜ヲ一不レ覺過ル二虎溪ヲ一。因ノ相與ニ大笑ス。今世傳二三
笑圖ヲ一。禪月作詩云、愛シテ二陶長官ヲ一醉テ兀々。送テ二陸道士ヲ一行遲々。買レ酒過レ溪皆破戒斯何人ゾ、斯師如斯羅什
日東方ニ當有護法菩薩焉(きょくなるかな)哉仁者ト遠公ヲ與ダリ一。論日、遠師有二大功一。於二釋氏ニ一猶孔門之孟公焉云々。既ニ遠
師ハ一宗ノ元祖破二飲酒ヲ一而過二虎溪ヲ一。此事膾二炙人口ニ一。寔古今絕勝也。僧云、汝比シテ二遠師ニ一止レ爲レ類、色心俱
天地雲泥、卻ニ違二公ノ勸ヲ一。傍ニ飲ミ其二途之中易キハ學ニ飲ミ勤ルハ不二奈何一。廬山集ニ、眼ハ空二四座鯨鱗ヲ捉フ。心
在二百年鸚鵡杯ニ一。煩惱即菩提、有犯者生死即涅槃無火入者是與。成實論ニ、酒ハ是レ實ニ罪ナリ耶。答罪ナリ。所以
者何。飲酒ハ爲レ惱二衆生ヲ一故而モ是罪因ナリ。若人飲レ酒則開テ二不善之門ヲ一、以能ク障二定及諸善法ヲ一如レ植二衆果ヲ一云
云。俱舍云、莫レ輕二小惡ヲ一以爲ト一無レ殃、水滴雖レ微漸盈二大器ヲ一有ル、非三與人作レ惡異人受二苦報ヲ一惡業ノ所レ
競責メ歸ス二一人ニ一也。俗云、去比法相ノ比丘有レ聞、夫十波羅密ノ行ハル前ノ五波羅密爲行後五波羅密ハ智行第六ノ
惠、波羅密ハ根本智、根本智ト者無分別智也。僧不謂文字言句ニ認テ心他人ノ思出迄也。李白一斗詩百篇。
長安市上酒家ニ眠ル。天子呼ビ來レドモ不レ上レ船。自稱ス臣ハ是酒中仙ト。正李太白ガ醉中ニ主上ノ禮儀亡却セシ此非ヤ。

無分別智ノ境界ニ乎。蘇子云、客喜笑洗レ盞更酌。黄子云、客至ハ徒ニ須レ飲。遂レ明甚自斟ニ。貴レ富賤レ貧得ノ客ヲ與ヲ共ハ、ニハナシ。酒外以レ何盡レシヤ愛ヲ耶。僧云、小智ノ菩提ノ妨哉。前ニ云ト波羅蜜ハ根本智ヲ達ルウモ初地ノ人心ニハ斷ニタル麁煩惱ノ計リ也。以ニ巳下四波羅蜜ノ後得智ヲ細煩惱ヲ地々ニ斷ジ、上眞如ヲ悟解シテ至ルト地ノ究竟ニ也。不レ辨ニ此位ヲ謾ニ何ゾ何レヤ理。沙彌戒經ニ、飲酒有ニ三十六失一說ケリ。乃至此名身心散亂ノ失ノ中ニ不レ可而可レ知矣。唐ノ太宗、鏡ノ中、以レ人爲レ鏡可ニ以明ニ得失、ハ最合頭セル狂歌ニ。

酒和唯飲備波須磨乃浦閑之飲波明石能浪風楚在

時々ニ吟レ之ヲ不レ如レ免レ諸。

俗云、身心散亂ハ可レ依ニ人性ニ、ハ強テ不レ論。纔聞、文殊經ニ云、不レドモ得ニ飲酒スルコトヲ、ハ若合藥ニ醫士ノ所レ說ヲ多業ニ相ニ和シ少酒ヲ多藥ハ得レ用コトヲ云々。貴トノ許ヤ、廣大ノ慈悲ニ。以レ何衆生得レ人。無上道ノ善巧モ飲酒ノ一杯 令者已滿足ナル哉。又不レヤ見道事林廣記ノ清談ニ、昔儀狄造レテ酒而美ナリ。進ニ之於禹ニ一ビ飲テ而甘レフ之。酒ハ可ニ以供ニ祭祀ニ可モト以奉ニズ賓客ニ、皆禮之所レノ不レ廢者ナリ。如ニンバ詩ノ所レ謂、爲レ酒爲レ醴、以治ニ百禮ヲ。又謂、我有ニ旨酒ニ以燕ニ樂スル嘉賓之心ノ。皆是ノ物也ト。去レバ神前ノ酒臺盞諸天獻ズル有ニ三ニ、本ニ。婦人ハ愛シテ呼ニ九獻ト、王候將相者以レ酒成ニ治國之策ヲ、士農工商何不別飯後必謂テ中酒ト飲レ之。傍人云、大過無益ノ與行不レンバ足ノ寒レ、不レ醉不レルコト醒中酒ナノント。此砌大酒老翁出來飲レバ酒ヲ爲レ醉唯亂酒ニセヨ。唐李太白將進酒ト云題ニテ、岑夫子丹丘生。

與レ君歌ニ一曲ヲ。請君爲レ我聽ケ。鐘鼎玉帛不レ足レ貴ルニ。但願ツテ長醉ヲ不レ願レ醒コトヲ。是佳酒ヲ明カニ立ツ。若シ無クンバ青州ノ從事ハ督郵ノ風味ニテモ可レ足。故東坡薄々タル酒モ勝リ二茶湯ニ一。又李白モ、白酒初熟シテ山中歸ト。可レ謂醉テモ亦文章醒亦文章。偕曰、文殊問經ハ偏ニ爲レ除ニ疾苦ヲ一少酒ハ許レ之。徒ニ飲シテ徒ニ興セヨ、あらず。又事林廣記ノ引用モ初ハ著ニ酒味ヲ一後知ニ酒失ヲ一聞ニ、非ニ一片ニ一。予暇之日考ニ見十八史ヲ一。至テ禹時ニ儀狄作レ酒禹飲レ之而甘トシレ之、云後世必有ニ以レ酒亡レ國ヲ者ニ一。遂ニ疏ニ儀狄ヲ一、如レ案桀末喜紂ハ妲己ヲ寵愛シ、一生耽飲而果シテ失ヘリ天下ヲ。此等ハ皆待ツニ樂裏ノ苦ヲ類也。又鬼問日連經ニハ、我受ニ此身ヲ一常饑無レ知。何罪所レ致。答言ク、汝爲レ人以レ酒施ス。今受ニ業報ヲ一、果在ニ地獄ニ一。梅花一去無ニ消息ニ一。亦有ニ春風ニ一喚得テ歸ル。去レバ諸法實相不生不滅不々生、不々滅、而モ行ノ因縁業亦不レ失、醫レヨ之テ之思ニ之。俗云、昔堯帝累ニ千鍾ヲ一則其仁傳ニ萬古ニ一、孔子傾ニクレバ百觚ヲ一則其德溢ニル西海ニ一。杜康造レ酒。魏武帝歌云、何以解レ憂ヲ。惟有杜康酒。汝向ニ所謂失ニ天下ヲ一亡レ身ヲ者酒也ト、此事如何。佛五時ノ說畢テ涅槃經遺穗說云、涅槃諄モ云、誠ナル哉此言。偕教化諸聽々々也。既ニ未曾有經ニモ制シテ五戒ヲ云、若有ラバ飲テ酒悅シテ心ヲ生ズ善ヲ。飲不レ犯レ戒ヲ能忍ニ佛不妄語ニ一。飲ノ歎、不レ知ニ眼前ノ一醉ヲ一。是非憂樂都雨忘ズト見えたり。鰥寡孤獨ノ者稼ニ之艱難モ紡績之辛苦モ、得ニル酒一杯ヲ一時、人境俱ニ忘レ歡喜大笑。而作ニ詩懸賦ニ一。尋テ花入レ山ニ求レ月臨レ江是レ何人ゾ。陸氏云、方ニ我吸フ酒ヲ時江山入ニ胸中ニ一三千世界モ在ニ于毫ニ一。豈人間ノ極樂域乎。偕云、汝留ニ口々ノ一醉テ能言。狂々ノ叨ニ笑レ人、論レ文不レ辨レ理、生苦ノ者ハ飲ニ無レ上ヲ過。汝生平ノ修善有ニ何事一乎。釋

氏要覧律引ニ云、酒ニ有ニ三種一。一穀所成ニ米酒郎草根果ヲ作ル者ナリ。人倶ニ好飲レ之犯ニ三十六失一。第一ニ費財
散失ヲ出セリ。白居易ガ三百人ノ得ニ扶助ヲ一ハ纔ニ室中ノ糧不レ出。三十人ニ餘皆爲ニ詩酒ノ費ト。中比武家ノ森者飲ト
超ヘタリ世ニ有時ナ。作スル腰ニ脇差計ッ也。刀ハ如何ト人ノ問。運ハ在レ天ニ存ト。刀ハ在リト質屋ニ。闘事仕合哉。狂歌
往荒須上戸之宿濃板廂佐加毛利勝仁降時雨哉
東坡招ニ明月ヲ至ニ芳樽ニ。ハ酒村已遺ニ門生致ハ無官身ニハ爲ニ人間ノ行路難ニ乎。俗云、福ハ宿善ノ果ニ有レハ不レ可レ
依ニ才不才ニ。震旦ニ王愷ト云富者アリ。又石季倫ト云有ニ福者一。二人共ニ大酒。彼等長ニ酒之餘、春有ニ百花、秋有レ月
夏有ニ涼風、冬有レ雪。人間ノ好時節、選ニ風景之地ハ立レ柱ヲ掛ニ戸帳ヲ。王愷ハ紫絲布ノ歩障ヲ四十里ニ張リ、季倫ハ
錦ノ歩障ヲ五十里ニ張ル。其中にして酒宴興を盡せり。季倫ノ住宅ハ椒蘭沈香類ノ砕としし、壁にぬるまゝ、守レ門
藁じ渡れり。以レ蠟ヲ代ハ薪ニ朝夕燒ク火。如レ是ノ奢比セシ愷倫奢侈ト云ふなれば、飲ハ貧不レ飲ハ豊ならとも難レ
云。王屑ハ酌ニ盡シテ一杯ノ酒ヲハ老夫ヵ顔亦紅ナリト、青醒めたる様テハ逢ヒ人ニ客恥かしく無レ小ト無レ大不レ好ノ酒
者非レ人。襄老ニ雷倶レ白。愁顔酒借レ紅、坡翁も云へり。非ニ復三五少年ノ日一把レ酒償レ春頰生ズト紅、山谷にも
書きたり。俗云、試レ金以レ火、試レ人以ストハ酒。古云、列白墮飲ニ賊酒ニ被レ擒セ。日シテ名ニ擒奸酒ト。故惡ノ名
傳ニ萬世ニ恥ナル哉。四分律ニハ飲酒擧ニタリ十過失ヲ。中ニ身壞命終シテ墮ニハ惡道ニト云々。愚人夏蟲飛入レ火、智人秋
鹿泣入レ山。無レ作容死ハ後必有レ悔。俗云ふ、僧家ニ號シテ般若湯ト專用レ之何事ソ。臺橘州蜀ハ英也。性嗜レ酒ヲ諸

方謂二之酒星一。或ハ芭蕉泉禪師以レ杖荷二大酒瓢一往二來ス山中一。馬祖黄檗皆愛レ酒而無二一點執氣一。馬子才ハ詩
君醉二我ヲ一斗酒一。紅光入テレ面春風和スト歎レ、蘇氏モ酒ハ以レ紅ナルヲ爲レ貴ト與ふれば、老年枯槁榮衛乏之身惜可
飲物ヨ。功名富貴到頭如レ夢。因レ物ニ興レ懷ヲ何ノ如ニ對ニ清風明月ニ飲レ酒自和ニヒ。諺ニ云人無ニハ遠慮一必有ニ近憂一。
歡樂極兮哀情多ニ。諺ニ今ノ甘蕉後鼻蕉也。涅槃經ニ云、酒ハ爲ニ不善諸惡ノ根本ト一若能除斷則遠ニ衆罪一ト云々。又
正法念處經ニ云、若人以酒與戒人若寂靜人寂滅心人禪定樂者酒ニ亂彼人一墮ニ叫喚獄一俗云、隨樂生欲種々責
法不レ可レ限ニ一隅ニ一ハ。昔日聞分別功德論ニ云、祇園ニ有ニ比丘一栖ニシ。經ニ六年ヲ。優波梨往ッ問レ所レ須。答ヲ唯思レ
酒ヲ。優波梨曰ク、待テ我問レ佛ニ。遂ニ至レ園ニ問レ佛ニ。有ニ比丘一病テ思ニ酒爲ニ藥ト不審可ナリヤ。否。佛言、我ガ所ニ制
法一除ニ病者ヲ者。優波梨復タ往キ索レ酒令レ飲。病消ニ不復した、爲に說ニ法得タリ羅漢果ヲ一。佛責ニ優波梨ニ一汝
問ニヒ此事ヲ一使ニ比丘病癒エ一又使ニ得レ道ヲ云々。大聖釋迦令ニ得ニ以レ酒爲レ藥。飲者剩得ニ羅漢果ヲ一ハ使ニ優波梨得ニ
道ヲ。以レ此ヲ思ヘ酒ノ功甚莫シ大ナルハ。於焉ニ靜案レ理、賤貧漁父行狀、家々醉レ洞庭ニ帶、破笠鶉衣、蓑笠着テ、行ヒ
酒既に酣ヲ事ヲ貝ふも、道逢ニ麴車ニ口流レ涎、恐ニ同朝雨天ヲ一者ミ、忽解ニ黄衣ニ一當ニ。思ヒ深切ナリ。淵明ガ圖、謝
幼輿ガ田家酒熟シテ夜敲レ門ヲ、頭上自有ニ漉酒巾ニ、老農時ニ問ニ桑麻ノ長ずる事を提ニ壺ヲ攜テ來リ相聞ト一ニ轉
徑ニ韓北窓ニ臥ス。羲然トシテ自謂ニ羲皇上人ト一、作ニ晉ノ陶醉漢、生涯不醒、石ニ欹ニ人なきき、以爲ニ四時樂ト一ニ。又
彈ニ無絃之琴ヲ、消レ憂ヲ呼レ之爲ニ第一ノ達磨ト、俗云ク花甸ノ古迹、戦ニ酒ニ放逸、後必有レ悔。失テ自ノ正念ヲ

違ニ本心一。故作レ不レ應レ作、言レ不レ應レ言、無レ惡トシテ不レ造ト云々。已ニ迷ニ利根一、昔ハ聖賢ノ義ニ、背レ吝ニ樸石
入レ淵。俗云、學ニ一篇ヲ不レ會ニ二道一、同ニ片團ノ如來藏中一、酒之德極ニ勝ニ、而不レ可ニ勝計一。上四十天ニ有ニ天
草ノ名ヲ曰ニ花酒一。下須彌山北巨海底有ニ阿修羅界一。彼阿修羅採ニ四天下ノ菓一、醞ニ四大海一飲レ之ヲ猶不レ足。故
醱ニ阿修羅一曰ニ無酒一ト。去れば盡ク乾坤一時變ジテ作ニ醉乾坤一則沙門無レ處レ措ニ手足ヲ一。李白意在レ酒ニ、時所見
無レ非レ酒。漢水皆葡萄醱。麴蘗高臺皆糟丘。白之胸襟亦大ナルカナ矣。又題ニスル月亭一曰ク、舉テ酒ヲ勸ニ明月一、
聽ケト我歌聲ノ發ルヲ。馬子才興ニ於テハ酒一曲ハ對ス物乎。呼レ口荷レ盲ヲ、曉夜荷レ舟。道路難レ別。好レ酒一般也。脩尭
爾云、金言逆レ耳行有レ理。佛子勝ニ髪モ末法ノ中有ニ持戒一如ニ市中虎一云々。梵網經ニ若自身手過ニ酒器一飲レ酒
者、五百世無レ手。何況自飲乎。麁茶淡飯飽即休。如何迷ニ一甘味一作ニ舌根罪一。樽前被レ勸レ難レ遁。閑必矣。俗
云、諸惡莫作衆善奉行ハ七佛通戒也。其禁可レ有ニ淺深一。殺盜婬妄性戒ナレバ過重。飲酒遮戒過輕。昔ハ漢土法令
因ニ罪多少一、如レ有ニ笞杖徒流死五誅一。重過上重過ニシテ可レ飲酒輕罪ナルハ、萬歲萬秋順風ニ擧レ帆。五湖ノ大浪如ニ
銀山一、滿船載レ酒撾レ鼓過ニ異曲同工哉。八月九月人苦ニ長夜一。臨ニ酒宴一者不レ覺ニ漏聲ノ迭ニ移ルヲ一。莫レ謂秋宵唯
爲ニ二人一長。子瞻云、洞簫聲斷月明中。惟憂月落酒杯ノ空。又宜ニ四時一者酒也。春者花亭ニ我醉テ送ニ殘春一。夏
者酌ニ竹葉酒一掃暑迎涼。秋者林間煖レ酒燒ニ紅葉一。冬者數杯溫酎雪中春ト吟ゼシ心懷。郭弘爲ニ漢帝一寵愛セラル。
帝問云、欲レ封ニ卿郡邑一何ノ地カ好キ。弘好レ飲。對曰、若封ニ酒泉郡一實ニ出ニ望外一。果封ニ酒泉郡一。郭弘上戶故望

足成ニ酒泉郡主ニ。寶祿千槌一手柄哉。下戸德被レ寵謨有乎。僧云、三十六失ノ第一ニ現ニ多疾病過出。雖レ有ニ十種
嘉名、以レ過爲レ毒。實云ニ酒損ニ云ニ内損ニ之類也。曹表抄ニ酒是爲レ用レ藥レ何飲醉成病。心法ニハ酒性喜レ升。氣
必隨レ之。痰鬱レ上溺ニ澀於下ニ肺受レ賊邪。加之寶鑑ニ此盡。不レ得レ已而用レ之、豈可下持ニ頼此藥ニ、日々飲上レ酒
乎。酒ハ助レ火生レ痰傷ニ肺氣ニ。俗云大レ五温假假和合ノ身ハ從來病器也。六因七情猶在ニ下戸ニ。必モ酒ヲ不レ事。醫
家ニモ酒ハ禦ニ風寒冷氣ニ、同號ニ寸風離ニ。史記ニハ、鹽ハ食肴之將、酒ハ百藥之長ト書ケリ。諺ニ酒鹽ト云フモ是君臣主レ義ヲ
保レ世謂歟。酒ノ辛ハ能散、苦ハ能下シ、甘ハ居レ中而緩、淡利レ溺速下ス。又藥劑ニ君臣佐使各借ニ酒力ニ播ニ功能ヲ。
知レ是無情ノ草木土石懷ニ酒惠ニ。有情トシテ而不レ慕レ酒者劣ニ木石ニ。歐陽修貯ニ一壺ニ。醉號ニ醉翁ニ。張旭ハ寄ニ三杯ニ
妄傳ニ草聖ニ。此倒相客參度。僧云沙彌戒經第四過失強テ飲レ酒者、增ニ長殺害ニ說。夫飲酒有ニ初中後ニ、初人飲レ
酒、中度酒飲レ酒、終リには酒飲レ人。所謂輕次重ノ三也。醉則濫ニ殺ス無罪ニ。智論云、一切寶ノ中ニ命爲ニ第一ニ。諸
罪中殺生爲ニ第一ニ。諸善中ニハ殺生戒ヲ爲ニ第一ニ云々。涅槃經云、須レ爲ニ心師ニ莫ニ心爲ニ師。終日沈レ醉凌ニ難
難ニ。正ニ醉狂ニ。皆在ニ自己一心ニ。心一法ハ如ニ春ノ野馬ニ。持レ心不レ禁レ酒淳可レ堅。俗云、一朝之忿忘ニ其身ニ、殺レ人
被レ殺事時ノ中、天云ニ皆前世剛ニ也。雜集論ニ、明業ニ有ニ過去現在未來ノ三義ニ、順生業順現業順後業。辨ニ此因
緣ニ。先罪招クナレバ禍ヲ。因果經欲レ知ニ過去因ニ見ニ其現在果ニ。欲レ知ニ未來果ニ見ニ其現在因ニ。以レ不レ了ニ此義ニ故、
況ニ論ニ一十五有ニ六趣四生皆々ナリ。分明哉不昧因果善惡俱宿報難レ遁。爾レタ唯酒過ニ負スル事無レ謂。布袋和

倘者彌勒之化身、當然市中飲酒。楚屈大夫者以獨醒被放逐。宋蘇大夫者以不飲爲不能獨醒而不飲則放逐之徒耶。不能之徒耶。僧云、弟子眼中無別解別行。且執釋迦之指南、如星如月守爲所以者何。論智則義無不達、語斷則智氣無餘智。斷其之能利世間爲世尊重。故曰世尊彼金口正法念經云、於佛所生壞世出世事燒解脫如火。所謂酒一法也云々。智覺禪師云、昔不誡飲酒永斷智慧種。俗云、順僧指南可飲酒打鼯鳥有先生境界。送登七寶山空手無益入海檀林採其葉何斟佳酒。飲數杯如渡得船。及無清樽者餔其糟而若其醨、勝餘。昔是東坡山城薄酒不堪飽。勸君且吸杯中月。天地中間有人無不嘗酒者。天若不愛酒、酒星不在天。地若不愛酒。地應無酒泉。天地既愛酒。愛酒不恥天。李太白不言乎、晉劉伯倫作酒德頌。其辭云、枕麴藉糟無思無慮。其樂陶々たり。唐白樂天作酒功讚。酒德頌次之。畧云、吾嘗終日不食、終夜不寐、以思。無益。不如且飲と云ひも果てぬに、十德衣禪門疎忽罷り出で、抄者は觀音參の次而人羣集何事ぞやと、立寄り鎭性聞き居けるが、僧はいつもの長談義、在家は酒の論足も膝も痺れ、鼻のもとは物干棹の一節を謠ふ聲もせねど、頭を鼓の打つ樣に、口の舞振のをかしさよ。私は非下戸上戸にてなし。狂歌を申して無事の媒とせんのみ。

日出度屋那下戸濃立多類倉毛南之上戸能倉裳立和勢補土毛

僧欺き笑ひて、歌の内に有リ二上戸贔屓一閉口せよ。件の者怕日場に指し出でたる事越度なるかなと赤面して綴リ係ル處に、又霞亭一閑人出でて云、僧の憤リ有リレ道、自ノ無キレ筋事を申し、試みに伺はんとて、

世中爾酒飲人和見天楚與記得飲奴人婁仁具之登和見須

僧止レ忿、俗畧笑、互に問ヒ訊シ欲レ退。時俗向ツテ二沙門一尋ヌ二居所ヲ一。僧、「予は正路山ノ無慾坊也。汝は如何なる者ぞ。」俗云。「名字ハ蘇起、名は樂兵衛。」聞く人共と笑つて立ち去りぬ。

○尊氏將軍五世の孫義政公の御時、洛中洛外酒を禁じ給ふ事あり。萬阿彌とて同朋のさふらひしが、いかゞして呑みたるやらん、つらもどこも赤漆にてぬりたる風情なるが、御前に跪きたり。大樹御覧じつけられ、「おのれは酒をくらうた面ぞや。」と仰せあれば、「いや餘りさむきまゝ罷り出でさまに、たき火にあたりて御座る。」と。「さあらば愛へうせよ、かいで見ん。」とあり。是非なうて參りたれば、「隠れがない、熟柹臭いわ。」と御諚の時、萬阿彌、「左樣なる儀も御座候べし、柹の木を焚火にあたり參らせた程に。」と。

○伊勢參りの坂向ひに出でたる者内にかへり、胸をなで額をとらへ、あら苦しくと、時すぐるまでかなしがるを、利口なるむすこあり。「てゝはそれ程くるしい酒を、よいころに飲みもせで。」と申しければ、目を見いだし、「おのれはこざかしく何をしりがほに、此の醉ひのさゐんが苦しやというて遊ぶ

よ。」

亂舞時過ぐる酒盛に、正體なく呑み醉ひたるもの、憖ひに家に歸らんと思ひ、たどる〳〵歩みたるが、ころしも師走寒のまへ、雪も霜も白妙なる水堀のありしを渡りかゝり、ひたもの踏み迷ひふかき處に入りぬ。やう〳〵首ぎはばかりなる水に、溺れながら眠りゐたれば、冰身をとほしも知らず。やどには人皆歸りたるに何とて遲きぞやと、あたりの者までもよほし行きて見れば、堀のかたへに人のあたまの見ゆる。立ちより冰をうちわり、言葉をかけければ、件の客人「たぞ、夜もあけぬに門をたたくは異な奴。」といふ

○主君たる人の酒につよきあり。機嫌のよき時小姓に「これなれば世上に上戸といふか。」「いやさやうには申さぬ。」「下戸といふかや。」「いや其のさたも御座ない。」「推した〳〵中戸といふらう。」「いやさ申す噂もをりない。」「さて何と言ふぞや。」「唯世上には底知らずぢやと申す。」と。

○年の内の立春に、日出たしとて奉公の衆各出仕をとげけり。卽ち飯器を杯に出し、これにて一つづゝのおとほりと定む。古老の人二杯うくる。「それは何とて。」と咎められ「畏まりて候。

年の内に春はきにけり一年を去年とやいひわん今年とやいひわん。」

と吟じて、時の興をぞもよほしける。

○花のもとに歸らん事を忘るゝも、霞の内の酒ゆゑや、巽あがりの夕雲雀、調子ちがひに謠ひ舞ふ、あまの羽衣きにあへる友どちなれば、杯のかたぶくかずも時うつりてさりかねて夜をふかし、あけの日も尙いねてゐる。これをいふかや二日ゑひと。七つ八つなる息子ありて、おやはなにとて身を知らぬ。せめて一日よばれかし。」と。親腹を立て、「二日とゑひとのあひだ何をきり、ふつかよいといふ事なるものを。」

○ふるまひの席にて、「今日のていしゆは生得下戸なり。酒を三返のうへはしひぬぞ、油斷するな。」とおなじ心の友みな目まぜをせし。三返目に亭主出で、「いかほど參りたるぞ。」と問ふ時、態と氣にうけさせんと思ひ、「はや四獻とほりたる。」といふ。「われ等は稻荷を信仰のものなり。めでたう銚子を取れや。」といふ。「稻荷を信じ給はば今一獻とほされよかし。」「何とて。」「いなり殿は四獻々々といはるゝ程に。」

○上戸たる人のうへには、四返目の大事といふあり。傳へずんば知るべからず。祝言、無祝言、酒三返とほるはさだまれる例なり。また四返の境目をこせば、五返はいふに及ばず。されば座敷每の時宜に、はや三返とほりたる銚子を、取りたまへといふは世の常ぞや。亭主器用にて銚子を出す時、こなたは目をふさぎ、手をあはせ、いやはや正體がをりない、中々にといひてかまはぬがよし。給仕大い

なる杯を取りてつぐべし、それも知らぬふりよし、大方七八分もつぎたらんと思ふ時分、これはこれはといひ〳〵杯に手をかけよ、はやお手がかゝつたといふ。是非に及ばぬふりに受取れば、とてもの事に十分につげといはん、これを四返目の大事相傳とぞ。

○酒にゑひて歸り、いねたる體、敷居に肩を置き、あたまを下にさげたり。才覺なる子が見附け、さて血がさがらんものをと思ひ、枕を取り寄せ、頭をあげ、まさに直し置きたれば、目をさまし、これは何ものゝしけるぞや、身の内大器はゑうたれども、頭がいまだゑはぬほどに、酒をよくめぐらさんと、態と片くらさがりに寢て居るものを。」としかりけり。

○朝食のうへに、初獻にはかさにてとほし、二返には中の椀、三返には汁の椀にてもらせたり。四返目には花やかに飯の椀にてつがせんと、たくみおいて銚子を先に出し、後より亭主出でて、時宜をいはんとおもふ間に、とくはや飯の椀にてこぼるゝばかり請けたれば、亭主いはん事なきまゝ、「扨かよひ杯でよう御座らうものを。」と。

○きとしたる人の許へまゐる度、酒を給はるに、如何にもかろく七分ばかりつぎ酌取れり。理りすまぬ事に思ひたくみ、ある時折りたる木をつゝみ、上に伽羅二兩と書きて、かの給仕に持參しけるに、あけて見大いに腹立し、「にくい奴かな、あいつに今度からせうやうがある。」とたくみ、杯にこぼるゝ

ほどつぎもりけり。

にくまれて德をしたるたくみあたらし。

○東堂へまゐれば必ず杯出でける。しやくをする小僧、つひに酒を十分につぐ事なし。ある暮方方丈にまゐる、案のごとく酒あり。例にならつて小僧六七分もりたり。客遺恨を散ぜんと杯を持ちてたち、燭臺のもとにさしあげ、「ちりが御座あるげな。」と明境にうかゞふ。東堂見たまひ、「やれ半分あるわ。」と叱らるゝ時、「實にいつも輕う御座あるか。」と。

○「藥さへすぐれば毒となる謂れあり。まして酒の性は熱たり。そちのやうに大杯をもつて數をつくさば、いかでか脾胃の損ぜぬ事あらん。急度誓文をなし杯を定めよ。」と教訓すれば、「さらばひやしての椀で三杯づゝ吞まん。」と誓ひせしが、二三日も過ぎざるに飯後の酒出づる。「私にはひやを下されよ。」と所望す。則ち冷酒出しければ、汁の椀にてうけ／＼、三杯つゞけて吞みたり。興さめがほし人々あしくいふに、「我は神文すこしもそむかず、ひやと汁との句を切り、ひやしるわんで三杯のまうと申したわ。」

○酒半ばに亭主出で、「この返しをば右手より候はん。」といふ。兎も角もとて飯器に受くる時、「それは左ではないか。」「中々、此方からは左、其方からは右なり。」亭主よりの指圖なれば、客は仰せの

まゝに受くる。」と。

○小機嫌のよき折節、さんけ物語をしけるが、ひとりいふやう「此の五體をつくる神にても佛にてもあれ、誂へたい事があるわ。」「何たる望みぞや。」「されば上々の酒をのむ時、しづかに噛みくだき吟味せんとこそたくめど、いかにも口へ入れば、そのまゝ咽喉へさうさうなく走りこむ、あまりに殘り多し、鶴首のやうにつくりて持ちたい。」と。

○「酒をのむも時によりてたゝる、たゝらぬとあると言ふは、眞か。」と人の問ふに、「さる事もあるべし。さりながら粥をくうて酒をのめば酢になるといふ、大なるうそ。索麪をくうて酒をのまねば蟲になるといふ、實の中の實。」とこそ。

○何にか思ひたちけん、一期酒のむまいと神文し、二十日ばかり後しきりに呑まんといふ。女房、「こは勿體なし、天命をばいかゞ。」と教訓しけるに、「いや神明は人の心を見ぬいて、何としたりとえこらへまい、やがて呑みたからうものをと、とくからしろしめされ、けつく大慈大悲の御むねなれば、一つ呑ませたいとこそ思召されんずれ。」

○神無月の半ば、木の葉の散るも時雨めきて、空さむげなる時しも、さかやの亭に立ち休らひ、門のほとりを見居たれば、二十ばかりなる下﨟一人走り來り、さか林のもとにより、たゞ一重きたる木綿

帯を解き手に持ち、「うへに著ようか、したに著ようか、下に著ようか、上に著ようか。」と獨り言をいひしが、「わざくれしたに著よや。」といふまゝ内へ入り、酒にかへ、よき燗にあつらへ、腹一ぱいのみ裸にて出で行きし。

ゐひざめてはなにとあらう。

裸の次に、雄長老の裸でおはせし處へ、客きたりければ、「私は母者もの手織の儘罷り居り候。」とありし。此の手織のたけ幅こそ、大なる苦勞にて出來候へ。されば忉利天に登り安居の法として、父母恩重經を說き給ふ、母に十恩ある中に、回乾就濕の恩といふあり。

子をはごくむは親の憐み

とある前句に、

狹筵のぬれたる方に身をよせて

物の理知らずんばあるべからず。

○山中山城方へ紹巴のおとづれられし時、振舞有りてひたもの諸白をしひて、前に見えつる天目にて

と有りける時、

なら酒や此の天目に二つ三つの
あと仰せあらばとにも角にも

○寺僧二十人ばかりある寺を一堂請用の時、住持觸をまはし方丈によせ、「衆僧皆上戸なり、明朝のときはれがまし、大器にてめい〳〵控へなば見苦しからん、びんばふ鬮を取らせ、せめて一人は下戸分にせんはいかん。」「尤も。」と同じ、長老の侍者鬮をとりて當れり。酒は唯二返なる條、始めより汁器と衆議相約せり。彼の侍者ふと汁の椀を取り上げけるが、やれ我は下戸分やと肝をつぶし、杯をうつむけ、絲底にてうけさまに、長老のかたを見ければ、目を見出さるゝ。あつというて持ちなほし、たぶ〳〵とうけけり。歸山の後しからるゝ時は、「私は兼日の法度のことゝて、小杯にと取り上げ候へば、御目もとちがひ候まゝ、扨は上戸なるに御ゆるし候やと存じて。」

○酒といへば見るもいやと思ふ下戸ゐたり。亭主はれなる客にても、三返の上銚子を出したるためしなし。その内證を知りたる故、衆中に振舞のある時、亭出で、「中酒なんべんとほり候や」と伺ふ。三返とほりしをちと氣にかけてか、返を重ねんと思ひ、「はや四返とほりて候。」と申す人あり、亭、「それは一返過ぎた、さらばお湯を參らせよ。」とぞいうたる。

○飯後の酒三返とほりて亭主出で、「今度は中でうけさせられよ。」と言ふ〳〵、肴とりに立ちたる間に、上座の客人、四つ目を左へなほしおきぬ。銚子をもちて出でたるに、即ち飯器をさし出しうくる。亭主、「それは。」といへば、かさと汁とを指さし、「なかでと仰せ候まゝ、斟酌なしにうけ參らする。」と。

あいた客人とこなたは串さん。

○大名の氣に入り、あなたこなたと振舞にはづれず、供しありく者あり。人そなたは羨ましやなどいひければ、「其の事なり、殿ゆふに活計はかたの如くするが、されども上戸をきらひなるまゝ、下戸のまねするにくたびれた。」と。

○師走の十日頃一條の辻に、大酒にゑひ、餘念もなくいねて居る者あり。又其の日鳥羽より用をとゝのへにのぼりたる男あり。これもちくと醉うたるが、かれを見附け、「そちの在所はいづく。」と問ふに舌まはらず、譯もなきこわつきにて、尼が崎といふやうなり。不便なるかなと車にのせ、鳥羽につれ行き、便船を尋ね乘せてやりぬ。彼の者を旅人のやどに舟よりあげおく。醉ひ醒め、「是れは何事ぞ、我は京の六條にて、あまがさき屋といふ者にてこそ候へ。」と、あきれたゝずむ。件の意趣を語り聞かするにご肝を潰し、中々にて、船賃旅籠の營みにどうぶくを沽却し、恥かしきさまにて宿に歸りつるも一笑。

人はそだち

○東の奥より都にのぼりたる人あり。さる古寺に立ち寄り院主に參會し、物語など時過ぎけるまゝ、菓子持ち出でて小姓を呼び、「いかにもお茶をもみぢにたてよ。」とありしを聞き、客「なにたる仔細に

や。」と問ふ。「たゞこうふうにといふ事なり。」とあり。あなおもしろの言の葉やと覺えつゝ、本國に歸り、態とおかしきの友をよび振舞ひ、かねてより小姓にいひをしへ、「お茶をもみぢにたてゝ申せ。」とあり。人々、さすがに此の度上洛のしるしありと感じ、事のおもむきを伺ひたれば、「こくよくたてゝ申せといふ事だよ。」と。

あながちその人のとがにはあらず物毎にたゞ國の風による。

○客を得たり。とりあへず振舞に、「源氏のお汁をせよ。」とこそ言ひ附けけれ。めづらしき汁をくふべきやうに待ちゐたれば、ゆふがほの汁なり。「こは何のゆゑに源氏の御汁とはいふぞや。」「源氏にはゆふ顔の卷あればなり。」これこそ安きもてなしとあんじ、宿に歸りて後、ふと客を見かけ、「めしを申せ、お汁には源氏をせよ。」とあり　汁の出でくるまで待ちえず、「何ものを源氏のお汁とはいふぞ。」と問はれ、「ふくべの汁のことよ。」

夕顔の棚の下なるゆふすゞみ男はてゝら妻はふたのして

てゝらは膝だけある著るものなり。ふたのとはゆぐの短きをいふとや。

○山中に殿あり。國なかにてさもとらしき武家より嫁を呼ぶに、おつぼねの仲居のおはしたのなどあかあかとともし、祝言の事すめり。二日三日たてども、つひに行水とも風呂とも沙汰せず物まかなへ

る刑部左衛門といふをよび出し、御つぼね、「ちと御洗足をお出しあれ。」と申されしかば、刑部、「かしこまり候、其の由申し聞けん。」とて座を立ち、年寄衆に、「皆よられよ、局より仰せられ分候。」とふれたり。何事ぞとあつまりたる座にて、「別の事になし、お洗足といふものを出せとなり。此の返事いかがせん。」と、談合さま〴〵なりしあげくに、一のおとないひけるやう、「一亂にうせたと申されよ。」此の儀天下一の思案といつて、つぼねへ、「御洗足を出せと候へども、一亂にうせて御座ない。」と、つぼね聞きもあへず、「あゝきやうこつや。」と申されけり。刑部きやうこつといふも聞き知らねば、又むつかしき事やと思ひ、「いやきやうこつもおせんそくも、一度にうせてをりない。」と。

○人里とほき寺あり。手習ふとて少人あつまりゐる　ころは秋のはじめ、たそがれ時のさびしきに、かりがねのわたる聲きこゆ。はしり出でかどへ見れば、かず六つでありける。歌よむ人のむすこ、

　空よりもむつかり聲の聞ゆるは雲の上にも歎きもやある

其の座の人々感じあへり。又あけのひる、雁五つつれてわたる。土民の子、昨日ほめられし方をうらやみ思ひ、

　空よりもごきかり聲のきこゆるは雲の上にも汁事やある

○小者を語らひて若衆にもち懐きていねたるに、小夜中の比から／＼と笑ふ。法師、「なに事ぞ、今

きもない時のわらひや。」といふ。「されば我が木綿布子をしたてんと、うらおもてをば持ちてあり。綿の入れんがなきを思ひいだしたれば、をかしい。」と申した。

○山中の者里に出でて、振舞に索麪あり。見始めなれば名を知らず。給仕せんさんびんに汁をもちてゞ時、「此のお名は何と申すぞ。」と問ふに、「せんさんびん。」と答ふ。其の後は彼の男、さうめんを見るたび、「せんさんびんのもて。」などいひけり。

○とろゝ汁の出でたるを、座敷に古人ありて、「今日のことゝて汁はいつにまさり、一しほ出来たること」などいひほむる。これは珍らしき言葉やと、其の仔細を問ふ。「さればよ、此の汁にてはいかほども、飯がすゝむ故いひやるとの縁に、ことゝて汁といふならん。」聞きたる作意やと感じ、やがてとろゝをととのへ客をよぶに、ことゝて汁を問はれ、おだいやるとぞ申しける。

○津の國の内小妻といふ處は、海邊にて漁人おほく住めり。何處よりとなく大鷹一もとそれて來り、畠にゐるをとらへ宿に歸り、大いなるかごに入れて置きけり。二十ばかりなる總領の子が、「何をがな鷹のゑどにせうやれ。」といふを、親聞きて、「ゑどとは何ぞや、どこぞしらうとのやうに。」としかる。「何といふがよきぞ。」と問ふ。「鷹のおはらうまいといふがよい。」

○和泉の堺車の町に、商人禪門になりたるありしが、貴人のさしたまへる刀脇指にても、上﨟若衆

の小袖、おび、はかまにても、見るほどの物に代をさし直をつくる事、天然かれがすきなりき。時にあたりあさましかりしかば、常に崇敬せし東堂あり。「それになしへん大事あり、聞かんや。」「なかなか。」と申す時、「自今以後物のねをさすべからず。」とあれば、手を合はせをがみ〳〵、「さても忝き御意に候、唯今のお詞は百貫仕らうと存ずる。」

くせはなほらぬ。

○山の一院に児三人あり。一人は公家にておはせし。坊主年に二度物思ふといふ題を出せり。

はるは花あきは紅葉の散るをみて年に二度物おもふかな

一人の小児は侍にてありし。よるは二度物おもふといふ題なり。

宵は待ちあかつき人のかへるさに夜は二度もの思ふかな

いまひとりの児は中方の子なり。月に二度物思ふといふ題にて、

大師講地蔵講にもよばれねば月にふたゝびもの思ふかな

○京にてある武士と見えたるが、人らしく馬に乗りとほるに、坪の内より鞠をけいだしたれば、中間肝をつぶし、「餓鬼め覺えたるぞ。」といふまゝ、槍を直しつかんとしけり。士見て、「やれ誰が扶持人やら知らぬに怪我をするな。」と。

○手ならふ小姓四五人あり。坊主、「けふは雨の内もの寂しきに、中絶えてといふ題にてこしをれ案ぜよ。」とあれば、歌道を心がくる人の子、

　梅は過ぎ櫻はおそし中絶えて花めづらしききさらぎの末

喝食のありしが、

　釋迦は過ぎ彌勒はおそし中絶えて聞くぞ稀なる法の一聲

農夫の子、

　早稲は過ぎ晩稲はおそし中絶えて米めづらしき七月の頃

○商人の子を寺に置きたれば、毎朝とく机に凭り「いで店ださうやれ。」といふ。師の坊主聞きかね、「寺林に居るはなにの用ぞ、蓬生麻閒ためざるに直しと、よきを學び、悪しきをなほさん爲にあらずや。」と、つらを一つはりけり。頰をかゝへ、「わら麻おほせがわるいよ、しかも米かみをくはせたわ。」

○少人あつまりゐて、い文字ぐさりをかきけるに、菊千代丸いかきと讀みあはする。後見の法師少納言いひなほし、いがきの事の面白くかかれたりと感じけるに、菊千代、「こゝな少納言殿は味噌こすいがきをさへえ知らいで。」と。うたてや、つらにひが。

○住吉ときく松原に、ときは文月七夕や、

おほせうれしき宮参り　おのづからなる手向草
その帷子のいろこがれ　花やかなりし少人たち
やすらふ影も物ふかく　知るも知らぬも浦の浪
心をよせてたちきけば　あな淺ましやくちなはを
一つ見附けて言ひけるやう　鰻にしたらば五十ぜう
かまほこならば大板が　五枚あらうと程を差した

○酌をする者、酒をはかとこぼしたれば、亭主、「その給仕は此のほどのはひでにて候ゆゑ、聊爾を仕つて候。」とあれば、かの酌ちくと手をつき、「我等はひででは御座ない、伯父の馬にのりてまゐりた。」と申しけり。

○大和の傍に十市殿とて大名ありしが、世におちぶれ吉野のにじつかうにおはせし時、あたりの者共を振舞はんとふれらるゝやう、「此のいく幾日にたれ〳〵女中ともに渡り候へ。」となり。山がつのよりあひ、「女中とは御器の事なるべし、牢人にてましませば、椀などもあるまじ、てんでに持ちて行けや。」といひつゝ、御器をわたしざまに、「これは我等がはげ女中〳〵。」と申してさし出した。

二人靜かにしづかうといふ正字を辨せず、いろ／＼に書きたるあり。彼の瀧の東にある村を東川といひ、西にある在所を西川といひ、如此書くなり。

○堂前にふりたる松一本あり。老僧少人にたはぶれ、「あの松は男松であらうか、妻松であらうか知れぬよ。」歌よみの子息出で、「妻松にてあらん、月のさはりになる程に。」土民の子、「いや男松にすうだ、あれほど松ふぐりのあるものを。」

天のはしだてにて

橋立の松のふぐりも入海のなみもてぬらす文殊しりかな　　雄長老

○あきんどの持ちたる子を見て、「これの息子はことしいくつぞや。」親のいひける、「あれはそらね十三といふて定のね十二ぢや。」と。

○たそがれ時に、何の音とも知れず、はた／＼となる。歌よむ人の子息は、「たゝく水鷄の聲にやあらん。」侍の子息たりしは、「物の具の音ならん。」と、農人の子は、「麥うつ音であらうず。」と。

五月雨にかたつき麥を乾しかねて宇治の里人寄ねをぞする

○山深く住むびんばふ人、くになかへ出でけるが、折ふし宿に客あり。麪子をふるまふに行きあひ、人なみ／＼に膳をすわりても、更に合點のゆかねばくふべきやう茫然たり。唯座上を見あはするばかり

なりし。再進をもる人に向ひ、「此のお名はなにと申すぞ。」と問ふ。給仕我等が名をたづぬると思ひ、「彌二郎。」と答ふ。すでに山に歸りにたる友とぞ語りける。「今度彌二郎といふものを喰うたわ。」「めづらしき事や。」とうらやみて過ぎしが、件の者ども二三人つれだち、ある市に出で素麪をほして置きたるを見つけ、「あれよ〳〵。なま彌二郎があるわ、ゆで彌二郎にしてくはせたいな。」と。

○ぬしやの子息、手を書きならひて執筆をするあり。祈禱連歌よりもどりたるを、貴人のかたよりよび出し、會席など趣をたづね給へるに、誰は十句、それは八句と語り、又、「其の名は知らず、内あかの小袖きたる人、五く出されてありつるうちを、三ぐはよしとてとめられ、二ぐはあしきとて戻された。」と。

○質屋の娘嫁いりし、夫婦のなかもよかりしが、かりそめの事をも、九々の詞をはなさずつかふ。たまさかなる客のまへにても、とかく九々にて物をいふ。傍方もなきはづかしさに、かの女をばさりてけり。妻家をわかれ行くにも、猶をさなきよりいひ學びたれば、「三四十二でよめいりし、四四十六で子をまうけ、四五二十にてさらるゝよ。」と。

四四ならば十六つれて行くべきに九九にもるゝか獨り走るは

あだばなは二九の十八さゝげかな

〇聟入してよろこびの杯かずめぐりたるに、祖父出で合ひ初對面の時、聟のいふやう、「なにと下戸にて候や。」といひけるに、しうと「親である人は、堅糟にもゑはれ參らする。」と。

〇手ならふ子供あまた候に、坊主ひるねの牀より、「雨は降るか降らぬか」と問ふ時、田夫の子息見ていふ、「こぬか雨がふり參らする。」と。坊主むくと起き「小雨ともきりあめともいはず、こぬか雨はくせ事や。」と、立ちながら腹を一つ踏みけり。「あらいたや、ゑなしばらをくはせられた。」

　我ならで此のふる雨に誰かこん誰とは人をふりて待つかは

雨のついでに、惠心の僧都坂本にて法談ありつるに、一時かきくもり大雨ふりしきり、かり屋の板間あらくもり、聽衆立ちさわぎぬるを見給ひて、

　昔より傳へてきくも今見るももり屋は法の障りなりけり

かく詠じ給ふに虚空に聲ありて、

　もる雨にぬれても法をふかくきけ雲も涙を惜しまざりけり

〇山家に候聟が、市に出で用をとゝのへ、日の暮れてより、しうとのもとに立ち寄る。しうと「先づ洗足をまゐらせよ。」とあれば、せんそくを夕めしのことと合點し、「此方にてはやとくせんそくいたいた。」と。「さらばあんどうをまゐらせよ。」といふ。是れも行燈を知らねば、くひものの事やと思ひ、「こ

れにかかるお時宜、あんどうな給はるほどならばせんそくをこそたべうずれ。」と。

油つきあんどんけなる光かな　春可

○屋根葺いかゞしたりけん、ふみはづして落ちたり。目をまはし忽ち死ぬる氣色なるまゝ、人々不便がり、あいすを酒にて與へんと用意すれば、かの葺師息の下より言ふやう、「酒は生得下戸なり、一口も咽喉へ入り候はず、只めしでならば飲みたう御ざある。」と。

○其の身の分によりては恥ぢかはしき人の、ある時ていしゆ、七つ八つなる子息を呼んで鼻紙をこひけるに、かれ庭に行きわらを一筋とりて來る。親、「それがいるものか。」と目をしければ、「がてん〳〵客人鼻紙の事か、それならばなんどにある。」と。

下主の文づかひや。

○堺にて故藥師院といふ醫者あり。客に對し、べく杯を出せり。院主興をもよほし、「此の杯の名をみづからたはぶれに夏菊とつけてこそ候へ。其の故は、したに置かれねばなり。」とかたられしを、其の座にありし者殊の外に感じ、他席にてはなすやう、「べく杯を夏菊とはけにもなり、したに置かれぬ程に。」

○ある人とぎやに行きて遊びゐたれば、亭主、彦次郎〳〵と呼ぶ。おつと云ひて出でたるに向ひ、

「思ひきや／＼。」といふに「心得候。」とて小さき砥石一つ持つて來る。此は珍らしの挨拶やと感じ、其の意趣をたづぬれば、

思ひきやしぢの端書かきつめて百夜も同じ丸寐せんとは

とも詠めり。その言の葉のならひを、はし／＼かたりし時、聞きたる人おもしろくおぼえ、内に歸り客あるみぎり、小刀をもちゐて常にいひならしたる小者、「竹若よ、おもひきや／＼。」と云ひしかば、おつと答へて、こうちを一つもちて出でたり。これはと問ふに、「此の外になにも重い木はおりない。」と。

○飯後の湯出でたるに、「風味殊にかうばしく、大いにすぐれたる。」などほめけるを、女房聞きつけ嬉しげに、暖簾のひまより顏さし出し、「お湯のかうばしき理や、たき物なくべたほどに。」と。座にゐたるみな／＼も、耳にしみてぞ感じける。中に一人うらやみ歸り妻にかたれば、「それしきの事をば誰もいふべきものを。」とあざ笑ひぬ。ある時知音をよびならべ、飯の湯を以前のやうにとゝのへて出し、人々かうばしやとほむる時、女房はゞからず、「お湯はかうばしかろう、柴を三束くべた程に。」と。

○腰元に使はるゝをさなきが、あやまちに硯箱をふみ割りたり。をつとのきつく叱らるゝ時、あるじ出でて、「やさしき硯箱なればぞ、ふみかいたれ。」とありしを、其の座に聞きたる男、かかる華奢なる

事やあらんと、わが妻にかたるに、「いつにても、それ程のことばのえんはあらん物を。」と、かろ〴〵しげに言ひけるが、わざとにてはなくて、天然の怪我に、我が子硯箱を踏み割りてけり。父にらみける時女房、「やさしや硯箱なりやこそふんぎやあたれ。」と。

○しかた〴〵人中へ出でたる事もなき十四五なる小姓、給仕をするに、金作りの脇指さしたる人ばかりへ、しげく茶を運びて、餘の方へ目も見かけず。末座の人かれが心を推し、我が脇指を一こ抜き、「そこな若衆、此の鐔にも茶をちと飲ませあれ。」と。

○犬をすき飼ふ者あり、名を呼んで鳴子の露といふ。何たる仔細にかくいふぞ。」と人の問ふことあれば、「月にも闇にもほえかゝるまゝつけたり。」陸奥の人ありて聞き、おもしろやと吟じ、我が犬を鳴子の露とよぶ。其の故を問へば、「よく人にほえかゝり申すわ。」と。

○山に兒三人あり。師の坊難題を出し歌をよませける。

小兒には　　摺糊木

宇治川のはしの柱のしげければすりこぎとほる槙の嶋ぶね

中兒には　　菜[illegible]くらふ

鳰の湖なみそふ月のかけ見れば今宵ぞ秋は最なかなりけり

藤花

大兒には
　あら怖や藤の花くふだう龜があこが尻をもくじりたがるわ

○下京にかう〳〵風呂とてありし。此の名はなにの仔細によぶぞやと不審しけり。「さる事あり。しふかうにおよばぬといふ事なり。」と語れば、おもしろき事に思ひゐたりしが、さる處にて、この風呂のいはれいかゞなどいふを聞きて、「それこそ知りたるしかない、ふくに及ばぬ。」と申されし。

○大名のもとに能あり、人あまた見物に行く。內はつまり高壁の外に居て、はやしの音ばかり聞く。ひるの過に芝居へくばる饅頭の外へおちたり。山ふかき奥にすむ者ども見附け、「是れはいな物や、唯今生まれたけであたゝかな、天人の玉子であらうず。さらばあたゝめてかひをわらせう。」とて、綿につゝみ懷にもちありく。日をかさぬれば青くなるまゝ、「天人の玉子ではない、むくりこくりが玉子にてあらうず、かひをわらぬ先に殺せ。」と、かりまたにておそれ〳〵射きりたり。「さればこそ申さぬか、中に黑血のかたまりが候わ。」

○年の比八つばかりなる小者、冬の日の朝いかにも寒につかうまつるゆゑん、なが〳〵と下より上へひたもの云うて通る。心ある人不審に思ひ、今の者の行きとまる處をつけて見せければ、鎌田屋德庵宿に入つて出でず。

○野人春のあたゝかなるに思ひたち、山家に行く、道の櫻の花莟みてありしを、老人杖にたすけられたるが休みゐたるに問ふ、「是れはなにといふ木ぞや。」「櫻の木といふ。」と教ふるついで、「ひものやうにつかふなるかばとは、この木の皮ぞとよ、世にある人はおもしろがりて、此の木をもてあそび、歌によみ、連歌に工夫めさるゝなり。」「歌とは何事ぞ。」「さればとよ五文字七文字に言葉をつゞけ、三十一字に心のいろをあらはす。」などと、所まだら云ひ聞かせければ、得堪へぬ物がたりやと、領掌のふりにて別れしが、五六日も過ぎ山より里にかへる時、見れば花みなみだれたり。こゝこそ申しどころよと、

いきしなにつほうだ花がきしなにはゐじかつたりや桶とぢの花

○關東よりの會下僧の上り京にすまれしが、ある町人と會合す、振舞過ぎて碁始まれり。僧の俗にむかひ、「いざ〳〵よつてごろじらう。」と申さるゝ。俗すこしも合點ゆかぬふりなれば、「見らうといふことだ。」それも猶心得ぬ體なれば、「汝愚かなるかな、目前の境界にてあるわ。」と。

醒睡笑　卷之六

兒の噂

○叡山西塔に、兒達よりあひて、思ひ〳〵の物語り時移りしに、一人が言ふやうは「この若道といふ事は、昔たれがたくみ出したるぞや。」と、さも恨めしさうに、問はれけるを「この道は高野の大師弘法といふ人、これの御影堂に殊勝がほして居らるゝ坊主の、唐までありき廻り、かやうの難儀を仕出されたる。」と語る者あり。なか〳〵憎やと思ひしが、ある朝院主も同宿も留守なりしに、小法師が兒をよびて「此のお佛餉をお大師へ參らせたまへ。」とをしふる時、彼の兒もちて行き「さあこれ食うてまつとなんぞたくめ。」と。

○ふるまひの菜に、茗荷のさしみありしを、人有りて小兒にむかひ「是れをば、古より今に到り、物讀みおぼえん事をたしなむほどの人は、皆どんごん草となづけ、物忘れするとてくはぬ。」よし申したれば、兒聞いて「あこはそれなら喰はう、くうてひだるさを忘れう。」と。

○年の暮になれば、家内上下の定器どもを、侍從誂へんといふを聞きて、小兒かたはらに侍從をまね

き、いはれけるやう、「あこがをばいかにも御器を木うすに、そこをくりてひろう誂へて。」とたのまれけるに、「いやそれは飯をもりきりにする時よかるべし。此の山のはいづれも〳〵物相にて候へば、うつは物の大小にはよらず候。」と、つぶさに語りければ、「いやたゞあがいふ如くあつらへたまへ、自然粥といへばぶつじ時があるわよの。」と。

此の兒を代官にほしや。

○尾州に笠寺の觀音とて、人あまねく尊めり、昔この寺に兒あり。宗長參詣の砌、

兒みんとさして來れば笠寺のへやの隅にごひつ据ゑて置く

兒すだれの内より、

ひつすゑて晝はおけども浦潮のよるの雨にはひらく笠寺

○三伏の暑き日に、坊主他行の事あり。夏の夜は待ながら明けやすき月の、ふけても未だ戻らねば、兒みなくたびれ、帯も解くや解かずにいねたる所へ、老僧歸り來りて、「さて〳〵爰な子達がなりは、其の儘すしをしたやうなわ。」と申されける時、兒の内にかしこきが起き合はせ、「いか程のすしも見たれど、これほど腹に飯のないすしをば見たことがない。」と。

○大兒と小兒と額をよせ合はせ、をかしき物語して遊ばれけるついでに、大兒くちずさびに、「餅はくふ時核がなうて、おもしろい物ぢや。」と有りしを、「いや唯われは餅にさねがあれかしと思ふよ、植ゑておきて、ならせて喰ひたい。」

○八月十五夜の月にむかひ、坊主あまたあつまり、兒もまじはり詠め居けるに、大兒、「あれほどの餅を抱へて、そろ〳〵くはば面白からうの。」と呼きける時、小兒、「されば大いさはあれ程でもよいが、あつさを知らぬ。」と。

月を題にて

圓かりしなりもかくるや天人の夜毎にかぶるもち月のはて　雄長老

○今朝とくから北谷へ大兒のよばれておはしたるが、春の日の長きも、遊ぶ時には短くおぼゆるは、常のならひ、夢ばかりに事さり、夕陽西に入相のなる比、我がすむ坊に歸り、起きて見つ寢てみつ、苦しさうにいたはられけるを、小兒見かね、「そなたの煩ひは心地いかゞある。」と問はれしに、「唯けふのもてなしの餅を食ひ過して、胸のやくるが苦しい。」といはれしを、「我もちと其の類火にあうて見たいよ。」と。

餘儀のないのぞみですよ。

○叡山の兒も三井寺の兒も、里にくだり居られけるが、折々出會ひ、他事なかりし。山にすむは三井をなつかしく、三井にすむは山をなつかしく思ひゐたりしが、或時たがひに懺悔物語するは、「山は朝一合半、夕一合半のけぎやうなり。」と。「三井は朝一合、晝は一合、夕は一合なれば、同じ事ぞや。」といふに、叡山の兒、三井のをうらやましといふ。いかなれば汁と湯とが德になるほどに。しるのついでに鯸といふ魚をとるには、必ず其の時節約束あり。夜そと雨降りて明方に北風の吹きたる朝、澤山にあがる物といふ。夢庵の堺に御入りありつる時、濱邊に出入する者あり。折をたがへず參らせける。かくありつるにおそなはれば、讀みてつかはし給ふ。

　夜の雨けさは北風ふくとうの汁のおとづれせぬぞあやしき

○兒里へ下る宵に侍從を賴めば、紙に包みたる物を渡し、「是れは我が祕藏なり。」と。「手本候や、いつくしき繪など候や。」「いや白箸なり、これは世に澤山なる物に候。」「何とて左樣に重寶めさるゝぞ。」「仔細あり、此の箸をすわりたる日、續けて五度物を食うたれば、嘉例のよきにあひくる。」由。

○坊主餅を一つもちて出で、二つにわり、「兒三人のなかにて秀句を云うて食はれよ。」とあれば、小兒「此の餅は二日月で片割あるよ。」といひ、やがて取りけり。次の兒、「はや月は山の端に入るよ。」といひ取りにけり。大兒に向ひ、「そなたは心なにとあるや。」「其の事よ、月入りて後なれば、我が胸はや

みのやうな。」と。

○振舞のありし時、あふを稀とや、兒大いに食を過し、起きて居るまでもかなはず、ひらに臥してうなり居けるを三位見附け、「食胸になづんで苦しむには、大根をおろし其の汁を飲めば胸くつろぐ。」といふ。ちごに其のよし言ひ含めければ、「近頃よからん、さりながら何たる藥にてもあれ、口へ入れんやうはなし。おろしてなりとそのまゝなりと、胸の上に置く料簡をしてたび候へ。」と。

○兒を請じて謠うつ舞うつすれども、鄰寮の坊主をけつく呼ばず、腹立千萬にて居けるに、誰人のとりはつしてやらん、そこつの音しけり。夜もあけば兒もかへらんとこそ思ひしに、さはなくゆるくととじめ、朝食のあけくに、又さゝめきあへり。憎しとおもふ心やありけん。鄰より呼びかけ「お座敷へ申し度きことの候。法華經に曰く、簫笛琴箜篌鐃銅鈸は音あつて香なし。栴檀香沈水香多摩羅跋香多伽羅香は香あつて音なし。昨夜のおならは香あり音あり。一段殊勝々々。」

　まぢかけれども知らず顏なる
秋を穗にこむる夏野の村すゝき　　俊也

○貧々たる坊主の眠藏より、餅の半分あるをもちて兒にさし出す。請取りざまに、
　十五夜のかたわれ月は未だ見ぬ

とありしに、師の坊、

　雲にかくれてこればかりなり

○ふと人の來りて兒に向ひ、「法印はいづくに渡り候ぞ。」と尋ぬれば、「護摩堂にかきして御座るわ。」「かきとは何事ぞ。」「經陀羅尼をよみてといふ事よ。」「それをばかんきんとこそいふ物なれ。」「あこらそれ程の事は知りたれど、ひもじさに、かんともきんともはねられぬわ。」

　ひだるさと寒さと戀とくらぶれば恥かしながらひだるさぞます

○ある時宗長笠寺に參られし。坊中に立ちよれば、兒のありしが、ちらと木のそらに上るを見附け、

　さる兒と見るより早く木に登る

やがて兒、

　いぬのやうなる法師きたれば

○比叡山北谷持法坊に兒あまたあり。冬の夜豆腐一つちやうを求め、田樂にする。老僧いひ出されけるは、「各秀句をいうて食ふべし。」と。大兒やがて、「我は佛のつぶりと申さん。」とてくしとりてのく。又一人は、「八日の佛。」とてやくしとりたり。後に小兒屏風の陰より出づるを見れば、髪をばつとみだし、たすきを掛け、左右の手にて目口をひろげ、「我は鬼なり、皆くはう。」と、ありたけ取りたれば、

爲方なさに坊主は古き手拭を頭にかぶり、手を指し出し「乞食に參りた、一つあてゝおぢらかしあれ。」と。

老僧のはたらき三國一

○兒より合ひのさんげに、大兒は「蝨がなくものならば、いかばかり人中にて恥かしからうが、せめてなかぬで恥をかくす。」と。小兒は「いやわれは蝨をなかせたい。其の間なりとくはれいでくつろがう。」

唯拈れそれこそそれよ唯拈れすはうの裏に綿がみはなし

○師が兒によりくく口說きければ、ともいへかくもいへいやなり。所詮昔そちが兒でありしを、わが思ひかけたるに、なびかなんだ故、今そちがいふになびかぬならん、報いの程を思へとぞ。是非なうて過しつるも、あるとき彼の兒人なしとや思しけん、ちらと味噌をちとなめたるを、師が見つけて、一首、

むかし味噌兒をなめたる報いにや今又兒になめらるゝみそ

○弘法大師入唐のとき僧來りて問ふ。「如何なるか是れしやうじ一大事。」大師こたへて云ふ「味噌よ味噌よ。」

○報いてふ事かろからじもの。

蚊遣たくけぶりに賤の先づ出でて

月かくす山叉雪にうづもれて

○山門北谷に兒あり。惡瘡のいたはりに、根本中堂へ參籠す。七日滿ずれどもあへて效なし。うち恨みて、下向に短冊を内陣へ投げ入れ參らせたり。

南無藥師衆病悉除の願ならば身より佛の名こそをしけれ

卽ち内に御聲ありて、

村雨のふるとは見えで晴れにけり其のみのかさをそこに脫ぎ置け

本坊にかへれば、瘡みなあとなし。

○人ありて問ふ、「兒の年は幾つになり給ふぞ。」「年はくしがき。」といへり。「九四の十三は聞ゆ。扨がきは。」「其の事よ、いつも物がくひたらで、このやうにやせて居るほどに。」

○七旬に餘る老僧、兒の數多ある中にて、同宿どもに、「此の十日も二十日も、一向食事がすゝまぬ事よ。偏に是れは年のよりし、困窮のしるしにや。」とかたられければ、大兒申されたることこそ珍らかなれ。

「今年はや十八になれど、ひだるさはまだやまぬ。」と。

○大兒を誰人の賞翫しけるにや、けしからぬ活計のありつると見え、いねて居ながら、「あら苦しやあら苦しや。」といふを、小兒「何とて色となく、無病さうにはあるが、さ程に苦しいかや。」「唯食過ぎて身が熱する。」といへるにぞ「けなりやそのやうな煩ひならば、我もちと持病にもちたいよ。」

○大兒の小兒に向ひて「今日の腹はいかやうに候や。」と問はれければ。返事に「腹は太鼓ぢや。」と。「さてもよき事や、うらやましや。」とありければ「いや胴に皮がついて候よ。」

○兒たまさかの里へくだり、頃しも秋の半ばとて、民のかまどはにぎはへる。煙たつ田のもみをひき、米を白めてつきうすや、誰もしるこの餅の音、きねの神垣へだてなく、なみ居て是れを賞翫す。笑止は兒の餅にむせ、目口をはたけ悶ければ、父母は歎きに沈みつゝ、せん方涙なりつるに、山伏かけて通り合ふ。たのみて祈念するほどに、栗ほど餅が喉よりも、ひよつといづれば、いるなほり、心安さに兒のいふ、「とても行者の奇特ならば、祈り出せし其の餅を、ま一度祈り入れ給へ。」

○大兒、

大空にはゞかる程の餅もがないける一期にかぶり喰らはん

○小兒、

大空にはゞからずとも餅もがな月のせいにて星の数ほど

○兒のとまりに來て、夜はやう／＼更けゆけど、菓子をさへ出すよしもなければ、枕を取り上げ、口にあて／＼しけるを、そばなる者、「それは何といふ事ぞや。」「わさといはうて齒に物をあてそむる。」と。

○平清盛公大塔再興ありて參詣の時、志なき齒を一つ手づから拔き、奧院に籠め給ひ、

高野山おろす嵐のこはくとも此のはは殘せ後の世のため

○山寺に兒や法師まじはり、いろ／＼の物語するついでに、「正月あることは五月必ず有るとなれば、萬を祝ひもつゝしみもせん物ぞ。」と語る人ありしに、兒「扨は正月ある事は五月もあるよなう、あこは左右は思はね、正月は餅を再々見れもし食ひもしたが、五月の今日は、二十八日になれど、餅とては一つも見ぬほどに。」

○三位が物相と兒の物相と、同じ飯臺にすゑならべて置きたれば、よく／＼徒然のあまりにや、三位が飯をもとりて食はれけり。後に三位來り食せんとするに無し。これは不思議なり、別にくふべき人はなきにと、穿鑿しける時、兒の云へるやう、「汁かと思うて添へてくうたわ。」と。

○兒はいくつぞと人の問うてあれば、「年は十三になれど、御器に始めからのおや。」と。

○例の座敷にて、三位兒の膝に近寄り、「ほしもなくと、むりに飯を澤山にお參れ。」と指南しければ、

兒箸を持ちながら、ひたもの泣く。側に居る兒、「何とて左樣に候や。」と尋ねしかば、「飯をしひてくへといふ程に泣く。」と。「三位が心附にてはなきかや。」「いや非時をくれまいといふ事であらうず。」と。

○兒といねたるに、法師口をすふとて如何ありけん、齒を一つすひ拔きたり。肝をつぶし、暇ごひまでもなく、遁げて歸り、靜かに火をともし見れば、麥飯にてぞ候ひける。

ふたしなみな兒のありさまや。

○大兒と小兒との前にて、「小兒の年は幾つぞや。」「あこはみをつくし。」といふ。「しからしの答へや、源氏によそへ十四よの。扨大兒はいくつぞや。」と問はれ、「我はさゝげぢや。」「それは何事ぞ。」「ことし十八なる。」と云はれた。

○兒にかくして坊主餅を燒き、二つに分け、兩の手に持ち食せんとする處へ、人の足音するを聞き、疊のへりを上げ、あわてて半分をかくすに、はや兒見附けたり。坊主赤面しながら、「今程の有樣をおもしろく歌に詠みたらば、振舞はん。」といふに、

山寺の疊のへりは雲なれやかたわれ月のいるをかくして

○比叡の山へ侍の子と、鍋屋の子と登山し、一つ寺に兒となりて居たり。或時煮豆を菓子に出したるが、よくいりたると生煮なると混りたりし。坊主、「面白き出來やうなり。これを一首づゝ案ぜよ。」

とあるに、侍の子息、
　奥山に狩場の鹿は多くしていられたもありいられぬもあり
鍋屋のむすこ、
　この程は誂へ鍋の多くしていられたもありいられぬもあり
○三井の寺にて、鶴千代といふ兒、三位にむき「鄰の松若殿はあの様に、そこ〳〵にて歌を詠まるもけなりや、如何やうにも指南を受けて、そとは此の道を心得たき事や。」など語れるを、深切に思ひ、「さらば其の時のえんにより、いうてしをらしき句を教へ申さん、まづあひたや戀しやと思ひ給ふ人に逢うた折には、
　待ちかねぬるに今ぞ嬉しき
又花など見て歸り給はん時は、
　命にかへてをしきわかれぢ
又語りたやと思ふ人に別るゝ時は、
　唯何時までもあかぬものかな。」
鶴千代これを習ひすまして覺え居たるが、正月の祝ひに、はれなる座敷へ喝をすうるに、人より早く

箸をとり上げける。三位にらめば、

　まちかねぬるに今ぞ嬉しき

といへり。又芋をあしつけの上へおとし、挟みかぬるを兒、三位にらめば、

　命にかへてをしきものかな

又膳にみな〳〵箸を置きたるに、鶴千代ばかり遅くおかるゝを、三位にらめば、

　唯いつまでもあかぬものかな

と、さても色をかへて、其のをり其の時に合ふやうにとこそ指南したりしを、かりそめ坐りたる一膳の始中終に盡されし。無興々々。

○ある座敷にて、兒のとろゝ汁の再進を、ひたもの受けらるゝ時、三位目をひき睨みければ、兒「あこにさのみ科はないぞや、唯とろゝを睨め。」

○老僧、小僧、兒、若衆云ひ合はせて、隨意講のまはしはじまれり。ある席にて、兒汁の椀に酒をうけられたり。後見の法師目をきつと見出しければ、兒顔をおさへ「南無三寶隨意講はやぶれたよ。」

○大兒のいへるやう「あの三上山が飯ならば、何とあらうの。」とありしに、小兒端的の返答に「湖がとろゝ汁ならばねらはれもせんや。」と。

○ある法師のもとより、二人おはして遊ばるゝ兒のもとへ、座禪大豆を少し送りたりし事あり。大兒嬉しげに手を出し、憚らずつかまんとしけるを、小兒ちやくと手を捉へ「そのやうに不得心な風情、影より人の見る目をもかへりみ給へ。」とて、箸を二膳とり來り、一膳を渡し「大兒役にそなはた二粒づゝおまゐれ。我は小兒役に、一粒づゝ給はらん。」といふ。はさむに、大兒はともすればはさみはづし、小兒の矢さきはづれず、ほしり／＼と當りし事よ。

○延暦寺にて下法師山へ行く時、兒にいふ「晝の飯をば棚に置きたり、九つなりてあらば、まゐれ。」と教へぬ。彼の下僧案の外常より早く晝以前にしまひて、歸りみれば、兒の飯なし。「是れは不審や。」と問ふ。「疾く早くうた。」と返事せらるゝ。「いまだ九つはならず、いかでか。」と申せば「いや今朝五つ前に四つうちたれば、九つなつた程にそれにくうたわ。」と。

○大兒と小兒と二人居て、菓子に出でたる串柹を賞翫あるに、大兒のは數少なく、小兒のは多し。大兒「同じやうにくふ柹の、そなたのは何とてはかがゆく、我がはいかなれば數が少なきぞや。」小兒の返事に「其方のは慾がきれぬ故に遲し。我は無慾なるまゝ、はかがゆく。」とあり。大兒重ねて「慾とはなんぞ。」小兒教へていへるやう「柹には核といふくせものありて、きにけをせんとする。それにかまひ、とかくする間費えあり。其の慾をさへきらせば、必ず物數をくふ徳あり。」

○或時兒茗荷のあへ物をひたもの食せらるゝに、中將兒て、「それは周梨槃特が塚より生じて鈍根草といへば、學問など心掛くる人の、くふべき事にてはなし。」といましめける時、兒、「なかなかの事や、是れは鈍になり、物をわするゝ草よなう、但しうそであらう。其の仔細は、三年後にこの如くあへたる茗荷をくうてあつたが、今にそのうまさをば忘れぬほどに、食うたがましよ。」と。

○山の大坊の猪の子の餅をつくる。あまり人多し。「兒たちは寐てゐらるゝあたまに、一つづゝ置きて通れ。」と三位が下知するを、小兒聞きつけ、其のまゝ居直り、頭を下になし、尻を立てて居けり。餅くばるものそこつにさぐり、二つ置きてとほりぬ。

じきにせばしゝにやならん猪の子餅

○兒を請じて、夜衣に新しき紙の衾を出しきせぬるまゝ、兒の詠める、

おそろしや思ふ中をもさけつべし夜の衾のなるかみの音

○貧々と世をふる僧の思ひに堪へかね、兒を請じ、大唐米の飯を出せり。是れは珍らしきものやなどとはるゝ人もありけり。亭坊のいはるゝやう、「せめての御馳走と米をぞめさせたる。」とあれば、彼の兒箸をもちながら、「さうかして大唐めしのやうな。」と。

○まこと侘しき親をもちたる兒のありつるを、小師の坊あはれみて、「是れのお兒はおいとしやな、里

が無力なれば、ちともはれがましき事といふには、何かおりめされぬ物はない、おぬしの物とては唯一いろある。しゞばかりぢやの。」といひけるとき、「いやそれも人が見ては、お兒のしゞにはころ過ぎた、そなたのではあるまい。」といふ程に、「あこが物とおもはぬ。」と。

○豆腐二三ちやうを田樂にせしが、人多なり。いざむづかしき三字はねたることを云ひて食はんと議せり。雲林院根元丹せんさんびん、さまぐ\いひつゝ取りて、みなになるまゝ、小兒たへかねて茶うんすんといひさまに、二つ三つとり事は。

○兒を呼びて伽の人など集め、振舞を出し酒宴の後、あまりに醉ひいねぶる閒に、兒はかへりて見えず、夜明けて彼の亭坊より兒へ、

待宵のふけ行くまゝの眠たさに兒の歸るさしりもせぬかな

兒より返歌、

歸るさをしられぬ事のうれしさよしりしられては物憂かるべし

○兒の膳にかうの物のあるを、脇に居たる僧とりて食ふ。兒、「我が祕藏に思うて置きたるを。」と云はるゝ時、彼の坊主、「一つは御膳に候と存ずれば、何とや懷かしさに、又は常よりもふくなるが面白さに。」と申したり。兒腹をたて、「ふかるが面白くば鐵砲をくはれよ。」と。

若道不知

○久松といふ子を山寺に上せ置きたり。親見舞とて寺に到り、一夜の程泊りたるに、久松に寄り添ふ老僧も若きも、すばり〳〵といふもあり、あかすばりといふ人もあり。彼の親父一圓此の道に疎し、不審はれぬまゝ、そと子息に尋ねけり。久松さかしく「此の寺の習ひに、下戸をばすばりというてせらる。」と語る。親聞き「實にも〳〵、下戸は酒にあうてから、口がすばる程に。」とて、大いに同心したり。或時夫婦つれだち寺に來る。振舞あり。酒の砌後見の法師出で「久松殿母儀は、一つまゐらぬや。」と問ひければ、男のいふ「私は御存知の如くすばりでは御座ない、女どもは、一圓のあかすばりにて候。」と申した。

　よし曇れくもらば月の名や立たん我が身一人の秋ならばこそ

　よしすばれすばらば若衆名や立たん我が身一人のすきならばこそ

○紀州根來の岩室に、梅千代とかやいふ若衆、かたちをませの内にかくせど、其の名は外にもれやすく、そばのかけ橋及ばぬも、思ひを志賀の浦浪に、よせぬ人こそなかりけれ。かかる折しも情なや、花に嵐のそふもけに、これかや梅千代やまひづき、一まづ里に下りしを、涙とともに訪ふ人あれば、かたかしらなる親出でて、いひぬる時宜のうたてさよ。「これの子息はこえだしに、はれものあれど大

事ない。」

御親父の時宜に戀がさめた。

○幸菊といふ一人子を寺にのぼせ、物習はせけるが、久しく逢はぬなつかしさに、親雜餉をかまへ師の許に行く。若き坊主の幸菊に向ひ、「小穴々々。」といふ。又よの人も小穴と呼ぶ。さても奇異の言葉やと思ひ、近づきて問ひければ、これも此の寺に下戸のから名を小穴といふと答ふ。さもあらんと合點し、重ねて夫婦つれだち、寺に參りし時、女房に酒をしひぬれば、よく知りたる顏に、彼の親いふ、「我等は一圓の小穴にて候、子もちはちと廣穴なり、しひたまへ。」と申した。

○若道にはうと〳〵しく、歌道にはたど〳〵し、文章にはくらし。かくてもよき若衆に千松といへるあり。かれにうちほれ執心あり。いかゞたよりていひよらんや。昔より歌は鬼神のおそろしき心をも和ぐる道とあれば、是れなんしるべに思ひたち、其の道しりたる人に、三十一字のさまを問ふ。「それ歌には六儀あり、風、賦、比、興、雅、頌これなり、言葉のえんは、梅や櫻の花によそへ、思ひの色をいひつらね、とまりには、らんの、けりの、かなのと、それ〴〵に置く習ひあり。」と敎ふるに、造作もなく得心のふりにて、其の暮に詠みて遣はしたる。

梅の花櫻の花に鷄頭花千松戀しなるらんけりかな

○子を置きたれば、それに便り、親再々寺に行く。僧衆よりあひては、それがにやけ、これがにやけと語るを聞いて、子息に「何とやうなる物をにやけとはいふぞ」と問ふ。「にやけとは、酒をいふ。」と。宿に歸り妻にむかひ、「兎角子たらんをば、人中に置かいでは、物を知らぬぞよ、酒をにやけといふ事を教へたわ。」と語る。今度むすこ里にくだり、長々居ければ、寺より中間迎へに來る。かの家幸ひ酒屋なり。母の見て「やれあの使に、まづにやけのみをなりと食はせよ。」と。

○若き僧一夜の宿をかりけるに、十一二歳なる少人、同じ座敷に寢ねたるが、何事やありけん、亥の時許りに「母よく〱尻に火が付いたわ。」と頻りに呼ばはる。あら悲しやと急ぎふためき、火をもち來り見て「大事もないぞ、お坊主樣のせいがいつて消して給はつたわ。」

人はたゞ十二三より十五六盛り過ぐれば花に山風

○治部卿が兒の手を取り、いろ〱さま〲に詞を盡せど、ゆめ許りも領掌せず。あげくに兒の利口こそ可笑しけれ。「われがしりは守護不入なり。」と。時に治部卿、憎さのまゝの返答に、「それ程結構さうにな宣ひそ、守護不入のところから、さい〱夫のでたを、われがよく聞き參らせたぞ。」と。

戀のみち

○妻夫いさかふ事あり。女房心たけく夫をうたんと杖をあけけるに、驚きつゝ前栽に飛び下りにげ、

山椒の木の下に隠れぬるを、妻縁の上よりいふ、「いかほど逃ぐる所も隠る所もあらうずに、あのかんばうだふれが、山椒の木の根にかゞみ事は。」と叱られ、男ふるふ〳〵、「いや山椒の木ばかりではなりない、山の芋のつるの候に、とり付いて居まゐらする。」と申せし事のあはれさよ。

山いもは腎にも苦しからず、本草をよく見給へ。

○僧の落墮して居けるを、よしみある人なつかしく、見參のために尋ね寄る。越し方を語りつるが、でびたひになかうば高く、その鼻はひらめにて、頬先尖りたる女房の、肉そとありくあり。あれは下司にてぞあるらんと、くはしく問ひければ、「あれこそわが本妻。」といふに驚き、「こは何の因果に、あれていの者にはそふ事や。」と笑ひければ、「何事をいはるゝぞ、おちくらには目が見えなんだ。」

○京の町を氣力の毒かはう〳〵というて歩く男の姿を見れば、如何にもやせ衰へ、いろせう〳〵と勞瘵氣なり。可笑しきものに思ひ、或所へ藥をうらんと呼び入れ、「そなたの風情には、違うたる望みなり。」と問ふ時、「さる事あり、我等はそなたの御覽さるにまぎれなし、某つれたる女どもの氣力あまりよく候まゝ、一服のませたうて尋ぬる。」とぞ申しける。

○老母老父と成人の男子三人一所にあり。さらでだにいぶせきはいりの小屋、春雨すさぶ永日なれば暮しかねたるつれ〳〵に、老父むすこに向ひ、「誹諧をして遊ばんものを。」といふに、男子「尤も。」と

同じ發句をする。

てゝぢや者はゝぢやがものにうち迷ひ

老父さらば附けんと、

それにつけてぞおのれできける

○亭主の心に女房はよく寐入りたるやと思ひ、二階に候下司のもとへそと忍びたれば、妻はよく知りて、火をとぼし後より上る。男きる物をかぶり、座敷の隅にうつぶしになり居たりけるを、あまりの可笑しさに、女房「此なたりは、其のまゝ鶉のやうにここといひしを、男ことばはなくてわゝくわいと。

づにはづれた鶉であらうよ。

○「此方の宮法師殿、昨日花の本の一ふしは、何に比べんやうもなや、耳をそばだてて聞く人ほめぬはなし。」と語る。母上「宮法師は、何としてそのやうに聲はよく立つぞや。」と、ひとり言を云へり。親ぢや人ほそ聲に「未だその道がなさ。」といはれける時、「そのかたがなうて聲のよくば、そなたが聲は迦陵頻ほどたたん事よ。」と。

○時宗の寺に長阿彌といふ喝食あり。やるせなく執心するもの言ひ寄らん便りもなきに、「一首我が代りによみて給べ、送りたや。」と頼みければ、

あぢきなき長阿彌陀ぶの決定は往生よりも望みなりけり

○赤根のうらに、島の表の小袖きたる若衆を見て、

ほの〴〵と赤根の小袖ひつかさね島隱れ行く尻をしぞ思ふ

こひするに佛となると聞かませば我や淨土の主ならまし

○東にて都の若き商人と、其の宿なる中居の女房に相馴れ、此の頃むつまじくたはぶれ、男三味線をひきおもしろく興ぜしも、ほどなうかへる頃になりぬ。女やるかたなく名殘を惜しむあはれさに、何をがなとて、一しゆの三味線をつかはし立ち別れんとするに、女、

片身とて緖付板をばさつくれてけさ行くべいか味氣なの身や

○七十に近き姥あり。にあひたる者の方へ嫁入する。孫なる童子にのせて行く道に、さはる荷物のあるを見て、彼の孫子に聲をかけ、「のいて通れ。」といひけり。姥これを聞き、「そうて通れといはんこそ本意ならめ、のいては不吉なり、いや〳〵今日はゆくまい。」と、嫁入をやめけるも興あり。

悋　氣

二人ねて見るとも船は狹からじ夢をのせじとあらき波かな

○夫婦諸しらがまでそひたりし、祖父先にたち、朝一片の雲と上る。篠の一夜とてもゐこし帝には三

千の后あり。ゆふべになれば羊の車にめされ、彼が行き留る局の前に下りさせ給ひ、比翼連理のかたらひあり。されば羊は篠をこのみて食す、我がもとにやとゞまらんと、各局の前に篠をうゑぬはなし。竹葉羊車過二別院一、今宵空シク聽ク半夜ノ鐘と作りし詩は此の古事にてありけり。されば君恩をうくる事、僅か其の篠の一夜を限りにて、二夜とあはぬ中だにも、名殘は思ふ習ひあり。まして老いらくの腰に梓の弓をはるまで添ひ馴れし中なれば、ねて思ひおきてあこがれ、袖は涙に朽ちはてて、つかの間もはやく終り、一つはちすの緣を結ばん事をのみ、くどきばかりに歎きけるを、鄰の者をかしがりて、ふとうばがもとに行き、「此の程はひさしや、善光寺へ參り祖父にあうて候わ。」「さていかなる有樣や。」といふ。「其の事よ、三途河の姥と夫婦になり、やくたいもなき浮世ぐるひや。」といふ。姥忽ちに氣色かはり、杖を持ちて十王堂に走り、「あら憎の、うばが人の男を取りたるや。」と、木につくりたる形をさへたゝきて、恨み〳〵てたゝきごとは。

○夜半のころ、鄰にいさかふ聲しけり。何事にやと夫婦ながら起きて聞き居たれば、男の徒らなるによりおこりたる、悋氣いさかひの修羅をたつるなり。聞き居たる女房何の理も非もなく、夫のあたまを續けばりにはりけり。夫「これは何といふ狂亂ぞ。」といへば、「此の後もあの鄰のいたづら男のやうに、身をもつなといふ事よ。」　迷惑の。

○おかたの方より、紅梅が使に參りたるよしいひあげけるに、「何事ぞ。」「いやちと物の講を結びたまふが、こなたへも人數に入り給はんかとの儀に候。」「きやうこつや、これ程いそがはしくいふ〳〵なるに、何の講ぞ。」とあれば、「別の仔細にあらず、悋氣講をおかたの大將にて、たれ〳〵結ばるゝ。」と語るにこそ、「悋氣講ならば我も二人まへまじらうぞ。」と。

○武士たる人若衆と知音せられけるを、殊の外に嫉み妬み、ある時上﨟堪へ兼ね、表へ走け出でいはるゝやう、「やれそこな若衆めよ、もはや其の儘これの家主になれ、明日からおだいかいを渡さうぞ。」と。

○貧なる僧の打ちほれて知音する若衆に、大名の執心せられて、定家の色紙を出されたれば、坊主もまけじと思ひ、弘法大師の筆といふなる心經をやりぬ。重ねて大名より、刀脇差を金づくりにして送られしを見て、坊主の詠める、

なに事も人にまけじと思へども金刀に手をぞつきける

○老人のもとへ器のふたに、紙をおして、

若和布をやるぞ慰みにせよ

と書きたれば、返事に、

わかぬ得て古めを内に置くならばふため狂ひと人やいはまし

詮ない秘密

○田夫畠をうつ折ふし、鄰郷の百姓とほりあはせ「これはなにを蒔くぞ。」といふに、彼のはたうちこてまねきし「お聲が高い、ひきう／＼。」といふ。さては世にまれなるから物のたねを植うるにやと思ひ、心得たりと近くよりたれば、いかにもおのれが調子をひきく「大豆を蒔く、鳩が聞くほどに。」

○二郎大夫といふ百姓夫婦ともにつれ、河内國今田の市にたつ。人多くあつまりたる中にて、知人に行き逢つたり。「さても二郎大夫は。」といふに、其のまゝ返答におよばず走り寄り、「そゝと物をいうて給はれ。」「誰そにかくるゝか。」「いやむすこを内にねさせて來たが、若し聲の高さに目がさめうずらう。」と。

○市にて物をひろふといふ題にて、

事出でて打ちやふたちのつば音に拾ひものこそわが命なれ

○義經東國下向の時、一夜の宿をかられけり。辨慶あるじの女房に「子はいくたり候ぞ。」と問へば、「てゝの子六人、母の子六人、あはせて九人候。」とこたへしを、何とも當座にあたらず、明の日も案ずるとて辨慶道を七里あゆみおくれたるとなん。これはてゝに始めの腹の子三人あり、母にも始めの

子三人あり。今夫婦の中に三人出來たり。てゝに別けてみれば六人、母に別けて見れば六人、されどもきはまりは九人。

子は九人あるといはいで。

○僧俗呼びあはせ、いんぎんに齋をしてんけり。老僧だんなに向つて、「今朝の追善は、六親の内誰人のため候や。」と問ふ時、「妹聟の舅の日なり。」

唯親の日といはいで。

○恥かしき客あり。振舞なかばに、「酒を取りて來れ。」とありしかば、千代といふ下司、調子高に、「かみさま錢五十が酒をか、百が酒をか。」と問ふ。興さめければ、そと呼び寄せ、「人のある處にて、今のやうにはいはぬものぞ。」と叱られしが、或時五つ六つなる總領の子とりはづし井にはまる。件の千代しづかに歩みより、耳のもとに口をよせ、人の聞かぬやうに、「わかうさまの井戸へおちあつた。」と。

○我が身を謙りなにはにつけ卑下する人、或時馬の庭乘しけるに、ふとく逞しく足きいてなど、人みなほめければ、「いやおの／＼御覽ぜらるゝ、かた腹は肥えて候へども、御目のまゐらぬ影のかたらは、一圓瘦せて候。」と。

曾我の十郎の馬なりと、片身さからては瘦せまいの。

〇一天に雲盡きて、星まん／＼と耀く夜、あたりの友を誘ひ、端居して慰む。口すさびに明星ほど大いなる星は、はてしもなうあるわといふ。しても我が屋根の上のは小さいと。

推にちがうた

〇洛陽に一管とて、名を得たる笛吹あり。弟子の無器用なるに名を秋風とぞつけける。秋風心に思ふやう、秋風は物にあふといふ縁あり、我が笛を褒美してつけられけるこそ忝けれと、自慢かぎりなき折ふし、同學の者一噌に問ふ「秋風とはなんの故につけ給ふぞや。」「別に我は所存なし、秋風はふく程あしき物なり、彼が笛も吹く程わるいほどに。」と。

〇ばくらうの許にて馬を買ふ。眼爪髪鞍下其の外そろうたるとほむる時、「川渡りはよきか。」と問ふ。「中々の事、川は鵜ぢや。」目出度しとてわめき戻りしが、十日ばかり過ぎ、荷をつけ川を渡るに、中程にてだうど臥したり。買主氣をそこなひ、ばくらうが許に來り、存分をいひけるに、「さればこそ川は鵜ぢやと申したわ。」鵜といふ鳥は、水を見て入らぬやあらん。

〇久我繩手を葦毛馬鹿毛河原毛の三匹に荷を負ふせて行くに、宗長後や先やと歩まれし。馬追ふ者のいひけるは、「お坊主何か知り給ひたる。」「歌道に心がくる。」由あれば、「其の儀ならば此の馬三匹を、おもしろく歌によまれよかし。」

雨ふれば道あしげなる久我縄手日影に去らば末はかはらけ

○一休伊勢の淺間にしばらく住山ありし。常ならぬ人の樣に沙汰しあへり。山田の宿老たる人、親の志をつとむる時、齋をまゐらせけるに、白衣にて渡らせ給ふ。見るから驚き「これはいな者や、不思議の風情なるかな。」と、さゝやきぬるを聞きて、齋をはりに硯と紙を乞ふ。

きたりとよこゝろの内の墨染を世渡り衣うへにこそきね

○如何にもきつき姑の死したる時、嫁歎き、涙を流すことかぎりなし「さても奇特や、常は中も惡しきよし聞きつるに。」と、人々云ひ感じければ、「さればとよ、此の儘にて死なれたらば、如何ばかり嬉しかるべきが、若し又もいきかへられたらば、其の時の心うさ如何あらんやと、思ひやられてさへ泣くなり。」とぞ。

○宗祇有馬の湯に入りておはしけるに、人々よりあひ、歌など詠みあそびしが、「爰に居らるゝ旅の僧も、若し思ひよりたる事あらば、いうても見給へ。」と、傍若無人の作法なりし時、

音に聞く有馬の出湯は藥にてこしをれ歌の集まりぞする

○坊主同宿をつれて邏齋に出でし。齋料に布施をつゝみ、童子にもたせ、坊主の前に置き、是れは百文あり。後に亭主二十疋つゝみけるを持ちて出で、同宿が前に置く。坊主あら不審や、前後失念にて

くらがたうけを君に任せん
水と草とのさかひ知られず

板たゝく馬屋の長の目は覺めて

○月次の會あり。宗長のおはしける其の席の末座に、弟子たる人句を出しぬ。さしあひなくとまりたるを、さては今日の句よく〳〵出來けるよと得心し、宗長にむかつて手をおさへ、「何と聞え參らせたか。」と申したるに、「中々聞えた。」とあり。程經て又一句出し、其の句もとまりたるまゝちと慢じ、又手をつき、「なにと聞え參らせたか。」といふ時に、宗長「きこえた、そこから爰までは聞えた。」と。

○和泉の堺に森河といふ太鼓打あり。又餅をつかせて商ふ。神事能の時がくやより太鼓を持ちて橋懸りに出でたるを、人々見るとひとしく、「あれこそかくれもない上手よ。」と、土民のやうなる者ども指さす。扠は我が太鼓はよく人のほむるぞと思ひくすみ居たる所へ、又一人老いたる百姓の來り見、「あれこそいかい餅の上手よ。」と申した。

○京より北國へ嫁いりしたる女房のありつるが、如何にも心こはき夫に添ひ、かねて母儀の方への便りに、

打ちたのむ人の心のあらち山越路くやしき旅にもあるかな

○和泉の堺市の町に、金城とて平家の下手あり。正月初參會に出でて、祝儀を申さんやと伺ふ。尤もよからんとあり。琵琶を調べけるに、座敷靜まりたれば、我が平家を眞にかまへ、皆人よくきかるると思ひ長々と語る。役人出でて「もはや平家をお止めあれ、人は平家の始まると、其のまゝたちて一人もないに。」と

○おどけ者天王寺の石の鳥居を見、「我は此の鳥居を造作もなくきり落さん。」といふ。そばにある者、「何としてきり落さるゝ物ぞや。」と爭ふ時、件の男鳥居の上に上り、笠木を馬のりにして居けり。「早くきりおとせ。」といふ時、則ち腰より錐をぬき出して落したり。取りて見れば、四つめ錐なり。「これは。」と云へば、「これはこそ石の鳥居を錐おとさうというたわ。」と。

○文の上書に平林とあり。通る出家に讀ませたれば、「平林(ひやうりん)か平林(へいりん)か、平林(たいらばやし)か平林(ひらりん)か、一八十(いちはちじふ)に木々(ぼくぼく)か。其れにてなくば、平林(ひやうばやし)か。」と、これ程細かに讀みてあれども、平林(ひらばやし)といふ名字は中々當らず。とかく推にはなにもならぬものぢや。

○備前國岡山に、そこにべといふ魚あり。餘國にまれなり。太守浮田直家より藝州小早川隆景、備中高松の城に坐しける時、彼の魚を送らるゝ。隆景、侍に仰せ、「夜中に備前よりそこにべが來たほどに、家老の衆に今朝ふるまふべきよし申せ。」とあれば、かせ者まはりて、「備前より今夜そこにべ殿お

越しにて候。今朝ふるまひあり、出仕あれ。」とぞ申しける。各慇懃に出立ち參らるゝに、客としてはなし。出でたる膳部を見れば、そこにべの汁なり。右のやうを申されて、大笑ひありしなり。

○知音の中に小姓の名を錢とつけて呼ぶ。其の故はつかひよいといふ事ぞ。よくと聞いて戻り、又つかふ小姓を錢とつくる。始めの人「何とて一つ名を付けられけるぞや。」「そなたの錢におとうて使ひにくさに。」と。

錢なうて戀する人のをかしさよ死ぬるとあはじ何の便りに　　紫式部

右歌の心しりたるかたへ尋ぬべし。面のごとくにてはなけれな。

○莊官たる者堤の祈禱として發句をし、百韻興行の後、宗養のもとに遣はし點をこひければ、九十九句に點かゝり、發句ばかりになし。扱はいづれもかたの如く出來たる物よと思ひ、態と出立ち行き、尋ね聞くに「一發こんにはあらず、一句にてもよしと思はぬより、皆消したるなり。」「發句はよきかや。」「さればとよ、今の發句され字なし、常ならば沙汰の外なるべけれど、堤のためになるらんと、こればかりに、棒をあびせぬ。」と申されし。

○法談は過ぎにしも、終に座をたたぬ男ありき。道心者の老したるが、あながちにかんじ思ふ。一句の聽聞をのがさぬ人さへまれなるに、有りがたきこゝろざしかな、呼び入れて茶をも參らせんやと、彼に

何ひたれば、「あまり長談義に、しびりがきれて立たれぬわ。」というた。

○若輩なる僧若衆と二人いねたるに、僧目さめて、我が腰のまはりひやくとする。さぐり見れば何やらんぬれたるものあり。不思議に思ひ、若衆の腰のまはりへそとやりて置く。若衆又目さめ、腰の廻りひやゝくに、奇特やと、かの者をそと取り、坊主の腰のまはりへやりたり。坊主取りてすまぬ物に思ひ、そゝと起きて雪隠へもち行きすてゝけり。かくて夜もあけ下帯を尋ぬるになし。静かに案じみれば、昨日の晩風呂に入り、たゞなをすゝぎしぼり、袂に入れもち忘れるたを、何ぞと思ひ、氣遣ひしあげくに捨てける可笑しさよ。

あちこちやりたる互の心をば何とおぼしめすや。

玄旨法印云く、南都よりのぼらせたまふに、山城の井手の玉水にて人下帯を垣にかけおき、水をあびける時、

山城の井手の下帯手にはてしあらふ〇〇〇の玉がはの水

○繼母にそへる子あり。彼の子をなづけて人の問ふ、「何と今の母はいたいけにはごくむ事ありや。」七つ八つなる子が返事に、「われをやしなへるは、雀の子をかふやうにせらるゝ。」と。「さてゝゝ奇特や、まゝこをばにくむものなるに、ためし少なし。」と感じければ、「いや物をいかにもちもちと宛くれらるゝ、

多く食うたらば、咽にゐがでけうかと思うてやら。」

　繼母のもりたる飯はふじの山汁をかくればうき島がはら

○鄰より五つ六つなるむすこ元日に來り、小唄をうたはうといふ。夫婦ながらよろこびあいし、「目出たや、謠うて聞かせよ。」と所望しければ、「ことゝとかゝとはないか中ぢや、錢が一文ない中ぢや。」

　侘人はうき世の中にいけらじと思ふ事さへ叶はざりけり

　ちがうたり天地夜晝下戸上戸ゆきすみ鈍智ひとの貧福

　戸をささねども盜人ぞこぬ　　　　　　　　貧法師

　とふも憂世によしや怨みじ

　影淸く夜わたる月に秋の容

○瓦やく者の近所に、天下一のみめわろき娘を持ちたる人あり。彼の娘二十四五にて死にたり。瓦やき彼の親のもと行き、大いに泣く。「何事の愁へにさ程まで悲しぶや。」と問ふ時、「いな此の後鬼瓦の手本がなうなりて、力おといた。」と。

○祖父が孫を愛して、額をさすりなで、ふびんのものや／＼といふ。母が立聞をしければ、「おのれはさていかほどの苦をうけうずよな。」と。

○堺の津より作城といふ座頭、讃岐にわたる。此は霜月寒夜の旅なるに、廣間に薄衣にていねんことをいたはり、局方より酒の燗を如何にも熱くし、十二なる女房にもたせ遣はし、「是れをふすまに著てねられよ。」といへど、作城はまことの衾と思ひ「年よりぬれば、起きふすもむつかしきに、いねて居ながら、とてもの事にきせてたまはれ」とまうしければ、憖といふてぢきに頭へかけんことは。

名人のよりあひにては候はずや。

○世の中に推はみなちがふむね、よくあへる心の歌にやあらん。

寂しさの種とは知らで秋風を植ゑてくやしき荻の一もと　　夢庵

淀川の楊枝が島にすむ千鳥はしにてなとかはを敲くらん

おもひしにかはりて夏は冬ごもり炭焼く翁すみもおこさず

○慈恵僧正は近江國人なり。座主の時、受戒行ふべき定日例の如く催し設けて、座主の出仕を相待つ處に、途中より俄に歸り給へば、供のものども、こはいかにと心得がたく、衆徒諸職も、「これ程の大事、日の定まりたる事を障りもなきに延引せしめ給ふ。然るべからず」とそしる事限りなし。諸國の沙彌まで悉く參つて受戒すべきと思ひ居たるに、横川の下﨟を使にて、今日の受戒は延引なり、重ねての催しにと觸させ下しければ、「何事に留行ぞ」と問ふ。使「全く知らず、只はやく申せとばかり宣ふ」

ぞ。」といふ。各心得す思ひ退出しけり。かかる程に未の時ばかりに、大風吹きて南門俄に倒れぬ。其の時人々みな打ち殺されなましと感じつる。

〇旅の僧しばらく人の許に逗留せしが、ふと出でて行かんと思ひ立つ。折節宿の主他行の刻なれば、借りて使ひ居たる、金柄の小刀を内の者に慥かに渡す。主人歸るに請取りつる者、「小刀は件の人とりて去にしにやなし。」といふ。不審に思ひ此處彼處見廻しぬるが、傍の柱に彼の僧の手跡ありしをよめば歌なり。「小刀慥かに置く。」といふ十の文字を、一首の歌に書き置きし。

　こゝにきしかかる浮世かたびの身にながき情をたのみてぞゆく

〇關役所の難を遁れんに、つくり山伏にしくはあらじと、信長公天下をしらせ給はぬまでは、皆其の相をまなべり。さればにやある者、都は見たし關々をつくろはんやうはなし、兎角このまねせんと出立ち、東よりのぼり居しが、駿河なる清見あたりにて、馬に乘りたる山伏強力七八人つれさゝめき下る體を見附け、南無三寶先達にてやあるらん、さなくとも常の事にてはなささうなり、とがめられては、如何ぞと思ひ、横道へかくれ、彼のときん鈴懸をぬぎ、ふるふ〳〵大路へ出で見れば、先の山伏一人もなし。是れはいな事やと思ひけるが、上より下る馬上の山伏は、むかうより上るこそ本の山伏よと見やり、我はまさしき作り者なるに、とがめられては如何せんと恐れて廻り道し、いかめしき道

具どもなげく脱ぎてもたせつるこそ可笑しけれ。

○誓願寺の木食楚仙今はの時に臨み、田舎よりいにしへ月次の友なりし人、文をのぼせ、此の度死の別れとなりなば、追善に獨吟の百韻をつらね參らせんよしありければ、返事まではなくて、

我がための弔ひ連歌あさるなよそなたの口は輪廻ありきたに

○東堂のもとへ客僧來りお茶を所望申さんと云ふに、東堂馬桶を出し、「是れにて茶をのまれよ。」とあり。かの僧馬桶を三度禮していふ。「和尚様のお定器と見え參らせた、何かこれでは。」と云ひてしさりぬ。

○慈照院殿にめしつかはるゝ、明陶子、淵用白、干陽朱といふ三人あり。聞く人不審し、さのみ藝能のあるとも知れず、其の形も一應すぐれたる體もなし、いかさま義政將軍の御意に入りたる事のあるにや、きゝのこびたる名やとさゝやき噂しけり。ある時萬阿彌御前に跪きてさふらひしが、いつより御氣色快げなるを見奉り、右三人の名の樣子を伺ひ申したれば、うち笑ませ給ひ、「別の想なし、明陶子は萬事才覺無比類者なり、されども妻に恐れ逃げ廻ると聞く、さてこそめいたうしとつけぬ。淵用白はとるてはうがくもなき者なれども、緣のすみ〳〵敷居のあたり、微塵もなきやうに掃除をよくするゆゑに、えんようはくとつくる。干陽朱これも十方手のあきたる無藝の者なり、されども酒のか

んをする事を得たり。右曲左曲虎の尾などと、いけのたつやうを見て出すに、少しも仕そこなはねば、酒のかんをようするとつけたわごと仰せられし。世の常言事のあるべきやうに、するしたりしは、ちがうたりとて人皆笑ひけり。

○あるところに禪門目の上に大なる瘤を持てり。悲しきながら爲方なく過しけるに、人の語るやう、「そこの里に住むなる老人、山路を通ふとて道にて鬼に行き合ひ、年頃うるさかりし目の上のこぶを取られ、一門眷屬までよろこび限りなし。」といふを聞き、あながちに是れをうらやみ、はるばると其の人のもとをたづねあひ、ありしおもむきを尋ねきはめ、瘤をとられん望みに、彼の辻堂に行きまち居けり。案のごとく、何とも知れぬ者ども夜更け多くあつまり、どしめきのゝしり、酒宴をはじむる時、禪門圓座を腰につけをどりければ、「また來しなり、約束を違へず來りたるが嬉しきに、以前の瘤をとらせよ。」といふまゝ、ひしと打ち付けたれば、思ひの外なる災ひをもとめ、瘤二つの主になりて歸りぬ。

○眞言と天台と二院ならびてあり。眞言の寺の院主は學解ある僧なり。天台の院主は無學なりき。眞言の寺に飼ふ犬の名を天台とつけて呼ぶ。天台の院の飼犬を眞言とつけたり。兩寺の意趣はれ難し。ある會合の席に、天台の院主「何とてそれの犬を天台とよばるゝや。」「いや唯別の義なし、犬の字に

黠うてば犬とよむ間、黠犬といふまでに候。」と、眞言の能化、「そなたの犬を眞言となづけられたる。」「されば犬のありきを見るに、先づ前足をはぬれば眞といひ、後の足をはぬれば言といふに似たり。」と。

○ある侍のさし物にふへんものと書きたり。家のおとなたる人見附け、「是れはさし出でたる言葉さうな。」と咎めければ、「いやとよ、私の心持かくれもなきふべんしやと、述懐の旨を書きて候。」とこそ申しける。

うそつき

○播州に風の神と一つ宮あり。下り船船頭宿願して、順風をこふ。五日六日過ぐれども吹かず。其の感應なき旨を社人にことわりければ、巫、「さればよ、さるかたよりのぼり風を所望あるまゝ、先づ其の風を吹かせらる。此の次はやがて其方望みの風を吹かすべし。」と。

あたら正直の神を見事のうそつきにしないた。

○津の國兵庫の浦へ珍らしき大魚を引き上げたるに、其の名を知りたる者なし。此の浦に物知りの太夫といふあり。かれに見せて問へば、「これはほゝらほといふ魚なり、世に知る者なし。」と。即ち公方へ參らせんと持たせのぼりけり。物知りの太夫を呼びて名を問はせ給へば、名をばくゝらくと申し上

ぐる。以前聞きたる者ありて、「此の先のいうたると違うた。」と答むれば、「さればぶゑんの時はほゝらほ、今はさがりたればくゝらくといふと。」申したり。

とかく眞でなければ何も都合せぬことよ。

○人の物語を聞いてよく覺え、洛中洛外知らぬ所もなきよしをいふ者あり。「さてそなたは嵯峨法輪寺を見られたるか。」「なか〳〵、いかい大ひげであつた。」と。

○壻あり。舅のかたへ見舞ふとて或町を通りしが、新しき鴈を棚に出し置きたり。二百にて買ひ矢を通し持たせ行く。舅出合ひ鴈を見て、「是れは。」と問ふに、「我等の道にて仕りたる。」とあれば大いに悦喜し、一族皆よせて披露し、振舞ひ喚きけり。壻かつにのり、「今一度もたせ參らせん。」と家の子に談しあはせ、「我は先へゆかん、後より調へ來れ。」といひすて、先づ舅にあふと同じく、「いな仕合にて又鴈を仕りて候。」といふ。舅いさみほこれり。彼の内の者鹽鯛に矢をつらぬき持ち來れり。「して今の矢はあたらなんだか。」「されば鴈にははづれて、鹽鯛にあたり參らせた。」と。

○兩の手にて輪をなし、一尺ばかりのまはりなる眞似をし、「これ程な大なる栗を見た。」といふ。そばから、「まつと減らせ〳〵。」といへば、ひた物ちひさくしけるが、あげくに、「その樣に小さうせば、いがで手をつかう物を。」と申しけり。

長からん角豆の花は短くてみじかき栗の花のながさよ

○明暮うそに過をいひまはりたる者の方へ。思ひよらず客あり。常に淺ましき小もの二人つかふとて一人の名をば十人とつけ、一人の名をば五人とつけ置きたりしが、客の聞くやうに聲を高々と、「やいやい十人は山へ薪しにゆけ、五人は藪の竹をきれ。」と。

いふに似ぬ心の内の拙さをはづる思ひのなどなかるらん

月も日もさやかに照らすかひぞなき此の世の人のうはの空言

空にけふ人ははづべき時雨かな

○俗も出家も貴きも賤しきも、人は唯有たべき様に振舞ふべし。其の分に過ぎたるはかへつて其の恥多かるべし。

何となみだの袖にあまれる

草も木も葉に隨へる露の世に　祇公

○七字の口傳、山門には、あるにまかせよ。三井寺には、あるべきやうに。安居院には、身の程を知れ。いづれも同じ心なり。

東坡が三養、安レ分以養レ福、緩レ胃以養レ氣、省レ費以養レ財、

○京邊土の事ならば幾度も見たいが病で、知らぬといふ處はなし、世の中の人の見たなどいふは、白河の夜舟にのりたるたぐひならん、某がやうに見覺えたる者はあるまいと思ふ。「うらやましや、さて祇園と淸水との間は、いかほどの遠さぞや」と問ふ時、扇に書いたる繪をひろげ、「それは一寸ほどあらうまでよ。」と。

○神妙にもなき人、集まり居ける中に、一人いふ、「其方たちの中に、雷の鮓をくうた人があるか。」「いやなし。」「左右あらう、稀な物ぢやほどに。」「してそちは食うたか。」「中々くうた。」「味は甘いかすいか。」と問ふに、「ちと雲臭かつた。」と。

雲無心にして岫を出づとあれば、土くさいとせめて言へかし。

○伊勢國をのぞきたる事もなうて、いくたびも參宮したるよしはなすものあり。「そちは再々伊勢へと聞くが、さこそ海老を澤山に見られつらうこそ。」「宮川で見た、色が赤うて見事にあつた。」「海老は海にあるものなり、生得色はあをく黑し、いりて後こそ赤けれ、宮川は河ではないか、うそさうな。」「いや御身はせばい事をおほせある、物好がありて海老をいつ／＼河へはないたやら、お知りあつたか。」と。

○信長公岐阜に御座の時、「沼藤六尾州より只今參りて候。」と申し上ぐる。「何事も尾張に珍らしき事は

なきか。」と御諚あるに、「されば菊を木にて造りたるが御座候。」と申し上ぐる。「譃であらうず、さりながら實か、其の様子を聞かん。」と仰せの時、「あたまはさるすべり、尾はくちなし、なく聲ぬるでの木にて。」と申したり。

時にあたりて奇特なるうそや。

世の中はうそ許りにて過ぎにけり今日も又譃あすもうそ／＼

世の中の人の心のすき／＼をわれに似ぬとて偏執なせそ

○ちとうつけにて、しかも富める人あり。常にともすれば腹鳴る事けしからず。是れは何としたる病やと人毎に問ふ。口ききて物しらぬ者云ひけるやう、「昔なる神が味噌桶の中へ落ち入り、上らんとすればやはらかにて足のふみどよわく、あがり得ず、其のまゝ死したるがかうの物になりたり。めづらしやと奔走し食ひけり。それを食ひたるほどの者の腹がなりやまざりつる、今も不斷そなたの如く腹のなるは、彼のなる神のかうの物くうたる子孫にすんだ。」と語りつれば、病者大いに滿足し、「さては我が腹のなる事たゞならず、家の面目ない。」と慢じくすみし。

○山林に猿どもたはぶれ居たり。十月末つかたにやありけん。柹のじゆくしたる四つ五つ殘りあるをわれ食はん、たれ食はんと、くらひては多し柹は少なし、所詮年老次第にくらはんといふ。老猿出で

て、「われは過去迦葉佛の時よりこの山に住む。」と。又ひとつが出ていふ、「それは一かうちかい事や、そのころ我は孫にはなれ、歎きに沉みてありつるわ。」とある。曉月坊にむかひ、「そふたは奇妙なる作者なれども、あまり狂言にて詠歌の名譽なし、いかゞ。」といふ。言下に、

曉月に毛がむく〳〵とはえよかしさる歌よみと人にいはれん

いはざると見ざる聞かざる世にありて思はざるをば未だみぬかな

醒睡笑　巻之七

思ひの色を外にいふ

○一村の莊屋たる者、餘の郷に聟あり。かしこに總領をまうけたる祝言とて、一在所皆行く。其の中に若輩あり。上座より出す多少を見合はせ、我も時宜をせんとおもひ、内より代二百つないで懷中せしが、百は少なし二百はおほしと思案するまに、はや手前へきそひたれば、禮式も手にもちいだしさまに、「日出たう」とはいはで、「御大儀でござれども。」と。

○總領の二十にあまれど、つひに嫁をむかふる噂もなきあり。ある年の暮に親たる人、彼のをぢを呼びて、「正月の小袖去年のも氣にあはずして著ぬといふ。今年のをば能くぬしにこのませ染め、小袖の紋に何をつけん。」と問はれければ、返事をするやう、「唯造作もなく、家の端にひとりねする處をつけたらよからう。」

○悴侍の遠路を行く時しきりに飢ゑたり。見れば只一人つれたる中間、こしに飯をつけて持てり、石の上にだうと居て、「おのれが腰にあるめしを、われにおくれよ。」と。中間是非におよばず、さし出

しさまに、「これはおそれをしうござあれども。」

　恐れはやすみ守、をしいは定であらうぞ。　雄長老

櫻さく遠山までの花見にはなが〳〵し口でもてや中食

中間のついでに、玄旨法印の御内に大ほとけといふ中間あり。いとまをこひ申し、髮を剃り、ころもきてありくに、大坂の道にて馬上より見附けたまひ、「今のは大ほとけかや。」「なか〳〵。」とこたふ。すなはち、

　大ほとけあたまをそればまた佛是れぞ二佛の中間のはて

○一廉なる大名の東堂へ參られけるに、對顏の時、さし樽一對、昆布五束を臺に据ゑてもちありく。あの人體には乏少なる時宜やと心におもはれたるが、是れは御持參とて披露しける。やにはにふと乏少とぞ申されける。

　詞はこゝろの使とあり。

○當宗の寺へ、檀那のもとより、「是の者を目代にして庫裏に置きつかはれ候へ。」と、年五十ばかりなる男をあてがへり。理知義に重寶なるが、朝暮高聲に念佛す。坊主心うき事に思ひ、敎化すれども更に同心せず。しひていふ。「汝經をいたゞきたらば、信心ふかき者と披露し、給分の外に合力をえさ

せんこと勸むる時、あらかじめ領掌しけり。かくて十月十三日、御影供に諸檀那みなあつまれる座敷へ彼をよび出し、件の趣をひろめ、受法さするに、彼の男、「其の事なり、色々いやといへども、種々敎訓のゆゑ、經を頂きてさふらふ、さりながら、頂きたる經を絲瓜とも思ふにこそ。」と。

ありがたいと云うてをらいで情のこはさはどちもまけまい。

○夫婦唯二人居て餅をやき食はうとする處へ、おもひもよらぬ者來りたり。よくこそわたり候ひやと呼び入れしが、女房のいひける、「なうはやうおめしやれ、又人がこぬさきに。」

○男も女もまじはりて、いろ〳〵物語の有りつるに、一人云ふ、「和泉國には何ともをかしき名字がある。野尻のやれ、草部のやれ。」と。又ひとりが、「大和にも、へべりだにのやれ、馬の尻のやれといふて、腰より下の言葉ばかりなり。」と咄しければ、四十ばかりなる女房のさしいで、「それより未だ聞きにくいがある。」と。何ぞと問はれ、「生地殿とての。」

○江州安土に薄打十人ばかり、みな當宗なり。いひあはせ與兵衞といふなかの使を一人かゝへけり。これは淨土宗なり。「そも奉公せんと思はば、日蓮の敎門に入れや。」と頻りに勸むれども合點せず。ある時、十人の中より金子一枚與兵衞につかはし、「手前たらずばかさねても合力せんずる、ぜひ受法せよかし。」と。與兵衞力およばず、大乘妙典を頂戴せり。各悅び、「次に女房をも宗旨になせや。」とす

すめの時、彼の與兵衛申しつる事のをかしさよ、「私こそ貧乏ゆゑ地獄におち候とも、せめて女どもをば、助けたう御ざある」と。

たづね入る人はさま〴〵變れども同じ櫻をみよし野の奥にてあるものを。

○雜談に心の奥の見ゆるかな言のはごとに氣をつかふべし

ともあれば難波につけ、常の心をいふなる事、このおもて八句にて工夫あるべし。

したやみやけらこが嶽の木々の露　濟家
いかなるかこれ秋の夜の月　曹洞
行きつくす江南數日鴈なきて　儒者
西よりきたる風の涼しさ　淨土
そこにこそくせ物佛はあるものを　當宗
何なまうだとなへざるらん　時宗
金剛界胎藏界の春の花　眞言
諸法實相へだてあらじな　天台

○所の地頭と中のよき坊主あり。振舞によばれ、種々食物の咄ありしに、「海月といふ物は精進めきたる物なり、さる程に、出家にも參らせたや、殿にいうてこれをばゆるしにせん。」など語る。年たけたる弟子聞いて、「殿へおほせあげらるゝついでに、生鱠の事をも賴み入る。」と申したり。

○酒つくる亭主、「町屋は空地なし、いかにもひろき處にすみたや〳〵。」と、明けても暮れても案じけるが、或時京の三十三間堂に參り、ねんごろに見物し、堂の前にくだり、友だちにむかひて、「別にのぞみはない、我は此の堂がほしいわ。」「何事にや。」「酒部屋にしたい。」

○當宗のだんな歸依する寺の普請あるに、行きて小壁下地をかきけるが、あやまちに繩きれ、高き所より落ちざまに、「南無阿彌陀。」と叫ぶ。同行の者の救ひたすけ、心地少しいできたる時、「かりそめにも題目をば念ぜずして、いかゞなればあさましく念佛をば申しつるや。」と問ふ。「さればよ、さきのおちざまには。ていと死ぬると思うてあつたわ。」と。

○堺に智永とて比丘尼あり。或朝松茸の物見なるを一折、人のもとより送りたるが、勤行より歸り見て、あつらしやとよろこべり。下女の出でて、「そこにあれば、蠅もせゝるに、とりておきたまへ。」といふ時、「いま〳〵しや、看經した手でとらうかな。」と。

○老人あり。我が年を隱して、「幾つ。」と問へど竟にいはず。或時、「子の年の人は誰も果報がある。」と

いくたびも指を折りつゝ、「そなたは何の年ぞ。」と、仕合よき人数にいるがうれしくや侍りけん、「われも子の年。」と語るにぞ。すなはち繰りて見、其の年をいくつとさす。かの人だまされ、やすからず思ひ居けり。又他席に、「なにの年。」と問ふ時、狼の年とこたへたり。

○天台、禪宗、時宗僧三人座を同じうし、「いざ大いなる歌ようで遊ばん。」「尤もなり。」「然らば、時宗は歌道に心がけの家なり、まづ詠み給へ。」といはれ、

　唐土より日本にひよつと躍りでて須彌の邊を遊行する人

又天台沙門、

　須彌山に腰うちかけて大空を笠にきたれど耳も隱れず

禪宗、

　押し廻し虚空をぐつとのみこめど須彌の中骨喉にさはらず

天台の云ふ、「汝が在所何處なれば虚空をばのむぞ。」時に禪、「たそ／＼腹の中にて物いふは。」

○招月供一人にて天の橋立を見物の時詠める。

　月の暮雪の朝のいかならんたゞ見るさへに天のはしだて

とよまれしを、小者聞きて、「我等も狂歌を申さんや。」と、

酒の暮飯の朝のいかならん茶でみるさへに天のはしだて

○妙吉侍者に、「戀の歌よまれんや。」と尋ぬる者ありき。「中々。」と返事せらる。「さらば。」とて逢不逢戀といふ題を出すに、

わがこひは達磨大師の魏にあへる梁の武帝の秋の夕ぐれ

○連歌に身をやつし、心をそめ、臥すにも起くるにも、此の事のみなりつる人の住家なる軒の下に、夜小便する音しけり。かの亭主とがめていへるやう、「夜分に居所へきたつて水邊を下すは、人倫か生類か、植物をもつて打擲せよ。」

○せゝり作事をする時、亭主大工と物語するついで、大工のいへる、「御亭はいくつに候や。」「四十八になる。」とあれば、大工の云ふ、「もはや二つこそたらね、五十までよ。」とおちつけたり。亭大いに腹立し、遺恨に思ひ居けるが、作料を渡す時、米五斗遣はすべきと云ひしを、四斗八升やりぬ。「是れは二升たらぬ。」と改めけるに、「いや四十八になる年も五十になれば、四斗八升も五斗してすませ。」といへり。

いへど損ひはなほらぬ

○松永霜臺、和州信貴の城におはせし時は、菓子をすゑて出すに、染め付けにても南蠻ものにてもあ

れ、一廉の鉢なければ、座敷の興少なしとてもてはやす事あり。名ある侍のもとに[illegible]を請用し、珍らしき鉢を出せり。大いに感じほめられける半ば、相伴の人、「今日の振舞は、たゞ亭主の鉢ずいきにて候。」と申しけるを、「何とやらん言葉のえんあしし。」といふに肝をつぶし、「されば是れの鉢をおもひきあるで候。」と。

○總別茄子のかるゝをば、百姓みなまふといふなり。和泉にての事なるに、道のほとりに茄子を植うる者あり。へたらしき舞々のとほりあはせ見れば、大いなる土工李に杯を添へてあり。もとより是れをなん望みにや思ひけん。畠へたちより、「さらば一ふしまはん。」といふ。百姓かどいでましとゝ大いに腹立しけれど、とかくいひより酒をのみ飲ませけるが、立ちて行きさまに、「さきの腹立は互ひにもはもをりない。」と。

はなぬりをした。

○新しく家を造り移徙して、祝ひ半ばに座頭一人来りぬ。漸う酒も数遍めぐりければ、一句きかんとよび出し、名をば何とかいふ。比一と答ふ。「屋わたりにていちは禁物さうな。」といふを聞きて、「いやくるしうも御座あるまい。人づけて候ほどに。」と。

○泉州堺の津より、呂宋わたりの商人住吉へ社參し、宿願に船の繪を書き、一の神殿に捧げ、神樂

など参らせ喜びの酒宴するに、順の舞とて扇をさしたれば、其の人うたふやう、「せんかた涙にふし沈む事ぞ悲しき」と、其の助右衛門丹といふこそ紛れなく覆りたれ。

　　船ならで渡す瀬あらば七夕にかさばや天のかはらけの駒

○祈祷連歌の席にて、宗匠たる人末座の者にむかひ、「思ひよりたる事あらばうかがはれ候へ。庭の木草、空行く雲、目前の境界、いづれかことの葉にも頼まざらんや」と、勧めらるゝを種として、かゝりたる天神の裝束をながめ居たりしが、「さらば申して見んや。

　　むらさき色の自在天神。」

と出したれば、執筆「神祇か」とて追ひ返す。又、「直し申さん。

　　むらさき色の自在寶殿。」と。

　　さあて始めの句ばかりならば、さためしよかるべからん。

○後世を大事とねがふ人、我がたのむ寺に入り、剃刀をいたゞき、法名をこふに、敎鸞とつけたり。手をあはせて、「とにもかくにも任せまゐらする身には候へども、うちきく所、心みだれ狂氣したるやうにこそとりなし候はめ、同じくは名をかへてたび候へかし。」「さらばつけ直さん。」とて、鷙行とこそつ

　　始めのは物狂ほしきばかり、後のははてた。

○移徙の連歌に、

　春の日は軒端につきてまはるらん

といふ句を出せり。宗匠「けせ〳〵。」といはるゝ、「執筆墨が黒うて消されぬ。」といふ時、右の作者、「なにとやうにも消せ。又つけう程に。」

○時宗なりし老僧、東山よりかちにて歩み、京へ齋に出でけり。「今朝は雨の後にて道も悪しく、我馬を迎へにやらんものを。」と旦那のいひければ、「とび狂ふ馬には何として乗り候はん。比丘尼のやうなる馬ならばこそ、乗られもせめ。」といひはてて、やれと思ひつれども。

○禁中に御能あり。狸のはらつゞみを狂言にする。狸が出でけるを、狩人「なんぢ何者ぞ。」「我は狸の王なり。」といふ。「何とたぬきの王ぢや、王ならば射ころいてくれうず。」と。

　あやまつて一字けがす、恐れてもいひなほさんやうなし。

○わたましの祝儀につかはす使をよび、主のをしへけるは、「かまへて常の所に行くとはちがふぞ、一言にしも麁末なる事申すべからず。」とあり。「畏まりて候。」とて行く。主人獻々をくむ。されどもつひに啞の寄り合ひたる如くなれば、主すまぬことに思ひ、「貴所はいかなる仔細により無言の仕合ぞや、わめきさめくこそ目出たけれ。」といふ時、「さればとよ、さきから物がいひたうて胸がやくる程あつた

れど。」

○越中には舞々に濤座漣座とて二方あり。さる人大船を作りたる祝儀とて、数多あつまり酒宴なかば、舞々の出でたりし。「上座より其方は何がゝりぞ。」と問ふに、「大なみ座。」とこたふ。「舟のいはひに大なみはい。」といふ。「いや濤座漣座とて、もとは一つにて候ひしが、此の頃二つにわかれて候。」とぞ。

○屋わたりの祝ひとて、人あつまり並み居、酒宴興をつくせば、時うつり暮れにおよぶまゝ、客の中より、しかも調子だかに、「亭主もはや火を出せ、火を出せ。」といふ。なまふひなる者聞き付け、肝をつぶし、「いや／＼今のは自火で御ざるぞ。」と。

いやないひわけかた。

○葉おとそよ／＼荻の上風

といふ句に、

神垣の内にに人の米かみて

と出したり。「てごまりが指合ひた。」とあれば、

神垣の内には人のかみて米

似合うたのぞみ

○苟且の事にても物事作勢ある人の煩ひに、醫者を請じ脈をとらせ、「病は何と申す症にて候や。」「唯内損と見えたる。」由返答せられければ、彼の病者「扨々口惜しの次第や、外聞を失うたり。」と、繰言のやうにいひけるを、傍より「生をうけた身に、上一人下萬民、誰とてものがるゝあらん、聞えたる怨みやうや。」と教訓しける時、「いや病を免れんとにはあらず。せめて煩ひになりとも、錢か腹病をも病まいで内損はなんぞや。」

世の中は徳して人にほめられて損して人に笑はれぞする

○萬に鈍なりし男のしかも富貴なるが、男子を四人もちたり。雨中のつれ〴〵にあつまり居、「おのれおのれ心に望む事を懺悔せよ。」とあり。太郎いふ、「我は日本の岩石を金銀にして、その中へはひりて居たい。」と。次郎、「我は日本の海川を硯の水になし、文を書きやるほどの威勢をしたい。」と。三郎いふ、「我は日本の草木を人になして使ひたき。」と。親聞きあへず、「いづれも一廉の望みどもかな。」と、うれしげに笑ひしを、總領のいふやう、「我は牛のへのこが四つほしい、三つは弟の三人にくはせ、一つはほめたまふ父に参らせたけれども、それは天のおそれあり、迷惑ながら我くふべきまでよ。」

我も人もたけに及ばぬ事を思ひ、せんなき望みをするならん。

○熊野へ参詣する人あり。岩のかけぢを手輿とやらん。又あをだとやらんいふに、乗せて舁かれたるが、谷のふかき事、千尋もあらんを見やり「扨も一足ふみ損うたらば、五體は微塵にならん物よ。」といひけり。彼の二人のかきたる者、「こゝな人は色々のくどきごとをいはるゝ。若し谷へ落したらば、今日のやとはれ賃を損にして取るまいまでに。」

○熊野のついでに、奥州よりなとりの老女とかや、世に聞えたるあり。有徳の婦人ありて、けはしき道をしのぎつゝ熊野へ年参りしけるが、或時のまうでに、權現直に告げさせ給ひし。

道遠し程もはるかにへだたれり思ひおこせよ我も忘れじ

○武州岩筑の山本に、毎朝鉢をひらく者、其の類二三人より合ひ、樣々物語しける中に、一人がいひけるは、「今生の望み、唯當城の殿になりたいまでよ、誰が屋形ともなにの宗旨ともいはせず、おつこみおつこみ鉢がひらきたい。」と。

鉢をひらくといふついでに、一路沙門和泉にて鉢にいでられし、心ある人内より、

何をがな參らせばやとおもへども達磨宗には一物もなし

一路

本より も賜はらざるを得たるこそ本來空の妙理なりけれ

○瓦おち軒くづれ、とびらはありし名のみにて、舊苔道をあつく閉ぢ、藜藋ふかく茂り合ひ、枕にす

だく蟲の音も、きけば浮世にあきはてこ、時雨も雨もすべにもる門の下にて、身を過ぎし貧なる人の
いふやうは、「我がねがひは、白銀を今一貫目ほしや、唯此の屋根ふいて住みたや。」と。
○数人あつまり居、おのが心々の望みを語りつるに、ひとりはいふ、「我はたゞ生まれつきたる兩眼の
外に、目を三つほしい、一つは背につけ、だしぬき、やみうちの用心かたぐ〱跡のかたを自由に見た
い。一つは膝頭につけ、夜陰の歩行あやまちなからん、一つは手のたけたか指の先につけ、能の時ま
たは風流、何にても見物の時、人のせいたけにかまはず、手をさし上げて見たい。」と。
なに事も心のまゝと願ふこそつくりやまふよ滿足はせじ
天神二十五首の内に、
賤の女が庭の木の葉にかきたえて明日の薪に嵐をぞ待つ
○山門に僧ありき。いと貧しくて、鞍馬に七日參りけれど夢も見ず、ひた物參り百日といふ夜、夢に
我は知らず、清水へ參れとあれば、清水へ百日參るに、又我はえこそ知らね、賀茂へ申せとなり。又
賀茂へ百日參りたれば、夢に、「和僧はかく參る、いとほしければ、御幣紙うちまきの米ほどのもの、
確かにとらせん。」と仰せらるゝと見て驚き、あはれに悲し、斯程のもの何かせんとおもひながら、も
との坊に歸りて居たるに、知りたる方より物申さんといふ人あり。見れば白き長櫃をになひて、緣に

おきて歸りぬ。あやしく思ひ、使を尋ぬるになし。開けて見れば白き米と、よき紙とを一長櫃入れたり。見し夢の隨なり。是ればかりはいと心うく思へど爲方なく、此の米を萬につかふに、同じ多さにてつくる事なし。紙も同じ如くつかへど失せず。心ながく望みをかけて、物詣ではせんものよ。

○若き侍一段の馬にのり、かけさせて通るを、鉢ひらきども見て、其の中の宿老がいひける、「今の馬は我がにしたいぞ。」「何にせう。」「あれに乘りさつさとかけまはりて、はかゆきに鉢がひらきたい。」と。

○和泉の堺は一町々々に御用心と名をよびて、夜番するもの一人づゝ必ずあり。其の傍輩ども四五人あつまりさんげの夜がたり、時うつりけるに、南中の町の夜番が申しけるやう、「我は金子を十枚もちたや、乘物にのつて、御用心が呼ばりたい。」と。

○都に候乞食ども、暑月の夕すゞみ、木の下に頭を並べ、「今こん盂蘭盆を、そちどもはいづくにて送らんや、もと處をかへ、堺の津に行き仕舞をせんは如何に。」といふに、尤もと同じ、五六人つれにて下り、こゝに到れば其の寺の乞食あり。かしこにおもむけば、其のところにもらひつけたる乞食あり。施餓鬼につけ靈前の供につけ、一飯も京の乞食の所得なし。すご／＼と京に歸り上る。似たるを友の乞食行き合ひ、「堺にての樣子はなにとか。」と問ふ。「そのことよ、堺へ下つて、さつと乞食になつ

た。」と。

日比は我が身を何と思うたぞ。

○夜咄する衆の中間ども供して行くに、これは霜月末つかた、身にきる物のうすさじかければ、膚は風の棲となり。糟糠汁さへ事たらねば、腹中のとぼしさよ。壁の下道の傍にちつことたゝずみ、頭も足も冷えのぼり、三更と過ぎぬれば、食氣漸くつきはて、飢寒の愁へやすからず。身のあたゝかにてこそ眠らんやうもなければ、せめてさんげの物語をはじめ、聲もをしまず申せしは、「我が望みは別にない。天下を十日もちたや、十日のうちに夜咄する者どもを皆とらへ、成敗して見たいことよ」その席の相客に心ある人のきゝわらひて、中だちし、此の旨をさだかに聞き付け、

寒者不レ貪二尺玉一而冀二短褐一、飢者不レ願二千金一而羨二一飱一、

とあり。彼の者述懐も理とこそ憐みける。

七々の下部にかすぞやれ貧天の川原の浪にぬらすな

○連歌師のもとに奉公したりし小者、今度は町人の方に居けり。友たる者尋ぬる。「今は夙に起きず、宵よりいねてこゝろやすきかや」といへば、「そちがいふごとくなり。さりながら今の亭主も、時ならずうかと案を詠め／＼するが、わるうしたらば、あれも連歌師にならうかと思うて案ずるよ。」と。

廢忘

○是界坊のおもてに上臈面をかけて出でたり。橋懸りへ見ゆるとおなじく、あれ／＼をかしやと笑ふを、太夫聞きても、今更歸らんやうなし。舞臺にていひける事は、「そも／＼是れはせかい坊の内方にて候。」と。

○神事能のありけるに、地下の莊屋のむすこにけいこをさせ、太夫にたのし、始めて舞臺へ出しける。自然わするゝ事もありなんと、論義のかしら書をかたに書きたり。「兼平の御さいごは何とかならせ給ふらん。」と問ふ時、ちらと手の内を見てあれば、汗にながれ正體なし。肝をつぶし「兼平の御さいごはむつちやとならせ給ひけり。」と。

○眞言宗の老僧、ここかしこ弟子あまたもたれけるあり。山寺の冬の夕、ことに物すさまじくさびしかりつるに、豆腐たゞ一おやうならでなし、是れを田樂にしならべさせんに、むさとくうては曲なし。さあらば一の字のつきたる祖師の名を、おの／＼いうて食すべきにきはめられたり。嫡弟九曜曼荼羅の元祖一行阿闍梨は貴し。」と、一くし取りたり。つぎの弟子、「ちくと人の知りたる一山一寧といふあり。」と二串とりたり。「時宗の開山一遍といふあり。」と、「一峯妙齋といふあり。」と、大山一元のやれ、ひた／＼とりくひ、もはや田樂一串殘れり。師匠終に言句いでず。是れは無念なりと思ひ、手を差し

出し、「がつきめ弘法大師。」というて取られたり。

弘法に、の字はないか、十號の中に見えず。

○弘法のついでに位高き上﨟の、高野山は女人けつかいと聞くなれば、生をかへてならではと思ひ續けたまひて、小袖を施入ある時、

のぼるべき便りなければ高野山かねてしきおく法の狹筵

○小者のみめよきが奉公せんとて來れり。坊主心をよせ、常になれし若衆のねいるを伺ひ、忍びて起き出づる。少人聞きつけ後よりそと行く。坊主足音に肝をつぶし、壁に大手をひろげ、足をまたげ居たり。若衆見て、「何事にや。」と問ふ。「蛛のまねしてあそぶ。」と。

○亭主の留守となれば、常にかよひなれたる者あり。兼ての約束は、屋根からしのび來れ。橋をかけ置かん。亭主歸りたらば、屋根をありくは猫であらうといふ時、猫の鳴くまねをせよとしめしあはせて置きつるが、まことの折に男聞きつけ、「屋根を歩くは人のやうな。」女房「いや此の程大きなる猫がありく。」といふに、彼方肝をけし、にやうといふべきを、うちわすれ、ほそ聲になり「ねかう。」と申しける。

○若衆と二人寐てありし法師が、曉雨のふる音を聞き、なむ三寶とめて朝食をふるまはずばなる

まい、そらねいりし、起きてかへるを知らぬふりにせんこそよからめと思案しければ、若衆そとおきて行く。もはや門のそとへ出でぬべきと思ひ、心もとなさに起きて見ければ、いまだ門の内にやすらへるを見附け、仰天し立ちて居ながら、目をふさぎ高鼾をかき事は。

○高野の威を借り、諸國をありく聖の若輩なるが、一夜の宿をかりけるに、亭主は留守にて、若き女房の徒らさうなるあり。兎角いひよりて、此の夕あはんに定まれり。しかるに女房の指南するやう、「そちは二階にいねよ、鷄が鳴かねば下司共をいねさせぬ法なり。」と語れば、聖「われは幸ひ鷄の鳴きまね上手ぞ。」と契約し、戌亥の刻も過ぐるを遲しと、高野笠を手にもちはた〳〵としけり。女房「やれ鷄がはや鳴くけなれ。」といふ聲を相圖に、「其の儘やどらうか。」と。

○高野ひじりのついでに、或公家がへ若き女房達をば、あそびにとてよび給ひつれども、年ふりたる一人殘されけるに、述懷、

私は高野聖にあらねども老いにおいたる故にあさすや

○たふとげもなき出家の、檀那と一つ席によりあへる事あり。僧一聲二聲きやつきやと喉をかすりけるに、鹿忽に魚の骨出でたり。坊主共の骨を手に取り、「あらふしぎや、これは誰が食うたる魚の骨であらうぞ。」と。

○或僧新しき小刀の大いなるをもちて、鰹をけづり居ける所へ、知音の人思ひよらず來れり。あまりにとりあへずして、小刀を鰹と思ひいそぎかくし、鰹を小刀と思ひさし出し、「此のごろ聞の小刀をもとめた。御覽ぜよ。」とぞ申しける。

物のきれぬ小刀であらうの。

○「我が祕藏の紫小袖が見えぬ、しかとそちが盜みたる。」といふ。「いや取らぬ。」「さりとては證據人あり。」と強くいふ時、「取りはせぬ、人の見ぬまに貰うた。」と。

○若き座頭のよばひして、垣へのぼりこえんとする處に、折節月のくまなき夜、亭主見附け、「座頭は何事に。」といふ時、「天へのぼりさふよ。」と。

○京にていづれやらん、當宗の寺に日念上人といふありし。其の弟子のいふ、「是れは不審な念佛の念の字でなきか。」と。「いや〳〵法然の然でこそあれ、なか〳〵念佛の念ではない。」

○京邊土にてある東堂の細工に、蟹びしほをするとて、鹽一二升を用意し、ふりかけ居らるゝ處へ、ふと檀那來れり。「さてもよくごおはしましたる、內々人のはなしゝのいふを見せ參らせたやとこそおもひ候ひつれ。其の故は愚僧がしんせつのだんな、尼ケ崎に有り、某つかふ程は鹽を續けてくれんとの契約なり、されども道の程遠ければ人馬の歩きはごうさなる條、いつも蟹におほせて送らるゝ、

これ御覧ぜよ。」とご申されける。

○月次の初心講に入りてはあれど、懐ふく〳〵の風情なれば、指南する人あはれみ、一順の句を拵へうらに書きてつかはし、何となうわきに置き、見ぬふりし句を出すやうに言ひ含めつる。うかゞふまにはや句まはり、我が手前になりぬ。あわてて句をわすれ暦のおもてを見つゝ、

かのとのひつじかまぬるによし

○おどけもの縁を行きちがふとて、小姓の口をすふ。わきより「見たぞ〳〵。」と云ふ時、あまり肝をつぶし、「旅ぢやにゆるせ〳〵。」と申しける。

謡

○「あの月のゆくみちは、何に乗りて歩くなれば、あれほど足が早いぞよ。」「馬にのらるゝ。」「何に書きたるぞ。」「櫻のこのまにのる月の、しかもおもしろの春日や、あらおもしろのはるびや。」

○「山姥は福分の人にてあると聞いたが、耕作はせず、あきなひの音もなし、何としたる事にうとくなるぞ。」と不審する。「奇特をいはるゝ、言葉にはいへど目に見る者なし、其の上不辨分限をまでいかにとして知られたるぞ。」「かくれもない山うばにつくりたるは、八木たう〳〵として。」と。

○信長公の御前に連一撿校候ひつる時、傘持なにとしたりけん、傘袋を落したるを、曲事なりとて折

檻あるに、連一まうしけるは、「物をおとすは昔よりあるならひと聞きてござある。」「なにをおとしはたぞ。」と仰せの時、「高砂の尾上の鐘もおとすなり。」と。即ちお機嫌なほりぬ。

〇信長公へ熊野新宮方よりの使者に寂靜坊といふが參り、御咄ある砌、連一出仕しけり。「此の座に新宮の使あり。何にても物語をせよ。」と御諚あるに、追ひつけて連一、「扨熊野に一らと申す在所の候や。」「いやなし。」「さては寂靜は熊野の人にてはあるまじ、熊野に居るものの、やがて鄰の在所をらさへ知りたまはぬほどに。」と詰むる「熊野の事はおきぬ、紀州一國に一らといふ所なし。」と色をそこなひ爭ふ時、「二人靜に、一葉一らくあたりと候が、いな事や。」と申して大笑ひになせり。

〇日待の座敷にて手拍子をうち、清經の「一門は氣を失ひ、力をおとしてとうたふに、小姓ちくと膝をつきけるに驚き、「何ゆゑぞ。」と問ふ。「其の事よ、これの殿のらやくをわづらひ、さん〴〵なるを裏方いかなしがりて、祈禱のために日を待たせたまふぞ。かしらを落いてはにが〳〵しき。」と囁くに、其のまゝ心は眞如の玉かづら、心は眞如の玉かづらあと、らを長々とひきて、長き夢路やさめぬらんと直したるもをかしや。

〇尾張守といふ人のまへにて、ふと伊勢やと謠ひ出し顏を見て、やれとおもひ、いせやあのごりよのうみづらに、たつとなほしごとはの。

○田村に千の手には千の矢さきとつくりたるが、是れは不審な、手には五百の矢さきならん物を。それはそなたのおぞい、昔もあれを見よ、不思議やというたわ。

○鵺をうたはせ聞いて、御殿の大牀に伺候してはあしさうな、侍から行きて居たほどに、ひえてしとほしてがよからう。その仔細は、ぬえを射たりし後、官をたまふ時、すでに左少辨になされたるわ。

○「佛には毛があるか無きものか。」「否ない、無け光佛とあり。」「否ある、けぶつぼさつといへり。」互に論じて堂の坊主に判談をうけぬれば、「有るにもあらず無きにもあらず。」「それは何事ぞ。」「熊野の謠に、末世一代けうすの如來とつくりたほどに。」

○熊野侍は、杯をさす段には、必ず謠ひてさすが法なり。祝言のとき、ある人通盛のうきながら心のすこしなぐさむは、げに海邊のわざと謠ひたれば、さゝるゝ者、そのまゝ脇差をねぢまはし、親ぢや人のあなたにて聞かるゝに、海邊の事をうたうたるは、我を馬鹿にしたり、きくまい。」とて狂ひしかば、座敷の興もさめぬ。

○「杜若の謠に、三河國に著きにけりとあるは、作りそこなひや。」といふて笑ふ者あり「何といふがよいぞ。」「にかはの國に著けにけりが本であるぞ。」と。

水でとく膠のあやめ杜若にたりやにたとにためきぞする　雄長老

名にしおふ其の八橋を来てみれば田ばかり有りて杜若なし

やせにけり此の花の名や杜若　長願

のまんとすればなつの澤水　宗長

蛇に追はれて何處かへゐらん　宗鑑

○「蚤といふ物も一簾の奴やら、謠につくつた。」「何にある。」「二人靜に、あとをのみ御芳野のと。」「夫れならば蝨をこそ猶ほあたわ。」「何に。」と。「實盛に、しらみあひたる池の面にとあゐわ。」

○楊貴妃をつくるほどの者が、比翼の鳥はなんでや、目のまへにある事を知らいで、ぴよこの鳥とこそよけれと。

○「楊貴妃を玄宗の后といふは、え知らぬ者のいふ事よ、總別やうきひは、熱田から出られたと言ふがまことなり。」「長恨歌にしかと、楊玄琰が娘、玄宗の后とあるに。」「否それはむさとしたる事ぞ。幸ひ楊貴妃に逢ひしと懺悔して、われもそのかみは、淨海の勢せつたゐがと言はれたもの。」

○三輪に、ある夜のむつことに、御身いかれる故によりとは、作意もないつくりやうかな、そうじて理のすまぬ文章や、たゞある夜の六つ時に、御身いかなるうへにのりと、なほしたらばよからうと。

作者めいわくの。

○「宗養といふ連歌師は、傷はしや、あめの魚をくうて、それが祟りて死なれたよ。」など語る。つひに聞きもおよばい、そちは何として其の由緒をば知りたるぞ。」「采女にかいた程の事を知らぬ者があらうか。」「何とかいた。」「雨は草葉をうつなりと。」

○「高雄神護寺の文覺は、聲の高い人であつたといふが、荒行をせられた奇特かよ。」と。「聲の高いといふ事を今までは聞かぬ、書物にあるか。」「勿論誓願寺に、虚空に響くはもんがくの聲と作つたれ。」

○あの幽靈といふ者は、何とて足袋をほしがるぞ。實や死出の山刀山劍樹の劍難にも入るものかや、不思議なる事かなと、獨言に言うて感ずる者あり。「其方はいつ幽靈にあうて、足袋をはいたるを見たぞ。」と尋ねければ、「いや是れに過ぎつる夕暮に、あの松陰の苔の下なき跡とはれ參らせつる、松風村雨二人の女の幽靈これまで參りたりとあれば、彼の兄弟の幽靈にはすんだぞとよ。其の二人は僧にあうて、我が跡とひてたび給へと乞うたわさて。」

又極樂とはいへども、足のひゆる處ぞらん、たび給へとはうたうたかやともし

○備後と出雲にならびの國なり。備後に只田といふ山家あり。彼の在所のうば出雲の[illegible]澤といふに、神事能あるを見物に行き、橋がゝりのわきに居たり。高砂をする時、「うばこそ當所の人なれ、知る事あらば申させ給へ。」と、屹度件のうばが方を見てあれば、姥驚き申しけるやう、「うらはしやくだの者

で、何もいはうではおじやらぬ。」

○津の國兵庫の浦にて、祭禮の能ありしに、船辨慶のはて跡白波といふを、やれ不吉やと思ひ出し、太夫聲をあげて、「跡くらやみとぞなりにける。」

なほされぬはせめてよし。

○田舍人の上洛し、宿主に向ひ、「某が京のぼり一世の始めに候、いづくをあるき何を見ても合點のゆかず候まゝ、いそがはしくともつれてありかれ、處々を教へてたべ、故郷にかへりの土産にせん。」など懇に語らひ出づる。まづ四條の橋を通るに、「是れこそ諺にうたふ四條の橋、あれに見ゆるは五條の橋の上候よ。」「さてもうれし、熊野にあるといひしを見たる事や。さて／＼其の老若男女といふ處はやがて此のあたりにては候はぬか。」京の案内者も一圓不文字にありければ、理がすまいで返事するやう、「其の老若男女は、三年あとの大洪水に皆流れた。」と。

渡りえてうき世の橋を詠むればさても危く過ぎしものかな

○正月二十五日法然の御忌を拜せんと、人あまたいざなひ知恩院へ參るに、目もあかぬ程雪のふりしを、「さて憎き雪や。」といふ者ありし時に、一人が、「昔より上人の靈前へ供物に、ふらでは叶はぬとかいておいた。」「撰擇集にあるか。」「いや難波に雪は豐年の御調物。」と。

○ゆやにむかひ、是れは平宗盛にて候と自慢して申されけれど、熊野は一向さほどにおもはなんだればこそ、いやそれはこしぢ、我はまだとこないたほどに。

○津の國にて、ある侍の鶉狩してあそばんと、小鷹すゑさせ出でられけるに、萬代が池のあたりに人あつまり、大いにいさかひする體なり。加世者を遣はし樣子を見せければ、かの使立ち歸り、「道通りの奉公人と、百姓のたごになひと口論仕り候が、百姓の方が道理さうに見えてござある。」「なにと道理とは。」「こゑもち少しもさわぎ給はぬ程に。」

○いなものどものよりあひ、小野小町は美人にて、桃花雨を帶びたる風情ともほめ、歌の道世にすぐれ、をうなの姿になぞらへ、よわ／＼と詠みたるなどほめけるが、「勿怪な事は、氣が短慮に酒にゑうては人とからかひ、垣壁をも打ちやぶり、らつしがなかつた、大疵。」といふ「上戶とも下戶とも、短氣とも知らざりし、そちには誰が語りて聞かせたるぞ。」「關寺小町を聞き給へ、垣に喧嘩をかけ、戶には醉狂をつらねつゝと。」

○「なにといふ謂れに、昔は花になく鶯、水にすむ蛙を始め、馬などまで歌をばよみたるぞ、人倫たる身をうけながら、五文字七文字の別ちさへ知らぬわ。」と泣く。「やさしの心ばえや、さりながら、馬のよみたる歌はいまだ聞かず。」

「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人のこの爲

これこそ馬のよみたる詠歌さふよ。」「これは業平のにてはなきか。」「念もない、熊野にそよ此の歌と申すは、長岡にすみたまふ老馬のよめる歌なりとこそ。」

○三好中納言殿にて大名衆に振舞あり。朝食過ぎ、酒三返とほれども、つひに末座にある藝者に膳をすゑず。其の時申すやう「殿樣達飯を參りて候へば、早々我等ごときの者にふるまひ給はるは、古よりの定まれる時宜で御ざある。」と「其の時宜ならば更にきかぬ。」と中納言殿おほせあれば、「楊貴妃に、猶きこしめされつゝ、いそぎめしいだしと御座候れ。」

○かたのごとくの下手大工、能を見物に行きける時、わきが出でて、津のくに高砂の浦をも一見せばやと存じ候といひければ、かの大工ひたもの感じ居たるを、左右にある者ども「こゝな者は何事をうなづくやらん。」と聞けば、友達にむかひ「われは高砂の浦を見て、ひろいとばかり思ひたるに、今の人は一閒せばいと言うたはおもしろい、何にも餘分をおきてさけすむべきものなり、これぞ後學や。」とて、はたはすかんじことは。

妙な聞きやうや。

○蠟をつけたる馬に正京へ上る。山中の關にて、「役をせよ。」といふ。「いや昔より總じて蠟をつけたる

馬に、役をしたるためしなし。」と、互に爭論なかばなる砌、沼藤六通り合はせ、雙方の理非を聞き、「向後はともあれ、まづ此の度は役をゆるせ、幸ひ闇寺に、らうにはやくもなしとあるぞ。」

○「昔は番匠の持つ釿も物をいうたとあるが、今は聞かぬの。」「そのやうなる譃をばいづくにて聞かれたこと」「高砂に、しかるにちやうのうがことばにもとありごとはある。」

○三五夜中の新月は宵よりくまなき空の色、寐られんものか、いざ行かんとなほざりならずうちとけて、語る宿にぞ集まりぬ。亭しらかゆを煮て出せば、月海上にうかんでは、と、興をもよほしほめにけり。少時程ありすひものに、鰻調味しすゑたれば、あひにあうたるもてなしや、月海上に浮んでは、鰻も浪をはしるかと、申せし人のゆかしさよ。

○楊貴妃の能に、太夫がしるしの簪をとかんとするに、面をゆうたる絲にむすほれ終にとけず。せんかたなければ、面ともに取りそへて渡す。わきが二色を手に持ち、しるしのかんざし面まで賜はりとうたひしことに。

太夫のすがた如何候はん。

○京の丸山といふ處に人あまたた遊びける。ふるまひの菜に醬出でたる、風味ことに勝絶なり。「このひしほといふ物をば、誰がたくみに作りそめつるや。」といふ。「これこそかくれもない融の大臣より出來

そめたるものよ」と。「何ぞふみに書きてあるか。」「なか〳〵。すなはち融に、浦は其のまゝひしほとなつてと。」

○奥州にみてバゝらといふ武家あり。彼の館にて能に鐵輪をしかゝり、おそろしやみてバゝらにといふをゆきあたり俄になほし、おそろしや股バゝらに三十番神おはしますと。

淺ましき神の居どころや。

○津のくに海士が崎にて神事能あり。野の宮をする時、うらがれの草葉にあるゝをかふるとて、たてがれのくさばにあるゝとうたひしも、うらめしき作分や。

○錢を貸したる人の方へ、年のくれに使をつかはし乞ひければ、返事に、「三年四年利分をなしたり、もはやそなたの物をばおはぬ。」といふ。貸主大いに腹立し對顏して、「本利共にすませ。」と。「いや利分ばかりにてすまされよ、釋迦の時代から、本利ともになす事はない。」「それは何としたる存分ぞや。」「されば能野に、佛ももとはすてし世のと作り、もとなさぬは、佛さへ赦されたわさこ。」

○和泉の堺に山本雅樂とて小鼓の上手あり。幽閑法印政所なりし時能あり。法印彼の雅樂をまねき、「そちは三輪をうたれよ。」三輪の山もととあるなれば、言下に、「かたじけなや、ことによみて見たれば、うたなり。」と申せしはしをらしや。

○實盛生國はといふ。一向すまぬ。何といふがよい。さねもり生得は日本にてあると。
○卒堵婆小町に垢賦の垢づけると。これもわろい。くにによもあかがある物か。五體の内にもよくあかのある所はうなじなるまゝ、くびのあかづけるがよいと。
○千手重衡に雪のふる枝の枯れてだにと。これこそでもないことよ、よきのふるえとこそ謡ふべけれ。
○信長公へ客あり。御膳出づるに、「是れは一段麁相なる仕立や。」と仰せらるゝ。折節連一候うて、「昔より大名のきこしめす物は、そさうなるが本と聞えて、兼平に、口惜しの君の御振舞や候と申せしに、判官これをきこしめしと。」
○和泉國萬代の八幡にて能あり。實盛をしけるが、あつぱれ己は日本一の剛の者というて、きつとかたはらを見る。同じならびに國府の清水とて名所あり。又ならびの在所にくろどりといふあり。年ふけたる男我が事を云ふかと思ひ、「いやおれはがうの者では候はぬ、くろどりの百姓ぢや。」と。
○江口はよき謡なれど、其のさまを賤しうつくりてわろい。江口の君の幽靈までは大事ないが、こゑばかりして失せにけりが農人のやうなと。
○當世は刀脇差數寄道具につけ、なにもかなにも物あり。手苦勞物がはやるといふ物語出でければ、

「今ばかりではなし、昔よりある事なり。人間の噂はおきぬ、佛の上にさへ似せものがあつたればこそ、當麻に生身の彌陀如來げに來迎と作りたるわ。」と。

○誓願寺の阿彌陀は、いかなるみぎりにてか造りたるらんといふ人ありしに、「一夜の木にてつくりたるわ。」「何として知りたるぞ。」「かくれもない誓願寺の謠に、春日の明神の御作とかや。」

○我はこのほど齒がぬけたとて悲しめば、「齒のぬくるは命の長からん驗にてあると書きたるわ。」「いかなる書物にあるぞ。」「關寺小町に、おちても殘りけるは露の命なりけりと。」

○宿老たる主人の前にて、關寺を所望せられ、いとゞしく老の身の強りゆく果てぞ悲しき。

○能登の徳宥といふ人のもとにて、海士をうたふに、今此の經の德祐にてをやれと思ひ、德祐さまとなほし事よ。

○太閤秀吉公聚樂にて能を御沙汰ある時、本因坊見物する棧敷へ、雄長老狂歌をおくられし。

碁盤まで本因坊が能を見ば目は白黒くなりぬべきかな

舞

○人あまた朝食により合ひぬ。中に一人、「夕の大酒に、未だ頭が重い。」とかたる。「一杯は何にてかありつらん、たる杯ではなかりつるか。」と尋ぬる。「奇特やさやうの名をも始めて聞いた、五度入り七

度人の湯盞、可杯、芙蓉杯、金杯、銀杯、鸚鵡杯、薬玉船七寳のやれびいどろの杯、猪口などといふこそあれ」といへば、「判官殿最期に、高館にて酒もりのありしと言出でたる杯にてある物を、え知らぬよな。」と笑ふに、「それほど物しりはあるまい。」「吾妻鏡のやうなる書にあるかや。」「いや高だちに、亀井がいうだる杯を、武蔵殿へおもひさしこれよのと。」

○烏帽子折をまふとて、山路殿が吹物の名をば何と言ふやらん、名をば何といふやらんと繰り返し繰り返し舞へども、終に横笛出でず。人みな笑止に思ひ、向うより扇を横たへ指を押しつあけつ、笛ふくまねをし教へければ、やう／＼うなづき、合點したる顔にて揚句にちやるゝらと申さうと。

○舞はまなびし習ふ事にならず、なまじひにかな書を讀むもの、ある席にて敦盛を舞ふに、東國の毛蟲にはあはんといへる平家なしといふ。人みな不審し、「源氏とこそ舞ふべけれ、けむしとは何の事ぞや。」と問はれ、彼返答に、一揃のさやの事にてあらうまでよ。」と。

○江州めかだの館にて、敦盛を舞ふ時、近江源氏の大將にといひしが、やれあがたは禁句よと思ひ、これのめかだはよのめかだと。

○和泉國に松浦肥前守とて武士ありし。彼のまへにて敦盛を舞ふに、命も知らぬといふ時、肥州を見附け、命も知らぬ松浦さま。

○「釋迦は大工の子といふ、まことか。」「いや天竺淨飯大王の太子なり。さうではない。」と。「されどもそれは、信田に、悉達太子は、高位なるばんじようの位をふりすてたとあるわ。」

○伊勢海老をゆでてあかうなる時、いで朱槍の柄をもゆでた物ぞと語る。海老は實なり、槍の柄は朱塗にて塗りたるものなりと教ふる。そちのがかたそばよ。槍の柄の二間三間あるを、ゆでたがめづらしからう事は、それより大いなる京鎌倉をさへ、ゆでもしいりもしたわ。うつけには藥がないと笑ひし時、堀河夜討に鎌倉をゆでて、二十日に都入とぞ聞えたる。

○幸若の舞を聞き、さてくおもしろの節や、くどきや、中にもせめがおもしろきなどかんずる時、「總じて此の舞といふ物は、誰が作りし事ぞ。」こざかしきかほの人いふ。「無案内や、仁和寺にて作りたるなり。」「つひに聞かぬ。」「庭訓に、仁和寺のまひつくりと書きたるわ。」

○景淸を舞ふに、法性寺の八つの大鼓を、だうくとぞ打つたりけると。聞く人、「八つならば續けうちに數を八つ打たずし、など二つはうちし。」はら九郎大夫答へに、「八文字にうちたれば、八つにてござ候。」

○ある舞まひの奥州に下向するありし、道にて會下の寺にとまる。非時過ぎて大織冠を舞ふ。よめ入り詰めの半ばに、住持の長老落涙の氣色あり。侍者ども思ふ、なにのあはれしき事もなきに、不思

議なる愁傷かな。」と。舞過ぎて件の旨をたづねければ、「愚僧は舞に涙のこぼれたるにあらず、あれほど下手では、はる〴〵と下りたりとも、聞く者あるまい、かつゑ死なうかと思ひ、ふびんさに泣いたよ。」と。

○饅頭を菓子に出してあれば、「これは小豆許り入りて位高し。我等ごとき者の賜はるは、あり難き。」といただく。又、「砂糖饅頭は近來の出來物、何の系圖もなし。よのつねの者はうまさのまゝ、奔走に思ふ。」といひてくすみたり。「其方はなにとして、その別ちをば知られたるぞ。」「かくれもない滿仲の舞に、貞純の親王の御子をば六孫王と申し、六孫王の御子をばたゞのまんぢうと申し奉る。」と。

○堺にて牡丹花のもとへ、くたりたる饅頭を送りければ、

　色くろくしかも傾く人くはず此のまんぢうを馬になさばや

○或人のもとより饅頭を五つ送りたりしが、其の席に人五人にあまりたれば、配當するに少なし。一つ首をよみて饅頭を送れる人の方へ、

　名を聞くも六孫王のまんぢうを五つは食らひ足らずこそあれ

○和泉國の堺北の莊に御坊というて、本願寺の末寺あり。彼の寺建立成就し、平野といふところより大頭のながれ、舞太夫をよび、堂の祝ひに舞はする。高館を始めけるが、破れた堂といふまへにて、

あつしと思ひ、やぶれたたうがめいはの洞と、

時にあたりての虚忘はなにの上にもあらん。

○人々池のほとりに遊ぶ。蛙を見附け、塊をうつ。年ふけたる人、「きやうのわろき手すさびをばせされ。今こそ生まれこがり、田の中堀の端にすめ、古はあれも大名であつたものを。」「こくうなる事をいふ。」「まぎれもなし、夜討曾我に、さここそ尊靈蛙殿とはあだにもいはぬれ。」

○殊勝なる長老の十番切を舞ふを聞きて、落涙止まらず。後、「さて／＼十郎五郎の兄弟は氣のどくない人や、やれまあと堪へられしならば、殺さずとも敵が死なうものを。」と。

○太夫舞臺に出でて八島を舞ふ。去る間判とばかりにて官を忘れたり。鼓打あゝ官やあ官とはやし、つひに官をいひやまず、太夫聞きかね揚句に拍子を踏んで、せめにかゝりあふ。其の官はほう殿の跡に下らせたまひけり。

○玉石といふ能登に舞まひあり。和田の酒宴一番ならでは覺えず。去るほどに新左衛門といふ侍のもとにて舞ふに、あれなるは和田殿とばかりいうて、是れなるは新左衛門を殘したり。主人とがめて、「など舞にある名をば落いたるぞ。」と申さる。「いや其の新左衛門はとく死なれて候。」と。

○磯部の莊司といふ人の方にて八島を舞ふに、莊司にはなれて三年になるを行きあたり、屏風にはな

れてと舞うたる。

○堀河夜討を舞ふ時、判官殿といふを聞きて、其のまゝ泣くもあり。「何のあはれさに泣くや。」と問はれ、「其の事候よ、高館かと思うて泣いた。」と。

○一番に満仲、二番にゆりわか大臣、三番にとがせがたちを舞ひけり。とくより行きて聞きたる者の歸れば、「けふの舞はなに〳〵にてありしぞ。」と尋ぬれば、「されば、よ満仲といふ人、けんかいが島で勸進帳をよまれたるところを舞うたが、おもしろかつた。」と、三番の舞を始中終と合點したるも言語道斷。

○原殿といふ侍の前にて高館を舞ふ。そこで腹切れ龜井にゆきあたり、そこで、せごきれ龜井。

○人ありていふやう、「判官殿と辨慶とは何の仔細ありて中がよかりしぞ、不審がはれなんだに、今日八島の舞を聞いて理がすんだ。」「なにとすんだぞ。」「辨慶は判官殿の若衆であつたもの。」「なぜに。」と問へば、「一紛れもない事よ、判官武藏をあきれと、かくさずにまづきいしよに書きたるわ。」

醒睡笑　卷之八

頓作

○或大名の前にて、當時能の上手は誰にてあらやんと、各讃歎ある中に、今春をほむる有り、金剛をほむる有り、人々心々なりし時、こざかしき者の申しけるやう、「私は唯春日太夫を天下一と存ずる。」と。「いかなればいふぞ。」「春日を上手とは我等許りの申すにてはござない、昔から神達も褒めさせられた物、三社の託宣に春日大明神とあり。」

○尾州熱田大明神の祭禮に、貴賤參詣の袖をつらねるこ、かしこも伊勢兩宮の如く禰宜あつまり、袂にむすほゝれ、錢を貰ふ事かまびすしき程なり。さるまゝ百姓あまたつれだち下向するに、「さても熱田の禰宜共は人でないぞ。」といひつゝ、屹度後を見れば、白張裝束に烏帽子きて金磨の扇末ひろがりをもちたるあり。大いに驚き、「そのまゝたゞ神半分の人よ。」と。

○武州江戸家康公天下をしろしめされし始め、伏見のある屋形にて霜月末つかた、來正月をばひがしにてやなされん、又都にて御越年やあらんなど評定ありしに、或者の申すやう、「いや御年をば東

にて遊ばされ候。」と。「誰に聞きたるぞ。」「我等のよく存じて候、明年の暦に、大將軍東にあり、しかも此の方に向つて大小便せざれと尊び書きてあり。」

○太閤御所をば豐國大明神と祝ひ、吉田の神主に知行一萬石給うたるよし人の語りたれば、「宮川殿、中々の事のや、太閤御所は神におなりあり、吉田の神主は人におなりあつたよの。」

○今の武藏の江戸、扶桑國の最頂たる御城のはじめは、太田美濃守法體して太田道灌といひき。名譽の武將こしらへ構へけるを聞き及ばせ給ひ、公方よりその城郭の景氣を寫して見せよと仰せ遣はされければ、

　わが庵は松原つゞき海ちかく富士の高嶺を軒端にて見る

○信長公濃州岐阜に御座の時、宮内卿、三位、侍從、武藤、四人に碁をうたせおはしますに、沼藤六まかり出で、「此の席は四句の文にて候。」と申し上ぐる。一人は迷故三位殿、二には悟故侍從殿、三に本來武藤殿、四に何處宮内殿と指を折りて、時に御機嫌なゝめならずありけん、四句の文とは迷ふが故三界に城、悟るが故十方空、本來無㆓東西㆒何處有㆓南北㆒。此の心を得たまはば、生死岸頭大自在ならん。

○信長公堺の津へ御座なされし時、蠣とつめたと海鼠腸と三色を進上せし。其の座敷に三條殿御入り

有りて、

かきくれてふる白雪の冷さをこの綿にてぞ寒さ忘るゝ

○丹波國大の原にて、洞家の僧一休に向ひ、如何なるか是れ紫野の佛法。桔梗、刈萱、女郎花、紫苑、龍膽、地楡。如何なるか是れ紫野の魔法。愛宕嵐に比叡の山風、奥は鞍馬の山颪。

○釋の頓阿桑門の風情し、内裏見物の折節、ある殿にて座敷より「修行の僧は何處の人ぞ。」「東の者にて候。」とあれば、乃ち、

なにかあづまのはての思ひで

とあるに、頓阿、

都にてまづ語るべき富士の雪

さらば座敷へと請ぜらるゝに、禮もなく座上になほられたりければ、又、

いやしきもののはうへを恐れず

とあり、頓阿言下に、

水鳥の浮べば月のかげふみて

○天龍寺の開山夢窗國師は超過福僧にてまします。僧形如何にも肩うすくすぼみたり。人拜顏を遂け

言上すれやう、「世間に貧窮の輩をば、なべて肩のうすい者とも、亦無力すれば肩がすぼうだとこそ申し傳へて候へ、夢窗の御肩輿さめてうすくすぼみたれど福分におはしますは如何。」と。「さればよ、予が肩あまりにうすくすぼみて、貧乏神の居所がなさによ。」と宣へり。

○面とはなぜに云ふぞや。面にかくる程に聞えたり。内に置く時は何と云ふべき。それはめんさうといはん。

○一休住吉に松齋庵といふ小庵を結びておはせし時、何者やらん、其の名を書かずして、短冊を送る事あり。

あたら人深山の奥に住まずやこゝはうき世の堺ちかきに

返歌、

身をゐとも思ふほどこそうき世なれ深山も市も同じ隱れ家

○大陸籠をもちたる人あり。珍らしきさまに沙汰しければ、見度き事に思ふ者多かりき。或時客いたり連々承り候と所望し、「是れは常に人の申したる程はなし。」といひければ、「左右でおらうず、聞いては千金よりも重く、見ては一毛よりも輕しと候。」

○宗長紫野に居住の時、延暦寺なる知音の坊より、人を出し、誹諧の發句望み候。此のゆふべ夜話

にたより、我人案じて遊ばんといひ送りければ、

猿の尻木がらし知らぬ紅葉かな

使とりて出でしを又呼び戻し、兒達もゐ給はんや。なかなかといふに、猿の面直されし。澤庵堺にて冬の當座、

猿の尻ぬらすや時雨松ふぐり

○僧の三人來るを見附け、途中に皮を敷き、「此の大河をば何として渡られんや」と、「一人は此の河に橋あり、心安くわたらう」と。一人は、「瀬をあさあさと渡らん」と。一人は、「乾た川を渡るに、何の造作があらう。」と。

○珍客は若衆なりし。座上に置き參らせて、相伴など歴々たる座敷半ばに、初心の座頭來れる。末座の人彼に問ふ、「そちは古方の上手と聞く、この座上にいかなる人のおはすぞや。」「されば兒か若衆なるべし。」「扨も奇特を占うたるが、ちとは目が見ゆる物かな。」と不審はれず、「何の調子を伺ひいうたるぞ。」「されば六曜の占ひの外は存ぜぬなり、其の内に草中螢が出でてあり、知んぬ、螢は尻に光ある間さて申したるなめり。」

○百合の花をいけたるを見給ひて、幽斎法印、

牀までもゆりにあげたる花瓶かな

○一人は寒山一人は拾得と、各に名をいうて出づる狂言あり。然るを二人連立ちたる。先の者、是れは寒山拾得と申す者にて候と名乗りしかば、次の者云はん事なかりしに、我等も其の連にて候と。

せめこの事を云うた。

○法華の沙門と時宗の法師と知音にて、とり〴〵參會ありしが、いかゞはしたりけん、法華の沙門、「この頃栗毛の馬を求めたり、一段氣に入りて時宗くりげと名を付けたわ。」「何の仔細に時宗とは出でたぞ。」「とかく此の馬をどりたがる。」乃ち時宗の法師、「我も四五日以前に葦毛の馬を買うたわ。名をば法華葦毛とつけたよ。」「いかなれば法華とはいふ。」「とかく彼の馬口がこはさに。」

○豊後にて府内の城を廻國の僧見物するに、十月の末商人門の外に柑子賣るあり。彼の僧一つとりて食はんとする。「是れは。」と尤むれば、「かうじ門を出でずとあり、是れは門外なり。」「やれ曲事や。」といつて扇をもち打たんとする。「こはそもいかに。」「僧は敲く月下の門といへり。」

○伊勢の桑名に古諫とて醫者あり、天然と顏くせあし。濃州立政寺より文叔といふ僧下向し、毎座對談し、後本山に歸る時、人問ふ、「桑名にて古諫をばなにとか取沙汰する。」「されば桑名はつらのやすい處やらん、古諫を百つらといふ。美濃でならばやす〳〵と三百はせんものを。」

青苔を煎豆につけたる菓子、太閤の御前へ出したれば、幽齋法印に向はせ給ひ、何と〳〵とありし時、

君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむす豆

○濃州鏡島にて、乙津寺梅の寺といふ。彼の寺にて、

香がしまばこと木もにほへ梅の花　　　　祇　公

此の寺の一代に蘭叔和尚とてあり。酒宴の座にて、正雲といふ僧に、「一つ飲め。」とあり。「禁酒。」と答ふ。「何事に。」「飲酒はこれ佛戒なり。」と。「して飯をも斷つか。」「飯をいましめの旨なし。」「なかなか、いひがい父はおたいがい禁戒よ。」

和尚は酒茶論の作者なり。

○甲州と越前と取り合ひの時、越前の大守の前にて朝弱せられぬ。末座より、「一段の出來がいに候。」と申す。其の座に坐せし東堂、「なか〳〵國にはあるまいかいで候。」とありし。奇特なる作勢とこその

○幽齋法印或ところへ立ち寄らせ給ふに、家老の人立ち出で挨拶仕り、其の座の脇に机に手習ふ雙紙あり。取りて御覽ずれば、「それは我がせがれの清書にて候。」と申したり。扨々奇特なとほめ給ひつれば、「御覽じ候かた、皆さやうに仰せ候。」といひすてて奥へ通りたる跡に、

なら坂やこの手をはなる親心とにも角にもうつけ人かな

○山寺に人いたりて、「扠も／＼おもしろき境地や候、大略八景も候はん。」と申しければ、住持の返答に、「當寺は十景の古處なり。」と。「さ候へば秦の始皇の地にもまさりたか、八景の外にはいづれを用ゐられ候ぞ。」「されば檀那あり、麓に下り齋をはつて、こゞけにも醉ひて歸れば活けいあり、さもなし、唯二時糟糠汁の風情なれば、ことに貧けいあるかな。」

○さる大名の中間に異名を長棹と云ふ者あり。いかなる心持により、此の名をば付けたるぞと、人々申しけるに、一人の作意には、「唯物の直なと云ふ事にて有らうず。」と。又別人は、「唯物欲しさうなんで有らう。」と。

後のが合ふなげなと

○九州に木山とて連歌の上手あり。八月十五夜に紹巴にて發句をせんと、月もなしといへり。紹巴のわるい／＼名月に月もなしはと申されし。まづするを聞き給へとて、

月はなし日をそのまゝの今宵かな

○翠竹院道三のもとへ、脇指を持ち來りて賣らんといふ時、此のねすんはいか程ぞとありしに、賣主三百八寸と返答せしもの。

○京の町にて、しだれ柳の物見なるをもちありく。人此の柳を見附け、斷りもなくおしてとる。「こは何ぞ狼藉なり。」「知らずや柳はみどりといふ事を。」「實に尤も道理あり。」と、乃ち棒をもつてかれが鼻をはりたり。大いに血ながる。これはと怒れば、「それこそ鼻は紅に。」

○或人紺屋に來り、「これの亭主を上手といふは實か、此のきる物の形に笛の音をつけてくれよ。」といひすてて歸りぬ。しばらく工夫し、上に日の丸下に槍をつけ、後誂へたる主に渡す。「是れは。」といふに、「別に仔細なし、笛の音はひやり〳〵と吹くほどに。」

何と見れども先のちかさよ
日をえらぶ暦はしはす二十日ころ

○座敷の興に物語をせんとする者あれば、傍より苦々といひて評したる時に、件の仁腹立し、「此の咄をそちどもにきけにてはなし、我は物語をふくしてあそぶよ。」と。

○食を過す人に向ひ、「餘り飯を多くまゐるが笑止なよ、臨時に米の入る事なれば、第一損なり、さりとて藥なればよし、大毒にて彼是わるし。」と。「夫れは誰人の指南ぞ。」「老釋迦の說なり、天上天下いひがどくそんと。」

○秀句ずきなる者、堺に逗留せしが、聚樂に上る大名衆なぶりて、「何事ぞ珍らしき事はなきか。」「こ

そ候ひつれ、此の比堺の大道にて物を賣るに、ひやうしにかゝりはやされあるきたる者候」「うそであらう」「いや先へせりかうと節にうたへば、後からたんほゝ〳〵とうつて候。」

○一目見るからむつかしさうなる者、紺屋に來り「この布を染められよ、我がこのみあり、肩には上上の佳酒を、腰にはかたのごとく中なる酒を、裾には下の下の、くらはれぬ酒をつけてよかるべし。」と言うて歸りぬ。其の後日を經て「染物出來たるや」「中々。」とて渡すを見れば、上々の酒には麻がらを、中の酒には烏を、下の下くらはれぬ酒には洲濱をつけたれば、かの男ねだれんやうもなかりし。

染屋に賃を高うやりたい。

夏の夜は酒のおりにもさもにたり呑み悪うして呑こそわるけれ

此の夏はかなしとおもふ事もなしのみくふ事のふそくなければ

○尾州祐福寺に澤良といふ長老、所談の砌、こもそう一人來り庭にて聞く。澤良縁に上りてとあれば心得候と縁に上る、兎角しくべき物なし。長老再び普化僧と呼ぶ。やつと答ふ「其のこもをしけ」

○山城の醍醐寂靜が谷といふにて、

散る花の音きくほどの深山かな　　心敬

散る花は苔におとして風もなし　　宗祇

○堺にて質屋に米を十石入れ置き、錢をもちて來ては、其の代ほど米を取りて行き、度々の注文通に書き付け借主に遣はす。或時錢をもたず來り「一石唯渡して給はれ。」といふ。質屋心安く思ひ通につけずして一石渡しぬ。月迫になり錢を持ち來り、殘らず米を受取らんとするに、質に置きたる米十石なし。借主盜人をいひかけ、結句「元の置きたる米にてなくば請取るまい。」といふ。其の時亭主先づ錢を見んとて只もの見え、一文もとるべきなしといふ。何事にやと尋ぬれば、我がかいた錢が一文もない。元の米でなくばとるまいとなり。我も元の錢でなくば取るまいと。此の作意分明なるかな、是れにてこそすみたれ。

○御意に入りて常に參りつけたる人の、關白殿へ出でんとする時「小姓衆今程聚樂の法度あり知らずや、やくると死ぬると、此の二字申す事禁制なり、汝たくみ、殿に二字をいはするやうにせよ。」「心得たり。」と乃ち出づる。あんのごとく何事やあると御尋ねあり「其の儀にて候、三條の辻に面白き物を棚に出して置き參らせた。」「何ぞや。」「楠にて仕りたる風呂と釜とを見てござある。」と「うつけないふやつかな、木釜をたかばやけて役にたつべきか。」「それはあ御法度がやれた。」

○大坂にて鳥屋町を逸興なる男「鴫といふ鳥かはう、鴫といふ鳥かはう。」と言うて歩く。珍らしき買手やと思ひよびよせ、雲雀をこれこそ鴫なりとて賣りぬ。山家に歸り見すれば、中々鴫にはあらず、

うつけたりと叱られ、又はる〳〵大坂にもち行き、「戻さん。」といふ時、鳥賣、「それには物を知らぬ人の申す事よ、鴫は一色ならず二色ならず、百しぎとて百色あるぞ。」と。實に思ひ、又とりて行きたり。

○戯れに僧盲目の鼻を摑まへ、「如何なるか是れ佛法。」卽ち曰く、「世尊拈華の時はなをにぎる。」

絲ざくら見れば花さく柳かな　　宗祇

○京にたちうりへ惡黨來り、卷物共を見、終に然るべきなし。」といへば、女房藏へ行くまに、卷物一つ盗み挾箱に入れたり。さて後に出したるよき内を銀一枚に乞ふ。やすしとて賣らず。その間に女房かぞへ見ればなし。鄰家にいひあはせ、盗人一二町歸りし時、人を走らかし、「今のをまけんに歸り給へ。」と。乃ち歸る。銀を受取り、卷物はそれにあるにつくと、頻りに爭ふ。挾箱を明けたれば有り、卷物をも取り返し、銀をも戻したり。

事無爲なる作意なり。

○攝津國布引の瀧にて、宗祇、

此の頃はたゝみをりつる布引をけふ思ひたちてきつるかな

○太閤御所風呂に御入りありつるを、蜂屋伯耆守御垢に參られたとてふかれけるやう、知行くれい〳〵知行くれい〳〵と、拍子にかゝり興を盡されし。其の儘蜂屋を捕へ、是非ふかんと仰せある。さまざ

ま辭退せらるゝを、無理にふかせ給ふやう、奉公せい／＼／＼と。作意のはやさ短舌にのべがたし。

○孔子道を行き給ふに、八つばかりなる童にあひぬ。孔子に向ひ申すやう「日の入る所と洛陽といづれが遠き。」と。孔子「日の入る所は遠し洛陽は近し。」童「日の出で入る所は見ゆ、洛陽は見えず、さればば日の入る所は近し、洛陽は遠しと思ふ。」と申しければ、かしこき童なりと感じ給ひけり。唯ものにはあらぬなりけりと人沙汰せし。

○京に智玄といふなま物しりなる者あり。又惠林といふ學者と東寺の門前にて行き合ひ、「智玄はいづく。」と問ふに、持ちたる扇をかけ、爰へ行くと答へたる時、それは當字なりといへるに詞なし。扇をあけたるは一字をきり、鳥羽へといふ事なり。早く察してあて字なりと、打ちたるひだち奇妙々々。

○紫野の明月橋にて或俗和尙に向ひ、「明月橋月なき時如何。」和尙「幸ひに大燈之燈有り。」

○雄長老霜月の半ば、四條の橋を渡らるゝ。河上に法師一人水につかりて居たり。あはれさに立ち寄り、「國はいづくぞ。」「下野のもの。」といふ。

修行とて水に腰よりしもつけのなす野の原はいかに下らん

○法華宗の寺に千部の經あ〻ける半ば、いかにも粗忽なる男參りて聲をあげ、ふと念佛を申しける。我と驚き、手をはたとうち、「ま今のやうに、誓願寺にいつもいふ事よ。」となほしたり。

○名護屋陣とて太閤御所具足をめし、舟より海をのぞかせ給ひ、我が影のうつりたるを御覧じて、

海の中にも武者ぞありける

と仰せければ、乃ち紹巴、

釣針にかゝりてあがる甲貝

○新田秀忠將軍江戸の御城にて、大名衆御振舞なさるゝに、御鷹の鴈の汁を仰せ付けられし。再進しけかりつるを御覧ぜられ、たはぶれに、

振舞の汁や度々かへる鴈

同じく元和九年の春、

山々の雪のあたまや春の雨

といふ前句に、

握りこぶしを出すさわらび

又、

高き物をごやすゝうりかふ

と云ふ句に、

ふじの山扇にかきて三十文

又、

今朝あけて雪を取り出す箱根かな

同じくいづれの年の始めにやらん。

武藏鐙ふんばつてたつ霞かな

○雪の日そとより人來り家に入る。見れば殊の外暗し。あらくらや／＼といふ間に、錠が足にあたれば、內々ほしかりつるにと思ひ、取りて懷に入れぬ。座敷に直りたれば、ひたもの赤くなるまゝさても恥かしや、人の見つらんと悲しければ、取り出すべきやうなくて、案じわづらふ所へ、又人來りぬ。さきの如く、あらくら／＼といふ時、乃ち取り出し「是れ／＼なたをさへ懷に入るれば、あかうなるにすんだ。」とて取り出し渡せり。

○宗祇修行の時、山中にておもひよりなき人三人行きむかひ、一人いふ、

一つあるもの三つに見えけり

乃ち祇公、

類なき小袖のえりの綻びて

又次の者いふ、

　二つあるもの四つに見えけり

又宗祇、

　月と日と入江の水に影さして

又一人がいふ、

　五つあるもの一つ見えけり

又祇公、

　月にさす其の指ばかり顯はして

右三句ともに聞きて後、三人いづれもともに見えず失せにけり

○誕一撿校ある座敷にて物語のついで、癪には兎角身をつかふよしと聞き、めのよき茶臼を癪の藥にひかばやと望あるを、七尾撿校受記一かあはせて、

　撿校の目のよき茶臼求むるは手ひきにせんと思ふなりけり

○大陰核もちたる侍の、馬にて渡りたれば、雄長老、

　いかくらの前にあまれる大ふぐり金覆輪とこれやいふらん

十三にまかりなる。」と申されし時に、野州、

　紫竹の竹のよにひさながさよ

〇越前と加賀の一向宗と取り合ひの時、朝倉どの或會下僧にむかひて、「敵も八幡大菩薩、味方も八幡大菩薩と念ずる。其の一念には一般利生は如何に。」とあれば、僧いふ、「味方は現世安穩、敵は後生善處と守らん。」とぞ答へける。

〇禪僧先に立ちて河を渡る。山伏又跡より渡るとて、「如何にお僧、いかい罐子の。」と言うたれば、僧のいへる、「河中でなくば一服申さうものを。」

〇木村の宗宜とて吉野の代官なりし。京都に家あり。茶の湯にて三藐院殿を請じ奉り、次へお出であらし時、少女かよひに出でたり。「そちが名は何といふぞ。」と問はせ給へば、「雪。」と申し上ぐる。跡より一人又まかり出づる。其の名を尋ねあれば「玉。」と申しけるにぞ、乃ち當座をあそばされし。

　ときに出で友まつ雪のいろに又劣らぬほどの玉あられかな

〇三藐院殿へ春可祗候して侍りし。御庭前の櫻漸くひらくあり。「一句仕れ。」と仰せあれば、

　かすむ目にとほすや針の絲櫻

と、申したれば、さらば我も、

さかぬまをまつやしんくの絲櫻

○廣橋大納言殿へ春可まゐりてありしが、壁の根に、菊一もと咲いてあり。見事やなどほめまゐらする時、「あれは壁の外菊畠なるゆゑ、傳ひて咲きたるなり。今一句。」と仰せあれば、

壁に耳かくす事をや菊の花

と申すにぞ廣橋殿、

たそがれどきの秋のぬす人

○卯月十日春可宇治に侍りしが、けふより茶をつみそむるといふを聞いて、

手始めは色葉をえらむ宇治茶かな

○大晦日の夜半ばかりに雨のふりし。曉よりをやみて晴天になりしかば、春可、

去年は雨日本ばれやけふの春

○越後大守爲景公、國の中林泉寺へ年頭の一禮とて二月赴かせたまふ。住持迎へに出でられける。折節庭前の白梅長老の衣の上へ散りかゝりたり。時に爲景の一問、落花の端的。和尚、作麼生。答へて時節梅花不レ借二春風一。爲景公云ふ、時節に不レ借二春風一、和尚一刀とて刀をぬきかまへ給うたれば、和尚云ふ、春風無レ手落花汝無レ手殺レ我。

○篤景公狩するついで、深山の巖穴に座禪の僧あり。彼に向ひ「我は弓箭を帶して來るこそ、物凄まじき處なり、何としてかかる絕壁には住するや。」僧云ふ「我心があらうにこそ寂しからめ、心なければ寂しとも思はぬ。」と。時に篤景公、「答ふる者はたそ。」僧云ふ「巖松無心風來吟、問へばこそ答へたれ。」

○細川幽齋法印見附のこうといふ處にて、宿主にむかひ「是れより富士は見えぬや。」と尋ね給ふ「さればの時によりて見え候、あれへ出でて御覽候へ。」と申す。乃ち小高き處へ上り見給へども遂に見えざりければ、

方角もいさ白雲に目ざくはるふじを見附のこふのいはねば

○此跡は大名にて威勢ありつる人なれども、忽ち落人となり、宿かりそめの寒夜に、身はすゝみかねのごとく冷えわたれば、古疊をきていねられしが、狂歌、

淺ましや世は倒さまになりにけり人にしかるゝ物にしかれて

○幽齋法印の御内なる松井といふに、振舞を御沙汰ある時、たび／＼人をつかはし給へど遲し。料理の者「鹽鯛のやけ過ぎて、如何。」とかなしめば、「いや昔よりありし事よ。」とて、

こぬ人をまつ井の浦の夕食に燒きしほだひの身を焦しつゝ

○まりこの里といふにて、中間馬のくつを買はんとす。代を高くいひければ、主人馬上より、
くつのねは鞠子の里や高からんあすかひ給へ先にありく
○山崎宗鑑汁のまはしにあたりたる時、江州の兵主殿へ送る。
武士のいるやかぶらの兵すなをよつぴきしめて十二束たべ
兵主殿より返歌、
武士のいるやかぶらの兵すなをこ兵なりとて八束ぞやる
弘法大師名のみ殘れい
くうかいのお汁のわけはかぶらにて
○大風に壁のおほひを吹き落されし時、めをかけらるゝ德人のもとへ、俵を乞ひつかはすとて、
御無心は蚚蚣の手ほどまうせども又このたびも俵たべ
○或出家舊友のもとに泊り、頭巾を忘れて歸りたれば、其のぬしの方へ文をそへてもたせ送りつる。
行平のゆかりにたぐふお僧さま御立烏帽子殘したまひつ
返歌、
立ち別れいなばやなんと思ひしに形見の頭巾今かへりきぬ

平家

○「小松内大臣重盛公は、釋迦の弟にてありし事よ。ちとも知らなんだ。」と語る。「謔さうな、時代も二千餘歲違ひたる物を。」「しても醫師問答といふ平家に、重盛の定業もし醫療にかゝはるべう候はば、あに釋尊入滅あらんやといはれた。」

人をとゞめん言の葉はなし
佛だに逃れぬ道は別れきて　宗祇

○一向不文なるもの平家を聞かんと行き、何としてあの風情の耳に入る事あらんやと、眞しからざりしが、彼聞きて歸りぬるまゝ、「何と平家を聞かれたか。」「されば木平家は一段おもしろかりつるに、時々座頭のをめくでくたびれた。」と。

○土肥次郎實平は、大手の木戶口に主從五騎にて控へたるとをしへければ、弟子おもふ、控へ物こそあらめ、なきはいなものなり、せめて椀はまさりなんと、晴がましき處にて、主從椀にて控へたると語れり。

○橋のゆきけたをさら〳〵と走り渡るを、やゝもすればわするゝ、「そちは鈍なり、膝にすれる皿にて覺えよ。」といはれ、或時又橋のゆきけたを、ちやつ〳〵と走りわたると語りごとは。

○生食を佐々木にたぶ。佐々木畏まつて申しけるはと言ふを、佐々木をいけずきに賜ふ。いけずき畏まつて申しけるはというて、いはん事なし。

かすり

○正月二日の朝西よりは針賣の來り、東よりは烏帽子賣の行く。途中にてはたと行き合ひ、烏帽子商人より「はりの始めの御慶び。」と申したれば、針賣とりあへず「何事もゑぼしめすまゝに。」と。

○正壽庵といふ坊主のもとへ、「はや齋出で來て候、とゝわたらせ給へ。」と中間を使につかはす。彼の使ゆきて、門よりしやうじゆあん／＼と呼びければ、坊主をかしき事におもひ、いやつす／＼とぞ答へける。

○武家の愁傷ありときいて、弔ひにつかはす口上に「御親父逝去の事是非なし 併しながら生老病死の習ひ、いたつて歎きあるまじく候といへ。」右の使者、生老病死を打忘れ、だんさるべうしと申しければ、されば親にて候者、ひりや／＼にふりよにはてて候。

當意即妙なるうけあひや。

○山芋をば薯蕷といひ、ところを野老といふ。旅人山路を行き、樵のやうなる老者、鍬にて蔓のあるものを掘るあり。旅人戲れに、「ところほるやらう。」と言ひかけければ、「いや山のいもじよよ。」と。

○黄菊紫蘭咲き亂れたる前栽あると聞いて、すきの人々集まりければ、宿の主取囃し暖め酒を二色、燗鍋につぎ、右と左とにもち出で、「なにと各はふる酒をきこしめすか、又濁酒を進じ參らせうか。」と。

○江州志賀の浦に姥あり。天然作意、うまれつきてかすり秀句をいふに上手なり。かすりを好む盲者あり。若狹の小濱より、はる〴〵と彼がもとへ會ひに行き、なにとなう宿をかりしが、飯の汁を一口すひ「此の汁の實はなにぞ。」と問ふ。姥「それはくゝたちの汁候よ。」「人の口きらふとて。」「いや去年八月からたゝまいておいた。」と。

○鎭西より天台山にのぼる學侶ありしが、或時病氣をわづらふ。西塔の法師來り弔ふついで「此の病をば生得筑紫風といふ。」「それは何とて。」と尤むる。「しもからひえのぼるほどに。」と。客僧「いや鎭西には天台山とこそ申し候へ。」「この故は。」「唯ひえのやまひぢや。」と。

○京に積善院といふあり。また建仁寺に兩足院といふあり。ある時積善院兩足院へ入來のことあり。眞俗の物語、時過ぎて後、「人の果報無果報は爲方なし、かりそめの寺の名さへ、我が住むかたをば、口ずさびにもしやくぜんゐんとこそ呼べ、又其方をばとりはづしても、りやうそくゐんと呼ぶ、けなりや。」

○遠州の内かたはらに古寺あり。鷹野に出でける武士の候うて、思ひ寄らず立ち寄られたれば、住持と思しき僧、手づから堂のまへをすぎず。何のためぞやと問ひけるに、「菜園なり、其の節を伺ひ種をおろさんとす。」と。乃ち侍のいへるは、「道場の庭に、なをまくさまんだの時いかん。」とあれば、老僧鍬の頭を押へて、「せんだばかりもできさせ給へ。」と。

○「そなたは源氏の晩鐘をきかれた事はないか。」「いや貴所は、平家の落鴈を見られたか。」

○護摩堂の本尊不動の前に供への餅あり。人見て、「あの不動の餅を二つ三つこんがらと燒いて食うたらよからうな。」新發意出でて、「くひたくば食はしませ、誰ぞ無用とせいたかや。」

○會下の寺あり。座頭兩人客殿にて平家を語る聲方丈に聞ゆる。東堂手を拍ち喝食をよび、「面に琵琶を調ぶる音せり、平家かべいけか聞いてこよ。」と。喝食走り戻りて、「へいけなり。つれべいけでざう。」と。

○會下僧に齋をすうる菜に蕨あり。終に服せず。施主、「如何なれば蕨をば食せられぬぞ。」と。「人の口やかうとて。」「大事候まい、けしあへにしてざうほどに。」

花を折るかと人や見るらん

躑躅咲く木の下わらび手をあげて

○京の町にておひさきあしだを賣る商人、こあしんだ／＼というて先に行けば、其の後から菜を賣る者のつゞきて、なかう／＼と。

われかれに似たひゞきがすまゐ。

○座頭の琵琶おうて來るを見附け、おどけ者が、「なつとの坊は何處より何處へおとほりぞ。」「わらの中にねてから、絲ひきに行く。」と。

見た所うまさうなりや此の茶のこ名は唐絲といふてくれなる

○宗長の連歌の座敷に、初心と見えし座頭一人ありつるが、倉忽に、「一句申さんや。」と伺ひければ、宗長、「連歌過ぎての事にせられよ。」とありし。

○利陽にて鶯菜をもち、一人の女房うぐひす菜めせ／＼と言うて賣れば、買はんとする人、それは片言をいふ。青菜めせとはなぜいはぬぞ。鶯におをとよむ聲ありやとこ彼のうりてかたにし事よ。

鶯も笠きて出でよ花の雨　　利休

賣りにくる程をしといへば我が園のうぐひす菜とて音こそ高けれ　　雄長老

○一寺の崇徹世に越えいつくしき喝食ありつるが、おもひもよらぬ病にさそはれ、夕の煙となれり。かの骨を東堂我が前に置き、茶巾の僧にむかひ、寒夜に燒き殘す一束の柴といふ句をいだせり。終に

大衆の語出です。時に東堂、「この葉ばかり殘つたよ。」
○喝食ありし、東堂に膳をすうる時和尚、「遁れ月一輪かな。」喝食、「ほしくもないの。」とて膳をとりぬ。
○よき若衆ことゝもなひきたる僧を見て、あつぱれ黒雲かな。
あれがせうずよな。
○水上の兎月に驚く事はいかん。おぼるも理あり、弓張月のある時は。十五滿月の時いかん。十分に引き詰めて見よの。射手如何に。桂男。矢束は。十三やもあり、十五夜もあり。
ひかぬにつよき弓のいきほひ
けだものは小田のかゞしに驚きて　宗養
○あつぱれまるい水かな。すみきつたの。
○車に片輪あるを見て、一人の僧は、「戒行がよいな、かたわがない程に。」一人の僧は、「戒行がわるいな、かたわな程に。」
○大善知識を見て、あつぱれ小便所かな。如何ほどの人かしとしつらう。
○石上の松は座禪の僧に似たよ。ねいりもせずうごかぬ程に。
○漁人折二梅花一　花見に舟をかられうずよな。

○あづまごとの歌いみじう好みよみけるが、螢を見て、

　あなてるや蟲のしや尻に火のつきて小人だまとも見え渡るかな

吾妻人のやうによまんとて、まことは貫之がよみたるとぞ。

○津の國に多田といふ在所の候。同じく近き里に役所ありしに、人足ふたりとほる。關守のとがむれば、先に行くもの「是れはたゞの夫にて候。」と。關守「さあらば八島軍をかたれ。」「それはつぎのぶにお尋ねあれ。」と。

　天然かたくみか。

○有馬の湯に三日月のさし入りたれば、月の湯治は何の病ぞ。道理よ片輪なる程に。十五滿月の時は如何。片輪と片輪が寄り合うたらば、重病ではないか。一僧出でて「いや月に一度の闇を愈さんとて候よ。」

○靜かにあゆみて額をうつてすよ。はしらでうつてすの。

○或僧冬扇を持ちければ、雪中の扇になんの役かあらん。僧しばらくありて、扇をつかひ、當話につまり、汗がひでざうよ。

○見ぬ戀をする時、あつぱれ敵の城かな。せめて見たい。

○ちと同學たりし人のもとへ、「廣韵をちと貸したまへ。」といひやりたれば、「此方にもいる。」とて貸さず。後に逢うたるに、「以前はいなものを貸されなんだ。」と恨みければ、「光陰をしむべしとありけり。」借主遺恨を含み、重ねて先のをしみての方へ、明朝齋を申さんといひやりぬ。必ずゆかんよし返事ありき。亭曉より起きて朝食をいそぎ用意し、内の者にも早々くらはせ、棚もと其の外掃除をきれいにして置きたり。件の僧來り、まてども更に飯をくるゝ音せず。「何とて膳は遲きぞ。」「とき人を待たずとあれば、早疾く過ぎたわ。」

○若衆ぐるひをするというて、妻いろに出で腹立す。男たる者は若衆ぐるひをせよと、式目にのせられた神社をしりしとかけり。女房即座に、其の式條のむねを本とせば、そちのがいよ／＼とゞかぬなり、さいしをもつぱらにすべしとあるに。

○京にて傍輩の中間行き合ひ、「そちは今誰のもとに奉公をするぞ。」「三條のお奈良屋にあるわ。」おの字をつけていふを憎み、おならやはのくさい事をいふ。「それならばそちは何とて我がゐどころを問うたぞよ。」

○宗祇と宗長連立ち三井寺を見物の時、宗長いへるやうは、「ちとぶさうがなの。」とあれば、祇公「そ

れはよい前句さうな。」と候ひしに、乃ちとりなほして宗長、

掃除もたらぬ三井の古寺

祇公又、

坂くだりくしやばう／＼とはえしけり

○信長公東寺のあたりを過ぎさせ給ふ事あり。馬上にてひたもの御眠りありつるを、沼藤六驚かし申せば、「爰はどこぞ。」「右は六條さきはたうふくじ。」と申したりつるに、「ありしらかべかや。」と。

○百姓の福力なるあり。總領の子才覺あれば、笛を稽古させけり。明暮謠の、小鼓の、大鼓のとて、出で入りのたゆることなし。祖父は隱居の身ながら、「こはそも何事ぞ、稼穡の艱難を忘れ、紡績の辛苦を無になし、我が家の業をばよそに見て、身代のはてんずるを。」と悲しび居けり。かくて三年過ぐる冬十月藝者あまた集め、おびたゞしき囃を興行する座敷へ、頻りに祖父を呼び出せば辭退もかなはず出でぬ。孫一番ふいてどつとほめ、人みな聲をそろへ、さて祖父の歡喜さこそなど取りはやしたるに、祖父、「されば人の耳には笛の音のなにと入り候や、我が耳には田うらう／＼とより外、別の音は入らぬ。」と。

○鼬眉日よし、ま一度こい、顏見うと世話にいふを、秀句ずきなる人の門にて、いかさ見めよし、め

せと言ふ。なか〳〵買はうと呼び入れ、あひしらひ出でて歸る時、いかき賣りを招き「ま一度こい、かご見う。」と。

○和泉の堺にてこれへ參る道に鈍なる男あり。何やらん手に持ちて居たるを、横道なる者通りさまに押取り逃げ行く。「やれ盜人よ。」と呼ばはれば、「結句とりはせぬ買うた。」とあらがふ。たれも極むる者なうて、とりての物にぞなりける。「彼を見るに、忽ち我が物を奪はれても、所に正路なる地頭なくば淺ましや取られ損にこそならんずれ。」と語るに、「取られても取りても隱れはあるまいが。」と問ふ時、「されば右申せしは謔なり、實は今朝鳶が魚をくはへ來り、宿院の内にて食らはんとする所に、松の上より烏飛び下り、これを奪ひ取り、木の上にてくらふ。鳶はいひえぬす人とさけべば、烏はかうたかうたといふて、おのが徳にぞなしたる。をかしげにて心ふかし、烏は鳥中の曾參。」とあり。

○夏の天に數日雨なうて、民家干損を歎き、氏神の社頭に、風流をかけ雨を乞ふに、一滴も降らず。いつもふるが奇特やなど沙汰しあへり。かたくななる宿老うちうなづき「今度のをどりがうらは一向氣にあはなんだ。なにか太鼓をばてれつけ〳〵てつてれつけと打ち、鉦をばてんき〳〵やと叩いて、笛をひよりやひよりと吹いた物、何として降らうよ。」

○須彌四州の内、天よりふり物おの〳〵かはれり。北州は瑠璃の雨、東州西州は瞻蔔花の雨、南州

は清涼雨、敕によりて和泉式部雨請、

　日の本の名におふとてや照らすらん降らずば又天が下かは

此の歌にて空かき曇り、大雨ふりし。

○京にてさかしき座頭、月忌の座敷へおそく来り、「内をばとく出でて候が、道にて鐘のおと仕り候まゝ立ちよりて候へば、酒もり談義にあうて、さてぞ遅参いたし候」といへり。「酒もり談義とは何事ぞや」「されば、もはやたたんとはねつくろひせしに、こゝをば法然のしやくにて一つ申さんとあり。又たたんとすれば、善導のしやくにてまた一つ申さんと」

○長岡越中守殿豊前國ひるがの神へ参詣あれば、神主悦喜不ㇾ斜、賞し申せし座敷にて、太守の羽織を見、「さてさて珍らかなる唐物や」とほめまゐらせければ、すなはちぬぎてつかはし給ふ。其の當座の興に、

　腫物にあらぬ我が身のだうぶくをひるがの禰宜に吸はれこそすれ

○或年の春幽齋法師坂本壽齋といふ棊打をつれて、吉野参詣ありしが、かつての明神の前にて、そちが代りにとて、

　参錢をはまのやうにはまかずとも棊にはかつての神や頼まん

○義政將軍の御前に、同朋萬阿彌罷り出でたる時、作意を御覽ぜんとやおぼしめされけん、尺八を投げ出し、「それ／＼車が行く。」と仰せければ、萬阿彌いそぎ立ち、ちやくとおさへざまに、「失うてはなるまい。」と、取りて懷に入れしと。

○世の中はいづくにいかなるものが、親類にあらんも知らぬなど、かたるついで、「げにも鵐と烏が親子にてある事を、此の程知りたるわ。」といふ。「これはもつての外なる僻事であらう。」と「いやしかと實なり、よそまでもない、我が直に聞いた、此の十日ばかりさきに、庭へ烏下りてあそびゐければ、鵐もきたり、又堂鳩も飛び來る。三鳥よりあひたるに、鵐烏に向ひ、父々といふ、烏うれしげに子か子かと呼ぶ、堂鳩證據にたち、うゝ／＼と答へたれば、まぎれもなき親子ではないか。」

世の中の親に孝ある人はたゞ何につけてもたのもしきかな　　親當

○廣橋大納言殿兼勝公へ、相國寺の保長老師より使僧を以て、明日の和漢に罷り出で度く候へども、瘧氣のゆゑ御免の旨御披露願ひ奉るとありし時、彼の僧を呼び給ひて、口上を御聞きあり、「それは瘧のおこりか平のおこりか。」と。

○宗牧へ或方より小角豆と茄子とを送りたれば、

さゝぎ殿なすびの與一給はりてお使からしも賞翫ぞする

○周桂入江殿に知音の人ありて、朝歸りの時、宗牧行き合ひて詠みける。

かづき出る青苔色の頭巾こそ入江のあまのしわざなるらめ

○猪齋へ田舍よりおとづれて、よくいにんと茴香とをのぼする事ありし。言傳てられし人と文とは京につきしかど、送れる二種は大坂に忘れ置きたりとて渡さざりければ、

はるばるとよく田舍より給はれど茴香とてや上らざるらん

○旅人敦賀にて「一夜の宿を貸し給へ。」といふ。亭の答へに、「春か秋冬ならば易き事なり。夏の月にとまり事はなるまい。」「如何なれば。」と問ふ。「爰は處をつるがとて、鶴程の蚊ありてくらふものを。」旅人いふ、「それならば宿かし給へ、毛頭くるしからず、生得我がすむかた山家なれば、山ほどの蚊にくはれつけた身ぢや。」と。

茶の湯

○西行法師、伊勢の宇治にすみける時の歌、

爰も亦都のたつみしかぞすむ山こそかはれ名はうぢの里

○茶は是れ釣レ睡鉤とあり。又食を消するともいへり。

我が門に目ざまし草のあるなべに戀しき人は夢にだに見ず

などいうて人々ほめはやしけり。末座に百姓の候うて、「それならば我々は一期茶を断ち申さん、終日ほねをりても夕とくと眠ればぞ、辛労をもわするれ、又たまたまとぼしくてくふ食の、さえては何の益あらん、あらいやの茶や。」と頭をふりたれ。されば憂喜依レ人といふ題にて、

ますらをが小田かへすとて待つ雨を大宮人や花にいとはん

と詠める。さまこそかはれ、心ばへひとしかるべくや侍らん。世をおもしろく住む人は茶を愛し、賤の男は茶をいなと狂言せし、一旦は理あり。

何となく人に詞をかけ茶椀おしのごひつゝ茶をも飲ませよ

花をのみまつらん人に山里の雪間の草の春を見せばや

利休はわびの本意として、此の歌をつねに吟じ、心がくる友にむかひては、「かまへて忘失せざれ。」となん。

契りあれや知らぬ深山のふしくぬ木友となりぬる閨の埋火

是れは夢庵の歌にてあり。古田織部冬の夜のつれづれに吟ぜられし。

○泉州かうの瀧炭を定家卿の歌とや、

泉なる横山炭のいしろくしてとる手につかず飛ぶ事もなし

又古歌に、

いかにしていかに燒けばかいづみなる横山炭の白くあるらん

わかばうめぬるくば炭を置きかへよくみたらん程水をさすべし　夢庵

○祇公信濃路にて山家の草庵に立ちより、茶を所望ありつるに、湯のぬるかりければ、

お茶のぬるきは春のしるしか

卽ち亭坊、

うめ過ぎてわかとがのなの花ざかり

○和泉國篠田の茶屋に、宗祇一夜とまりたまひし事あり。茶屋の亭、「今夜は冷えて、夜尿つかまつりて。」と申したれば、

我が物とほしさのまゝにたてのみて夜尿しの田の森の茶坊主

○古田織部助に數寄あり。濃茶たちて出でけるに、客のいふ、「此の茶師はたれやらん。」と問ふ。「上林春松が雲切りなるよし返答あれば、彼の客、「今朝の御茶別して忝きかな、春宵一ぶく直千金。」とあり。

○或寺の住持檀那へ見まはれける、土産の茶あり。主人あり難く思ひ、内に請じ、「先づ茶を進ぜよ。」

とたてゝ出づる。亭主一口のみ、「是れは散々の苦茗や。」と叱る時、女房「それはお寺よりおもたせのお茶。」と斷るにぞ、亭主いはん事なく、今一口二口のみ、「なか／＼や、下さるゝ程よい。」と。

○足利の門前に姥あり、往來の出家に茶を施す。されば學侶の智慧を察せんとたくみ、僧來つて茶を所望すれば、「人のひいた茶はをりない。」と言へり。時に僧、「風がひいたりとも飲まん。」といふ。姥大きによろこんで與へたり。

○時しも夏のあつき頃、民家に姥らあつまり茶事してゐけるが、れんじやくかけたる商人の通るをあはれみ、「立ち寄り休み、茶をも飲まれよ。」と呼びたれば、「あら嬉しや三服たべう。」といふ／＼立ちよりし。「いかほどなりと飲ましませ。」商人、「いや三服はそらね、定は一服たべうず。」と。

○法師あまた少人をともなひ、淸水へ詣でしが、まづ茶屋に寄りやすらふ。其の中に一人の若衆甘茶をのぞみ多く飲む。指南の法師おもふ、あまき物はむしにたゝると、「又先にては苦しからず、今は先づ怺へられよ。」と敎訓しければ、「こゝな人は仰山さうに、一斤飲うでも錢二十こそすれ。」と。

○如何にもまつたき福人あり。「茶の湯といふには何か入る物ぞや。」と。「數寄には第一の嗜み、茶壺候よ。」「さあらば一つ求めたい。」伊勢より尋ね出でし、これは藤四郎とてよき壺といふを、代八貫に買ひ取り、福人祕藏し、名を平家法華經、伊勢物語とつけたり。人其の故事を問へば、「平家とは家がひ

らざるに、法華經とは八貫に買ふこのつぼの出處は伊勢物なり。態とさしたる家にてなければ、もあなり
く度かたり〳〵となるほどに。」

○古今萬葉集といふ壺をもちてくすむ人あり。聞く者めづらしがり、其の心を聞かんと望めどもあへて語らず。いはぬに深き心の程ゆかし。いたく執心し尋ねけるに、彼の壺ぬしいふ「古は古茶、今は新茶、萬葉は無上別儀そゝり、集はいづれもあつめつむる故に、其の德をもつて名とす。」

○山家に居住の貧僧あり。たま〳〵客を得たり。物相一飯をもてなし、茶をたてて出し、「これは、といわら壺につめたり、色香味を吟じたまへ。」客おもひきや、かかる住居に名壺のあらんとは。一座事をはり、彼の壺を見んと乞ふ。僧眠藏より持ち出でて、「これは山賤の粉骨をつくし作るところ、始めの稲をわらといふ、其の俵藁を幾重にもあみかけ、焙爐の紙につゝみ詰めおき候まゝ、といわらつぼと號するなり。」

○歴々の衆三人ともなひ朝會に行き、昨夜鶏明まで酒にふけり、いまだ人心地もなかりし。會漸く過ぎ、亭主茶をたつる時見れば、三人ながら眠り入りたり。されども上座の人目を明き、次の膝をつめられ、これも目を醒し、又下座の膝をつくに、彼の心には茶の禮かと思ひ、「まづおのみしやれ。」と麁忽にいうて、よく〳〵見れば、亭主いまだ茶を立て居けり。面目なき御推量あれ。

○東堂の許へ人來りて問ふ。「茶堂と申す者候、又茶堂と申す者候、何れが本にて候や。」「何れも苦しからず、されども、茶堂は唐韻にてこびたり。」とあれば、男合點ゆきたる體にて立ち去りぬ。一兩月過ぎ、今度は總領の子十六七なるをつれ來り、「此の松千代に何卒男名をつけてたべ候へ。」と申せば、乃ち左近の太郎とつけらるゝ。親あたまをふり感じて後、左は唐音でござるの、いや／＼我等ごとき者のせがれに唐音は過ぎて候。唯ちやこの太郎とおつけなされよ。」と。

○大相國御數寄ありし時、こい茶をひきうばひ、御秘藏の井戸茶椀われけり。御氣色かはる事なく、「幽齋の歌の出來不出來によるべし。」と御諚ありければ、

つゝゐつゝ五つにわれし井戸茶椀とがをば我が身おひにけらしな

と詠じ給へば、「此の茶椀はわれずばなんであらうぞ。」と、御感情深かりき。

○雄長老ある寺に立ちより、「これに數寄屋はないか。」「否なし。」との返事なり。「さらばわる茶にてもたてて出されよ。」と所望ありて後、

數寄屋あらぬお茶や昔のお茶ならぬ我が身獨りはうすのみにして

○後陽成院の御時御口切とて、御壺出でたりつるを、雄長老、

御前ではちや／＼と歌よむ壺なれば口をはられて物をえいはず

○慈照院殿、愛に思しめさるゝ壺あり。名を何とかなつけんと御工夫ある。頃は寛正二年八月二十日、「誰かある今日は二十日か。」とお尋ねあれば、女房達の聞きもあへず、「なか〳〵今日初鴈を聞き参らせた。」と申し上げられたり。「あらおもしろの返事や。」とて、能阿彌にむかはせ給ひ、

たれもきけ名づくる壺のくちびらきけふ初鴈の聲によそへて

と仰せあれば、能阿彌とりあへず、

初鴈のきこえあげける言の葉よいやめづらしき雲のうへまで

此の由來により初鴈といふ壺ありとなん。

祝　濟　多

○抑四十六代孝謙天皇の御宇、天平勝寶元年己丑の春、始めて奥州より黄金を獻す。「重寶参りたり。」とて大伴家持に歌召されければ、

皇の御代さかえんとあづまなるみちのく山にこがね花さく

と祝ひすまして、是れより元和九年まで八百五十五歳なり。和朝の山々、黄金涌く事彌まされり。

○「正月に三ヶ日の食物なども、昔より祝ひて書きたり。」「何にあるぞ。」と問ふ。「暦に候。」「なにとある。」「元日はかん日、二日はもち日、三日はくへ日。」

○左大臣信長公或年の元日、曉さふにのお膳すゑりけるを御覽すれば、箸かた〳〵あり。「これは何者のしわざぞ。」とて、大いに御氣色變れり。大相國いまだ木下藤吉郎殿にて御座の時、「お機嫌あしきはさる事ながら、當年より諸國をかたはしどりになさるべき瑞相なり。」とありければ、これにて御腹立やみぬ。案のごとく、そのとしより國々をしたがへ給ひきとかや。

○同じく信長公へ、諸大名おの〳〵元日の出仕ありつる座敷にて、仰せあるやう、「こよひの夢にいつくともなく出陣のこゝろして、一宿よろひて馬に乘るとおもひつれば、乘りたる馬の足、四つながら折れて、危かりし體を見たり。」と御諚あるに、誰も有無の返答なし。また藤吉郎殿とりあへず、「千秋萬歲の御夢なるべし、そのゆゑは、合戰をなさるゝたび、いつもかち武者の御名一天にとらせたまふべき御告とこそ存じさふらへ。」といひたまひしが、まことに戰ひのあるとなれば、勝ちたまはぬはなかりき。

○古道に信長公へ始めて御禮に出でらるゝ、進上に扇子一本もたせられし。御前に候人みなあら些少のいたりやといふ氣色なりき。時の奏者に、「言上あれ、これは目度たう日本を、御手の內に握らせ給ふやうにと。」

○元日いまだ夜深きうちに、よろづ物をうりかふ人、えびすを求めむかふる事は、聖德太子より定ま

れり。さるにより町々をもちて、わかえびす／＼と呼ぶ。これを望む者うけて悦ぶ。彼のえびすのはん木をする者、いろ／＼の尊げほどの姿をおこして持ちたりしが、師走のいそがはしさにや取り紛れけん、えびすと思ひて持ち出しけるが、三途河のうばをすりたるを取り違へ賣り歩きぬ。明方にうくる者の見附け、「これは異な姿や。」といふを、賣主も見ればうばなり。肝を消しながら、おくれぬ顏して言ふやう、「是れこそえびすのお袋にて、殊更にめでたし」と祝ひければ、「げにも／＼わかえびす殿も、おふくろがなうてはいかであらん、福の源これなり。」と悦びて、頂きをさめけるとなん。

○若狹太守武田殿、無縁の出家をかゝへ置かれ、寺など建て憐愍あさからず。されどもその家の事を知る人正路ならず、何を送らるゝも或は半分、或は三分の一遣はし、中にて殘す。彼の會下僧もよく知りながら、さすが國主へ申し上ぐべきよしもなかりしに、ある年の暮、正月の菓子に胡桃を千送れとあり。然るを、五百八十やりたり。僧不審に思ひ、一首の狂歌を參らする。

　下さるゝくるみの數も君が代も目度たかりけり五百八十

太守代官をめし出し、くはしくせんさくあれば、あやまる處紛れなかりつれども、これは祝儀の歌をよまれし僧の心を感ずる條、今度の科ばかりはゆるすとありし。

○商人の習ひにて、正月は藏の口に必ず鯛をかくる例あり。これをなん傳へてかけこだひといふ。

或者の藏に、目のぬけたる鯛をかけておけり。亭主元日の朝見附け、大いに機嫌をそこなふ時に、こざかしき中居出でて、「ことしこなたのお仕合は殘る事なし、何事もおめでたい。」と祝うたり。

○或人觀音をいのりの爲、はつせの觀音に一七日參籠しけるが、やうやく六日目の夜半ばかりに、俄に我がひだりの足にはれものいで來て、ひだりの腐り行くを、こはそもいかんせんと悲しみ侍る中に、夢なれば覺めにけり。あくるを遲しと宿坊にかへり、右のおもねを語りければ、「めでたき大悲の告夢なり。やがて利生におあしやくさる程もち給はん。」とぞ申しける。嬉しげにて又こもりぬ。まんずる夜の夢に、兩の足に物いできて、左も右も腐るとおもひ驚きぬれば夢にてあり。件のおもね又宿坊にかたれば、「いよいよ福壽海無量の利生あらたに、料足をくさるほどもち給はん。」とぞ祝ひける。

○物いはひする商人ありて、初春の朝ごと、こぶかちかぐりなど菓子を入れてすわる。そのつけのはたあり。宵より妻のとりいでて下主に渡し、「綺麗にすゝぎておけよ。」といふに何とかしけん、取り落してうちわりぬ。女房肝をつぶしあへり。あけぬればいつものちやのこいづるやと、亭主も一とも更に出でず、そのまゝ氣色をそこなひ、女房を叱る時に、下主くだんのわれたる鉢をもちいでありの儘にいひてけり。亭主あんにかはり、きげんをなほし、「珍々重々なるかな、ことし我があきなひは八割あふうすよ。」と祝うたり。

○髪結のありしが、元日の朝ふとおき〳〵、女房のいひけるやうは、「元三から大晦日までようゆひ事をする人には、お身より外又二人ともあるまいぞ。」やがて男、「そのゆひ事は、千あらうと萬あらうと皆わがわるいからよ。」と祝うたれば、其の年そこ〳〵の仕合、くれ〳〵よかりき。

○江州甲賀大原の莊に菊田の玉木といふ者あり。正月のかんの箸に栗の木かた〳〵、柏の木かた〳〵四角に削りて、親子三人祝ふ心は、九里四方にかしくふとの心なり。

○氏康公の城中にて、晝狐の鳴きたる事ありき。「これはよからぬ忌む事なるに。」といふを聞きて、

晝はきつねに鳴く蟬のから衣おのれ〳〵が身の上にきよ

○京都六條の道場に、文閑といふ連歌の作者ありき、其の親の名を惣吉とよぶ。或時彼の惣吉火事にあへり。其の砌文閑雄長老へ尋ねられたれば、長老出で合はせ、文閑に火事の噂を問うて後、

御親父の貧乏の神をやき拂ひ惣吉事にやならんとすらん

右の惣吉家やけてより後、一段仕合なほり富貴なりしと。

○夢に卒堵婆を見ると思ひ、さめて後わづらふ事あり。博士を呼びてうらなはせたれば、「卒堵婆は木でしたる塔なるあひだ、祈禱をせられたらば、本復せん。」と祝うたり。

○江州かたたといふ所の地頭へ、毎年大晦日に浦の百姓かならず鮒を二つ宛あぐる例あり。或時一つ

あぐる。主人氣色かはり腹立するに、元日膳を出すなり、女房したゝめて持ち出で、「今年は猶もふなをりせん。」と云ふまゝ、彼の鮒のどうぼねを二つに折りて參らせけり。

○故相國駿河の御城出來たるいはひに、三百韻の連歌興行なされし時、板倉六右衛門入道正佐卷頭の發句に、

なみ木たゞ花はつぎ〳〵のさかりかな

とありければ、相國大いに御感ありて、乃ち其の懷紙をもたせのぼせ、玄旨法印へ見せ參らせられしにも、稱美斜ならず候ひし。されば右の發句ことばの縁にたがはず、御子孫繁榮のめでたさ、もつとも祝ひすまいた。

醒睡笑 終

此の草紙は、未だ櫻のみどりこの、年は十にあまり給ふといふ春、御父周防守殿の前にて、わらはおをを如何にも神妙に聞きおはします風情、栴檀は二葉よりの感に堪へて候ひきに、又かこひにて若衆たてられ給うたるしをらしきいふばかりなければ、生ひたたせたまひて日出たう榮ゑ、すゑはんえいあるべきいみじきものもゆかしく見及び、此の書をかきて贈り侍るなり。

前誓願

寛永五年三月十七日　　　　安樂老

板倉侍從殿

參

元和元年之頃、安楽庵咄之所望致し承り候へば、別而おもしろく存するに付いて、御書き集め候うて草子にいたしたまはり候やうにと申し候處、一兩年過ぎ、八册に調へ給はり候。紛失可レ仕かと存じ奥に書き付け置くなり。

寛永五年三月十七日

重宗

昨日は今日の物語

作者未詳

きのふはけふの物語 上

一昔天下を治め給ふ人の御内に、傍若無人なる者共集まりて、禁中に參りてちんをとらふと云ひて、槍の石突を以て御門を叩く、御局ふた〳〵と立ち出で給ひて申さるゝは、「之れは内裏様と申して、容易く下々の參る所にてはないぞ、急ぎ何方へも參れ。」と仰せければ、「此の家をちんに取らせぬといふ理窟の有らば、亭主出でて屹度事由を申せ。」と云うた。

一織田信長公時々興に團子食召す。よく參るとて、京童ども上樣團子と申す。之れを一段と粗忽なる御小姓、御前近き所にて此の由を相談しければ、之れを聞き給ひて御腹立なされ、既に御勘氣を蒙らんとせしが、一けい道三御登城あり、「御尤もの儀にては候へども、世上に左様に申す事、却つて御譽れにて御座候。其の故は、昔天子粽を御覽じて、一段面白きよし敕諚なれば、夫れよりして京童共内裏粽と今に申し習はし候。」と申し上げられ候へば、信長御機嫌直り、右の御小姓御赦免なさるゝなり。總じて上々の御側にこれ有る人は、萬事に氣遣ひを致さう事ぢや。

一或人瓢簞から駒の出でたる繪を見て、「是れは何としたるいはれぞ。」と人に問ふ、「夫れさへ御存じな

けるに、「ふくにおよばぬ。」と語る程に、些か面白けもあつてこそ。

一 山寺法師、さる御稚兒に惚れて、色々縁を以て申しければ、さすが御形に似たる御心やさしくましまして、ある夜忍びにて御越しなさるゝ、「これに有り難き御事。」とて秘きけれども、貧僧にて何にても御振舞を致さう樣もない。せめて之れなりとも御慰みにとて、たいたう米の飯を出しければ、御稚兒御覧じて、「是れに美しき色や。」と仰せられた。其の時供まかり出て申すやうは、「たまさかの御越し、誠に身に餘りて忝く存じて、せめての御馳走にとて、米を染めさせ申したる。」といへば、御稚兒聞召して、「實にもさう見えてたいたう飯のやうな。」と仰せられた。

一 物事に心を著くる人の申されしは、「當代御法度なきとて、竹の子を根曳きにして、澤山にもて扱ふ事惜しき事ぢや。二三年目には見事の竹に成るに。」と申されければ、皆々聞きて、「これは仰せの如く惜しき事ぢや。」といはれける。又側なる人の申されしは、「總じて松茸などを、わざと喰ぶるはいらざる事ぢや。二三十年置いたらば、大木に成らうものを。」と申された。

一 田舍より始めて京へ上りたる人、三條あたりに宿を取り、東山へ見物に出づるとて、下人を呼び寄せ、「京は家造り同じやうにて見知りにくいぞ。なにゝても印をして能く覺えよ。」と言ひつくる。「心得申したる。」とうけがうて、扨方々見物して歸り、洗足取れとて先へ使ひければ、案の如く忘れて

此所彼所を尋ね歩く。さればこそと思ひ、「印。」はと問へば、「いな事ぢや、見えぬ。」と云ふ。「何を印にしたるぞ。」と問ふ。「いや確かに門柱に唾液にて書付をして置きたる。」と云ふ。「沙汰のかぎり、其れが役に立つ物か。」とて、さんざんに叱れば、「未だ印が有る。」と云ふほどに、「何ぞ。」と問へば、「屋根に鳶が止りて居たが、これも居らぬよ。」

一 ふたんくほふいんとて、近衞の大公御懇の長老あり、總じて長老分はあしうちにて參りけれども、此の長老連歌ずきにて切々御雲居にまかり出でらるゝ故、其の日ばかり「供饗を御免。」と仰せ出さるゝ。長老御言葉に甘えて、「しやうしう下さるゝ様に。」と御望みあれば、大公御笑ひなされ取り敢へず、「供饗をば時々なりとすわれかしふだんくほうは言はれざりけり。」

一 昔近衞殿を何の仔細やらん秀吉公の御時、薩摩のばうの津へ御流しなさるゝ。配所は鹿兒島へ移され給ふ其の時、

大臣の車にはあらであはれにものするかこ島になふばうの津

一 萬の道に心をかくる人は、何れの事も優れずと見えたり。何にも能くさし出づる紹巴の會に交はり連歌するとて、

さやけきは有明がたの月ならじ

と云ふ句に、

　山ほとゝぎすごそひがほなる

とつけた。紹巴の曰く、「一段面白い名誉小鼓に手を打つ所おや」と賞められた。

一定家の卿の弟りうかくばう、殊の外ふべんにて年の暮にて伊賀の卿へ詠みてつかはされける。

　りうかくが師走も果てのそらいんお年打越さん石ひとつたゞ

　　返し

　さだいへが力のほどを見せんとて石をふたつに割りてこそやれ

此の返歌に米一俵添へてつかはされけるとぞ聞えし。

一秀句を好きたる人あり。珍らしき秀句を思ひ出せば、色々珍物を整へ振舞をして、其の座にて云ひ出して興ずる人あり。ある時下人を白朮ほりにやり、其の内に人を呼び集めて様々振舞を拵へて出し、此の者罷り帰りたらば、座敷へ罷り出で、いかにも高々と「白朮ほりて参りたる由申せ。」と呉々言ひ付けて、「何様来らば、そちにおけらといふべし。」と心嬉しく待つ所へ、案の如く時分を計りて罷り出で、「おけら掘りて参りたる。」と云へば、「そちにびやくじゆつ。」というた。

一法華宗のいつちとしようれつと法問をして、勝ち負けはしらずさんぐ\に摑み合うて睾丸を締めら

れて難儀千萬するを見て、

法華宗其のしようれつは知らねども寧をむしるはいつち迷惑

一或人俄にすきに行くとて「中剃を致したきが誰か彼か。」とひしめく所へ檀那坊主來る。「よき所へ御越し候。憚り千萬なる申し事にて候へども、俄にすきに參り候が中剃を賴み申したい。」とて、髮を洗ひて剃らする。此の坊主常に出家の髮ばかり剃り習ひ、いつもの如くに思ひ片小鬢をすらすらと剃り落す。此の人肝を潰し、「是れは／＼。」といへども叶はず、「扨々言語道斷迷惑ぢや。」とて腹を立つる。坊主赤面して、「怪我と申しながら面目も御座ない。御免なされよ、總じてせがれより山寺に住み、つねに坊主の頭を剃りつけ、たま／＼男の髮なれば、沐浴仕ると許り存じたる。」と云へば、「それは愈調伏か。」とて腹を立つれども、片小鬢剃られて今更直らばこそ。「此の分にては濟まい、不肖ながら法體仕らう。」と云へば、坊主聞きて「一段の御事さらば戒名を付け申さう。」と云はれた。

一世には危い事が多い。「先づ脚氣腫の炮烙賣、高荷を著けたる馬の岸の細道傳ふ、盲目の下り坂、姑と聟の中のよき、寡男の嫁と睦まじきも若後家の繁き寺參り、此の分。」と云へば粗忽なる坊主の聞きて、「まことと是れは何れも危いものぢや、我々の寺へも若き後家の參らるゝがあぶ。」というて、

聽て口をかゝへた。

一或人寺へ参りて、長老様と云へば、「留守ぢや。」と申す。「はる〴〵参りたるに御残り多い事。」とて、暫く休らひけるに、折節筍時分なれば、藪を覗き廻れば、長老様は見事なる鴈の毛をむしりて御座あり。そろりと側へより御見舞に参りたる由申せば、長老仰天して、「さて〳〵此の鳥のむく毛を枕に入れ候へば痛風の薬ぢやと申す程に、斯様に致すが、何としても手慣れぬ事はならぬ物ぢや。」と仰せらるゝ。旦那聞きて、「それは易い事で御座ある、是れへ下されよ。」とて、くる〳〵と引き毟り毛をば押し寄せて、「御枕に御入れ候へ。」とて、「此の鳥の身、此方にいらざる物よ。」とて、聽て取りて歸り賞翫す。

一或比丘尼御所知行所へ御遊山に御越しなさるゝ。百姓共御馳走に石風呂を焚き入れ申す。新ざうす御出でなされ、「ちとてうづのこを参らせよ。」と仰せらるゝ。山家の事にててうづのこといふ物を知らず、俄に寄合をして誰彼といへども、「知らぬ。」と云ふ。「兎角遅なはりては大事。」といふ中にも年寄りたる者の申すやう、「屹度思ひ出したる事の候。」とて罷り出で申すやう、「てうづのこは先年の一らんに皆退轉仕りたる。」と申す。新ざうす聞召し、「さてもうつゝない事や。」と仰せければ、「其のうつゝないも一度に失せた。」と云うた。

一くわうけんゐん殿の御時、或上人一段と御意に入り給ひ、毎日御出仕なさるゝ、御懇の餘りに落墮と仰せ出さるゝ。上人聞きたまひて、「御諚は忝う候へども、五ッ六ッより出家の姿に身をなし、今五十に餘りて上人號まで授かり今更何事にらくだ仕り候べき」と、返す／＼御斟酌あれば、皆皆尤もと感じ給ふ。將軍是れを聞召し、「尤もの事にて候へども心安く話し申し度しとの事にて候。」と再三御意あれば、「此の上は力及ばず。」とて御らくだし給ふ。兎角たゞ佛なる佛にもだゝぬ計らひにして、外聞をも振り捨て、「さて／＼御恥かしう候。さりながら是れ程なる御懇の序に望みの有る。」よし申し上げられければ、「何事にても御叶へあらうずる。」と仰せらるゝ。「其の儀にて御座あらば子にて候者をも御目見え申させたき。」とて三十許りなる男を連れて出で、「是れは愚僧が十六袈裟掛の時に設けた子にて候。」と申し上げられければ、上様を始め御前の人々、御簾も几帳も私語き大笑ひあつて呆れ給ふ。

一或稚兒藥師の所へ、お乳の人子を連れて行き、「きのふの御藥にて一段とおなか心もよく候、今日の御藥をも其の加減になされ下され候へ。」と云ふ。藥師聞きて、「それは目出たい事、さらば又たはにてあるらせう。」とて藥箱を取り出す。何としてかおらいのまへを出された。此の藥師是れに見とれて持ちたる匙を置き忘れて、ひたもの尋ねらるゝを見て、「何を御尋ねなさるゝ。」と云へば、「今ま

であつたおらいの物が見えぬ。」と云はれた。

一さる寺の蓮池にて、編笠深々と著て月夜に鰌を踏む。あんじやうのえんさい、是れを見付けて、「何者なれば此の殺生禁断の所にて狼藉を致す、弓矢八幡やるまいぞ」とて白木の弓に矢をはげ切りに咎むる。此の者赤面して、「是れはしやうじんのそくしんぢや、少しも御構ひ有るまいぞ」と云ふ。よく〳〵見ればはうぢやうのとうざうすぢや。

一関白秀次の御時、ぬしやのせいあみ所へ御前衆二三人すきに申し入れ、茶すぎて後しよゐんにてゆる〳〵と御遊びなさるゝに、日たけて昼時分にせいあみ、重箱を持ちて罷り出で、「各様ゆる〳〵と御話し満足仕り候、ちと夜食を料理致し候参らぬか。」とて蓋を明けたるを見れば砂糖餅ぢや。

一物事にこはしたてなる人、れき〳〵夜話の座敷にて、夜中の鐘を聞きて、「皆々御立ちなされよ、遠寺の晩鐘が聴ゆるに。」と云うた。

一或人の所へ西国へ下るとて、暇乞ひに立ち寄りければ、「さて〳〵御大儀や、さて自分に御下りか、但し彼方からのまかなひか。」と云ふ。「いや伏見まで迎へ舟が参りたる。」と云へば、「それはしやりきと申しかた〴〵よき御仕合ぢや、艫にきてうなされよさらば〳〵。」

一或夜秀吉公、夜食に蕎麦かきを御好みなされ御相伴衆へも下されける。折ふし長をかけたし御講釋

たぎるゝ、卽ち蕎麥かきをすゐりふたを開けて取り敢へず、
薄墨に作りし眉のそば顏をよく／＼見ればみかどなりけり

一或長老の談義に、一けん卒塔婆しうり三あくどうかきやうざうりふしやひつしやう安樂國、此のもんを繰返し／＼說き給ふ。此のもんの心は一度卒塔婆を見る者は永く三あく道を遁るゝと說かれたり。或人是れを聽問して不審するは、「いかに上人聞しめせ、我等は念佛を申さずとも佛にならうと存ずる。其の故は一度卒堵婆を見る者は、永く三あく道を離るゝ。況んやざうりふせば安樂國に生まるゝと候へば、此の年までは幾程の卒堵婆を立てもし見もしたる事數を知らず、今も千萬も見て參りたる。」といへば、上人聞き給ひて、「其の義にあらず、はゞ一間の卒堵婆の事にて候、それを見つくるまでは念佛を申し給へ。」と述べられた。

一或人子を寺へあげ「經を讀め學問に精を入れよ。」と敎訓すれども一ゑん承引せぬ。「くせ事。」とて、叱れば、上人聞しめして、「經を讀まぬは苦しうもないぞ、よき法華宗の下地ぢや、跡を讓らうぞ、じやうがこはうてきの藥ぢや。」

一ひんはつに、西國の僧東國の僧に問うて曰く、「上野下つけあつて中つけなきは如何に。」「筑前筑後あつて筑中なきが如し。」

「或人以ての外に病ひ、存命不定の時女房を近づけて、「此の分ならば二三日中に死なんと思ふなり。あら御名殘惜しく候、又いかなる人にか添ひ給はんと思へば、是れのみ心に懸る。」といふ。女房聞きて、「それは御心安く思召せ、自然の事もあらば髮剃り後生一遍にして御跡を弔ひ申し候べし。」と云ふ。男聞きて、「それは滿足にて候、さりながら髮は剃りても又生えるものなれば、同じくは我等が呼吸の通ふ内に、其文字の鼻を削いで見せ給へ、さあらば跡式家藏其の外財寶一つも殘さず參らすべし。」といふ。「それは易き事。」とて自ら鼻を削いで見せける。「此の上は心に懸る事もなし。」とて書置などを細々として女房に渡し、死するを待つばかりなるが、此の二三日ほど食が進み、心も輕くなるなどいふ内に、軈て本復して、「さて／＼目出たい事。」とてひしめく所に、男つく／＼と思へば此の鼻そげどのを朝夕見る事は、何としてもなるまじきと思ひ、或時女を近づけて申しけるは、「近頃面目なき事にて候へども、其方の鼻を見れば命生きのびて恨めしく候。兎角申しかね候へども、其文字は隱居して給はれ。」と云ふ。女房聞きて、「是れは思ひもよらぬ事を仰せ候、生まれつきたる鼻なりとも、此の年月の情は有るべし。まして其方の仕業なれば、さ程見苦しく思さば、わ殿出でよ。」とて不興千萬なり。男聞きて、「尤も理非に紛ふことはなく候へども、只今までの情に、是非とも隱居して給はれ。」と云へば、女腹に据ゑかねて所の守護へ申し上げければ、軈て兩方召し出

し御尋ねなさるゝ。其の時男罷り出て申しけるは、「最前女ども申し上げ候通り、一々詐りこれなく候。然れども我等若きものの事にて候へば、あの如く成るものを朝夕見候はん事も迷惑に存じ候、先の隠居仕り候やうにとの申分にて候間、仰せ付けられて下され候へ。」と申せば、奉行聞き給ひて暫く分別して、「彼の男の鼻を削げ。」と申し付けらるゝ。此の男肝を潰し逃げんとするを捕へて、すがんと削いで彼の女に取らせて、「此の上はたがひの恨みも有るまじきぞ。」とて追ひ立てられ、すごすごと歸りけるが、男心に思ふやう、「いや〳〵此の風態にては、よき女をまうくる事は成るまじき。」と思ひ、たゞもとのめに媒人なしとて、鼻削二人手を引きて歸り、それより五百八十年まで。

一 物を書くには句のきり様が先ぢや、下京に目薬師有り、垂れ布に、「かねこめくすりや。」と有り、三いろまで賣物の有りとて、人々買ひに來れども、此の内一色もなし、迷惑して後には、かねこ目薬屋と書くなり。

一 三井寺の法印雨中の御徒然にとて、二度物思ふと云ふ題を出して、「是れにて一首づゝ詠み給へ。」とて、二人の稚兒に仰せければ、

春は花秋は紅葉を散らさじと年に二たび物思ふなり　大ちご

朝飯と又々飯にはつれじと日々に二度物をこそ思へ　小ちご

一稚兒法師よりあひ、田樂を炙り、何にても三つはねたる事を云ひて賞翫せんと云ひて、うんりんゐんの、なんばんじんの、ぜんきんひんの、しんぜんふんなど云ひて一串づゝ取られけるに、小稚兒、「こんけんたん。」とて二ツ參る。是れはと云へば、「一ツはこけたをしうくにて食ふ。」と仰せらる。新發意は一ツもえ喰はず、早殘り少なになる。思ひ出したる體にて、「ちやんうんすん。」と云ひ樣に、十ばかりひつたくりて軈て賞翫いたす。

一又或夜田樂をして、秀句にて賞翫するに、大稚兒、清盛の長刀なんぞ。嚴島。發意智、佛の頭なぞ〳〵。みくしこ小稚兒、いしや本尊なぞなぞ。藥師。

一平大將入道殿の御馬の尾に、一夜の間に鼠が巣をかけ子を生みたると平家物語にある。昔は斯樣の不思議がさま〴〵有つたと聞きたるが、今時は左樣の事は無きと云ふ。或人聞きて、「是れさのみ不思議にてもない。」「なぜに。」「我等倅の時の頭の髮に、何としやうやくしても、何時によらず蟲の子の五合や三合は有つた程に。」

一或知識の御内に久しく召使はれし六十餘りの沙彌、或時長老樣へ御訴訟申しけるは、「我等ひさしく召使はれ、此の年に成り候へども遂に御示しをも受けず、餘りに淺ましき御事にて候。恐れなが

ら一そく御授け候へかし。」と申す。長老聞しめして、「それはやさしき事此方へ。」と召し上げられて生死一大事のわを授け給ふ。「忝き。」とて御前を罷り立ちけるが、暫くして罷り出で、「はや〳〵参じ申して候、生死一大事は味噌にて御座候。味噌が悪ければしうしの舌では喰はれぬ。」と申した。長老聞しめして、「さて〳〵是れ程のあたりは達磨もなるまい。」

一「今日は親の日ぢや。」とて、寺へ参りければ、御坊の御留主と見えて、玄関が開かぬとて庫裏の口からめんざうへすつと行く。折節、坊主は鮑の腸あへ料理をなさるゝが、檀那に見付けられ隠すべきやうはなし。前に屹と構へて、「さて〳〵奇特の御参りにて候、内々今日は御親父様の命日にて候程に、定めて御参りなされうと存じ、酒は用意仕り候へども、精進の肴にては酒が飲まれぬと、つねづね御申し候程にえんどうをなして是れを調へたる。」と申さるゝ。檀那聞きて、「それは御心に掛けられ過分には候へども、仰せらるゝ如く今日は親の日にて候、御免なされよ。」と云へば、其の時狼狽へて、「誠に失念致し候さて〳〵不調法や、是れを取つて子持に喰はせよおかまみだ。」といはれた。

一或寺に鮑料理の最中へ檀那ふと来る。坊主仰天して、「此の貝は目の薬にて候と申すが、眼頭にさし候かまた眼尻にさし候か。」と云ふ。檀那聞きて憎き事と思ひ、「それは目により候、我等見てさして参らせん。」とて仰向に寝させて、酢に塩の入りたる腸を大蛤に一杯程入れければ、「眼の玉がぬく

る。」とて五體を投げてをめきける。其の間に賞翫して、「我等が眼には目からさしたるがふさうたる。」とて皆仕舞うた。

一 又或坊主の錫の鉢にて鱠を齏ふる所へ、人の來れば、ふと立ちて隱さんとすれども、間近くなれば頭に戴き、「まづ此の風態に頭巾女共に縫はするが何と御座らう。」と云はれた。

一 田舍より京へ始めて上りたる人、先づ誓願寺へ參り御前なる額を見て、「扨々見事なる手跡や、書いたり誓の字願の字の筆勢に、多分手跡が石摺りであらう。」と賞めた。

一 吾妻の人の物語に、「信濃國園原山にて旅人草鞋を踏み切り、木賊にて造りて穿きければ、ひた物に足の裏が磨かれて、軈て足首ばかりになりたる。」と云ふ。筑紫の人是れを聞きて、「尤もさこそあらめ、九州にても安樂寺の建盞の天目を夜毎に鼠がきしりけるが、天目は堅し鼠の齒がひたものおちびて、此の程は尾ばかりに成りたる。」というた。

一 「昨日よし大夫勸進能に、墨田川をして芝居中を泣かせた、さりとては名人ぢや。」といふ。或人之れを聞き、翌日早々見物に、先づせんざいふ翁の舞も過ぎて、三番叟のなかばに此の人潸々と泣く。あたりなる人々、「是れは何事ぞ。」と云へば、「あの墨田川が憐れにて物も言はれぬ。」

一 お稚兒樣おごとが不便さに、「はれがましき時は何も彼も借物ぢや、隱せられぬものはしぢばかりぢ

や、あら笑止やこと、三位が申せば稚兒聞召し「誠に口惜しや、しなら俺がではないけなよ。」「それはなぜに。」「人が見ては馬の物ぢや〳〵とばかり云ふ程に。」

一吉野にての事なるに、或若き者山中にて、山の芋を掘りけるが、深く根へ入りければ、うつ臥しになり、腰より上を穴の中へ入れ、尻をおつ立てて掘る。折節、山伏の通りけるが、此の者の尻を見て日本一の事と思ひ、無理に寄せて通る。此の男迷惑してやう〳〵穴より起き上る所へ、友達の來りければ「扨々不思議や、唯今我が尻からあれなる山伏が出て行くが何としたる事で、跡損じたるか見てくれよ。」と云へば、友達さしうつぶきて暫く見て「いや〳〵又小山伏が出ると見えて、奥に法螺の貝の音がするぞ。」

一天龍寺のさくげん和尚へ信長公御尋ね候は「何とて世間に大稚兒を鈍に、小稚兒をりこんに云ひならはし候。小稚兒の成上りは大稚兒よ、小さき時さへりこんならば、成人に從ひ愈りこんに成るべきがいかゞ、不審ぢや。」と仰せられければ、さくげん聞き給ひて「尤もの御不審にて候。我等も左樣に存じ候、然しながら小稚兒の間は、未だ里心の御座候故、武家の利發身に附き添うて御座候が、寺じみて後には長そでのなまぬるき立振舞を見慣れて、自ら心おとり申すかと存ずる。」と仰せければ、信長殊の外御機嫌にて「一段尤もの御返答や。」と思召しければ、皆人々感ぜられける。

「ともはやしとは不思議ぢや、供ばかりにてよいに、はやしが異な物ぢや。」と云へば、或人の草履取が申しけるは、「それこそ聞えて候へ、主の召さるゝ時はやというてはやすほどに。」

一　或人久しき連れに離れて愁歎する所へ、さる知識御越しなされて申されけるは、「御歎きは尤もなれども、逢ふは別れのもとにて候。思召しきり給ひて不便に思召さば、御跡々を懇に御弔ひ候へ。」と教訓あれば、「御意の如く私も左樣に存じ候へども、あの娘共がはたちにも足らずして、彼の樣なる有樣を見れば、煩惱が起つて身の置所が御座ない。」と申された。

一　或人さん〴〵に病ひ醫者を招び脈を取らせければ、「是れは大事の御病ひにて候、一義を御控へなくば御藥は進ずる事成るまじき。」と申されければ、「其の段は御氣遣ひなされそ、早二三年も其のかたは御座ない。」と云ふ。「それは奇特の御事ぢや、さらば先づ藥を一服參らせう、此の加減を見て重ねて仰せられ候へ。」と云ふ。「御序に女共の脈をもおそれ申せ。」とて呼び出す。醫師「此の脈は懷妊の心持御座ある、是れは苦しうもおりないか、亭主の其の氣色にてあの樣なれば、中々療治が成るまい。」と申さるゝ。亭主迷惑して、「それは我らが子にては御座あるまい。」と云はれた。

一　昔下京に道無といふ者あり、よき娘を持つ。「良き所へ肝を煎らう。」といへば、「いか程の身上ぞ。」と云ふ。「四國の主にて有つたが、今程は浪人ぢや。」と云ふ。道無聞いて殊の外腹を立て、「扨々輕忽

や、十石取る人にさへやらぬものを。」とて中々聞きも入れなんだ。

一或者聟入をするとて、先々案内いたさに女房を先へやりける。舅満足してさま〴〵の用意をする。扨娘を近づけて申しけるは、「そちのは何にても藝が有るか。」と云へば娘聞きて、「太鼓が上手ぢやが指金を持ちて習ひに来た。」と云ふ。「それは心憎い事ぢや。さらば役者を集めよ。」とて方々より夫れそれの藝者を集めた。扨聟殿お出でにて三々九度の祝言過ぎて舅申されけるは、「聟殿の太鼓承り及びて候。何か一番遊ばせ。」とて太鼓を出す。「大酒にたゞ酔ひて候へども、御所望を仕らねば慮外にて候程に致さう。」とて大肩脱ぎ片撥おつ取つて、「なむあみだ〳〵。」と六さい念佛をたゝく〳〵と出しければ、座中の人々興をさましける。

一或人若衆の御尋ねを得て、「扨も忝いことや。」とて色々の御馳走を申し、「何にても御肴は御座なけれども、御酒一ツ申さん。」とて、樣々に進め申せば、草履取の三八がふと罷り出て申しけるは、「左樣に酒は御強ひなされそ、今朝も徳利を振つて見て酒が無いとて、酒のみを參りて今に顔が赤い。」と申した。

一或貧僧が、若衆に首たけうちこうで、文の通ひは數知らず。又此の若衆にさる大名の惚れられて、若衆の方への音信に、定家卿の色紙を御手本にとて贈り給ふ。彼の貧僧是れを聞き、「我も負けじ。」

と思ひて弘法大師の心經の切をこへたり許り求め出して贈られた。又大名より刀脇差をいかにも結構に作らせて贈らるゝ。彼の坊主是れを聞きて呆れて居たりしが、思ひ出したる事有り、剃刀を取り出し、「是れ作らせてやらん。」とて、折節檀那の内に白銀細工の人有りけるを、呼びに遣はし申されければ、「此の剃刀をさる方へ音信に參らせ候が、此の儘にては見苦しく候程に、鞘など御掛け又白鞘塗などに、其方御存じの方へ誂へて給はれ。又作料の義は、檀那衆の内に賴む萬事限りの人有り、此の人死なれたらば布施など一かど御座らう程に、其の時皆々濟まし申さう程に、只片時も御急ぎ有りて給はれ。」といふ。白銀屋の太郎兵衞申しけるは、「昔より剃刀にさきなしとやらん、鞘なしとやらん申す。其の上私細工には中々仕りつけぬ物にて候程に、只思召し御止まり候へ。」と申せば、貪僧ずんと思ひ切りて、

何事も人に負けじと思へども黃金刀で手をぞ突きける

此の歌を讀みて送り驗て思ひきられた。

一次郎といふ子、寺から清書をして歸り、親共に見せければ、「さて〳〵嬉しや能き手になからう。」とて喜ぶ。母親申しけるは、「手ばかりにてもない、大人心もあると見えた。」「なぜに。」「清書の奥に、あなかしくじらうと有る程に。」

一小稚兒の御願ひ事に、「餅や饅頭にさねがあらばよからう。」と申されければ、大稚兒の申されしは、「餅も饅頭もさねの無きゆゑにほんそうすれ、さねが何の用に立ち候ぞ。」小稚兒聞きて、「それは他流ぢや、さねがあらば植ゑて花見して遊び度い。」と申された。

一粗忽なる若衆、餅を參るとて物數を心かけ、餘りふためいて喉につまる。人々笑止がりて藥を參らせしも、此の餅通らず、何かといふ内に天下一のまじなひてを呼びければ、聽てまじなうて其の儘おりげもとを一つ叩きければ、りうごの如くなる餅三間餘り先へ飛んで出る。皆人々是れを見て、「扨も目出たい事ぢや。此のまじなひおと遲くば危かつたが、さりとて天下一程ある。」といへば、若衆聞き給ひて、「さのみ名人にてはない、あつたら物を内へ入る樣にしてこそ天下一でもない。」と云はれた。

一或若衆念者と寢て曉方に身を唾液にて濡らし、「扨々夢を見て汗をかいた。」と云はれた、念者聞きて、「これ何夢ぞ。」と云へば、「己等方へ其方から大きなるのしつけを拵へ、是れをさせと仰せらるゝ、を否と云うて返せば、又無理に捕へて帶にささせらるゝ、何卒して是れを返したいと思うて、彼方へ押し此方へ押し草臥れた。」と語られた。念者聞きて、「總じて春の夢はあはぬ物ぢや、氣遣ひなされそ。」と云はれた。

一尾張の名古屋へ、西國の大名衆御見舞の時、さまざまの御馳走あり。「下々の物をば町中より仕出しに仕れ。」とて獻立を書きて出さるゝ。人參汁鱠鮒燒物鮭さし又鯉ひきてうり、さまざま有り。庖丁人共是れを見て、「何れも安き拵へにて候へども、二百人三百人の汁に人參を買ひ集め候て、十斤二十斤にては中々足り申すまじきが、此の儀御詫言あれかし。」と申しければ、御奉行衆へ町中の年寄共參り訴訟申しければ、奉行衆笑ひ給ひて、「尤も訴訟聞きわけたり大根汁にて許す。」と仰せられた。

一いかにも顏色衰へ瘦々としたる人、武田法眼へ參り、「ちと氣根の落つる御藥を申し受け度い。」といふ。法眼是れを聞き給ひて、「扨々御見かけとは違うたる御望みかな。」と不思議なる由仰せられければ、此の瘦男「いやいや某が用にては御座ない、女共に與へ候。」と申した。

一中古の事にや、信濃國にて或人主人を申し入れんとて、尾張の熱田へ鮮鯛を調へに遣はしけるが、此の使の者鯛といふ物を知らず、やうやう熱田に着きて魚屋町に行き、いかにも高々と「鯛買を鯛買を」と呼ばはる。魚屋是れを聞きて「是れ程多き鯛を買はずして鯛買をくといふは、定めて遠國の者よ。」と心得、鯛と名づけていかにも大きなるにしを賣る。此の者急ぎ歸る程に殿の御出でなさるゝ朝參りつく。亭主之れを見て、「是れは鯛にてはないぞ、まとひきと云ふ物ぢや。」と云うて使の者をさんざんに叱る。庖丁人是れを見て、「これは鯛にてもなし又まとひきにてもない。是れはおに

のきこぶしと云ふ物ぢや。」と云ふ。又或侍の申さるゝは、「沙汰の限り皆々は是れを御存じなきかこれはへふぐりと云ふ物ぢや。」と云ふ。まとひきのおにのきこぶしのへふぐりなどと云ひて、色々詮議區々する處へ、殿の御出である。亭主御迎ひに罷り出て、今日の御越し忝き由申し上ぐる。また御馳走のために、尾張へ最前より鯛を調へに遣はして候が、鯛にては御座ないかと存ずる。いろいろの名を付けたる由申し上ぐる。「さらばそれを見よう。」と仰せられければ聽て御目にかくる。主人御覽じて、「皆々は遠國に住み候とて是れ程の魚の名を知らぬか。是れはまとひきにてもなし、おにのきこぶしにてもなし、又へふぐりにてもない、是れはにかはときと云ふ物ぢや。」と申された。

一或人俄に醫師を心がけ、醫書を集めそろそろ讀みて、合點の行かぬところに付紙を付ける。女房是れを見て、「其の紙はなぜに付けさせらるゝ。」と問へば、男聞きて、「是れは不審紙とて合點の行かぬ所に付けて、後に師匠に問ふためにつける、それに由りて不審紙と云ふ。」女房聞きて、「中々の事おや、おれも不審が有る。」とて紙を少し引き裂きて、唾を付けて男の鼻の先にひたと付くる。「是れは何事の不審ぞ、我等が鼻に不審は有るまい。」と云ふ。女房聞きて、「其の事ぢや、世上に申しならはし候男の鼻の大きなるは、必ず彼の物が大きなると云ふが、其方の鼻は大きなれども彼の奴は小さい、之れが不審ぢや。」男聞いて、「尤もぢや。又我等も不審が有る。」とて、女房の頰さきに紙をひた

と付ける。「是れは何の不審ぞ。」と云ふ。男聞きて、「世上に云ひ習はし候は、頬先の赤きものは必ず〇〇が臭いと云ふか、其方の頬は白けれど〇〇が臭い。」と云うた

一或者火事に遇ひけるを見舞に行きければ、其の女房申しけるは、「何にても惜しき物は御座ないが、古今萬葉伊勢物語、是れの三いろを燒きたるが何よりも惜しき。」と云うたる由を、友達の所にて語り出し、「扨々優しき事かな。左程なる身上にてもなかつたが、さだめて古よき人の娘か、又は名ある人の書かれた物共にてあらう。」と、此の女房を殊の外に賞めければ、是れの友達の女房つくづくと聞きて、我も家を燒きて賞められんとて、過ちの由にて其の夜家に火を付け悉く燒く。扨其日知人諸親類集まりて、「扨々苦々しき事かな。」と云ひければ、此の女房云ひけるは、「何にても別に惜しきと思ふ物にはないが、こきねぶどこもいせすりばち是の三色が惜しい事ぢや。」とて泣いた。

一或比丘尼寄り會ひて、色々の物語をして遊ばれたる所へ、わやくなる者行きて、戸の節穴より私物をいかにも見事に仕立ててによつと出す。主人の比丘尼是れを見付けて、「やれやれこゝへ何やら知らぬ蟲奴が出たぞ、そこな金火箸を燒いておこさい、取りてすてう。」と云ふ。金火箸の來る音を聞きて、彼の物を退きければ、比丘尼狼狽へて、「今まで此所に有つた〇〇が無い。」と云はれた。

一又或比丘尼二人連れで通りけるが、道端に馬奴が彼の物をおやして居りけるを、比丘尼共尻目にか

けてさらぬ顔にて通りけるが、さきなる比丘尼耐へかね申しけるは、「今の物はさても見事や、いざあんノ\に名を付けう。」と申す。後なる兩人の比丘尼まうしけるは、「扨々能く御心がついた、先づ先達より名を付けさせられよ。」と云ふ。「さらば我等申し出した事ぢや程に付け申さうが、よからうか知らぬ。」とて、「九獻。」と付けられた。「其の謂れは。」と問へば、「酒には晝飲みても夜飲みても、飲みさへすれば勇みて面白い。其の上酒には三々九度とて獻數は定まりて九たびが本ぢや、それより上はあなたの氣根次第ぢや、是れ程良い名は有るまい。」と云うた。中なる比丘尼申しけるは、「梅干と付けう。」「其の謂れは。」と問へば、「見るたび毎につがひかるゝ。」と云ふ。後なる比丘尼は、「けぬきと付けう。」「なぜに。」と云へば、「ぬくたびに涙落つる。」と云うた。

一 或女房河へ洗濯せんとて行きけるが、何としてかない(〇〇)を大きなる蟹が挾みて、何としても放さず、女房迷惑して先づ／＼家に歸り物によりかゝりて、色青くなりて居りけるが、男他所より歸りて、「是れは過ちをしたるか又はくらんけか。」と云へば、女房聞きてありの儘に云ふ。それは未だ放さぬかとて女房の〇〇ひきあけて見れば、したゝかなる寵愛を先途と挾みて居りけるが、男種々樣樣の手當をすれども、此の蟹少しも寛げず。あたりの人の申しけるは、「穴を望みてつきたる生靈にて候程に、祈禱をさせて見よ。」と申しければ、「もつとも。」とて、あたりに山伏の有りけるを呼びに遣は

して、女の〇を擴げて祈る。此の錫杖の音に驚きてなほ〳〵縮むる。如何せんと詮議まち〳〵しけるが、山伏申すやう「私是れまで參り空しく歸り候まじ。所詮此の蟹を嚼みわりて捨てん。」とて大口開きて股ぐらへ差し入れ、嚼み付かんとしければ、片方の鋏にて山伏の頬先を確と挾みける。色々才覺すれども兩方ながら放さず。女房思ひけるは、蟹の面に尿をかけて見んとて強かにしける。山伏の顔にかゝる事偏に瀧に打たるゝ如くなり。男之れを見て「女どもの〇〇の事は嚼み切り候とも、未だよけいが有る程に苦しうも御座ないが、お山伏の顔に尿の掛りたるが、何より迷惑致いた。」と云へば、山伏聞きて「尿のかゝつたも、蟹の挾みたるも苦しうも御座ないが、御内儀さまの〇〇の臭いで鼻がもげていぬる。」と云うた。

一 或人の女房腹を再々痛がりければ、常々鍼たてを呼びてたてさせける。或時又鍼たてんとて、女房を仰向に寢させて「今日はどこらが痛う御座る。」と問ひければ「帶しより下が痛い。」といふ。「心得申す。」とて臍の下にたてんとて、そろ〳〵搜りける所へ、斑猫參りけるを鍼たて是れを見て「扨も扨も好い毛や、是れ程な毛は有るまい。」と猫を賞めければ、傍にて男聞きて、我が女房の〇〇の毛の事と思ひて鍼たてを寄せなんだ。

一 地震搖り候明日、門跡樣へ御見舞にかたことといひ、二人連れ立ちて參りけるに、すなはち御目にか

ある時、兩人の內一人申さるゝは、「扨々ゆうべは大いすんが搖りまして御座る。」といふ。今一人申すやうは、「誠に大なゆが搖りまして御きもうつぶれう。」と申す。門跡をかしく思召し御返答に、「なゆやらいすんやら世がねいすとかと思うた。」と仰せられた。

一大稚兒小稚兒富士の山に雪の有るを御覽じ、大稚兒の申さるゝは、「如何に小稚兒、是れ程なる飯はなるまいか。」と申されければ、小稚兒聞きて、「何とあらうぞ、とろゝ汁ならばねらうてみう。」と申された。

一或人申されけるは、「童を風の子と申すは何としたる事ぞ。」と不審しければ、小慧しき者申すやう、「夫婦の間の子なれば風の子といふ。」と答へた。好き返答の。

一昔嵯峨天皇のとき、無善惡といふ落書をたてた。御不審なされ、ある程の物知を寄せて御讀ませ候へども、更にこれを明かす者なし。爰に小野篁と申す者罷り出て、無善惡と讀みた。其の時御門逆鱗なさるゝは、「篁より遙か物知さへ得讀まぬ物を、此の者讀み申したるは定めて其の篁が立てつらん。」と旣に流罪に及びける時、篁申しけるは、物を知り候へば結句罪科に行はるゝ事迷惑の由申し上げければ、「物を知りたらば、さらば何にてもむつかしく讀まれぬ事を巧みて讀ませ候へ。」と物知どもに仰せ付けられければ、子の字を六つ書きて御讀ませ候へば、篁なんなく讀みけ

る程に、「扨は物知り。」と仰せられて、流罪を御許しなされた。

子子子子子子

一 或人如何にも呆氣たる若黨を他所へ使に遣り、歸りて返事を申し上げた。扨振舞に逢うたかと言はれければ、色々結構の振舞に遇ひたると申す。さて獻立をと云はれければ、さいども皆々語る。汁はと尋ね申されければ、彼の呆氣漢言ひかねて顔赤めた。何とて申さぬぞと咎め申しければ、「憚りに御座候ほどに申されぬ。」といふ。「汁に何の憚りのあるべき急ぎ申せ。」と有りければ、其の時ふるひふるひ、「蕨の御汁にて御座候。」と申す。主人聞きて、「其の汁に何の憚りの有るぞ。」と笑はれければ、其の時彼の者申すやう、「わはわれこそまいれ、らは殿さまの、びはかみさまへ差合ひ申す。」というた。さても細かに氣を付けたり。（或云寒川入道筆記にあり。）

一 關白秀次公の御前の衆に、曾呂利と申す者餘りよく話を仕る故、或時話に詰り候やうにとおぼし召して、朝の寢起に未だ顔をも洗はず、目をすりすり取りみだしたる體にて有りけるに、「何かはなし一ッ。」と仰せられければ、俄につまりて、夢物語を語り出しけるは、「さても今宵夢を見て御座候が、或所へ行き候へば道に黄金が夥しく落ちて御座候程に、扨も嬉しき事かなと存じ、思ふ存分に拾ひ申して歸る所へ、落したる主來りて、取り返さんと追ひかけ候程に、汗水になりて逃げ候へども

既に追付きさうに御座候時、餘り迷惑致しはこを垂れて御座候が、目覺めて彼の金を搜り見れども金は跡形も無くてはこは強か垂れて有つた。」と申しあげた。

一或大富限者、祈禱の爲に連歌をせんとて、連歌師を集め申された。又其の向ひ隣にいかにもすきたる連歌の上手あり、それも其の日の連衆に加はりた。さて宗匠申されけるは、「御祈禱の事に御座候程に亭主より發句御出し候へ。」と申されければ、其の時亭主あさくもり又しこであとて人だます發句を出した。座中興を催して呆れられた。其の時彼の向ひの連歌師笑止がりて句を直しければ、亭主腹を立て、「我が句を直さうよりも先づ己が家の屋根を葺け。」と言はれた。いかい腹立の。

一或夫婦の者、〇〇〇〇〇〇たび／＼に女房にいふ樣は、「そなたが物はさがりて下につきて〇〇くい。」といひけるを、隣の者立聞にさい／＼聞きた。或時彼の男他所へ行きて留守の時、彼の隣の立聞きしたる男、留守の女房の所へ行きて申しけるは、「われ／＼はちと他所へ參り候ほど跡を頼む。」と申しければ、「何事に何方へ行き給ふぞ。」と問ひければ、「其の事ぢや他所に牛の〇〇がさがりたる程に上げてくれよといふ程に、あげに行く。」と云ふ。彼の下につきたる女房なりあに喜び申すやうは、「人のはなほり申すまいか。」と云ふ。「牛さへなほし候ほどに人のは猶々易く候。」と申しければ、「恥かしき申し事にて候へども、我等が物がさがり候とて、之れのが常々嫌はれ候程に上げて給はり候へ。」と

と申しければ、「心得候」とて〇〇〇〇〇〇〇〇強かに喰はせた、扨も賢い奴の。

一或有徳者〇〇が食でしいと思へども、子供二人ありければならぬ候ほどに、何とかして子供を使に遣り候はんと分別して申すやうは、「此の食わを弟兄して中に擔うて川へ行きて洗へ」と申しければ、「心得候。」とて洗ひに行く。食てしみたる最中に子供二人ながら歸りた。親共うろたへて申すやう、「何とて食わをば洗ひ候はで歸りたるぞ。」と叱りければ、兄息子申しけるは、「他所にも貴〇〇が流行るやら、川にかなわ洗ひがつかへて洗はれぬ程に歸りた。」といふた。

一或女房十ばかりなる子を抱いて寢た。さて子が寐入りたるかと思うて男の所へ行きた。男云ふやうは、「龜千代が目が明かうが何として來た。」と云ひければ、「そつと拔けて來た。」といふ。さて〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇龜千代側へ寄りければ、母親申しけるは、「我は何とて來た。」と云ひければ、龜千代申しけるは、「吾もそつとぬけて來た。」と云うた。

一或分限者娘を二人持ちけるが、姉は十八妹は十五になる。此の家の祈禱坊主比叡の山の座主にて、常々祈禱に呼びけるが、或時父親申されけるは、「我は何にても思ふ事は無きが、息子を持たぬが何より迷惑にて候が、若し御坊樣の御祈禱の力にて、あの娘共を男の子に御成し候事はなるまいか。」と申されければ、座主申されけるは、「それは易き事にて候。御經にも變成男子の法とて御座候、御

娘子二人ながら、下の方まで給はれ候へ、何れなりともきようのかたを、男になし申さん」と申されければ、夫婦ながら斜ならず喜び娘共を遣はしけるに、扨ざす姉妹の娘をべつ／＼に置き、思ふ程たくりてあき候時、「何と祈り候ても男には成り申さず候まゝ、其方の因果と思しめせ」とて歸された。其の時親共娘に云ふやうは、「何と祈られたか、又さもなかりけるか。」と申されければ、妹申すやうは、「御坊様もいろ／＼精を出し、夜晝しゞゐうゐ給へども生えつかなんだ」と云ひければ、姉娘申すやうは、「生えつかぬも道理ぢや、逆に植ゑられた程に」と云ふた

一 吉田殿の山に松茸が生え候へども、松茸の有る由他所へ聞え候へば、むづかしきとて深く隠密なされ、ことさらなかなか長岡幽齋へは少し遣はさるゝとて、「之れは我等が山に生へ候へども、世上へは隠密致し候へども、其方へは進じ申候、他所へ御隠し候へ」とて遣はされければ、幽齋狂歌を遊ばされ、

松茸のおふるを隠す吉田殿わたくし物と人やいふらん

一 秀忠公より禁中樣御作事の時、國々の大名共奉土進りの植木に、面桶おびたゞしく掛けて置きたるを柳原殿御覧じて、

見わたせば柳櫻にごきかけて都は春の乞食なりけり

一關東の事なるに、今井殿と云ふ人の娘を、春日殿へ嫁にとられしが、如何なる事か有りけん、聽てわづか日送り落されし事覺束なし、此の時市川肥前守、
末遂げてとても今井の娘子に一夜の宿も春日どんなり

一織田信長殿、內裏樣を殊の外大切に思召し、村井しゆんちやうを奉行に付けられて、禁中悉く御修理なされたる。」是れを呆凝たる者の申す樣は、「內裏樣の御念者は村井殿ぢや。」「なぜに。」「今日も內裏樣のめしりをしにゆかせらるゝとて、日に〳〵御出で有る程にさうかと思うた。」

一今ほど世間に手かゞみが流行る、色々さま〴〵の古筆を蒐めて奔走する、中にも近衞殿の御手跡程見事なるは有るまいと沙汰する。又無筆なるもの申すやう、「それ程なる能き御手を何としておよくひつとは申さぬぞ。」と云うた。

一或出家五六歳なる捨子を拾ひて養ひ育て、七つ八つより法華經其の外の讀物共を精を入れ敎へられ候へども、一ゑん覺えず、剰へ師匠の申さるゝ事を承引せず、「言語道斷憎い事や、己めは五つ六つの時より拾ひ、養育して今やう〳〵人に成し、きやう陀羅尼を敎へければ、跡もなう忘れて惡行ばかりに身を窶して、我等に拗ねまはる事いはれなし。やう〳〵杖柱にもなる時分に左樣に振舞ひ候沙汰の限りなり。愚僧が今にても死したらば、跡式を誰か望む者もあるかれ。」とて、思ふ儘に叱

らるゝ。其の時彼のわやく者申しけるは、「御坊の仰せられ分、一として謂れなし。そのつれの無理はかり仰せ候とも御意に從ふ事あるまい、此の申分御氣にあたり候はば、所の代官へ成りとも御あけ候へ、理非を聞きわくる人の御座らう。」とていよ〳〵拗ねまはる。坊主腹を据ゑかねて奉行所に罷り出で、右の段々申されければ、やがて彼のわやく者を召し出し、「御坊の申分懇に聞きておい、其方の覺悟沙汰の限りぞ、以來に老僧次第にして孝行肝要ぞ。」と仰せ渡され候へば、新發意申すやう、「御意にては候へども、我等尤もと存ずる儀無之候。先づ養ひ育て人になしたる抔とて、依怙な事を申され候、某馬の子か牛の子にても候を、人にも御成し候はば恩とも存ずべけれども、總別始めから人の子にて候程に、是れ以て恩とも存ぜぬ、又木竹の類にてもなきに杖にせう柱にせうと申され、何より以て迷惑に候。經陀羅尼など敎へたると申され候へども、一字も覺え申さねば、皆返したる同然、是れ以て左のみ恩にも御座ない。又坊主死なれて後我等に寺を讓らうとて恩がましく申され候へども、是れも一日も世に居られ候時に、讓られ候はば少し滿足にて御座らうか、死なれて後は我等より外に弟子もなし、子供は皆死に申すなり、沙汰に及ばず某にて候、何ぞ師匠の道理が御座あるか、御分別なされて下されよ。」と申しければ、奉行衆も呆れて返答なし。

一或寺に名譽の大黑の有る由を聞き及びたる檀那參りて、一目見申したいと所望する。坊主聞きて、

「中々我々は大黒は持ち候はぬ。」といふ。檀那申す樣、「能く存じて候我等の儀は餘の人とは變り候是非共。」と云へば、「扨も能く御存じや、誠に數年の檀那苦しからぬ事。」とて呼び出すを見たれば、年頃二十許りなる言語道斷の好き女房を呼び出す。檀那肝を潰し、「此の事では御座ない、正眞のお大黒を見申し度い。」と云へば、「扨々能く御存じ候。構へて人に沙汰なきやうに賴み入る、内々方丈樣より欲しき由色々仰せ候故、深う隱し申せども御存じの上からは程に御目にかける。」とて、「これへなう、ちとおでやれ。」と呼び出すを見れば、年頃十六か十七ばかりの、未だ脇の下のふくろびたが、眉目形はいはう所もない美人なり。此の樣なる料簡違ひは有るまい、去りながら方丈樣の御欲しがりも尤もぢや。

一或人舞を一段と自慢して、月夜に一條の辻にて舞うた。好き舞かと思ひ立ち寄りて聞きけるが、一人宛皆歸る。八九十許りなる姥一人殘りてさめ〲と泣く。あたりなる者申すやう、「あれ程拙劣の舞が何程哀れにて泣くぞ。」とて笑ひければ、「いや哀れにては泣かぬ、我等が草履を貸せと申された程に貸してあれば、尻に敷きけるが、此の舞が果てたらば歸りたい。」と申す。

一さる寺へ參りけるに、眉目好き禿の有るを見て、「扨々美しき若衆かな、何方から。」とて小僧に問へば、「あれは大坂浪人の子ぢや。」と云ふ。「さやうに見えた好い子か、とてもの事に〇〇をつけて欲し

や。」と云へば、小僧聞きて、「人の目は恥かしい、此中長老様も其の御望み許りぢや。」と云うた。

一お稚兒様久々御里に御遊びなさるゝが、法印様より御見舞として三位に御文持たせて遣はさるゝ。其の御文の言葉は色々樣々の思ひぶりの御文章の内に、「そもじ様は久々御里に御逗留にて、此の頃はおにやけにかつゑ申す。」と繰り返し〳〵遊ばしける。此の文お稚兒の脇明けの袖から落ちけるを稚兒の母是れを拾うて見て、右の文言不審して父親に問へば是れも知らず。「稚兒に問うて、何にても持たせ進じ申せ。」と云ふ。扨稚兒に問ひければ稚兒迷惑して、「其の事にて候、山の習ひにて酒をおにやけと申し候。」と云ふ。「さらば易き事、酒を參らせう。」とて、諸白の樽十ばかり山へのぼせらるゝに、三位の歸るとて暇乞ひに出づれば、「やれ〳〵御辛勞や、ちとおにやけを參れ。」とてひたものの酒を強ひらるゝ。「一ぷん下戸にて候。」と云へば、「それは殘り多い事や、さらばおにやけのみを參れ。」と申された。

一或人十二三なる子を寵愛して、常に謠を教へけるが、「折角習へ、軈て十月十三日に成るぞ、百はたご喰ひに連れて行かうぞ、能く覺えて其の時うたへ。」と云ふ。程なく御命講なりとて寺より案内ある。いつもの如く必ずとふれらるゝ。扨彼の子を呼び出し、「明日は寺へ連れて參るぞ、謠を忘れな構へて好き時分に父が睨まうぞ、其の時かしこまり扇を取り直し謠へ。」と懇に言ひ含むる。扨十

三日に親子連にて参り、方々の附きあひにて次第々々になほる「先づ幼い業へ」とて、情を捨てければ、息子につこと笑ひ「なう父様百はたことは此の事か」と云ふ。親達恐して蛇に睨まれければ、好き時分ぞと思ひかしこまつて「松が根の岩間を傳ふ苔莚」と高々と謡うた。

一　山寺の沙彌が、稚児様へ「恐れながら御無心が申し度い」と云ふ。稚児聞しめし、定めて一儀の望みにてあらうと「思召しやすきこと、今なりともお身次第」と申されければ、沙彌承つて「扨々、忝い事ぢや、何時にても法印様の御留主に申さう」とて云はず。或時法印下山の時分大きなる重箱を持つてまゐり「御約束の如く隠居に有る味噌を、是れに一杯御盗み候て下されい」と申した。

一　「御若衆さまは御姿と申し御心根と申し、誠に残る所も御座ない、されども餘所へ御出でなされては人の刀脇差または鼓太鼓、何にもならぬ値打ちが能くなさるゝ、是れ一ツの疵が何よりの疵ぢや、今よりはふつと御たしなみ候へ」と云ふ。若衆聞召し「扨々過分なる御意見ぢや、随分たしなみ申さう。誠に此の様なる忝き御意見は、百貫にても買はれまい」とはやくはせた。

一　山寺の僧親しき檀那に逢うて申さるゝは「此の程は久しく若衆に餓ゑ迷惑致す」と語る。檀那聞きて「尤も御道理や、何卒思案しておにやけの張形を仕り進じ申さう」と云へば、坊主満足して、「其れは何よりの御志御座らう、是非共頼み入り候、但しとてもの御事に好みがある」と申さる

る。「如何樣の御好みぞ。」と申せば、「味ならば○○の味になされて下されよ。」と云はれた。

一無道なる坊主若衆を無理に押し付け窘めて、跡を指にてひたもの○○○。「是れは何事ぞ狼藉なる事かな。」と腹を立てけれども、「是れ程味の好きは不思議ぢや、中に○○があらう。」と云うた。

一かんまつ太夫熊野を仕損じければ、

宗盛のさこそ無念に思すらんかんまつ太夫に熊野をしられた

一聚樂にて金剛太夫勸進能に芝居錢三十文づゝ取りければ、

金剛に一足三文する物を三十取るはせきだ太夫か

一若衆の御姿を見て、「扨々殘る所も御座ない。」とてしみ〴〵と賞むれば、「傍なる坊主達是れを聞き、「仰せの如く御形は天下一、おにやけはしゆがうにふぢや。」と云はれければ、又傍なる新發意の申すやうは、「しゆがうにふでも御座らぬ。」と云ふ。「なぜに。」「再々ふひやうが出る程に。」

一長岡幽齋鶴の庖丁なされ、人に御教へ候時白鷺板に乘せて出しければ、當座に、

白鷺か何ぞと人の問ひし時鶴と答へてきらまし物を

一奈良の伊勢屋と云ふ酒屋、安酒には水を入れて賣りければ、或人是れを買ひ伊勢屋の酒はさん〴〵惡しきとて狂歌を詠みける。

酒の名も所によりて變りけり伊勢屋の酒は餘所の濁酒、

伊勢屋是れを聞き返し、

よしおしと云ふは浪花の人やらんお錢を添へてよきを召されよ

一或若衆念者と寢て取り外して怪我をして、さらぬ體にて「扨々馴れ馴染の中ほどたる事は御座るまい、今の様なる怪我を致しては、腹を切りても飽かねども、馴染の為に何とも存ぜぬ」と仰せければ、念者承り「扨々忝い、左様に思召し候へば生々世々忘れ難い」と、申しも果てぬに又せられた。念者、鼻をふさぎて「重ね〲過分すぎた」といふた。

一又さる若衆念者と寢て是れも取り外された。何とも此の臭ひを去るべきやう無ければ物語に「山王祭を御覧じて候か。」「いや未だ見申さぬ」と云ふ「さらば拍子をふみて聞かせ申さう。」とて「大宮の囃しはのんのや〲山王祭るすこ〲すこや。」此の拍子でいきを皆々ふるはれた。「さても面白きことかな、承り及びたるより好き拍子ぢや、さりながら眞似さへ是れ程臭いに、眞のは邊へ寄られまい。」と云はれた。

一高野聖若衆に惚れて、いろ〲口說きけれども、是れの若衆つれなうて遂に同心なければ、聖重ねて申しけるは「毎年一期に心づけを致さうか其れも否か。」

一長老樣へ六太夫殿の御方、御見舞に座禪豆を持ちて御越しある。新發意長老樣へ申すやうは、「六太夫殿御内儀の之れを持ちて御參り候。」と云うて、指にて物を作り御目にかくる。長老御覽じて、「扨々憎い奴ぢや。人の見る所にて左樣なる事をする物か、言語道斷な事ぢや。向後は弟子とも思はぬ、師匠ともな思ひそ早々罷り立てよ。」といふ隨に、降魔の利劍を取つて追ひはらかし給へば、檀那衆集まりて、「笑止なる事ぢや、何事にて御氣に違うたぞ。」と新發意に問へば、「些か御腹の立つ程の事にて御座らぬ、是れをしたとて叱られた。」とて又彼の手元をして見するに、檀那是れを見て「其れを爲たらば、中々申すとも聞かせられまい。」とて頓著せなんだ。

一或人他國より女房を呼びて久しく添ひけるが、心ならず此の女房を送るとて、「飽き飽かれたる中にても無ければ、恨みも更に有るまじく候。さりながら緣盡きず候はば又々ぞ申し入れ候べけれ。」とて、家の寶物を取り出し、「何にても欲しき物を取りて歸り候へ。」と申しければ、女房聞きて、「仰せの如く飽かれて出で候とも、何恨みの候べし。まして故ある事なれば御斷りにも及ばず候。又寶物の内に欲しき物は無く候、我々身に代へても惜しき物の候。」と云ふ。「此の上は何なりとも御望み候へ。」とて誓文を立てて聞かせければ、女房聞きて、「是れは滿足なり、我等の欲しきものは、是れよ。」とて男の○を引き握りひたもの掛りける。「之れは。」と云へど聞かず、○○つめにつめられて

是非に及ばず、それより七百八十年を經たり。

一さく屋の與三郎が御方様へ申す様は、「恐れながら申したき事が御座ある、叶へて下されば申さう。」と云ふ。御方聞かれて、「あゝきやうこつな事を云はしむ、人が聞いたらばよい物か。」と云はれければ、與三郎聞きて、「我等も申しかけて御同心なくば、是非に及ばず候。堪忍は罷りならぬ。」と云ふ。お方聞きて、「夫れ程に思はば何時なりとも。」と申しければ、「さらば只今申さう。」といふ。「それは餘り急な。」と云へば、「いや早人の無い時申さう。」とて、耳元へ口を寄せ囁きて、「朝夕のお飯喰ひ足らぬ。ちと押し付けて下されよ。」と申した。

一お稚兒様へ申す、「法印様は御留守か。」「いや持佛堂にかきして御座る。」「かきとは何事ぞ。」「ひだるさにかんともきんともはねられてこそ。」

一或稚兒存じの外に餅を聞召す。にはかにはん熱して迷惑なさるゝ、「ちと内の寛ぐやうに藥を參らせう。」と云ひければ、「藥や湯が口へ入る程ならば、まだ一口も餅をこそ喰はうずれ。」

一延暦寺の小法師、御齋過ぎて山へ木の葉搔きに行くとて、御稚兒様の晝食を膳棚に上げ置き、其の下に小法師が晝飯も置きて、お山より歸りて見るに、お稚兒様の御膳もあがり我が飯も無し。不思議なる事と思ひお稚兒様に問へば、「誠におしるかと思うて、あこが飯に打掛けて喰うた。」

一叡山の小法師ばら山へ行きざまに、「お稚兒樣此所に御ひるが御座る、九ツを打つたらば聞召せ。」と申し置きて、程なく山より歸りけるに、漸う四ツ時分に早參りたる跡あり。如何にと問へば、「早九ツ打ちたれば」と仰せらるゝ。「只今四ツを打ちたるに。」と申せば、「さればこそ今朝五ツと云ふ、四ツと九ツにてはなきか。」と申された。「扨々よき算用や。」とて呆れもせなんだ。

一西洞院うゐらう所に鞠を蹴る。何とかしてかゝりより外へ、ついと越え大道へ落つる。折節遠國の侍人を數多連れて通られけるが、此の人の道具持が「心得たる。」と云ふ儘に、槍の石突にてづとんと云はせた。しうがこれを見て、「心がけはよけれども、人の飼鳥と見えて鳥屋までしてあるに殺すまいものを。」と云はれた。

一或若衆以ての外に御病ひにて今を限りと見ゆる。念者歎き悲しむ體誠に譬へんかたなし。兎角此の分ならば程も有るまじきとて葬禮用意する。念者申すやう、「來世まで御供申さう。」とて棺を大きに拵へた。扨程なく若衆果て給ふ。念者の親類共色々意見すれども、「中々是れ程人も知らぬ先こそ、今更我等取り離し候とも、御叱り候ても滿足なれ。」とて聞きも入れず。扨我と棺へ入り鳥邊野へ送り引導も過ぎて火をかけければ、棺の中より高聲に申すやう、「先づ蓋を開けてたべ、申したき事がある、火も消して給はれ、思ひ切りたる事なれば、命は露ちりとも思はぬが煙くさい、先づ小便して

から心靜かに遺言せう」と云うた。

一さる寺にて、巡禮と鉢開と寢物語するを聞きければ、巡禮申すやう「扨々如何なる因果にて、我等は斯樣に淺ましき事や、せめて天下を三日知りたい、さあらば國々の辻堂の板敷を高々と造らせ、緣の下にてその方達とゆる〳〵と話したい。」と云ふ。鉢開聞きて「貴所はたれ程鈍な故に諸國を巡る事ぢや。其の身に應じたる願ひをしたるがよい、唯我等は京の國を一日なりとも知りたい。」「なぜに。」「町中の犬共を皆打ち殺させて、ゆる〳〵と鉢を開きたい。」と云うた。

一さる女郎衆長老樣申さるゝは、「罪業深き身にて後生一大事をも知らず、月よ花よと遊び暮し候事、餘り空恐ろしく御ちと御示し候て下され候へ。」と申されければ、長老聞き給ひて、「夫れは奇特なる御望みにて候、大畧申し入れ候べし。抑女人成佛の法と申すは、彌陀の御誓願にしく事なし。何を以て斯く云ふなれば、先づ女は罪深くして浮みがたし。」とおほせければ、耐へかねてぐつ〳〵と笑ひ給へば、長老腹を立て給ひて、「愚僧が齒の脫けてせつないの惡しきは、年寄の習ひぢやに、それは御女郎衆の氣のやりやうが惡い。」と申された。

一昔公方樣持佛堂へ御參りなされけるに、折ふし阿彌陀の名號落ちさせ給ふを、しゆん阿彌と云ふ堂坊罷り立ちて、かけ奉れば又軈て落ち給ふ。其の時御詠歌、

梶原としゆん阿彌陀ぶが一度のかけそれは功名これは名號

一「御若衆樣弓矢八幡命がつれなうて、斯樣に物を思ひ候、露許りの御情あれ。」と、色々に言葉を盡し申しければ、若衆聞召し、「我も岩木ならねば御心中おもひ遣り候へども、兎角念者がきつうて心に任せず候。左程に思召し候はば長き契りと成り申すべし。いざや一所に身を投げて、同じ蓮の縁となるべき」由仰せければ、「扨々忝い事かな、さらば御供申さう。」とて川のほとりへ行きて、若衆仰せけるは、「いざ手を取り組みて死出三途を越さん。」と仰せければ、「我等が事は何と果て候ても苦しからず候、まづ／＼先へ御急ぎ候へ。御なり候樣をも見屆け參らせて、追ひ付き申すべし。」と深く契約申せば、「其の儀ならば六道の辻にて待ち申さん。」とて傷はしや未だ二八ばかりと見え給ひけるが、花の樣なる御姿を川の藻屑となし給ふ。念者心靜かに十念して一首つらねける。

南無といふ聲の内より身を投げて阿彌陀は水の底にこそあれ

とは詠みたれども、「思へばいらぬ事ぢや、生き殘りて後世を弔ひ申してこそ眞實の志にてあれ。」とて、我と我が身に意見して一文字に驅け戻る。彼の若衆水練の上手にて、水の底を潛り傍へ上り、先にて行き逢ふ。此の男若衆の幽靈ぞと思ひ、膽を潰し刎刀をぬいてはつきと構へ、「如何に亡靈たしかにきけ、後を弔うてとらすべし、某を恨みて不足すな。」と言ひ捨てて、後をも見ずに

逃げた。

一津の國の中島に大百姓の比丘尼あり、毎年中津川の堤が切るゝ故に、鄰郷の百姓共寄つて築く。比丘尼の田の前を築く。家例として人足共の晝食の汁をば此の尼が執り行ふ。又或年堤の普請するに、尼何と思うてやらん汁を出さず、せつ／＼其の時の代官へ申し上げければ軈て召し出し、「毎年の事を何とて當年に怠り申すぞ。」と申さるれば、「其の御事にて候、何事も我々が前を築かせらるゝ故に、汁を出し候が、當年は我等が前よりも下の方切れ申し候て、鄰のけの上をつかせらるゝに、何とて傍から汁を出し候はんや、思召し分けられ候へ。」と申しければ上下大笑ひになつた。

一或出家思ひ寄らず傾城町を通れば、軈て衣の袖を曳かれて、是非に及ばず祝言を勤めて、出でさまに布施に取りたる物を、「これしきなれども。」と云へば、傾城是れを見て、「いや／＼今日は我等の親の日にて候程に、それまでも御座るまい。」とて返しければ、出家聞きて、「それは何よりの御志有り難う候、さあらば袈裟を掛けて致さうものを。」と云はれた。

一或長老御煩ひ以ての外にて今を限りと見ゆる。弟子も檀那も集まりて、「扨も笑止なる御事や、此の段にては何も毒斷もいらぬ。」そこで酒と杯を枕元に置き、「これ／＼目を開きて御覽じ候へ、いつもの御好きの物。」と言へば、目をあきて見て、「○○かと思うた。」と云はれた。

一或人美しきかつしきに惚れて歌を詠みて贈らるゝ、

昔をのみ戀ひこがれつる慰みに門田に出でて根芹をぞ摘む

此の歌を得てしかん何にて返しても如何と思召せども、歌の道は覺束なしとて、さる人に談合し給へば、「御邊はしれんくをなされ候程に歌もなり申さう、作意は同じ心にて御座候。」と申さるゝ。扨は別の事もないと思召して御返歌に、

我しらへふなあぶりききあしもおもへどのはたけでごばうひきぬく

君が蚤に我虱とつけられ、戀ひ焦れつるに鮒あぶりききと、此の如く對をなされし事、談合人の無念か。

一近江の横渡にて諸國の者ども船に乗り、いろ／＼の物語をする中に、若き者の申しけるは、「誠や女の前の臭きものが、香の物を漬けたるは、必ず臭うて喰はれぬと云ふは誠か」と云へば、船中の者共申しけるは、「おんでもない事、證據こそあれ臭いが定ぢや。」とめん／＼に云へば、船頭是れを聞きて舟を漕ぎ戻し、我が家の裏へ著けて女房を呼び出し、「今朝の瓜を先づ漬けたか」と云へば、「早漬けたる。」と云ふ。船頭艫櫂を捨てて、「南無三寶瓜を捨てた。」と云ふ。船中の者共さてこそ臭かるらんと笑ひき。

一肥前神埼の郷に、南無の二字を額に打たれたる比丘尼寺あり、則ち二字寺といふ。此の尼共常に麻の絲を撚りて賣るに、人、あたりに道明寺といふ寺あり、此の坊主共絲を買ひに行く體にて、再々もりとしたとて聽て門に、

二字寺も今は六字に成りにけり道明寺よりしげく入るれば

一或人酒を人の方へ贈るとて、遠來の由さま〴〵云ひて、少しの樽をつかひければ、文の返事、

あまの酒ふりさけ振ればかすかなる三笠も飲まばやがてつきなん

一或出家弟子連れて齋に行き、歸るさに傾城町を通るとて、新發意が申しけるは、「好き序にて御座有り、ちと御寄り候へ。」と勸むれば、師匠聞きて、「中々沙汰に及ばぬ事、我等がやうなる尊き知識などが、何とてむさとしたる所へ寄るものぞ、殊に今日は布施も取らぬに」と申された。

一或人絲柳を祕藏して植ゑ置く。これを案内なしに揚りて行く。亭主とがめければ、「柳は綠おや。」といふ一句につまり、無念なる事と思ひ、鼻柱をくはせて血がたる。「これは何事ぞ。」「はなはくれなゐよ。」とてもつて參つた。

一糀賣さんがく寺のたつちうをうりまゐり、門外へ出るを、門番の法師が引き留めて、「かうじ門を出でず。」と云へば、「僧は叩く月下の門。」とてぼうときせた。

一或人子に教訓するやうは、「汝母が生み落してより此の方、荒き風にもあてじとし、濡れたる所に我は寐て、乾きたる所に吾殿を寐させて十九や二十になし、高き山深き海とも思ふに親の言ふ事を承引せず、其のごとくがいに任せて振舞ふ曲事おや」とて叱りければ、息子聞きて、「仰せる段々一ツも某御尤もと存ぜぬ、先づ養育なされ候とて恩に御著せ候へども、總じて人の親の子を育つる事珍しからず、我も聽て子を持ち候はば、人が頼まずとも育て申さう、是れ以て家なみにて候。其の上我等を是非とも出世の爲にても候はず、各面白づくの事を以て罷り出で候間、是れ又何の御恩とも存ぜず、さりながら此の度左樣に思召し候はば、元の道へ罷り歸り候べし。」とて出り

○○○かゝつた。

一或女房若き男に離れ歎きの餘りに寺へまゐり、「最期に仰せられしは、誠に戀しき時は香花もいらぬぞ、妾が前を手向けよ、と宣ひしものを」とて、○○○○○、「南無幽靈出離生死頓生菩提、これこれ好く／＼受け給へ」と廻向するを、長老影より御覽じて、「有り難き御心ざしにて候、此方へ御入り候へ」とてめんだうへ引き入れ給ふ。「是れは何事をなさるゝ」と云へば、「佛の御跡は出家の懷中韮菜なし」と申されければ是非に及ばず、暫くして出でさまに長老の申さるゝには、「御遺言にまかせられ、來月よりは逮夜から御參りず、御布施にも今のやうに

一御かつしき樣へ何がな進上申したいと思へども、刀脇差はいらざる御身なり、又扇などはいかゞしからず、いろ／＼に案じまはいて、兎角正月の御慰みにたまふり／＼、白銀黄金の丸打にして參らせる。是れをかしき御覽じて、一段美しけれども、重うていらぬ物ぢや。」とて捨てさせられた。「それは惜しや何處へ。」と云へば「あんさうの眞中へ。」

一てい庵の談義に、「今日は彼岸も果てゝ候、此の程奇特に女郎衆も御參りなされた、然らば彌陀如來の御誓願に女人成佛の沙汰を申さう、但し懇に申せば談義が長うなる、又あらまし申せばなと耳遠き事なし、何とせうぞ方々の望み次第に致さう。」と仰せければ、談義の事なれば返じする人もなし。てい庵の曰く、「女郎衆は長いが好きか短いが良きか。」と仰せければ、女郎衆一度に笑ひ給ふ。長老屹と睨みつけて「方々の氣の違ひやうがそでない。」と申された。

一西の丘の左衞門は次郎が息子、牛の〇〇をしたとて所の者共寄り合ひて、「斯樣なる者を其の儘置けば七里枯るゝと申し候、急ぎ此の在所を追ひ出すべき。」由詮議する、[illegible]此の由を聞き罷り出て申す樣、「何とも迷惑仕り候、是れは人の申しなしで候はん。中々牛のはおつうて、しらるゝ事では御座ない。」と云ふ。「扨は親奴もしたる。」とて手ながら追ひ拂うた。

一おごう樣お乳の人を召して、「なう乳母聞かしめ、殿のしゞの後に何やらん有る、あれは何ぞ。」と仰

せければ、「あれは御供の衆ぢや。」と云ふ。「御供ならばちつと呼び入れて振舞ひたい。」と仰せければ、「否御呼び候ても内へは参らぬ。」と云へば、「謔を言ふ、内へよふうで振舞うたらば、母様に云うて恩を擡へようぞ。」と言はれた。

一　田舎衆久しく在京して本國へ下るとて、山崎に宿を取り、「扨々主命とて此の程京に逗留の間に、珍らしき事も無く罷り下り候事無念に存じ候。せめて茲許にて一遊びせう。」と云ひ出す。「尤もよからう。」とて、軈て亭主を頼めば、「今程法度にて左樣の者は無く候、さりながら○○○などを才覺致さう。」と云ふ。「それこそ一段の望みなれ、急ぎ頼み入る。」「心得申す。」とて、立ちて暫くして歸り、「さる人の後家此の程尼に成り候、之れは如何候はん。」と云ふ。「夫れこそ日本一の事なれ。」と云ふ。「さ候はば忍びやかに火を消して、籤取に成され。」一人づゝ先づ髪を探りて見れば尼にて有り、「扨は一番に出したるよ。」と思ひければ、二番目の者も先づ髪を撫でて、扨も無念や我取り當つたと思ひけるに、三番目四番目も皆其の分にて、夜の明けぬ先に歸さねばならぬとて、早々返し、翌日過分の禮して、扨宿を出でて道にて懺悔するに、皆古比丘尼の齒の抜けたるばかりにて、大笑ひしてはてた。

一　或人子を儲けて、「扨々目出たい事ぢや、殊に好い子や、髪が黒い色が白いの。」と喜ぶ所へ、鄰の

妙齋腰を屈めて來て、「やれ〳〵目出たい事や。」と上らうとしても緣が高さに上りかね、「是れのはこえんが無うてあがられでこそ。」というた。

一或出家傾城町を通る、長老の袖に取り付く。「是れは何事ぞ、愚僧は是れ五ッや六ッより佛の體に身をなして、女人の手から物をも取りかはさぬに放し給へ。」と荒けなく申されける。傾城聞きて、「御尤もにて候、さりながら無理なる事は申すまい、先づ御出家は若衆を用ゐ給ふ由、聞き及びて候、我等もおにやけを御用に立ち申すべし。」と云ふ。坊主聞きて、「其れは耳寄りに御座候、布施は幾程ぞ。」と問へば、「其の事にて候。表向は我々も好きの道にて候へば如何樣にも御意次第にて候が、搦手は無理に嗜み申す故ちと高直に御座候。」と云ふ。坊主の曰く、「御聽じ候如く貧僧と申し老體と云ひ、搦手の難所不案内にては中々適ひ申すまじ、唯大手にて一槍參らう。」とて聽て物せられた。

一「其方の女房を人が盜むを得知らぬか、扠々擬漢ぢや、餘所へ行く體にて隱れて見付け打ち殺せ。」といろ〳〵言ひ含むる。「心得たる。」とて二階に隱れて待つ所へ、案の如く、○○來りさま〴〵嬈形の餘りに扠申す樣、「眞實思へば○○物ぢやが、其文字は我等を左程思召さぬ。」と云ふ。男の曰く、「一命を掛けて此の如く參るに御疑ひなされ候、今なりとも○○○。」とて顏を差し寄せけるが、餘りし○○○○○○○。女房好く覺えて、「今のは○ぢや。」と云ふ。「否○ぢや。」と云ふ。詮議區々す

るた、二階より節穴から覗き能く〳〵見て、「何方の贔屓にてもなか今のは○ちや〳〵。」と云うた。

一或者右の如く○○來り、樣々癡形の餘りに○○○○○○○○。さらばとて○○○○り其の○をば除けて別の○○○。彼の癡漢是れを見て、「女共ぬかるな○にぬきが有るぞ。」と云うた。

一山家より始めて聟の來るとて、色々さま〴〵の振舞をする。後段に切麥を出しければ、山家にてつひに見たる事もなし。一段と味の面白き物ぞと思ひ、酌を取る女に、「何と云ふ物ぞ。」と問へば、我が名の事と思ひ、「小絲と申す。」と云へば、よく〳〵覺えて後日に禮文をやりけるとて、「先度は始めて參りいろ〳〵の御待遇、殊に小絲の味の忘れ難く候、慣れ〳〵しき申し事にて候へども、此方へちと給はり候はば、愈滿足たるべく候。」と書きて遣はしければ、舅之れを見て、「言語道斷我が祕藏の物を盜みながら、癡漢にするか。」とて、聽て娘を取り返した。

一或男好き女房をまうけて自慢するを、わやくなる者の云ひけるは、「貴所の內儀はかたの如く勝れたるが玉に疵ぢや。」と云ふ。男聞きて腹を立て、「何が疵ぞ。」と云へば、「其の事ぢや、女の目にはすゝをはれと昔から言ひ傳へたるに、其方の女房は目の細きが一ッの疵ぢや、我等が女ならば日本一の目元になさうもの。」と云へば、「それは何としてなるぞ。」と問へば、彼のわやく者の云ふ樣は、「先づ眼尻を剃刀にて切り擴げて、瞼をば鋏み切つて取り、南蕃膏藥をつくれば、一日二日の間にすきと癒

る。」と云へば、「さらば其の膏藥を申し受けう。」とて、貰うて歸り、女房をとらへて瞼を切り、彼の膏藥を付けて、三日過ぎて見れば、ひたものに爛れて頬先まで爛れた。

一 或人の〇〇〇〇〇〇、じゃばかりなる息子、稍もすれば來て覗きけるを、〇むつかしく思うて鬼の面を掛けて〇〇。何時もの惡童者是れを見て門へ走り出で、友達を呼び集めて、「鬼め〇〇〇〇を見せう。」とて皆連れて來た。

一 紹巴所へ九州より連歌しふ心の人上洛する。或時紹巴へ申すやう、「國許への外聞にて候程、三條西殿へ御禮申し上げ度き。」由を云ひければ、「易き事。」とて、聽て同道して行かれけるが、道にて紹巴申さるゝは、「御公卿衆は、物事に御念入れ根問ひをなさるゝぞ、貴所の宿は三條にて有る體に、左樣の氣遣ひ肝要。」と申されければ、「誠に御心づけ忝い、其の所は任せ置かれよ。」と申す。其の御對面にて御一杯下され、樣々御懇にて、「向後は上洛の折ふしは待ち入る。」などと仰せられ、扨案の如く、「茲許にては宿は。」と御尋ねなさるゝ。彼の人何と心得てか、「三條の下。」と申す。「三條の下は。」と仰せければ又、「四條の上。」と申す。「四條の上とは。」と仰せければ、其の時彼の人狼狽へて、「三條の西のつらの汚き家に居參らする。」と申し上げられた。歸るさに紹巴に叱られて、「謂はれざる御心づけにて候。」と却つて恨みた。

一上京に平林と云ふ人あり、此の人の所へ田舎より文をことづかりけるが、此の平林といふ名を忘れて人に讀ませければ、「たひらりん。」と讀む。其の樣なる名にてはないとて、又餘の人に見せければ「是れはひらりん殿。」と讀みける。是れでもないとて又さる者に見すれば、「一八十ぼく〳〵。」と讀む。此の內は外れじとて、後には此の文を笹の葉に結び付けて羯鼓を腰に付けて、「たひらりんかひらりんか、一八十にぼく〳〵ひやうりや〳〵。」と囃し事をして、聽て尋ねあてた。

一或男朝起きて帶を解きながら、わたくし物を出して火にあたる。五ッばかりの子傍へ寄りければ、彼のわたくし物を隱す。子は是れを何ぞと思ひ、「父の何やらん隱いて見しやらぬ、見たい〳〵。」とて切りに泣く。親聞きて、「おのれをこねだした、こね棒よ。」と云へば、母聞きて、「朝泣すれば一日泣くに、一こねこねて見せてさしませ。」と云うた。

一或人の所へ朋輩一兩人連れ立ちて話しに行く。亭主出合ひて話し、振舞をして出す。膳半ばに客人申さるゝは、「火の端に何を燒かれるか、惡しきかざがする。」と云ふ。亭主聞きて人を呼び、「火の端に何ぞ有るか見よ、なにやら惡い香がするぞ。」と云ひ付ければ、此の者內所へ行きて、火の邊りを能く〳〵見れども左樣の物は無し。さて座敷へ歸り出て三ッ指突きて申しけるは、「火の端を能く見て御座れども何も御座らぬ、御方樣の火にあたりて御座ること」と申した。

一或人餘所へ使者を遣はしけるが、此の人罷り歸り、夫婦御座る所にて御返事を細々と申し上ぐる、主人の申さるゝは、「一杯は出なんだか、振舞はなかつたか。」と申されければ、「御ふるまひこそ御座あつた。」と云ふ。「獻立は何であつた。」と云ふ。「先づ御汁はうつで御座あつた。」と云ふ。「うつとは何の事ぞ。」と云へば、「御うへ樣の御前では申し憎い。」と云ふ。「苦しからぬ申せ。」と云へば、「らの御汁で御座あつた。」と云ふ。直にうつらと云ひ度い事だや、

一或侍馬に乘りて川を渉りけるが、冬の事にや有りけん先に渉る若黨共申しけるは、「扨もつめたい事ぢや、○○○が梅干になるぞ。」と云ふ。主是れを聞きて、「へれ／＼な言ふそつがひかるゝ。」と云はれた。それより河原へあがり行きければ、錢が一文落ちて有りけるを、馬より飛んで降りて是れを拾ひて見れば、柿の蔕にて有り、内の者共に恥かしく思ひ、「何時も斯樣の物をば取つて捨てよ、馬が驚くに。」とて捨てられた。

一或長老町を通られけるに、わやくなる女房走り出で、衣の裳に取りつきさめ／＼と泣く。長老御覽じて、「是れは何事ぞ。」と云ふ。女房申す樣、「扨々御情ない事や、我々に飯米をも御充行なく、さもなくば塵をなりとも結びて御暇とて給はらば、顏に汁の有る時にあひに有りつき候はんに、打捨てて置かせらるゝ事數々恨み深く候。」と誠しく云ひて泣く。長老元より夢にも知らぬ事なれば、色々

陳じけれども放さず、見物の者ども申しけるは、「是れは長老樣のが無理ぢや。」と云へば、愈女勝に乘り放さず、「兎角爰にて水掛合ひに申したりともすむまい。」とて、長老を引き立てて所の奉行へ行き、先づ女より申し上げて扨長老申さるゝは、「某は御覽候如く出家の事左樣の儀努々御座ない、其の上私はかつしきの時らやくを病ひ、皆々落ちて漸う株が一寸程御座候。」と申さるゝ。女申しけるは、「其の一寸程の株にて爲せらるゝ。」と云ひければ、奉行聞き給ひて、「所詮御坊の物を見ん。」と有りければ、「恥を隱せば理が聞えぬ。」とて女も能く見よとて出されしを見れば、八寸ばかりなるを見せられた、長老の才覺よかつた。

一或鹽賣寺の前を賣りけるに、卽ち呼び入れて、先づ鹽をば買はずして、「扨々其方は鹽などを賣りさうな人にてはない、見所が有る。」と賞むれば、鹽賣申す樣、「扨々好い目や、其所なをしきを一枚下されい。」とて鹽を三升ばかり差し出す。「是れは。」と云へば、「今日はをぢの賴朝の日ぢや。」

一或若衆のしつけを欲しくと思ひ、或夜念者と寢て云ふ樣は、「其方の腹の上に物を書かうが讀ませられいや。」と云ひて、のしと書きければけや悟りて、「嗚呼こそばい〳〵。」とて、つけまでねんもなう書かせなんだ。

一或者久々添ひたる女房を邊に嫌がり、何卒して諍ひ出して追ひ出さんと巧みけれども、此の女房男

に少しも抗ふことなし。或時男の申しけるは、「近比申しかね候へども、其方を見れば胸が悪い、合點ゆくにて去んでたもれ。」と云ふ。女房聞きて、「是非に及ばぬ、左程おぼし召さば歸らう。」とて、古嫁入の時に著たる衣裳を取り出して、さる儘に髪に油を付け、齒を黒め出立ちければ、男熟と見て、元の○○○○の姿有り、何卒して去なせまいと思へども、一度云ひ出したる事なれば、留むるに及ばず、折節去ぬる道に川の有りければ、此の男川の端まで送り、我が舟に乗せて向ひの岸に著きければ、女房船より上りて、「さらば〳〵。」と云うて去ぬる。男是れを聞きて、「船賃を出せ。」といふ。女房聞きて、「其方と我等が間にて、舟賃には及ぶまい。」と云へば、「其れは夫婦の時の事、最早暇を出してからは他人ぢや程に、舟賃がすまずば去なせまい戻れ。」とて連れて歸り、五百八十年添うた。

一或者成人の子を三人持つ。或時母の後の腰に灸を弟の三郎にすゑさせけるが、三郎母の腰元をほとほとと叩きて、「此のあなたがおゆかしい。」と云ふ。父親聞きて三郎を睨み、散々に叱りければ、中息子の次郎が云ふ様、「夫れは父の悋氣ぢや。」と云ふ。兄の太郎之れを聞きて、「夫れは次郎が云ふが聞えぬぞ。」「なぜに。」「父の爲には女房ぢや程に。」

一八十ばかりなる婆市に立ちけるが、又或好き若衆も同じく市に立つ。此の若衆婆を目も放さず、彼

方此方へ廻りて能く見る。此の婆思ふ樣、我に惚れられたと見えた、一度靡かうと思うて、「如何にお若衆さま、我等に御用が有らば仰せられい、何事なりとも叶へ申さう。」と云ふ。此の若衆申さるるは、「何も用はおりないが、我等は瓦師の息子おやが、其方の顏がはらの本に好いと思うて見る。」と云ふ。婆聞きて、「あの役に立たず奴が。」と云うた。

一又さる寺へ參りければ、長老ふためいて出づるとて、衣の裾にからまけの大きなるが引掛けて出でて、隱す事はならず敗亡して、「扨々之れを愚僧が喰ぶるかと思召さん事、返す〳〵無念に候、是れは女共がくすりつよひにする。」と云はれた。

一小稚兒里より御歸りあつて、其の儘小座敷へ腹を抱へて入り給ふ。大稚兒笑止顏にて立ち寄り、「何と御心惡しきか。」と仰せければ、「否道にて餅を強ひられて、胸の燒くる事何とも迷惑おやる。」と仰せければ、「さて〳〵其の瓶火に逢ひたや、火元は何處やらん。」と申された。

一物忘する人下人を呼び寄せ、「明日は元日おやや、汝若水を迎へよ。」といふ〳〵、呪文とも教へける。扨早天に起きて、彼の唱へ言を忘れ案ずるを見て、暫時堪忍しけるが耐へかねて、枕を取つて打ち付くる。此の者腹を立て、「人の物思ふ所へなげきを爲せらるゝ。」と云うた。

一御稚兒樣は大上戸おやる。」と申しければ、「いやそれ程にもないが、そういてわぶさもさけなふられ

ば、飲みつかなんだ。」とぢいがいうた。

昨日は今日の物語 終

軽口露がはなし

露五郎兵衛

輕口露がはなし目錄

巻之一

第一　文盲なる人物の書付を批判する事
第二　京の何がし丹波へ聟入する事
第三　筆まめなる書付の事
第四　本國寺大門うゑ松の事
第五　茶といふことを利口に取りなほす事
第六　重言くるしからずといふ事
第七　大じんと太このいはれの事
第八　目は慾のもとでといふ事
第九　涙は人の尋ぬるたね
第十　六はらの勸進咄
第十一　老いてもわかきにまけぬ咄

第十二　推量と違つたはなし
第十三　人をけしてはまりのはやき咄
第十四　人はそだちといふ事
第十五　恥をいはひ直す咄
第十六　小僧が利口は却つてめいわく
第十七　悪性の名付親
第十八　羨ましきは食物の火事
第十九　親父がはたらき三國一
第二十　苦身も品による

巻之二

第一　伊勢講の當番
第二　蚤の式三ばん
第三　藤の丸がかうやく
第四　はなし鳥のさた

第五　蛸やくしの日參
第六　おやも閉口
第七　佛前の三ぐそく
第八　一家の内の物語
第九　疱瘡の養生
第十　道化者のあいさつ
第十一　文盲の風呂入り
第十二　慾ふかき姥
第十三　舞まひと百姓と口論
第十四　坊主魚のねがひ
第十五　きれいずき
第十六　ひけふ者の喧嘩

卷之三

第一　御靈大明神へ福を祈る事

輕口露がはなし目錄

第二　鹽打豆のはなし
第三　目くらの頓作
第四　賀茂川の大水
第五　おどけ言もときによる
第六　人より鳥がこはい
第七　百まんべん百日參り
第八　しはき坊主の若衆ぐるひ
第九　わたまし祝儀の使者
第十　とがのない盜人
第十一　魚類がしやみせん引く事
第十二　せいじんのむすめに意見
第十三　東寺の塔にてばくちうち
第十四　淨土法華の相ずまひ
第十五　兒のつまみぐひ

第十六　慮外ちがひ

卷之四

第一　始めてよばれし祇園會の客
第二　野郎の金剛念佛講
第三　人のうはさ
第四　たき物の取りちがひ
第五　うそ講の參會
第六　物のあはれは人の行末
第七　印判屋のむすこ
第八　船のしかた
第九　文盲なる者の仔細を習ふ
第十　灸おろしのさた
第十一　新佛一體の望み
第十二　同じくふしん

第十三　花見の提灯
第十四　りんきばなし
第十五　同じく講のくはだて
第十六　辻談義
第十七　順禮捨子のはなし
第十八　水瓜のせんさく

卷之五

第一　譃にもせよきびのよい事
第二　葬禮の七五三
第三　小法眼の二幅一對
第四　道頓堀にてきんちやく切の事
第五　性わる〱の坊主
第六　此の碁は手みせ禁
第七　伊勢ぬけ參り

第八　九品の淨土九々の算用
第九　常題目の地形
第十　えびす講の書狀
第十一　辯說の過ぎたる乞食
第十二　入院ぶるまひ
第十三　しらねば是非もなし江戸の島原京の島原
第十四　慾のふかき長老
第十五　後家の役義
第十六　小間物賣が覺帳
第十七　十夜の長だんぎ
第十八　江州つち山のばくらう

目錄終

輕口露がはなし　巻之一

第一　文盲なる人物の書付を批判する事

一　ずんど文盲なる田舎侍、供人少々めしつれ、京むろ町をとほり給ひ、家々のなうれんの書付を見て行きけるに、よめたる字一軒もなし。或所に戸をさし借家かし藏と書き付けしを、しばらく立ちどまり、ひそかに下人を呼び、「あれは何といふ字ぢや。」と問はれけるに、かし家かし藏ありと申す。主人うちうなづき、「尤も手はよろしからねど、いかにとしても文章がよい。」といはれた。

第二　京の何がし丹波へ聟入する事

一　京の何がし丹波のおく山より縁をむすび、程へて聟入するに、土産物には大きなる生鯛一枚、小者にもたせける。七條大宮にて道中の用意にとて、ふのやきを買ひ道すがらくうて行きけり。扨聟の家に著きければ馳走に水風呂をたき入れけり。小者も水風呂へ入るとて、懐中よりふのやき一まき落しける。山家の者共これを見て、「扨も合點のいかぬ物ぢや。」と色々評判すれども、遂に見しりたる者もなし。さらば堂の坊主と莊や殿をよびてこれを見せるに、坊主のいふは、「爰らの衆のしらぬが道

理なり。是れは天狗殿の灸の蓋ぢや。」といふ。又莊や殿に、「此の魚は何と申す物ぞ。」ととへば、莊やの申さるゝは、「是れは京祇園の小宮にも有り、えびす殿の腰にさしてゐらるゝ太刀ぢや。」というた。

第三　筆まめなる書付の事

一　ある人のかたへ、夏の頃客きたりて、索麺をふるまひけり。からしの粉をたづねるに、紙袋に書付なくて、氣のせくまゝにあれこれと搜し、漸う取り出し振舞ひ過しけり。日暮におよびむすこ外よりかへりき、親父いふやうは、「あのかみぶくろにはそれ〴〵の入りたる物を書付せよ。總じてかきつけのない物は、いそぐ時のやくに立たぬぞ。」と云ふ。「いかにも心得ました。」とて、頓て親父ねられける時、紙帳に大筆にて此の内におやぢ有りと書き付けた。

第四　本國寺大門にうゑ松の事

一　本國寺大門の南は、十年ばかり以前まで民家なりしを、近年は小松植わりけり。此の松に付き植木やを呼び、「あの大門より北にはむかしより大木の松八本あり。あれは法華八軸をかた取り八本なり。然るに此のたび南の空地には、法華二十八品をかた取り二十八本うゑべし。直段如何程。」といへば、木屋申すは、「とかく法華經の義理はそむかれますまい。直段一歩八貫文に御買ひ下されよ。」と云ふ。寺にも差當り高直とてねぎるべきやうもなし。其の中に小ざかしき男罷り出で、木屋の宗旨を問

へば、「淨土。」といふ。「然らば其方の宗旨にて金子三歩經にまけよ。」というた。

第五　茶といふ言を利口に取りなほす事

一　利口なる者の咄に、茶道坊主といふ言葉をそばにゐける人聞きていふ樣は、「尤もちやを立つるなれども、あれはさだうといふ物ぢや。總じて茶にはさといふ言葉を用ゐる。」となしへければ、彼の者が云ふ。「それは其方の申されやう無理なり。さとちやと同じことならば、笹屋の三郎兵衞を茶々屋の茶ら兵衞というても大事ないか。」と云うた。

第六　重言くるしからずといふ事

一　重言をいひ付けたるくせにて、「夜の夜中にてもあらばこそ、晝の日中に山中の山なかにて、馬からおちて落馬して、うでのかひなを打ちをりて、醫者のくすしに懸けて、養生してりやうぢしたれば、やう〳〵なほり平癒した。」といふを、友達聞きて、「扨も言葉はみな重言なり。よそにて左樣の言をかならず申されな。」とかたく意見すれば、彼の者へらぬ口にて返答せしは、「其方は文盲な人ぢや。聖人賢人の語に多く重言有り。」といふ。「それは何の書物に有る。」といへば、「諷の本に有り。高砂の浦に著きにけり〳〵と有り。」「それは目出たい事故苦しからず。」「然らば跡とぶらひてたび給へ〳〵といふ諺も有るぞや。」

第七　大盡と太鼓の謂れの事

一「今時のわけしりは、世間せんじやうのために、一町あゆみ行くにも、太鼓といふしやれものをめしつれありくなり。それに付きあひ太こといふ義理は何といふ事ぞ。」といへば、さかしきをとこが頓作をいふは、「總じて大じんも太こもみな／＼六齋念佛の宗旨であらう。其のいはれは大じんはかねもちなり、太こといふ者はから／＼の身體なれば、かねもちに付いて歩まねばならぬ。」というた。

第八　目は慾のもとでといふ事

一　田舍人はじめて京へ上り、方々見物せり。大佛の釋迦を見てにはかに慾心發り、つれの友にいふやうは、「目は慾の元手ぢやといふ。あの佛の御手程おれが手も大きならば、京一番の兩替屋の門に立ち、手に一ぱい小判をつかみ取りたい。」というた。

第九　涙は人も尋ぬるたね

一　うつくしき女中、ひとり途中にやすらひて、ものあはれさうになき居たり。ゆきあうたる人、「何事のかなしみありて、さやうに涙にむせび給ふ。」ととひければ、女聞きて、「さればこそ、あれよれあそこへ衣を著て、あみ笠めしたる人は、都にかくれなき歌念佛說教ときの林淸といふ人なり。あの人のむねの内にいか程あはれしゆしようなる事の侍らんやと、おもひやられて袂をしぼる。」という

た。但しぬれかけのある女かしらぬ。

第十　六波羅の勸進といふ事

一　無意氣なるにはか道心、六はらの勸進といふて門々をありくなり。人々不審に思ひ、「何と六はらの堂が立ちなほるか、慥か昨日も東山へ行くとて通りたるに、作事の體は見えず、いかさま此の坊主は似せ勸進にて有るべし、いざ〱よびて尋ね申さん。」と、二三人立ちよりて此の坊主に謂れを聞きけるに、「御不審尤もなり。愚僧が庵室は六はらの片原町に罷り在り、庵に許り居たるは片原より。」とそのまゝむねをひろげ腹をたゝきてをしへ、「勸進と申すは此のろく腹へ。」というた。

第十一　老いてもわかきにまけぬ事

一　或在鄕に七十ぢかき姥あり。にあひたる者の方へ嫁入をするに牛にのり、二十ばかりの孫に牛の口を引かせ行くなり。道にてさはる荷物の有るをみて、孫牛に聲をかけ「のいてとほれ。」と云ふ。姥これを聞き、「そうて通れといはんこそ本意なるに、のいてといふ言葉は氣にかゝり不吉なり、いやいやけふは行くまい。」と嫁入をやめけるも興あり。

第十二　推量と違うた事

一　ある所に久七といふ下人有りけり、かたのごとくよくはたらき、主人の氣に入り奉公せしが、

或時主人他行の折ふし、お内儀へ、「近頃はゞかりながら、私が心底を包まずはなし申し度し。」といふ。内儀は面を赧めて、「あらきやうこつなる人や、何をいふ事の有るべし。」と申されける。久しく「かやうに申すうへに、御聞きなきにおいては覺悟いたした。」といふ。内儀申すは、「それほどに思ひ侍らば、重ねて折も有るべし。」と申されけり。「さいはひたゞ今は人もなく、よきしゆびにて候まゝ、ぜひ今申さん。」と、つか〳〵と耳のはたへより、小聲にさゝやく樣は、「あすより飯のしやくしをおし付けて下されよ。」というた。

第十三　人をけしてはまりのはやき事

一　ある人、「京にめづらしき輕口咄はないか。」と、とはれけるに、「さして思ひ付きたる咄も御座らぬ。此のほど京中のとほり道をよくいたし、門の眞中をたかくかまほこなりにいたす。」といひもはてぬに、「そのはなしはふるいぞ〳〵。」とけされければ、「さればこそ其のふるいによつてかまほこにいたした。」といふ。此の人は肴やではないか。

第十四　人はそだちの事

一　ふり暮したるつれ〴〵の折節、二三人呼びあつめ　とろゝ汁を振舞ひける。其の中にこびたる人の申さるゝは、「色々の御馳走、ことにけふのことゝて汁は、いつにまさりて、一入出來たる。」とほ

め給ふ。そばに相伴したる人、これはめづらしき御言葉やと思ひ、其のしさいをとふに、「されば此の汁にてはいか程も飯がすゝむゆゑ、よくいひやるとの縁により、ことづて汁といふならん。」「聞えたる作意や。」と感じ、宿にかへりてやがてくだんの汁にて客をよぶに、ことづてをとはれて、「めしのままをやる。」とぞ申しける。

第十五　恥をいはひなほす事

一　或町に寄會有りけり。二階座敷にてつとめける。事過ぎてかへるさに長座にくたびれ、そさうなる者はしごのもとにて、大あくびするとて、尻の邊よりぼんと音のせしを、そばなる人とんさくを申された。「扨も天下太へいで御座る。」といへば、彼の者も、「さればこくとあんどいたした。」というて笑うた。

第十六　小僧が利口で却つてめいわくといふ事

一　去る寺にうつくしきお兒有りけり。檀那參られて小僧をちかくよびて、「あの兒はどなたの子なれば、あのやうにうつくしいぞ。」といふ。小僧、「あれは屋敷方のお子なり、爰の弟子になりに御出で有る。」といふ。檀那きゝて、「おれが思ふやうならば、あの兒を女子にしてほしい。」と申せば、小僧がいふやう、「いづれ人の目は九分十分ぢや、さたになさい事、長老様も左様に御申しある。」と云うた。

第十七　惡性の名付親

一　然る所に二十許りの惡性なるむすこあり。夜々外へ遊びに出でけり。親大きに腹立して、懇なる人を兩人かたらひ、「御大儀ながら、今ばんむすこ奴が居る所へ同道頼む。」よし申して、さて親父は鉢巻よりほうなどもちて、常に子が行く所を見とゞけ、あわたゞしく表の戸をたゝき、「爰にこちのむす子はゐぬか。」と急にたづねければ、子は親父が聲ときき、やがて二かいへにげあがり、かくれ所のなきまゝに天井へとび上りければ、腰より上は天井にてかくれたり。親父友二人ながら二階へ行き見れば、何かはしらずこしより下許りの物有りけり。子も絶體絶命、爰なりと息づむひやうしに、大きなる屁を一つほんとこきたり。扨一人が云ふ様は、「是れは定めてむくろ首といふ物ぢや。」又一人がいふは、「いや首は見えぬほどに、むくろ尻にてあらう。」といふ。親父も興をさまし、「いづれもの量見とはちがうた。ろくろくびでもろくろじりでもない、先のなり音を聞くからは、六郎兵衛にてあらう。」というた。

第十八　羨ましきは食物の火事

一　四條河原にうつくしき野良あり、古郷親里は京の西じゆらくの者なり。五月十五日は今宮の神事にて親里へまつりに行きけり。常はつとめの身なれば、隙なく往來する事更になし。さるにより親

もーしほ珍らしく不便に思ひ、何がな馳走せんとて餅をつきくはせけり。野良も逢うた時かさをぬけとかや、人目も恥もかまはず、したゝかにくひけり。されども夕陽西に入りあひのなるころ、我がすむおやかたの内へ歸り、ねてもおきてもくるしさうに見えけるを、ほうばいの野良見かねて、「そなたの病ひはこゝちいかゞ有り。」と問ひければ、「唯けふのもてなしの餅をくひすごして、むねのやけがくるしい。」といひければ、「おれもちつとその類火にあうて見たいよ。」

第十九　親父がはたらき三國一

一　夫婦おどけ者にて、嫁も娘もあつまりて、冬の夜寒の折ふし、とうふを二三丁もとめ田樂にする。親父いひ出すは、「おの〳〵秀句をいうてくふべし。」とて、嫁やがて、「われは佛のつぶり。」と申して二くし取りてのくなり。むすめは、「いなば堂。」とてやくし取りたり。母は屏風の陰より出づるをみれば、髪をばつとみだしたすきをかけ、左右の手にて目口をひろげ、「われは鬼なりみたくはう。」とて、有りたけ取りたれば、せんかたなさに親父はふるき手ぬぐひをあたまにかぶり、手をさし出し、「乞食に參りた一つづゝとらして下され。」といふ。

第二十　苦身も品によるといふ事

一　上戸なる親あり、町内に伊勢參宮の坂迎へとて出でけり。暮におよび内にかへり、むねをなで

額をとらへ、「あらくるしく〳〵。」と、時すぐるまでかなしがるを、利口なるむすこ有り、「とゝはそれほどくるしい酒をよいころにのみもせで。」と申せば、親は目を見出し、「おのれはこざかしく何なしりがほにぬかすぞ、此の醉ひのさめるがくるしやといふてあそぶに。」

輕口露がはなし卷之一　終

輕口露がはなし　巻之二

第一　伊勢講の當番

一、去る醫者いせ講の有りし所へ風と立ちより、「これはいかうにぎやかなる體ぢや。」と申さるれば亭主申すは、「伊勢講にて御座候。」「それは御大儀。」といふに、「されば貴樣のお藥と同じ事にてよくまはり候。」といへば、ことの外醫者よろこびかへりけるに、又存じたる所へ寄りける。爰もごたくたといそがしく料理しけり。亭主申すは、「今ばんはいせこうつとめ申すなり、さいはひの所へ御出でなされた、勝手にて酒一つまゐれ。」といふ。「これは御大儀ながらも目出たい事。」と申すれば、亭主、「されば貴公の藥と同じ事にてさい／＼あたります。」というた。

第二　蚤の式三ばん

一　ある人蚤を壹疋とらまへ、式三番をまはせける。むかひの親父これを見て、「扨もおもしろき事かな、吾もいのみ一つほしや。」と思ひ、著類を見れども、かねて女房きれいずきせしゆゑ壹疋もなし。是非なく四五日も程過ぎ、ある夕ぐれ時分、何かはしらず壹疋とらまへうれしゆ思ひ、三番さうを始

ふ、自ら口笛を吹きいびにて疊をたゝき、片手に扇子をもち、きげんよくまはせける所へ、成人の子外より歸り、「親父これは何をなさるゝ。」と云ふ。「のみに二番こうをふまするぞ。おれは目がかすんで太夫殿の舞ひぶりが見えぬに、火燭を燈してちやと見よ。」といへば、むすこ心へたとて火そく持ちきたりみるに、「何とよくまやるか。」ととふ。「いや親父まひはせぬぞ、まはぬも道理で御座る、役者がかはりて白身太夫ぢや。」といふ。

第三　藤の丸がかうやく

一　ある所に藤の丸のつきたる、なうれんかけたる家にて番を勤めけるに、折ふし田舍人通りあはせ、その儘立ちより、膏藥を買うてみやげにせんと所望する。番の者「爰にはなし。」といふ。「して是れは何ぞ。」ととふ。「いやかうやくにてはなし、是れは町役なり。」と返答した。いと興有る答へにや。

第四　はなし鳥のさた

一　じやうのこはき者二人寄りあつまりゐける所へ、門をはなし鳥〳〵と賣り歩くなり。一人が云ふやう「あのつばくらといふ鳥はとび魚になる。」といふ。又一人、「いやそれは大きにうそなり。」というて、兩人赤面してせりあひける所へ、わるじやれなるをとこ一人來り此のせんさくを聞き、「むかしよりも、山のいものうなぎになる抔といひならはしけれども、つひに見たる事もなし。然れどもさも

有るべし、おれも此の二十五日に北野の天神へ參るとて、はちくのかはさうり一足十九文にて買ひたるに、宿へ戻りみれば長刀になつた。」といふた。

第五　蛸やくしへの日參

一　三條邊にうはきなる男あり。いつの頃より蛸藥師日參いたし、其の身一代のうち蛸をくはぬとて、人にも披露せしが、祇園の涼みの折ふし、四條河原の牀のうへにて、友達酒のみ居けるに、茶屋の肴とてもみ鹽の大蛸を、物の見事に切りはやし出しける。彼のをとこ、やがて此のたこをしたゝかにくひけり。つれの友、「それはたこなるに、何とて其の身はくひ給ふぞや。」といへば、此のをとこ、「さればきのふ十二日に、ふや町のほてい藥師へ願をかけかへ、向後われ一代の間は布袋をくはぬというて、蛸のさいしんを乞ひたり。」

第六　親も閉口

一　十二三なるむすこに親意見するは、「おのれに何をいひ付けても返事せず、打ちうなづいて許りゐるていたらく、近頃見ぐるし。おし五郎にてはあるまい、人の物いふにはいやおの返答申せよ、但しうなづく許りにて物事濟めば、しぜんおれが目が見えずば、その風俗は見えまいし、然らば一代唖のあく事は有るまい。」などと、さん〴〵にらみ付けしかりける。子がいふやうは、「返事を高聲にした

ればとて、もし親父つんぼの時は。」といふた。

第七　佛前三具足

一　去る田舍に一村みな一向宗にて、道場へまゐりて御讚嘆を聽聞いたし、事をはりて講衆申さるゝは、「佛前のみつぐそくの内、らふそく立を仕なほし申さずばなるまい。あの鳥を何ぞ餘の鳥にこのみ申したいが、何とおもはるゝや。」といへば、いづれも此の議に同じ、「されば、烏や庭鳥もいかゞなり、何がよかろや。」とせんぎしけり。其の中に小ざかしき男のいふは、「とかく白さぎにめされかし。」といふ。座中此の議然るべしと談合きはめけるに、坊主罷り出でて申さるゝは、「いや〳〵さぎは無用になされ、其のしさいは、どぢやう坊主にさし合ひぢや。」

第八　一家の内の物語

一　ある所に一家まじはり、色々の物がたりをする次に中るの女房がいふには、「あの正月ある事は、五月かならず有るとなれば、萬事いはひもつゝしみもいたしたがよい。」と申せば、十四五なるこしもと女が是れを聞き、「さてはさやうにあることか、おれは左右も思はぬなり、正月はかちんをさいさい兒もしくひもしたが、五月のけふは二十八日になれど、餅とて一つもみぬ程に。」

第九　疱瘡の養生

一　上京新在家あたりを、三十許りの男とほりけるに、にしの方よりとしごろなる女房、下女一人めしつれ來るとて、此の男をみてほや〳〵と笑ひより、「粗忽ながら其方様を私所へ御供申したき。」と語る。此のをとこ常に色このまぬにもあらねば、早速に同道してかの女の所へ行き見れば、れきれきの家居なり。やがてろぢの戸をあけ、屛風引きちらしたる座敷へよび入れ、種々料理をくはせ、さて最前の女房いふ様は、「ちかごろ申しかねたる儀におはしまし候へども、私はこれの養君に、乳をまゐらせしうばにて御座候。今年十六になり給ひて、あちこちより縁付の事のみ申し參りしが、そもじ様に一めあはせ參らせたく存じ、扨かく申し入れたる事に候まゝ、是非御あひ下されよ。」と、手をとりおくの一間へつれ行きけり。男夢かうつゝかなどと思ひながら、ふるひ〳〵屛風のそばまで行きけり。かのうばむすめの枕もとへ寄りていふ様は、「まうしおまへ様にかかせられますなと申す證據は、此の人を御覽じませ、おかきなさるゝとひとしく、あの人の顏のやうにみつちやが出來ます。」といふた。

第十　道化者があいさつ

一　文旨にしてしかもだうけ者あり、其のとなりによしある人住みけり。或時夫婦いさかひはじまりて、たがひに聲たかくなりけるに、かのだうけ者行き、けんくわ最中にあいさつするこそ、「おまへ

様がおまへ様なれば、こな様がこな様なり、事のたとへにも大坂に介六といふ大工さへ御座るに、かんにんさしやれ。」といへば、此のつかぬ言葉がをかしうなりて、夫婦ともにはがく〳〵笑うて中なほりた。

第十一　風呂入り

一「おと御めんなれ、草臥もいでゆる者で、どうもならぬが、ある所はいかゞ。」「御通りなされ、奥は武蔵野にて侍る。」「近頃かたじけなし。」「拝」というて、小風呂の内へ入りけるに、然る人、由高きが故にたつ〳〵とからすこしも口をきかずに申すを、なま物じりなる者が是れを聞き「庭訓のたゞ申をいはるる。」といふにをかしく思ひ、又一人がいふ「其方は物しりがほな事を云ふ、あれは庭訓にてはない。節用集といふ謠の本にある事ぢや。」と。

第十二　慾ふかき姥

一　ある山家に慾ふかきうばあり。人の物と見ては、木の葉ひとつわらしすおなりとも、くれいくれいとたくしもらふなり。ある時大きなる鼠をとらまへそこなうて、尾許り引きちぎれ捨てけるを、「それなくれよ。」といふに、人「これは鼠の尾なり。そなたにやりてもやく〳〵にたたぬ物よ。」といへばかの姥「成程やくにたつ。」と云ふ「何にするや。」ととへば、その尾を干しておき、姥が家に傳はりた

るきりのきやにするといふた。

第十三　舞まひと百姓と口論

一　それ〴〵に忌言葉のあるぞかし、茄子にはまふといふことばを百姓も憚るなり。都七條朱雀にてなすびをうゑる百姓あり、又その節は吉祥院開帳の折から、参詣の人の勧進をせし舞をまふ男あり。或時とほりあはせ見れば、大きなる土工李に杯をそへて有り、ちと是れをなん望みにや思ひけん、畠へ立ちより、「さらば一節まはん。」と云ふ。百姓聞きて「あらもつたいなや門出あし。」と大いに腹立しければ、兎角いひより酒をのみのませけるが、立ちて行きざまに「さきほどの腹立に、たがひにねもはもおりない事よ。」と上ぬりを申した。

第十四　坊主魚の願ひ

一　ある所の地頭と中のよき出家あり。振舞によばれて色々食物の咄ありしに、「海月と云ふものは精進めきたる物なり、出家にもまゐらせたや、殿に云うて是れをゆるしにせん。」などと語る。年たけたる弟子聞きて、「殿へ仰せ上げらるゝついでに鯉鮒の事をも頼み入れ、又私が名を替へます、宗加と申すがすきで御座る。」

第十五　きれいずき

一　きれいずきなるもの有り、けぬきを持ちて口のはたのひげをぬきゐたり。そばなるもの「少しそれをわれにかし給へ。」といふ。「かし候はん間、むさい所をぬき給ふな。」とて渡しける「扨もよくくふけぬきおや。なんでもたしなみ人かな。」抔とほめちらし、大かたしまひ、のどの下をぬきければ、かの者いふやうは、「それむさい所よ。」とゆびざししければ、「のどの下にむさき所がありや。」ととがめければ、「成るほど／＼なさい、御身の下帶をはさむ所ぢや。」といふ。

第十六　ひけふ者の喧嘩

一　夜ふけて三條大はしを通る者あり。むかうより來る人に橋の中ほどにて行きあたり、それをとがめたがひに口論になし、一人は大男一方は小男、雙方につかみ合ひ、大男は苦もなく小男をくみふせ、馬のりにしてゐたり。小男今ははやこれまでと思ひ定め、九寸許りのさすがをぬきつかんとせしを、上なる大男これをみて、高聲に、「やれ人ごろしよ出合へ／＼。」というたは、組みふせて居ながら卑怯者ごと。

輕口露がはなし巻之二　終

輕口露がはなし　巻之三

第一　御靈大明神へ福を祈る事

一　上京にひとりの職人あり、朝夕を送りかねゐけるが、とかくは氏神へ祈りをかけ、急に富貴になるべしと思ひ、御靈明神へ七日詣でいたし、私に銀子一貫目得さしてたび給へと、かんたんくだき祈りける。滿ずる七日の夜あらたに御告あり「汝うらむる事なかれ、よく分別して神をもいのれ、分際に過ぎたる願ひは得さしがたし。われ多くの氏子を持ちたるといへども、上で御靈下で御靈とて二所じよたいにて十兩なり。汝一貫目の望みなれば、今小判にて十六七兩に及べり、何としてなるべし。さりながら氏子の事なれば不便に思ふ、いそぎ是れより眞如堂の稻荷へ參り、福を祈れ」と御れい夢有り。此のをとこ目をさましすこしりくつをこねたり「稻荷とはいねをになふと讀むなれば、百姓の望みこそかなふべし。我等はしよく人の事なれば、百姓の手わざはならぬなり。とてもならぬ事ならば、七日までつらずとも、とくにしらせ給はいで。」と大いに腹立し、社壇をにらみ「扨もにくい四一兩めが。」というた。

第二　鹽打豆

一　或時者の所へ町人見まひければ、茶をのませ、其の上にて小者に「其の鹽打豆少し持參せよ」といふ。やがてちひさき臺に鹽うち豆を少し入れ、座敷へ出す。町人是れを見て「此の豆の名は何と申す。」と問へば、「鹽打豆といふなり。」「其の心はいかに。」といへば、「鹽はしほ打にうち豆にまめ」と講釋せられ「今少したべ候へ。」といへば、小者が申すに「もはやなし。」といふ。主人「ふきふりきなり。」といふを、町人又「其の御言葉はいかに。」「不及力といふ事なり。」扨はいはれたる口上を覺えたると悦び歸り、内の女房にいひふくめ、件の豆をこしらへ、誰ぞ來たらば此の言葉をつかひて振舞ひたきと待ちし所へ、舅の親父來れり。亭主「その鹽打豆持參せよ。」といへば、女房あゝと云うて少し出しけり。親父何心もなくひた物くひける。亭主喜び「今少し出せ。」といふ。女房打わすれあゝというて既に出さんとせしが、急度思ひ出し「いやもはやなし。」といふ。亭主「何鹽打豆はもはやないとや。」「不及力を忘れて「あのふぐりなしめが。」と女房をしかりければ、女房「それは言葉違ひで御ざらう、女に何のふぐりがあらう。」というた。

第三　目くらの頓作

一　針立の目くら坊主、旦那がたへ療治に行き、よも山の物語にとりまぎれ、しばらく隙を入れけ

る所へ、客来りはじめて知人になる。客より申すは、「何と座頭どのはどなたの御弟子にて候や、いち方かじよう方か、定めて琴三味線も、平家小うたも上手にて坐し候はん、以後は拙者所へも申し入れ、一曲承り候はん。」などと懇に申されければ、此の目くらもあまりいんぎんなるあいさつにいたみ入り、たうわくせしめ、「いや私はいちかたにてもじようがたにても御座なく、はりかたにて。」と申した。

第四　賀茂川の大水

一　きのふけふの大雨にて、都の賀茂川一はいに大水出でたり。四條三條のほとりにて諸人見物する中に、一人がいふやうは、「きのふの大水といふ程にもない、夕と見合はすに水の高さ五寸にはまされず。」といふ。ありあふ人の申すは、「それは目ちがひにてあるべし、夕とは一尺や二尺のましと云ふ事はないに。」といへば、かの者じやうこはく、「はてさてへたなことをいはる、今一寸たかければ、爰のほんと町は一なでぢや。」

第五　おどけ事もときによる

一　おどけたる者、或時長老を申しうけ齋を進じけるに、老僧だんなにむかつて、「今朝の追善は、六親の内たれしん人の年忌、どなたのためにて候。」と申さるれば、亭主いんぎんにかしこまり、手をつ

さまさ舌の口上にて、高々と申しけるは、「御辰ねにて御座候條つまびらかに申し上げべき、今日は拙者が兄嫁や妹なこのしうとの日で御ざる。」と申した。こびたる口上うるさし、只親の日といはい。

第六　人より鳥がこはい

一　ひがし山黑谷の邊に畠をうつに、となりの百姓通りあはせ、「是れは何をまくぞ。」といふに、彼のはたうち小手まねきして、「あゝ聲がたかいぞひきう／＼」といふ。扨は世にまれなる唐物の種をうゑるにやと思ひ、心得たりとさし足してちかく寄りたれば、いかにもおしれが聲してうしをひきくいふには、「大豆をまく、鳥や鳩がきく程に。」

第七　百萬遍の萬日參り

一　ある人夫婦づれにて、百萬遍の萬日ゑかうに參るとて、今出川のひがし野中にて知人に行きあうたり。扨も御亭はといへば、女房そのまゝ返答におよばずはしりより、「そゝと物をいうて給はれ」といふ。「扨は誰ぞにかくるゝかや。」「いやかくれます人も御座らぬが、内にあまをねさせてきたが、もし聲のたかきに目がさめればめいわく。」というた。

第八　しはき坊主の若衆ぐるひ

一　しはき坊主が去るわかしゆを戀ひわびて、かず／＼文をかよはしくどきければ、若衆とほり者

にて、一夜坊主の方へとまり行きける。暁雨のふる音を坊主ききつけ、南無三寶とふてくやしや、朝飯をふるまはずばなるまい、そらね入りして、起きてかへるを知らぬふりにせんこそよからめ、と思案しければ、若衆そと起きて行きける。もはや門のそとへも出でぬと思ひ心ちとなきに、おきて見ければ、未だ門の内にやすらへるを見付け、仰天し立ちてゐながら目を塞ぎ、高いびきをかく事よ。

第九　わたまし祝儀の使者

一　あたらしく普請出來たる所へ、知音の方より祝儀をもたせ使をやるに、「かまへて常の所へ使に行くとは違ふぞ、一言にても粗忽なる言葉を申すな。」と。「畏まりて候。」とて行きける。先の亭主悦び、獻々をくみ馳走いたす。されどもつひに瘖のごとくなれば、亭主すまぬ事に思ひ、「貴所はいかな仔細により無言の仕合ぞや、わめきさめくこそ目出たけれ。」といふ時、「さればさき程から物がいひたうて、胸がやける程にあつたれど。」

第十　とがいない盗人

一「おれが祕藏せしわきざしがみえぬ、そちがぬすみたる。」といふ。「いやとらぬ、さりとては證據人有り。」とつよくいふ時、「取りはせぬ、人の見ぬまにもらうた。」

第十一　魚がしやみせん引く事

一「月花の遊興に、琴三味線を引きもよほすは人間のならひなり。さる程に此の度われら西國より上り、海上永々の内、めづらしき事を見侍る。」といへば、座中「何事なるぞ、おもしろき事ならははなし給へ。」といふ。「さればしやみせんは人間許りのながさみにてなく、海底の魚も引きならふ。」といふ。「これは近頃聞きおよばぬめづらしき咄なり、但し貴所も久々西國の住ひにて目なれたまはで、御江戸にはやる、けいあんことばを申されける。」といへば、「いやしからも小うたにのせて、鱈とふぐと毎日引きあそぶなり。其の小うたは、たんたらふくつるてんたらふくつるてんと引く。」

第十二　せいじんの娘に意見する事

一　さる人むすめ二人持ちけり、あねは年十八、妹は十六、ふたりともにえん付させけり。さきにてあねはにくまれもの、妹はよつばりたれるとてさられける。おやもたびたび腹立しけれども、是非なくてしかじか意見申すより外はなし。かかる所へ頓作のよき人來り、此のよしを聞き、親にいふやうは、「さのみ御意見無用になさるべし、今年は道理なり、來年からは兩人の子達よくなほり申すべし。」といへば、おや「ことしはあしし、來年はよしとはいかゞ心えがたし。」といふ。彼のもの申すやうは、「あねはにくまるゝはずぢや、二九の十八、妹のよつばりはししの十六なり、とかくことしは其のはずぢや。」

第十三　東寺の塔にてばくち打ち

一　さる博奕打とうじの塔へしのび入り、三國へよき所とて大聲あげてうち居たり。所の衆僧よう申すは、「此の塔へ出入する事かたくきんぜい、殊に見れば博奕なり。其の儀は日本國の御法度なり、いそぎたちさり申すべし。」と申さるゝ。博奕打共口をそろへて申すやうは、「御法度なればこそ爰で打ちます。」といふ。「それいかに。」と申すに、「塔の下にて殊に大勝負にて更になし、錢にては八文にたらず、高九りんの勝負なり。」といふた。

第十四　淨土宗と法華宗と相住居の事

一　さる町人に情のこはき法華宗と淨土宗と、一軒の家に壁をへだて住ひける。或時念佛講にて大鐘を打ちならし、夜半の頃まで念佛申して、扨夜食になら茶をせしが、件の法華のかたへ、「今ばんはおやかましう候はん。あまり夜寒に候まゝおくり候。」とよし申して、かのなら茶をやりける。忝しとて此の食をしたゝかたべけり。くふとひとしく腹中いたみ、夜中に二十五度くだりける。かた法華の事なれば口すさまじくそしるこそ、いやの南無阿彌陀佛を數々聞きたるゆゑ、法然が日と同じやうに雪隠へ行くも二十五度と、散々に呟きけり。翌日はやも直りければ、女房いふは、「今朝の下りは何と有るぞ。」「されば南無阿みだまではやみたり、さりながらまだ殘りたるやらふつ〳〵といふ。」

第十五　兒のつまみぐひ

一　さる所に茗荷のさしみありけるを、お兒是れをつまみくひけるを、そばなる人申すやうは、「これをばむかしより今にいたり、物よみ覺えん事をたしなむ人は、みなどんごん草と名づけ、物わすれするとて、かたく食はぬ物ぢや。」といひをしへければ、兒聞きて、「それならばおれは猶くふべし。」といふ。「ひだるさをくうてわすれう。」といふた。

第十六　慮外ちがひ

一　ある人番にあたり上下を著してつとめけるに、ひがしのかたよりあじろの駕に、びろうどのたて笠、はさみ箱、供人あまたつれて通られける。番の者どもいかさまよしある御かたなり、座上慮外のいたりなるべしと思ひ、土べにおりてひざまつき、つゝしんで待ちうけたり。のり物なるは淨土宗の長老なり、此のよしを見られて時宜するとは思ひもよらず、十念の望みなるべしと心得、やがてのり物の戸をひらき、合掌して、「南無阿み／＼。」といはれければ、番の人々興をさまし、はかまの土をふるひけるとぞ。

輕口露がはなし巻之三　終

輕口露がはなし　巻之四

第一　始めてよばれし祇園會の客

一　京に富貴なる人あり、生國は田舍人にて、十歳より京へ上り、物事しはくて銀をのばしける。寒き時は燈明の火にてせなかをあたゝめ、暑き折には越中ふんどし一筋にてかせぎ、こまかうして銀高八千貫目持ち、毎年諸方へかしけり。其の銀の廻る事淀の水車はいそなり。幼少より京へのぼり、かほどの身代になるといへども、つひに古郷の親類ひとり呼びたる事なし。或年六月ぎをん會にはじめて呼びければ、何が田舍ものの事なれば、いとこはつこに至るまで、宵の日よりとまりがけに上りける。神事の膳部は、つまみ大こんの汁、黑米飯、瓜なます、あま酒一ぱいより外に、香の物もくはせず、中にも亭主に近き人いふやうは、「はじめてよばれ候神事には、料理そさうなり。」といふ。「されば今年程無仕合なる事はなし、さるによつてそちたちをまんなほしに呼びたるぞ。來年は仕合して結構申すべし。」といへば、「それは心もとなしいかなる事や。」といふ。「其のやうすは見せ申すべし。」とて、みな〳〵引きつれ五間四方の藏の戸あけて見せたり。十貫目入の箱入を物の見事につみかさね、

「あれ見給へいつもは一はこもなきに、ことしはかし所がなうて、かね殿が晝ねをしてゐらるゝ。」というた。

第一　野郎の金剛念佛講

一　野郎の草履取を異名に金剛といふとかや。あるとき途中にて念佛講の同行に逢ひたり、「そちは此の季より自前に宿を持ちたるよし、それに付き此の月の講は其方があたり番なるが、いかゞつとめ申さるべきや。」といふ。「いかにも明晩つとめ候はん、同行衆へも其のよし申し給はれ。」というて互にわかれける。扨宿へかへり女房にかくといへば、女房あきれていふやうは、「こちはいまだ此のころの宿ばひりにて、佛もなくいかゞすべき。」といへば、男聞きて、「氣遣ひするな、其のお覺はふんべつしたぞ。」さいはひ夜の事なれば人の見知り有るまじとおもひ、立像の佛一體かりとゝのへ、箱持佛堂へ押し入れつとめけり。何れもわれいちとしこりかゝつて、せめ念佛を申し、已に廻向とおぼしき時、かの佛の御面くるりとめくれ鬼の顔になりけり。何れも念佛を申しやめ、「おそろしやこれは／＼。」と許り申しけり。亭主是れをみて、「其の筈ぢや、苦しうないぞ絲がきれた。」といふ。せんさくすれば、芝居より借用したからくりのはりぬきぢや。

第三　人のうはさ

一　二三人よりあひて物のよしあし評判せしが、「そんじようそいつは賢い奴ぢや、水の中をもぬれずにくゞるやうな奴よ。」といへば、一人がいふやうは、「それは其方の餘り譽めどての言葉よ、今でもよびよせ水に入れたらばぬれべし、殊に紙子を著せたらば猶ぬれべし。」とせり合ひける。「しても、かしこい者ぢや。」といひけり。「それは御身の申されやうあしく、料簡の不料簡といふ物なり、人の目にみゆにいる時は、ぬれずにくゞる事は扨おき、ねてゐても、いかなこととぬれまい。」というた。

第四　たき物の取りちがひ

一　よしある人の方へ振舞に行きければ、飯後の湯出でたるに、「風味殊にかうばしく大きによし。」とほめけるを、内儀聞きつけ、うれしげにかうれんのひまより顔さし出し、「お湯のかうばしきもことわりや、薫物なくべた程に。」と申されければ、座敷にゐたる人々も耳にしみてぞかんじける。中に一人うらやみ、宿に歸り女房にかたれば、「それ程の事は誰もいふべき物を。」とあざわらひ、知音をよびならべ飯の湯を以前のやうにとゝのへ出し、人々かうばしやとほむる時、女房はゞからず、「おこはかうばしからう、柴を三束たらずくべた程に。」

第五　譃講の參會

一　常に中よき友達十人許り講をなすとて、こいこい參會して、名をうそ講と付けたり。此のいは

れば色里へ往來せんための手くだの沙汰なり。或時友々途中にて行きあうて、「晩には内々の講をつとめ候間、御出で候へ。」とかたくけいやくして、暮におよびて行きければ、晝すぎより他行いたし宿にはゐぬといふ、講中せんかたなくかへりける。あけの日彼の友がいふやうは、「夕べな〳〵われ所へ參られたるを聞きてゐたれども、わざと留守を使うた。」といふ。「それはちかごろ屆かぬしかたぢや。」とせんぎすれば、彼のものいふは、「元來此の衆中にて筈の違ふ事はくるしからず、寄る程の者はみなうそつき講ぢやものを。」

第六　物のあはれは人の行末

一　むかしは大金持の大じんなれど、世の盛衰とて近年おちびれ、雜式の金ほうより、いたきびんばふにたゝかれ、あしこしもなやみはて、せん方もなく乞食になり、或時は清水寺又は北野七本松のとほりにて、往來の人に袖乞してけり。然るところへ當流の大じんと見えて、友達多くつれだち、太こ交りにて辨當したゝかにもたせ、上下さゞめきありく所へ、かの乞人やぶれあみ笠かぶり物を乞ふ折ふし、おとに聞えし太こにへたとあふむなり。はづかしく思ひちやくと見ぬ顏せしが、何が當世のとほり者の太こなれば、むかし思ひを見たるよしみあり、彼の袖乞人にことばをかけ、少し小腰をかがめいふやうは、「まうしお前はそんじようどなた樣にては御座らぬか、扨もひさしや、して是れはい

かなる事にてかやうの御すがたにならせ給ふぞ。」と、いとしみ〴〵とたづねければ、むかしせんじやういうたるくせにて、「あゝ音たかし〳〵必ずさたはない事、わざと此の身になりて親のかたきをねらふ。」というた。

第七　印判屋のむすこ

一　ある所に印判屋はとし頃の親父にて、常に目金をあてて細工せられける。さる人いんばん一つ誂へさき銀をわたし、いつ〳〵の日は出來申すけいやくして、扨其の日印判を取りに行きければ、折ふし親父他行いたし、百の錢十一二文ぬけたる二十許りの息子がいふやう、「其方樣は見知りませぬ。」といふ。「先日あつらへ申す時、そちは爰に居てよく存じたるはずぢやに、何とてさやうには申すぞ。今日夜舟にのり大坂へ下るなり、是非いんばん請取るべし。」といふ。件のむすこ、「今しばらく御まちなされし。」といふより早く、親父の目がねを取り出し、わが目にあてて此の人を見て、「私は見知らねども、親父の目金で見れば、先日御出でなされた人ぢや。」というて印判を渡した。

第八　船のしかた

一　町人四五人寄りて酒を呑みけり。其の中に始めての衆兩人あり、たがひに杯をいたゞきけるに、肴をはさみぬる體をみて、われにくれると覺えて、杯を下に置き手をさし出せば、その人には

やらで、おのれが儘にはさみくふたいこかい手をさし出した人、はづかしくてにはあしく、、まうし何れも樣沙汰はない事、此の私が手は舟によく似ませぬか。」というて引きたり。

第九　文盲なる者の仔細を習ふ

一　さい／＼醫者衆へ出入致したる人有り、醫師病人にむかひて「瀉するか結するか」とことはる、を聞きて、ある時其の仔細をとふに、「瀉するとはくだる事なり、結するとはくだらぬ事なり。」是れはこびたる言葉やと思ふ折ふし、親類中の商人來りて、「明日長崎へ罷り下るが、なにも御用の事は候はぬや。」といふ時に、「何とぞ長崎に瀉するとや、やがて無事にて結せよ。」というた。

第十　灸おろしのさた

一　あけくれぶら／＼病ふものあり、醫者の許へ行きて脈を見せければ、「藥ばかりにては中々治しがたきしやうなり、これはふじ三里におもさま灸をすゑられよ。」といふに、病人かさねて談合申すべし。」と急ぎ宿に歸り、「扨々うつけたるくすしの申されやうや、富士はきき及びたる大山なり、其のふじに三里が間に灸をせよとは、いかに病がなほるとて、そりやそももぐさがつゞく物か。」と。

第十一　新佛一體の望み

一　にはか道心おこし、新佛一體のぞみて佛師所へ行き、大座後光のせんさく申す折ふし、「それに

付き、京の因幡堂の本尊、薬師如來は碁ばんに乘らせ給ふが、あれはめづらしき大座にて侍る、何と謂れの有る事か。」といへば、「成程いはれもあり尤もなる事なり。」といふ。「其の仔細は。」「あの因幡堂は四町にかゝつた。」といふ。

第十二　同じく不審

一「又信州善光寺の如來は臼に乘らせ給ふと聞き及びたり、成程尤もごうなり、ゑんぶだんごなればうすへ入りましたもことわりなり。」「して立像か。」と問ひければ、「杵藏にて有るべし。」

第十三　花見の提灯

一　われ人ともに一日の遊興、千年を延ぶる心地ぞせり。爰に西陣の内さる一町中のこらず、東山雙林寺へ花見に行きけり。春宵一刻あたひ千金の永日も、夕陽にしに入りあひのなる頃、番やの又助家々をふれけるは、「迎へに人を御やりなされしよ。」といふ。何れも絹やの事なれば、女弟子許りにて男ぎれは鼠もなし。「とかく町中の迎へなれば、總ようの名代に又助何とぞ料簡せよ。」と、宿老の内儀が申されたり。又助やがて會所の家より提灯を取り出し、東山さして行きける。「又助お迎へに參りたる。」といへば、いづれも座敷を立ちけるに、道闇なれば又助ちやうちんをともしける。常の提灯にてもあらばこそ、町中のおたみうらみもいかゞとて、町のたて提灯を長きさを竹におし立て、はりひぢ付ま

くりして持ちたるをみれば、西陣何組何の町と大筆にて書付の有るなれば、花見戻りの羣集きもをつぶし、火の手も見えすはやりの音もせぬにふしぎや、如何さま氣違ひなりと諸人此のちやうちんを見て「どこぢや〳〵。」と云うた。

第十四　りんきばなし

一　りんきふかき女房あり、其のとなりに夜半のころいさかふ聲しけり。何事にやと夫婦起きて聞きゐたれば、男の惡性いたづらなるによりおこりたるりんき、いさかひの修羅なり。此の女房もとなりの事を身にさしあてもらひ腹を立て、何の理も非もなく我が男のあたまをつゞけばりにはりけり。男、「これは何とする事ぞ氣が違うたか。」といへば、「いや少しも氣はちがはぬ、そなたも向後たしなみ給へ、此の後もあのとなりのいたづら男のやうに身をもつなといふ事よ。」

第十五　同講のくはだて

一　わかき嫁の方より、隱居のかみ様方へこしもとを使にやりければ、「何事の使に來たぞ。」と仰せあれば、「いやおくさまの仰せられには、少し物の講を御むすびなされますにより、御いんきよのかみ様も、人數に御入りなされぬかとの使に參りたる。」と申す。「あらきやうこつや、是れ程いそがはしくてならぬに、それは何の講ぢや。」と問はれければ、「別の仔細にあらず、悋氣講をおく様の大將にて、

誰々も御人のむすび有り。」と申せば、「りんき講ならば、おれも一人前まじらうぞと云うてくれい、成程つねぐおれがこのむ所よ。」

第十六　辻　談　義

一　去る人辻談義を說く坊主に逢ひて不審するは、「あの鷄といふ鳥を見るに、男鳥の毛色は殊に見事に侍るなり。あれは先生は何ものが生まるゝ。」と問ひけるに、とんさくのよき坊主にてあれば、「大方役者の若女房若衆方の生まれ替りさうな、其の仔細はうつくしく衣裳がよい。」というた。「然らば女鳥は毛色あしきが何ものぞ。」「あれはびんばふなくわしや方の生まれたると、因果經にある。」というた。

第十七　順禮捨子の咄

一　關東の言葉になまりの多き順禮二人つれだち、はじめて京へのぼり、五條の橋を通りけるに、折ふし捨子あり。かの順禮此の子を見て先へゆく同行にいふは、「爰に子めがすてて有る。」といへば、つれ聞きて、「米ならばひろつてこい。」といふ。「しかも赤子めだ。」と云ふに、「それはたいたう米であるべい、よしさくるしゆないこんだに、はやくひらつてこよせ。」というた。いかい料簡ちがひぢや。

第十八　文盲なる人水瓜のせんさく

一　祝言振舞のうへにて亭主水瓜を出しければ、其の座に文盲なる人のいふは、「此のすゐくわと云ふ物はくはぬ物ぢや、これをくへば神鳴につかみ殺さる。」と片じやうしきにいふ。座中興をさまし、「其方はちかごろそさうなる事をいはるゝ、さやうの言いはぬ物ぢや。」と笑止がりける。「扨はいづれもは、物のわけを御存じないとみえた、神なりは水瓜のたゝりといふに。」

輕口露がはなし卷之四　終

輕口露がはなし　巻之五

第一　謔にもせよきびのよい事

一「思ひもよらぬまうけをしたといふ次に、おれも咄さう。きのふ河原の村山が芝ゐへ見物に行きければ、狂言最中に行き掛り、せんかたなく棧敷の下にて立ちながらみてゐたに、何かはしらず眞中程をちらと見たれば、年二十許りの女房やんごとなき御姿にて、下女一人つれて見物せられけるを見ると、其のまゝ戀風ざうと吹き、心もうか／＼となり、舞臺の方へは目もやらず、いかさまくどいてみたい物ぢやと思ふ折ふし、かの女房下女をつれてかへりける。おれも跡に付き出でける。扨それより、祇園清水大谷大佛方々を行きけるに、きのみ禮拜の體もなく、いか樣此の女はわれを見て當世のしかけ女ぢやと思ひ、いやこれは是非共宿を見屆け、重ねてくどく種にもなるべしと思ひ定め、そろりそろりつき廻りけるに、もはや日暮に及び、かの女せいぐわんじ墓の奥へぞ行きける、幸ひよき所と宿まで行くにおよばず、爰にてくどき是非念をはらさんと思ひ、われも墓のそばへ行きければ、却つて女の方より我に言葉をかけ、「おまへ樣はけふ一日わらはに付きそひ、これまで御神妙御出で忝

し。とくにも言葉をかけまゐらせたく候へども、さすがに人の遠慮いたしたり、おまへ樣の物が此の中におはしまし候はば御取りなされよ。』と、はだ紙袋きんちやく、又は金銀の入りたる打替、數々の物を懷中よりなげ出した。俺も客に相違したと仰天して、「是れは皆私が物で御座る。」といふて、有りたけ取りて戻りた。」と、大きにはなしける。「是れはみな夢のはなしぢや。」といふた。

第二　葬禮の七五三

一　ある人あはうなる者にいふやうは、「あすは上の町よりけつこうなる葬ひが有る。」と噺す。けつこうといへば振舞の事ぢやとこゝろえて、押しかけたくさんにくはうと思ひ、一もしらぬ人の葬禮に行き、大勢の人は皆かへりけるに、此のものはしりはてにかへり、すぐにきのふ噺したる人の所へ行きて、「そちは大きなるうそをつき、おれをはまらした。」とうらみける。「それは何事なれば。」といふに、「尤もけふの葬ひは七五三程けつこうにあれども、膳は出なんだ、あまりな事ぢやと思うて、もり物に手をかけたれば、おんばうめが、「たゝきころそ。」といふた。」

第三　小法眼の二幅一對

一　明後十一日靈山宿阿彌において御酒進上申し度く候。御出で可レ忝候。以上。おの／＼同道して急ぎける。亭主奔走の小法眼が書きし龍虎の二幅一對をかけられけるを、みな／＼立ちより詠

め居て、ひとりの文盲なる男、つくづく虎を見て、「扨も此の猫は上手のかいた物かな、此のやうないちもつを一疋持つならば、夜の目のあはぬ事はあるまい。」といへば、又ひとりがいふやう、「ねずみ取るやうな目で、何やら睨んでゐる。」といふ時、宿老龍の繪に指ざしして、「實にノ\その筈で御座る、爰なからざけをねらうてゐまする。」

第四　道頓堀にて巾著切とらへし事

一　さる町人、大坂道頓堀にて巾著切をとらへて、先のきんちやくを返せとてせごしけれども、此の盗人いろいろちんじけるが、次第に人多くかさなりて、それふめたゝけなどところぐにいふ。かの者が申すやうは、「貴様の巾著は取るとひとしく同類に渡し、爰にはなし、明日返進申すべし。」といふ。「それはいよいよ肝のふときいひ分かな、とかくちやうちやくせん。」と申す時、かのぬす人獨言を聞くに、「じたいおれがのが分別ちがひぢや、やつぱりわうちやくな分なればよいきに、いはれぬきんちやくになりたるゆゑよ。」とぞ

第五　性わるわるの坊主

一　さる町庵に坊主あり、妹といふて女を置き、甥といふて子を持ちけり。されども念佛の音聲よく鐘をよく打つにより、俗衆の念佛講へやとひける。いやなくせにて博奕をすいて、人にかくれて

折々其の場へ行きけり。或時念佛講同行衆とて庵へさそひ寄りければ他行のよし。「今晩は講にて爰の御坊をつれねば講中にかね打つ人なし、何方へ參られたる。」と留主居の女にしきりに問ひければ、是非なくそこ〳〵とをしへける。先へ行きみれば最中さかりと勝負有りけり。「扨々人には人くうとて御身あたまを丸め、なまじし寄つてかやうの掛勝負をめさるゝ事、所存のあしき事なり、よしあし人にうたはれぬ先に少したしなまんせ、内に女房子もない物かなんぞの樣に、性わる〳〵。」と散々にしかりければ、坊主がいふやうは、「其のやうに御しかり無用なり、掛勝負にては更になし、座中共にみな現金勝負なり、念佛講のかねはみな來世がねぢや、まづ〳〵今ばんは御ゆるしあれ。」というた。

第六　此の碁は手みせ禁

一　有德なる町人せいじんの子供に世を讓り、その身は禪門になり裏座敷に隱居せり。同じ町に又さのごとくなる人有りけり、あけ暮碁を打ちてたのしみ、相手もかはらず此の兩人より外に碁の友とする人もなし。或日一方の人つゞけて二番まけられ赤面して打つ程に、又三番めの碁もまけにみえける。大石しにたる所を「一手みせよ。」といへば、中々見せるけしきはなし、是非共是れは見せよ見せまいと、互に盤の上にて手をねぢあひ、あげくの事に黑白の石をつきくづし、互に腹立しておのれしのれといひ合ひ、「向後一生そちと碁はうたぬぞ。」「いかにも參會止めにいたす。」と、勘當言葉にて罷

りかへりける。扨其の日も西にかたぶき外の友とてもなく、枕引き寄せつく〴〵とけふの口論を思ひ出し、「とかくむかしより短氣は損氣といふは爰ぞかし、先程の碁一番まけて打つならば、今時分まではしこりかゝり打つてなぐさまん物を。」と、兩方ともにこうくわいしける。同町の事なれば、明くれば早天よりかの相手の門を通るとて、たがひに尻目ににらみあひ、一方よりいふは、「なま年よつて朝腹から碁のうちたさうなつらな。」といへば、門を過ぎたるが立ちどまり「打ちたいがおのれにかまふか。」と、目に角入れてとがめける。「打ちたくば爰へうせをれ、慈悲にうつてこませうぞ。」といふ。「慈悲にもせよあだにもせよ、さあ〳〵打つて見くされ。」と、誰あいさつなしに中をなほりたる。

第七　伊勢ぬけ參り

一　江州矢ばせの船にて、九州肥後の者なるとて、年十一二歳なる子供、伊勢へぬけ參りとて兩人船に乗りける。此のもの路錢すくなく持ちけるにや、たゞし腹中ひもじきの折からにや、一人がいふやうは、「あの三上山が飯ならば唯一口にせしめん物を。」といへば、又一人端的の返事に、「此の水海がとろゝ汁ならばおんでもなうくひかねはせまい。」というたる、乘合の中に心ある人や、此の言葉を不便にや思ひけん、船中にて勸進をあつめ、錢一貫文くゝり、此の兩人の者につかひける、誠に神徳有り難し有り難し。

第八　九品の淨土九々の算用

一　さる法華の坊主と淨土の俗と、道づれになり行く途中にて、坊主いふは、「其方は何宗ぞ。」と問ふ。俗聞きて、「忝くも極樂淨土。」といふに、坊主、「何の忝い事が有るべし。」とあざけるを、俗、「念佛のありがたき事は、佛ぼさつ祖師達九品九々の淨土と申すなり。しらずばいふを聞き給へ、先づ二四八三四十二日は藥師、三五の十五日あみだ、三六の十八觀音、三七二十一日弘法、三八二十四地藏、五々二十五日元祖法然、四七二十八日親鸞、かくのごとく、念佛の宗門みな九々に合ふなり。」といへば坊主聞きて、「いかにもさこそ有るべし、又此方の日れん上人の日も左のごとし。」といふ。「何と十三日が九々に合ふか。」といへば、「九々も算用も入らばこそ、十三日は世界の衆生を一まじりあたりなれば、一つにかきなでてすくひとる。」といはれた。

第九　常題目の地形

一　北野に常題目といふ所あり。去る法華の俗人聞き及びて、はじめて參られけるに、寺内殊の外ひろしといへども、地形たかひくく有りて見ぐるしし「とてもの事に地をろくにならしたき物かな。」と噂するを、亭坊申さるゝは、「此の高ひくありてこそ題目も相續すれ、ろくじは此方にさし合ひぢや。」といふ。

第十　えびす講の書状

一　十月二十日えびす講の振舞するに、嘉例の客、もんまうなる人の方へふみをもたせ呼びにやりけり。今日はえびす講にて御座候、早々御出で仰ぐ所に候以上、誰殿參る、と書きしたゝめもたせやりけるに、此の文をみて殊の外に腹立していふやうは、「此のやうなへたらしき文のかきやうがあるものか、此のさむざらに及びて御出であふぐ所とは何事ぢや、御出でなされ候はばこだつ〳〵と書きたいものぢや。」

第十一　辯說の過ぎたる乞食

一　乞食は座入してより袋を首にかけてありくとや、ある所にて辯說にまかせ口をすごしける乞食を、さん〴〵たゝきければ、此のこじき、したゝか叩かれて後いふやうは、「おれも神主の流れなり、汝にかならず罰が當るべし。」と、大きにのゝしりけり。「それいかなればさはいふぞ。」ととふに、「此の袋は忝くも社なり、それをいかにあれば、紙のやどり給ふなは社だんぢや。」といふて理窟につめ、「なぜに打ちやくしけるぞ、弓矢八幡勘忍ならぬ。」と大きにねだれければ、「打ちやくもたゝきもせぬない、おのれ乞食にてくれよといふにより、慈悲におもさまくはしてとらした。」といふ。

第十二　入院ぶるまひ

一　眞言寺へ村中殘らず入院振舞によばれ、住持弟子に申し付け、寺の什物こと〴〵くとり出し、それ〴〵の道具の名をいうて見せられたり。何れも見物いたし、其の中に、「輪によくにたる物は何と申すぞ。」ととふ。「是れはりんぼうと申す物ぢや。」といふに、ちんまうなる百姓、「さて〳〵むかしよりつひに見た事がない、耳にきくさへいやぢやに、まして目に見る事うるさし、はやく捨て給へ其のびんばふを。」と。

第十三　知らねば是非もなし江戸の島原京の島原

一　江戸の芝居をしまばらと云ひ、京のけいせい町を島原といふ。江戸よりさる人はじめて京へのぼり、上京に何ともならぬこくめんなる人の方に宿取りゐけり。或時四條がはらの芝居を見物してかへりけるに、亭主、「今日はどこを見物なされたる。」ととふ。客は何心もなく、「今日は島原へまゐりたるが、扨々おもしろい事かな、酒をのむ所もぬれかけたる所もあり、近年のなぐさみ又明日も參るべし。」といふ。亭主色をうしなひ、「さて〳〵惡性人かな、きのふけふのぼりて程もなきに、はやけいせいぐるひをめさるか。」と大きに意見した。

第十四　慾のふかき長老

一　慾深き長老同宿をつれてある齋に出でし。齋料に布施を包み、童子にもたせ長老の前におき、

是れは百文とみえたり。後に亭主二十疋つゝみけるをもちて出で、同宿が前に置く。長老、「あら不審や前後失念にてこそあらめ。」と、寺へかへりて同宿にむかひ、「さいぜんの布施は施主取りちがへたると覺えたり、おれがのをそちへやり、其方がのをこちへとらん。」といふ。同宿めいわくなるふりをするに、いよ／＼ほしく思ひ、我が分をなげ出し、かの二百文づゝみを取りあげて見たれば、蠟燭二丁有りけり。

第十五　後家の町役

一　或町に番の事あり、家役なれば名代立つべきやうもなし。其の町にひとりの後家あり、此の人にも番させんといふに、めいわくに思ひ色々わびごとを申しけるは、「もつとも町議の仰せをそむきて番せまいにては御座らぬ、はかまを著けては小べんがなりますまいと思ひ、これ一つ氣のどくであんす。」といふ。

第十六　小間物屋が覺帳

一　一生よみかきしらぬ、文盲なる小間物や商人ありけり。ひかへ帳あきなひ有る每に人には頼まれず、自らさいかくして、小刀をもつて三尺許りの木にきざを付け、我が覺えとして埓をあけけり。ある日暮のくらまぎれに小間物を賣りたるを、又かの木にきざを付くるを、むすこながめて、「と、

くらがりで物をかいて、手をきりやるな。」というた。

第十七　十夜の長談義

一　關東よりのぼりたる長老寺へすわりて、始めて十夜の談義をとかれける。洛中の男女くんじゆせり。長老高座にて申さるゝは、「昨晩談じたる次を今ばんも講釋いたす事なり、それに付けうけたまはれば、愚僧がだんぎは長くてたいくつなと、女中方の申さるゝと評判あり。理句義のよくつまるやうにと存じて申すなり、さりながら今晩のも何れも次第にいたさうが、女中だち何と思召すぞ、みじかいがよいか長いがよいか。」とくり返しとはれける。參詣の男女返事なく、くつ〳〵と笑ひけるを、長老腹立せられ、高聲に、「それはかた〴〵の氣のやりやうがわるい。」というた。

第十八　江州土山のばくらう

一　江州土山の者、ばくらうの許にて馬一疋買ひけるに、「眼爪かみくら下其の外そろひたる。」とほむる時、「何と川わたりはよきか。」ととふに、「中々の事川は鵜ぢや。」といふ。めでたし〳〵とてよろこびもどりけり。四五日過ぎて雨ふり田村川の水まさりける時、かの馬荷を付け川をわたるに、中程にてどうと臥したり。買ひぬし氣のどくに思ひ、やがてばくらうが所へ行き、存分をいひけるに、「さればこそ川は鵜ぢやと申したわ、鵜といふ鳥の水を見ていらぬやあらん。」というた。

元祿四年未七月吉日開板

輕口露がはなし　大尾

鹿の巻筆

鹿野武左衛門

鹿の巻筆序

それやまとおわらひの初めは、むかし〳〵あつた所に、曾呂利といひけるおどけものの、御機嫌なほしに出でたる、もつてまゐつたといひしよし、初めて萬の言の葉に花を作意の輕口は、あまねく世にひろまり、月待日待の眠りを覺す。お伽坊主の膝をいため、上つ方の御前にては、下がゝりのさしあひ多く、かたり罵るも狂言綺語の道すぐに、二佛生の緣は異なもの、我が庵は都の戲言いひ鹿が住む鄰にて、世をうぢ大和繪師古山師重、風流の繪そらごとは、誰が結び染めた鹿の巻ふできは御免。

鹿の卷、筆目錄

第一
一 ばんとうや才介　二 三人ろんぎ
三 せりふの稽古　四 田舍者どうわすれ
第二
一 筆屋のしゆいやう　二 僞八島
三 同じく二ばん目　四 夢中の浪人
五 火の見櫓の見立　六 松本尾上狂歌
七 異名なり平
第三
一 太鼓櫓の樂がき　二 淺草觀音梅の狂歌
三 さかひ町馬の顏見世　四 二くづし
五 正月は物いまひ　六 無筆のげんくわ帳

七　夢想のよみそこなひ　　八　野暮のかけま持ち
九　よし原の雛遊び　　十　佛事のいんしん
十一　よし原酒の行くすゑ　　十二　清經のうたひ

第四

一　功德の念佛　　二　きかぬ奴の衆道
三　車善七が火事　　四　代官の輕口
五　表具屋の掛物　　六　初心の大黑舞
七　看板のよみちがひ

第五

一　ぬれのはじまり　　二　湯屋のあま
三　くだり謎ばなし　　四　婆が寺請狀
五　作藏がかたこと　　六　體の屋道具
七　兄樣の料簡　　八　芝居太夫元の日待
九　心ばかりの我が物

ばんどう屋才介

淺草新寺町の雙六の盤養と、胴など造ること名人の細工人あり、江戸中あまねく誂ふるものも多かりける。さるによつて弟子なども四五人ありて、富貴に暮し、名をばんどう屋才介とつけけり。さて裏に藪のありしに、此の竹を切りて胴に造るほどの竹の子などの時分は、隨分大切にしたり。されどもしや人の竹の子を盜みて切りもやせんとおもひて、數へ印などを附けて置きしに、如何の間にか竹の子十四五本も盜み取りたり。才介もつての外に立腹して、弟子共呼びて、兎角外から盜むべきにあらず、悉く詮議するに、聞けばすきとこゝろ〳〵の事にて申しあひけり。やいそこな丁稚めは知らぬか。」丁稚聞いて、「私が十二や三にて、そもやそも此の竹の子を取りませうかえ、六にお聞ひなされい。」とあす。「六を呼びて穿鑿すれば、「裏に母隱居してゐらるゝに、隱居のしゆうさまにお聞きなされい。」といふ。さらばとて才介隱居へ行きて、「しゆ坊、こなたは竹の子は切り給はずや。」といふに、隱居、「扨々お手前の大切にしらるゝものを、おれが切るものか、そなたの不性から起つたぢや、六ば

かり書いて居てうか〳〵としたる故、でく介や三四郎を呼びて聞きやれ、彼奴等が一二を爭うて四かねる奴でない。」といはれて、また兩人を呼びて問ふに、「我々四六年の奉公つかまつります。隨分不義はつかまつらぬものを、六地に御意なされい、彼等が番はしませず、たとひ胴切になりまするとても存じませぬ。」といふ。ト介聞いて、「おのれ等が悪事は再々の事ぢや、一をうつて萬を知る。おれが大目に見てゐれば、目の無いものぢやと思ふか、たま〳〵物をいひつけても、ぐじ〳〵詐りぬかして、白きを黒と爭ひても、爭はせぬぞ、ぐつともぬかすと斬るぞ、手は見せぬ。」といふ。其の時三四郎、「いかにでく介、最早萬事極まつた、此の上はどうもならぬ、檀那むし〳〵いはしやれば是非なし、御身と己と刺違へ四の二さ。」と色を違へていへば、四の二といはれて、ト介ものぼりつめておりばがなかつた。

三人ろんぎ

淺草俵町松崎源内と申すものあり、昔は何樣よしある浪人なりしが、今は引きかへ少しやはいなど知られけり。深く常に話し合ふ人兩人ありしに、一人は平川與市左衛門とて浪人なり。今一人は三河屋三郎兵衛と申しけるが、これ等三人朝夕ともにわけ親しくせられたり。此の與市左は殊の外なる後生ねがひにて、つひに數珠を放す事なし、只西方をのみ祈られけり。源内はあけくれ將棊を好きて、

相手のあらん限りは、夜晝ともにさされける。また三郎兵衛は歌留多を好きて、よみのあはせのからなどといや事のみ深く望みけり。ある時源内方にて三人ともに出合ひ、夜すがら四方八方の話しけるに、與市左いひ出されけるは、「さて〳〵兩人一意見あれたき事あり。」といふ。「何事ぞ。」「されば人間僅かの夢の間に生まれ、長き來世のことわりを知り給はぬこそ口惜しけれ、あはれ後生にもとづき給へかし。」といふ。亭主聞いて、「まこと仰せの如くなり。併し我は少しもとづく心にや、ごしやうぎと申すが、しやうぎまでは好き候。さりとて三郎兵衛、自分には似合はず歌留多わざ、ふつ〳〵とやめ給へ、歌留多は賭博の第一なり、人の思ふ所もあり、慰みとはよもいはじ、さりとてはやめさせ給へ與市どの。」といふ。三郎兵衛聞いて、「歌留多も後生になるまじや。それ歌留多は人間の盛衰のもと、されば佛法にいはんには、先づ四十八枚は彌陀の四十八願なり、一より九までは四とほりにて、四九三十六地の三十六院をいふらし。四枚は釋迦彌陀藥師彌勒佛にて、四枚は文殊普賢觀音勢至、きり四枚は地獄毘沙門廣目增長、さて又いす、こつふ、はし、おかる四品に定めしは、須彌四しうをかたどりたり。一は萬物のはじめなれば、あざを天下に立つるなり。一より切までの十二と定めし數は、十二月をひやしたり。されば切といひては、何にてもすきをいたする、いきものの十二枚は、十二いんえんなり。藥師の十二神をもひやし、心は人の慰みにして、萬の病をわすれ氣を忘する故なり。よ

みの歌留多は一枚殘り、あがられぬ事八ッの善ありながら、一ッの惡に引かるゝ心なり。九枚持つは九品の淨土、後生に入船なり、さるによつて歌留多と名づく。米は是れ人を助くるその稻のあとをかるたといふ。併せて人の善惡を知り、こふにては人のうんぷを知る。三枚まくはみつじの心なり。是れもかやうに心得ば、いかで後生にならずや。」といはれたり。其の時源内申されけるは、「左樣にいはんには將棊はたゞ勝りたる事あれば、是れに基き給へかし。それ將棊はかくうかうそなり。さて佛法にては、兩王は釋迦彌陀、王のわき八枚は法華經八卷、歩九枚は九品の淨土、飛車角行は文殊普賢觀音勢至、さればなるときは獅子王の怒りあり、盤の面に八十一の目は、天の三十三、地の二十六院是れ八十一なり。四ッの星四天王つなところは、人間の智慧より將棊の學に依るべし。つめあひは法問に同じ、一手の惡事にて一番の敗あり、思慮あるべし、敵みつ目に入りて金となるは、是れ巧妙の人又はすゝめの師、官位の心、敵より取りたる駒を張る事、是れいけどりの人を使ふ心、但し先の學を我が物にしたるに等し。金は左大臣あとの隅へかゝむるなし、銀は目付なれば、すらくよくきく。桂馬は馬にて走るべく、なれば人の上をも乘り越えて高名を極む。香車は軍使なれば、敵陣まで直に驅ける。歩は足輕なればさきに備へを立てる。高名きはめ敵陣まで入る時金になりては、左大臣にも同じ。飛車は一方の大將なれば、後に龍王となる。角の麒麟の怒りあれば龍馬となる。ひとつとして

佛法仁義の道にはづるゝ事なし。將棊經とて經もあり、兎角是れに基き給へかし。」といはれけるに、與市左これを聞いて、「げに〳〵源州の仰せ道理なり。責めては是れにしたまへかし、先づ歌留多つくり出す家名さへ惡きぞや、歌留多を好くといふ事の、外へ若しも聞えなば、手錠をおろされ、稼業を取り上げられては爲方なし、たゞ笹やきて聞くもいや、人の難までかぶとやの、最早おもひとゞまり給へ」とて、歌留多の難を一から切まで、短歌にいはれた。

一二わるきは　三郎兵衛　四まいつかへて　五めいわく
六しんけんぞく　うとみはて　七にすつきと　おきあげて
八おひよくば　いまのまぞ　九にのしきた　ききいれず
十々そちの　あやまりて　馬ぢやといへど　かひあらじ
是れよりきりを　あげたまへ　せめてしやうぎは　げいのうち
たゞ玉々に　しくはなし　金銀さらに　つひやさず
ふたる桂馬も　あしからで　さしきの香車を　もよほして
歩々のつきあひ　おほくあり　人の角行　よくなりて
だうりも飛車も　我にになりけり

何事も人間はんじさいをうが馬とたとへし事もこそあれ

さてこそ三郎兵衛歌留多をとゞめられしとなり。

せりふの稽古

過ぎにし霜月より竹之丞芝居はじめて、顔見世に出る出來島吉之丞、まへ／＼かけまの時より、殊の外はやる子なり。芝居へ出るにより、いよ／＼夜晝ともに、束の間も暇なし。されども敵打の狂言せりふも言ふ役なれば、心のうちに復しけるに、夜更けて客少し寐入りける時、今ぞと心得て客の大小をさし、身態をして見んとや思ひけん、彼の客の枕元に立ちて、「幼少より覗ふといへども、折のなければ本意を遂げず、日頃心を盡せしに、今夜に因果や定まりけん、然し寐入りたるを斬らんは、死人を斬るに異ならず。」と、歩みの板を踏み鳴らし、「三千年に一度花咲き實の成る西王母が園の桃、とうゞわの節夢優曇華の親の讎敵に、あふは稀なりといへども、思へば易かりけるぞや。」というて、太刀を鞘共に振り上げければ、客おどろき裸にて臺所を指して逝げ行く。是れは如何にと親方を先として騒ぎ聞けば、「さりとては覺えなし、人たがへにてあらう。」といふ。「いや狂言の臺辭なるが、明日の顔見世に出づるにより復して見ました。」といはれて、やう／＼安堵した。

田舎者の胴忘れ

通町三丁目へ年頃なる男來りて、若きものに向ひ、「ちと物たづねましたい。」といふ。「何事ぞ。」と問

へば、「此所等に尋ねたき人あり。」といふ。「名は何。」と問へば、「忘れ申した。」といふ。「家名は。」と問へば、「是れも忘れました。」「さて途方も無い事をいふ人ぢや、それでは知れぬ。」といへば、「私ははるばる遠き水戸から參つたものでござる、教へて下されねば、二日路の路を歸ります、さりとは。」といふ。此の男も氣の毒におもひて、「せめてかたしろでも覺え給はぬか。」と問へば、「名も家名も皆さすやうな。」といふ。暫く考へて、「さては向ひの上下やどに松葉屋有助が事であらう、松葉もありも刺すほどに。」といふ。「いやそれではござらぬ。」「さてはかゞみ屋はりみのかみか。」と問ふに、「それでも刺しござらぬ、まつときつく刺すものぢや。」といふ。「今おもひつけた、伊賀屋の八兵衛か。」といへば、「それそれ。」というて尋ね逢うた。

鹿の巻筆巻之一 終

鹿の巻筆巻之二

筆屋のじゆりやう

通町にじゆりやうしたる筆屋あり、名をのとのかみといへり。十四五なるわつぱを使ひける。「おのれのとのかみ内に、長吉は似合はぬ、きくわうと附けう。」といふ。長吉聞いて、「まことに長吉とは異なものでござる。きくわうと名づけてくだされいませい、わつぱへも通じます。」と申しける。こゝにまたのとのかみの家主に八兵衛と申す男ありしが、後に暇を取りて、のとのかみの弟子になりけり。わつぱの言ひけるは、「のとのかみの御内に、八兵衛とは言はれまい、名を變へてよかるべし、おれも長吉とは似合はぬとて、檀那のきくわうと附けられた。そなたの名はつぎのぶと附けう。」とて、家主より來る八兵衛を次信とぞつけにける。さてわつぱ、「八兵衛を次信と附けました。」といへば、のとのかみ聞いて、「さて〳〵憎い奴かな、次信はおれが爲に讎敵なるに、何故次信とは附けた。」とて散々に叱る。きくわう聞いて、「さて〳〵檀那はおろかな事をおつしやる、お前の大屋にゐられましたさかいに、つぎのぶと附けました。」と申した。

にせ八島

去る戌の歳極月二十八日火事の時分、しにたるせうじ屋が砂糖賣三郎兵衛がゆうひを詳しく尋ぬるに、五十四軒のせうじ屋に隠れ無き人なり、年寄りければ皆せうじ殿とて近所の人も用ゐける。三年前に病死せられけるに、兄弟の子あり、兄を三郎兵衛弟を四郎兵衛、弟子に新五郎、三人何れも器量の者なれば、親の跡を取り亂さず、大かた渡世を送りける。然るに三郎兵衛、弟に申しけるは、「かかる折柄に三人諸共に同じ業ばかりも詮なし、汝弟子新五郎隨分かせぐべし、我はあきなひをせん。」といふ。「いかなる事をや。」と問へば、「砂糖を賣りて見ん。」といふ。四郎兵衛申しつるは、「せうじ屋が砂糖賣、如何にも以て似合はし、きびと稼ぎ／＼て見給へ。」と。それより仕度をして、或時番町牛込麹町四ッ谷赤坂青山芝木挽町築地鐵砲洲を限りに、賣りて歸る時もあり、又或時は通町江戸橋小網町箱崎町靈岸島大渡を越えて、深川寺町本所兩國を渡り、淺草下谷神田邊を賣り歩く程に、毎日五百三百は儲けずといふ事なし。然るに極月二十八日には、最早正月にも近しとて、いつ／＼よりも未明より出て、本所龜戸の邊まで行き、四ッ時分には又風吹きて、土ほこり夥しく、是れはと思ふに、あはや火事というて、天に黒雲まつくろにおほふ。是れはとおもひ彼の砂糖は、知る人のありしにしかじかというて預け置き、一文字に驅け來る。最早兩國橋邊は一面に眞黒にして、わけて見れども見え

がたし。されども不敵の者なれば、やう／＼に白銀町まで驅け來るに、かゞみ屋のとの守が邸の燒け落ちたる上を越えて行かんとすれば、忍返で土踏まずの眞中にのぶかにこえ踏み立てたり。心は剛なれども、痛手なれば何かは以て耐るべき、土手際に平に倒れ番士の牀に臥しにけり。是れはさておき四郎兵衞は新五郎諸共に、遙かに逃け延びたりしが、かかる折柄我々が細工も澤山にあるべきなれば、いざや先づ燒原へ行かんとて、我が居所に歸り、さう／＼燒灰取り除けて、新五郎兩人にて其の夜に小屋をこ取り立てたり。されども兄の三郎兵衞は見えず、さて不思議の次第かな、兄の三郎兵衞は我々とは違ひ、一器量ある人なるに、今までおそきは不審なり、何さま我々を尋ねん爲火事の處に深入りして、煙に嗚せて死に給ふか、さなくば怪我ばし爲給ふか、うち棄てては置かれまいとて、大屋へ行きて此のよしを語る。折節名主殿も出で合ひて、樣子をきこしめし、「實に三郎兵衞が事なれば、うち棄てて置かれじ。」と、大屋相店諸共に尋ねてこそは出でられたり。尋ねし所は何處々々ぞ、藏の內に米河岸や、日和は知れぬ照降町、やけしはげにも小網町、こゝにてあはばよし町や、實にやうき世の堺町、おほくの人も乘物町、とくもなけれど材木町、荷物を深く堀留や、音はなけれど鐵砲町、兄が行方の何とてもしろかね町まで尋ぬれど、二十八日の事なれば暗さは暗し、手負死人の多ければ、更にそれとも見えわかず。たま／＼ことゝふものとては、燒原の火のまはり、堤の上の松風許

りなり。四郎兵衛申しけるは、「斯く尋ねては知れ難し、兎角名を呼びてこそ。」と思ひ「爰元に砂糖賣せうじ屋が子、兄の三郎兵衛はおはさぬか。」と、密かに呼うてぞ通りけるところに、四郎兵衛が聲と聞きて、土手の風諸共に誰ぞとこそは問はれける。四郎兵衛兄の聲と聞くよりも、心も空に嬉しくて燒死人を乘り越えて、「如何に怪我ばし爲給ふか、是れは／＼。」と申しける。三郎兵衛申しけるは、我が身の事はいはずして、「名主樣は息災なか、大屋樣はまめなるか、和殿は怪我ばし爲ぬか。」といふ。相店大屋諸共に是れはといひて、まん所の燒小屋より遣戶一枚取り持ちて、三郎兵衛を掻き載せて先は四郎兵衛舁き、跡は弟子新五郎、さて相店大屋どの、いづれもさきに立ち添ひて、燒小屋さして急ぎけり。

二番目

去る程に燒小屋になりしかば、名主どのに斯くといふ。名主よしを聞いて、是れは如何に、三郎兵衛心は何とあるやらん、怪我は何處ぞと問はれける。されども處のわるければ、たゞうなづきたるばかりにて、言語をも言はざりけり。其の時弟四郎兵衛兄に心を附けんとや思ひけん、「是れは比喩ではなけれども、鎌倉河岸の五郎助は、鳥越橋の彌三郎に左手の肩をたゝかれて、三日續けて覗ひ、つひにたゝきかへすと聞く、僅かの細釘一本にて、やみ／＼とし給ふものかな、枕元には名主樣、脇に

おはすは大屋さま、其の次は相店衆、斯う申すは弟の四郎兵衞。」と申しける。其の時に三郎兵衞重き枕を少し擡げ、さも苦しげなる呼吸をつき、「この三郎兵衞鎌倉河岸の五郎助に、劣るべきにあらねども、ひとの守が忍返は上方までも隱れなし。箇程の名高き大針に眞中央を通されて、三郎兵衞にあればこそ、斯くいづれもの其の中にて言語は少しも言ふぞかし、如何に名主樣大屋さま、四郎兵衞は若ければ、萬事は賴み奉る、かたみの物を送るべし、錐鐵槌鑿鋸は、新五郎に得さするなり。此の羽織は毛ぎれしたれど、四郎兵衞取りて著て我に添ふと思ふべし。」是れを最期の詞にて、三十一を一期として、遂に空しくなりにけり。人々是れはとのたまへども、到底もかなはぬ死出の道、淺草西福寺にて弔ひをぞしたりける。然るに大屋殿黑犬一匹抱き來て「此の犬われが祕藏なり、名をば小黑と名づけたり、猫鼬にかけ合うて其のはやき事逸物なり、すゝ人などに吠ゆる餘の犬には十倍せり。三郎兵衞常に望む、されども相店子にも望む人おほければ、つひに取らせず、今野邊の送りさせん」と白布一反取り出し、彼の小黑に捲き附けて、寺へ一所に送りける。あら不思議や、西福寺にて燒きけるに、火葬の折柄彼の犬われと飛び出で、彼の火の中へ飛んで入る。古の義經は次信が最期に太夫くろを引かせける。今の大屋は小黑の犬を送られしに、火の中に入りし事冥土までともしたり。奥州に隱れなき次信が最期に同じければ、にせやしまと申すなり。

夢中の人

爰に大和田源太左衛門といふ浪人ありて、永々の浪人にて尾羽打ち枯らし、埋木の花咲くべくも見えず、身の成るはての哀れらしき有樣なれども、心は未だ更に衰へず、あなたこなたを勤めけるに、或時いつも目をかけらるゝ御屋敷へまゐりけるに、御客の方樣へ彼の源太左衛門を知る人になされければ、なか／＼懇に仰せられ、「似合はしき所もあらんには、肝を煎るべし、身の方へもちとまゐられよ、さりながら方々へ勤むるゆゑ暇なし、來る十一日には宿に居るなれば、暇においては御出でを待つ。」と仰せければ、餘りに嬉しくて、住吉の前に二葉を植ゑ添へて、千年待つ心にて十一日を遲しと待ちけり。其の日限になれば、垢たれたる黑羽二重に、時ならぬ綟の肩衣など、衣紋けだかく引き繕ひ參りけるに、奏者出合ひて、「ない／＼御自分の事檀那申し付け置かれました。」とて座敷に請じ、暫くあつて口上仰せ出されけるは、「よう御出でなされた、御待遠はござらうが、月代に剃り掛りました。暫く待たせ給へ。」とあつて、茶煙草盆出し、又菓子を澤山に積み持ち出でて、浪人の前に置く。素よりまつくすみになりてゐけるに、家中の子なりけるが、六ツ七ツばかりの髮を打ちひらがひたるが、障子を徐とあけて、浪人の顏を見ながら、彼の菓子を盜みて、障子の陰に行きて喰らふ、又來ては取りて行きける。浪人心に思ふやうは、さて／＼氣の毒な事ぢや、浪人がひだるさに菓子をあらし

たと思はれなん事よと口惜しや、おどして見んと思ひて、又來ける程に目と鼻に手を當てて、目口をひろげてもゝんぐわあといへば、彼の子供驚きて逃げ、又來ればおどし、二三度しけるが、又障子をあけて來る。彼の子供と思ひ、目口ひろげてもゝんぐわあといへば殿なり、其のまゝ御歸りあつて、「さて／＼浪人は狂氣さうな、急いで返せ。」と仰せける。奏者來つて、「檀那用の儀有之まかり出でられまする、先づお歸りなされませい、重ねて此方から呼びに進ずべき旨申さるゝ。」といはるゝに、浪人さては今のもゝんぐわあ故と思ひながら、是非なく座敷を立ちける。玄關口へ出でければ、又彼のいたづら餓鬼玄關の脇にゐける。さても此の子め故進退とりそこなうたと思ひ、憎さも憎し、又もゝんぐわあと目口ひろげておどしければ、見る人「いよ／＼狂氣に極まつた。」と言はれた。

火の見櫓見立

田舍者二人づれにて江戸見物のために來りしに、先づ屋敷々々を見あるきけるが、火の見やぐらを見つけ、一人の言ひけるやうは、「國もとにて聞きおよびし雲の上人さまといふは、是れにてあらう。」といふ。一人が申しけるは、「見ればさならひさうなほどに、天竺浪人といふものでござらう。」中にも年の寄りたるもの申しけるは、「屋敷に何に浪人があらう、上に太鼓があるほどに、雷の下屋敷だ。」というた。

松本尾上が狂歌

尾上もとはかげろふにておはしける。過ぎにし霜月朔日より甚三郎芝居へ出でけり。まへ／＼より親しく行きける客の友どち來りて申しけるは、「今日尾上方へお越しあるまじきか。」といへば、「いやはや昔のやうにはまゐられぬ、位あがり給へば花代もあがるらめ、然し是れを親方の方へ送りてたべ。」とて狂歌を書いて遣はしける。

花代も高砂なればこちはいや尾上のかねを持たぬ身なれば

親方返歌を書いて送りけり。

まつがひや前髪かゝらながき夜にあかつきまではかけてやらうぞ

異名業平

江戸堺町のにはとりに業平勘右衛門といふ者あり。若きものども寄り合ひ評判しけるは、「勘右は成程不男なるに、業平とは如何なればいふやらん。」といへば、其の中に一人の申しけるは、「能く働く男なれば豆男といふ義理で、業平であらう。」といふ。又一人のいひけるは、「いや若き時男達ありつらふ、むかし男といふ義理か。」といへば、遙か下座にありし人、「我よくいはれを知りたり、勘右はいにしへとつと不便な人でござつたが、親代々よりしつけたる職にて、もの初冠屋なして、奈良の京春日の里

に居たんぢやさかいで、業平といふ。」といはれた。

鹿の巻筆巻之二 終

鹿の巻筆巻之三

太鼓櫓の樂書

過ぎにし春の比、中村善五郎新芝居取り立て、何がな變りたる事をせんと思ひ、太鼓櫓の幕を柿に染めて張りければ、如何なるものがしたりけん、

新しばるおもてにかきの幕を張りさぞや内にはへたりあるらん

かくぞ張紙しければ、善五郎氣の毒に思ひて、染め直し元の幕を張りければ、またかくなん、

うちまはす太鼓やぐらの幕のいろ染めかへしても見てはこんこぬ

つひに芝居つぶれしとなり。

淺草觀音梅の狂歌

四方の景色も長閑なれば、親しき友ども二人三人、春も笑顔にともなひて、罪も報いも淺草の觀世音に詣でけるに、右手の寺に梅花のさかりなれば、見物の貴賤袖を連ねて、色めきける梅の花、誰が袖ふれしにほひやらん、春や昔を思ひでに立ち寄りて見れば、長う横さまに作りなしたり。まことに

弘誓の船なりともいつのべし、のりの人をや待つ心か、されども下垣を結ひ廻しけり。是れは花を惜しみてこそと、石川氏の何某狂歌し侍る、寺の名を聞けばちこう院と申す。

一世かけてかへらじと花にちこう院籬は人にちぎらせじとや

堺町馬の顔見世

市村芝居へ去る霜月より出づる齋藤甚五兵衛といふ役者、まへ方は米河岸にて刻煙草賣なり。とつと輕口綺緻もよき男なれば、兎角役者よかるべしと人もいふ。我も思ふなれば、竹之丞太夫元へ傳手を頼み出でけり。明日より顔見世に出るというて、米がしの若きものども賴み申しけるは、「初めてなるに何卒花を出して下されかし」と頼みける。目をかけし人々二三十人言ひ合はせて、蒸籠四十また一間の臺に唐辛子を積みて、上に三尺ほどなる造りものの蛸を載せ、甚五兵衛どのへと貼紙して、芝居の前に積みけるぞ夥し。甚五兵衛大きに喜び、「さて／＼恐らくは伊藤庄太夫と私が一番なり、とてもの事に見物に御出で」と申しければ、大勢見物にまゐりける。されども初めての役者なれば、人らしき藝はならず、切狂言の馬になりて、それもかしらは働くなれば、尻の方になり、彼の馬出づるより甚五兵衛といふほどに、芝居一統に、いよ馬さま／＼と暫く鳴りも鎭まらず賞めたり。甚五兵衛すこ／＼とはならじ思ひ、いゝんといひながら臺舞うちを跳ね廻つた。

二くづし

遠州濱松袋屋の治兵衛といふもの、子次郎助を江戸へあきなひに下し、尾張町に店を出し足袋屋を出す。若きもの故御法度嚴しき中に、ちと勝負わざを好き、あきなひも身に染まず、惡しき友をのみ招きてうつら〳〵暮すほどに、在所より持參のかねも皆うち込み、結句借金おほくあきなひもなりがたき故、世帯をしまひ小道具を乘りかけ荷にこしらへ、在所へ上らんと取り繕ふ折柄、在所の親の方より飛脚來る。次郎助何事やらんと文を開き見るに、「何々、其方儀もとでを失ひ、大分かねなど借りたと聞いた、重々の不屆き此方へ上り次第に打ち斬り棄てべき。」など、散々にいひおこしければ、次郎助思ふやう、在所に歸りても如何惡しからんと、こしらへたる荷物を崩しける。友達見まひ來て、「其方はのぼるよし聞いたに、何故に荷を崩す。」といへば、「親が打ち斬らうといふにより、二くづした。」といはれた。

正月は物いまひ

田所町にかふしう屋の甚右衛門とて、代々法華宗にて物いまひをせらるゝ、舊冬二十八日まで商賣いそがはし。飾りの道具もこしらへざる故、作介を呼びて飾り繩を綯へといふに、作介手を支いて、「不重寶なる私、飾りを致さば祿ではござるまい。」といふ。亭主氣に掛けて馬鹿めがというて、側

たる薪も投げつける。作介「これ旦那またなげきをなさるゝ。」といふ。甚右、「さて／＼是非もないたはけぢや、左様な事は吐かさぬものぢや、明日は大つごもりぢやに、必ず粗相をいふな。殊に元旦には諸事取り落し、物を打ちわりなどしても、目出たくなりたと許りいへ。」と吩咐けけるに、棚より物おちかゝりければ、作介ちうにて取り、「我があらん限りは、滅多に目出たくはせまい。」というた。

無筆の玄關帳

五十嵐勘解由とて手前よき浪人あり。されども如何なる事にか、無筆にておはしけり。正月の禮者來るに、作内といふ男玄關帳をつくるに、檀那も無筆我も無筆なれば、繪に書きて置きけり。勘解由帳を取りて見るに、文と櫻を書きて置きけり。「花之丞が來たか。」といふに、「今朝參られた。」といふ。また上に松の枝と下にじやうぎを引きわる處を書きてあり。「まつがえさくわんの渡せるか。」といふ。「ござりました。」男骨逞しきが劍を持ちて、つゝ立ちあがりてゐる處を書きたり。「作内よ、是れは讀めぬが。」と問へば、「りきのけんもつさま。」といふ。檀那、「是れはあてじやおじやらう、不動るんにまがうた。」といはれた。

夢想の讀みそこなひ

神田大工町に大黒屋長兵衛とて出前ものやあり、過ぎし正月朔日の夜むさうを見けり。ことなう長

兵衛ものいまひする人なれば、氣に掛け起きもあがらず、二日の晝時分まで臥しければ、妻女枕もとに侍りて、「如何御心ばし惡しう御入り候や、食事をもまゐらず箇やうに打臥し給ふこと、如何なれぞ御心に思しめす事もやおはしまする。妾とは二世とかねたる中に、御つみゝは如何。」と掻き口說く所へ、同じ店にゐらるゝ和泉屋の與三といふて、ちと歌學など好かるゝ人見舞はれけるに、內室右のよしをつぶさに語る。與三不審に思ひ長兵衛に聞く。亭主枕をやう〳〵擡けて、「其方つね歌道をも好かるゝ人なれば話すなり、ゆうべ夢の內に三度までおし返して、奥よりわつと泣いて出でける、といふ下の句を見たり、年の初めかやうの不吉なる事、心にかゝる故つや〳〵起きも上らず。」といへば、與三横手を打つて、「是れは目出度い夢、ひらに起きて喜び給へ。」といはれ、起き上り壽きさま〴〵取り繕ひ、「さて目出たき所以は如何に。」と問へば、與三最前の下の句に、上の句を附けて目出たいとて致されたり。

大黒に貧乏神がたゝかれておくよりわつと泣いて出でける

と書かれたれば、長兵衛大きに喜び、殊の外に祝はれければ、まことに其の年より仕合〴〵き榮えけり。其の鄰に松田助之進とて、小知をも望む浪人あり。此の春、

まづたぐひなきあしたかな

といふ夢想を見るこそ、長右が事など思ひ合はするに、悪しき祝ひは能く榮ゆる、況して目出たき夢と短冊に書きて、神酒など据ゑてさま／＼祝ひなかばの處へ、近所に居ける粗忽もの來りて、しかたかと聞きて、さて／＼目出たい事かなとて短冊を取り、つく／＼打眺めて眉を顰めければ、亭主如何にといへば、彼の粗忽もの「此の夢目出たからず、よく／＼よまれよ不吉なり。」といふ。松田「さにはあらじ。」と色を違へていへば、粗忽もの「是れ見やれ、まつだくびなきあしたかなといふ夢が、何が目出たからう。」というた。

野暮のかげまもち

ある浪人堺町邊に住ゐければ、かげまを抱へけるに、勘三郎芝居へ過ぎにし霜月より出しけり、まへまへの客それ／＼に花など出しける。されども舞臺なれざるなれば、やう／＼三番叟のせんざいに致しける。客ども晝時分より何時も來るに、朝疾くにしまふ役なれば、つひに客の見る事なし。親方行きて見て氣の毒に思ひて、太夫元にまゐりて親方訴訟申しけるは、「染之丞が致す處、朝にて客衆も見やらいで、何とも氣の毒に存じまする、あはれ願はくば三番叟を切狂言になされて下されませい。」といはれた。

吉原雛遊び

吉原の上郎おもひ〳〵に親方の娘の節句なりとて、雛を送られけるに、その内に勤め繁くて二日の日まで、いまだ節句を送らぬ上郎ありて妓夫を呼びて申されけるは、「大儀ながら人形町へ行き、何にてもしをらしき人形を調へ、うちの娘子へ送りてたべ。」というて金子壹分なげいだす。前方より近づきの人形町のねずみ屋豐前方へ行きて、彼の金子なげ出して「何にても此の金子に見合ひて人形を下され。」といふ。「壹分ならば是れよ。」とて差し出す。いそがしさに早々持ちて驅け走りける。淺草諏訪町まで行きて、妓夫心に思ふやう、「中を見なんだが好き人形か。」と思ひて見れば、小坊主からくりにて茶ひく所なり。是れはなるまじとて持ちて歸り、「茶ひく事はおらが町の嫌ひものなるに、餘のを下され。」といへば、「まことに思ひ附けなんだ、茶ひくはさし合ひぢや、是れを。」とて太鼓を持ちてゐる人形を遣はしける。妓夫見て、「とてもの事に太鼓持より、客人形が欲しい。」というた。

佛事のいんしん

芝日比谷三丁目に大和屋善左と申して、すこびたる人あり。淨土眞宗にて坐しけるに、殊の外後生願ひにて、過ぎし秋、志あり、せう〳〵佛事を致されける。堺町に住せらるゝ和泉氏の何某深く懇なりしが、佛事の折から人を送り給ひしに、茅場町にじやうにが饅頭とて名物ありしを、蒔繪の重箱に詰めて、上に短冊を書かれたり。

あかはひはじやうにかはれど源元は同じ流れのたゞのまんぢう

又酒一徳利、是れも短册あり、

　じやうど酒やとくりと是れをまふれかし別に新酒を添へてしんらん

文もなくたゞかくばかりいひおこしけり。大和屋がをひに石川氏の何某を呼びて「此の返歌を書きて遣れ」といへば、二首の歌を一首にて返歌しけり、

　西方をじやうにたいまんぢうのいも御酒のらいがう善知識かな

吉原酒の行末

本町の源といふものあり、とつとと吝きものなり。されども吉原は好きにて、ひたと行き通ふ。或時散茶にて大勢一座して酒盛しけるに、後は亂酒になつて、ひたと酒を零す事おびたゞし。ない／＼吝き者なれば惜しき事に思ひて、妓夫を呼び出し盞さして「扨此の盞のだいやせんなどに、夥しく酒のしたゝみがあるは、皆すたる事か。」と問へば「何にむざと捨てませう、すきとひとつにして樽に詰めて置きまする。」「それが何になる。」と問ふに、「是れを賣る酒屋がござります、それより買ひにまゐります」「噓を吐くものぢや。」といへば、「さて／＼お歸りに御覧なされませい、せんもが屋敷に酒屋が二軒までござります、看板に上々したゝみ諸白。」

清經うたひの聞きなし

去る文盲なるもの申しけるは、「さても平家の一門多き中に、清經は粗忽な人さうな、何故にといへば、雨の降るにうろたへ死なれたげな。」といふ。「さて／＼謠を聞き給はぬや、思ひ定めて身を投げられたる。」といふに、「いや／＼謠もかつぱとおちしほのといふなれば、雨にうろたへられたさうな。」といふ。一人のいひけるは、「なればうらに入るとて死なれたと思ふ、是れは狂がつた事ぢや。」といふに「それでも腰よりやうでう抜き出しと謠ふほどに。」いうた。

鹿の巻筆巻之三 終

鹿の卷筆卷之四

功德の念佛

あるものひたと念佛を申しては叺に入れ、また申しては叺に入れ、ひたもの申して叺に詰めるほどに、三叺づゝ詰めて三だんぶりしけるほどに、九叺ぞ申したためける。最早冥土へ行かんにも土產心安しとて、其の後さのみ念佛も申さずゐけるに、六十八九にて遂に往生しけり。されども申し置きたる念佛を荷に造り馬に附けて行くほどに、小室節にて行きけり。六道の辻へ行けば、鬼七八人出で罪人を咎むる。されども此の男は土產大分持ちたれば、鬼の中をも構はずに乘りながら行かんとする。鬼共咎めけるに、「いや咎めるまでもなし、此の土產を見よ、皆念佛なり。」といふ。中にも正直なる鬼、「さりとては結構なる御事なり、通り給へ。」といふに、又仔細らしき鬼一人來て、「いや〳〵前方もあつた事ぢや、荷物を改めに戸を立てう、此の前も改めずして閻魔より戸を三口しめられた事あり。」皆みやうもん念佛にて、三だんながらしひななり。鬼大きに驚き彼の脊を取つて、八萬地獄へ墮す。其の次に娑婆にてふさしなりしが、長き羽織を著てしを〳〵として通るに鬼見て、「是れは惡人さうな、

土産はなきか。」といへば、「いやござらぬ。」といふ。「少しなりともあらば見せよ。」といはれて、前巾著より、「さて〳〵十遍までござらぬ。」とて、八遍念佛を出すに、いづれも光明赫耀たり。鬼どもひれ伏して拜み禮拜し、實に十ねん一ねんなりとて、極樂へ通された。

きかぬ奴の衆道

(此の項省く)

車善七の火事

過ぎにし頃善七の所に火事の出できけるに、夥しく見ゆる米河岸の若き者共多く出て見けるに、此の火事は正しく吉原に極まつたといふ。その中に上郎に深くあひけるもの申しけるは、「さあらば驅け附けて櫛箱の一つも退けてやらん。」とて、一つ息になつて友と二人連にて驅け附けたり。淺草駒形にて殊の外息の切れければ、一人のいひけるは、「暫く待ち給へ、水なりとも飲みて驅けん。」といふ。「いや最早いかずと可し。」といふ。「是れまで來りて何故に。」と問へば、「正しく是れは善七であらう。」といふ。「此處にて何か知れん。」といへば、「いや〳〵善七に極まつた、吉原ならば伽羅臭からうが、かんで臭いほどに塵紙に火が點いたら。」といふ。案の如く善七であつた。鼻の利いた奴の。

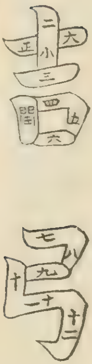
代官の輕口

とつと浮氣なるもの吉原へ行くとて、道にて馬方に行き當り、殊の外に腹を立ち、散々叱りければ、馬子も理窟ものにて、さま〴〵に言ひあひ、いよ〳〵に怒りて脇指に反を打つて、「おのれ只一打にせん。」といふ。馬子も耐へぬ奴にて、「おれが首もかねぢやほどに、むさとは斬られじ。」といへば、「かねなりとも斬らん。」とて抜きければ、元の口には似ず何處ともなく逃げければ、抜いたる脇指をすご〳〵と指されやうもなければ、「おのれでも斬らん。」とて、馬の細首を斬り落しけり。町の者出合ひ狼藉者とて捉へて、所の代官へ連れ行きける。代官ふたがしらにて支配し給ふ所なれば、兩人出で合ひて公事を聴き給ひ、「さりとては物もいはぬ畜生を斬る事、人を斬りたるより尚罪科深し、何所のものなるぞ、ありのまゝに申せ。」と仰せければ、「通町何丁目、大屋は杢右衛門、親は八兵衛、私は九十郎と申す。」といふ。一人の代官、「兎角深き科人なれば、詰牢へやれ。」と仰せけるに、又一人の代官仰せけるは、「八兵衛子九十郎斬つたほどに、あがり屋へ遣れ。」と仰せられた。

表具屋の掛物

去る表具屋の見世に二三人寄り合ひて遊びけるに、表具に來たる掛物を見れば大文字に吉弓と二字書きてあり。「是れは變りたるものなり、如何樣判じ物なるべし。」といふに、一座の人申されけるは、「いざや慰みに我々がしよさい〴〵にて判じて見ん。」といふ。一人は侍、一人は醫者、一人は百姓

なり。亭主は表具はりつけ屋の商賣、三人いひけるは、「先づ亭主にはなにと思召さるゝ。」といへば、「私は初細工に是れを請取りまして、心に判じて喜びます、よき弓と書いてござりますにより、よき弓なれば手前よかるべしと判じました。」といふ。一座の人々「尤も。」と申されける。「さりながら四人のしよざい〳〵と申しなさるゝからは、しよざいで判じませう、先づ私ははりつけ商賣なれば、よき弓ならば張によからうと思ひます。」といふ。醫者聞いて、「俺は吉弓と書いてござるは、十一は口のきうによいといふ事でござらう、口中の病は十一のきうにて、必ず快くなる物ぢや。」と言はれた。百姓申しけるは、「私は春の初めに此の掛物を見て喜びます、今年は何も彼もよく當らうと思ひます、よき弓ならばあたる筈ぢや程に。」といふ。侍聞いて、「さりとてはしよざい〳〵能く判じられた、我がしよざいは刀脇指なれば、大小と判じた。」といはれた。「大小は尤もぢやが、如何に。」と問へば、「大の字は先づ横に一ぱんじを引き、小の字は先づ縦に棒を引くなれば、横の棒は皆大、縦は皆小、十二月の大小なるべし、今年は閏があるさかいに、畫が十三あり。」といはれたほどに、暦を引き合はせて見れば、大小少しもかはらず。



よく／＼見れば、貞享三年の大小の掛物なり、人々今年の中の重寶にしられた。

初心の大黑舞

堺町のほとりに有德なるものの子ありしが、其の身道樂にて親勘當したりければ、渡世の送りやうあらずして、あなたこなたとうろたへける。頃しも極月の末になりしかば、すはや身の置き所なくして、たゞ茫然として居たりける。かかりける所へ常々懇にしたる友達來りていふやうは、「さては我が身の境界は、何として送るべきや、もとでがなければ今更あきなひもなるまじ。また奉公に出る事も、身の皮がなければ是れもならず、我等とつくと思案した、春は大黑舞が流行るほどに、出たらばよからう。」といひければ、かのものいふやう、「如何にも好き分別して給はつた、さあらば其の用意をせん。」とて、俄に淺草へ行きて紙にて造りし面を一つ十二文にて買ひ、切れたりし著るもの衣紋引き繕ひ、春の來るを今や遲しと待ち居たり。ほどなく正月朔日になりしかば、今日は年の初め月の初め日の初めなれば、門出めでたしと酒四五杯ひつかけて、先づ町々をござつた／＼といひて歩きけり。然るに淺草新福寺といひし法華寺のありしに、彼の所に行きて山門よりござつた／＼と許りいひて、何かまたござつたといふ事を忘れて居たりければ、内より小僧出て申しけるは、「是れは多分僞大黑舞と見えて、何か又を忘れたさうな。」と思ひ、皆々あきれ果て、どつといひて笑ひける。素より小僧口

合のよきものなれば、「何が又ござつた。」と高聲にいひければ、大黑舞また何と忘れていふことのなくて、「其處にゆかりとござれ。」といひて、はづかし舞をして逃げ歸つた。

看板の讀みちがひ

彌左衛門町に明石屋又助とて粗相なるものあり。御出入の御屋敷へ行くとて、道にて看板を見て話し申しけるは、「さて〳〵此の頃かはりたる鐔の出で申しける、殿樣には鐔が好きなされますに、いまだ御覽なされませぬか。」といふ。「此の頃流行る正阿彌での事か。」と仰せければ、「いやどう申すか、鐔と申して專ら流行ります、方々に看板いでました。」といふ。「是れは珍らしき物ぢや。」とて御用人を呼びつけ、「又助同道して鐔を見て參れ。」と仰せ附けらるゝ。「畏まり候。」と打連れて行きて見れば、桐油合羽の看板なり、用人もあきれて歸られた。

鹿の卷筆卷之四 終

鹿の巻筆巻之五

ぬれのはじまり

それ天は陽にして速かなり、地は陰にして動せず、月日の廻るも陰陽和合の車のわやくなるに、話の序に、昔人のぬれ〳〵といひて、戀慕の闇を照らさせ給ふ日の本の、そのみかさまとごてさまと、天の浮橋の上にして鶺鴒の尾のひこ〳〵するを見給ひ、みこのまぐはひありしより、我が朝ひらけ初まりて、天の逆鉾おんとさしこみ、から〳〵〳〵とさがし給ふ。是先より出づる雫が國となる。されば雫より起る秋津島、陰と陽との二つの間にやはらぎ合ひ和合の義は、また地水火風空の五つにかたまり、目もあり、口もあり、或は男女となると大雜書に書きけるは、おれは知らぬがぬれといふを是れから考へて見るに、浮橋のもとにて逆鉾の雫より起りて男女のかたらひありまして、思ひの淵に沈み、涙の雨に袖を絞る、君に逢瀬の浪枕なんどいへば、ぬれといふであらうといはれたれば、そばなる男、いや左樣でない、初めての事には〇〇でぬらすによつて、ぬれといはれた。

湯屋のあま

所はしらに申されぬ、手前有徳なる人なれば、皆大臣と申しける。所以を詳しく尋ぬるに、此の人とつと色好み、どうもいはれぬ優男、明暮たゞをうなの思ひ附くわけのみを好かれけるに、常にりんの玉を弄ぶに、このみに思ふほどあらず、さるによつて哀れ唐國の玉は、勝れてよきと聞くに、何卒もとめたき折と思ふ折節、過ぎにし八月二十一日に朝鮮人來る。さりとは此の大勢の中に、彼の玉を持たぬ事はあらじと思ひ、ほんせい寺に行きてさまざま心つくし、代壹兩貳分にて求め出して身を離さず重寶せられけるに、友達の人來りて、「貴樣大切の玉を持ちたるよし、是非に貸し給へ」と深く所望せらるゝまゝ、是非に及ばず貸しけるに、この人もひたと用に立つならば、身を離さず洗湯へ行かれけるに、彼の玉袂にあれば、脱ぎ棄て置く、着るものに入れて置かん事も覺束なし、此の玉は正しく異國の重寶なるに、若し人に盜まれては詮なしとて、手拭に包み湯壺に入るに、圓きものなれば、どうしてか取り落しけん見えず、されども我湯壺にりんの玉おとしたりともいはれん、若しまた人の手に渡りたる事もはかり難し、さればとて詮議ならぬ物の事なり、是非なく歸りて彼のよし語られければ、この大臣深く歎き、さりとてはと思ひて、其の湯屋に行き通ひて、家に飼ひ育ての十四五なる女の童ありしに、未だ名も附けず、あまあまとのみ呼びしに、是れを深く頼み、この湯壺の中へ面妖不思議の玉を落したる、あはれ取り得たらば、汝を我が婦妻にせん」といひければ、「易き程の事なり、

然し夜は見えがたし、又晝女の身にて大勢の男入り込みの中へ入りたらば、よも其の儘は歸すまじ、何如。」と思ひ煩へば、此の人しやうさらば汝裸體にて湯具に此の絲ゆひつけに、そつと其所に扣へたりと思ひなば、さのみ人のよもせまじと固く契約定めつゝ、若し彼の玉を取り得たらば此の繩を動かせ、我愛元にて引かんとて、上り場に扣へ居る。其の時彼のあま約束し、ひとつの手拭さげもつて湯壺の中へ飛び入れば、人々驚きわきへ寄る。其の隙に彼の玉を尋ね取つて出でんとすれば、四五人取りつく。豫て巧みし事なれば、あたりはかさかき玉をば押し込み、たゞかたわきへぞ伏したりけり。湯屋のならひにかさかき忌めば、あたりに近づくぬれてもなし。其の隙に約束の繩を動かせば、其の人喜び引き出したり。されども強く引きたる故に、上り場にて胸をや打つて、五體もすくみうち伏しぬ。彼の人歎き宣ふやう、「玉もいたづらになり、ぬしも空しくなりたり。」と、共にうち伏し給ふ時、彼のあま息の下にて申すやう、「我が臍のあたりを見給へ。」といふ。げにも臍の〇〇に〇〇あり、彼の〇〇より光明赫耀たる玉を取り出して、彼のあまもやうやうかいしやくし、つひに身請して女房にせられた、金持色に愛づる大臣と申すなり。

くだり謎

（此の項省く。）

ばゝが寺請狀

町々はこれまで宗旨の御吟味強ければ、女男ともに皆寺請狀を大屋取り置く程に、さる所にかはりたるばゝあり。娘二人もちしに、此の頃二人ながら浪人して宿に居る。されば大屋から寺請狀取つておこせといはれた。今日あたゝかなるとて二人の娘伴ひて御寺へ行きしが、此のばゝ可笑しき癖にて、何時も後にいふ事を前にいふ。お寺樣の住持に御目に掛り申し出しけるは、「今日は日和もよく長閑なるまゝに、娘共二人ながら連れて參りました、御大儀ながらして下されませい、私のも序にして下されませい、年寄りましたさかいに、またまゐりますも大儀ぢやほどに賴みます、寺請狀を。」といへば、「さて／＼可笑しき物のいひやうぢや、後にいふ事を前にいふさかいで、餘の檀那に聲ごしなどで聞かせられぬ言分ぢや。」と思ひながら、「尤も娘達にしてやらうが、おのしも一度になるまい。おれもたつた今茶の間で、二本かいて草臥れた、卒堵婆も。」といはれた。

作藏が片言

南元屋町二丁目に去る浪人田舍者を使ひけるに、何やらの垣に懸りたるやうに、なま長き男なれば名を作藏と附けたり。常に片言をいへば、更にわけきこえがたきほどなりしに、或時夜に入りて火事の出來けるに、彼の作藏に見よといへば、屋根に上り見れば、火の手まぢかく見ゆる。檀那何處ぢや

といへば、「さて／＼息がつたが道理おや、へか近いことといふ。磯部また片言叶かすといふに、傍の屋根に上りたるもの、「さて／＼火の粉も夥し、和田倉の方に見ゆる」といふを聞き、屋根より覗けおりて、「おかみさま、御用心なされませい、火事は〇〇でござりますと申しますが、〇〇〇〇ふらり／＼とまゐります。」とくらはせた。

體の家道具

去る人申しけるは、「世のなかの諸道具、家居門戸いづれも人の體をへうす、人の體に皆あり。」と申しけるを、如何にと問へば、「人の體に先づ胸板とて板あり、ほゝ桁しり桁とて桁も二所にあり、よつばりとてはりあり、兩手はうでぎなり、ほゝがまちとてかまちあり、鼻ばしらとて柱あり、ひたひとて庇もあり、斯樣の道具皆城の用にもちゐる。」といへば、其の城はと問へば、「うしろとて城あり、中にめいもんといふ門あり。」「その門に出入あるか。」と問へば、「出入の爲に口あり、よきも通る、あしきも通る處なれば、大事の關所なり。あるによつて口には物を列べたり、やりおとがひとて桧あり、「先は行き止りか。」と問へば、「裏門あり。」といふ。「表の口にははものやりあるに、肝腎のぬけみちに用心道具はなきか。」といへば、「愚かなり、先づ用心の爲に、より棒あるが合點か。」といへば、「まことにより棒あり。」といふ。「されども棒ばかりにて心許なくば、先づと用心道具を見せうか。」といへば、

如何にと問ふ。南方の足を投げ出しては、さ○ま○、膝を折りては、つ○ほ○。

兄さまの料簡

爰に花屋の茂兵衛というて五十許りなりしが、子二人あり。兄は二十一二、弟は十二三なりける。南風烈しく吹きて、見世へ塵埃夥しく吹き上げける程に、兄の太郎介を呼びて、表へ水を打たせけるに、弟の次郎は表の緣に腰かけてける折節、母親近所へ禮に行きけるが、年ばへは四十路に餘れども、心は春めきてわかく／＼としたる人なれば、伊達染の著るもの、繻子の巾廣帶して、となり引き繕ひて歸られし。次郎見て、「いよしなものめ、ほつといふもの。」というて、母の尻を叩く。親爺見て、「大たはけめ、それ頭をはりやれ、母にその樣な事するものか。」といへば、母親、「さて／＼馬鹿め。」といふに、親爺、「そのやうな事をさせつければ癖になる。」とて、背中を思ふさまに叩く。次郎夥しく泣けば、兄かけ來つて、「何者が叩いたぞ、誰に叩かれた。」といかつがましくいへば、親爺、「おれが叩いたが何とした。」といふ。「如何に親爺ぢやとて、正月しまに叩かしやるは、如何やうなる科しました。」といへば、親爺、「さて／＼親が子を叩くが何ぢや、いひわけをせまいと思へども、餘りおのれいひがましければいふ、母親の尻を叩くさかいに、おれが打つたが何とした。」といはれて、太郎、「それは親爺の道理ぢや、おのれは何故男のあるものの尻を叩くぞ。」というた。

芝居太夫元の日待

木挽町太夫元にて日待ありしに、餘り夜長なるに少し慰まんとて、うち寄りてこうをしけるに、一人が胴を取らんというて胴を取るに、去る名ある役者なりしが、ひたまけに敗けるほどに、後はそこにあたりの金を借りて皆まけた。氣の毒に思ひ、「此の上は是非なし、是れを張らう。」といふ。我が抱への野郎を呼び出して張る。しかも名あるものなり。さきのもの「是れは迷惑でござります、餘りひきもござらぬに。」といへば、「是れは捨てても三十兩がものはあるが、おのしはうきやらぬか。」といへば、「左樣なる大賭博はいやでござる。」といふ。「さて／＼おのしは宵から何程とられたと思やる、是れがしまひぢや。」とてほんにする。傍なる人のいひけるは、「それはさりとては不覺でござる、二つにわつて張らしやれ、宵から見るに親も人目はござらぬ、貴樣のほんかちで敗けさしつた、二つにわれば縱ひ親の目がようて、首を取られても尻は殘ります、尻さへあれば、何時でも客はなる。」というた。

心ばかりは我が物

去る人吉原へ見物にまゐられけるに、さも尋常に扮裝つたる若き男きたる。揚屋町の木戸際にて見れば、「お出でなされました。」といふ。さりとては合點行かず、「どなたでござる。」といへば、「お前店に居りまする指物屋半兵衛が弟子でござります。」といふ。「さて／＼六藏か、是れは／＼今朝も會うたに

見忘れた、おのしはきりとては衣裳持かな、此のけとろめんの羽織は何時拵へたぞ。」と問へば、「借物でござります。」「此の紬の白小袖は。」「是れも借物。」「此の唐棧の著物は。」「借物。」「此の棧留の袴羽織は。」「借物。」「扨々結構なる脇差かな、是れも借物か。」「なか／＼。」と申す。「此の印籠巾著は。」「なほ借物なり。」「下の帶はおのしか。」「いや旦那のを借りました。」彼の人あきれ果て、「扨も借りたり借りたり、○○こばかりぢやが。」といへば、「是れも借物なり。」といふ。「是れはどうして借物ぢや。」と問へば、「皆人が○○のものぢやと申すさかいで、是れも私のとはいはれまい。」

鹿の巻筆　大尾

跋

嵐に散れる木の葉も、陽氣を急いでまたほの芽立ち、秋は心の細々に紅葉の色、かはりたる世の中、讀むとも盡きぬ話の、ほんに古めかしも、庭の興によつて改まること、聖の言語に昔を温ねて新しくはなす、是れ才覺たるべし。されば跡かたもなき虚事を見て來たやうにいひのゞへたる、業たる女が源氏六十帖に譬りを取り集めたる一と草は、林に繁き落葉などに譬しけれども、蓮氏が心に叶へて、道の巧みなるに觸れたり。さるによつて此の後よりは、はなし問屋と名づけ、一冊に撰じ出すものなり。御望みの方々は板本まで、御書付御越しあるべく候。蓮氏吟味を遂げ書き入るものなり。

元祿九年巳六月

作者　蓮野武左衛門

新話笑眉

作者未詳

新話笑眉序

風聲水音も是れ天地のはなし、況んや人として束のまも、たゞに默りてすごさんは、いと本意なけれ。はなせやはなせ有事無事、そこから一つ爰から二つの數を集めて、此の一卷とはなりぬ。開いてみれば、ヘマムショ入道も、笠をぬいで頭をたゝき、眞向の布袋は、無遠慮なる腹をかゝへて、しほの目し給ふ顏ばせを名として、惠身のまゆとはいふものならし。

正德二年たつの正月吉日

新話笑眉目錄

巻之一

一 椀飯振舞
二 章でしらする文字の作意
三 見たて影法師
四 龍宮のあやつり
五 繪師のりくつ
六 祈禱者の麁相
七 下手の談義
八 水中の樣
九 大悲の利生
十 盲人の七日參り
十一 初心なきつね
十二 かはつた相撲

巻之二

一 釣舟のうらかた
二 河伯の出來口
三 鷄 鳥もんだふ
四 春雨四天王
五 道中附の二度讀み
六 關取の藝所望
七 夜明のとりちがへ
八 身は寒けれど口は大名

九　川ごしの順禮　　十　こまつた挨拶
十一　狐のしやれ　　十二　日待の雜談

卷之三

一　新藤戸　　二　松に寄る鯛
三　淺間が嶽　　四　乞食張良
五　文盲の柱暦　　六　佛前の寶鏡
七　腹をかゝふるかへるさのかご　　八　律儀なうたひ嫌ひ
九　鐔のほめすごし　　十　盤上の出來口
十一　大學講釋　　十二　片言禁句

卷之四

一　蜀江の翼　　二　寸尺の取りちがへ
三　朋友の料簡違ひ　　四　祕事は眼目
五　年は經ぬれど新しい口　　六　化生のはいかい口
七　客のはじまり　　八　町代の律儀

九　錢を趣向に狂歌の返答
十　麁相のほめ過し
十一　野郎の心中
十二　一向宗の尤もな不審

卷之五

一　日本人のはまり
二　僕が作意は御無心の種
三　料理人のとんさく
四　馬耳東風
五　番太が料簡違ひ
六　かなの讀みちがへ
七　豆腐やが聞き違ひ
八　云ひなし樣でをかしい病氣
九　直をしてはまる商ひ
十　樵夫の名言
十一　比丘尼の心中
十二　五兵衛が安堵

目錄終

新話笑眉巻之一

一　椀飯振舞

或人椀飯振舞にゆかれ、歴々の中にて例の癖出で、指を鼻の穴に入れ、鼻毛二三本づゝつとひきぬいたれども、膳にはおかれず、左右の客もじろ／＼見る。をきめ所なければこまりはてゝ、また元のはなのあなへさしこまれた。

二　章でしゆする文字の作意

片膝立てて三味線をいだき、縁がはの柱にもたれかゝり、當世の歌や道行一つ二つ引きかゝれば、かたはらよりびく／＼とすると、文字ぜんさくしたがる者出でて、「只今御引きなさるゝで思ひだした、さみせんのばちと云ふ字はどう書きます。」ととへば、「撥、かう書きます。」と疊へ書いて見せる。「御早書ゆゑ片がしれませぬ、木片でござりますか。」「いや木片では御ざりませぬ、手へん／＼。」

三　見たて影法師

海邊を通りける旅人、蛸の足喰ふを見て、常々咄には聞き及びたれども、眼前見る事今が始めなり、

とくと見てゆかんと思ひ立ちやすらへば、又友だち來り云ふやう、「さて／＼貴樣は見苦しき形かな。八本の足を七本まで喰ひ給ふ、今少しはやく來りたらば、それ程まではくはせじものを、足たゞ一本殘りていかう見ぐるし。」彼の鮹聞きて「それ程見にくきや、さらば水鏡を見申さん。」とて、海水に形をうつし見て云ふやう、「てんと團扇だまで。」

四　龍宮のあやつり

龍宮に能芝居出來て、ごばん人形／＼とよばはり立つれば、大小の魚こぞつて見に行く。中に櫻鯛とおぼしくて、ほむき出しひれをいからかし木戸口にかゝる。「いづ方よりの御客ぞ。」ととがめられて、「自分は夷三郎客。」と云うてずつと通る。次にゆる／＼と油ぎりたるうなぎ、是れも木戸口斷りなしに通らんとするを、「いづ方の御客ぞ。」ととがめられ、「拙者は虛空藏菩薩家來。」「夫れなればお通りあれ。」次にむく／＼としたる大きなるなまこ、わうへいらしくぬつとするを、「是れはいづかたより。」ととがめられ、「私は業平者。」

五　繪師の理くつ

細工繪を好む人、燒筆を持ち唐紙引き寄せ、なにやらちらり／＼と、下繪書いてゐらるゝ所に、日頃心やすき近所の人來り、「何の繪をおかきなさるゝ。」「いやちとお待ちなされい、今しれます。」と、

墨にて歴々とかくを見れば、くゝり頭巾かぶりたる親仁、居風呂に入りたる繪なり。見る人「是れは大黒さうにござる、だうけたるお繪かな、いかう面白い。しかしいかな大こくでも、ゆへ入るにづきんは著ますまい。」といへば、亭主、「さうではござれど、づきんがなければ素人にまがひます。」

六　祈禱のそさう

いつか先に降つた儘やら、思ひだされもせぬ長日でり、近在の百姓、氣の毒に思ひ、江戸のそんじよう其の町に、奇妙なる法印有りて、雨の祈り大めいじん、祈りもはてぬにはや雨がふるげな、此の人たのめと、お山伏の方へ人をやり、右の段たのむ。法印心得たりと立出でたつ。其の日の裝束は、かきの衣に大太刀はき、ごよふちおりの様なる頭巾をいたゞき、いら高數珠、金剛杖、其の外衣ふく等、爰をはれと綺羅をやり、葛西の方へおもむく。路次にてしる人出で逢ふ。「法印いづかたへ御ざる。」といふ。「けふは賴まれて雨の祈りに參る。」「さう見えていかうりつぱな御裝束、でがようござる。」山ぶしきいて、「されば／＼ふらねばようござりますが。」

七　下手の談義

いで／＼聽衆のねむりさまさんと高座に上り、殊勝らしい顏してかね打ちならし、選擇集など何やら卷を開き、頂戴しておだんぎにかゝられしが、かの說きて殿辯がわるうて、したゝかなるおへたな

れば、五人歸り七人へり、やう／＼跡に二人殘れり。夫をばしらで、和尚はありがたさうに目をふさぎ、「只りんじう正念南無阿みだ佛／＼と御となへなされい。」何れもといはうとして、目をひらき見まはせば、ちやうじゆはすきと逃げ歸り、殘りては我共に三人なれば、高座を、つとんとたゝいて、「な御兩人。」

八　水中のためし

誰やら父もしれぬ子をはらみし下女有り。はたしてうみ出しければ、内のうばやら物ぬひやら大勢寄り合ひ申すやう、「さて其方は、いつのまにかやうに子をはらみしぞ、夫はたぞ、つゝまず言や。」とせめかくれば、下女赤面して、何のいらへなし。其の時物ぬひかう者なるものにて、「か樣な男のしれぬ子には、親のしり樣がござる、たらひに水をくみ胞をひたしますれば、男の定紋が胞にあらはるゝものといひ傳へました。」とて、たらひに水汲みえなをひたし、「さあ／＼うば殿御覽なされい。」「どれ見ませう。」と、のぞき手を打つて、「是れはしたり紋盡しぢや。」

九　大悲の利生

日本廻國六十六部のひじりと、さもいかつがましくどしめく修行者、兩國橋を渡りかゝりしに、折節川の中にさんげ／＼六根罪障、大山大小もさゝぎ、しかも丸はだかなる垢離とり共、丹誠をなして

らいはいするを、往來の人大勢立ちどまり見物す。修行者も「ちと我にも見せ給へ。」とて人の中をおしわくれば、もぎだうなる無分別ものありて「爰な六十六部めは人をつきのけ見たがるわ。男を見そこなうたか。」といひさま、むなぐらつかんで川の中へなげ入るれば、有りがたや大悲觀世音菩薩、紫雲に乘じてあらはれ給ひ、もつたいなくも左右の御手にて、六十六部が尻を抱へ、橋の上へおし上げ給へば、修行者は最前の奴をとらへ「己めにくいやつかな、たちまち報いを見せん、うぬがせしごとく川の中におとすぞ。」と、まつさかさまにつきいれければ、やつこ「何と觀音樣われらをばすくひ給はぬか、南無觀世音〳〵〳〵。」ととなへければ、觀音是れを御覽じ「なんぼすくひたうても、やつこのはなりませぬ。」

十　盲人の七日參り

兩眼がしひては半分死んだも同じ事、至心に佛ぼさつを祈らば、又ひらく事もありやせんと、淺草の觀音へ日參、一七日め其の夜は寶前にこもり、祈念を致しながらとろ〳〵と眠りければ、有難や大悲觀世音顯はれ給ひ「汝が願望何とぞ叶へてやりたし、併し當分目玉の出來たがない、屹と思ひだしたり、惡七兵衛景淸が兩眼、むかし我に預けたり。先づ〳〵是れを得させん、善哉々々。」と唱へ給ひ搔きけすやうにうせ給ふ。夢さめ兩眼を開きあたりを見まはせば、何にても殘る所なくあきらかに見

ゆる。是れはく有難や忝しとふし拜み、我が家をさして歸るとて、淺草橋の見附の内より、ねはれたる様なる貌にて、ゑぼし白張きたる鹿島の事ふれ、ひよこくとくるを見付け四五間とござり、脇ざしにそりを打ちて「それへきたらせたまふは、まさしく右大將賴朝なり、かくごなされいく」

十一　初心なきつね

龜井戸の藤見にゆかんとぶらくと行きけるに、小狐此の男を見てばかさんとや思ひけん、忽ちうつくしき若衆にばけて來り、あとや先になりて行きける。此の男はじめより化けたるを見すましけるが、態としらぬかほにて「是れくお前はおひとりさうなが、どこへ御出でなさるゝ。」といふ。「いや私は龜井戸の藤見に參ります。」と云ふ。かの男「私も藤見に參ります、幸ひの事御同道申しませう。」「さやうならば御つれなされて下されませい。」と打ちつれ、程なく龜井戸に着く。ふぢ最中盛りなるを見ありき「いかうくたびれました、酒一つ上げませう。」とて茶屋へ寄り料理拵ひ付け、かの化若衆にひじひにくはせ「日もたけました。いざ歸りませう。」と打ちつれ、元來し道に歸りけるに、はじめ化け出でし所とおぼしき邊にて、かの若衆「私は此の近所の者、扨々けふはかたじけなうござります。」といふてわかれける。かの男跡よりかの化若衆をつけて見けるに、狐の穴とおぼしき所へはひりける。穴へ耳をよせひかそかに聞きゐたりしが、穴の内にて云ふやう「扨々けふはいかう馳走

にたつた。」と云ふ、「それはどこにた。」といふ。「されば／＼」と右の趣をかたる。親狐にや有りけん云ふ樣、「だまりやれ、それは馬糞であらう。」

十二　かはつた相撲

そんじようそこに勸進相撲あり、いざ見にゆかんと、四五人うちつれ行きけるに、相撲程なく始まり、段々取りける程に、寄りの方よりいかにもたくましき男出でける。名のり合はせて、行事がいざと聲をかけ、兩方既に組み合ひけるが、暫しが間は勝負は知れざりけり。えいやつと云うて目より高くさし上げ、「あゝ見えたか／＼」と下より聲をかくれば、さしあげられてゐながら云ふやう、「いやいや見えぬ／＼、若しなげて見よ、左の方へなげたらば、僕の胸腹けやぶらん、右の方へなげなば、右のひさけをらん」などといへば、此の男なげられはせでこまりはてて、やはりさしあげてゐながらいふやう、「人ごろしよく。」

新話笑眉卷之一　終

新話笑眉卷之一

一 釣舟のうらかた

だまれ〳〵喰ひさがつたぞ、此のやうな時高聲すれば、魚がにぐるものぢや、さあ〳〵こはぜがかかつた。」「こゝな人は何をいやる、まだ釣竿をあげもせぬに。」「いやどうでもちがひはない。」と釣り上げて見れば、こはぜなり。「何と我ををつたか、此の次には小ぶなをつらう。」といへば、又小ぶな、うなぎといへばうなぎ、「是れはこれは我折つた、何としてしれますぞ。」「是れには大事のくりがござる、一つ二つ云うてきかせうか。」「夫れはよう御座らう、教へたまへ。まづはじめのこはぜはいかなる占ひぞ。」「されば水中にはりを入れると、一度に懐中の鼻紙袋がうごきましたさかいで、こはぜとはうらなひました。」「扨もきこえましたる占ひかな。」「また只今の鰒は、時ならぬやつがかゝりましたの、うゐたへふぐ、まぐれあたりでござらうと存ずる。」「どうしてふぐとはうらなはしやれたぞ。」「されば〳〵大事の事の、釣竿に死脈がうちました。」

二 かはつた出來口

淺草川のかつぱ若衆に化けて、三圍の土手下涼み舟のかゝりたるあたりを、氣の毒さうなかほしてゆくを舟より見付け、へうきなる男舟ばたへ出で、「若衆さまは何ぞ落し給ふか。」といへば、「仰せの通りはな紙袋をおとしました、其の中に大切なかいた物がござります。」といふ。「それこそ私水中は得もの、取つてしんじませう。」とてはだかになり、川へ入りさまに、「取つてはしんじませうが御合點かえ。」と云ふ。化若衆聞いて、「夫れは此方に望みでござります。」

三　鷄烏問答

或時鷄とからすと出で合ひてはなしけるに、烏にはとりに問うて曰く、「私の夜明に時を定めて鳴くさへ、奇妙なといふ人あり、貴鳥は時々をたがへず鳴き給ふ事、數學によりてなる事か、さりとはふしんに候。」鷄答へて曰く、「是れにこそ大事のならひ候へ、われら時のつくりやう極祕なれども、御志深ければあらく語り申さん。先づ天の行度を能くしり、日月星辰すわり能く見覺え、夫れにならつて鳴き申す事なり、至りては重々口傳。」と、自慢顏してしさいらしくいへば、烏あへて問ふ、「扨々むつかしさうな事かな。しかし爰に不審有り、雨ふりや闇の夜には何を目當になさるゝぞ。」には鳥是れにこまりて、「正直はめつた鳴きぢや〳〵。」

四　春雨四天王

春の夜の降り暮したるつれ〲に、賴光の御前にはいつもかはらぬ四天王、茶のみ雜談さま〲に蛇むじなの物語とり〲なる中に、坂田金時口不調法なる男にて、むつ〲として居たりしが、何とかしたりけん、屁一つ三つぽん〲と取りはづしければ、座中眞貌になるも有り、くつ〲と笑ふも有り。其の時金時眼を見出し、きばをかみこぶしを握りて云ふ樣、「天晴眼にさへぎるものならば。」とそこらをねめまはしたは、いかい候の。

五　道中付の二度よみ

「朝鮮扇十三文、模樣はだん〲御望み次第、道中付もござります」と、賣りあるく處へ、うつけたる男來り、「どれその道中付の扇望み。」とてかひとり、そろ〲開き讀みながら行くに、まづはじめに品川より川崎への道のり、其の次だん〲上方までの宿次を、扇兩面をよみをさめ、なんの心もなくうかうかと扇をかへし見れば、又品川川崎とあれば、うつけものぎやうてんして、扨はばかされしと心得、指の先に唾を付け、左右のまゆ毛をひつたりとぬらして、「油斷はせぬぞ。」といふた。

六　關守の藝所望

地獄の道に新關をたて、まぎらはしき者を吟味し、其の中に藝の有りさうな者をとらへ、役者のこわ色杯望みて聞きかゝりける所へ、いかにも絲びんせいの小作りなる男來る。せき守の鬼かれをおさ

へ、「汝は何ぞ一ふしいへさうなやつぢや、なんでもいへさあ〳〵」とせがむ。「それなら半太夫ぶしかたりませう。」「夫れはよからう、俺が三味線ひき申さう、小鬼共そのさみせん〳〵」とひきかゝれば、夜あけ烏もいはばきけと語り出し、順禮が情にてまでかたり、跡の鬼一口がさし合ひ、何の氣もつかずうか〳〵とあんぜしが、爰できれてはなるまいと、いんぎんにこそ語りけり。鬼樣口をのがれしもといへば、あかおに三味をなげすて、「此の男はぶひやうしなる奴かな、じあまりで三味せんがひかれぬわ。」と腹をたてた。

七　夜明のとりちがへ

年たけたるかけま、もはや勤めやめてよい頃ぢやとて、吉日を選んで元服し、以ての外に大きなるぶてうはふな名をつき、よいきみぢや〳〵と月代をなでまはし、したゝか酒をのんでねぬ。夜あけがたに目覺め、おぼえず我が月代へ手をやり、やはり前の氣で「もしえ〳〵夜が明けました。」といふ。そこうなわろの。

八　身は寒けれど口は大名

尾羽をうちからしたる浪人、なに程の寒氣にも垢ぴかりのする袷ひとつ、やぶればかまをもめん絲にてぬひ合はせ、大小のつか頭落し、さやのわれたるを古元ゆひを墨に染めてくゝり、それでもはな

さぬくゝりづきん、じふあんつくりてはりひおし、通町を行くむかひより、町人のちかづきけるをとらへ、頭巾もとらずに「扨々久しや、おてまへは身共が方へはすきと見えぬ、近日ちと見えたらよからう。」などと、横へいにいひちらす。町人もよいかげんにあいさつして立ちわかれければ、あとよりともの、「もし檀那様、只今のは何やつでござります。」「あれは浪人衆ぢや。」「何にもせよつないやつかな、あの様なものにおかまひなされずに、見ぬ貌で御通りなされたがよい。」といへば、主人、「いや／＼、あの人は横へいながよい、あのなりでいんぎんなれば、乞食にまがふ、あれでもつた人ぢや。」

九　川越じゆれい

世間にはやるくわん音講中、十二三人も云ひ合はせ、秩父順禮と心ざし、祖父祖母まじりに、一ばんにはとゆりかけうたひながら、五六番も札打ち、かなたこなたとめぐりありく。道に小川いくつもおほかりしに、一ところはゞ廣なる川へ行きかゝり、「何とやらんふかさうなが、此の内に水心しりは坐せぬか。」と云うて、川のおもてを見まはせば、先へ壹人わたる男有り、中ほどを渡るを見れば、首許り出して行く。講中見て、「川のふかさも大かたしれた、あれよりふかい所はあるまい、いづれも渡り給へ。」と云ひ合はせ川に入り、行けども腰だけなり。是れはしたり先の男は首だけなりしが、今の

間にもや水は落ちまい、是れはくわん音御かごならん。」と、先の男を見やれば、やはりくびだけにて渡る。いかさまふしんなる事と目をつけて、くがへあがるを見れば、道理こそゐざりぢや。

十　こまつたあいさつ

此の裏にかし店有りとのはり札に付き、其の家主の方へ行き、「かし店の見えまする、かりましたいが。」と望む。「御商賣は。」といへばつきごめやなり。「夫れならばなりませぬ、家がひずむやら、柱が下るやら、たまるものでなし。」とてかさず。又其の跡より色黒くせい高く、がんじやうなる男來り、「御店かりましたい。」と云ふ。「御商賣は。」「井戸掘。」「以ての外なりませぬ、先程つき米屋にさへかしませぬ、ねだも何もたまつてこそ。」「是れはがてんの參らぬ御あいさつかな、つき米屋とちがひ、先々を歩いて掘りますれば、御家のかまひに少しもなる事では御ざらぬ。」といはれて、家主、「私は手前でほりてうるのかとおもひました。」

十一　狐のしやれ

ある隱遁者めせきの笠に桑のつゑにて、ぶら／＼遊びに出られしが、道にて心あひの人につい知人になつて、連立ち行くに、龜井戸へ行くかと思へば根津に來り、根津かとすれば佃島邊なり。不審に思ひ、板へぎの様なる小脇指に手をかけ、「己め何ものぞ人間ではあるまい、正體を現はせ／＼。」と

せめられ、彼の男後むきになり、しぶ〳〵ふる尾を出して、「正直は是れで御座りやす。」

十二、日待の雜談

春の始めの日待なればとて、一家一門は申すに及ばず、常にはなす友だち、あたり鄰の心おひ呼びあつめて、酒えん碁將棊雙六や、遊藝さま〴〵事をはり、よも山の噺になりぬ。かたはらより進み出て云ふやう、「あのするがのふじは、建久四年のいつ何日に出現したと申すが、一夜の内には扨々大きな山が出來ましたの。」と云ふ。物知り顏なる親仁すゝみ出て、「否々それは俗說なり、それより前の富士の歌が萬葉集にござる。」又一人すゝみ出で、「こなたのが道理ぢや、建久四年に出來たと云ふは僞り、是れもみな梶原がいひ出した事とおぼしめせ。」

新話笑眉卷之二　終

新話笑眉卷之三

一　新藤戸

是れは佐々木三郎盛綱にて候。扨も今度藤戸の先陣を仕りし御恩賞に、備前の兒島をたまはつて候。今日吉日にて候ほどに、只今入部仕り候。所の人の渡り候か。狂言處の者の御尋ねは何事にて候ぞ。ワキ近頃申し兼ねたる事に候へども、此の所不知案内の者にて候、急用に候間廁を教へて給はり候へ。狂言狂言いや〳〵此の事においてはなりますまい。なぜに。うらををしへたら又殺されませう。

二　松によする鯛

若殿樣鯛があがりたいとおしやる、それ〳〵とありければ、小鯛の燒物ぴん〳〵としたるを參らする。片身まゐり今一つ喰ひたいとの御意、替りなければ何とせんと思案し、御庭の松を御覽遊ばしませと云ひ樣、うらがへしまゐらすれば、其れも皆あがりしまうて、「何と今一度松が見たい。」との御意ぬかるものではない。

三　淺開ぶだけ

かたい日蓮宗土用干するとて、箱の底より眞黑になりたる紙に、よささうな手跡で、なにやら經文の書きたる紙ぞ出でければ、不審に思ひ裏の方をかへし見るに、法然上人の御手跡とありしじやうに大きに腹を立て、「身共が家にかやうの物有るべきやうなし、何者か入れ置きけん、さながら捨てられもせず、さらば火中せん。」となくをはづさせ、焼火の中へ打ち入れければ、ふしぎやな煙のうちにもめん衣に手巾ひつさげ、膝切りのぬのこ著て股引したる道心者あらはれ出で、首に懸けたる鉦鼓打ちならし、念佛ひたまうしに申せば、此の男彌腹を立て、さま〴〵しかりても消えも失せず、女ばうかしこきものにて、かまどのきはへつか〳〵とはしり行き、「是れ〳〵御坊宗旨が違うた。」といはれて、かき消すやうに失せにたり。

四　乞食張良

白髪たるしはき親仁、あたらしき雪踏をはき、橋の上を通りしが、何とかしたりけん、せきだ片て川の中へおとし、あたりを見廻せば橋のもとにひとりの乞食有り、「その方が名は何といふぞ。」ととへば、「長兵衛。」と答ふ。其の時おやぢ、「やあいかに長兵衛、あのくつ取りてはかせよ。」と云ふ。長びやうゑ易からず思ひて、「只はなりませぬ。」また親仁、「それならばしあんが有る。」とて、例のしはい

さん用を出し、殘りかた〴〵のせつたち蹴こみ、「さあ〳〵長兵衛兩方で一文やらう。」

五　文盲の柱暦

至極文盲な者、柱に略暦の張つて有るを見て、「あれは何と申す物でござります。」ととふ。「是れは柱暦でござる。」と云ふ。「其の柱暦は何になりまするぞ。」「扨々文盲なる人かな、一年中の事をしるものでござる。」「さては年中の事はなんでもしれますか、さやうならばちとたづねませう、今年のかほ見せに、嵐喜世三郎はどこへまゐります。」

六　佛前の寶鏡

「今日觀音參りいたし、至心に禮拜をなし、下向いたしますれば、きだはしによい鬢鏡が落ちてござりました、あたりの人に、何れものではないかと問ひましたれば、主はござらなんだ。」と語る。親仁是れを聞き、「其の御鏡は觀音の御授けであらうに、なぜに取りて歸らぬぞ。」と云ふ。「されば私も取らうとぞんじ、そばへよりつくばひ手まで出したれど、取りましなんだ。」「夫れはなぜに取らぬぞ。」むすこ云ふ樣、「下から人が見てゐました。」

七　腹をかゝふる歸さのかご

品川がよいして、所でも餘程はのきく男、ある時朝の歸るさに、亭主門へおくりて出で、「ちとお待

ちなされませ、かご申し付けませう。」とて、所のかごかきを呼び、「さあ／＼のしませい、ふとんがなうてはお居所がいたみませう。」と、内へかけ入りもめんぶとん引きさげ来る。「是れは／＼かたじけない。」なんど云ひて手にとれば、裏の方になにやら白きものあり、引きかへして見れば、そめぬきに踏馬御免と大筆に有り、「是れはならぬぞ。」

八　律儀な謠嫌ひ

うたひといへば七里逃げ、つゞみ太鼓には耳をふさぐきらひ有り。ある夜うたひ講の場所へ、ふと行きかゝりければ、三番め松風最中、曲へかゝる前にて、神のたすけも波の上、哀れにきこえしと大聲にてうたふ。歸られはせず、傍にいやながら暫くゐれば、曲のおし哀れ古へをと下音にかゝれば、かのきらひていしゆの袖を引いて小聲になり、「拙者はもはや歸ります、私への御遠慮ときこえます、やはり前の通り高う御謳ひなされませい。」とて、こそ／＼と逃げて歸つた。

九　鐔のほめすごし

古き鐔をもとめ、こしらへいかにもりつぱにして、ある座敷へさして行かれしに、「さて／＼見事なおこしらへかな、いかうしをらしい鐔でござります。」と云ふ。「されば／＼、よほど能いつばとぞんずる、しかし薄うござる。」といへば、「いや夏はようござります。」といふ。

十　盤上の出來口

心やすき座頭の坊夜咄に來りければ、亭主、「今夜ははなしを止めて、將棊にしませう、貴さまはいかうつよいときいた、將棊盤もてこい。」とて取りよせなほし、こまばら／＼とならべ、「さあ指しませう。」と互に向うてさせば、座頭は殊の外工夫強きものなれば、亭主よは　まけ色に見えける。をりふし燈、ふと消ゆる。「坊様すこし御待ちあれ。」と手をひかへをるに、座頭、「是れは何としてとゞこほりたまふぞ。」「いや燈が消えました。」座頭、「くらくてはさされませぬか。」「どうしてくらうてさされませうぞ。」ととう聞いて、「さて／＼めあきは不自由なものかな。」

十一　大　學　講　談

頃日文字讀しならひ、集註さへ讀みもせいで、はやかうしやくこそをかしけれ。「大學の道は明德をあきらかにするに有り」と讀み出して、何やらえ知れぬことをよきさうに取りつけ、一座かうじをはりぬ。おやうじゆの中より一人進み出で、「ちと尋ね申したき事有り、此の書の內に彼の淇の澳を見ればとは何の事にて候や、承りたく候。」講師の曰く、「よい御氣つきない、いひてきかせ申さん。」とて、いつかもなき事いはゞ、こそをかしけれ。「かのきのくまとは、唐土は大國なれば深山廣野多し、其の所の大木のうへ、熊があがりて晝ねして居まするを、唐人ども下よりふりあふむいて見た所をかく

は申すなり。」「扨々おもしろき説かた、其の下に乾たる君子有りとはいかに。」答へて曰く、「こなたはお若いが、肝要ばかり問ふ人かな、某もこゝには骨を折りたり、近き頃こびたる者にてかんがへ出し候、本草綱目で見當りました、ひたる君子とは、君子のゑいらになつたを申す。」

十一　片言の禁句

そんじようたれはじつの兄弟といへば、「少しも似た所なし、腹がはりならん。」と雜だんする中に、いかにも文盲にてしかもこびたがるもの、さし出で、「あれは私能くぞんじました、成程十死一生の兄弟でござる。」と、かほをあかめて云ふ。「こゝな人は麁相な人かな、一腹一生の事か。」といへば、「あゝさうでござります。」

新話笑眉卷之三　終

新話笑眉 巻之四

一 蜀江の翼

うつそりとしたる男、ある夕暮に天狗につかまれ、山々嶽々まはり〳〵しが、彼の天狗ちと草臥がついて、「汝もそこに少し休め。」とて、岩の上につきすゑ、其の身は羽をいう〳〵とのばし、泰然として坐す。彼の男何とぞまかれんと思ひ、天狗の側に近々と寄り、有りたけの智恵をふるつて、てれん云ふこそをかしけれ。「さても〳〵こな樣の羽は、日本ではつひに見ませぬ、渡り物か、なんといふものぞ、見事な物かな、四座の能太夫も此のやうな物は持ちませぬぞ。」と、めつたにほめはやせば、天ぐじまん貌にて、「さあといふて尋ねて見よ、今はこんなはないさ。」

一 寸尺の取りちがへ

段々寒空になれば、革頭巾がなうてもなるまいとて、切付屋へ行き、頭の本とらせて、もやういかにもだてにこのみ、いつ〳〵か出來ます、其の節取りに參らうとて、其の日になれば、「なんと先日あつらへた頭巾は出來候や、取りにまゐりたり。」「成るほど出かしました。」と取り出す。「是れは〳〵ふ

いお手ぎは、さらばきて見ませう。」と被れば、頭の木取りそこなひけるか、きしみてあたまいたむ。「紙をお出しなされませい。」とて、一枚頭へのせ無理にかりこめば、大かた入りぬ。「まだ思ふやうになし。」といへば、かはや云ふやう、「二三町おあるきなされますれば、とくと入ります。」と云ふ。たびかなんぞのやうに。

三　朋友の料簡ちがひ

上方へ久しぶりにて下りたる人に、江戸橋にて出で合ひ、「扨々お久しや、いつお下りで御無事か、何として長々御逗留、定めてよい事づくしで、お下りが遅かつたと存ずる。」といへば、「いや／＼御察しと違ひ申し候、拙者妹が死にました故に、久々とうりう。」と語れば、聞きもあへず手を打つて、「夫れは誰とえ。」とて氣もつぶれ貌、上がたの女がしんだとさへいへば、とかく心中と心得たは一笑。

四　秘事はまつげ

今月は祝ひ月、殊にけふは朔日、神明參詣にまいかと、二三人誘引し、芝飯倉の方に行けば、宇田川橋のうへ、したゝか荷付けたる馬引いて行く。連だちのうちとんできもの飛びかゝりて、馬の尾を四五本指にからんでぐつとぬく。其の内年かさなるもの、かのとんできをしかりて曰く、「しりたまはず

や、馬の尾はぬくものではなし、いかうしさいの有る事なり。」とて、ぎやうさんさうにしかられて、「扠々ひよんな事しました、いはれの有るを夢にも存ぜず、かたりてきかせ給へ。」「いや／＼大事大事途中にて申さぬ事なり。」「きかねば氣にかゝる少しはなし給へ。」「しからば語りて聞かせ申さう。道ゆく馬に飛びかゝつて尾をぬけば、馬がいたがる。」

五　年は經ぬれど新しい口

六十の賀も、三四年先に過ぎたらんと見ゆる親仁、色町をうそ／＼のぞきありけば、遊女共見て、「扠も／＼其のふない貌で、爰らへは似合はぬ、きついしわかな。」と笑へば、「けふはしわが多い筈、夕たゝまずにねました。」

六　化性のはいかい口

獨り旅のもの、日は暮れかゝる、足を早めて山ぎはを行けば、どうやらそつと寒くなるほどに、ふりあふぬいで見れば、山のかひよりはな火しゆつしゆと出ると、例の幽靈太鼓どん／＼とうては、三里の灸あて額にあてたる幽れい顯はれ、やい／＼と呼びかくる。旅人飛びしさり、腰のものにそりをうつて、「狐狸の所爲ならん、正體をあらはせ。」と大音あげていへば、いうれいひたひをおさへて、ぶる／＼とふるひ、「おゝら峯くるしや。」と云ふ。かの男此のことばを聞いて、「扠は山のせいにきはま

つたこ」とて行き過ぎぬ。

七　客のはまり

ある夜四五人うちより、咄しゐて夜もいとふけけるに、鼠のさわぎあるき、梁をつたふを見て、こざかしき男猫の鳴きまねをしけるに、ねずみはりの上にてふりかへり見て「白人藝には餘程よい。」といふ。

八　町代の律儀

堺町中村市村両座共に新狂言、朝の六つから群集する事えいたう／＼、それ／＼のひいき／＼、竹之丞へ行くもあり、又勘三へ心ざすも有り。こゝに御屋敷の女中がた六七人、ふうりう出たち、或は中村源太郎がもんつけたるもあり、また嵐喜世三郎が紋付けたるも有り、おもひ／＼の役者のもん付け、ぞろり／＼とおやぢ橋を渡り、堺町の方へゆくを、見せもりの若いもの見つけ「扨も／＼だてなる女中かな。」といへば、どれ／＼というてとなりからも立ち、むかひよりも出で、方々の家々から若いものども、縁ばなへ出で立ちさわぐをみれば、自身番所より六十餘りのおやぢ、町代とおぼしきが出て、「わかいしゆ騒がせらるゝな、かはらのけぶりでござる。」

九　錢を趣向に狂歌の返答

すこし小ばいかいもせらるゝ樂人、金澤八景を一見し、夫れから鎌倉の谷々、其の外古跡共見めぐり、籠釋迦に參り、御本尊の開帳をのぞみしに、同宿がいはく、「錢百文御出しなされねば、拜まさます事なりませぬ。」と云ふ。風雅人例のくせをおこし、やたてより筆ぬき出し狂歌一首、

此のほとけ錢をださねば見せぬじやか

木じやかかごじやか扨は慾じやか

とかき、「是れ見給へ。」とて同宿に見せければ、此の坊主とんさくものにて直に返歌、

慾じやかといふはばかじやかたはけじやか

さてはうき世のあばれものじやか

十　そさうのほめ過し

始めて行きたる所にて、さまざまの物語ありて後、「さあさあ御ねころび有りて御咄し候へ。」と云ひながら、ていしゆ勝手より幼子を抱きて座敷へ出る。客の中にもそさうなる男有り、其の子を見て、「さてさてよいお子かな、御壽命もながからん、第一鼻の下がのびてよし、おとしはおいくつぞ。」と問ふ。亭主、「いやせん先月生まれ申したり。」麁相者、「夫れにはいかうおわかう見えます。」

十一　野郎の心中

すんど粋な男、舞子にふかくなじみ、ある夜のたはぶれに、「いかにしてもそこもとの心中の程、心もとなし。」などいへば、彼の野郎云ふ様、「私が心の程を、竹ならニつに割つて見せたし。」といへば、客、「いやく二つにわつたらくそがでよう。」

十二　一向宗の尤もな不審

祖父祖母つれ立ち御堂参りして、ありがたさうに本尊をらいはいし、さて同宿にちかづき、「こなた様にたづね申したきことあり。此方のしうしで、肴くうてもくるしからぬは、どうした事でござります。」同宿の曰く、「くるしうないしさいがござる、先づ我等がそしの御名が肴の名にて、しいら上人とはいひませぬか、其の上お師匠は黒鯛ぼね上人、それでわたくしどもの名も、どぢやう坊主と申します。」

新話笑眉卷之四　終

新話笑眉　巻之五

一　日本人のはまり

毎年江戸へ商ひにくる阿蘭陀人、品川まで來り、いつもよる茶屋に行き、江戸入なれば裝束などしかへ、亭主にむかひ、おらんだ口にて、なんの事やらいひちらす。ていしゆ通辭にむかひ、「あれはどう云ふ事でござる。」といへば、通辭、「あのことばは馳走の仕樣がわるい、料理が散々でくはれぬと腹立ていふ事なり。」と語る。ていしゆ、「さて〳〵にくいおらんだめかな。」と思ひ、用有りげにそばへ立ち寄り、日本言葉は通じまいぞとおもひ、つうじの聞かぬやうに、「己にくそをくらはせたい。」といへば、おらんだ人聞いて、「うぬくらへ。」といふ。

二　僕が作意は御無心の種

葛西あたりの草深い所がおもしろいとて、江戸から隱居したる人有り、隙さの儘に、あるときはふせへ參るの、鹿島へ行くのとて、大かた宿に居る事はまれなり。留守預りの僕に、うのくそ久六とて大氣なやうなる若もの有り、隙のまゝに毎日晝ねおこたる事なし。或時背戸の藪よりしたゝかなる狐

來り、能く寐入りたる所をこそぐりつ、はなげをぬいつ、さま〴〵になぶる。久六目をさましかつはとおき、彼の狐を取つておさへひざの下にしき付け、大の眼に角をたて「扨々うぬめはにくいやつかな、かゝるたいうのくそをたぶらかさんとは、なか〴〵ぞんじもよらぬ事、命をとらんと思へども、忌日なればたすくる、自今こゝへ來るな、若し來りてもまがひなきやうに、印付けてくれん。」とて毛ぬきを取り出し、耳の上までたうけん額にぬきあけ、それ行きをれとつきのめす。狐うれしさうに尾をふつて、藪の方へ逃げさりけり。其の後又晝ねしてゐる所へ、例の狐來り枕元につくばふ。久六むくと起き「またうせたか、此の度は殺すぞ。」とぎしめく。狐「おさわぎなさるゝな、化しにはきませぬぞ。」とて、たが〴〵とねころびひたひをさすりて「なんと隙ならひとつぬいてくりやれ。」

三　料理人のとんさく

ある手すき、くわしや看板を頼まれ、書きかゝりて司と云ふ字はたとわすれ、せつ用集など取り出し居る處へ、近所の料理人に、世話文字少し覺えたるもの來り「是れは何を御覧なさるゝ。」と云ふ。手かき右の段物語しければ「其の文字私覺えました、つかさと云ふ字の書きやうは、同じくと云ふ字を片身とりて、ほね付の方を用る給へ。」と云ふ。扨々相應なをしへの。

四　馬耳の東風

子曰道不レ行と本文をよみ、聖人の何と作られて、かう遊ばしてなどと講釋あるを、門弟の供に來る奴、臺所にて聞き、「聖人とは何の事。」と云ふ。儒者の僕、「扨々こゝな人は文盲な事いやる、聖人とは孔子の御事。」やつこ、「又孔子とは。」「はて古今第一の道しり。」といふ。やつこ聞いて、「何ほど孔子の道しりでも、番町に使やつて見たい、てきとまよはしやらう。」

五　番太の料簡違

何の國、何寺、本尊は誰の御作、れい寶も樣々有りと、削りたてたる横板に、墨黑々と大筆にしるし、町々の門へうつてまはる。往來の人立ち寄りこぞつて是れをよむ。あまり大勢あつまりければ、番小屋より親父棒つき出で、大ぜいの中へわつて入り、「扨々いかい人だかりかな、是れ〳〵いづれも見る事ではない、とほらつしやい〳〵。」

六　かなの讀みちがひ

かなよみそこなふ人、常政のうたひ本見て、「いかい歷々なれども、扨々あたらしい事かな、つね政はあはうさうな、それはなぜなれば、上歌の所にさればかのつねまさはとある程に。」

七　豆腐やが聞きちがへ

秋は夜長に、いづかたにも夜食くふ時分、六ツにもあまるべきと思ふおやぢ、とうふ〳〵と門をう

りありくを、小者立ち出で、「是れとうふ〳〵。」とよびかけけれども、此の親父我がよぶ聲に許りせいを入れて行くを、ひたとよびかけてもいらへなし。小ものはらをたて大聲あげて、「あの親父めは耳がきこえぬさうな。」とよばはるを漸う聞き付け、「いや〳〵今夜は耳はうり切れました、あすりはいれもてまゐりませう。」

八　言ひなし樣でをかしい病氣

いかにも文盲なる病家へ、いしや殿見まはれ、「なんとおやおきしよくはいかゞ、どれ脈見せよ。」ともみ手でかゝれば、おやおきを出しさまに、「まだ思ふやうにもござりませぬ、是れはどうした病氣でござります。」といふ。いしや脈を考へ、「どうしても是れは血熱の故おや。」といはれければ、婆進み出で、「扨も〳〵おまへ樣はふう脈御取りなされました、成程けつねつにきはまりました、夕べも尻をまくりてねやりましたほどに。」

九　直をしてはまる商ひ

四五人打連れ、江の島それから鎌倉と心ざし、七里が濱をおどけくるひながら行けば、海面を大なる鮹一つぶらり〳〵と行くを見つけ、邊なる獵舟を招き、「あの鮹取つてくれ給へ。」と云ふ。獵師聞きて、「我々はすきあひなり、隙らしき事をいふ人かな。」「いや錢を出すべし百文やらう。」「いや〳〵。」

「百五十文か。」「それなら取りてもしんぜう。」と、鮹の行くかたまぢかく舟こぎよすれば、かのたこるだけ高にのび上り、三百でもないとて沉んだ。

十　樵夫の名言

心あひの友四五人、いさなひさみながら湯治せんとて、木賀となんいへる所へ行き、こゝかしこ遊び歩きける。向うよりきこり一人來りしを、かの男に向ひて、「此の所の東西はどうぢや。」と問へば、「東西とはなんの事でござります。」と云ふ。「いやにしひがしの事ぢや。」木こり又いふやう、「おやすい御用なれども、昔から爰もとに東西はござりませぬ。」

十一　比丘尼の心中

奴ふかくあひたるびくにに云ふやう、「此の年月そちと懇にあへども、さしたる心中も見ず。」といへば、びくに、「指を切るべしや。」などいへば、「いや／＼それはいらぬ物、何ぞ慥かな心中が見たい。」といへば、「さやうならば重ねて來り給へ、わしが心中を見せませう。」といへば、奴嬉しく其の日は歸り、重ねて來りて、「いざけふは心中を見ん。」といへば、びくに、「いざ心中を見せ申さん。」と、頭巾をとるを見れば、いかにも高くたうけんびたひにぬきあげたり。

十二　丘兵衛が安堵

「やい〳〵、こちの五兵衛はうちにをるか。」「けふは頭痛がいたしますとて、二階にふせりてをります。」「はてふしぎな事かな。」といひながら五兵衛が側に行き、「やい〳〵。」とてゆりおこし、「先ほど梳町をとほれば、たふれもの有つて、大ぜいあつまりて見るほどに、我も立ち寄りて貌を見れば其方なり、南無三寶是れはしたり、先づ宿へ歸りせんぎせんと思ひ、大息ついてかけ歸りたり。」と語れば、五兵衛聞いてむくとおき、あいさつなしにかけだし、片時が間梳町へ行きたふれ者を見て歸り、「だんな樣氣つかひなされますな、私ではござりませぬ。」

正徳二年壬辰正月吉日

日本橋南三丁目

戸　藏　屋

新話笑眉　大尾

話稿 鹿の子餅

木室卯雲

話稿 鹿の子餅序

山の手を飛び歩行く尻やけ猿、下町にすむ腹つふくれし、いづれかおとしばなしをせざりける。こゝにその落ちを拾ひあつめたる帖あり、話の稿なれば、わかうの響あるをもて、鹿の子餅と題す。意味深長の旨味は、ひとつ〳〵讀んで御らんなされ、數は六百八ほどありと云々。

明和壬辰の太郎月

山　風

鹿の子餅

○桃太郎

むかし〳〵の桃太郎は鬼が島へ渡り、もとでいらずに多くの寶を取つて來たけな、これほど手みじかな仕事はない、しかし犬と猿ときじが供をしたとある、おれもきやつらをこまづけるがよいと、かの日本一の黍團子をこしらへ、腰につけて行く。向うの岩ばなに猿が出て居る、まへしてやつたりとうれしく、件の團子ぶらつかせ行き過ぐるを、猿よびかけ「おまへどこへござる。」「おれかおれは鬼がしまへたからを取りにゆく。」「腰につけたは何でござる。」「是れは日本一のきびだんご。」猿うかぬ貌にて「こいつうまくないやつだ。」

○牛と馬

「總たいけだものの中で、爪の割れた物は道が早い。犀などといふやつ、爪がわれて居るによつて、波を走る事飛んだこつた。」「ハテナ、しかし馬は爪がわれてなけれど道が早い、あれはどうしたものだ。」「あれは爪が割れて居ぬからまだ人が乘られる、あれが爪がわれて見やれ、不斷飛ぶやうで中々

人が乘られる物ではない。」「牛はどうした物だ、彼奴は爪がわれてるれど道がおそいわ。」「あれかあれは爪が割れて居るから道をあるく、あいつが爪がわれぬとだいなし、うごくこつちやない。」

○煙艸入

古代の裂にて煙艸いれを數々こしらへ、味噌を上ける者あり。望んで見ればいかにもおもしろききれあり、「まづ此のにしきはいかうけつこうなきれさうにござります、これはいつ頃のきれでござります。」「それは實盛がにしきのひたゝれのきれさ。」「いかさまさうもござりませう、又この蝶のちらちら見えますは。」「それこそ曾我五郎がはん切のきれでござる。」「してまたこゝに白地のきれに赤い所のみえまするは。」「そりや牛若の大口のきれ、そのあかい所はいがきのもやうのきれたのでござる。」「さてよくおあつめなされました、どうしてかうはあつまりました。」「みんな人形屋でもらつて來ました。」

○鞠

まりにはまつた息子へ、親父遠廻しの意見、いかな事聞き入れねば、ある時よびつけ油をとりて、「九損一德何のやくにたたぬ藝、向後ふつつりやむべし、鞠があれば蹴りたくなる、そのまりうつちやつて仕舞へ。」といふに、むすこしをしをと鞠を出し、手代をよび、「今までもてあそんだ此の鞠、無

下にすつるもあんまりぢや、せめて庭の隅をほつてうめ、しるしに柳をうゑてくりや。」

○俄　道　心

相店の八兵衛欠落して行方しれず、程少し過ぎて兩ごく橋の上でひたと出つくはした所、ごつそり剃つた道心すがたでもゆるさず、胸ぐらひつとらへ、「コリヤ八兵衛、坊主になつたとて、れうけんはならぬ、いつぞやの八百のかし、たつた今かへせ。」「これ坊主になつたと思つて安くするな、かうなつても心まで坊主にやならない。」

○盗　人

ぬす人の用心に親父藏に寢る、それでもぬす人來て家尻をきり、まう一人藏の内へ入れば、外の一人は持ち出す道具うけとる手筈でしやがんでゐたり。時におやぢ目をさまし、壁に穴の明いたるは合點のかずと、件の穴よりあたまをさし出したるに、外に居るぬす人「ム、やくわんから先か。」

○提　灯

夜ばなしの歸り、みち／＼家來と咄しながらもどれば、家來も咄が盡きて、「もし檀那此のちやうちんはたゞくさりをつけた物でござります。」「それはひよつとりふじんものが切つた時、きればはなれぬ用心ぢや。」「シテそのときはだれがもちます。」

○浪　人

雨のふる日は眞の浪人と來て、晴間まつ張肘の門口、おあまり貰ひが立つて、「おあまり下さいませう。」浪人、くるりと返つて、「あまらぬ。」

○馬鹿娘

なんぼ馬鹿でも十七なれば、もう袖をとめてやつたがよいと袖つめた日、近所のわかい衆が來て、「こりやおむす袖とめでたい、どりや見たい。」といへば、むすめ右の手をあげ、「コリヤどうともいへぬ。」といふ時、娘左の手をあげ、「こつちやも。」

○蕣

朝とく起きてやうじ遣ひながら、垣の透間から鄰を覗けば、寢みだれすがたの娘えんがはにこしかけ、あさがほの花をながめて居る。これはかはゆらしいと息もせずのぞき居るに、庭にさかりに咲いた一りんをちぎり、手のひらへのせて見る風情、どうもいへず、歌でも案ずるよといよいよゆかしく見て居たるに、今度は葉をひとつちぎりたり、なにするぞと見て居たりや、チント鼻をかんで捨てた。

○鼻捻り

殿の御好みで出來た鼻ねぢり、御預け遊ばされたにより、かんぷくみなこしらへ、これに入れて御次の間にかけた所、白うて見とむなければ、御鼻ねぢりと書き付けたが、御鼻ねぢりでは檀那の鼻をねぢるやうなれば、書き直して鼻御ねぢり。

鶉

うづら好ませ給ふお大名、承りつたへ、聞きにまゐる者へは御料理など下され、甚だ悦ばせ給ふよし、お出入の宗匠衆を頼み、私もきつい鶉好きと申し入れて、曉おきし行た所、さすがお大名の御手の廻つた事、朝つぱらからいろ／＼のおまごと、酒たらふく下されのみくらひして居る內、チチツクワイトの一聲肝をつぶして、「あれは何でござります。」

○御髭

御大名御髭を剃らせ給ふ時、お舌でお鼻の下や御頰べたをふくらませ給ふ。「なんとおれが髭を剃る時、したをまいてはたらかせ、ふくらませるで剃りよくはないか。」との御意。「イヤハヤ格別仕りよう御座ります。」「其の筈是れはおれが工夫ぢや。」

○御術指南所

諸流御術指南所と筆太なかんばん、人物くさき侍來りて、「何流なりとも、わたくし相應の流儀御

指南下され、御門弟になりましたい。」との口上。「其元様は、表の看板を見てお出でござりますか。」「左様でござります。」「ハテ埒もない、あれはぬす人の用心でござります。」

○蜜柑

分限な者の息子、照りつゞく暑さにあたり大煩ひ、なんでも食事すゝまねば、うち寄つてなにぞのぞみはないかとのくらうがり、「何にもくひたうない、そのうちひいやりとみかんなら喰ひたい。」とのこのみ。安い事と買ひにやれど、六月の事なればいかな事なし。爰に須田町にたつた一つあり、一つで千兩一文ぶつかいてもうらず、もとより大身代の事なれば、それでもよいと千兩に買ひ、さあおがれと出せば、むす子うれしがり、まくらかろく起き上り、皮をむいた所が十袋あり。にこ〳〵と七袋くひ、「いやもううまうてどうもいへぬ、これはお袋様へあげてたも。」と、のこる三袋手代にわたせば、手代その三ふくろをうけ取りて、みちから欠落。

○醫　案

これも一人息子、餘程の日數をぶら〳〵わづらひ、くすりや針の驗も見えねば、親父くらうがり、少し通り者を出し、心安い若いしゆをひそかにまねいて、「市之丞が病氣、引つこんで計りのやうじやうは、けつくめづらいでわるい、貴様たちは不斷も心やすいはこんな時ぢや、ちとさそうて遊び所へ

つれて行つて、氣を轉じさせて下さい。」との頼み。得手に帆とうけ合ひ、息子にあそびすゝむれど、一ぶんすゝみなく、どこへも出るはいやとのあいさつ。「さうでは濟まぬ、それなら船は。」といろ／＼にいへば、「何もかもいや、しかし芳町なら遊んで見たい氣もある。」といへば、安い事とおやぢに内々かたれば、「どこでも大じござらぬ、なれどちよつといしやどのへきいてみての事にして下さい。」と念を入れて、すぐにいしや殿へ行き、「扱市坊もおかげでよほど心よう、しよく好みがでました、どうぞよし町へ遊びにまゐりたいと申しますが、どうでござりませう。」「イヤそれはちとゆるしにくい、野郎はうま過ぎてもたれること不承知のてい。「然らば内にきれいな二才がござります、これを用ゐませうか。」「いや／＼地穴は毒氣がある、これもなるまい。」「それではせつかくの好みが無になります、どうぞ御料簡をなされて下されませ。」「ハテこまつた物。」と、机の上からこまかに書いた大冊の書物取り出し開き、眉に皺よせくり返しみ、「ハ、アあるわ／＼。」「何でござります。」「寒ざらしのやつこのけつがよい。」

○下女

「どうだ、おさんどの久しい、どこへござる。」「けふは宿おりに出やした。」「してことしはどこに居さつしやる。」「アイ、ことしは下谷のもちやに居やす。」「何もち屋、そんなら大ぶもちをくふだあら

うり。」「なあにきよねんは湯屋に居たけれども。」

○初　夢

寶船敷いて寢たあした、友達へひとを廻しよびあつめ、亭主何やら大よろこびの體、神棚へみきをあぐるやら、客へは酒さかな出すやら、上を下への大さわぎ。「何でも初春早々めでたい事と見えた」「どんなこつちや、俺もちつとあやかりたい、いつてきかしやれ。」「されば聞いてくりや、ゆうべめでたい夢をみた。」「何をみやつた。」「丸つけをみた。」「何丸つけを見た、丸漬がなぜめでたい。」「ハテ、一富士二たか南無三まちがつた。」

○田　舍　者

田舍者はじめて堺町へ行き、芝居見物して歸りけるを、「けふは芝居へござつたげな、どつちへござつた。」「たしか勘左衛門とやら、勘三郎とやらへ行きましたが、何がはやわるい日行きまして、ろくだま狂言はしまうしなんだ。」「それはさんぐ\で有つた。そしてどんな事がござつた。」「さるおもだかの鎧とやらがなくなつたとつて、一日ハイそのさわぎで仕舞ひました。」

○新　五　左　殿

俳名なくて爲になる客と來て居るお國の御家老、たまぐ\家内引きつれ江戸への出府、出入の町人

芝居ふるまひ、翌日機嫌きゝにまゐれば、直に居間へ通され丁寧の禮。町人は本田屋銀次郎、當世しやれのひつこぬき、「昨晩もそつと茶屋に御座なされましたら、奥樣や尉さまへ露友が唄をきかせ申し一瓢が身もおめにかけませうとぞんじましたに、おいそぎ遊ばしまして、早うお歸り遊ばし、殘念にござります、又近い内船を申し付けませう。」などとくるめかければ、「否もうきのふはいかい世話、ふうらしい江戸芝居見物して、皆もよろこび申す、扨あの祐經になつた役者は、何といふやくしやでおじやる。」「あれは松本幸四郎でござります、せけんでかの親玉々々と申すでござります。」「何親玉とはあれが事でおじやるか、いやはやよい人品、何を云ひつけてもつとめ兼ねまい男、いかうさしはたらき、分別もあると見うけ申した、それにつけてもあの音八郎がたはけは。」

○雪隱

兵法の師匠の所へ、大水の見舞に行きてみれば、牀上へはあげず、師の坊雪隱と見えて、雪ちんにて聲有り、その聲はねるたび〳〵尻をひねるやうすにて、トウ〳〵どこへ〳〵とのかけ聲、トヾはづしそこなひしや、ひつしやりと尻へはねる音したれば、な無三あひうちになつた。

○小便

雪の夜中小便詰りて目さめ、起きて立ち出で、雨戸明けに掛つた所、氷りついていかな事明かず、

仕かたなければ敷居へかゞんで小便をたれかけ、扨明けて見れば氷とけてばらりとあいたり、よしと云ひて出た所が何の用なし。

○悔み

神道者の親父が死んだ時くやみに行き、「扨おやぢ様の此の間高間が原へ御出でなされましたげな、おちからおとし、申しませう樣もござりませぬ。」との口上。おもしろし、おれも其の道にやらかさうと行き、「扨おちから落し、申しませう樣もござりませぬ、親父樣は此中うねめが原へお出でなされましたげに御ざる。」

○屁

初會のざしき、女郎ぶいとの仕ぞこなひ、若い者ひつかぶり、「檀那御免、出ものはれもの所きらはず。」と、あたまをかけば、客もさるものにて、「ひつたものこいとの事か、コリヤ放屁をやり山。」と一分はずめば、ぶいではない粋さまといたゞき、「さあお床にいたしませう。」と出て行く廊下、女郎もなにくはぬかほでつゞいて出で、うはざうりゆたかにならしてよびかけ、「八兵衛や、はたらいてやつたによ。」

○文盲

草臥のびれの字は、ゐへんにりの字と覺えたやつ、書畫の噺の中へ罷り出で、「下谷和泉ばし通に居られます、唐やうとやら唐りうとやら書かれる人は、達者さうな手なれど、ひとつもよめませぬ、いかうつやのないきたない手でござる。」「それは誰でござる。」「その書いた物に則ち名も書いてござつた。何さ石帚老人さ。」

○戀病

戀はをなごのしやくのたね、むすめざかりの物おもひ寢、たゞではないとみてとる乳母、しめやかに問ふは、「おまへのしやくもわたしがするりやう、ちがひはあるまい、だれさんぢや、いひなされ、となりの紫さまか。」「イヽヤ。」「そんなら向うの文鳥様か。」「イヽヤ。」「してまたたれぢやえ。」娘まじめになり、「だれでもよい。」

○無筆

「物まう。」「ドレイ。」「北佐野三五右衛門御見舞申します。」「今日は旦那罷り出ましてござります。」「しからば御玄關帳へしるされ、おかへりのじぶんよろしう仰せ上げられて下されませう。」「イヤ、わたくしは無筆でござります、そこもと樣御自筆に、帳面へ御書きなされて下さりませ。」「拙者も無筆でござります。」「ハテ、こまつた物だナア。」 客「しからば斯ういたしませう。」 亭主「どうなされま

す。」亭「まゐらぬぶんになされて下され。」

○海鼠腸

御さかなに今出すこのわた、料理人お風味をするとて、ずる〳〵とのむところ、「やれいまおざしきへ出すのを、みんなにしては濟まぬ。」とそばからいはれ、ひき出しながら、「こいつ出這入りにうまいやつだ。」

○臺頭持

西の國の御家中品川に奢り、翌は立つて國もとへゆかるゝまで、臺頭もちには一分もくれず、大かた見送りに行つたなら、いとま乞ひの時はずまれうと思ひ、四五人言ひ合はせての送り、六郷の萬年屋でも沙汰なく、駕籠にのらるゝ時、貌を見て居れば、「皆さらばぢや隨分まめでゐやれ。」と、駕籠の戸びつしやり立てて行く跡見送り、「誰がまめでゐるものだ。」

○名所知り

「わしは歌まくら修行して國々をめぐり、名所舊跡どこでも問うて見さつしやい、しらぬ所はない。」「それはうらやましい、そんなら問ひませう、嵯峨とやらはどんな所でござる。」「嵯峨というてはみやこ第一の風景、大井川とて石のながれる川もあり、むかうは金谷、こちらは島田、鱠の名所でござ

る。」「八つ橋のかきつばたは。」「それはなり平の晝めし喰はれたところ、花の時分はいやはや見事な事さ。」「よし澤のあやめは。」「澤中一面のあやめ、どうもいはれた所ぢやござらぬ。」「松しまの茂平治は。」「是れがまた大きな禪寺ぢや。」

○試　合

「先生、このあひだ試合に參つた者がござりましたげな、さだめて手ひどいめにあはせて遣はされましつら。」「なるほど、いやもうまだ／＼至極未熟な劒術、立ちあはねばおくれたなどと存ずるがいやさに、おとなげないとおしかりでござらうなれど立ちあひました。敵しなへをふりあげ眞一もんじに打つてまゐる所、さそくのはやわざは爰ぢや。」「どうなされました。」「額でうけた。」

○上り兜

ちんほうの看板たてる幟かなと、人にもいははれたむすこ、その母のろまの玉子をのむと夢見て孕みしゆゑにや、二十越えても古今のぬけ作、四月のはじめから二階へ引籠つて、何をするかしれぬ、五月の節句前に出て來て、「先途からちつとばかり細工をいたしました、これ貰つて小遣ひ錢にでもなされませ。」と、うつくしいきれではりぬいた上りかぶと、二親も肝をつぶし、人にもふいちやうし、「日頃は足らぬやつとおもうてゐたが、大きな相違。」とほめちぎる親馬鹿、その上りかぶとも時節の

物とて早速に賣れ、思ひ寄らぬ錢まうけ、聞く人舌を振ひしが、又八月のはじめから二階ごもり、今度は何が出來るぞとおもうて居た所、九月節句前に出て來て、「先達からこしらへました物おめにかけませう。」との事、「今度は何ぢや早う見たい。」といふに、出した所又あがりかぶと。

○炮碌賣

霞が關の辻番の前で、炮碌賣り仲間に逢ひ、國者とてしみ〴〵との噺し、「さて久しうてあうたまう貴樣もまめでめでたい、時にどうぞ酒でも買うてふるまひたいが、爰はおやしきの中酒屋は遠し。」と少し案じる身ありてうなづき、はうろくを一つ手にとると、辻番から、「そこをこゑにせまいぞ。」

○料理指南所

料理指南所と看板かけて、小ぎれいな格子作り、弟子にならんと朝とく來て案内をへば、髭むじやむじやとはえた佛頂面の男取次に出でて、「まだ休んでござんす、馬鹿々々しい早いござりやうだ、晝過ぎにござんせ。」と懷手でのあしらひ。一まづかへり、八つ時分に來て案内をへば、かのにくていなやつ、ふしよう〴〵の取りつぎ。内へ通れば亭主出で、「ようこそ御出でなされました、料理御執心で御ざらば、御相談申しあげませう。」といふに、「それは近頃忝うござります。扨こなたのお取次は、いおのわるさうな人、山下次郎三と來て居るにくていい、あれは御家來でござりますか。」「エヽ、あれか

え、あれは手前のいたらしかさ。」

○睾玉

槍もち角内、疝氣で睾玉の大きくなる事土塚のごとし。本道外科手を盡せども直らず、外科もとより長崎流にて、今までかゝつた事直さぬといふ事なし。是れを直さねば名代がすたる、今日は仕かたありとて見舞ひ、本道も來合はせ見て居れば、角内を庭へおろし、耳くじりぬきはなして、首中にうちおとせば、切りくちよりながるゝ血にまじり、無間の鐘の手水鉢のごとく、吹き出す水につれ、件のきん玉次第々々におちこみ、不斷の通りになりたり。外科鼻を高くし「なんと奇妙か。」といへば、本道感心し「いやはやきめう／＼、しかしちつとあられうかだ。」

○唐様

唐様書きの客有りてかきちらさるゝ最中、鳶の者來て「俺も一番書いて貰ひたい。」と出しやばり、「もしえわしにも一枚書いてくだんせ、つがもない、又あまくちな事はいやです、何でがうぎな事が書いて貰ひたうごんす。」といふに「安い事何ご好んだがよい、詩がよからうか語がよからうか。」といはるれば「四の五のと小さい目は氣がごんせぬ、ちつとふさ／＼しいが百千萬と書いて下んせ。」「すッと合點だ。」と筆をこゝんじ、百の字の横の一畫書かるゝと「イヨ、ひやの字出來やした。」

○薪　屋

神田川出水に、筋違ひの薪ことゞく流れゐたを、柳原の乞食川端へ出て居て、鳶口にひつかけながら、薪を引きあぐれば、たちまち乞食が薪屋になり、薪屋が乞食になつた。

○物　知

「時頼記の序に、將軍宣下といふことが書いてある、あれはどんな事ぢや。」「あれはかの源頼朝公などが、金のゑぼしを召してまんなかにござると、和田北條畠山そのほかの大名、ゑぼし素袍でならび、まん中の頼朝公が將軍宣下とおつしやると、みんなが一どに、「さんげ／＼六こんしやう／＼。」

○尻　端　折

竹之丞寺の開帳まゐる、非番連の二人兩國橋わたりかゝつた所、橋の中ほどで喧嘩、そりやぬいたと大騒ぎ、されども侍が來かゝつて、あとへとてはもどられまじ、まづゐるけたなりでは濟まぬとかひ／＼しく、貴樣も尻をはしよつた、おれもはしよると七圖までひつからげ、脇ざしよこたへ刀はぐいとおとしざし、腕まくりに身ごしらへ、「サア貴樣はよしか。」「能うござる。」「よくば大橋へ廻りませう。」

○座　頭

座頭晝中錢湯へ來て、「御免なされませう冷物でござります。」と呼ばはり、風呂へ這入つたところ、ふろの中には人ひつとりも居ず、座頭しばらくして、「まづかう云つたものさ。」

○雷

けふはどうやらふりさうな空と、案じながらの暑氣見まひ、御かしらの屋敷近くへ來ると、大粒な雨ばらつき出し、門に至ればぴかりと光つて鳴り出す。雷門をかけて這入りながらの觀音經、うんらいぐうせいでんと唱へ、下座敷の際へ行くと、取りつぎおりて手をつく。かみなりきびしく鳴るに、ごうばくちうだいうととなへながら、死身になつてひれふせば、取次聞いて、廣間の帳附の方へふりむき、「がうばく十太夫樣。」

○喜勢留

客二人あり、たばこ盆一面出す、きせる壹本あり。一人の客そのきせるをとり、吹いて見るに通らず、小よりをして吸口に通し、吹けども又通らず、側の一人、「其の煙管早くよこしやれ。」といふ。「ハテせはしない。」と云ひながら、いろ〳〵して通せど通らず。側の客腹をたち、「早くよこしやれ。」とひつたくりにかゝる。「やれせはしない。」とわたさねば、亭主見かねて勝手の方をのぞき、「コリヤ、たれぞあなたへも一本通らぬきせるを持つて來てあげろ。」

○豆腐屋

きれいな裏に豆腐屋あり、まい朝早おきして、夫婦名だいのものかせぎ、しかるに起きた時分、一朝ものかさずに朝まつりごと、たれいふとなしばつとした評判、ちら〳〵覗く人もたえぬ様になりける。或朝路次口明け六ッ時分、かの朝まつりごと見に来たものの大勢おち合ひ、どや〳〵と這入りかゝつた所、おなじ裏借屋の牢人、原源右衛門用事有りて出かゝり、朱鞘の大小紙子羽織、編笠手に提げ人物くさく、「コリヤ、各大勢うれ何用有つて、早朝に此の裏へは這入らるゝぞ。」と、小むづかしく問はれて皆々、「イヤ、ちとこの裏に見ます物がござりまして、アイ参りましたで、ナウござります。」と、みんなが貌を見あはせていへば、牢人のみこみ、「ム、、それかそりやもう濟んだ。」

○角力場

釋迦が嶽に二王堂と来ては、近年にない大入、札を買つても這入られぬ、木戸の込みあひ仕かたなければ、裏へ廻り園を破り、犬のやうに這つて入りかゝつた所、内に居る世話やき見つけ、「コリヤ」リヤそこから這入る所ぢやない。」と、あたまを取つておしもどされ、得這入らず、しばらく工夫して今度は尻から這入りかゝつた所、又内の世話やき見付け、「コリヤそこから出る所ぢやない。」と、帯をつかんで引きずりこんだ。

○十　字

悔みにきても寄りかゝるは傾城のつね、まして無心いふ時のしなやか、偶のことなりや生返辭にもならず、のみ込んだとの安請合ひして、又、「いくらほど入る？」ときけば、「それはかはを合はせてはいはれんしん？」といふに、「そんならおれが背中へ指でかき給へ。」と、大肌ぬぎに成つて背中さし向くれば、「そんならかきんすによ。」と、まづ一字を人さし指にてしつかりとかく。「よしがつてんだ。」とうなづく所、下の字の竪の畫、ちりけの所へ指をつけると、客身をひいて、「オットそこには灸がある。」

○將　棊

しやうぎといふ物人のさすに、さしてさされぬ事はない筈、さして見ようと駒をむしやうにならべやたらにさし、さてしばらくよどみ、「いかうむつかしくなつた、御手に何？」「王が二まい？」「ホ、オいやな物の」

○大　石

裏店へ引越して來た牢人、世帶道具はさつはりとなく、一つ竈と飯焚くはうろく一つばかり、見舞に來る者へ何もないをきつい味噌、「總たい武士たるもの、衣類諸道具持たぬ物でござる、つね自由過ぎると、さあ軍といつた時、身が倦んで困る、そこで我らはなにも持たぬです。」「それは聞えまし

たが、この上り口の大石は、ふみ石とも見えませぬ、何でござります。」「それか、それは寒い時もちあげるのぢや。」

○唐相撲

長崎の唐人やしきへあそびに行つた時、日本人と見ると、こくうにすまふを取りたがる、もとより好きの事なれば、取りくんだところ、何の手もなく唐人になげられ、目をまはして起きあがらねば、唐人肝を潰し、人參をしたゝかほゝばらせ、水をのませければ、漸う氣がつき見たりや、口にくゝんだは人參、おもひもよらぬ金をまうけ、味をしめてまた相撲はいやかとすゝめる身ぶり、唐人うれしがつて立ち合ひ、組むか組まぬにわざと負けて目を廻したふり、唐人袋から何やら出すと見えしが、こんどはしたゝかな灸をすゑた。

○菜うり

本所から來る菜うりに、「なんとまゝの紅葉はもうよいか。」と聞けば、「ナァニ、もみぢはもう赤くなりました。」

○芳町

鳶の者はじめて野郎を買ひ、牀になり若衆に向つて、「モシ、ちつと大屋へでもあづけやせうか。」

〇大　　錢

四文錢の通用日々に重寶、たしかに今すたつて居る大錢も、近いうちに通用するであらう、其の時は太い緡が急になくてはならぬ、今からこしらへてためて設けると、ふといさしをなひ溜めるを、鄰のやつ見かじり、あいつに負けずおれも儲けようと、やがて柳原へ行き、古かねの中の鑿と小刀を買ひ、ふる風ろしきにつゝんでひつしよひ、朝つぱらから町中を、「錢箱の穴をひろげう。」

〇借　雪　隱

不忍辨才天の開帳、參詣くんじゆ、此の島はむさと小便のならぬ不自由、そこを見込んで茶屋の裏をかり、かし雪隱、わけて女中方の用が足り、一人前五文づゝときはめ、おびたゞしい錢まうけ、是れよい思ひ付き、おれも借雪隱と地面の相談、女房意見して、「もはや一軒出來た跡、今建てたとてはやらぬは見えてある、ひらによしにさつしやれ。」といへども聞かず、建てた日からの大入、今まではやつた鄰の雪隱へは、行く人怪我に一人もなく、こつちばかりの繁昌、女房不審し、「どうしてこつちばかりへ人が來ます。」と聞けば、亭主高慢鼻に顯はれ、「なんと見たか、あれはそのはず、鄰の雪隱へは一日おれが這入つて居る。」

〇九　郎　助

傾城の遠い思案も遠からず、随分ぬけめのない女臈、駒下駄鳴らし新町のいなり様へまゐり、やゝ一時慾心満々の願ひ事、内陣の戸帳さつとひらき、稲荷の神體あらはれ給へば、神も納受しなんしたとうれしく、なんと云ひなんすと見て居れば、神體無言にしてじろりと貌を見やり給へ、前なる散錢箱ひつかゝへて御這入り。

〇夜發蕎麥

夜發蕎麥一つ辻へ集まり、「さて總兵衛と十兵衛、米が高くて蕎麥切も合はぬ〳〵と云うたが、夕から内へもどらぬといふ事ぢや、出奔したか、又は狐にでもばやかされてどこぞに居るか、なんにもせい可愛ゆこつた、どうでありく夜道、手ン〳〵によんで尋ねてやらうぢやあるまいか。」「いかにもそれがよからう。」と、面々箱をかついで立ちわかれ、聲はり上げて、「そばきり〳〵。」聲慮にして、「十兵衛やそうべい。」

〇藥罐

やくわんながれて釜山海の港へ寄る。唐人見つけ、替つた物がながれて来たと取り揚げ、大勢よつて、「是れはまあ何であらう。」と評議まち〳〵、中でも智慧のあるやつがいふは、「これはどうしても日本の道具ぢや、その中にもこのかつかうおほかた兜であらう、それにちがひはあるまい。」といふに、

側から、「かぶとにしては口が附いてある、しかも長く附いて居る、是れはまたどうした物ぢや。」との不審、「ハテさてしれた事、これをかぶると耳がふさがる、その時脇から物をいふその口さ。」「なるほどそれでよめた、しかしそんなら兩方にありさうなもの、こつちらにはない、こりやどうであらう。」

「それもしれた事、寝ころぶ方さ。」

○伊勢物語

母親仁にむかひ、「おはなもよほど手があがりました、もう百人一首でもござらぬ、ちと伊勢物語でもよませたらようござらう。」親仁うなづき、「なるほどそれよからう、どうで伊勢へはまゐられず。」

○通小町

或お公家さまの御姫様に、おもひたは〳〵の文つけたれば、今宵より百夜通うて、夜ごとにかようたしるし、車の榻にきずつけよ、百夜過ぎなば、かならず逢はんとの返事うれしく、雨のふる夜も風の夜も、かよひ〳〵て九十九夜め、車の榻へきずをつけ、立ち歸らんとせし所へ、こしもと出でて袖をひかへ、「お姫様のおつしやりまする、おかよひなされて九十九夜、一夜ばかりはまけにしてあげまするほどに、わたくしにつれまして、お寝間へすぐにまゐれとの事。」といへば、この男たゞいやはや〳〵とのしりごみ、「ナゼそのやうに仰しやります。」といへば、「アイ、わたくしは日雇でござります。」

○朝鮮人

朝鮮人歸國の時、友だちが取り卷いて、「なんと日本ではさぞめづらしい事が有つたらう、まづ何が其の内にもかはつた事ぢやぞ。」と問ふに、「いやはや何もかも珍らし事ばかりで有つた、中にも珍らしいは、鞠といふ物がある、これけだものぢや、まづ庭へ垣を拵へ、その垣の内へ人が四人這入ると、かの鞠めが出て、無性に人の足へ喰ひつく所を、食ひ付かれまいと蹴とばすと、又向うの者の足へ食ひ付く、爰でも蹴る、かくする事暫く有つて、どうした拍子やら中の一人が足許へ來る所、はづして踏み殺したりや、屁をひつて死んだ。」

○比丘尼

足輕の心和ぐ前句附、その前句より比丘尼には目が細うなつて、菖蒲革染をぐすとぬぎかへ、ぬつと二階へあがり、まてど暮せど敵の來ぬに退屈し、呼ばんとせしが、名を聞かねば名を呼ばれず、樣とはいんぎんなり、殿ではかたし、坊主あたまからおもひつき、二階より覗いて、「はやう來たまへびくに老。」

○押込

押込ども相談して、「とかく小さい所はよい仕事にならず。」と、越後屋へ這入るにきはめ、人にきず

附けては、呉ふく物などよごれてはぜにゝならず、兎角此の方大ぜいで手はずをよくし、出るほどのやつ縛り、猿轡をはめ柱へくゝしつけ、扨心次第にごふく物持ち出すべしとて這入つた所、ソリヤおしこみといふよりかけて出る手代、判とり、下男、出るも縛り、出るもしばり、片はし猿ぐつわをはめ、柱へくゝしけるに、又跡からも出る、しばれば出る、どうもしばりつくされず、そのうちに夜が明けて烏があく。

○小鼓

息子の小つゞみ、親父以ての外の立腹、友達へ逢うても其の小言、友だちも氣のどくがり「いやそのやうにおつしやりますな、主のつゞみはいかう器用で、それしやも我を折ります、まづちとあの音をおききなされ。」と、むすこをよび出し「さあ〳〵何ぞみじかい事、おやぢ様におきかせ申したい、早うはじめ給へ。」といふに、鼓とりあげ調べた音色、いか樣の妙音、親父も肝をつぶし見て居れば、息子鼓を肩よりおろし、其のかはへくひさき紙をして張らんとする時、親父「一まいではれ、一まいで張れ。」

○野等息子

いがみの權と來て居る息子、夜更けてかへり、火もきえてまつくらやみ、親父のあたまに蹴つまづ

き、「ハア勿體ない。」といふ聲、母聞きつけ、「コレおやぢどの、こちのむすこもこゝろが直つたか、こなたのあたまにけつまづき、もつたいないといひました。」息子聞いて、「ナアニおれはめしつぎかとおもつた。」

○糞

古人の糞を集める奴あり、執心の客來つて一覽を乞ふ。亭主よろこびて、香箱やうの物いくらともなく取り出し見するに、一つ〳〵に見て、「扨々おどろき入りました、珍らしい糞どもでござります、せつ者もとし久しう好きまして、大概は目ききもいたしまする、ちとあてて見ませうか。」といへば、「それはたのもしい義で御座ります、せつ者も修行の爲、いざお目ききを承りましたい。」「先づ此の糞は時代凡そ六七百年、併し勇ある大將のくそ、しかし旅に苦しんだ相がござれば、大かた源のよしつねの糞でござらうやとぞんじます。」「なるほど義經のくそ、御目ききいやはや神のごとくでござります。」「扨このくそは、侍かとぞんずれば坊主くさい所も見え、是れもつはもののくそ、時代もよし經と同時代と見えますれば、これはもし武藏坊辨慶が糞ではござりませぬか。」「辨慶で御座ります、御巧者の程感心いたしました、いざ〳〵とてもの事其の次も承りましたい。」「ハヽア、これはむづかしい、ちとしれかねます。」「それは此方でもいろ〳〵吟味いたしまするがしれませぬ。」「い

やしれぬと申す事はないはず、これも辨慶と同じ事で、出家と武士とのひりまぜに見えまするが、いかう位が有つてうづ高うござります、少し削つて見ましても苦しうござりますまいかな。」「そつとも苦しうござりませぬ、おけづりなされませ。」「然らば。」と削り、「扠こそしれました、是れは最明寺の糞でござります。」「してまたそれは何でしれました。」「ハテ、削つた所にちら／＼粟が見えます。」

下司咄屎果以舌語乀先此巻是切。

話稿鹿の子餅 終

壽々葉羅井

志丈

壽々葉羅井序

年々歳々花相同じ。歳々年々人同じからずといへども、人壽百歳といへば、兎角古きにしくべからずと、茶話のかびをうち拂つて、新春の御笑ひ艸ともならんかしと、記憶の任に書きちらし、壽々葉羅井と題するのみ。

于時安永八亥はつ春

戯撰者志丈

壽々葉羅井

女中の代參

吉原の女郎、善光寺の開帳へ代參に、かぶろを一人まゐらせけるに、參詣して歸り、「アイまゐつて參りました。」「オ、よくいつてきてくれたの。そして如來さんはどんなだや。」「アイ立つておいでなんした、わたしとあのみどりどんのやうに、兩方に二人ついてゐさんした。」「そしてお客は。」「アイお客さんは、三布團で寐てござんした。」

あんけら

若いもの二三人連にて、茅場町の藥師へ參り、歸りに植木店の方へまはり見まはるうちに、何かつひに見ぬうつくしき草花あるゆゑ、「植木屋どんあの花ア何といふ花だね。」「アイあれかえ、ありやアこんけら草と云ひやす。」「こちらのは。」「あんけら草さ。」「ハアめづらしい、長坊買つていかうぢやアねえか。」「いくらだね。」「アイ千二百兩でございます。」「なに千二百兩だと、途方もねえ此の男ア。人を馬鹿にするか、直段をいふも程が有るもんだ、あんまりな事をいふ。」「ア、ヤノ〳〵、そんなやつ

さもつさは、そつちでさつしやい。」

開帳

廻向院の佛たち、みな／＼寄りあつまり、ねじやかにいひけるは、「コレ貴樣ふだん寐てばかりゐるが、これ程のはやる開帳に、さう寐てゐてはつまるまい、ちとおき給へ。」「オ、サおれも起きようとおもふけれど。」「コレサおもふけれどではない、ドレおこしてやらう。」と、よつてたかつて無理に引き起しければ、義太夫ぶし。

赤貝

あか貝を買ひ水を入れ置きたれば、さも心地よげに貝を開きたるを見て、亭主何と思ひけるにや、中指をぬつと入れたれば、赤貝腹立ち指をしつかりはさみて、如何にすれども一向にはなさず、見る內に指はすさまじくはれ、痛さ堪へがたく、外科醫者を呼び寄せ見せければ、醫者しかつべらしく、「まだゆびでお仕合。」

女郎の噺

吉原の女郎うち寄り、地色客色のうはさ取り／＼なる中に、「もしえ花まちさん、おまへ年が明けなんしたら、「曉さんの所へ行きなんすかえ。」「イ、エ吉さんのところへ行きいす。」「おまへ吉さん

の所へお出でなんすと、飯をたかねばならぬが、おまへ飯のたきやう知つてるなんすかえ。」「アイ飯を焚くにはね、アノ一升たくには、ひしやくを一本立てやす。」「そして二升たくにはえ。」「アイ二本立てやす。」

役者の女房

芝居の詰役者の女房打ちより、夫の歸りを待ち、四方山の噺の所へ、同じ仲間何某、役を仕舞ひて歸りたれば、中島何某が女房、目ばやく見て「權右衛門様お早うござんす、わたしが内はどうしやしたえ」「アイたつた今、くびをきられさしつた。」「ハアそんならお汁をあたゝめやせう。」

質屋の後家

ある人質屋へはり形を持ち行き、一分借りたいと番頭をさま／＼くどけども、さらに聞き入れず、雙方もの云ひこわ高なるによつて、後家おくより立ち出で「あなたもよく／＼の事なればこそ、あれほどにおつしやるに、壹分貸してあげられよ。」といへば、番頭ふしやう／＼に、一分貸したり。先の人歸りし跡にて、番頭はり形を見て涙を流し「ッエ檀那が生きてござれば、五百がもの外ない。」

奴のなま醉ひ

護持院の原で、なまゑひの奴が、竹光をふり廻し、殊の外あばれたり。折ふし近所にゐたる夜鷹こ

れを見れば、我が馴染の男なれば、ハットと驚きかけ寄つて、うしろよりすがり付き、「これ折介さん、爰でおばれてはおまへのためにならぬ、爰を何處だと思はしやんす、悪所だによ。」

麁相者

麁相なる主人丁稚を使にやりしが、歸りおそきゆゑ殊の外怒り、今や〳〵と待つ所へ、丁稚のろりと歸り、内へ入るや入らずに、「ヤイおのれは何處へ行つてゐ、直には歸りをらぬ、ぶちのめすぞ。早く横町へ使に行きをらう、にくいやつ。」と、むしやうに叱られ、丁稚きもをつぶし、横町へ驅け出でしが、先の名も口上も聞かず、是非なく一目散に内へ驅け戻り、「アイ檀那樣、横町へいつて參りました。」檀那「大儀々々。」

人相見

さる人人相見の方へ行き、我が相見て下されと百銅の包を出せば、相見つく〴〵と顔を見て、「貴樣は明日八ツ時限りの命なり。」といへば、大きに驚き、早々内へ驅け戻り明日限りのいのちなれば、何にもいらずと諸道具疊まで賣り拂ひ、時計を買ひ求めて翌日早朝より時計を仕かけ、六ツ五ツ四ツと九ツ時も過ぎれば、もはや一時の命と、目もはなさず時計を見て居れば、ほどなく八ツのかしらをちやんと打ツと、もうかなはぬと尻引つからげ、何處ともなく驅落。

女のはだか参り

若い衆集まり咄の中へ、友達にこ〱として來り、「今珍らしい飛んだものを見た。」といふ。皆々、「如何なるものぞ。」と問へば、「十八九の女のはだか参り、からだの白き事雪のごとく、小股の切れ上ッたるが、ふんどしもせず、額際に少し。」といふ時、皆々きりやうは〱といはれて、「ハァ顔は見なんだ。」

盗人

いたつて貧乏なる一人者の内へ盗人はひり、火をとぼして、そこらを見れども何もなし。切角這入つて其の分にもなるまじ、せめて鍋でも持ち歸らんと見れば、はうろくばかり。餘りの事にあきれはてたれば、亭主は天德寺をかぶり、寝たふりして居たれども、餘り可笑しさくす〱とふき出せば、盗人「くそ、わらひ事ぢやァない。」

借錢乞

友達の方へ錢五百文の無心に行く。「なる程貸しはかさうが、明晩は是非々々なければ、我ら甚だ大難儀になる、急度返すならば。」と議定して借したり。さて翌日晩になりても返さず、是非なく催促に行き、「昨日の錢は外よりあてがひ物にて、今宵先へ返さねば、我らいひ譯に、首でもくゝらねばなら

す。」といへば、借主「マアさうでもして、間に合はせてください。」

浪人者

永々の浪人尾羽打ちからし、外へ出る事もならず、雪隠へ行きたき事こらへがたく、是非なくはだか身に鎧を著て雪隠に居たり。折ふし子供何心なく雪隠の戸をがらりと明け、早々驅け戻り、「みんな來いエ、祭がうんこしてゐる。」

勘略奉行

去るお屋鋪方かんりやく奉行を召し抱へ給ひ、此の奉行さま〳〵の事に心を付け工夫して、「當時御治世に多くの槍を御所持なさるゝ儀は、御無用にて御座候。只今にも軍起りますれば、竹槍をこしらへまするゝ、第一常の槍は柄を切り折られては、あとが役にたちませぬ、竹槍は切られても〳〵遣はれまする、段々切られて手元までまゐりますれば、それをためおきて、伊勢町へ遣はしまする。」

どら息子

だうらく息子、親父の前にて袖より頭巾を落したれば、親父早速取りあげ見れば、黒縮緬の兩面、やまもしころもたつぷりとして、銀のこはぜ懸け、「扨々おのれはにつくいやつ、此のやうな頭巾は中中安錢では買はれぬ、どこの金で買ひをつた。」「イエ〳〵買ひはいたしませぬ、拾ひました。」「何だ

拾つた、ハテ今はよくして拾はせる。」

雷ぎらひ

至つて雷ぎらひのきおひ、ぶら／＼と涼みにでたれば、俄に空かきくもり、いな光すさまじく、くわら／＼／＼ぴしや／＼／＼と、今にも落ちかゝるやうになりわたれば、きおひ眞青くなり、逃げたいにも逃げられず、大道へあふのけにふんぞりかへり、天を睨めて「どうでもしやあがれ。」

桃太郎

桃太郎鬼が島へ行かんと、腰に黍團子を付け出かけたれば、犬と雉子たちいで「何方へ行き給ふ。」といへば、「鬼が島へ寶を取りに。」「腰に付けたるは何ぞ。」「日本一の黍團子。」「一つ下さい、おとも申さう。」それより兩人を供に連れ、すた／＼行く向うより、猿立ち出で「桃太郎さん、何處へいきねんす、おまへの腰のは何でえす。」「日本一の黍團子。」「一つくんねんし。」としやれるに、定めて猿も如才はあるまじと、一つやれば、「アゝうまい、も一つくんねんし。」と、是れをも喰つて、「ア、うまかつた、何時でも來ねんし。」

げだ／＼

大内の紫宸殿へげだ／＼出でたれば、公家衆もつてのほか騒ぎ給ふ。一人の公家衆、鼻紙にてそつ

とつまみて、築地の外へ打ちすて「をとゝひ參內。」

浪人の鏽刀

臆病なる浪人者の內へ、盜人入らんとせしを、浪人はやく聞きつけ、刀をぬいておどさんと、すらりとぬいて、くらやみをふりまはせども、赤鰯にてねつから光らず、せう事なしにくちで、ひか〳〵ひか〳〵とふりまはせば、連の盜人あとより來り「何故早くはひらぬ。」といへば、「待ちやれ、內で脇差の聲色をつかふ。」

大一座

吉原大一座の中にて、新造屁を放つたれば、お職女郎大きに腹立ち、殊の外しかれば、客みな〳〵氣の毒がり「出ものはれもの少しもくるしからず、大名衆のお姫さまでも有ること。」と、まぎらせども、姊女郎さらに聞き入れず「イエ〳〵あのやうな事は癖になり、わたくしまで顏が立ちいせん、ないしようへ言つて、急度仕置をせねばなりいせん、下へいきな。」といへども、新造顏をあかめてたちかねれば「下へいきなといふに。」といひながら、手前がぶう「おれも跡から行く。」

煙管の鴈首

ある人煙草を喫み、鴈首下へうつむきたれば、そばの人氣を付け「もし〳〵膝へ吹きがらが落ちま

せう」といへば、「イエ／＼かやうに致してたべますれば、どちからも風があたりませず、ゆゑにたばこが何程もいりませぬ。」「ハテそれはよいおもひつき、おれにも一本買つて下さい。」

だうらく指南所

だうらく指南所へ米屋の息子來りて、御弟子になりたきと師匠に近づきになり、一つ二つ話のうへにて、師匠息子に向ひ、「扨當年は肝腎の時分いかう雨が降りましたが、米の相場は何ほどでござる。」息子「ハイ、サレバ一向存じませぬ。」師匠「ハツァよほどお下地がある。」

晦日

任俠家主へ行き、「もしえ大屋さんえ、アノ晦日の事をつもごりといふは、どうしたわけでございすね。」「あれは、つもがごるゆゑに、つもごりというたものぢや。」「ハァそんなら、つももごるものでございますかね。」「ハテごらいでわさ。」

きおひ

きおひ寄合の歸りに二三人連にて、深川へあそびに行き、茶屋の二階へあがると、ずつと牀の間へあがれば、連のものの氣の毒がり、「これ／＼あんまりしやれるな／＼、今に女郎があがるわ。」「ナァニ吉原ぢやァあるまいし。」

いんぎん

仕事師二人連にて、丁場へ出がけに、「ちつと待ちやれ、おらァ此處の檀那衆へ、昨日の禮をいはねばならぬ。」と見世へ立ち寄り、「番頭さん、昨日は御馳走になりやして有りがたうございやす。檀那さんへもよろしうおたのみ申しやす。」と禮儀を述べ、サァ行かうといへば、「おいしやァ檀那衆の所で、何故あのやうにわうへいにいふ。」といはれて、「昨日といふよりもぐッと慇懃にはどういふ。」「ハテ一昨日とさ。」

貧乏人

近所へふるまひに呼ばれけるが、至つて貧乏人にて著物に困りて、是非なく綿入羽織を著て、其の上袷羽織を著て、袴を著て行けり。杯・本膳も相すみ、是れよりみな〳〵不禮講々々々と袴を取れども、「私はこれが勝手でござる。」といへども、皆々合點せず、大勢寄つてたかつて無理やりに袴を取りて、「ハテきつい御成人。」

禿

吉原のかむろ病氣にて、皆々殊の外不便がり、末期に及びし時、人々うち寄り、「何にしても思ひおく事あらば申すべし。」といへば、「私や、死んだら神になりたうござんす。」との遺言にまかせ、禿稲荷大

明神と付けたり。人々まうでて神前にて拍手をしやん〳〵と拍てば、宮のうちにて、「アイ引。」

干鯛

百姓江戸の御地頭様より干鯛を拜領し、國へもつて歸りけれども、何といふものか見知りたる人もなければ、菩提所の和尙へ見せたれば、「それは田舍にていらぬものなり。」といふて、何とも名をいはされば、百姓うちより、「これは何になるものでござる。」といへば、中に年寄が、「これは江戸にある惠比須さまの脇差だ。」

富士の裾野

若いしゆ寄り、はなしの中へ六十許りの親父來りければ、「ア、これ〳〵、今時分昔の噺は耳に入らぬ。」といへば、「ア、そんならば歸りませう、扠々浮世はさま〴〵ぢや、兄は斬らるゝ、弟はしばらるる。」「ア、もし〳〵、祖父さんそれはどこで〳〵。」「富士の巻狩で。」

竹田料理

竹田御料理といふ看板を見て、二三人連にて來り、膳を見れば、茶漬ばかりに平一つなり。如何なるものかと平の蓋を取つて見れば、ぜんまい。

刀のそり

老人と若き侍二人連にて、兩國橋を通りたれば、若き侍かたなのそりうちたるを知らずしてゐるを、老人氣を附け、「何故そりを打ちて、さされしぞ。」といへば、「ハ、ア風で。」

大食

大食をする人餘りすさまじく食ふ故に、そばにゐる人はなはだ氣の毒に思ひ、「貴樣それを喰つたならば、今に腹が裂けるであらうぞ。」といふ内、腹ではつちりと音がすれば、「それやこそ。」と懷を見れば、越中ふんどしの紐が切れた。

ながかたな

上州に名代の長き刀をさす人あるよしにて、わざ／＼近國より見物に來り尋ねあたりて、「我々は長き刀を拜見いたしたく、わざ／＼參り候。」よしいへば、女房たち出で、「これは／＼折角の御出でなれども、昨日江戶へまゐられましたが、今少し早く御出でなされば、今までそこに鐺がまだござりました。」

かつぱ

やかた船へ堺町のかげま子ども出でしが、俄に雪隱へ行きたくなり、せうことなしに、とものかたより川へ尻をむけゐたれば、折節川太郎むすこをいだきて來りしが、息子かつぱかげまの尻を見つけ

て、「ソレとつさんや、あつこにうまいが〳〵。」となだれば、おやぢしかつて、「アリヤァ賣物だ。」

開帳の上物

吉原の女郎、客に、「申しエ、おまいにね御無心がありんす。」「何だ。」「こんど善光寺の如來さんのお開帳がありんすによつて、何ぞあげたいものでおざんすが、お前こしらへておくんなんし。」「ム、こしらへてやらうとも〳〵、何がよからうの、ちやうちんか、但しのぼりか、イヤ〳〵錦の御戸帳がよからう。」「ナァに、なんぼ如來さんでも、あの相撲取ではあるまいし。」

物しり

「これ貴様は何も彼もものしりだが、日本の鶯はほうほけきやうとなくが、唐の鶯は何となきます。」「ハテ知れた事を聞く人だ。」「それでもわしは知らぬ。」「ハテ揆子の曰く。」

はつ茸

「わしがゐなかの山には、とんだ大きなはつ茸が出るて。」「どのくらゐござる。」「先づ大かたへこらいた所が、さしわたしで、六六尺もあらう。」「とんだてつはうをいふ人だ、そのやうなはつ茸があるものか。」「イヤうそでない事、雨の降る時は、からかさのかはりにする。」

浪人の自慢

「扨わしが先祖は、楠の家臣にしのづか五郎というては名高いものだ、度々てがらもあつた。其の後石橋山の戰ひに石なげの手がら、又朝鮮攻にも虎狩で、手がらをしました。」「ア、申し、それは大分時代も人も違ひました。」「されば〻、その間違で浪人いたした。」

論語

仕事師日本橋にて仲間にゆきあひ「八え、おのしやァ何處へいく。」「オ、おらァ出雲寺へ論語を買ひにいくわ。」「何だ論語を、いけねえやつぢやァねえか、わりやァ論語を讀みええるか。」「べらぼうめ、人を安くしやがる、讀まねえでどうするものだ。」「そんなら始めの所を讀んで見ろ。」「合點だ、商賣往來。」

紙帳

殊の外ちかくに火事あれば、亭主紙帳を釣り、こと〴〵く諸道具をその紙帳の中へ入れければ、女房氣の毒がり「おまへその紙帳は何のために釣る事ぞ、此の急な火事に。」といへば「やかまし、だまつてゐろ、火事に土藏と見せるのだ。」

ばちびん

深川にて客人、藝者屋の三味線を枕にして高鼾にて寐たれば、不思議や、この三味線おのれと音を

…たつゆゑ、客人を見れば、前後も知らず、これは奇妙とあたまを見たればはちびん。

遠國者

遠國の人淺草の御見附の御番所へ罷り出で、「私は遠國者でござりますが、何卒江戸の女郎と申すものを買ひまして、古郷への咄の種にいたしたうござります、何とぞ仰せ付けられて下されませう。」と願へば、役人聞き給ひ、「勝手を知らねば、尤もの事なり、此方より下番を案内に遣はすべし。」とのたまへば、「有りがたうござります。」と淺草の方へ行くを呼びかへして、「コリヤ／＼、びくにんを買はば、寺社へ屆けろ。」

馬士

師走大根をつけたる在郷馬、度々小便をするを、馬かた殊の外こゝろせき、「此畜生めは、よく度々小便して、日のみじかいに待たせをるわた、ちつと歩きながらしやあがれ。」といへば、馬「馬鹿な、馬士ぢやアあるまいし。」

鉢の木

至つて鉢の木を好く人のもとへ、小賢しげなる人ゆきて、それかこれかと眺めるを、亭主内より立ち出で、「貴公さまにも鉢の木をお好きめさるゝと見えまして、御頼もしい。」といへば、「さればく、

私も殊の外好物でござるゆゑ、大概は見覺えてをりますが、これは何でござる。」「それは佛手柑。」「へエ、藥になりますのか。」「是れは何。」「それは唐のくわりん。」「へエ、三味線の胴になりますのか。」「是れはなに。」「それはぢやんちやうぎ。」「ハヽア、そろばんになるものか。」

疱　瘡

ひとり息子疱瘡最中の所へ、きやん遊びに來たれば、親父「八や坊主めが疱瘡するから、ちつと靜かにしてくりやれ。」「何だ疱瘡、ねつから知らなんだ。疱瘡には龜の子が、飛んだ妙藥の、早く喰はせやれ、おれが取つて來てやらう。」と、直に取つて來てこしらへ、「サア喰はしやれ。」といへば、親父も如何とは思ひながら、こゝろざしもだし難く、一口喰はせたれば、七顛八倒して、たちまち死んだり。兩親はなはだ歎きければ、「此の龜の子めは太い奴ぢやあねえか、萬年過ぎたら過ぎたといやあがればよいに。」

新　宅

盜人晩に入らんと思ふには、方々を晝の内見廻りて、勝手能き所へ入るなり。こゝに新宅の奥を見たれば、唐木の牀違ひ棚、こちらには蠟色の簞笥、長持用簞笥、何でも晩にはせしめてくれんと、夜になるを待てば、程なく其の夜丑みつ頃、まんまと忍び入り、くらやみにて探して見ても何もなし。

扨は外へ預けたるか、たしか此處らが牀の間と探つて見ても、腰張ばかり、これは奇妙と火をうち付けよく／＼見れば、ことごとく繪に書いたり。盜人あきれて、「扨も太い奴だ。」

鯉の瀧登り

隅田川より御獻上の鯉を納めんと兩國橋を通りしが、此の鯉飛び出で川へ入りたり。持人うろたへ立ちさわげば、冷水賣これを見て、「いかなる事。」と尋ぬれば、持人始終を咄し、涙を流せば、「少しも氣遣ひ有るな、おれが取つて進上。」と、欄干の上より、ひやみづをさら／＼／＼とこぼしながら、「瀧々瀧。」

むらさき

若いもの四五人集まり話しゐる所へ、又一人友達來り、「これ／＼珍らしい木を見て來た。」「何だどんな木だ。」「木もむらさき、葉もむらさき、花もむらさき、實もむらさきの木だ。」「ム、そりや珍らしい木だ。」「何といふ木だ。」「何とか名はいつたつけ忘れた、いつて聞いてこよう。」と驅け出ししばらくして來り、「聞いてきた／＼。」「何といふ木だ。」「なすび。」

使

二王善光寺へ使に行つてもどり、佛頂面をしてゐるゆゑ、觀音、「どうぢや、口上のおもむき申した

か。」と聞き給へば、「いゝえ釋迦が寐てゐて挨拶をいたしましたから、菜が煮えて戻りましたと」といへば、
觀音「おほかたそちも立つてゐたらう。」

かけあらそひ

「何と善光は坊主か撫附か、おのしやあ知るめえ。」「す、知らねえ事はない、撫附に逆ひはないこと」あらそひ、「そんなら何でもかけにしよう。」と二人して、開帳場へ行き、和尚に願ひてかむりを取つて見れば、本田。

時花うた

女郎客に向ひ、「おめへに無心がありんすが、たび〳〵の事でいひにくうありんすから、はやりうたでまうしいせう。」といへば、客「それはめづらしい、承りたいの。」女郎歎「つまりてつまりて二つの願ひ：」客「してやんして、どうしたの。」女郎「夜著は錦でありんまり、是れでは好みが強いが、なんかまくら。」客「おうさ、みんなそつちでせい。」女郎否だし「へんてこ〳〵、へんしはん懐さんかいな。」客「おいなおいな。」

鬼むすめ

生酔よろ〳〵して鬼娘を見ようとするゆゑ、木戸番、「若しおまへはよつぽど御機嫌さうだ、あぶな

うございますから、よしになされませ、醉ひが醒めてからおいでなされまし。」「いゝやおりやもう醉ひが醒めた、見せてくれ給へ。」木戸はん「醉ひが醒めたらおはひりなされてごらうじませ。」といへば、うちから鬼娘が、「醉ひが醒めたら、わしや嫌ぢや／＼。」といふ。「何故嫌がる。」といへば、鬼娘「醉ひが醒めると、しようきになります。」

ねじやか

若いもの寄り合ひ、「此度の開帳は近年にない大あたりだ、何とあの寐釋迦でも盗んで、錢まうけしようぢやあるめえか。」「こりやよからう。」と大勢にて盗みだし、ひつかついで寺町まで來りしが、いつかないつかな動かねば、「こりやァいかぬ代物。」と寺前へうち捨てて歸りしまゝ、兩寺より和尚立ち合ひよく／＼見れば、善光寺の伴頭なれば、互に我が代物に、「御くしがこちらにござれば、この方へ引きとりませう。」といへば、淨土宗、「イヤこの方へ引き取りませう。其の仔細はね佛でござる。」と辯舌に任せつめかくれば、日蓮宗の和尚、「はてさやう仰せられな、今にお經。」

座頭

座頭開帳へ參り御印文の入口へ行けば、「おつと如來にそつちだ。」と、棒の先で額をつけば、座頭、「おつとありがたい。」と内へかへり、世の定業是非もなくつい頓死して、閻魔大王の御前へ引かれ、

「私をば御印文をいたゞいて參りましたから、おうたがひなく極樂へお通し下されまし。」といへば、閻魔大の眼をひらき、「どれ〳〵吟味せん。」とあらため給ひ、「ならぬ〳〵。」といふゆゑ、座頭、「何故でございます。」といへば、「ぼう判だ。」

どろばう

盜人御印文をいたゞきに行きて、錢百文投げ出し、尻をまくつて、「此處へおたのみ申します。」といへば、坊主あきれて、「これは勿體ない、御印文を尻へおすとは、そなた氣がちがつたか、何故額へいたゞかぬ。」といへば、「いえ〳〵首はあぶないもの。」

地藏

湯島の開帳にて、子供を地藏へ年季奉公に出すゆゑ、近所の若いもの、「もしお地藏さん、おまへさんは子供を大分奉公人におかゝへなされまする。あれはまあだん〳〵と年が明けたら、どうなされます。」地藏「あれは女郎やかげまに賣つてやる。」

佛のむしん

京の大佛、夜を日についで、江戶の廻向院の開帳へ來り給ひ、「さて〳〵われら甚だ困窮に及びしゆゑ、貴公へ御無心にまゐつた。先づそこもとはたつた一寸八分の身で、大金をまうけ給ふ、われらは

此のやうな世間は、これの大きなからだでも、一向金まうけが出來ぬ。ついてはよんどころない入用の事が出來てまゐつたが、何卒貴公の此の一日の賽錢を借用申したいが、何と貸しては下さるまいか。」

「なるほど、京都から此處までござつておつしやるほどの事、よく／＼のことと存ずる、一日の賽錢位は御用立てませう。」と、かますに入れたる賽錢を出せば、「これはかたじけない。」と、前巾著へ入れる。

壽々葉羅井 終

落噺

無事志有意

烏亭焉馬

落噺

無事志有意序

庭増二氣色一晴沙緑、林變容輝宿雪紅といへり、草木も春を迎へて長閑なる折から、吉例の噺初めの三立日、氣樂と聲をかけたは何やつだヤイ。

牛島の方より市川白猿　氣が樂きがらくきがらぷう。

當時なんでも大ひまあけ、ほくてきせけんをはゞからず、天地乾坤の其のあひだに、苦勞はちつともない田の不動に五代のこうゐん、七左衛門といふしんまいいんきよ、當年正月二十一日なんとみな樣まだきむいぢやござりませぬか、かじけはもとより御存じの、納豆ゑぼしをぬぎすてゝ、黒い頭巾にねずみの胴服、あかざの杖に高あしだ、高いはおやぢがゆうりの鼻、はなが見たくば秋葉へござれ。はるはあきばの花盛り、年々歳々花あひくち、焉馬がはなしをするならば、七左衛門が聞かうとは、河豚に大こん鴨に葱、市が榮える下津町、祖父は山の手、祖母は川端、橋々に咄の評判、四里四方聞くべい、見るべい、はなすべい、庚申まちに白猿が、三筋たらねえ序のせり譜、幅袋にうかれた戯言と、ホ、うやまつて坊主にはなりませぬ。

無事志有意序

幾千世も葉なしにしげれ梅の花

噂計入道先肝癪園十大嘉白猿述

落噺 無事志有意

立川談洲楼焉馬撰

○歳旦若水　談州楼作

春は曙やう／＼しろくなりゆく、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲の細くたなびきたると、清女のかかれしもむべなるかな。一夜明くればかけ乞ひの、つれなく見えし別れより、曉かたは扇々寶舟々々と賣聲に、裏住居のひとりものも目をさまし、若水汲まんと手桶さげて井戸ばたにいたれば、とくにもおきて釣瓶ながら水をあびて居る者有り「だれだ福藏か。」「ム、德右衛門か、いい春だな。」「オ、サいい春だな、いつもげんきだ、はやくおきたな。」「何さゆうべから、親かたのかけとりの供にいつて、今かへつたから、すぐに水をあびるわ。去年の春もあびたら、一年中風もひかねえ、おのしもあびやれ。」「ム、おれもあびべい。」とはだかになり、あたまからざつぶり。「オ、ひやつこい。」といふ所へ、十五六な娘が手桶をさげて來て「オヤ／＼ふたりながら水をあびてさ、一寸つるべをかしておくれ。」「おとみさんか、とつさんはどうした。」「とつさんは福壽草を賣りに。」「さう

さう錢まうけだの、あぶないおれがくんでやらう。」と、手桶へ一ぱい。其の跡へ長屋の女房二三人、「サアいい所へ來た、おいらにもくんでくんな。」と、面々たのんで汲んでもらふところへ、一人すみのどうしん者のばゝあが手桶をさげて、「オヽいい所へ來やしたの。どうぞ一ッぱいおくれ。」といへば、顏を見て、「おいらはもう惠方參りに行くから、たれぞにたのみな。」「コレそんなにいひなさるな、娘や若いかみ樣たちには汲んでやつて、さうはしないもの。」といはれて、「てめへくんでやれ。」「ム、おらあ著物を著た。」といひながら、ふしよう〴〵井戸をのぞいて、「おやすい事だがあればいいが。」

○春興神遊び　松友長綱作

えびす大黑、初卯參りより梅やしきへ行かんと、福神仲間をさそひに行く。壽老人は福祿壽と二人こたつにあたつて、「けふはよしにせう。」といふ。布袋はどぶつであるくはごめん、そんならばびしやもんと辨天、是れで面白からうとむだをいひながら野道を行く。龜井戸の玉やへあがり、「めづらしく蜆のすひ物、外になんぞ呑めるものを出してくれ。」とあつらへ、出來る內たばこをのんでゐる。大こく、「コレえびす、貴樣のたばこは匂ひが能いが何ぢや。」「おれはきついのがすきぢやによつて、まひをのみます。」「ム、えびすまひぢやな。おれも大黑まひをのむ。びしや門は何をのまつしやる。」「おれは此のよろひかぶと小手脛當、軍のなりの樣ぢやによつて、たてをのみます。」「イヤ是れは尤も、

辨天は何をのまれるぞ。」「アイわたくしは龍王。」「成程こいつもいいわ。」といふ所へ、稲荷が跡から来て、「福神たち爰にか、なんぞめづらしい事でもござるか。」「イヤたばこのはなしさ、時に貴公は何をのまつしやる。」「おれはまづ五穀を守る役ぢやによつて、新田をのみます。」「まことにそれ〳〵のおもひつき、どうも〳〵いへたものでない。」といふ内、となりの座敷をのぞけば、面體髪の毛まで赤く、緋純子の羽織にひざやのうは著、下著はひおりめんひぢゆすのおび、少しくつそを守るとみえてあかねのたびをはき、ひいろの大ぎせるに朱らうをすげ、がん首あがりにくわん〳〵とくゆらせてゐる者あり。「あれはだれだ、猩々とやらいふやつか。」「なにサはうさう神だ、こつちへよんだがいい、コレはうさう神。」「これは〳〵どなたも、さつきにからおちのごしはうけたまはりましたが、ゑんりよいたしてをりました。」「イヤゑんりよにはおよばぬ、おてまへもきんねんは流行して、だいぶくあんがよいげな、いふくといいきせるまで、ちとお煙草入をはいけん。」「ム、是れは紅皮縮緬はきんごじゆ。ねつけはだるま、さだめてよいたばこであらう、一ツぷくおもらひ申さう。」「イヤそはでござります。」「何さ此の煙草入ではの」と、一ツぷくのめば殊のほかわるいゆゑ、「これはどうしたものだ、はうさう神、あんまりわるいの。」「アイわるうござります。」「これはなんだ。」「ハイまつかはでござります。」

○歳暮年の市　　　　　蕉淵樓作

あるおやしきにて、淺草の市のみやげに、はりこの松だけを、奥女中へ小買物方より進上す。「ヤオヤいつも大黒樣が、大ぼんをかつて來てくれながら、此のやうな物を銘々にくれたは、いかな事でもあんまりな。」といへば、「ハテおまへ樣方には、まるぶんおよろこびの土產、ことしはしだしの松だけ、役者の彼の物をしやう寫しにいたしたの故、このうちに女がたでも立役でも、敵役の御ひいきのお方のまで色々の形、違ひはござりませぬ。」といふ噺が殿樣へしれ、「いか樣めづらしい事、併し四十七本もあるを、どれがたれのおやといふしようこはあるか。」「御意でござります。其の證據は仲間どもへ竹の皮を賣ります與兵衞と申す者、彼は彼の者の一物をことごとく存じてをる故、是れを御召し御聞き被レ遊ませ。」「然らば皮與をよべ。」とて御前へ召され、「此の四十七本のはりこの松だけ、其方目利きを以て、是れはどの役者といふ事を屹と申すべし。」との仰せ。「かしこまりました。」とおもる色なく立ちよつて見れば、所も名にしおふ淺草市のこみ合ひに、馬ぢやく〱といふ程の紫色、鴈高、しし頭、扨白黒は其の人のうまれ立ちにもよるぞかし。あるひはちよつぺい筋太く、しこみのなきはすぼけ物。皆それぐ〱に名を印し、一つも違ひはさふらはずと指し出せば、ありあふ人々殿にも感心あそばして、「ハテ扨能くも覺えし物かな。かくしようせきを申す仔細は。」「ハイわたくしはもと堺町の

芝居に二十年程をりました。」「ム、役者といふ面でもなし、木戸番でもいたしてをつたか。」「イ、エそんなら幕引か。」「イ、エ。」「髪ゆひか。」「イ、エ。」「そして何をしてをつた。」「がくやにをりました。」「ム、がくやにては何の役を勤めた。」「ハイ居風呂を焚いてをりました。」

○蓮牡丹　　緑青人作

今は昔、本所猿江の寺にめづらしき蓮の花が咲き、形ぼたんの様なるとて、貴賤羣集して是れを見る。かほどの賑ひでも、錢を儲ける心なきは出家かたぎ、とかくめんだうだから、花はもうちつてしまうたといふて歸したがよいと、切戸口をしめて人を入れず、檀方から來てもことわりをいふ。折から門番にかご立てさせ、供の女中二人が、下男に何かさゝやくと、うなづき臺所へ行き、「ちとおたのみ申しませう、遠方から參りましたものでござりますが、此のお寺樣にめづらしいはすがござりますと承りました。どうぞはいけん致したうござります。」といへば、寺の男、「イヤもうちつてしまひました。」「それはこまつた物ぢや。」と、かごのそばへ來て、右の次第をいへば、こんどは女中が來て、「只今承れば花はもうちりましたやうにござります、せめて其の跡なりとはいけんを願ひますと主人も申します、何とぞ御取次被成て下りませ。」「ハテおまへがたは遠方々々といひなさるが、どこだえ。」「ハイ品川邊でござります。」「ム、遠い所からだの。したが花はまだ咲いてゐれど、見物があつ

て面倒だから、見せるなとをしやう樣の言付でござる。」「モシ御納所樣、今お聞きなさる通りだ、見せておやり被成ませ。」「そんなら外はならぬ、其の人許り。」と見せて歸す。そのあくる日又來て、「昨日は有りがたうござります、今日も又參りました。」「ハア羅漢へかえ。」「イヱ〳〵あなた樣へ蓮を見物に。昨夕主人も歸りますと、あのやうなめづらしい蓮がある物かと、きついほめてでござりましたが、今日は朝よりしたく致して參りました。」「とはうもない一度見たらよからうに、早く見て歸りなさい。」といへば、悅び主從見てかへる。又そのあくる日もきて見物を願ふ。「とんだすゐきやうな、お前の檀那はなんだ。」「ハイ芝口の町人の後家でござりますが、なすこにやしきの十ヶ所ももつて、今は高輪の石橋萬やのとなりへ隱居してをります。」「ハテな風雅人だな、そんならをしやう樣にさう申して見ませう。」と、右の次第をはなせば、和尙きいて「ハヽアかはつた物好き、けふで三日來るか。」「左樣でござります。」「其の上に後家か。」「左樣でござります。」「そんなら見せろサ。」といへば、女中は庭の内へ皆々はひる。和尙も衣をひつかけて、あいさつに出ようと、座敷の障子の内たばこぼんなど出させてゐる。庭の方に女の聲として「誠に蓮は花の君子、ぼたんは花の富貴なる物といふが、いくど見てもあかぬ詠めぢやなう。」といふ物ごし奧ゆかしく、障子からのぞいて見ると、後家の貌が獅子鼻。

（　）直　段

金銀舎作米作

五六人連にて、深川へ遊びに來て、硯蓋が出ると、「コレ見やれ、くわゐにふきのたう、九年ぼ、蒲鉾、黒い物によく跡へ殘るやつだから、直ぶみなしにいくらが物が有る。」「ドレ〳〵八分々々。」「ちよつとかつたり。」「九分々々。」「一匁々々。」「まけろ、ヨイ〳〵。」と手拍子を打ち、「サア此のこうしと杯、こいつは飛鳥山でかりるやうな銚子だ、幾らが物がある。」「一匁々々。」「一匁一分。」「一匁五分一匁五分。」「エ、まけろ、ヨイ〳〵〳〵。」と手をうつ所へ、女郎が並ぶと小聲になつて、「アノ上座に居る中どしまは幾らだ。」「あれは七匁五分が物はある。」「五分つけよう俺にくりやれ。」「どうしてどうして。」「そんなら八匁五分。」「エ、賣つてやれ、ヨイ〳〵。」「その次にやつと七匁五分よ。」「三番めは新造だ、きれいな物だが、骨ぶとで首がみじかい、六匁五分。」「七匁々々。」「ヨイ〳〵〳〵。サアあのとしまは引きまみさへ、其の次は耳の脇にかんにうが有る。いつかあとのはひたひがやくわんできはすみで隱してある、よく見やれへこがあるさうな、三人一所にいくら。」「一文で壹分よ。」「あんまりだ。」「拾六匁々々。」「拾八匁々々。」「エ、まけろ。」と手をうつ故、女郎もむつと立ち、廻しの女が、「モシお前方は何の事でござりやす。つひぞねえ。」といへば、「コレ此のつひぞねえが尻はいくらが物がある。」「一二匁。」「なにも氣がねえ、ドレおつとねよう、皆どこへ行くのだ。」といへば、

て面倒だから、見せるなとをしやう様の言付でござる。」「もし御納所様、今お聞きなさる通りだ、見せておやり被成ませ。」「そんなら外はならぬ、其の人許り。」と見せて歸す。そのあくる日又來て、「昨日は有りがたうございます、今日も又參りました。」「ハア羅漢へかえ。」「イエ〳〵あなた樣へ蓮を見物に。昨夕主人も歸りますと、あのやうなめづらしい蓮がある物かと、きついほめてでござりましたが、今日は朝よりしたく致して參りました。」「とはうもない一度見たらよからうに、早く見て歸りなさい。」といへば、悦び主從見てかへる。又そのあくる日もきて見物を願ふ。「とんだすゐきやうな、お前の檀那はなんだ。」「ハイ芝口の町人の後家でござりますが、むすこにやしきの十ケ所もゆづつて、今は高輪の石橋萬やのとなりへ隱居してをります。」「ハテな風雅人だな、そんならをしやう樣にさう申して見ませう。」と、右の次第をはなせば、和尚きいて、「ハテかはつた物好き、けふで三日來るか。」「左樣でござります。」「其の上に後家か。」「左樣でござります。」「そんなら見せろサ。」といへば、女中は庭の内へ皆々はひる。和尚も衣をひつかけて、あいさつに出ようと、座敷の障子の内たばこぼんなど出させてゐる。庭の方に女の聲として、「誠に蓮は花の君子、ぼたんは花の富貴なる物といふが、いくど見てもあかぬ詠めぢやなう。」といふ物ごし奥ゆかしく、障子からのぞいて見ると、後家の貌が獅子鼻。

金銀舎作米作

○直段

五六人連にて、深川へ遊びに來て、硯蓋が出ると、「コレ見やれ、くわゐにふきのたう、九年母、蒲鉾、黒い物はよく跡へ殘るやつだから、直ぶみなしにいくらが物が有る。」「ドレ／＼八分々々。」「もおつとかつたり。」「九分々々。」「一匁々々。」「まけろ、ヨイ／＼。」と手拍子を打ち、「サア此のてうしと杯、こいつは飛鳥山でかりるやうな銚子だ、幾らが物がある。」「一匁々々。」「一匁二分。」「一匁五分一匁五分。」「エ、まけろ、ヨイ／＼。」と手をうつ所へ、女郎が並ぶと小聲になつて、「アノ上座に居る中どしまは幾らだ。」「あれは七匁五分が物はある。」「五分つけよう俺にくりやれ。」「どうしてどうして。」「そんなら八匁五分。」「エ、賣つてやれ、ヨイ／＼。」「その次はやつと七匁五分よ。」「二番めは新造だ、きれいな物だが、骨ぶとで首がみじかい、六匁五分。」「七匁々々。」「ヨイ／＼／＼。サアあのとしまは引きまみえへ、其の次は耳の脇にかんにうが有る。いつもあとのはひたひがやくわんでさはすみで隱してある、よく見やれへこがあるさうな、二人一所にいくら。」「文で壹分よ。」「あんまりだ。」「拾六匁々々々。」「拾八匁々々々。」「エ、まけろ。」と手をうつ故、女郎もすつと立ち、廻しの女が、「モシお前方は何の事でござりやす。つひぞねえ。」といへば、「コレ此のつひぞねえが尻はいくらが物がある。」「二匁。」「二匁でも氣がねえ、サアおつとねよう、皆どこへ行くのだ。」といへば、

廻しの女が廊下へでて、「コレおよしどん、此のお客を見たふしへとほさつせへ。」

○以上　伊豆千別作

「コレお前は物しりだが、アノ手紙に以上と書くが、なんのいはれでござります。」「ハテ以上とは上を以てするといふ事よ、人の位にも上の人を以上といふわけ。」「ムヽ、かみをもつてするといふ事か、ハヽ、アそれで穴賢がわかつた。」

○竹光　砂邑亭文好作

今はむかし、神田邊を折助が酒によつて千鳥足を、子供がはやして、「エヽなまゑひやい、べらほうめ。」と笑ふを聞いて、「なんだなまゑひだ、うぬいつ酒をのませた、おれがすきでおれがのむに、するさんなやつだ。」といふ。「するさんもすさまじい、折助やいのろまやい。」とはやす。「何ぬかす、眞二つにするぞ。」と脇差にそりをうつと、「ハァイうぬがどう切る事がなるものだ、抜いて見ろ／＼。」といふ故、こたへ兼ねてひらりとぬけば竹光、「それみやあがれ。それで切れるものか、ハァイ／＼。」と笑へば、「何うぬらとけを立ててやるぞ。」

○きん酒　月盛樓紫園作

兩國の駒止橋のあたりへ非人があつまり、けふは三河屋に大寄合があつて、おあまりのむまいもの

を大ぶん貰つて来た、おのしはどうした。」「おれはコレ見やれ、めしと鯛のあら。」「六はどのやうな物に有りついた。」「オ、サ、京屋で太々講があつて、一ばんすぎなしたゑ酒、梅干をけに一つぱいおる。」「こいつはありがたいまんぷく長者、二人づれで外の宿なしどものこぬ内、お屋敷の塀のかげでたのしまう。」と打ちつれ、時に酒は一日ぶり、茶の湯にまはして、肴はぶれいから手をつゝこみ「ア、手前ばかりのむ。」「イヤかうせう、けんをせう、手前しつてゐるか。」「こいつを食ねばかにした、けんをしらぬ事がある物か、いせんは三つぶとんにも坐した男だ。」「オ、そんなら檀那衆の時とはちがふ。負にかつた者が呑みつこ。」「かつてんだ。」けん折りかゝるだ、ムメヤりやん、さんな、なつつ、はまで九。」といふと、辻番から「通れ。」

○大　鼓

紅楓亭丹盛作

ある地主のむすこ、大つゞみを毎晩けいこせした、長屋の者共家主へ言ふやう「まいばんの大つゞみの音で、盤木かとぞんじて夜がねられませぬ、大風の吹く時などには、御無用になされて下されと頼みける、此の旨を親ぢへいへば、もつともな事とて止めさせける。出入の仕事衆が来て「若檀那此の頃はなぜつゞみをお打ちなされませぬ。」「イヤそれはつゞみの音が、火の見のはん木の音にまちがふから、止めてくれろと大屋のたのみ、夫れで何のなぐさみもない。」といへば「それはわたしが仕様

がござりやす。」と、小さな板へつぎ〳〵繪に書いて、小刀をもつてほりぬくから「夫れは何にするのだ」といへば「是れは屋根の火の見へ、つかふのけいこのけおじるしさ」

○けいこ所　千林亭萬善作

今はむかし娘の稽古所へ、年頃四十五六の米やの手代、何かの世話をやいて、或時、けふは雪もふれば誰もけいこにこず、お前もこたつにあたりなさい。」と、母おや娘のあたつてゐる中へ足をふみ込み、ついあだな心におつて、娘の手だと思ひ母の手をにぎりければ、母も大きに肝をつぶし「此の里風さんは開れもしない事をしなさる。」といふ聲に、娘も氣の毒がりて立つてゆく。母親のいふ樣、「是れ里風さん、おまへにかぎつてかういふ事は有りさうもない物、あの子の親ちともお心やすいゆゑ、何もかも御ぞんじの上の事、後家を立てて居るのも、あの子を相應な所へ遣りたいばつかり、夫れに娘の手と取り違へてわたしが手をにぎるといふは、おへねえおまへもしつぶかな人だ。」「コレおふくろまつたくさういふわけではない、おまへの手と知つてにぎつたのだ。」「そんならわたしをなぶるのか。」「なぶるのでもない、相應な所が有るから緣付きなさるかといふ相談さ。」「ばからしい手を握らずと口でいうたがよい。」「イヤサ手をにぎつたはの、五十兩の支度金と云ふ事よ。」

○蛇　美知丸作

是れも今はむかし、隅田川邊へ摘草に行きしに、下女のまたぐらへ蛇が這ひ込み、大らんを入る。江戸へ醫者を呼びにやらうと云ふ所へ、武藏やの若い者來かゝる。「氣遣ひなされますな、蛇は今出て行きます。」と云ふうち、へびはよわつたかたちでぬけて出る。人々、「こいつはきめう、どうして今出るといふ事をしつて居る」といへば、若者、「そこにはちつと見どころがござります。」と云ふ。「なんなら其れを傳授してくれろ」と、檀那が金貳分出して頼めば、「大事のことだがをしへて上げませう、女中のまたへはひつた蛇の直に出ると申したは、あの女中の顔をごらうじろ。」「顔がどうした。」「ほゝが赤い。」

○りちぎ者　　黒羽二亭金埒作

今はむかし、稼ぎにせいをだして、芝居を一度見た事もなく、女郎かひはなほの事、錢の出る事はつき合ひもせず、夜から夜まで遊ぶ事きらひなもの有り、長やのうちにさうれいがあつて行かねばならぬゆゑ、淺草邊の寺まで行き、かへりに友だちが、「あんまり吝いやつおやによつて、あいつを吉原へつれていて、やみつかせてやらう。」「こいつはよからう。」と相談して、「コレ德兵衛、おのしはこの年になるまで吉原を見た事はあるまい、せめてけん物にでもあゆみやれ。」「錢さへ出ぬ事ならゆかう。」と連れだち、大門をはひると女郎の道中、「コレあれが女郎か。」「さ、さつき見世が出た。」と、格子先

ヘつれて行き見せれば、「うつくしい事だ、一とばん一両もでるか。」「何さあれが二朱だ。」「うそをいふぜえ。」「うそぢやあねえ、酒肴に本膳めしまではらつて一つはいくつて、おだうぐがにしきのおりめん、ナノ女郎を抱いて寝て二朱よ。」「ハテなそれで二朱とは、二朱銀はありがたい、内へかへつてだいて寝よう。」

○大　屋　　裏住翁作

「お前の御子息様は、さて／＼御はつめいでござります、まことに末たのもしい。」とほめければ、「イヤ左様おつしやつても、倅めらはつさいで口がすぎます。」といふ。扨は思ひつきのしやれをいふとこころへ、「なる程人には色々がござる、此の間大の男が、こしに萌葱のふといひもで、文箱とござんかごを荷つて行くを、何だと云うたら、五歳ぢやと云ひました。」といへば、一人の男がいふには、「夫れはめづらしくない、むかし利休時分には、茶の湯をした人に三歳さへある。」と云ふ。こちらに居た男がまじめな顔で、「何さ夫れより私共の大屋さんのむすめこは、二歳でまいばん五人組を頼みます。」

○湯どうふ　　奥久作

ある所へ夜噺に行きける折から、子僧出で、「檀那さまお夜食をおあがりなされませ。」といふ。「あなたにもあげろ何ぞ出来たか。」「ハイとうふでござります。」「ム、八はいどうふか。」「イ、エ。」「いし

やきか。」「イ、エ。」「くずかけか。」「イ、エ。」「そして何だ。」「ハイゆでたの。」

○名　酒　屋　　　橘　　作

いまは昔、深川へ名酒やといふ茶屋ができた、まづいい女郎は紙やのお菊、もめんやの梅といふから、呼びにやつた所が、今汐留まで二だん逡りにいつたといふ。隅田川のお汲は寒の見舞にいつたといふ。「どうで此の一座でずつとは歸られぬ、ちつと悪いのでもいゝ。」といつたら、「アイサちつとわるいのも、新川の出ばんで直しになりやした。」

○祭　り　　　反哺齋作

「今年のまつりには何がよからう。」「ばか太鼓や唐人でもねえから、をどりを町内の子供にさして、二十人ばかり揃へたら、りつぱでよからう。」といへば、「また雀をどりか、こいつぁ久しい物だ。」「ハテ雀をどりではない、鶯踊といふ思ひ付き、まづいしやうを鶯茶繻子の半襟に、ひぢりめんに梅を縫つた下帯の揃ひで、二十人どうだらう。」「こいつはよからう。」と、やたいを梅の大木にして、囃子方梅の花笠、その日にもなつておし出した所が、花やが所望の拍子木を打てば、うぐひす踊が所望おやかつてんか、オヽサテがつてんぢやとをどりを見て、皆々がこいつはいい、あれは何所のまつりだ、おう桶町。

○女郎い十　千露作

今は昔、吉原へ通ふ道に、女郎の駕籠舁があるといふ噂にちがはず、雪のちら／＼ふるに、こま下駄で褄を引きずりながら、「かごをやりんせう／＼。」といふ。「大門までいくらでやる。」「今宵は雪がふりんすから二朱でおさんす。」「二百にまけねえ。」「ばからしうおす。」「なんなら四百よふ。」「サアおりなんし。」とのせて、「棒組さんようおすか。」「アイお出でなんし。」「ヨウ、ホイ／＼」といつてそろ／＼とやる。「コレこゝはどこだ。」「アイ駒形でおす、どうも雪でなりんせん、酒手をおくんなんし。」「どうでもせう、早くやつてくんな。」「アイ檀那もやぼではありません、ヨウ、ホイスイ／＼。」といつてもねつからやらず。客も氣をもんで、「エヽじれつてえ、はやくやらねえか。」といへば、「ばからしい、おめへさんばかりおやりなんし。」

○米　始亭作

是れも今はむかし、つき米やの庄治が藏にて、仙臺米の仲人にて、播州米の方へ美濃米が娘お米を嫁にやりし所、ほどなく懷胎して、當る十月に蟲氣つき、やれ米あげざるよさん俵とさわぎたち、升とりばゝが來て、「コレハちとむつかしい。」大門通の萬石どほしを呼び、俵をもみながら通しにかけても出かねるゆゑ、腰のあたりを二つ三つたゝけば、とたんの拍子に子米が出る。みな／＼いい子米だ

と見れば、襟アノ〳〵。

○白眼競　一毛作

今は昔、にらめくらの會を催し、角力のごとく東西に立ち分れ、土俵へあがりにらみあひ、笑ひたる者は負けと行事是れを定める。扨だん〳〵に取りあがり、大關になり、東大目玉々々、西はまじめ顔まじめ顔と雙方立ち向ひにらめあふ、暫く勝負つかねば水をのませ、それより秘術を盡してにらめて居ると、だん〳〵目玉がいたくなるゆゑ、兩方の關取も手を出して目をいぢらうとすれば、見物から「こすりはならねえぞ〳〵。」

○柔術　青奴作

「コレ八や、此のごろおらが長やへやはらの師匠がこして來た、おのしやおいらも、どんな事があるめえ物でもねえ、習ひにゆかう。」と、「アイお頼ん申しやす。」といへば、先生立ち出で、「どつちからござつた。」「ハイ長やの者でござりやす、どうぞをしへて下さりやせ。」「ム、下地でも貴様たちはあるまい。」「したぢと申してけんくわといふと、そつぽうをなぐるより外はぞんじませぬ。」「ハ、それは何の役にたたぬ。まうぶつて蒐つて見さつしやい、それどうだ。」「アイタ〳〵、此奴はいたい。」「時に是れが露のあたりおさうが、しこ。」「ア、先生様あやまりました。」「サ是れが表、又裏をとればすぐにかう

致す。」「吉やとんだこつたなあ。モシ先生様、やはらに裏表がござりやすか、私はおもてよりうらにいたしやせう、おもてはわるうござりやす。」「なぜおもてはわるい。」「ハイおもては知つた人にあつた時めんだうだ。」

○玉　手　筥　　　　立武亭龜樂作

今はむかし、掘貫の井戸ことの外はやり、ある所のむすこ井戸をのぞき、つい中へ落ちたる所、そこともしらぬ大海にまたくとわけ行けば、金銀珠玉を盡したる樓門に、海月の門番出で、「何者ぞ。」と云ふ。「我は日本の者なり。こゝはいづくぞ。」とといへば、「龍宮城なり。あやしきやつ。」と龍王の御前へ引きずる。大魚あつまりせんぎの所、乙姫ちらと見給ひ、鰒の局をめされ、「どうぞあのものをみづからが殿御にしたい。」との願ひ、龍王にもいにしへ浦島の例もあれば、早速聟になされける。扨かのむすこ、龍宮は日本ほど面白くなければ歸りたく思ひ、乙姫をそゝなかし缺落の相談をすれば、「そんならわたしは跡から、おまへは先へ此の玉手筥をもつて。」と、或夜ひとりしのび出で、むしやうにおよぎて海邊につきしが、くらさはくらしいづくともしらず、けつまづきて玉手筥をはふり出し、蓋のあいた儘とり集めてゐる所へ、鯱を始め鰐鮫其の外追ひかけ來り、「こゝに居る。」と、えりつかんで引き立て、「こいつではない。コレ今こゝへ若い男は來なんだか。」

○十軒店　　明石月影作

頃は二月の末、ある小道具やにて、去年の賣り殘りの雛を出し、今年は早く賣れる樣に、御酒を上げて祝ふ。かの雛大きに醉うて「なんと次郎左衛門、おのしなどは昔での安くない男だが、近年の出來星めらにおし付けられて、賣れないとは業腹なことだ」「なるほど善次が云ふ通りだ、もう十軒店に下りめらが出てゐるだらう、たゝきこはしてやらう。」と、大勢つれて雛店へ行き、「こいつらはなんだ、しやちばつて居るが、まだ江戸の料理はくつた事はあるまい、どけへそうせゐ、わがもないゝ」といへば、京人形ども、「こなはんどこからごさんした、ゑつそうな、きよとい事いはんすな」「何おきやあがれ。」と騒ぐゆゑ、近所から杯臺小重筥が來てのぞいて見て、「わるいやつらが來た、二三年あとまへ店にゐた次郎左衛門と善次だ、どうぞしやうがあらう。」と出て、「コレおのしたちがいふも無理ではない、マァこつちへ來やれ。」とつれて行く。しばらくあつて、「モウすんだ。」といへば、京人形共「どういふ事でいんだぞい、酒でもかうたか。」「イヽニヤあの上に酒ではやかましいから、大孫で樟腦を買つて出したら、コリャたまらぬ、首をひつこぬいてしまはれたといふて逃げた」

○釣り好き　　世事廣丸作

深川の木場の邊で、一心ふらん岡釣をしてゐる所へ、「もしこゝへ二十四五な男は參りませぬか。」と

いへば、「アイ來ました。」「縞の羽織を着てをりましたか。」「アイ羽織を着てゐました。」「なんぞ喰ひながら來ましたか。」「アイくひます〳〵。」「アノ女のつれがありましたか。」「アイ有りました。」「女も若い娘でござります。」「アイ左樣々々、アイ逃げたわいナ。」「どつちへ逃げました。」「イエ大きな鮪な。」「イヤサ其の人はどこへ參りました。」といへば、「エ何をいひなさる。」

○虎　烏亭百馬作

和藤内異國をしたがへ日本へ歸り、かうしてゐるもむだなれば、なんぞとあきなひをしよう、まづ國姓爺藤内といふ町人になり、料理見世も松東庵とまちがへば、呉服やがよからうと、幸ひ唐より持ち來りし織物を賣り、正札つきの大見世、唐人を野郎にして、手代とんきんびやうゑ、じやが太郎兵ゑ、かほちやん右衞門そろばんをひかへて、ほんとりハァ、ちやばんとハァといへば、ともに大作頭、ことの外當てがあれば、虎も半分いろ男になつて女郎買ひ、地獄になじみが出來て、著た物をぬいでふんどしの敷きぞめをしてやるとの沙汰、和藤内是れを聞き、「にくいやつ生膽を取つて、木藥やへ賣つてやらう。」といふを、母が止め、虎を呼び付け、「コレこなたは女郎になじんで虎ふうつけな、此の後やめにしや、たび重なるとまた御祓筥だよ。」

○疊ざん　前庄作

吉原の安見世の女郎、馴染の客が外へ行くをつけ、ことわりの文をやつても、やつはり呼ぶゆゑ、とらまへてやらうと、新造を大門へつけて置く　新ざうも寒いゆゑ、「どうもしれんせん。」といふ。又あすの夜おいらんいふやう、「あしたは早く七つから大門へつけてるなんし。」といへば、新造「アイ」といひながら、かんざしを疊へ打ち付けかぞへて見て、「モシおいらんえ、あすきつと居續けでありんす、行くにむだでおざんす。」「オヤけしからねえ、おめへの疊さんできつとした事がしれるものか。」「イエイエ主居續けは違ひはおつせん。」「それがどうして知れるえ。」「此のかんざしに流しでおつす。」

○ひろひ物　　　　鶴歩作

今は昔、せつた直し貳朱銀一枚ひろひ、女郎を買ひに行き二階へあがると、廻しの女が、「モシおなじみがござりますか。」「インニヤふりだ。」「そんなら中どしま衆がよからう。」と、杯もすみ酒もしたゝかのんで牀へいれば、女郎も手あるやつで、「こんやはおめへのなじみがなくてわるいねえ、わつちも名代のこゝろさ。」といへば、「何さこゝへはじめてよ。」「そんなら是れから來てくんなさい。一度ばかりでこられないでは、新造衆とちがつてわつちも茶やの手めへがわるい、うらはつけてくんなさい、これからは又はなしあひもある物だ。」「オ、サ裏はイイ皮があつた。」「ばからしい人をでうす事ばかり。」といふ所へ、「モシおむかへでござりやす。」といへば、「ヲヽもう歸らう。」といへば、「コレサ裏に

くる氣なら直していな。」と引き出たれば、眼の下へ指をおつ付けてベイ／＼。」

○勘畧の卷

曳尾亭素的作

殊の外ンはいやつ夜噺に來て、ことかく勘畧が第一でござる。燈もあついと油がいりますゆゑ、綿びんにすりこかして、夏のうちはばうずでもすみます。また飯のさいには干物、これも朝は頭をくつて、よくやいてもんできらずの汁の中へ入れて喰ふ、其の跡を片身づゝ一日にくへばよい、此の外だん／＼御指なん申さう、イヤおいとま申しませう。」「おかへり成されますか、ふふそくな點せ、ござうりが見えまい。」「それがもうつひえでござる。是れござうじる、くら闇でもおきにしれます。」ハヽ奇妙さぐりでしれますかな。」「イヤサ爪のさきのあかりで。」

○十露盤

本町薩要智作

「コレサおのれも十五になるが、行燈を見ると眠る丁稚だ、手習をしをれ、そろばんは三年掛つて、八算をまだおぼえぬ、たはけづら、サアこゝへ來ておいて見ろ。夫れ十二萬三千四百五十六石七十八升九合。それからおいて見ろ。なんと申したべらぼうめ、二一天作の五、ヤ、又忘れたか、是れよく譯をきゝをれ、二一天作の五とは上の玉を下して、それ此の下といふ玉を、上の玉が五匹といふわ、十を二つにわると五つになるわ、これわけがしれたか、玉をふるやい。アイ／＼、ではすまぬ、ヽ、

玉をふやあがれ、なんとしれた。」「アイしれました。」「なんとしれた。」「ハイ洲走りの臍と。」

○脇　差　　古今亭獨歩作

今はむかし、有徳な町人有り、出入の道具や來りて、「檀那よい脇差のさしぬきがでました、おかひ成されませぬか。」「どれ見せさつせえ。」と目鏡をかけて、「ム、なんだ目貫は稻穗、縁は麥藁、すぢに俵蒔、頭は芥子なゝこ、鐔は阿波の鳴戸形、鞘は豆かいらぎ、こいつはよいおもひつきだ、身はなんだ。」「ハイ小豆長光でござります。」「テヽ好みがおもしろい、直段はいかほど。」「アイ此の間の相場では五十兩程、天氣次第で相場が狂ひます。」「今一腰の脇差は、ム、目貫が狼に衣、頭は鳶に鷹、縁は狐を馬にのせた所、鐔は鯰にへうたん、小柄は猫に小判、鞘に月があるから、兎がさくりに有りさうなものぢやが、身はなんぢや。」「アイ身はおまへ樣のおすきな物。」「ム、亭主の好きな赤鰯か。」「イヽエ鞘の銀の月を用ゐてきせるいれに。」「なに月をもちゐるとは。」と引つこぬけば、すつぽん。

○み　え　坊　　仙臺　文珍尾守作

女郎かひの居つゞけに、新造が鼠を飼つてゐるを、「ドレちつとかしな白鼠だの、近年は大分ある。」「アイわつちがのは唯の鼠でありんす。」「ム、こいつはいたづらをするやつよ、國に賊人家に鼠とみんなわき物だ。それだからむさくろしい人には蝨がわく、身だしなみが第一だ、おいらは藥にせうと

いつでもねえ。しらみたかりには、おめへがたもあやまるだらう。といふ内「モシエぬしの袷を見なんし、それうはばひをしんすにえ。」といへば、どれと見て「ハヽア噂をいへば影がさす。」

富士講　芝楽亭慈悲成作

「どうだ権八、替る事もねえか。」「ヲヽ、能くきたな、サアあがりやれ。」「ム、あがる、一ッぱい呑ませるか。」「酒を買はうにも銭が一文ねえが質ゝさうなし、ホヽヽおつりきな物が有る。富士講の行衣が有る。今は古めになつてこいつもいらねえ、二三百はかすだらう、待つて居や今かりてくる」と質やへ行き「コレ作頭是れで三百かしてくだせい。」「何こんな背中に佛様とふじ山に猿がおして有る。どう貸される物か。」「ハテ扨是れにはかまはずと、おれが貌で二百でもかさつせえ。」「おめへの顔ハくも久しい顔だ。」といひながら、銭五十だして「サア是れでよくば持つてゆかつせえ。」といへば、手を合はせ「コレ富士せんげん様のだ。何とぞ一筋にたのみたてまつる。」

こはやり諷　四角堂治呂康作

いまは昔、妓女二人ありけり。姉は實子にて妹はかゝへの娘なれど、あね様／＼といひけり。そのいもと外にて潮来節の新文句の唄を書いて貰ひ、内へかへり取り落してありけるを、姉ひろひけれども無筆ゆゑわからず、此の程座敷に出ても、夜更けて歸る事度々なれば、色事の文とこゝろえ、實の

娘を呼んでいふやう、「何でもあいつは蟲がついたと見える、油斷しやるなよ。」「コレかゝさん、かはいさうにおとなしくしてゐる物を。」「イヽエヤおれが證據を持つてゐる。」是れを讀んでみやしやとさし出す。娘おしひらいてよむ、「まゝよ田舎もまた住みよかろ。」母おや「ふといやまめだ、駈落をする氣だ。」

○星　　島亭鹿馬作

是れも今はむかし、なりやうに虛言をつく者有り。「どうだうそつぼう、久しく逢はぬがどこへいつた。」「すゝとんだところへ、去年雷にさらはれて天竺へよ。」「ナニてんぢくへ、こいつは面白かつたらう、てんぢくはどこに居た。」「四日市に。」「ハヽアあつちもさむいか。」「寒いだんか、雨がみな氷つてふらせる事がならねえ、ひねの雨をあられにして漸くふらせるくらゐだ。」「天の川を見たか。」「すゝ、ゝ見た。」「星は大ぶんあらうな。」「ぬかほしは皆踏んで通るわ、まづ牽牛織女といふは七夕樣よ、夫れから七曜九曜の夜ばひ星ははだかでゐる、箒星のやうな面のを何だと聞いたら箒木、頭でしわのよつたは梅ぼし、二つ巴の侍は大星、又やせこけてあごで蠅を追つてゐる、あの星は何といふと聞いたら、あれはとぼし過ぎだ。」

○化　物　　琴多樓鹿兒善作

無畜忘有意

百物語のひまにや有りけん、化物大勢あつまり、中にも見こし入道、ろくろくび、いづれもじやうずならぬはなく、秘術を盡して化けるといへども、當時の歌舞伎役者ほど化ける事はならぬに、岩井半四郎などは一人して七化をするよし、是れは見ておかしやれ。」といはれて、一つ眼と河童が其の芝居はどこだと猫またにきく「よし町富澤町から長谷川町横へ、人形町といふを行くと、虎やといふ菓子やの蒸籠がつんで有る、角から右を見ると、芝居の看板あつてにぎやかなこと、さてかの飼猫のおかげではじめて、くはしくをしへる。「それなら化物とさとられぬやうにしてゆかう。」と、かつぱは手拭を米やかぶりにすれば、一つまなこはほゝかぶりを鼻の下でむすび、をしへられた通り行く。中村やの前の木戸をはひると、向うより芝居者が、「ほゝかぶりかつは。」といへば、化物、「おきやあがれ、[illegible]

○にはか　　五明作

年忘れに思ひつきの俄狂言、忠臣藏がよからうと、てんでんにこしらへる中に、ある人まへの椀伯老は撫付にする本藏の役、せりふのしれぬ所は浄るりでとつて間に合はせ、もう椀かへてこまれ、手おひながらもぬからぬ本藏、「イヤ／＼それはひが事ならん、用心きびしき高師直、障子ふすまはみなしめきつたと浄るりをかたる内、どうも身ができぬゆゑ、思ひついてたばこ入れよりたばこを出し、槍の疵口へおしこむ。見物が、「イヨこまか。」と褒めると、イヤこまやこまかではない五分切だ。」

○ほしいもの帳

富存 作

今はむかし、ほしい物帳といふ帳をこしらへ、持つてゐる男あり。中にはたばこ入れきせるは銀と書き付け、あるひは八丈羽織、上着は黒ちりめんに五所紋、下着は八丈縞縮緬、帯にはあた織、ふた綸にかき、其の外たんす長持手道具までことごとく記し、女房は近所の器量よしのおひ、あかけおさく、なじみの女郎は扇やの瀧川、是れはにしきゑをはりつけ、ふだんながめてたのしみゐる。又其のあたりに、此のとほりこしらへ持つてゐる者とよりあひ、たがひに帳をさらけ、それぞれはこ入れは德川、てめへのは丸角でかつたと書いてある。あれこれを見る内、「女房おひふは手前の帳にも有る、コレおのしは間男だ。」「イヤこなたが間男だ。」といひつのりけんくわになる。大屋来て、「貴様たちはなんのけんくわをする。」「ハイ御聞きなさい、わたしがほしい物帳にある女房を、あいつが間男をして、帳につけておりまする事でござる。」「どれ二人の帳を見せなさい。」「ハテなる程貴様の帳はおとゝしの年號、こなたのは去年の書付だ、ま男にちがひはない、七両二分出させて」「大やもふんだことをおつしやる。」「ハテ此の大やがかしてやる。イヤ金ではない、ちふを。」といひながら、二つの帳へ書いて出したを見れば、おのおのの帳へ金七両二分出し、こなたの帳へはと七両二分入り。

○松魚　　　　　　　　　　東西南北平作

儒者めきたる浪人の門口を、「鰹々。」と賣ること爲、あるじ立ち出で、「コリヤ魚賣人なな〳〵」と呼ぶ。「エ、わしが事かえ。」「サ、サその松魚は直いか程だ。」「なんの事だ、あきれたこにあだ名を付けてながさむのか。」「イヤ左樣ではない、魚賣人とは肴うりの事、松魚とはかつをの事だわや。」「小むつかしい言ひやうだなア。鰹はそくふんじさ。」「ム、そくふんじとはいか程の事だわや。」「ナイそくは一貫の事、ふんじはしれやせう。」「イ、ヤ知れぬ。」「ハテふんじは六百の事さ。」「不佞はじめて承知致した。」といへば、肴うり、「エ、おめへも論語よみのふんじしらずだ。」

○唐女　　　　　　　　　　山德作

今は昔、筑紫松浦潟へ唐船一艘吹き寄せたり。浦人たちより是れを見るに、宮女と見えて羅綾のたもと錦の袖、花のかほばせ雪のはだへ、「オヤてんこつもねえ、唐の女だ。」といへば、日本人なな〳〵なむからたんのうとらやあ〳〵といへども、ひとつもわからねば、「コレ女中、遠い所をたつた一人か、おやおどのかおふくろでもついて來たのか。」といへば、唐女パア〳〵といふ。「ム、ばあ樣とか。」

○玉　　　　　　　　　　　桃多樓語昔作

やしき出入の道具や、劍持力右衞門樣に毛巾着をたのまれ、王子の稻荷參りの歸りに、本鄕のほし

見世にて、狐の皮のたばこ入れに、尻尾をきせる筒にしたのを買ひ、是れでけふの小遣ひは有ると請をのみ、唐の芋を二つ小僧がみやけにせうと、両方の袂へ紙に包みて入れ、日も暮方にのろ〳〵行けば「駕籠をやりませう安い〳〵。」といふ。「市谷まで幾らだ。」「二百下さりませ。」「とんだ事を、百なら乗るべい。」「エ、戻りかごでもあんまり安いが、檀那もじよさいはあるまい、サァおのり」とのせてだん〳〵お茶の水のはうをいそいでゆく。駕籠がゆれるひやうしに、かの尻尾の煙管筒が、羽織合から出ると、跡棒が見付けてたてる時、「棒組ちよつと見やれ」とめくばせして、うさんなかほで、「モシおあへさんは王子へお出で成されましたと仰しやつたが、市谷はどこまで参ります。」「茶の木の稲荷の近所まで。」「エ扨こそ棒組ことしは仕合がいゝぞ、モシ檀那お願ひがござります。」「ム、願ひとは酒手か。」「イヽヱもつたいねえ事、おまへ様の物をどうして、何ぞ福を御授け下されまし。」といふから、道具やもさがつて見れば、きせる筒がさがつてあるかい、其はとこゝろえ、まじめになつて、「あすは文年田稲荷まで用事がある。」「へェ御苦労でござります。」といふ中、市谷へつけば、「大儀々々、其方たち、是れをやる。」と、唐の芋を一つ宛やれば、「ハテ有りがたい。」と、跡ふしをがみ分れ行く。やうすを見て狐一疋立ち出で、「今のを見たか。」「アレハ今は素人にゆだんがならぬ。」

〇三人男　　　橘々亭萬篇作

今は昔仇なる女、夫にかくして忍び男二人有りけり。ある時一人の間男来りゐる折ふし、又一人の間男来て、寝て居る所をおさへ「此の野郎めはふといやつだ、おれが念ごろにしてゐる女を、よくしめやアがつた。」「どうしたと、コレェうぬが色をして居る事をたがしる物だ、うぬ億れなやらうだ」とつかみ合ひゐる所へ亭主帰り「是れはどうした事だ、人の内へ来て」「イヤ、御亭主か、こな様かくればこゝ百年めだ、つがもねえ事だが、あの女と三年色をして居る、それにあいつが太平をぬかすから、ぶつてんしねえ。」「コレェうぬが三年なればおらあ五年のなじみだ。サア間男にちがひはない、これからは見事におれにくれろ。はなしのやうな何の事だ。」といへば、亭主「こいつらは五年の三年のと、あかくなつた味噌をあげやァがるが、おれはあの女を女房に十年して居る。」

○俊寛　　白寶舍晋家作

今はむかし、中宮御産の御祈りによつて、非常の大赦行はる。鬼界が島の流人丹波少将成経・平判官康頼二人赦免にして、船にのせてこぎ出す。俊寛一人跡に残り、磯ばたに伏しまろびゐる所へ、海人の千鳥かけ来り、「コレ、様よ、せなや兄丈はどこへいきめした。」ときけば、「ヤア千鳥か、二人はおゆるしあつて都へ帰る、早く呼びかへしやこ」といへば、「アイ。」と千鳥が岩の上へかけ上りて、「コヽナむかうのふね引。」

○伊勢參り

紫雄作

丁稚子供より合ひ「コレ竹松どん、おいせ樣の太々をうつとうまい物をたんと喰ふとよ。」「ほんに
おそれなら龜吉どん、おいらもぬけ參りをして、だい／＼をうたう。」と、そこらの心ざしある人をたのみ、ろぎん少々こしらへ、お師の名は聞きおよべば、なんなく山田のお師をたづねて、「お頼み申しませう。」御師の手代出で、「どこからござつた。」「アイ江戸藏前の伊勢やから參りました、太々をうちたうござります。」「これはよう御出で、舊冬參つた時おはなしもなかつたが、存じ寄らぬ事、跡から大ぜい御出でか。」「イヽエ私共二人。」「ハテな。」といふ中、錢百文づゝ紙に包み、「コレ是れで太々を打ちたうござります。」「ナニ太々を、此の子は氣がちがつたか、コレそつちの檀那の太々は五十雨、ちつとして二十五雨だ、とんだ事をいふ。」といへば「竹松どんどうせう、イヽシそれなら此の百で太々がならずば、きんかんでも。」

○百夜車

水魚亭[illegible]作

今は昔、小野小町は美人の名高く、歌は世にしれる所なり、これは戀ひ慕はする者なかにも深草の少將思ひのたけをしらせんと、雨のふる夜も雪の夜も通ひて、車の榻に其の數を書いて、九十九夜通ひしかど、此の戀叶はずして思ひ死せられしと云ふ取沙汰、女中達これを聞き、小町のおそばへ參り、

少將さまには終におはてなされました。」といへば、小町聞いて局を呼び給ひ、「コレ其の惚帳を出して、少將どのの所は消しておきや。」

○稚名　坂彦作

是れも今は昔ある人の出生の男子、をさな名を非人に付けてもらへば、息災延命なりと聞きて、早々非人をよび寄せる。「檀那様なんの御用でござります。」外の用でもない、倅が名をつけてくりやれ。」「ハイお生まれなされたのか。ようおふとりなされて、そして男の御子でござりますか。」「ム、けたつしやな名がよい。」「達者なお名なら虎松様か牛藏様か。」「イヤイヤするぶん丈夫な目出たい名がよい。」「左様なら石藏様。」「ム、せき藏とはなぜ。」「ハテ石藏毎年まいとし、ム、めでたい、はびろのおにはへどんどとびこむ、さうだわはねこむ、ごいはひ申せば目出たいさうだわ。」「ア、コレコレ昔からある名で、壽命の長い名がよい。」左様ならアノ三浦大助様はどうでござります。」「三浦大助とは百六つさ、まつと長いはないか。」「浦島太郎は八千歳。」「まつと長いはないか。」「東方朔は九千歳。」「まつとながいは。」「西の海へさらり。」

○妙藥　鶴聲樓作

「コリヤァ寸伯様よう御出でなされました、親父が氣色がわるいと申します、どうぞ御藥を。」「ドレ

ドレ脈を見ませう。是れは痰ぢや、此の薬をのませて見さつせえ、あす参らう。」といふて歸り、翌日来て、「どうだな。」「アイ同じ事でございます。」「ドレ脈を見ませう、これはきのふよりもわるい、腫が見える。」といへば、「ヲヽどこもさうは見えませぬが。」「ハテどうしてこなたしゆに知れよう、かほの内手足にむくみのあるのが、しゆのあるのだ、此の薬がよからう。」とおいて行く跡へ友達が来て、「どうだおやぢ。」「オヽ徳右衛門聞いてくりやれ、アイ醫者どのがきのふは丹だといつたが、けふは朱だといつた。毎日赤くなる病ださうな。」「ハテな夫れにはおれが妙薬をしつてゐる、おらが小僧が疱瘡の時、紅を顔へなすつた、おやぢも朱から紅にならねえ内、上からなするがいいと、病人の顔へ紅をなすると、おやぢが、「コレ徳右衛門どうする。」「ハテ黙つてゐさつせえ、ねから直してやる、「コレはながでるが風だらう、はなをかんでやらう、ふんといはつせえ、まつとく。」といふ内、のぼせて鼻血が出ると、「おやぢどの病は直る、おれが請合だ。コレ丹から朱になつて、はな血が出た、赤い物は是れぎりだ。」

○野狐　　　　一陽亭秀朔作

今はむかし、田舎にて狐出て人を化すといふことと、武邊自慢の侍、退治せんと彼の所へ行きてまちゐたる、十六七の器量のよき娘来り、「私は向うの村まで参る者でございます、どうぞおつれなされ

てくださりませ。」といふ。「ふといやつ、うぬは此のあたりに住んで、人をたぶらかす狐であらう、おれが女好きだといつて、さううまくばかされるものか、ぬきにしろ出なほせ/\。」と言へば、急に男に化け、「私は江戸の者、一人旅なれば、何とぞ御同道。」と言ふ。「うぬも今の狐だ、ぬけ/\としたこといへば、おゝいになり、「モシお侍様。」「ヤゝ、ダ又祖父に化けたか古い/\。」といへば、今度は祖母になる。「ばゝあでも狐だ。」といはれて、しやうがなさに狐になる。「それみろ狐め、己が捕りにするぞ。」と追ひかくれば、狐は叶はじと逃げる。追ひ詰められて藪の中へ入る。尻尾をとらへひつぱる拍子に、コン/\クワイ/\と、狐はなきながらしつぽがぬける。「扨こそみせしめに是れをみやげにする。」といふうしろから、百姓が、「なぜ大根をぬいた。」

○雷の玉子

在布亭京丸作

今は昔、雷の玉子をもらひ、本の物か何卒かへしてもらひたいというてもしやうがない。「イヤ私が雷にかへして、お目にかけませうが、是れには大ぶん物が入りますから、金子十両ばかりお出しなされませ。」「ム、なるぶん物にさへならば。」と頼み、それより十日程過ぎて、「モシ旦那、玉子がわれて中からちひさなかみなりが出ました、ゆふべもコヨ/\と鳴きました。」「ハ、ナゼれはやう見たい。」「ソレおめにかけませう。」と袂をさがして、「コレ道で落ちたかとんだ事だ。」と大はだをぬいで、

ト、有つた〳〵、是れごらうじませ、あらそはれぬ物でござりますっ」「どうした。」「臍にひッつい
てゐた。」

○文　うす姉敷婦作

吉原の女郎より毎日々々の文、こん夜もゆかねばならぬと、客もあつくなつて行く、友達がうそをいふやつといへば、「うそなら髪結床の市五郎に聞いて見や。」といふから、床の亭主に聞けば、「〳〵毎日此のやうに情のある女郎でござりやす。」と、文を一束出して見せる所へ、かの男来り、「なんと羨ましいか。」「ほんにおのしはあやかり物だ、定めて面白い事があらう。」とあけて見れば、漸くいろはを習うたやうなかな釘の折、「これはよめぬ、是れをおのしはわかるか、してまいばん行くなら、「〳〵やうな事をいふ、わからぬから、まいばん聞きに行くワサ。」

○そゝか　三升鶴女作

殊の外そゝかはしき女房、堀の内へ参りてかへり、「モウ五つでもあらう、大きにくたびれた、湯へはいつてこよう。」と、下女をつれてゆけば、入口でひたひをくらはせ、「いたくはなかつたか。」といへば、下女も承知して居れば、「〳〵、エきずは付きませぬ。」といふ。湯の中にて近所の内儀に逢ひ、「おそう御出でなされたね。」といへば、「アイ今日は堀の内へ。」「それはおくたびれ。」「イヤもう鳴子から先

が道が悪いって」といひながら、その内儀の足を洗ふのを「おかみさん何だじやうだんしなさるな」と
いへば「コレハごめんなさい。わたしがおみあしかと存んじて。」

○無筆　萬葉亭假名女作

「一字不通の者、年玉の半切へ、近所の人を一人たのんで名を書いてもらふに「段々無筆といふ物は不自由な物、お陰でおはやく禮に出ます」といへば、「此人の男「何さ字といふ物はよく拵へた物、氣をつければしれます、先づ口といふ字は口のなり、目といふ字は目のかたち、耳といふ字も同じこと、鼻にはな毛までありまする、なう仁兵衛さん。」「左樣々々時に夫れでわしも思ひ出した、いつぞや本店へいきやしたら、小僧が小さなかひ帳をつけて居る、なかなかあざやかと帳を見たら、なかに一文八文あぶらげ、四文子と書いてあるから「是れはなんだ。」と聞いたら「酢でござりやす。」といふ、「酢子の字を書く物か。」といつたら、それでも金子の子の字でござる。」といひやしたこハ、と兩人笑へば、亭主「仁兵衛さんおめへ子供にはおしへられたの。」

○孝行　千鳥連作

今はむかしまづしく暮せしもの、母親春の末に笋を望む。安き事なりとてはる雨ふりければ、みの笠を著て鍬をもち、竹の林をたづね掘りけれども、一本も得ざりければ、我が孝心天へ通じざ

るか、又あすも來りて掘りて見んと歸る。其の夜竹の林の近所の櫻の木がいふやう「おらんと桃の木、竹といふやつは物をしらねやつだ、親孝行な者がたけの子をほりに來たのに面も出さねえ、唐では二十四孝の孟宗が、雪の中でさへ掘り出したげな、心ないやつらだ、日本の面よごしだ、おいらが先祖は、正直爺が枯木に花を咲かせうといつて、灰をぶつかけられてさへ花の盛りを見せた」――左樣左樣おいらは子供が桃の木柹の木とたづねてくれば、實の中から芽を出してやるに、竹のしれねえやはなやつらだ」と噂を竹が聞きて、仲間ども相談して、「おいつらにいはれてはすまぬ。あしたは殘らず出でよう」と待つてゐる所へ、又鍬を持ち、「けふこそ授け給へ」と、ちやうど掘れば、待ち構へたる筍によいと五尺ばかりのが出る。びつくりして又掘れば、二本三本前後出る程に、一町四方に竹の子、孝行ものも出る事がならずゐる内、下から六尺ばかりの竹の子、尻をつきかけるゆゑ、前へ飛ぶ拍子帶へつツかけてさしあげられ、「コレハどうだ」と聲をかついで見廻す所へ、家主が通るゆゑ、「モシ〳〵大屋さん、蘖はいりませぬか。」

○七十二候

南鶴亭百人作

吉原の居つゞけの客へ、仲の町よりおくり物に、蛤の千鳥燒を持つてくる。「こいつはいい物が來た、雀海中に入りて蛤となる、一つのまう。」としやれる。女郎が「モシあのすゞめは蛤になると

いひすが、ほんの事かえ。」「違ひはないのさ、七十二候の内にいろ／＼變る物が有る、腐草化して螢となり、田鼠化して鶉となり、芋蟲がてふ／＼となり、船蟲がとんぼになる。其の外蟲も色々變化する物よ。」といふ。側に新造が、「モシそんなら遣手衆は毛蟲のなつたのかえ。」

○駕好き　仙路亭盧翠作

子供にも色々の好きがあるものにて、商人やの丁稚十二三にて、使にやると一町ほど歩行くと、木戸際の駕籠舁に、「コレ淺草まで幾らでやる。」「アイ二百でござりやす。」「百五十にまけな。」「誰が乗りなさる、檀那かおかみ様か。」「イヽヤ俺がのる。」「とんだ事だの。」「サア使にゆくのだ、負からば早く。」「棒組まけてしんぜろ。」とのせてゆく。いつでものるゆゑ、後に駕籠かきも馴染になつて、「けふは小僧様が使が有りさうな物だ。」とまつて居る。扨其のかごちんはどこからきやいてかなければ、見世の小錢をちつとづゝためてゐる。それがだん／＼しれて、伴頭がどうもふしぎなやつとひつとらへて、「コレうぬは此の頃錢を二百おとしたが何にした、使にいつても早く歸る、どうも氣がしれねえ、譯をぬかせ。」とくらはせれば、泣きながら、「お使に行くとき駕籠にのりやした。」「何かごに乗つた、おごつたがきめだ。」「おごりぢやあござりませぬ。」「おごりでなくつてなぜ足をかばつておくのだ、なんとぬかす、あしをかばつて何の用にたてる。」「抜け參りにいきやす。」

○茶　漬　　吾友軒米人作

武蔵野御茶漬といふ見世を出して、殊の外うれる。友達が来て「コレきつい繁昌だけれど、時に障子にむさしの御茶づけとかいたが、あつとむりだと思ふ。アノ茶づけの始まりは、浅草に海道茶漬といふが有つた。夫れから銀座町へ山吹茶漬が、おちやづけの始まり、宇治の茶に山吹といふが有るからさ。こしたに、むさし野に茶があつてつまる物か。」「成程さういふはもつともだが、おれも海道茶漬が有るから、木曽海道茶漬としようと思つたが、一度でこり／＼せうとおもつてむさし野とつけた、心ははら一ツぱい喰はせる思ひ月さ。」

○田　舎　者　　森羅亭萬象作

だうらくなるむすこゆゑ、おやが勘当せうといふを、母親の情にて田舎の乳母を頼み、こゝろの直るやうに、一二年もそつちで世話してくれといふこと、乳母の亭主もらんばうなれど、正直者ゆゑ、むことり主人のごとく、朝々こゝろを付ける。むすこも始めの内は小づかひ不自由ゆゑ、内にばかり居けるが、つゐには村のむすこどもとつれだち、宿場へ二三里馬にて泊りに行きければ、乳母も亭主と相談して、一とまづ崔樋部へわび言してかへし申すがよからうと江戸へ来て、両親の前へ出で、「ナニ／＼崔樋部様にも、はや一年程なるから御出でなされましたゆゑ、こゝろも直りましたけれど、ばゝどもも参る

はずでござりやすか、しつけ時でいそがしくござり申すから、わしが參りやした、どうぞ御かへし申してくださりませ。」といへば、おやぢ「成程倅めももう二十五といふもの、おつとは思ひしりなつたらう、おれも六十に及ぶ、じつていになりなつたら、とりしまりの用心にも呼ぶ事もあらう。ヲヤくじつていまでは參りませぬが、鼻ねぢり位には。」

閑居　清涼亭菅伎作

江戸より田舍へ引き込みし醫者、久しぶりにて來りて、「さてく私も唯今では在所へ參りしてゐる左年、貴公樣にも御堅勝でお目出たうござります。」「イヤおまへ樣も只今では、おらくでゐなかに御出でなさるとの事、いつみてもおわかい、江戸よりはおたべでみなが多いさうで、いぜんよりおふとりなされた。」「それはふだん麥飯をたべて、野びろい所に居るゆゑでもござりませう。何事も不自由がなき、其のかはりに、衣服にいつはもいりませず、家來は一人あれども供もつれずとよし。」「左樣でござりませう。羽織も袖なしですみませう。」「左樣々々。」「藥もおまへがふところへ入れて御出でですね。」「左樣々々。」「病人も向うから歩行いて參りませう。」「左樣々々。」「人參の代りに干大根を入れてもすみませう。」いしや「夫れはちと出來ませぬ。」

丁稚の無心　紀樗人作

ある年季の丁稚、下女のりんが側へよつては「コレおりんどん、こなたに無心が有る〳〵」とたびたびいふ「何だ小ましやくれたがきだ。いけすかねえ。」といへども、餘りたび重なれば、いな角のいふことはあらず、少しはたらかしてもらつて見たい心の所へ、又おりんどん無心がある上云ふ。「ナイはなんだ人もあれた」になるす「コレ太郎吉どん、無心とはなんだよ。」といはれ「どうもにかしくて云ひにくい、コレおッつけてください。」「なんのことだ、おつ付けてくれろとは。」「おれにおッつけてくんなさいといふことよ。」「コレサそばへよつていはつせえ、おッつけるとは何だ。」「おれがくふ飯をば杓子で。」

高尾

萬亀亭江戸住作

今は昔足利頼兼公、遊女高尾が追善の爲、大川において花火をあげ給ふ。ここに上手の道哲とて、たいしたる道心の念佛して有りける時、ふしぎや紅葉のかげよりも、たへなる聲にて、たばこのんでもきせるより、のどがとほらぬうすけむりと、あらはれ出でたる高尾がいうこん「申しく道哲さん」「なんといふは、高尾でないか、頼兼公の仁心にて、大川にて花火をともしたまふも、其方の追善くやうのため、未だうかまぬか、ヱヽ、淺ましやな。」「サアサその追善にはどうぞ花火より外の事をなさ〳〵ふ、花火はそなたの爲にわるいかな」「なぜとはされるにはあきんしたゆ」

○辻八卦

白鯉舘卯雲作

「願ひのござる當卦はんけのうらなひ、失物待人夢はんじ、相場の高下まで見とほしのうらなひ」と、辻に立つて居るところへ、きおひが二三人つれて來て「萬八さん、ちとまつてくれ、おらがかゝあがはらんだが、男のがきかおまか、十二文がうらなつてもらふべい。」「これはおしやれ、おのしが子なら男だとも女ともいへばいいが、鬼子だともいはれると外聞がわるい。」「ハイ／＼おこ子なら見世物に出して錢まうけなさるがいい。」「何さしやあがる辻八卦が言ふ事があたる物かやあねえ、だれより此十二文出して一ッぱい呑むがいい。」といふを、八卦おきが聞いて「モシ／＼あんまり安くするな、そんなものがやあねえ、なんでも見とほしだ。」「なんだ見通しだ、おらが座敷が聞いてあきれるわ。」「こいつが／＼家業の邪魔をしやあがる、うぬはどこのやつだ」といへば、きおひ「あてて見や。」

○家名

浅草庵市人作

「コレ此中土手で里遊にあつたら、五明樓へいつたといふたが、どこの事だ。」「扇やのことさ、五明の扇といふ事があるから、それでいふのさ。」「そんなら大文字やは何と言ふ。」「文樓と。」「ハテナ丁子やは。」「丁子樓よ。」「松葉やは。」「松葉樓よ。」「こいつはおつりきだ、そして玉屋はなんといふ。」「あれは玉樓と云ふ。」「そんなら越前やは。」といはれて、困つた顔をして「越前や、、、ノ番多樓。」

閏七月

四方眞顔作

年ごとにあふとはすれど七夕のぬる夜のかずはすくなかりけり、といへど、七月に閏ありて、織女も二度逢ひ給ふ。御よろこびかず／＼にて、牽牛のかたより御文に、「こんどは牛もおそくのろつき候まゝ、そくじつの鬼が四つ手かごにて參り候はん、そもじにも家根船にて天の川の岸に御まち、あとあしには竹の枝に短冊をおつけおき。」との事、織女もこう／＼したくなされて、天の川に待ち給ふ。牽牛もかごより乘り移り給ひ、「今宵は船にとまる支度、蚊が出たらどうせう。」といふ所へ、風の神の聲にとして、「萌葱の風やかや／＼。」と賣りきたる。いはひと是れをもとめ、「サア是れからは天人の藝者を呼びにやれ。」と、それよりぞは琴をひいて、辨天乙女といふ藝者の聲に、天道丸の出來星が、「おも離いあつかたい。」といふ所へ、船頭の明星が、「もし舟をさげやせう。」といふ。「それはなぜ。」「今おせこい雷がばちか太鼓で來ます。」

福鼠

讃州樓占馬作

今は昔甲子の夜、白鼠一疋來り、見てゐる内に十二疋を産み、その十二疋がまた十二疋づゝ産むと、たゞ／＼産んで二三千疋になると、出ていつてしばらく過ぎて、大きな鼠は大判をくはへて來る。中鼠は小判、小鼠は小つぶをくはへてくる。後には千両箱を車につんで鼠がひいて來るやら、もう内には

置く所がないゆゑ、居所にこまり二階へ上ると、又こゝかいへもゐられぬ程金をはこぶ。戸を明けて廂へ出ようとすると、ひさしへもだん〳〵金がつんである。こいつはたまらぬと、漸く大屋根へ逃げ出て、ほつといきをついでゐる間に、出る事のならぬやうに金をならべ、下を見れば、大勢のねずみが車で金をつんで來る。コレハたまらぬ、アヽ寶船々々。

噺落　無事志有意　終

跋

いさましき物初鷄の聲、顏見勢のしばらくと、例の僭上なごとも、三升贔屓の口癖なること、遠からん者は落噺にきけ、近くは讀んで目にも見よ、桃栗山人柿の素絶、談洲樓の戲談のむしろ、其の秀逸を開き見れば、頓に笑ひを催して、お臍に福茶を沸かす、嗚呼此の草紙の世に弘まらん事、東は奧州外八文字の姉女郎、西は新造禿遣手、南はきの字や臺の物、北は夜毎の地侠客まで、通言の及ぶ所、千里も行き萬冊も賣れ、春の始めの初幸便、無事志有意と題せしを、卷末せよと需めに應じ、智恵をふるつて花咲の翁、をこがましくも是れをしるす。

昭和三年五月二十五日印刷
昭和三年五月二十八日發行

（非賣品）

近代日本文學大系
第二十二卷

編輯兼發行者　東京市麴町區内幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
右代表者　東京市麴町區内幸町一丁目六番地　野中次郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麴町區内幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座　二七八三、三一六八、三八六八番
振替東京　五二二九八番

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02992 7746